

常磐自動車道遺跡調査報告36

本町西B遺跡
本町西C遺跡
本町西D遺跡
後作A遺跡(1次調査)

2002年

福島県教育委員会
監 福島県文化振興事業団
日 本 道 路 公 団

常磐自動車道遺跡調査報告36

もとまちにし
本町西B遺跡

もとまちにし
本町西C遺跡

もとまちにし
本町西D遺跡

うしろさく
後作 A 遺跡 (1次調査)

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間が開通し、現在は富岡までの区間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、周知の埋蔵文化財包蔵地に加え、数多くの遺跡等を確認しました。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎を成すものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成13年度に行った富岡町に所在する本町西B・C・D遺跡と後作A遺跡（1次調査）の発掘調査の結果をまとめたものです。

この調査では、本町西B遺跡から平安時代の集落と縄文時代晩期の包含層、本町西C遺跡から縄文時代前期前葉の集落、本町西D遺跡から縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての遺物が発見されました。また後作A遺跡では、縄文時代早期中葉から後葉の土坑群を確認するなど貴重な成果を得ることができました。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する御理解を深めるとともに地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた日本道路公団、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し、感謝の意を表すものであります。

平成14年12月

福島県教育委員会

教育長 高 城 俊 春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に先立ち、対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査につきましては、平成6年度から平成8年度までに、いわき中央ICからいわき四倉IC間のうち、いわき市四倉町に所在する10遺跡の調査を実施いたしました。さらに、平成9年度からはいわき市四倉ICから富岡IC予定地間にかかる遺跡の発掘調査を実施しており、平成13年度までにいわき市四倉町・広野町・楡葉町・富岡町の36遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、平成13年度に実施した発掘調査のうち、富岡町に所在する本町西B・C・D遺跡と後作A遺跡（1次調査）の調査成果をまとめたものです。

本町西B遺跡からは、平安時代の集落跡の他、縄文時代晩期の遺物包含層が確認されました。本町西C遺跡からは縄文時代前期前葉の集落跡が発見され、当該期の土器編年研究上、興味深い資料が得られました。本町西D遺跡からは縄文時代早期後葉から前期後葉にかけての土器や石器が発見されました。後作A遺跡では、縄文時代早期中葉から後葉の土坑群を確認し、縄文時代晩期後葉の土器埋設遺構からは4個の土器が入れ子状に重なって出土したことなど、貴重な調査例を得ることができました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いです。

おわりに、この調査に御協力いただきました日本道路公団東北支社いわき工事事務所、福島県担当部局、富岡町ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

なお、埋蔵文化財の保護につきまして、今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年12月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 佐藤 栄 佐 久

緒 言

1. 本書は、平成13年度に実施した常磐自動車道（楡葉町～富岡町）遺跡発掘調査報告である。
2. 本書には福島県双葉郡富岡町に所在する次の4遺跡の調査成果を収録した。
 - 1 本町西B遺跡（54300047） 双葉郡富岡町大字本岡字本町西
 - 2 本町西C遺跡（54300046） 双葉郡富岡町大字本岡字本町西
 - 3 本町西D遺跡（54300045） 双葉郡富岡町大字本岡字本町西
 - 4 後作A遺跡（54300055） 双葉郡富岡町大字上手岡字後作
3. 本発掘調査事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は日本道路公団が負担した。
4. 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
5. 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の次の職員を配置して調査にあたった。

文化財主査 福島 雅儀 文化財主査 佐々木 透 文化財主査 玉川 邦男
文化財副主査 吉野 滋夫 文化財主事 福田 秀生 嘱 託 新海 和広
6. 本書の執筆にあたっては調査を担当した調査員が分担して行い、各文末に文責を記した。
7. 本書に掲載の地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/25,000地形図を複製したものです。（承認番号 平14東復第241号）
8. 本書掲載の本町西C遺跡出土石器の岩石名称については、真鍋 健一（福島大学教育学部）氏に鑑定していただいた。
9. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
10. 発掘調査および報告書作成にあたって、次の諸氏・諸機関から御指導・御助言・御協力をいただいた。（五十音順・敬称略）

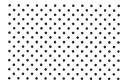
富岡町役場・富岡町文化センター・泉 篤（大熊町図書館・民俗伝承館）・鈴木 功（白河市教育委員会）・馬目 順一・三上 義孝（米沢女子短期大学）・山田 廣・横田 芙美子（楡葉町歴史資料館）・宇佐見雅夫（楡葉町歴史資料館）
11. 本文中の敬称は省略させていただいた。

用 例


1. 本書における遺構図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方位 遺構図・地形図の方位は真北をさす。方位の無いものは、全て図の真上を真北とする。
- (2) ケバ 原則として遺構内の傾斜面はケバで表現した。
- (3) 土層 遺構外に堆積していた基本土層の番号はアルファベット大文字のLとローマ数字を組み合わせ、遺構内堆積土の番号は小文字のℓとアラビア数字を組み合わせで表記した。
(例) 基本土層—L I・II…，遺構内堆積土—ℓ 1・2…
なお、土色の註記は小山正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖」を使用し、本文中の記号は本書に基づく。
- (4) 標高 東京湾からの海拔標高を示す。
- (5) 縮尺 遺構図は原則として、竪穴住居跡 1/40・1/60，掘立柱建物跡 1/80，土坑 1/40とした。その他の遺構は大きさに則して縮小した。
- (6) 柱穴・小穴 平面図の柱穴・小穴番号下にある（ ）内の数値，単位cm。
の深さ
- (7) 下図の網点は焼土を示す。

焼 土



2. 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 土器断面 縄文土器・土師器・陶器は断面を白ヌキで表示した。須恵器は断面を隙間なく黒く表示した。粘土紐の積み上げ痕は器面では実線で、断面では一点鎖線で表記した。
 - (2) 下図の網点は黒色処理を示す。
黒色処理
- 
- (3) 遺物番号 遺物は図ごとに通し番号を付した。遺物番号の次の（ ）内は遺物の出土位置・層位を示した。
 - (4) 遺物計測値 遺物の計測値は図中に示した。推定値は（ ），遺存値は〔 〕内の数値で示した。なお、石器には岩石名称も示した。

3. 本書における写真図版中の番号は、挿図番号と対照できるように、遺物写真図版中に「図」を略して記した。

(例) 図1—1→1—1

4. 本書で使用した略号は、次のとおりである。

富岡町……………T O	本町西B遺跡…MMN・B	本町西C遺跡…MMN・C
本町西D遺跡…MMN・D	後作A遺跡……………U S. A	遺構外堆積土……………L
遺構内堆積土……………ℓ	竪穴住居跡……………S I	掘立柱建物跡……………S B
土 坑……………S K	土器埋設遺構……………S M	溝 跡……………S D
遺物包含層……………S H	遺構に属する柱穴・小穴…P	遺構に属さない柱穴…G P

目 次

序 章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経過	1
第2節 遺跡の位置と自然環境	2
第3節 周辺の遺跡と歴史的環境	3

第1編 本町西B遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	9		
第1節 遺跡の位置と地形	9		
第2節 調査経過	9		
第3節 調査方法	11		
第2章 遺構と遺物	13		
第1節 遺跡の概要と基本土層	13		
第2節 竪穴住居跡	15		
1号住居跡(15)	2号住居跡(21)	3号住居跡(23)	4号住居跡(25)
5号住居跡(28)	6号住居跡(29)	7号住居跡(31)	8号住居跡(32)
9号住居跡(37)			
第3節 掘立柱建物跡	38		
1号建物跡(38)	2号建物跡(39)	3号建物跡(39)	4号建物跡(42)
第4節 土 坑	42		
1号土坑(42)	2号土坑(43)	3号土坑(43)	4号土坑(43)
5号土坑(44)	6号土坑(44)	7号土坑(44)	8号土坑(46)
9号土坑(46)	10号土坑(46)	11号土坑(48)	12号土坑(48)
13号土坑(48)	14号土坑(48)	15号土坑(50)	16号土坑(50)
17号土坑(50)	18号土坑(50)	19号土坑(52)	20号土坑(52)
21号土坑(52)			
第5節 その他の遺構と遺物	52		
1号埋甕(53)	2号埋甕(53)	焼土遺構(53)	遺物包含層(55)
柱穴群(60)	遺構外出土遺物(62)		

第3章 ま と め	70
-----------------	----

第2編 本町西C遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	75
第1節 遺跡の位置と地形	75
第2節 調査経過	75
第3節 調査方法	78
第2章 遺構と遺物	79
第1節 遺跡の概要と基本土層	79
遺構の分布(79) 基本層序(79) 遺跡の年代と土器分類(80)	
第2節 竪穴住居跡	81
1号住居跡(81) 2号住居跡(86) 3号住居跡(88) 4号住居跡(90)	
5号住居跡(92) 6号住居跡(94) 7号住居跡(96) 8号住居跡(100)	
9号住居跡(102) 10号住居跡(106)	
第3節 土 坑	108
1号土坑(108) 2号土坑(108) 3号土坑(110) 4号土坑(110)	
5号土坑(112) 6号土坑(112) 7号土坑(112) 8号土坑(113)	
9号土坑(113)	
第4節 遺構外出土遺物	114
第3章 考 察	123
第1節 土器について	123
1. 本町西C遺跡I群土器の様相(123) 2. 福島県内出土の本町西C遺跡I群土器の類例(126)	
3. 本町西C遺跡I群土器の編年的位置付け(128) 4. ま と め(131)	

第3編 本町西D遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	135
第1節 遺跡の位置と地形	135
第2節 調査経過	135
第3節 調査方法	137

第2章 遺構と遺物	139
第1節 遺跡の概要と基本土層	139
第2節 土坑	142
1号土坑(142)	2号土坑(142)
3号土坑(143)	4号土坑(143)
5号土坑(143)	6号土坑(145)
第3節 遺構外出土遺物	145
第3章 まとめ	150

第4編 後作A遺跡（1次調査）

第1章 遺跡の環境と調査経過	153
第1節 遺跡の位置と地形	153
第2節 調査経過	153
第3節 調査方法	155
第2章 遺構と遺物	157
第1節 遺跡の概要と基本土層	157
第2節 竪穴住居跡	160
1号住居跡(160)	
第3節 土坑	163
土坑の分類(163)	1 a類土坑(164)
1 b類土坑(172)	2類土坑(172)
3類土坑(174)	
第4節 土器埋設遺構	175
1号土器埋設遺構(175)	
第5節 溝跡	178
1～3・5号溝跡(179)	4号溝跡(179)
第6節 その他の遺構と遺物	181
第1遺物包含層(181)	遺構外出土遺物(183)
第3章 まとめ	188
1. 縄文時代晩期の土器埋設遺構(188)	2. 埋設土器の特徴と年代について(192)
3. まとめ(194)	

挿図・表目次

序 章

[挿 図]

図1 常磐自道車道位置	1	図3 本町西B・C・D遺跡調査位置図	6
図2 周辺遺跡位置図	4		

[表]

表1 発掘調査遺跡一覧	2	表2 周辺の遺跡一覧	5
-------------	---	------------	---

第1編 本町西B遺跡

[挿 図]

図1 本町西B遺跡調査区位置図	12	図22 1・2号建物跡	40
図2 遺構配置図	14	図23 3・4号建物跡	41
図3 基本土層図	15	図24 1～6号土坑	45
図4 1号住居跡(1)	16	図25 7～10号土坑	47
図5 1号住居跡(2)	17	図26 11～17号土坑	49
図6 1号住居跡出土遺物(1)	19	図27 18～21号土坑・出土遺物	51
図7 1号住居跡出土遺物(2)	20	図28 埋甕・出土遺物	54
図8 2号住居跡	22	図29 焼土遺構	55
図9 2号住居跡出土遺物	23	図30 遺物包含層	56
図10 3号住居跡・出土遺物	24	図31 遺物包含層出土遺物(1)	57
図11 4号住居跡・出土遺物	26	図32 遺物包含層出土遺物(2)	58
図12 4号住居跡出土遺物	27	図33 遺物包含層出土遺物(3)	59
図13 5号住居跡・出土遺物	28	図34 遺物包含層出土遺物(4)	60
図14 6号住居跡	30	図35 柱穴群	61
図15 6号住居跡出土遺物	31	図36 遺構外出土遺物(1)	64
図16 7号住居跡	32	図37 遺構外出土遺物(2)	65
図17 8号住居跡(1)	33	図38 遺構外出土遺物(3)	66
図18 8号住居跡(2)	34	図39 遺構外出土遺物(4)	67
図19 8号住居跡カマド・出土遺物	35	図40 遺構外出土遺物(5)	68
図20 8号住居跡出土遺物	36	図41 遺構外出土遺物(6)	69
図21 9号住居跡・出土遺物	37		

[表]

表1 柱穴群一覧表	62
-----------	----

第2編 本町西C遺跡

[挿 図]

図1 調査区位置図	76	図3 基本土層	80
図2 グリッド区分・遺構配置・ 土層観察地点関連図	77	図4 1号住居跡	82
		図5 1号住居跡炉跡と土器出土状況	83

図6	1号住居跡出土遺物(1) ……………	84	図20	9号住居跡出土遺物(2) ……………	105
図7	1号住居跡出土遺物(2) ……………	85	図21	10号住居跡 ……………	107
図8	2号住居跡と出土遺物 ……………	87	図22	1～4号土坑 ……………	109
図9	3号住居跡と出土遺物 ……………	89	図23	5～8号土坑 ……………	111
図10	4号住居跡と出土遺物 ……………	91	図24	9号土坑 ……………	113
図11	5号住居跡と出土遺物 ……………	93	図25	土坑出土遺物 ……………	114
図12	6号住居跡と出土遺物 ……………	95	図26	遺構外出土遺物(1) ……………	116
図13	6号住居跡炉跡 ……………	96	図27	遺構外出土遺物(2) ……………	118
図14	7号住居跡 ……………	97	図28	遺構外出土遺物(3) ……………	119
図15	7号住居跡出土遺物 ……………	98	図29	遺構外出土遺物(4) ……………	121
図16	8号住居跡 ……………	101	図30	遺構外出土遺物(5) ……………	122
図17	8号住居跡出土遺物 ……………	102	図31	本町西C遺跡I群土器集成 ……………	125
図18	9号住居跡 ……………	103	図32	県内出土の本町西C遺跡 I群土器の類例 ……………	127
図19	9号住居跡出土遺物(1) ……………	104			

第3編 本町西D遺跡

[挿 図]

図1	調査区位置図 ……………	136	図5	2号土坑出土遺物 ……………	145
図2	遺構配置図 ……………	140	図6	遺構外出土遺物(1) ……………	146
図3	基本土層 ……………	141	図7	遺構外出土遺物(2) ……………	147
図4	1～6号土坑 ……………	144	図8	遺構外出土遺物(3) ……………	149

第4編 後作A遺跡(1次調査)

[挿 図]

図1	調査区位置図 ……………	154	図13	土坑出土縄文土器 ……………	173
図2	遺構配置図・基本土層 ……………	158	図14	土坑出土石器 ……………	174
図3	第一遺物包含層 ……………	159	図15	1号土器埋設遺構 ……………	176
図4	1号住居跡 ……………	161	図16	1号土器埋設遺構出土遺物 ……………	177
図5	1号住居跡出土遺物 ……………	162	図17	1～3・5号溝跡 ……………	180
図6	1～4号土坑 ……………	165	図18	4号溝跡 ……………	181
図7	5～10号土坑 ……………	166	図19	第1遺物包含層出土遺物 ……………	182
図8	11～15号土坑 ……………	167	図20	遺構外出土遺物(1)縄文土器 ……………	184
図9	16～20号土坑 ……………	168	図21	遺構外出土遺物(2)縄文土器 ……………	185
図10	21～25号土坑 ……………	169	図22	遺構外出土遺物(3)石器 ……………	186
図11	26～30号土坑 ……………	170	図23	土器埋設遺構の復元と 浅鉢形土器の集成 ……………	190
図12	31・32号土坑 ……………	171			

[表]

表1	土坑一覧 ……………	175
----	------------	-----

序 章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経過

平成13年度常磐自動車道関連の遺跡発掘調査は、調査員20名の体制で開始した。調査対象地は、双葉郡楡葉町から富岡町までである。

発掘調査に先立ち、4月上旬から富岡町内で発掘調査が予定されている遺跡の条件整備の確認を行うとともに、連絡所設置などの準備作業を進めた。

調査は、4月16日から富岡町前山A遺跡・本町西D遺跡、4月24日に楡葉町馬場前遺跡の3遺跡の発掘調査を開始した。このうち馬場前遺跡のみが3次調査と継続調査が少ないものの、順調に展開した。

5月に入り、新たに富岡町本町西C遺跡と本町西B遺跡の発掘調査を開始した。また、本町西C遺跡と本町西D遺跡は、深い沢に挟まれており、沢に泥水が流れないようにするために、沈砂池・土留め処置を行った。前山A遺跡からは縄文時代中期中葉から後葉の集落跡が検出された。

6月には、本町西B遺跡は一般道路から入り込んだ不便な場所にあるため、調査に先行し作業員送迎用バスの乗降所を確保ののち、作業員を雇用し作業を開始した。4月に調査を開始した本町西D遺跡は6月21日に発掘調査を終了した。本町西D遺跡からは縄文時代の土坑が検出された。

8月11日には前山A遺跡の現地説明会が開催され、見学者は県内外から多数集まった。8月27日には富岡町後作A遺跡の発掘調査を開始した。

9月には、馬場前遺跡南区、本町西C遺跡・前山A遺跡の発掘調査が相次いで終了し、馬場前・

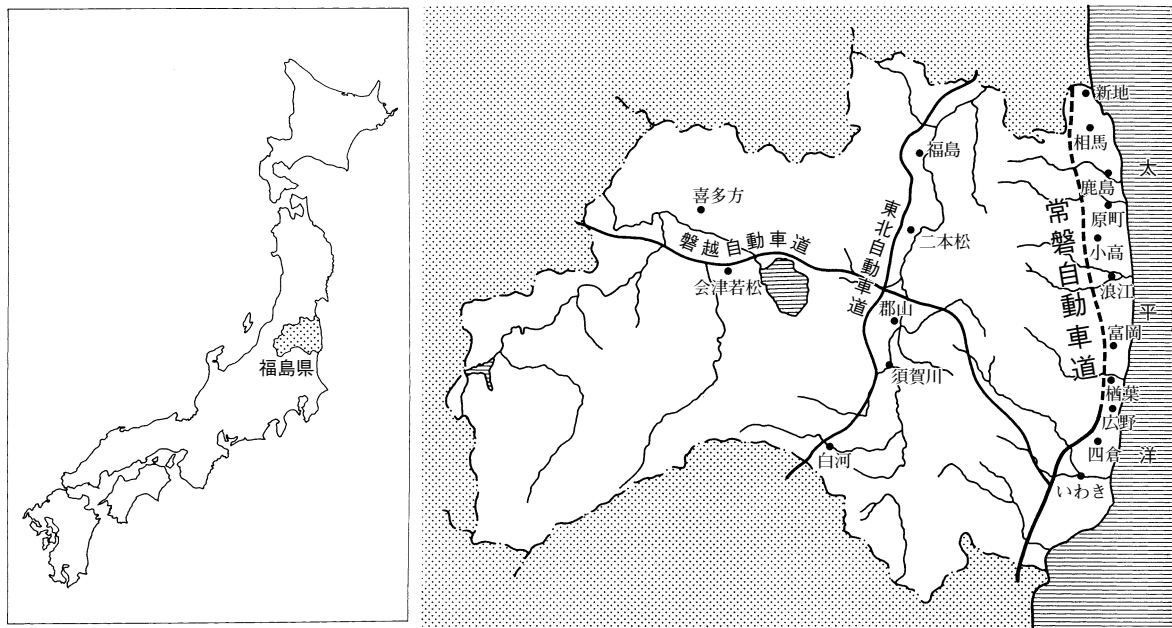


図1 常磐自動車道位置

前山A遺跡の現地引き渡しを行った。10月には馬場前遺跡北区の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行った。馬場前遺跡では、竪穴住居跡が馬蹄形に分布する集落跡の様相が明らかになり、主としてその北側に貯蔵穴が配置されていた様相が明らかとなった。本町西C遺跡からは、縄文時代前期初頭の集落跡と平安時代の竪穴住居跡を検出した。

11月には富岡町後作A遺跡・本町西B遺跡の発掘調査が終了した。後作A遺跡からは旧石器時代のナイフ形石器と縄文時代晩期の住居跡と埋甕が検出された。本町西B遺跡からは、縄文時代晩期の遺物包含層と平安時代の集落跡が検出された。12月5日に本町西B・本町西C・本町西D・後作Aの諸遺跡の現地引き渡しを行った。これで、平成13年度常磐自動車道遺跡発掘調査が終了した。平成14年3月には、富岡連絡所の年度内撤去を受けて器材の移動を行った。(吉野)

表1 発掘調査遺跡一覧 (面積総計 44,540㎡)

番号	遺跡名	所在地	発掘調査面積 (㎡)	時代	発掘調査期間
①	馬場前遺跡	楢葉町上小墻字馬場前 他	13,400	縄文・奈良・平安 鎌倉・室町	4/24~10/4
②	前山A遺跡	富岡町上郡山字前山	6,800	縄文・平安	4/16~9/28
③	本町西B遺跡	富岡町本岡字本町西	8,740	縄文・平安	5/17~11/30
④	本町西C遺跡	富岡町本岡字本町西	5,200	縄文・平安	5/7~9/7
⑤	本町西D遺跡	富岡町本岡字本町西	4,000	縄文	4/16~6/21
⑥	後作A遺跡	富岡町上手岡字後作	6,400	縄文	8/27~11/16

第2節 遺跡の位置と自然環境

本町西B～D遺跡・後作A遺跡は、浜通り地方のほぼ中央部の双葉郡富岡町に所在する。富岡町の面積は68.47km²で、太平洋から標高400～600mの阿武隈高地にかけて、東西約12km、南北約7kmとやや東西に広がった土地をもち、約6割が山林で占められている。これは「富岡」の地名の由来からも、うかがい知ることができる。また、地名に関する諸説の中に「遠見ヶ丘」を由来とする説があり、なだらかな丘が遠くから見える意と伝えられていることから、太平洋に続く丘陵に所在する姿を察することができる。

浜通り地方の気候は、太平洋岸式気候で、海洋の影響により夏季は涼しく冬季は暖かい。富岡町は、年平均気温が12.2℃で、夏は海風がほどよく吹いて涼しい一方、冬に吹く「空っ風」と呼ばれる強風が大きな特徴の一つとなっている。また町の気象で顕著なものとして降水量の多いことが挙げられ、年間降水量は1,196mmを観測する。県内では雪の多い会津地方に比して少ないものの、他の地方よりは多い。降雨は秋季の9・10月に特に多く、これは台風や熱帯低気圧の影響によるところが大きい。概して四季を通じてしのぎやすい温暖な気候と言える。

現在建設中の常磐自動車道は、富岡町内では阿武隈高地の東縁を添うかたちで緩やかなS字カーブを描くルートをとりながら、比較的平坦な部分に建設されているJR常磐線や国道6号線のおよ

そ2～4 km西を通ることになる。

富岡町の地形は、西から阿武隈高地・河岸段丘地帯・海岸低地の3地形に区分され、西高東低の浜通り地方特有の地形となっている。太平洋から西へ約7 km地点にあたる町の西部地域には、標高100 mの等高線に沿うように双葉断層と立石逆断層の2つの断層が南北に縦走している。これらの断層によって地形は大きく区分され、断層の西側は阿武隈高地の東縁部にあたるため、富岡川や遅沢川などの大小の河川が険峻で樹枝状の溪谷を刻んでいる。断層の東側に入ると河床勾配は緩やかになり、河岸段丘地形を形成する。さらに町のほぼ中央を東流する富岡川流域両岸には沖積地が開け、水田・畑地などに利用されているものの、広大な平野部を形成するまでには至っていない。

また、富岡川を中心にこの一帯の地形を見た場合、南と北では景観が大きく異なるのも特徴的である。本町西B・C・D遺跡のある南側では、第三紀鮮新世の大年寺層を基盤とする段丘地形が続く、小河川によって樹枝状に解析された複雑な地形を示している。一方、後作A遺跡のある北側では、上手岡地区から夜の森地区にかけて形成された平坦な段丘地形が末広がりには延びている。

これら富岡町内に拡がる段丘面は、標高の高い方（年代の古いもの）から、中位Ⅰ・中位Ⅱ・中位Ⅲ・中位Ⅳ・低位Ⅰ段丘面と呼ばれる（久保他1994）。これらの段丘面の形成年代については、中位Ⅰ面が約13万年前、中位Ⅱ面が約11万年前、中位Ⅲ面が約9万年前、中位Ⅳ面が約7万年前、そして低位Ⅰ面が約1.8万年前と考えられている。富岡町内には中位Ⅱ面と中位Ⅲ面が広い面積を占めており、その大部分は隆起扇状的な山麓河成平坦面である。また、中位Ⅳ面・低位Ⅰ面は富岡川や紅葉川沿いに細長く分布しており、沖積面や基盤の露出した丘陵地により随所に寸断されている。富岡町内の常磐自動車道発掘調査対象遺跡は、これらの段丘面上に位置するものが多い。

地質構造をみると、浜通り地方が位置する阿武隈高地の東側はグリーンタフ造山帯の外縁にあたり、花崗岩類を基盤としている。 (佐々木)

第3節 周辺の遺跡と歴史的環境

ここでは、本町西B・C・D遺跡、後作A遺跡に関わる時代、旧石器時代・縄文時代・平安時代について富岡町とその周辺の歴史的環境を概観する。

富岡町は歴史的にみても古代より地域の重要な位置にあったことが伺われ、最も古い時期の遺跡は後期旧石器時代にまで遡ることができる。本町遺跡から出土した頁岩製細石刃核は旧石器時代あるいは縄文時代初頭に相当するものと考えられる。今年度の調査においても後作A遺跡で頁岩製のナイフ形石器が1点出土している。

縄文時代の遺跡は富岡川沿いと紅葉川沿いに多く分布し、平成12年度調査した本町西A遺跡から早期の土器が多く出土した。前期に属する土器は、本町遺跡・真壁城遺跡C地区・蛇谷須遺跡より出土し、本町西A遺跡及び上本町G遺跡から前期初頭の土器や遺構が検出された。中期の資料としては、日南郷・本町・滝の沢・蛇谷須遺跡より土器が出土し、平成13年度調査した前山A遺跡から

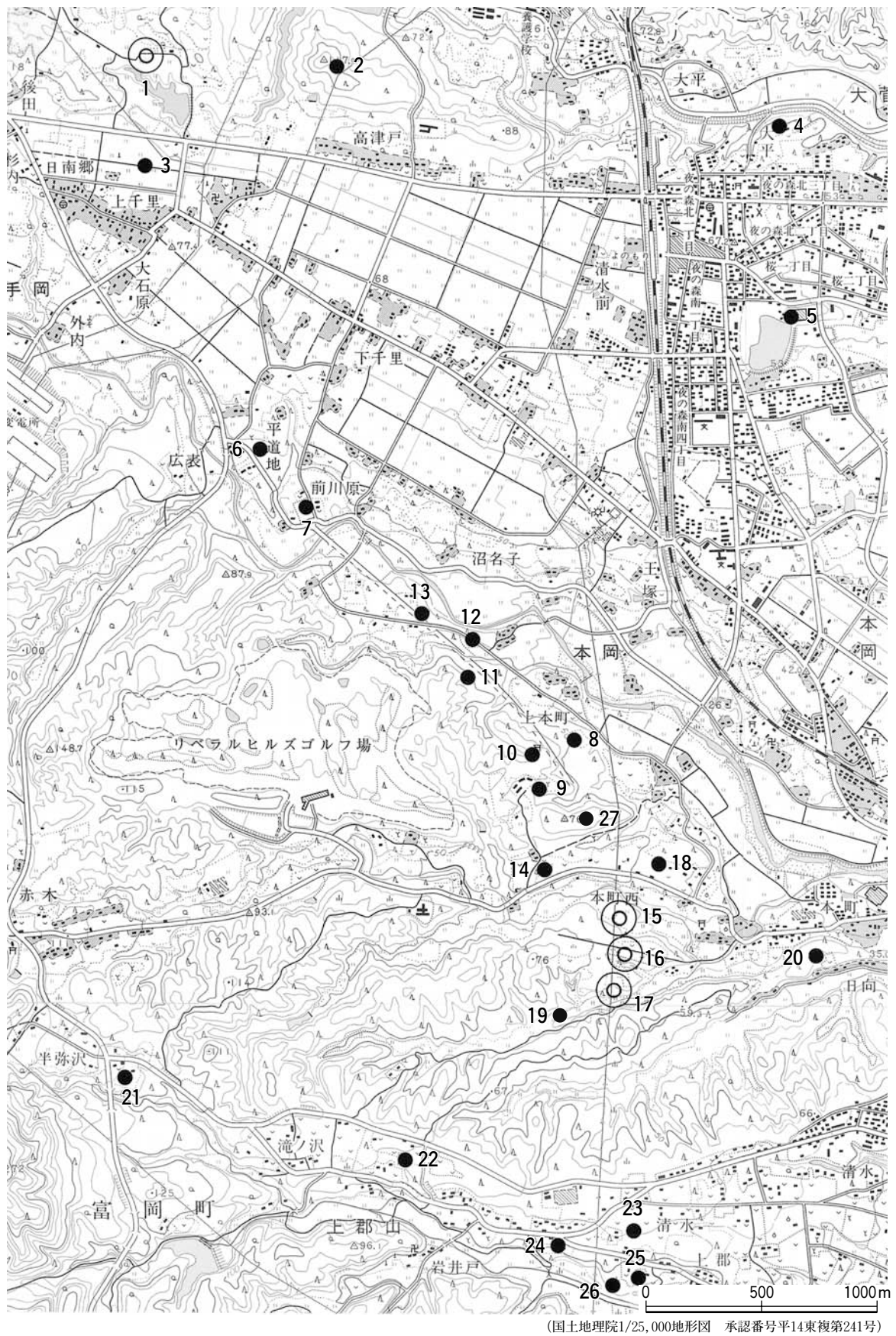


図2 周辺遺跡位置図

表2 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
1	54300055	後作A遺跡	富岡町上手岡字後作	縄文・奈良・平安時代の散布地	第4編所収
2	54300003	高津戸館遺跡	富岡町上手岡字高津戸	中世の城館跡	
3	54300054	日南郷遺跡	富岡町上手岡字日南郷	縄文・近世の散布地	『常磐道33』
4	54300042	大平遺跡	富岡町大菅字大平	縄文時代の散布地	
5	54300041	新夜ノ森古戦場跡	富岡町本岡字新夜ノ森	近世の戦場跡	
6	54300008	平道地遺跡	富岡町上手岡字平道地	縄文・平安時代・近世の散布地	
7	54300052	前川原遺跡	富岡町上手岡字前川原	近世の散布地	『常磐道20』
8	54300049	上本町A遺跡	富岡町本岡字上本町	奈良・平安時代の散布地	
9	54300061	上本町B遺跡	富岡町本岡字上本町	奈良・平安時代の散布地	
10	54300050	上本町C遺跡	富岡町本岡字上本町	社寺跡	
11	54300051	上本町D遺跡	富岡町本岡字上本町	縄文・奈良・平安時代の製鉄炉・散布地	『常磐道20』
12	54300062	上本町E遺跡	富岡町本岡字上本町	縄文時代の散布地	
13	54300056	上本町F遺跡	富岡町本岡字上本町	縄文・平安時代・中世の散布地	『常磐道33』
14	54300009	本町西A遺跡	富岡町本岡字本町西	縄文時代の散布地	『常磐道32』
15	54300047	本町西B遺跡	富岡町本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地	第1編所収
16	54300046	本町西C遺跡	富岡町本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地	第2編所収
17	54300045	本町西D遺跡	富岡町本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地	第3編所収
18	54300048	本町西F遺跡	富岡町本岡字本町西	縄文時代の散布地	
19	54300044	本町西E遺跡	富岡町本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地	
20	54300016	日向館跡	富岡町本岡字本町	中世の城館跡	
21	54300020	半弥澤遺跡	富岡町上郡山字半弥澤	縄文時代の散布地	
22	54300021	滝の沢遺跡	富岡町上郡山字滝の沢	縄文時代の散布地	
23	54300057	清水遺跡	富岡町上郡山字清水	奈良・平安時代の散布地	
24	54300059	岩井戸東遺跡	富岡町上郡山字岩井戸	奈良・平安時代・近世の散布地	
25	54300058	上郡A遺跡	富岡町上郡山字上郡・清水	縄文・奈良・平安時代の散布地	
26	54300060	上郡B遺跡	富岡町上郡山字上郡	縄文・古墳・平安時代の散布地	『常磐道32』
27	54300065	上本町G遺跡	富岡町本岡字上本町	縄文時代の散布地	『常磐道33』

は中期中葉から後葉にかけての大集落跡が検出されている。榎葉町では平成13年度に代遺跡・上ノ原遺跡などから中期中葉から末葉にかけての大集落跡が調査されている。後期になると資料は増加し、蛇谷須・一本松・上ノ町B・上郡Bなどの諸遺跡より、この時期の土器が多数確認されている。晩期の遺跡は、富岡町内では片倉遺跡や関根遺跡などが確認されている。また、近隣では榎葉町山所布B遺跡、大熊町道平遺跡が調査されている。これらの多くは低位I段丘面上に立地している。

平安時代になると遺跡数はさらに増加する。富岡川右岸の段丘面上や双葉断層東側、市街地南の太平洋に張り出した丘陵、紅葉川流域より多くの遺跡が確認されている。その中でも富岡町の奈良・平安時代を代表する遺跡としては、小浜代遺跡が挙げられる。官衙的性格を兼備えた寺院跡の可能性が高いとされている。本町遺跡から平安時代の集落跡が確認されており、近隣では榎葉町の赤粉遺跡や植松遺跡がこの時代の遺跡として調査されている。(佐々木)

参 考 文 献

- 久保 和也他 1994 『浪江及び磐城富岡地域の地質』 地質調査所
 富岡町史編纂委員会 1987 『富岡町史 第三巻 考古・民俗編』
 福島県教育委員会 1996 『福島県遺跡地図 浜通り地方』

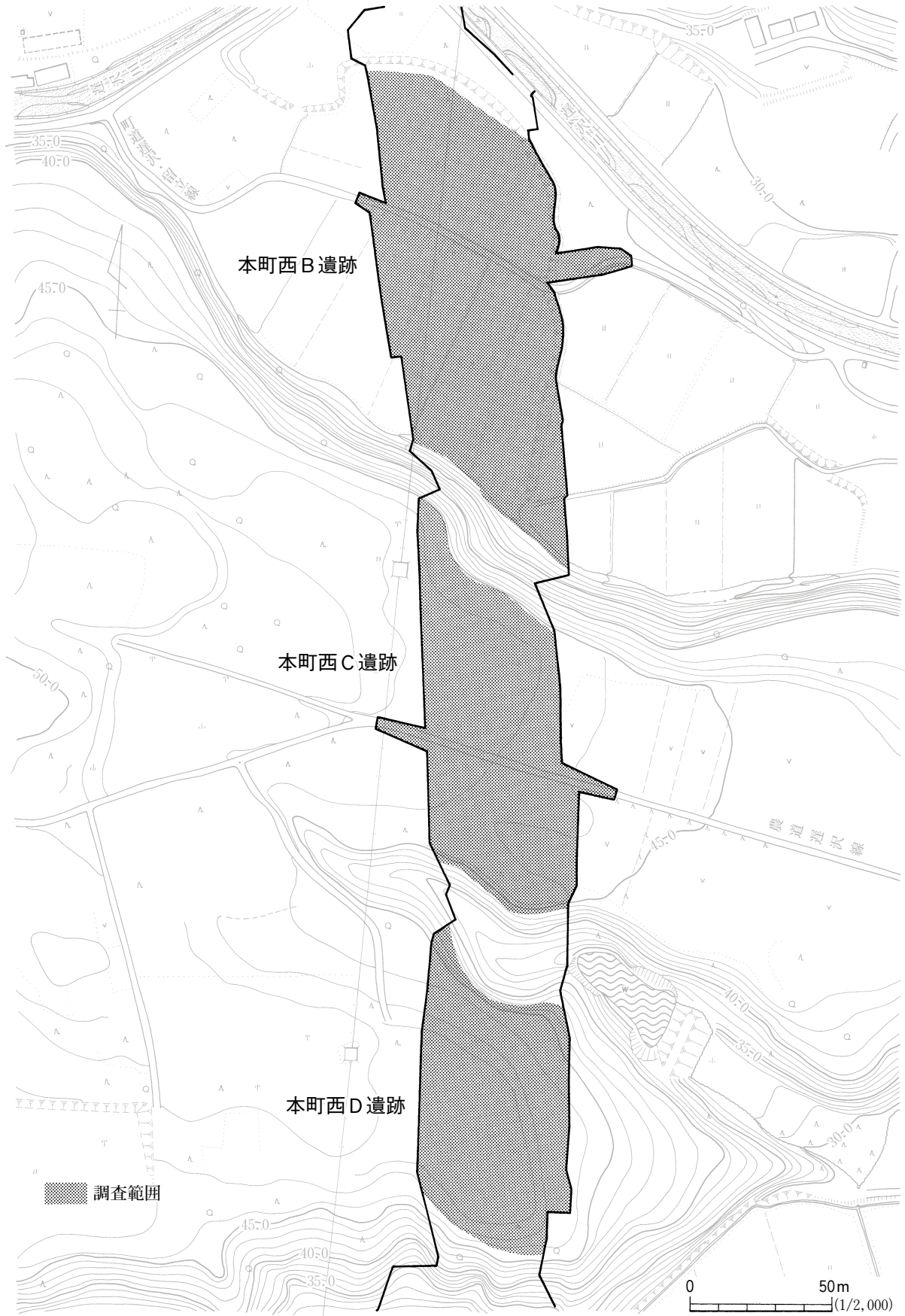


図3 本町西B・C・D遺跡調査位置図

第1編 もとまちにし 本町西B遺跡

遺跡記号 TO-MMN・B

所在地 双葉郡富岡町大字本岡字本町西

時代・種類 縄文・平安時代 集落跡

調査期間 平成13年5月17日～11月30日

調査員 福島 雅儀・茂木 政弘・佐々木 透
玉川 邦男・阿部 智彦・千葉 秀樹
吉野 滋夫・福田 秀生・新海 和広

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 遺跡の位置と地形

本町西B遺跡は富岡町の中央部からやや南東寄りにあり、JR常磐線夜ノ森駅から南西側約4km、国道6号線から西側約2kmの地点に位置する。本遺跡は町道遅沢・留立線によって南北に分断され、北側には町道門口・赤木線が通っている。

本遺跡は中位段丘面によって南北に挟まれた谷間にあり、低位I段丘に区分されている。遺跡の南北の幅は約160mとなっている。時期・性格は、縄文時代晩期・平安時代の集落である。

遺跡の北側には、半弥沢の谷間を水源とする遅沢川が西から東へと流れ、本遺跡から約400mの地点で、富岡川と合流する。遅沢川の通常の水量は、低位で緩やかな流れであるが、一旦集中豪雨となると川幅が狭いためか川岸に溢れるばかりの暴れ川となる。そのため、調査区からは旧河川跡を確認している。旧河川跡の堆積物はLVI黒褐色土で、調査区から確認した礫露出範囲を河岸とすると、遅沢川の流域よりもやや西側にずれるようである。旧河川が埋没した後、縄文時代晩期になり初めてこの地に人々が住むようになった。

本遺跡を南北に挟む段丘には南側に本町西C遺跡が、北側には本町西A遺跡がそれぞれ立地している。これらの遺跡の時代は本町西C遺跡が縄文時代前期初頭、本町西A遺跡が縄文時代前期後葉を主体とするものである。本町西C遺跡からは平安期の住居跡も確認されていることから、本町西B遺跡と同時期の集落が中位段丘にも存在したことが判明した。

その他関連する遺跡を町内で挙げると、縄文時代晩期では関根遺跡、平安時代では本町遺跡である。それぞれ本遺跡から約1km程度の距離にあり、遺構・遺物からみると拠点的な集落として考えられるものである。

遺跡の現況は水田として利用され、すでにほ場整備が実施されていた。標高は29～33mで概ね東から西へと緩やかに傾斜している。

(吉野)

第2節 調査経過

本町西B遺跡は平成6年度に実施した表面調査で、遺跡範囲を26,000㎡と推定したものである。その後、平成10・11年度に試掘調査を実施し、工事にかかる要保存範囲を7,140㎡と確定した。

平成13年度の発掘調査に先立ち、4月に開催された現地協議で日本道路公団東北支社いわき工事事務所(JH)側から提示された工事計画図によると、工事の変更により要保存範囲よりも工区が拡大することが判明した。調査は当座、要保存範囲の7,140㎡を対象として5月17日から調査員1名で開始した。

まず、表土剥ぎに先立って、遺構・遺物の分布状況を確認するためにトレンチの掘り下げを行った。表土剥ぎに伴う排土は、調査区外に搬出することが出来なかったため、排土置き場は遺構が確認できなかった調査区南東部に設定し処理した。この時点で2軒の竪穴住居跡を検出した。6月には福島県教育委員会文化課により1,600㎡の追加指示がなされ、本遺跡の調査面積は合計8,740㎡となった。追加指示のあった範囲のうち、遺構・遺物が予想される箇所は表土剥ぎを実施したが、それ以外についてはトレンチによる遺構・遺物の確認にとどめた。

作業員の通勤方法は調査区周辺に駐車場を確保できなかったため、貸切バスによる送迎とした。3月のJHとの現地打ち合わせでは、バスによる送迎は町道門口・赤木線に乗降所を設定し、遺跡の北側を流れる遅沢川に作業員通勤用の仮設橋を設置し、そこを渡る経路とした。だが、町道門口・赤木線は交通量が多く道路横断が危険であること、仮設橋の建設など諸問題を解決しなければならなかった。しかし、遅沢川に架かる本町橋のたもとをバスの乗降所とした場合、上記の問題が解決するため、地元の方々の承諾を得て乗降所とした。6月12日からは作業員を雇用し、安全衛生講習をおこない現場作業を調査員2名で開始した。調査事務所は遺跡周辺の道が狭く立木の枝が覆い茂っていることから、設置を断念し野外テントで対応することとした。

調査は調査区北側から着手することとした。調査区は水田として利用されていたこと、旧河川の堆積物で構成されていたことにより、遺構内堆積土と遺構を掘り込んでいる層が類似し、遺構検出は困難であった。なお、遺構検出作業で出土した遺物の大半は縄文時代晩期の粗製土器であった。7月の梅雨明け後は猛暑となり、調査区は乾燥し散水しながら調査を進めた。

8月下旬には、迂回路を遅沢川の管理用道路とすることで地元の方々から承諾を得られた。これにより、調査区内を横断する町道遅沢・留立線を撤去し、調査に入れることになった。9月からは本町西C遺跡の終了に伴い調査員・作業員が加わり、調査員は計3名となった。これにより、調査区南側の調査に着手した。

調査区は旧河川跡にあたるため、遺構確認面よりも下層に遺物包含層の有無を確認する必要があったため、10月1日から前山A遺跡の調査終了に伴って作業員を増員した。調査員もさらに増員して2名が加わり計5名となった。

調査区南側からは縄文時代晩期の土器がまとまって出土した。10月上旬には雨天の日が続き、調査区の大半が冠水する事態も発生し、ポンプにより強制排水を行うが水が引くまで2日ほどを要した。

11月には、調査区北東端から3軒の住居跡が重複していることが判明したが、11月末までには調査を終えることができた。11月下旬には調査に併行しながら器材の撤収を行い、11月30日には平成13年度の本町西B遺跡調査を終了した。

12月4日には調査によって撤去した町道を復旧し、碎石を敷いて車両の通行に支障がないように努めた。12月5日にはJHに引き渡しを行い、平成13年度の常磐自動車道遺跡調査をすべて終了した。

(吉野)

第3節 調査方法

本町西B遺跡における座標の設定は、国土座標区系の数値を表示することにした。座標杭の設定にあたっては、JHが設置した予定路線の中心杭を利用して、計算により真北を求め、それから南北方向と東西方向にそれぞれ10mごとに杭を打設した。

グリッドの設定にあたっては、座標の設定によりできた南北10m・東西10mのマスを一単位として、東西にアラビア数字で1・2・3…、南北にアルファベットでA・B・C…とし、これらを組み合わせてグリッドを表示することにした。

調査区の掘り下げは、表土剥ぎを実施する前に任意のトレンチを数本設定して遺構・遺物の分布状況を確認した。表土剥ぎは水田の耕作土と床土を重機で除去し、以下の土層は遺物が含まれている層については人力で掘り下げた。遺構・遺物が確認できなかった層については、任意のトレンチを数本設定し基盤層である礫層まで掘り込んで遺物の有無を確認した。

堆積土の表示は、挿図では遺構内堆積土はℓとアラビア数字の組み合わせ、遺構外堆積土はLとローマ数字の組み合わせとした。

遺構の調査記録は、基本的には1/20の縮尺で作図し、住居跡のカマドなどについては1/10の縮尺で作図した。また、調査区の全体図は1/100の縮尺で作図した。

写真は6×4.5cmのモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムのほか、35mmのモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを併用して、写真撮影を実施した。 (吉野)



作業風景（北西から）

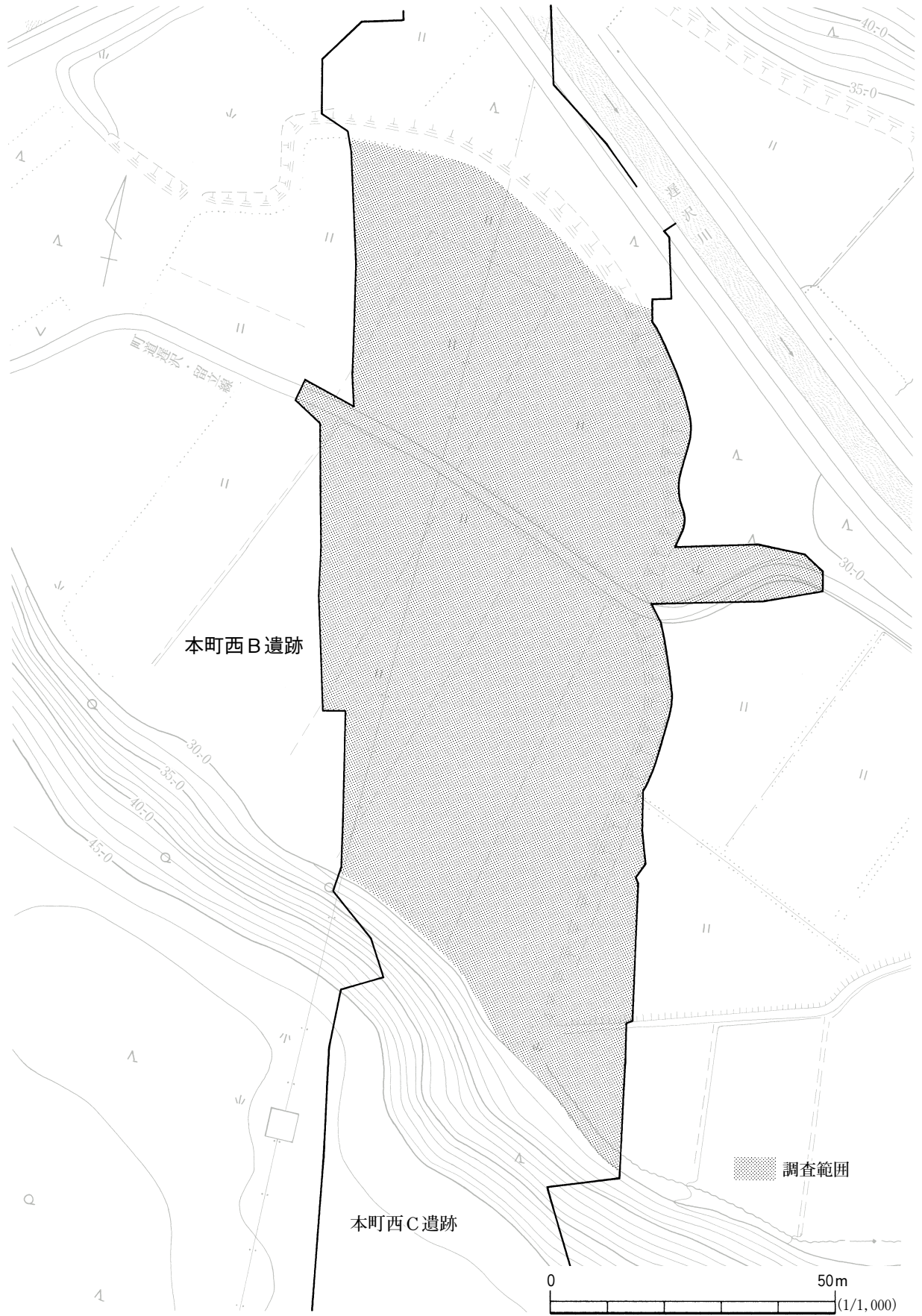


图1 本町西B遺跡調査区位置図

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

遺跡の概要

本町西B遺跡で発見した遺構は、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡4棟、土坑21基、埋甕2基、焼土遺構2箇所、遺物包含層1箇所、柱穴112基である。出土遺物は縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品・炭化物・鉄滓で箱数にしておよそ50箱である。遺物のなかで、最も出土量が多いのは縄文土器である。調査区は旧河川跡にあたり、耕作土を除去したところで礫の堆積箇所が調査区北端・中央部・北東部にみられた。

遺構の分布状況をみると、遺構が比較的集中しているのは調査区北東部であった。一方、南端部と南東部にかけての範囲には遺構がみられない。

調査区から縄文時代に含まれる遺構は埋甕・焼土遺構・遺物包含層であった。埋甕と焼土遺構を検出した位置は調査区の北東部にあたり、ちょうど縄文時代晩期の土器が散布する範囲に含まれる。

調査区で検出した竪穴住居跡の時期は、すべて平安時代である。分布状況は、調査区北東部で1～3・5・6・9号住居跡の6軒が環状に広がるものと、調査区中央部で4・7・8号住居跡の3軒が散在しているものがあり、大きく2つに分かれる。調査区北東部の住居跡の分布をみると、さらに東側へと広がっていたことが推定できる。掘立柱建物跡は4棟を確認したが、建物や柱列を構成していたとみられる柱穴は112基を確認している。これらの柱穴は調査区中央部東端の3・4号建物跡を含む範囲に分布していた。

土坑は住居跡の分布域と重複しているが、住居跡が造られていない調査区北部や南西部にもみられる。時期については判明しているものは少ないが、住居跡と同時期のものも存在している。

基本土層（図3、写真5）

基本的な土層は7層まで区分した。LⅠは現水田の耕作土及び床土である。LⅡは暗褐色土で、調査区南東部から確認している。LⅢは褐色砂質土で、この層から平安時代の遺構を確認している。LⅢは調査区南側では厚く堆積し、深さ1m程である。LⅣは暗褐色土で縄文晩期の遺物を含む層である。LⅤは黄褐色粘土で、このなかに酸化鉄が管状の塊になっていたものが含まれていたもので、水辺に生えていた植物の根に付着したものであろう。この状況から静水域であったと判断できる。LⅥは黒褐色土で、旧河川跡の堆積土である。LⅦは礫層である。おそらく、遅沢川の上流域で大規模な地滑りが発生し、大量の礫が堆積したとみられる。この層を掘り抜くと水が湧き出してきた。LⅤ以下には遺物が含まれていないことを確認している。 (吉野)

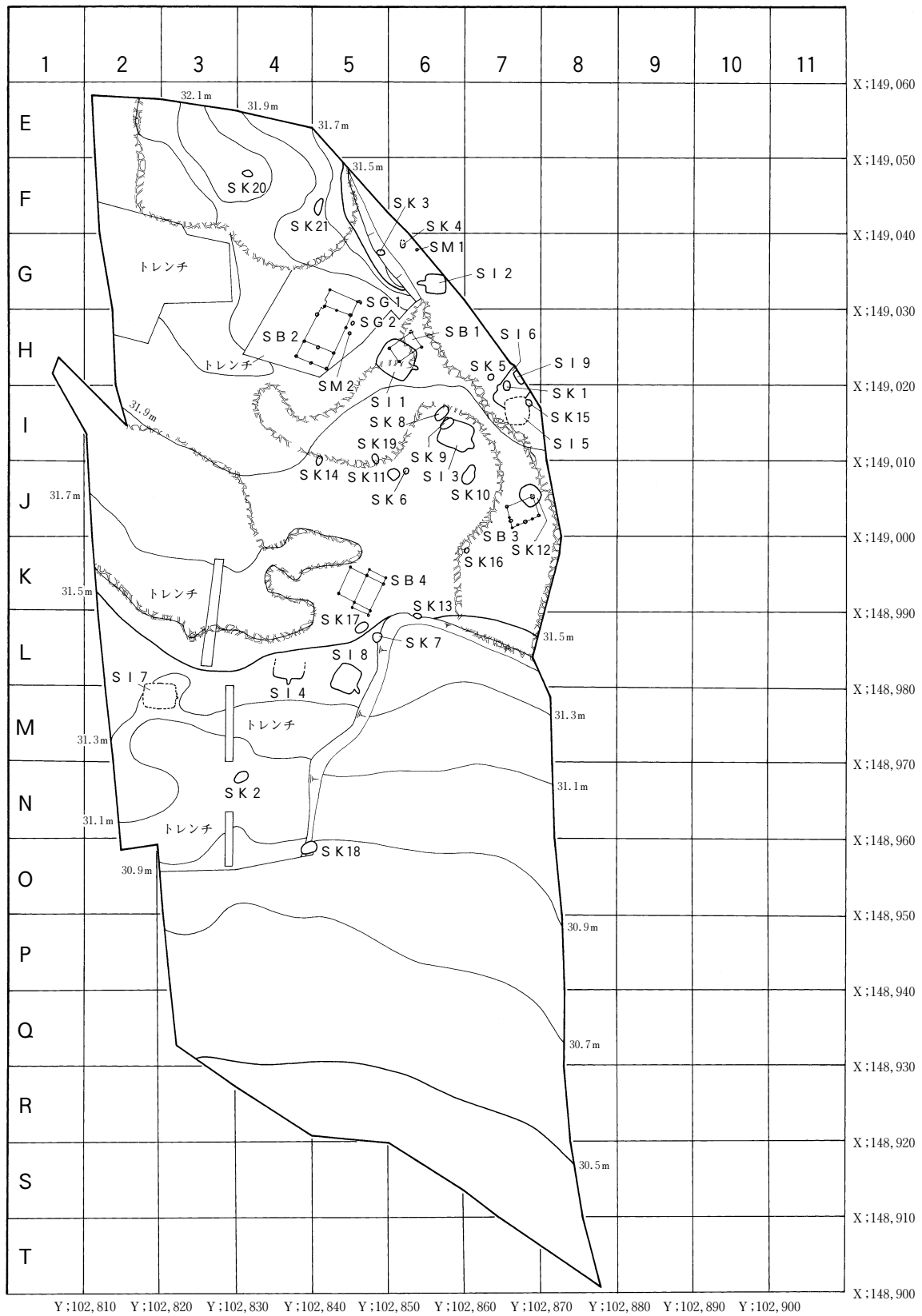


図2 遺構配置図

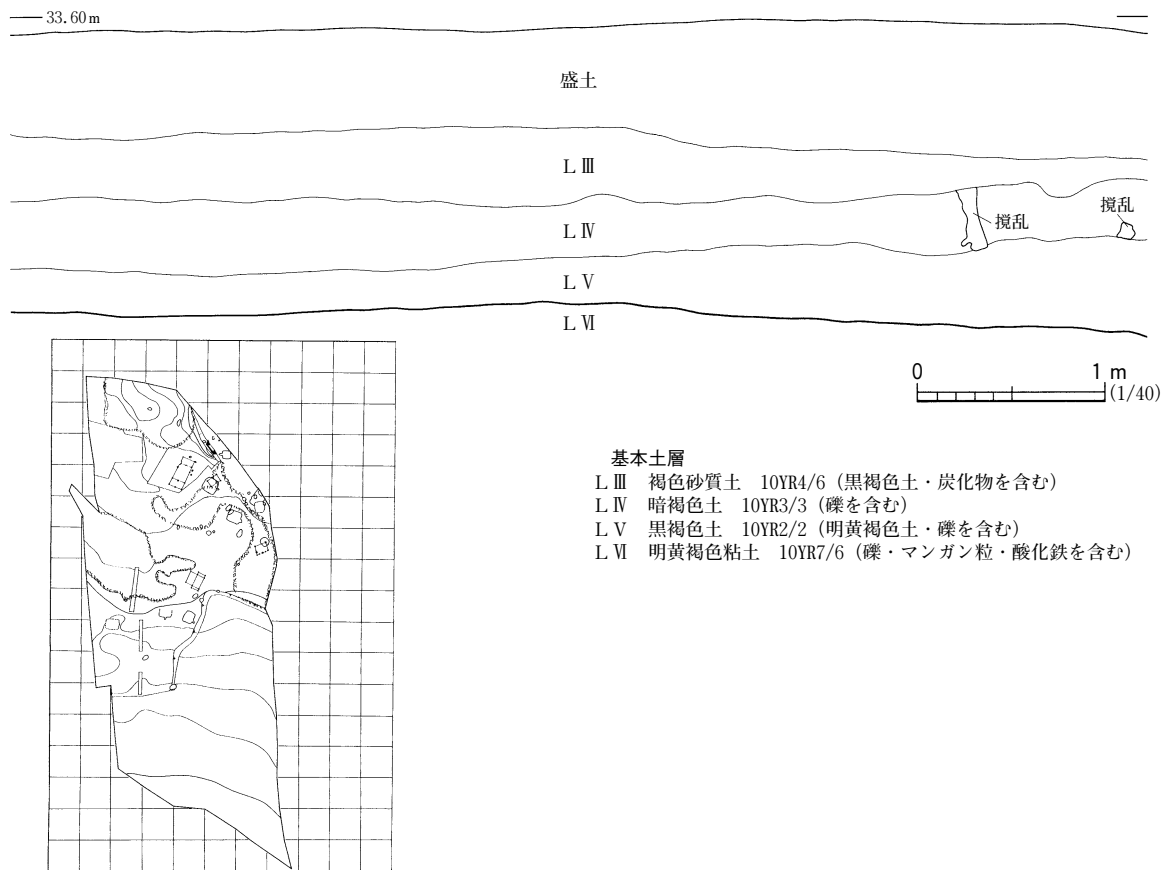


図3 基本土層図

第2節 竪穴住居跡

調査区からは竪穴住居跡は9軒を確認した。いずれも、平安時代に含まれるもので、遺存状態は良好ではない。特に住居のカマドはその検出状況から、粘土ブロックや礫を積み上げて造られているようである。6・9号住居跡については調査区外へと伸びているため、全体の形状は把握できなかった。

1号住居跡 S I 1

遺 構 (図4・5, 写真7・8)

1号住居跡は調査区北側の東側にあたるH5・6グリッドのL IIIと礫露出範囲で検出した。重複する遺構は、1号建物跡である。新旧関係は本住居跡を検出したところで、すでに建物跡の柱穴を検出できたため本住居跡の方が古いものと判断した。本住居跡の周辺には、2・3・5・6・9号住居跡が位置している。5軒はいずれも平安時代の住居跡で、環状に分布していた。本住居跡と隣接するのは北側に2号住居跡が、南東側に3号住居跡がある。

本住居跡は表土剥ぎ中に検出したものである。その時にカマドに使用していたとみられる礫や粘

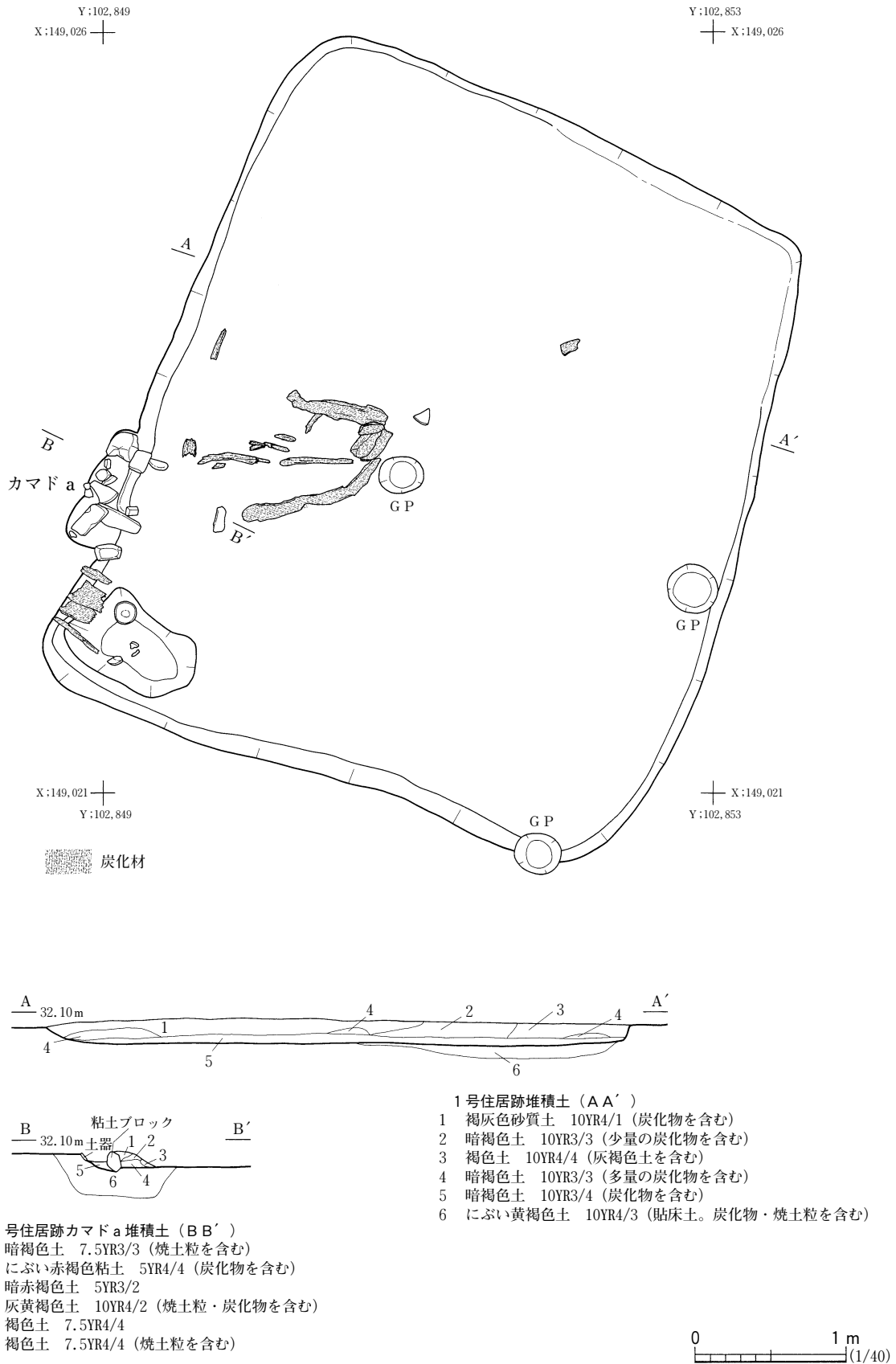


図4 1号住居跡(1)

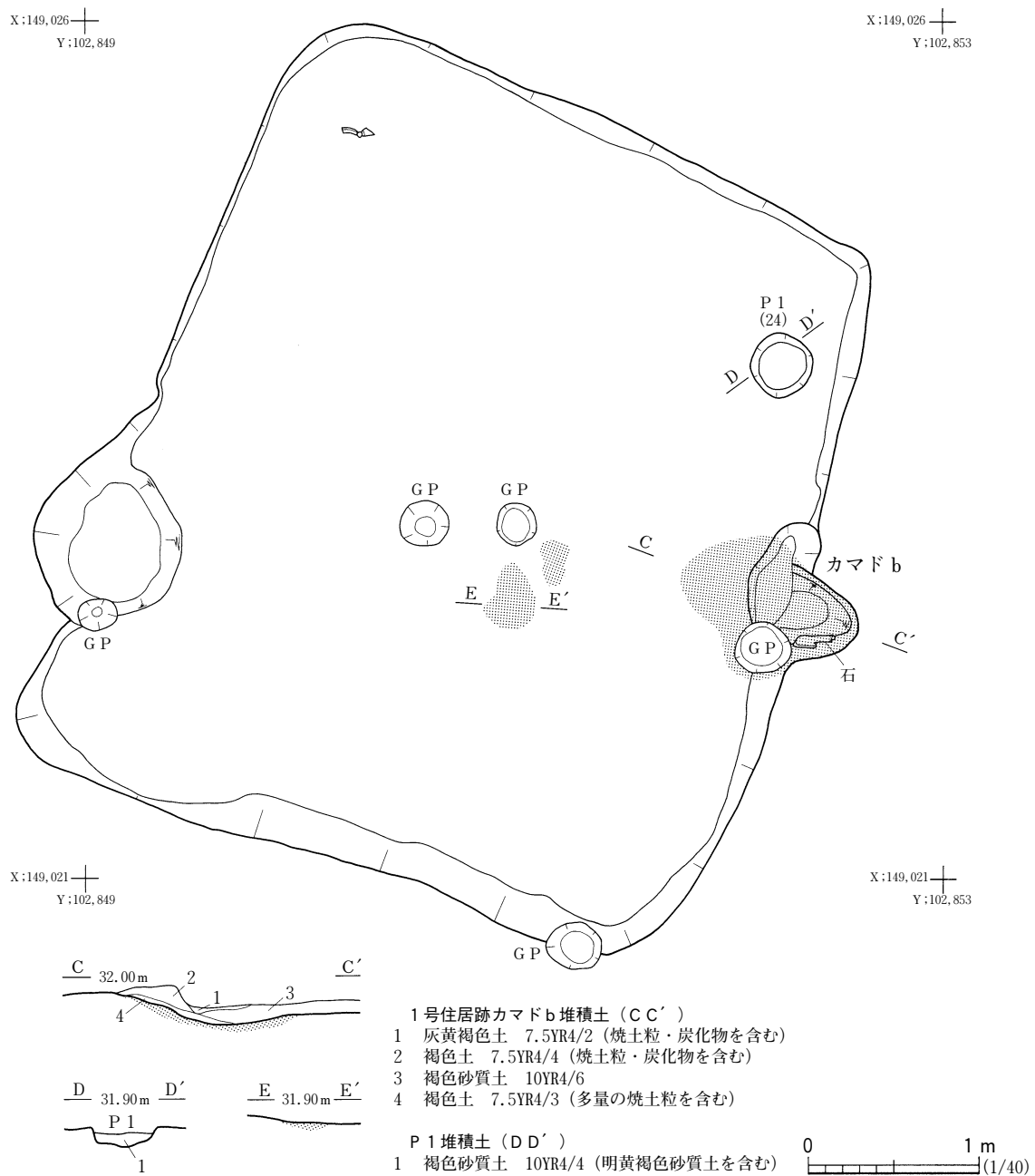


図5 1号住居跡(2)

土ブロックなどが出土し、土器片なども散乱していた。平面形は南側がやや幅の広い整った台形をなしている。規模は東西が4.5m、南北は3.4~3.7mである。壁の遺存状態は良好ではなく、高さは5cm程度であった。主軸方向は真北に対して西へ65°を示し、床面積は16㎡である。

床面から炭化材が確認されたことから、火災に遭ったらしい。炭化材は住居跡の中央部からやや西側にまとまって出土していた。炭化材は脆く取り上げると崩れてしまうほどであった。炭化材の出土地点を中心として半径約1.8mの範囲に炭化物が散布していた。

堆積土は6層に区分した。大別すると、砂質土と炭化物を多く含む層に区分することができる。第1層はLⅢに、第2層はLⅣに対応するものであろう。第4・5層は炭化物の集積した層である。

第6層は貼床土である。

カマドは西壁と東壁から各1基を確認したことから、造り替えがなされていたことが判明した。なお、記述に際しては新しいカマドをカマドaとし、古いカマドをカマドbとした。カマドa・bともに燃烧部が住居外に張り出すものである。

カマドaは西壁の南西隅寄りに設けられていた。カマドaは壊されていて、粘土ブロックが散乱している状況であり、煙道も確認できなかった。粘土ブロックは長方形・不整形をなし、これらを積み上げ周囲を粘土で塗りこめてカマドとしたのだろう。

カマドbは東壁のほぼ中央部に設けられていた。カマドbは壊されて、床・壁面とするために埋められていた。1～3層はその時に埋められた堆積土である。4層は多量の焼土粒が含まれていることから、カマドbに伴う堆積土である。

カマド以外に住居内施設として確認できたのは、径18cmの小穴を1基確認したのみで、どのような柱穴の構成をしていたのかは不明である。

遺物 (図6・7, 写真33・41)

本住居跡からの出土遺物は他の住居跡からのものよりも多い。そのうち大半を占めるのは、甕と筒形土器の破片である。特に、筒形土器の破片は細かいものが多い。甕は胎土に比較的大粒の砂粒を含んでいて、粗雑な作りを感じさせる。杯の出土点数は相対的には多くないが、口縁部付近の破片が多い。底部の破片をみるとロクロからの切り離しは糸切りのみである。

図6-1～12は土師器の杯で器面調整にロクロを使用し、内面は黒色処理されミガキがなされているものである。1は遺存度が約80%のものである。器形は体部が内湾気味に立ち上がる。外面は底部から体部下端にかけて、丁寧なヘラケズリが施されている。外面の口縁部には、横方向のミガキがなされている。2は床面から出土した。遺存度が約70%のものである。体部外面には墨書がなされている。文字が書かれていた部分が欠損しているため、どのような文字が書かれていたのかは不明である。内面には上下方向のナデがなされている。外面は底部から体部下端にかけてヘラケズリが施されている。底部の切り離しは回転糸切りである。3は完形品でカマド付近から出土した。内面には黒色処理がなされているが、再び火を受けて部分的に消滅している。幅の広い工具で器面は整えられている。外面は底部から体部下端にかけて、丁寧なヘラケズリが施されている。4は約15%の破片である。外面は摩滅が著しい。5は約30%の破片である。体部外面に墨書がなされているが、文字が書かれていた場所の大半が欠損している。そのためどのような文字が書かれていたのかは不明である。6は約10%の破片である。外面の口縁部には漆状の付着物と積み上げ痕がみられる。内外面ともに黒色処理がなされている。7は約10%の破片である。体部に円形の穴が2箇所うがたれていた。穴の径は、外面を正面とすると左側の穴は2.2mm、右側の穴は3.1mmである。8は約20%の破片である。外面はロクロナデによる凹凸が目立ち、内面は幅の広い工具を用いてミガキがなされている。胎土は砂粒を多く含んでいる。9は約40%の遺存である。底部の切り離しは回転糸切りで、底部周縁のみを手持ちヘラケズリで調整している。内外面ともに摩滅が著しい。10は底

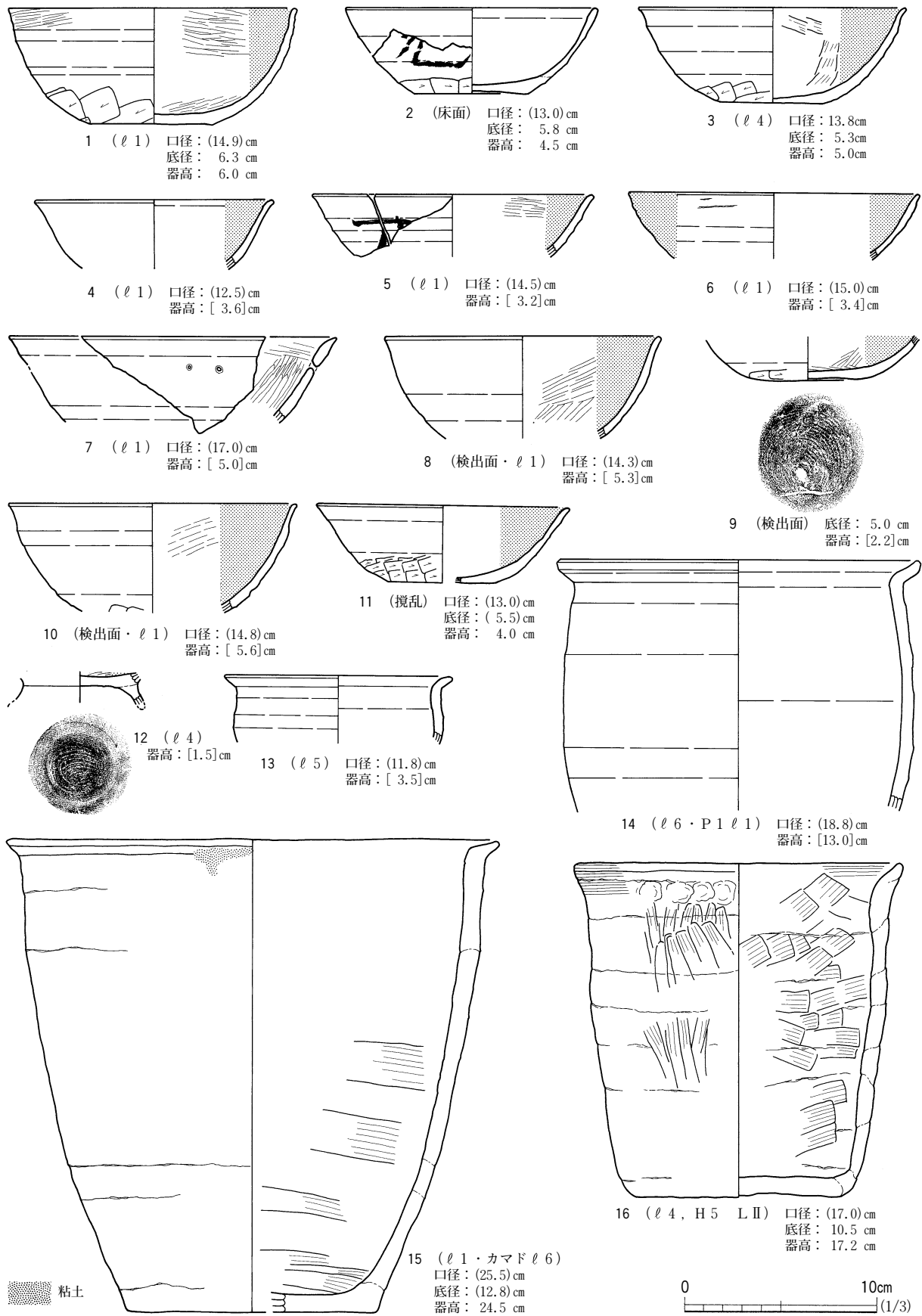


図6 1号住居跡出土遺物(1)

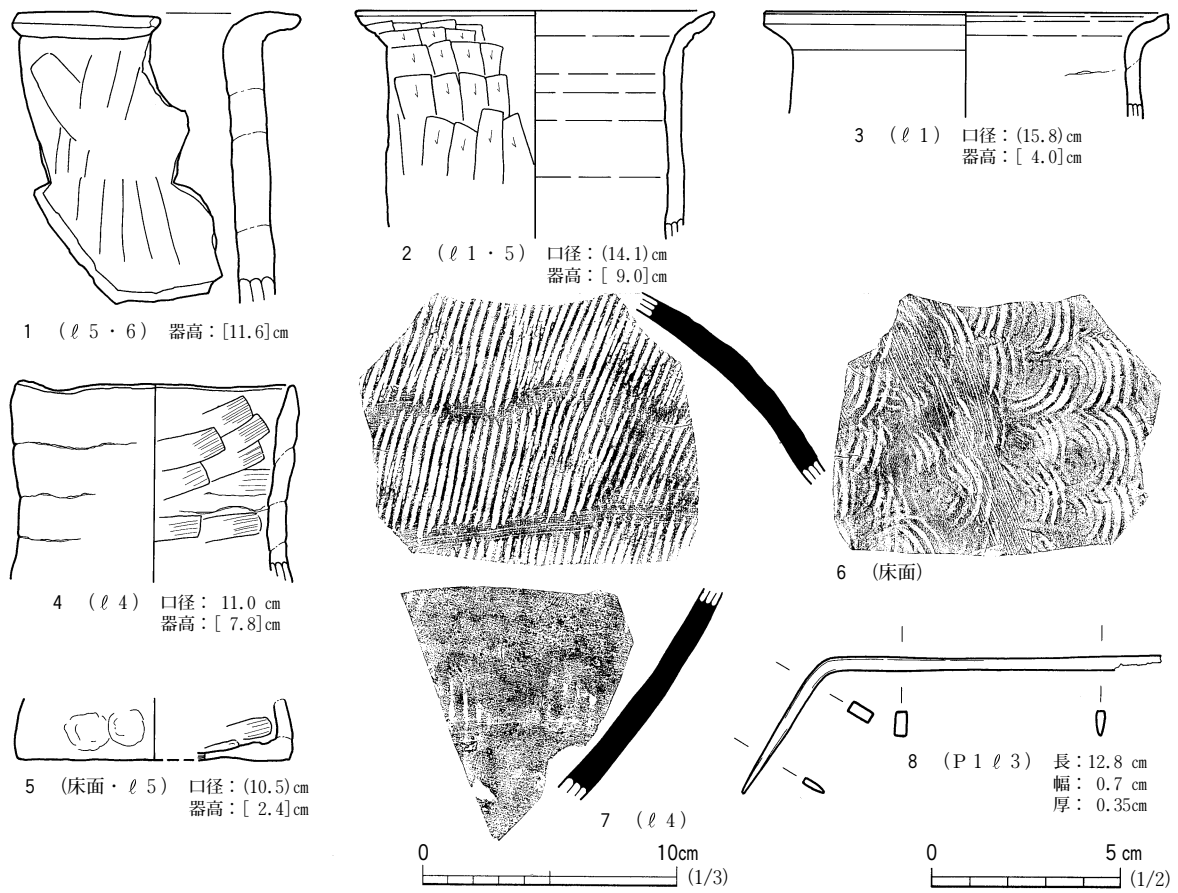


図7 1号住居跡出土遺物(2)

部が欠損する約15%の破片である。外面は図6-8よりもロクロナデによる凹凸が強調されているようである。内面には細かい気泡が弾けたような痕跡がみられた。外面の下端にはヘラケズリが認められる。11は底部が欠損する約30%の破片である。外面は部分的に器面が剥離した箇所が顕著に見受けられた。12は高台付杯で体部と高台部下端が欠損している。底部の切り離しは回転糸切りで、高台部は貼り付けによるものである。胎土に酸化鉄粒を含んでいる。

図6-13~16, 図7-1~3は土師器甕である。13は小型甕で、内外面ともにロクロナデが施されている。器厚は薄く、洗練された仕上げとなっている。15は約45%の破片から復元した。内外面ともに器面の摩滅が著しい。外面には積み上げ痕がみられ、器面の調整はあまりなされていない。さらに、外面には砂粒を多量含む粘土が付着していた。これを評価すると、カマドに埋め込まれていたとも考えられる。14は約15%の破片から復元した。内外面ともにロクロナデがなされていた。胎土には微細砂粒や雲母粒などが含まれていた。口縁部は屈曲し、口唇部には面取りがなされていた。16は一見、筒形土器のように胴部外面に積み上げ痕が明瞭である。器形は15をさらに小型化したような形状である。

図7-1は口縁部が屈曲し、器厚は厚みがある。胴部には外面が縦方向のナデ、内面は横方向のナデが施されている。2は約15%の破片から復元した。器面の調整は内面がロクロナデ、外面は縦

方向のヘラケズリが口縁部から胴部にかけてなされている。3は約10%の破片から復元した。器形は図6-14と類似するものである。口縁部を成形した時の指頭痕や積み上げ痕が部分的にみられることから、14よりも調整の粗雑さが見受けられる。

4・5は筒形土器である。外面は剝離が著しく、積み上げ痕が明瞭に観察できる。内面は丁寧な横方向のナデが施されている。4は口縁部、5は底部まで遺存するものである。

6・7は須恵器甕の胴部破片である。6は外面に平行タタキ痕が、内面にはアテ具痕が認められるが、それらに加えて部分的に横方向のナデが施されている。7は外面の平行タタキをナデによってスリ消している。8は鉄製品の鏝で片側が欠損している。

ま と め

本住居跡はカマドを作り替えしたものである。また、火災に遭ったことが炭化材の出土状況から、うかがうことができる。さらに、炭化材は部分的にしか確認できなかったことから、火を受けたのは限られた範囲であることが推測できる。時期は床面から出土した土器から9世紀後半を考えている。(吉野)

2号住居跡 S I 2

遺 構 (図8, 写真9・10)

本遺構は調査区北側の北東端にあたるG6グリッドLⅢから検出した。重複する遺構はない。本住居跡の周辺には、1・3・5・6・9号住居跡が位置し、本住居跡も含め環状に分布していた。

本住居跡を検出した当初、礫が円形に巡っていたことから、縄文時代に含まれる住居跡の炉であると考えた。しかし、精査を進めてゆく過程で、礫はカマドの構築材であることが判明した。平面形の検出は、堆積土と自然堆積土との違いが明確ではなく困難であった。そのために、検出面を5cm程度掘り下げたところ、ようやく平面形を把握することができた。平面形は南側の幅が広い台形である。規模は東西が2.6m、南北は1.7～2mである。壁の遺存状態は20cm程度であった。主軸方向は真北に対してほぼ西で、床面積は3.9㎡である。

堆積土は4層に区分したが、大半は第1層によって覆われていた。第1層は第Ⅲ層に対応できるもので、貼床土はなされていなかった。

カマドは西壁の中央部に設けられていた。礫がコの字状に配されていたので、これを構築材として構築したと考えている。礫は15～20cmの大きさのもので、内側の幅は40cmほどである。煙道は燃焼部から住居跡の主軸方向からやや南側に傾く。煙道の規模は幅17～26cm、長さは128cm、深さ5cm程度で、煙出部が楕円形をなし長軸30cmであった。

カマド堆積土は4層に区分した。そのうち第2層が大半を占めているが、住居内堆積土第1層と似ている。

このことから、住居内と同時にカマドも埋まってしまったと考えている。第3・4層はカマドが使用されていた時の堆積土であろう。カマド以外に住居内施設として柱穴や壁溝など確認できたも

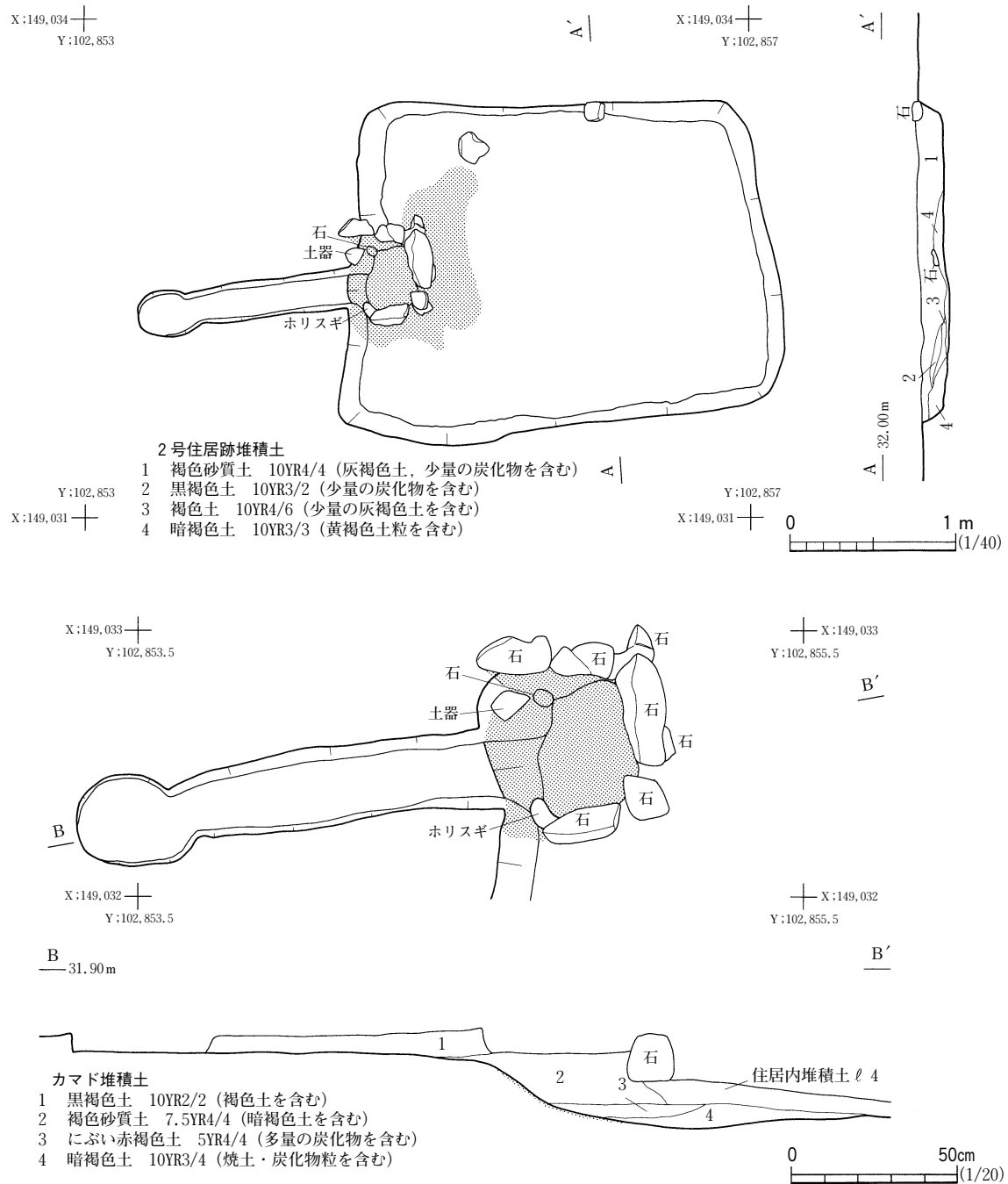


図8 2号住居跡

のではない。

遺物 (図9, 写真33)

本住居跡から出土した遺物は土師器である。主に破片で多いのは筒形土器で、特に細かい破片となっているものが多い。図9に出土遺物を示した。1・2は土師器杯で外面はロクロナデ、内面にはミガキ・黒色処理がなされている。1の器厚は薄く、胎土も細かい砂粒を含む程度で洗練された印象である。底部外面から下端にかけて回転ヘラケズリ調整がなされている。2は底部が欠損するものである。

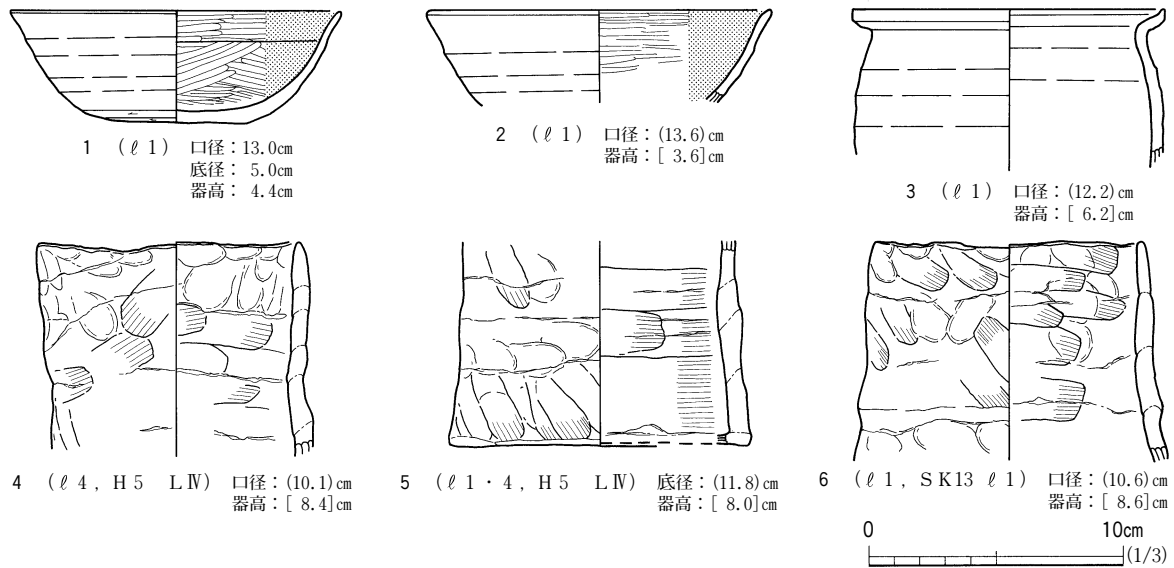


図9 2号住居跡出土遺物

3は土師器小型甕で、内外面ともにロクロナデがなされている。口縁部は屈曲し、口唇部に面取りがなされている。4～6は筒形土器である。外面は成形の際による指頭痕と積み上げ痕がみられる。内面には丁寧なナデを施している。色調はいずれも黄褐色である。

ま と め

本住居跡は調査区で検出したもののうち、最も小規模なものである。時期は堆積土中から出土したロクロ土師器杯から9世紀後半を考えている。(玉川)

3号住居跡 S I 3

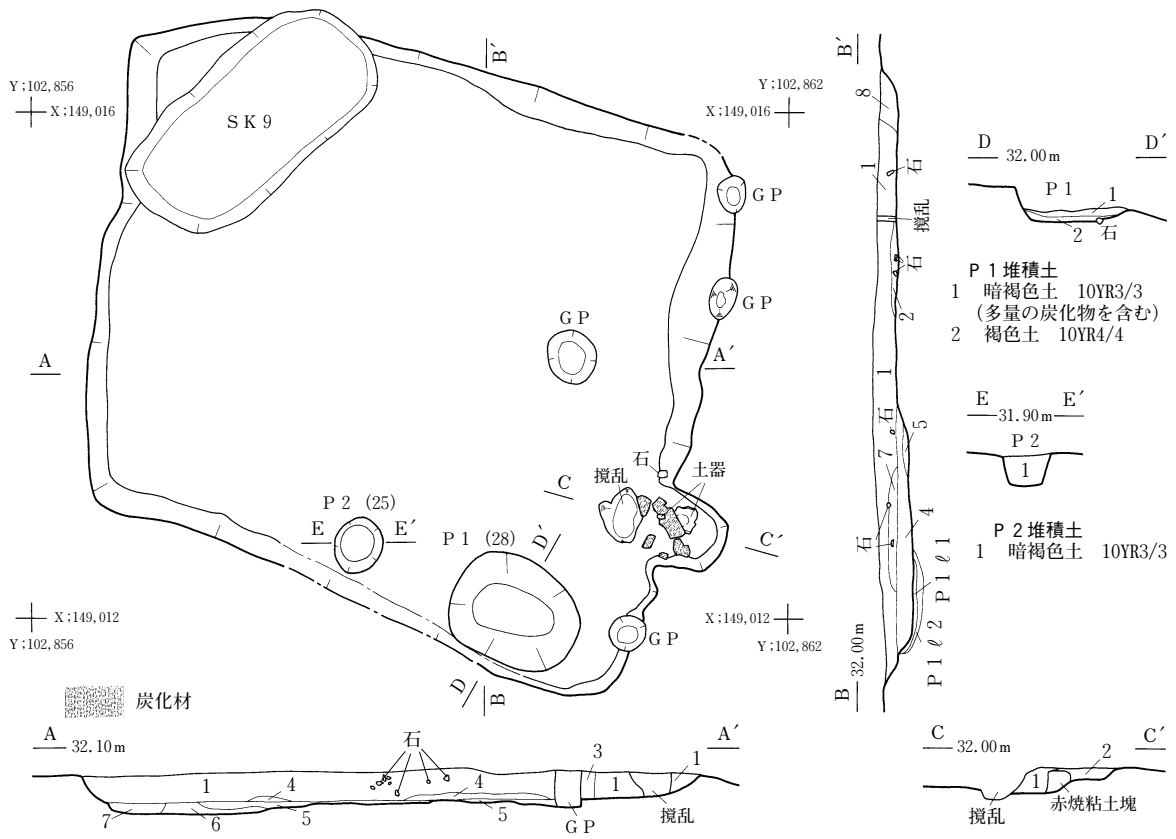
遺 構 (図10, 写真11・12)

本遺構は3号住居跡としたもので、調査区北側の北東部にあたるI 6・7グリッドのL IIIと礫露出範囲から検出した。重複する遺構は9号土坑で、新旧関係は本住居跡の方が古い。本住居跡の東側には、5・6・9号住居跡が位置する。

本住居跡の平面形を把握することが困難であったが、土層観察の畦を残して掘り下げたところ、形の崩れた方形の平面形を検出した。規模は東西が4.2～4.6m、南北は3.7～4.4mである。壁はやや外傾気味に立ち上がり、東壁から北壁にかけては礫層を掘って壁面としていた。壁の高さは約20cm程度であった。主軸方向は真北に対して西に74°を示し、床面積は16.8㎡である。

堆積土は8層に区分した。堆積土の大半は第1層によって占められていた。第1層は第III層と対応するものである。第5～7層は貼床土である。

カマドは東壁の南東隅寄りに設けられ、燃烧部が住居外に張り出す。煙道は確認していない。燃烧部は礫層を掘り込んで構築され、燃烧部は幅40cmの方形をなす。燃烧部内には、カマド構築材の粘土ブロックが5片廃棄された状態で出土した。いずれも熱を受け赤く変色していた。そのなかで、長さ35cmの長方形に整形されていたものも1点含まれていたが、その他は壊され破片となっていた。

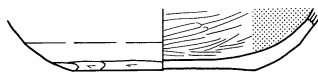
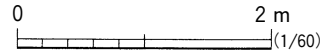


3号住居跡堆積土

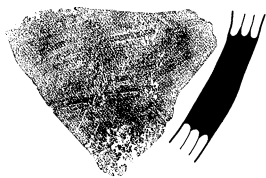
- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 褐色土 10YR4/6 (焼土を含む) | 5 褐色土 10YR4/4 |
| 2 暗褐色土 10YR3/3 (黄褐色粒を含む) | 6 灰黄褐色土 10YR4/4 |
| 3 暗褐色土 10YR3/4 (少量の炭化物を含む) | 7 にぶい黄褐色土 10YR4/3 |
| 4 黒褐色土 10YR3/2 (少量の炭化物を含む) | 8 黄褐色土 10YR5/6 (焼土・炭化物を含む) |

カマド堆積土

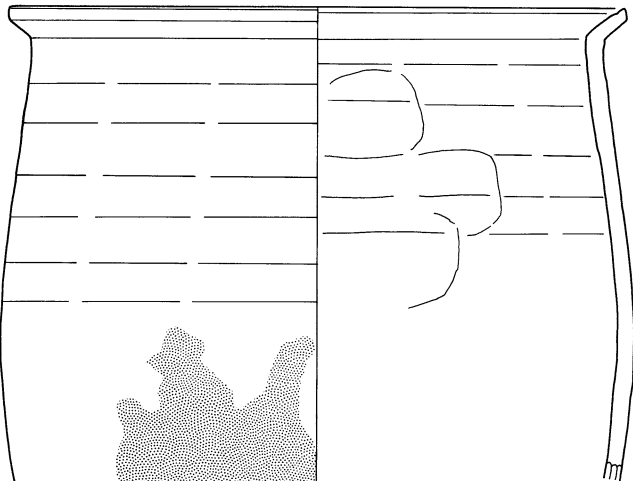
- | |
|----------------------------|
| 1 褐色土 10YR4/4 (焼土を含む) |
| 2 暗褐色土 10YR4/3 (多量の焼土粒を含む) |



1 (カマド l 1)
底径：(7.2)cm
器高：[2.4]cm



3 (l 3)



粘土

2 (カマド l 1)
口径：(24.1)cm
器高：[18.5]cm

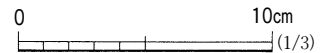


図10 3号住居跡・出土遺物

カマド堆積土は2層に区分した。そのうち第1層は、住居内堆積土第1層と対応するものである。

カマド以外で住居内施設として確認したのは、小穴が2基である。P1としたのは住居跡の南東隅にあり、平面形は楕円形である。規模は長軸が100cmである。カマド脇にあることからみて貯蔵穴を考えているが、堆積土の第1層に多量の炭化物を含んでいることから、途中でその機能を失いカマドの灰捨て場となっていたのだろう。ここからは土師器が出土している。P2としたのは南壁際にあり、平面形は楕円形である。規模は長軸45cmである。

遺物 (図10)

本住居跡から出土した遺物は土師器と須恵器である。そのなかから図10に3点図示した。1は土師器杯で口縁部を欠損する。ロクロからの切り離しは回転糸切りで、体部外面の下端にヘラケズリ調整がなされている。体部外面はロクロナデがなされるが、器面からは気泡が弾けたような凹凸が多数みられた。内面はミガキと黒色処理されているが、黒色が消えている部分がみられた。このことから再び火を受けたことが分かる。

2は土師器甕である。口縁部が屈曲し、口唇部は面取りがなされている。調整は外面がロクロナデ、内面は横方向のナデがなされている。胎土には小石や砂粒を含んでいる。胴部外面の下半には粘土を塗り込んでいる範囲がみられた。

3は須恵器甕の胴部破片である。外面はタタキ目をスリ消し、内面はアテ具痕が認められる。色調は内外面ともに灰黄色である。断面をみると灰黄色と灰色とに分かれ、煤が付着していることから、再び火を受けて変色したのであろう。

まとめ

本住居跡は調査区で検出したもののうち、最も規模が大きなものである。平面形は整ってはいなかったが、礫層を掘り込んで造られていることも考えられよう。時期はカマド内から出土した図10-1の土師器杯から9世紀後半を考えている。(玉川)

4号住居跡 S I 4

遺構 (図11, 写真13・14)

4号住居跡は調査区南側の中央部にあたるL4グリッドのLIVと礫露出範囲から検出した。重複する遺構はない。本住居跡の東側には8号住居跡が、やや離れて西側に7号住居跡が位置する。

本住居跡はすでに試掘調査において発見されたものである。平面形は北半分が欠損しているため、明確ではないが、おそらく方形であったのだろう。規模は東西が3.3m、南北は現状で1.7mとなる。壁の立ち上がりは、わずか5cmであった。床面は大半が欠損し貼床土が部分的に残り、礫が露出している状況であった。

カマドは北壁のやや東寄りに設けられていた。残っていたのは燃焼部の底面と煙道である。燃焼部には構築材の粘土ブロックが1片出土した。粘土ブロックは長さ50cmの隅丸長方形で、火を受け赤く変色していた。カマド堆積土は7層に区分した。そのうち、第5層以下がカマドの掘形堆積土

第1編 本町西B遺跡

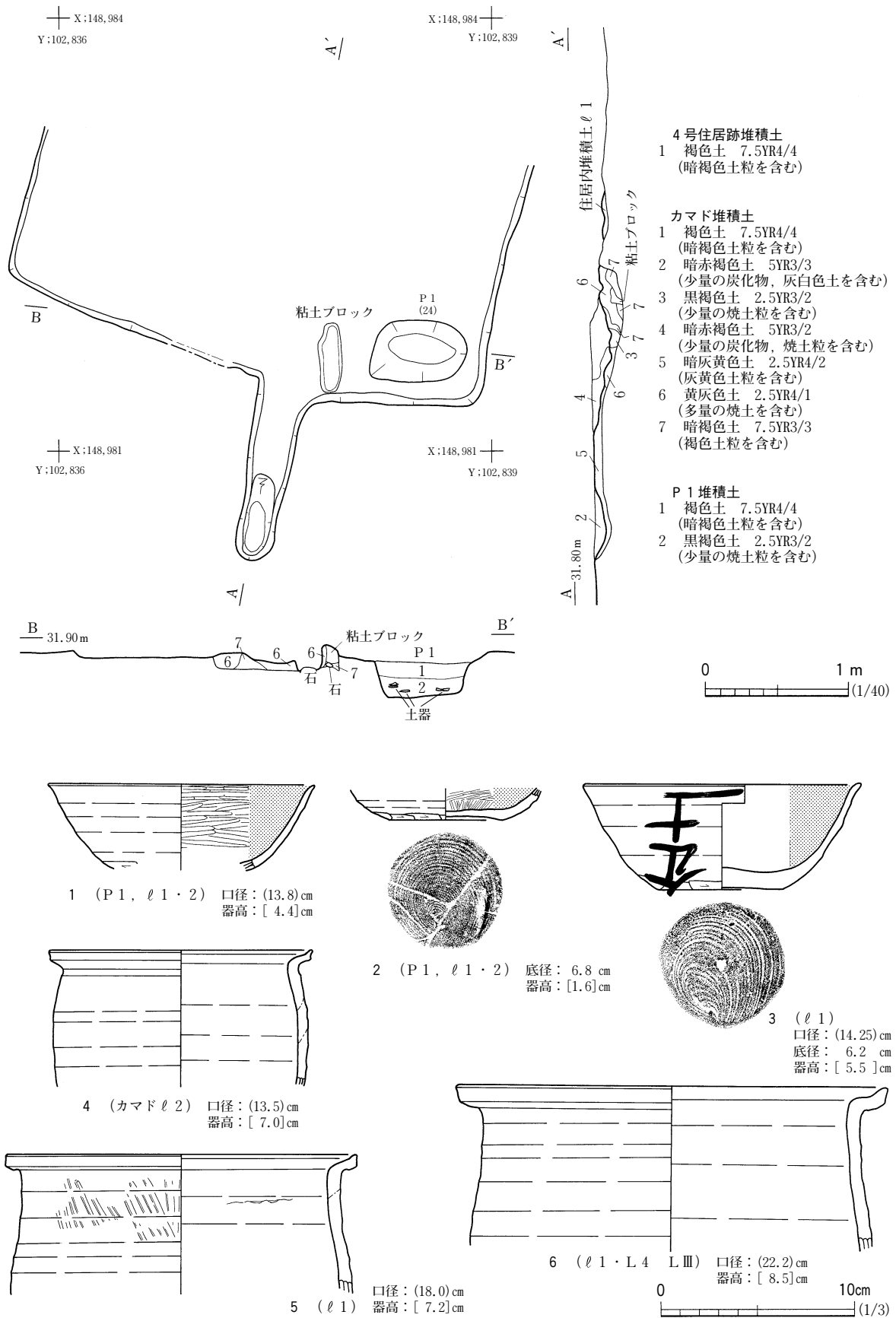


図11 4号住居跡・出土遺物

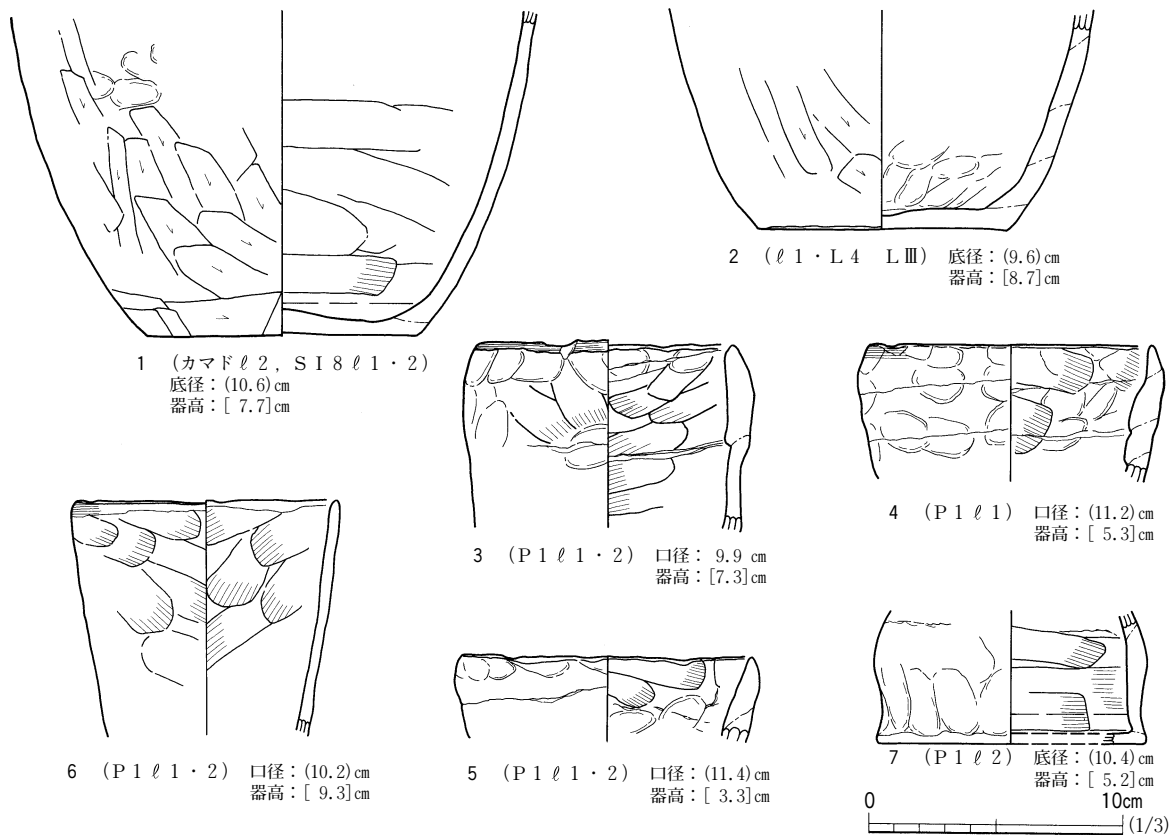


図12 4号住居跡出土遺物

である。

遺物 (図11・12, 写真33・34)

本住居跡から出土した遺物は土師器と須恵器である。そのうち13点を図11・12に図示した。図11-1～3は土師器杯である。いずれも口縁部から体部にかけて外面はロクロナデ、内面はミガキ・黒色処理されている。1は底部が欠損し、2は口縁部から体部の大半が欠損している。2・3はロクロからの切り離しが回転糸切りで、体部下端をヘラケズリによって調整されている。3の体部外面には「丈生」が墨書されていた。4～6は土師器甕である。いずれも、口縁部が屈曲し口唇部に面取りがなされ、内外面ともに口縁部から胴部にかけてロクロナデされている。4・5は小型の甕である。そのうち、5の胴部外面にはタタキ目が、ロクロナデによりスリ消されている。

図12-1・2は甕の胴部下半から底部にかけてのものである。2の胎土には砂粒や酸化鉄粒が多く含まれていた。図12-3～7は筒形土器である。いずれも外面には積み上げ痕や成形時の指頭痕がみられ、内面には丁寧なナデがみられる。3～6は口縁部で、そのうち3には口縁部にヨコナデがされていた。7は体部下端から底部にかけてのものである。

まとめ

本住居跡は調査区で検出したもののうち、中規模なものである。平面形は北半部が欠損し、床面もほとんど残っていなかった。時期はカマド堆積土中から出土した土器を参考にすると9世紀後半と考えられる。

(吉野)

5号住居跡 S I 5

遺 構 (図13, 写真15)

本遺構は調査区北側の北東端にあたる I 7グリッドの L III から検出した。本住居跡と重複する遺構は6号住居跡と15号土坑である。本住居跡からみると6号住居跡が古く, 15号土坑が新しい。

本遺構は調査区際からカマドを確認したため, 調査区を拡張して平面形を把握することとした。平面形の把握ができなかったため, 任意に土層観察用畦を十字に設定し, 土層断面で壁の立ち上がりを確認することとした。そのために周壁をすべて確認できなかった。規模は東西が3 m, 南北は

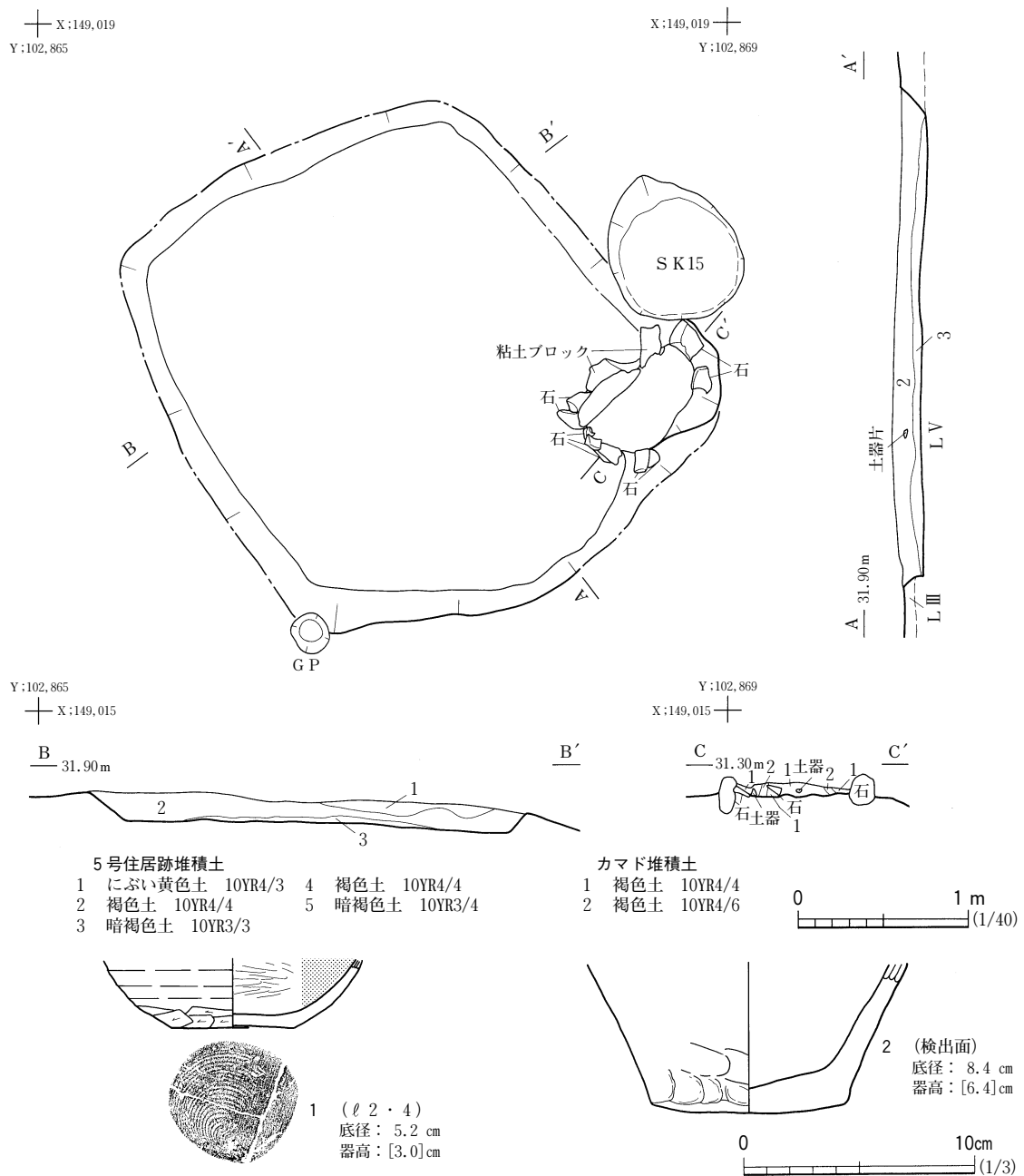


図13 5号住居跡・出土遺物

現状で2.6mで、壁高は15cmであった。床面は明確には検出できなかったが、カマドの底面とほぼ同じ面を床面と考えた。

堆積土は3層に区分した。堆積土の大半は第2層で褐色土である。この層は第Ⅲ層に対応するものであり、第3層は床面を覆う土である。

カマドは南東隅に設けられていた。残っていたのは燃焼部の底面で、煙道は確認できなかった。その周囲には粘土ブロックや礫が楕円形状に取り巻いていた。これらはすべて火を受けて変色していた。粘土ブロックは長さ45cmの長方形で、礫の大きさは10～20cmである。カマド堆積土は2層に区分した。堆積土には焼土は含まれていなかった。

遺物 (図13)

本住居跡から出土した遺物は土師器である。図13-1は土師器杯である。外面の器面は摩滅が著しい。底部内面は放射線状のミガキが、体部内面はこれを切るように横方向のミガキがなされる。2は土師器甕の底部から胴部下端のものである。胎土には多量の砂粒が含まれる。内外面ともに器面が摩滅している。1・2ともに風化の度合いが高い。

まとめ

本住居跡は調査区で検出したもののうち、小規模なものである。平面形はすべてを検出することができなかった。時期は堆積土中から出土した土器から9世紀後半を考えている。(玉川)

6号住居跡 S I 6

遺構 (図14, 写真16)

6号住居跡は調査区の東側H7・I7グリッドに位置する。標高は32m前後である。5・9号住居跡と重複し、5号住居跡よりは新しく、9号住居跡よりは古い。遺構検出面はLⅢである。

6号住居跡はその南半部を5号住居跡によって壊されている。遺存する部分から長方形と推定される。主軸の方向は真北に対して西に約25°傾いている。規模は長辺の長さが4.5m、短辺の長さが4mを測る。検出面からの深さは最大で0.25mである。

遺構内堆積土は3層に分けた。第1層は炭化物粒を少量含む褐色土で、住居跡全体を覆う自然堆積土と判断した。第2層は南側の壁際にのみ確認できた土で、周壁の崩落に起因するものであろう。第3層は焼土粒と炭化物粒を含む暗褐色砂質土で、その上面が堅く締まることから貼床土と判断した。第3層は東側に向かって厚くなる特徴があり、これは住居南半部では礫層が露出することから、それらを覆うために厚く貼土して床面を作ったのであろう。

周壁は南西隅ではやや傾斜が緩くなるが、その他はほぼ垂直気味となる。底面は平坦であるが、北側に向かってわずかに低くなる。本住居跡で確認できた施設にカマド1基と床面上にピット2基を確認した。

カマドは西壁のやや南よりの位置に設けられる。焼けて赤褐色になるカマド底面と煙道の一部を確認した。カマド底面は煙道部に向かってわずかに低くなる。カマド内の堆積土は3層に分けた。

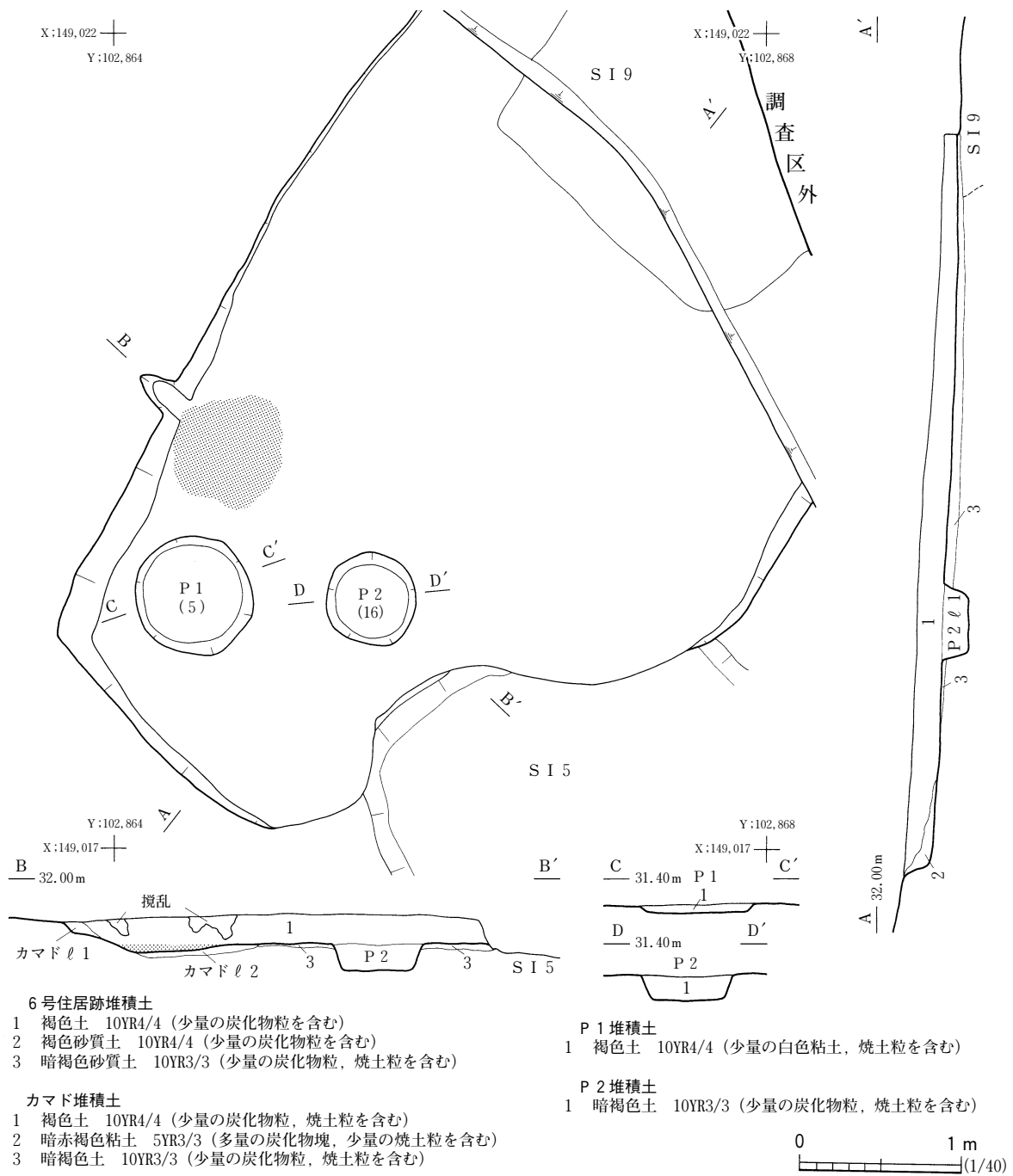


図14 6号住居跡

3層はカマド掘形に充填された土である。カマド掘形は浅いくぼみで、その平面形は不整形をなし、カマド底面よりも一回り大きい。また、カマドの袖は確認できなかった。カマド堆積土からは、住居廃絶に伴いカマドを破壊した様な焼土ブロックを多量に含む堆積土は認められない。

P1はカマドの南側で、住居跡の南西隅付近に位置している。平面形は円形をなす。その直径は70cmで、深さが5cmと浅い。貯蔵穴の可能性が高い。P2はカマドの全面に位置する。直径55cmほどの円形のピットで、床面からの深さが18cmである。これらの他に柱穴と推定される小穴は確認できなかった。

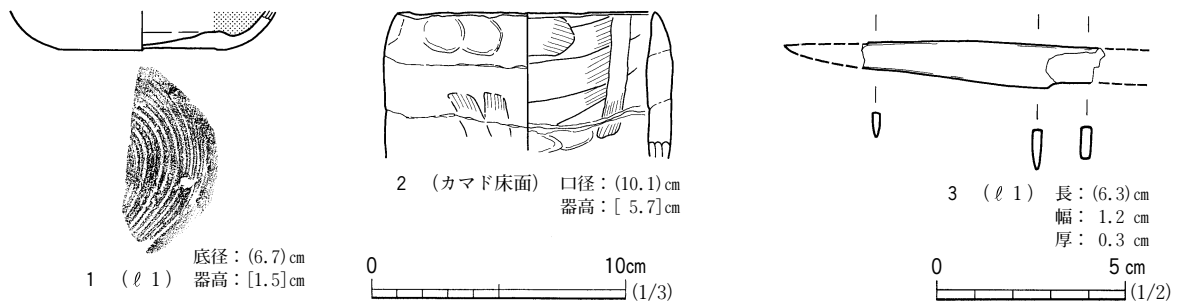


図15 6号住居跡出土遺物

遺物 (図15, 写真41)

6号住居跡からは土師器・鉄製品が出土した。そのうち、形状が分かる遺物を図15に示した。図15-1は土師器杯の底部破片である。底部の切り離しは回転糸切りである。体部下半の再調整は摩滅して不鮮明だが、手持ちケズリであろう。内面はミガキの後に黒色処理される。2は筒形土器の破片である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに内湾する。内外面とも粘土紐積み上げ痕が明瞭に残り、器面調整の指頭圧痕や指ナデが観察できる。3は鉄製刀子である。切先と柄部先端を欠損する。区は錆で不明瞭であるが、刃区から小さく屈曲して柄部となる。刀身はやや幅広で、その断面形は三角形である。柄部の断面形は長方形をなす。柄部には木質や目釘等は確認できない。

ま と め

6号住居跡は平面形が長方形をなす、比較的大型の住居跡である。住居跡内でカマドは確認できたが、袖や煙道の痕跡がわずかに遺存する程度であった。また、住居の上屋構造を示す柱穴などは確認できない。このような特徴は、本町西B遺跡の各住居跡で共通してみられ、平安時代前期頃における小集落のあり方を暗示する事象であろうか。年代については、重複関係から5号住居跡よりは古いことが分かっている。出土遺物の特徴からは9世紀後半頃と推察している。(福田)

7号住居跡 S I 7

遺構 (図16, 写真17)

調査区南西部、M2・3グリッドから検出した竪穴住居跡である。検出面はLⅢで、本住居跡と重複する遺構はない。付近には、4号住居跡や2号土坑などがあるが遺構の分布は希薄である。

遺構の平面形を検出したところで、すでに貼床土が露出していた。遺構を掘り込む段階では、気が付かなかったために、土層観察用畦を残して住居跡の平面形を失ってしまった。住居跡の規模は、土層観察用畦から測ると東西が3.3m、南北は3mであった。堆積土は土層観察用畦の北端にわずかに残っていた。第3層の直下は凹凸が著しいため、住居跡の掘形であろう。

カマドは西壁の中央部やや南寄りに設けられていた。検出時にはすでに堆積土はなく、燃焼部底面と礫1個が埋設されているのみであった。

ま と め

本住居跡は調査区で検出したもののうち、周囲に遺構が分布していないところに造られていた。

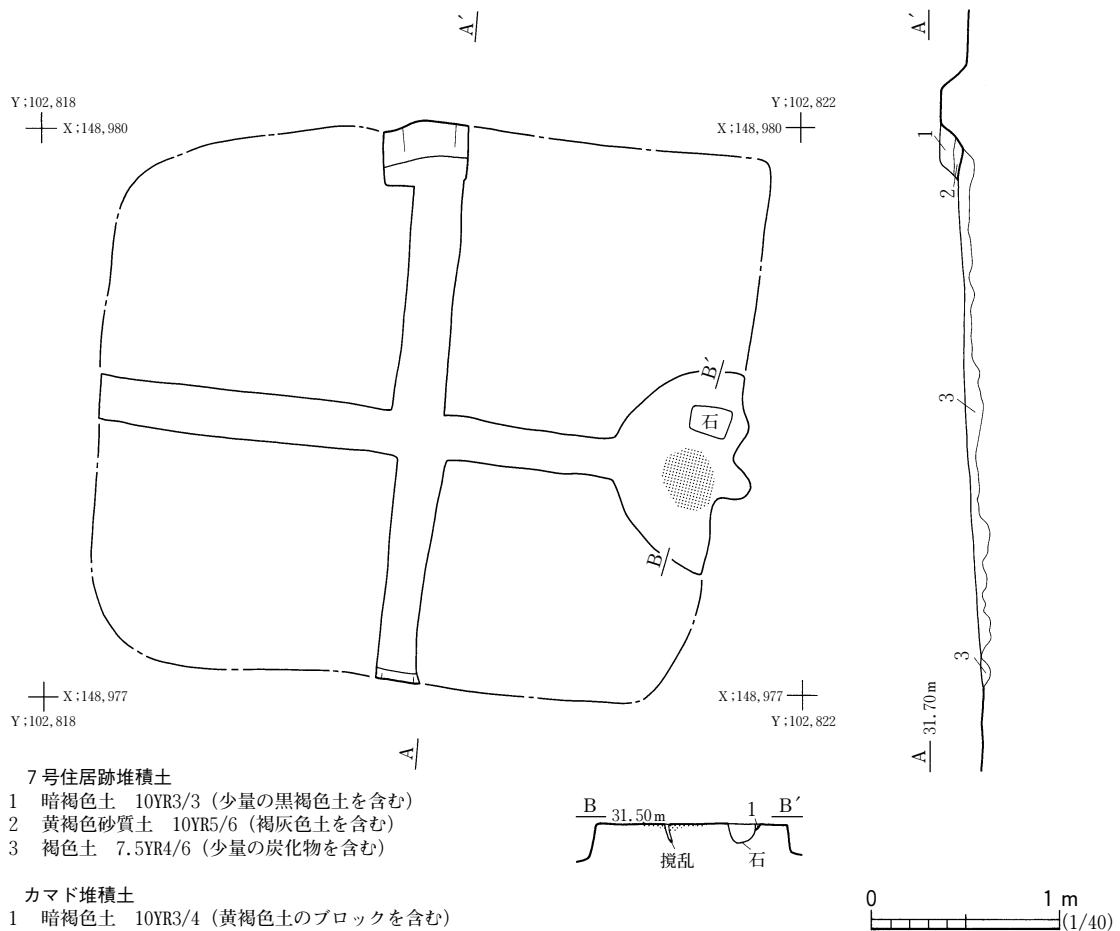


図16 7号住居跡

平面形は調査の不手際によって、すべてを検出することができなかった。時期は堆積土中から遺物が出土していないため明確ではないが、他のカマドのある住居跡から平安時代と考えている。

(吉野)

8号住居跡 S I 8

遺構 (図17~19, 写真19・20)

調査区中央部L5・M5グリッドLIVから検出した竪穴住居跡である。重複する遺構はないが、縄文晩期の遺物包含層を掘り込んで造られている。平面形は整った方形で、規模は東西が3.2m、南北は3.6mである。壁はやや外傾気味に立ち上がる。壁の高さは床面から約20cmである。主軸方向は真北に対して西に63°傾き、床面積は9.5㎡である。

堆積土は4層に区分した。堆積土の大半は第1・2層によって占められている。第1層は第Ⅲ層に、第2層は第Ⅳ層にそれぞれ対応するものである。第3層は床面を覆う炭化物を含む土で、第4層は貼床土である。

本住居跡に伴う施設はカマド・小穴7基・張り出し部などである。カマドは南東隅寄りに設けられ、燃焼部は住居外に張り出す。燃焼部と煙道とも上部構造が失われ、底面のみが残っていた。燃

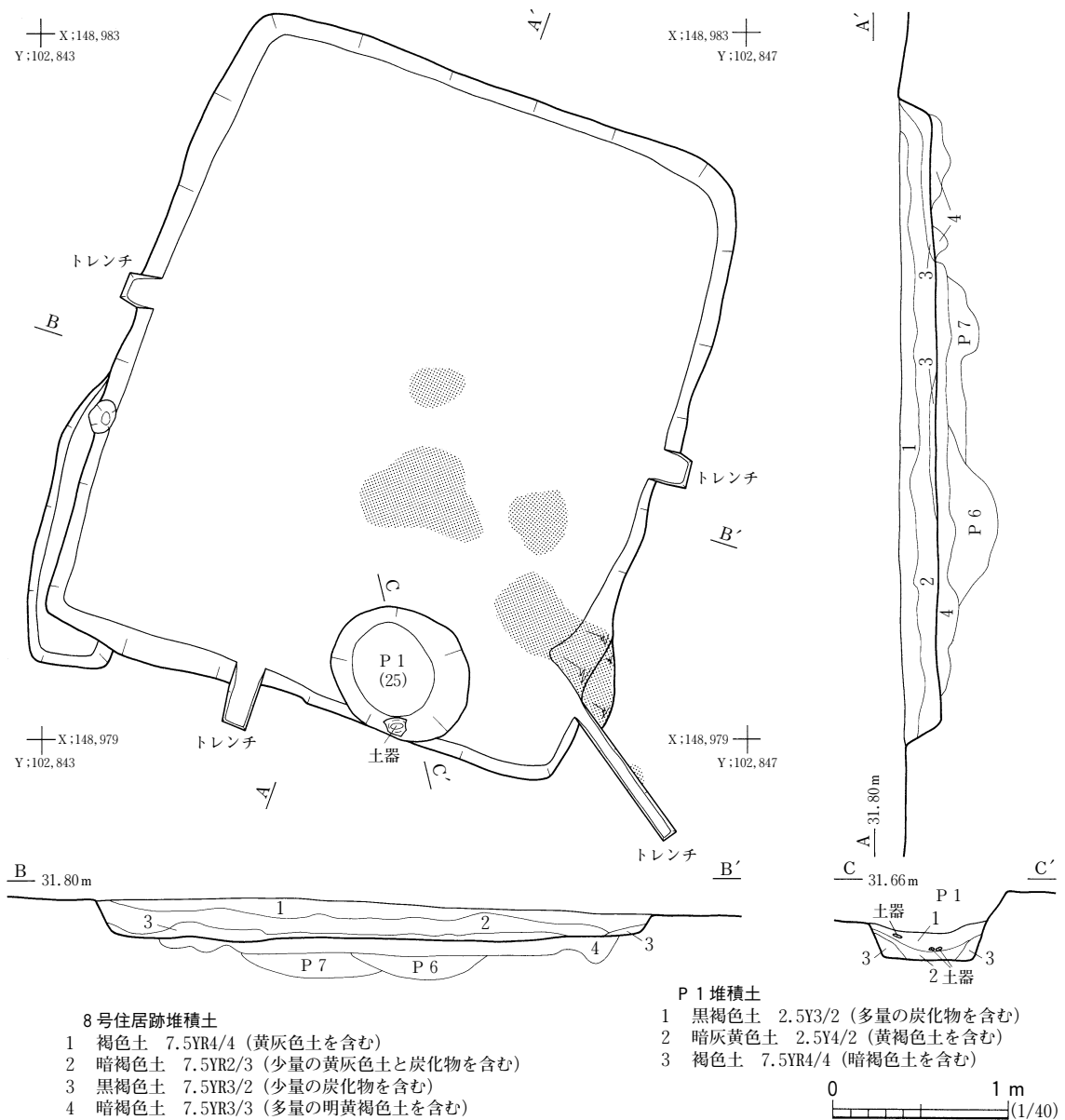


図17 8号住居跡(1)

焼部には礫が散乱していた。礫の大きさは40～65cmの比較的大きなものが多かった。これらの礫は、カマドの芯材として利用されていたのだろう。

カマド堆積土を4層に区分した。第1・3層は住居跡内堆積土の第3層やP1の第1層に対応するものであろう。第4層は煙道の堆積土である。

床面からは、P1とした小穴を1基南壁際から検出した。P1の第1層は住居跡の第3層と対応するもので、土器や多量の炭化物が含まれていた。平面形は楕円形で長軸が1.68mである。P1はカマドの近くにあることから、貯蔵穴と考えている。

床面からはカマド以外にも3箇所の焼土範囲があった。このことは、住居跡内・P1・カマド堆積土のうち、床面を覆うものが炭化物を含む黒褐色土となっているので、焼失家屋の可能性を考えている。

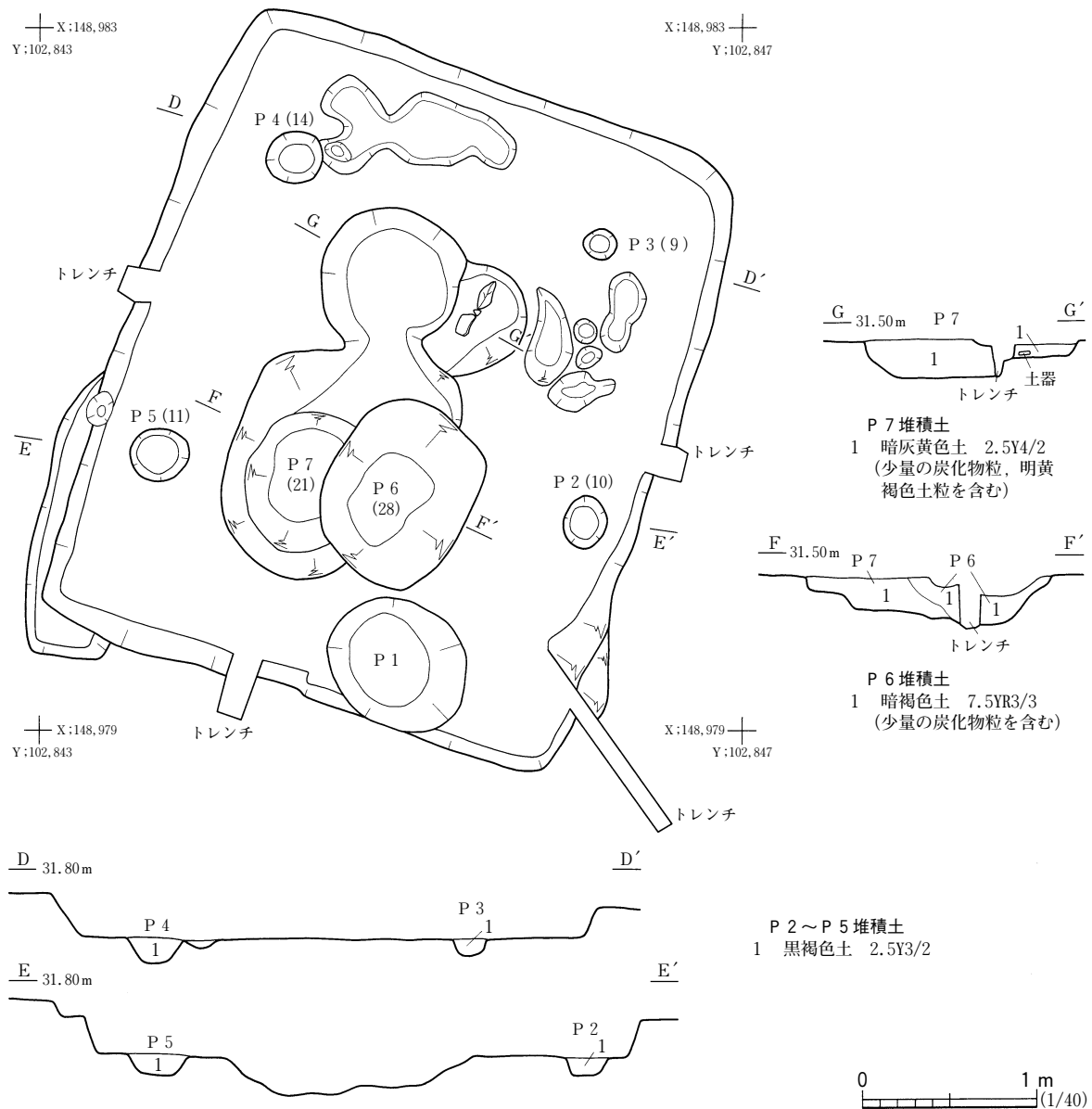


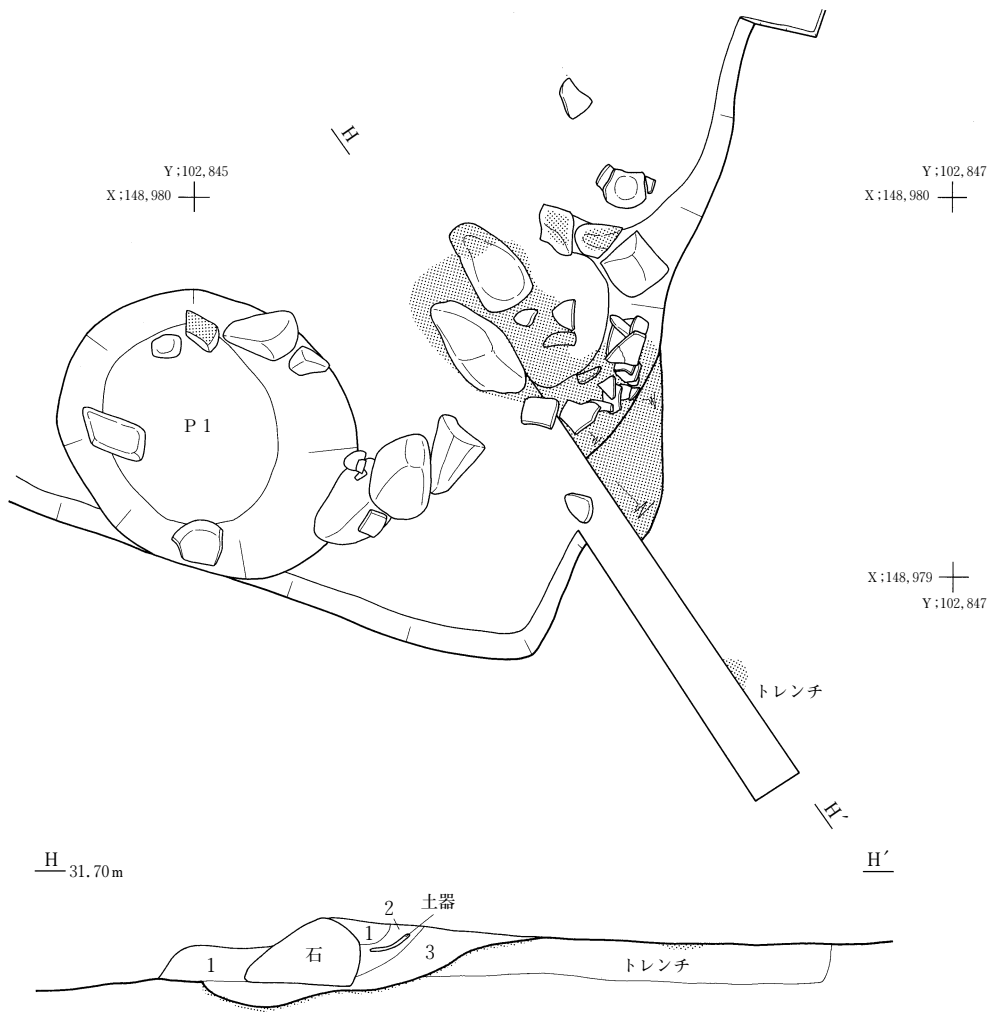
図18 8号住居跡(2)

床面を取り除いたところ、小穴を6基検出した。そのうちP2～5の位置関係から、支柱穴であろう。P3～5は相互に対応する位置にあるが、P2の位置が北東側にずれている。平面形はいずれも楕円形である。規模は18～34cmであるが、このなかでもP3のみ規模が小さい。P6・7は当初、住居跡よりも古い土坑とも考えた。しかし、土師器が出土していることから、床下土坑と考えている。

本住居跡の南西隅壁から西壁中程には、隅丸方形状の張り出し部が付設されていた。規模は南北170cm、東西40cm、深さ5cmである。張り出し部には、住居跡内堆積土と同じ土が堆積していることから、住居跡に伴う施設と判断した。機能については棚のようなものを考えている。

遺物 (図19・20, 写真33・34)

本住居跡から出土した遺物は土師器である。遺物が多く出土したのは、住居跡内堆積土第1層・



8号住居跡カマド堆積土

- 1 黒褐色土 2.5YR3/2 (炭化物を含む)
- 2 暗褐色土 7.5YR3/3 (多量の焼土塊を含む)
- 3 黒褐色土 2.5YR3/2 (焼土粒・炭化物を含む)

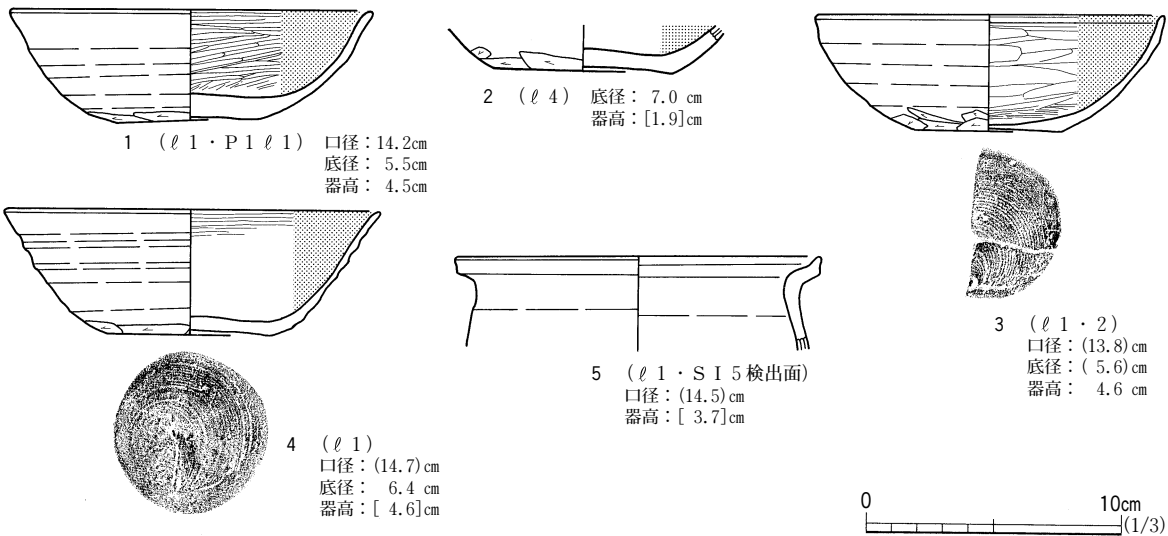
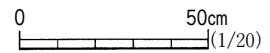


図19 8号住居跡カマド・出土遺物

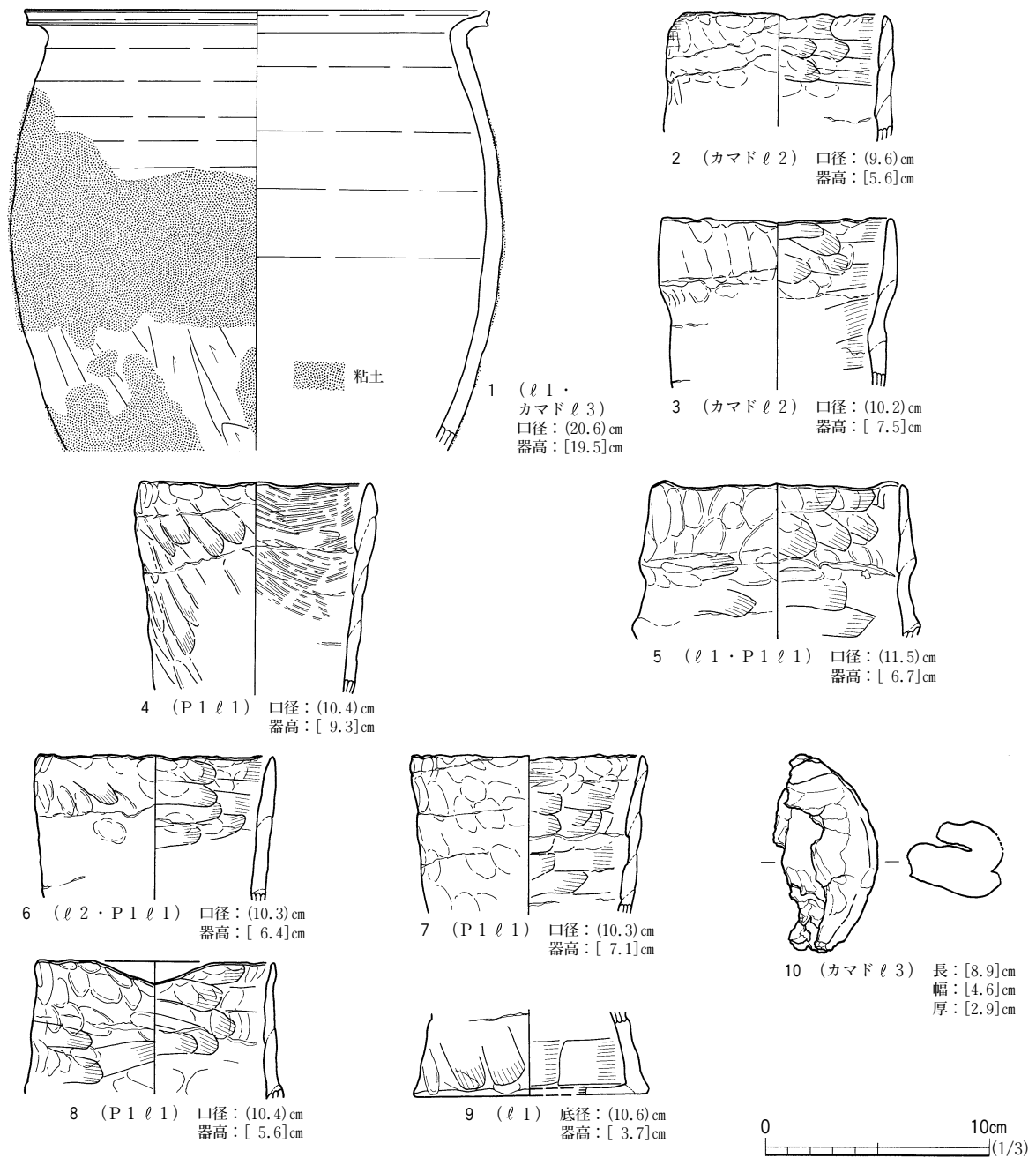


図20 8号住居跡出土遺物

P1第1層などである。P1からは土師器杯と共に筒形土器が出土していた。

図19-1～4はロクロ整形された土師器杯である。いずれも体部外面の下端にヘラケズリ調整がなされている。底部外面は1・2が全面にわたってヘラケズリ調整され、3・4が無調整で回転ヘラケズリである。1はほぼ完形品で、2・4は外面の摩滅が著しい。3・4の器厚は薄く、外面の色調は褐色であった。5は土師器の小型甕である。内外面ともにロクロナデされている。図20-1は土師器甕である。1はロクロ整形されたもので、胴部中程には粘土が付着していた。このことを積極的に評価すると、カマドに据え付けられたものと考えられる。

図20-2～9は筒形土器である。外面は成形時の指頭痕を残し、内面は基本的には横方向のナデ

がなされている。そのなかには4のように、ハケメがなされるものもある。2～8は口縁部で、9は底部にあたる。いずれも形状は筒状であるが、3・5には外面に括れがみられる。10は用途不明の土製品である。カマドの構築材の一部とも考えたが、外面を丁寧にナデているので、意図して作られた土製品と判断した。

ま と め

本住居跡は調査区で検出したもののうち、中規模なもので平面形が整っていた。ここからは、住居跡で唯一4本の柱穴を確認している。カマドは南東隅近くに付設されていたが、その上部構造はすべて失われていた。周辺には4号住居跡があるのみで、あまり住居などは造られていなかった。

時期はP 1内から出土した図19-1を参考にすると9世紀後半と考えられる。(吉野)

9号住居跡 S I 9

遺 構 (図21, 写真18)

9号住居跡は調査区の東側H 7・I 7グリッドに位置する。5・6号住居跡と重複し、そのいずれよりも古い。遺構検出面はL IIIである。

本住居は調査区際に位置するため、その全容は把握できない。遺存する部分から平面形は長方形

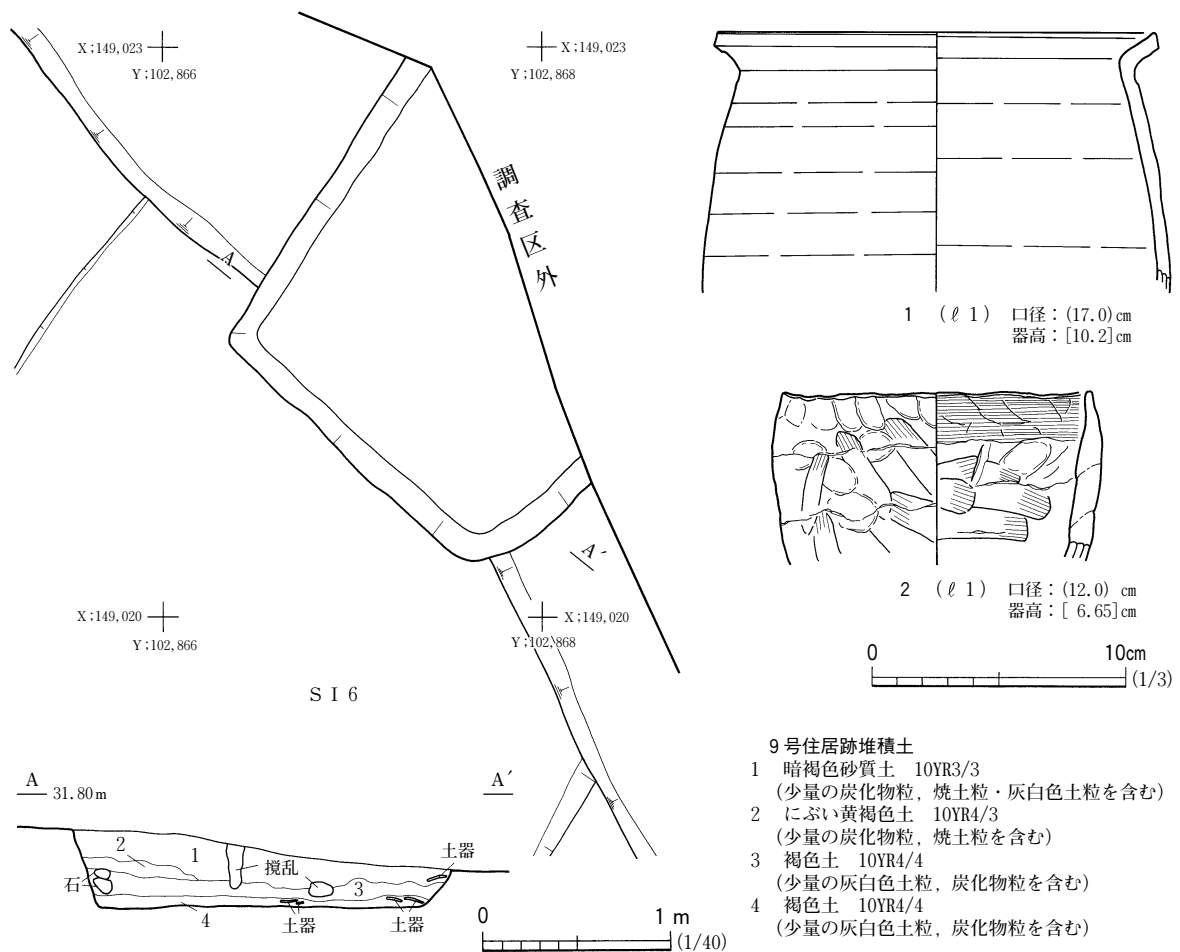


図21 9号住居跡・出土遺物

をなすと推定している。長軸の方向は真北に対して東に約30°傾いている。規模については、長軸の残存する長さは1.8mで、短軸の長さは2mを測る。検出面からの深さは最大で40cmと深い。周壁は各壁とも急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、北側に向かってわずかに傾斜している。床面ではカマドや柱穴など住居内の施設は確認できなかった。

遺構内堆積土は4層に分けた。第1層は住居跡全体を覆う暗褐色砂質土で、焼土粒や炭化物粒を含んでいる。第2層は西壁付近で部分的に確認できた土で、周壁の崩落に起因すると判断した。第3・4層は床面上を覆うように堆積する褐色土で、わずかに炭化物粒を含んでいる。第4層からは床面よりやや浮いた状態で土器片が出土している。

遺物 (図21)

9号住居跡からは縄文土器・土師器片が出土した。そのうち形状が把握できるものを図21に示した。縄文土器は小破片のため図示していないが、縄文時代晩期の粗製深鉢であろうか、外面には網目状捺糸文が施される。図21-1は土師器甕の破片で、ロクロを用いて成形される。胴部中央部に最大径を持ち、頸部にかけてやや丸みを帯びてくびれる。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はロクロの回転を利用して丁寧につまみ上げられて整形される。2は筒形土器の破片で、口縁部がわずかに内湾する。内外面とも粘土紐積み上げ痕を残し、器面調整の指頭圧痕や指ナデが明瞭に観察できる。口縁部の内面にはヨコナデが見られ、口縁部を整えた痕跡であろう。

まとめ

本住居跡は調査区際に所在することから、その全容については知り得なかった。また周辺の竪穴住居跡と比較しても、本住居の平面形が長方形をなし、住居の規模がかなり小さい点、住居内にカマドなどの施設がないこと、その特徴に明らかな違いが見られる。年代については、出土遺物が少なく詳細は明らかではないが、重複する5・6号住居跡よりは古いことが分かっている。おおむね9世紀後半代に属する可能性が高い。(福田)

第3節 掘立柱建物跡

調査区から検出した建物跡は4棟である。いずれも調査区北東部から検出したものである。この他にも、建物跡として現地で構成できなかった柱穴は112基となっている。

各建物跡の時期は、いずれも出土遺物がなく判然としない。1号建物跡は1号住居跡との重複関係から、古代の遺構である可能性は薄い。調査区から出土している遺物で、下限となる時期を参考にすると近世から近代の所産である可能性が高い。

1号建物跡 SB1

遺構 (図22, 写真21・22)

本建物跡は調査区北東部のH6グリッドに位置する。検出層位は建物跡の東半分がLⅢと礫露出

範囲であるが、西半分は1号住居跡堆積土である。本建物跡は検出面が1号住居跡堆積土であることから、住居跡が埋まった後に造られていた。

建物跡は1×1間の柱間であるが、北東隅の柱穴が欠損している。いずれの柱穴からも柱痕はみられなかった。建物跡の規模はP1とP2、P2とP3の柱穴の中心で測ると東西3.5mが、南北は2.35mであった。柱穴の平面形は、円形を基調としている。規模は径が25～30cmである。

ま と め

本建物跡は調査区で検出した建物跡のなかで最も小規模であることから、小屋のような機能が想定できる。 (吉野)

2号建物跡 SB2

遺 構 (図22, 写真23・24)

遺構は、調査区北東部のH5グリッドを中心とする位置にある。検出層位はLⅢである。付近には、縄文時代晩期の1・2号焼土遺構や2号埋甕などがある。他の建物跡と比べて柱穴の重複が少ないことから、建て替えされることはなかったことを考えている。

建物跡は東西2間もしくは1間、南北が4間である。P1とP2、P4とP8の間に柱穴がないことから、側柱の掘立柱建物跡であろう。P12は西側柱列からはやや東にずれているが、本建物跡を構成する柱穴としては確実である。柱痕はP3・P7・P12から検出した。その径は8～12cmである。建物跡の規模は、P9とP11、P1とP11で東西が3.9m、南北は8.2mである。

建物跡の規格をみるため、柱間距離を尺貫法でみる。まず、西側柱列のP1～11を南側からみてゆくと、およそ5尺6寸・10尺・4尺2寸・7尺3寸という配置となっている。次に、東側柱列を南側からみてみると、およそ6尺・10尺・5尺・8尺3寸となっていた。各柱列ともに南側から2番目と3番目の柱間距離が、10尺を示す共通点がみられた。他の柱間距離はさまざま、特に規格性はみられなかった。

柱穴は円形を基調とするもので、径は20～30cmである。深さは15～70cmでばらつきが多い。

ま と め

本建物跡は調査区で検出されたなかで、最も規模が大きなものである。他の柱穴との重複が少ないことから、建て替えはなされなかったのだろう。 (吉野)

3号建物跡 SB3

遺 構 (図23, 写真25・26)

本遺構は調査区北東部J7グリッド礫露出範囲で検出した。東西4間、南北2間の掘立柱建物跡である。重複するのは12号土坑で、新旧関係は本建物跡の方が新しい。

建物跡の規模は一辺の長さが、東西側柱2.85m、南北側柱3.9mである。北東隅の柱穴は12号土坑の堆積土から判別することができなかった。柱間の間隔は、南側柱列は西から0.75+1+1.4+0.75m

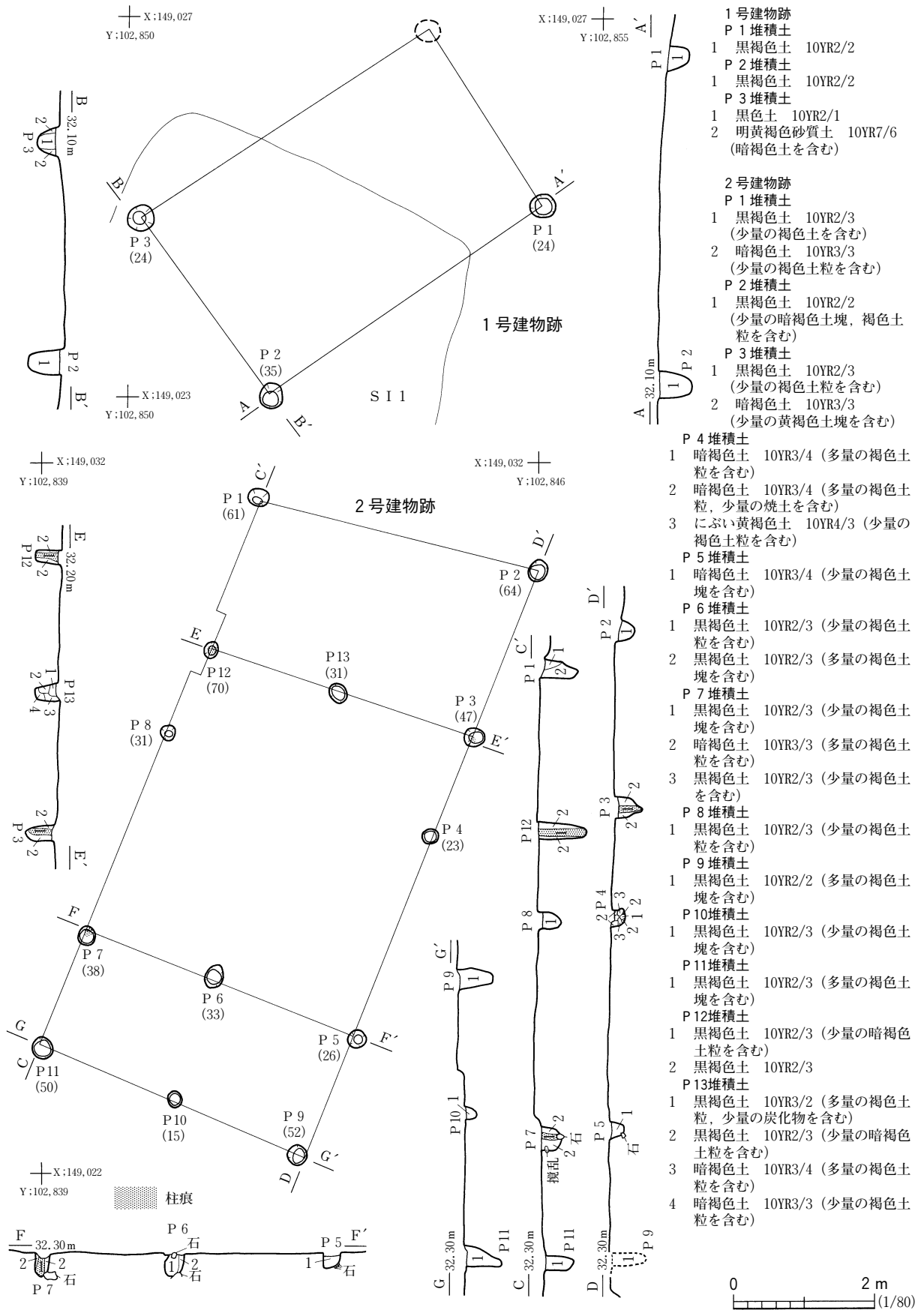


図22 1・2号建物跡

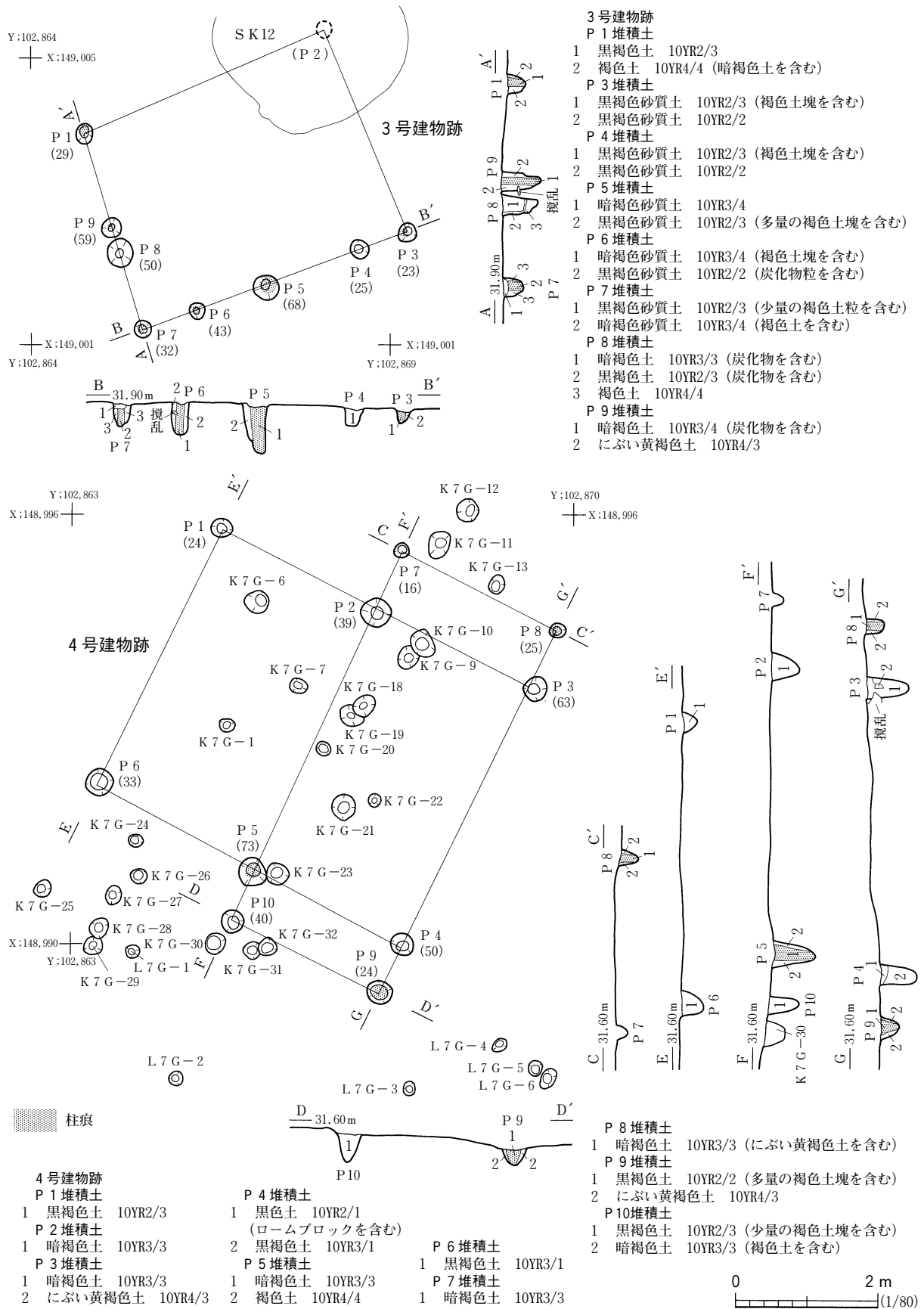


図23 3・4号建物跡

で、西側柱列は南から1.5+1.35mである。西側柱列のP 8・P 9については配置からみて、同時期とするよりも柱の据え替えが行われたものとするのが妥当である。

柱穴の平面形は円形である。底面は平坦なもの(P 1・3・6)と段があるもの(P 5・7~9)の2つに分かれる。柱痕のある柱穴の掘形内堆積土は、暗褐色土が多く堅く締まっていた。柱痕は黒褐色土が多く、炭化物粒を多く含んでいた。この炭化物粒は、柱の腐食を防ぐために外側を焼いたものであろう。

ま と め

本建物跡は、建物跡のなかで中規模である。柱穴は深く、柱痕も明瞭なものが多い。(玉川)

4号建物跡 SB4

遺 構 (図23, 写真27・28)

本遺構は、調査区北東部のK 5グリッドで検出された、東西2間、南北3間の掘立柱建物跡である。検出面はLⅢと礫露出範囲である。一辺の長さは、P 1からP 3が4.8m、P 8からP 9が5.6mを測る。東側柱列と中央南北柱列は、南北それぞれに庇が配置されている。

柱間の間隔は、南側柱列の東から2.3+2.5mである。東側柱列の北から庇を含めると0.85+4+0.7mである。柱痕はP 5・8・9から検出した。掘形内堆積土は褐色土で、堅く締まっていた。深さはP 5が65cmである他は、20~35cm程度である。深さが浅い柱穴は礫露出範囲にあることに起因しているのかもしれない。

ま と め

本建物跡は、南北の柱列に庇が付いていることから、他の建物跡と比べて柱穴の配置が異なっていた。また、他の建物跡から比較的離れたところに位置している。(玉川)

第4節 土 坑

調査区から検出した土坑は21基である。その分布状況は、竪穴住居跡の分布とほぼ同じである。このことから、住居跡との有機的な関係をうかがうことができる。4・6~8・10・13・14・17号土坑からは出土遺物があり、住居跡と同時期であることを考えている。

1号土坑 SK1

遺 構 (図24, 写真29)

調査区北東隅のH 7・I 7グリッドに位置する土坑である。6号住居跡が埋まった後に、本土坑が作られている。よって、検出面は6号住居跡の堆積土上面である。本土坑の周辺は調査区のなかでも遺構が集中しているところで、5号土坑が北側に、5号住居跡が南側に位置している。平面形は楕円形で、規模は長軸が100cm、深さは24cmである。周壁は南壁が比較的緩やかになっている。堆

積土は2層に区分した。

調査区で検出した土坑のなかでも、小規模な部類に入る。堆積土の第1層が耕作土と類似するので、水田が営まれる以前に掘られたものと考えている。時期は近世・近代であろう。(吉野)

2号土坑 SK2

遺 構 (図24, 写真29)

本遺構は調査区南西部のN4グリッドLⅢから検出した。周辺にはあまり遺構がなく、南東側に18号土坑が位置するのみである。平面形は隅丸長方形であるが、本来は整った長方形であったと考えている。本来の形状を保っていないのは、上端の崩れによるものであろう。規模は遺存している部分を計測したところ、長辺は140cm、短辺が70cmであった。検出面からの深さは70cmである。

堆積土は8層に区分したが、堆積土の大半は暗灰黄色土に含まれる炭化物の多少で区分した。時期は出土遺物がなく明確ではない。(吉野)

3号土坑 SK3

遺 構 (図24, 写真29)

本土坑は調査区北東部のG5グリッドLⅢから検出した。周囲には4号土坑や2号住居跡などが位置する。平面形は隅丸方形である。規模は長軸が93cm、短軸が70cm、検出面からの深さは15cmである。周壁は緩やかに外傾していて、底面は窪んでいる。堆積土は2層に区分した。堆積土にはいずれも炭化物を含んでいる。時期は出土遺物がないため、特定できなかった。(吉野)

4号土坑 SK4

遺 構 (図24, 写真29)

調査区北東隅のG6グリッドLⅢから検出した遺構である。検出した当初は焼土と土器の破片が散乱していたので、竪穴住居跡と考えた。しかし、住居跡とするような平面形を検出できなかったため、土坑と判断した。現状で確認した平面形は隅丸長方形である。規模は現状で長軸が96cm、短軸が68cmである。遺構掘り込み面から検出面が下がっていることから、深さは5cmほどであった。堆積土は4層に区分した。第1～3層までには焼土粒や炭化物が含まれていたが、焼土面を覆う第4層には含まれていなかった。本土坑は底面から西壁にかけての部分が焼土化していた。特に、底面の焼土化が著しく4cmの厚さにまで及んでいた。

遺 物 (図27)

本遺構からの出土遺物はすべて土師器である。出土遺物の大半は図27-2の接合できなかった破片が占めている。図27-1は杯で外面に口縁部と体部の境に緩やかな稜がある。4は甕でロク口整形によるものである。底面に伏せられた状態で出土した。内外面ともに器面に弾けたような剥離が多いので、土坑内で火を焚いた時には甕も置かれていたのであろう。

本遺構は検出当初には住居跡のカマドと考えたが、他に追認するような所見が得られなかったため土坑とした。時期は出土した遺物から、9世紀代と考えている。(吉野)

5号土坑 SK5

遺構 (図24, 写真29)

H7グリッドに検出された土坑であり、南東部に6号住居跡がある。検出面はLⅢである。平面形は隅丸長方形であり、上端で長軸が65cm、短軸が45cm、深さは検出面より約20cmである。底面は東に傾き、壁面は急な立ち上がりで、垂直に近い。堆積土は検出面と同じ暗褐色土であり、黄褐色土を含んでいる。時期・機能は不明である。(玉川)

6号土坑 SK6

遺構 (図24, 写真29)

調査区北東部のJ6グリッドLⅢから検出された土坑であり、西側に11・19号土坑がある。平面形は円形で上端径が120cm、深さは検出面から20cmを測った。壁面はほぼ垂直に近い。堆積土は4層からなるが、礫と堆積土が混入している状態から人為堆積土である。

本遺構から出土した礫は、赤く焼けた花崗岩で折り重なるように出土した。そのうち大きなものは長さ40cmである。礫の下からは焼けた粘土ブロックが少量ながら出土した。これらのものは、住居跡カマドの構築材と類似していることから、住居を廃絶する際に廃棄したのと考えている。

遺物 (図27, 写真34)

本土坑からの出土遺物の大半は土師器杯・甕や筒形土器である。その状況は細かい破片で、風化の度合いが著しいものが多い。さらに、様々な個体が混ざり接合できたものは少ない。

図27-5は縄文時代晩期の壺形土器、図27-2は杯で赤焼土器と呼ばれるものに類する。図27-6は土師器の小型甕で、器面のほとんどが剥離していた。(玉川)

7号土坑 SK7

遺構 (図25, 写真29)

調査区南東部のL5グリッドLⅣから検出した土坑である。西側には近接して17号土坑が位置している。本土坑は表土剥ぎの際に発見したもので、その時に遺構の東側を欠損してしまった。平面形は隅丸方形である。一辺の長さは現状で118cmとなり、検出面からの深さは18cmである。底面は平坦であるが、北東部には小穴が掘り込まれていた。

堆積土は5層に区分した。堆積状況を見ると、第4層の炭化物層が形成された後に人為的に埋め戻されたものである。堆積土からは礫・土器などが出土している。土器は土師器甕や筒形土器の破片で、風化の度合いが著しく丸味を帯びていた。主に第2層から出土したものが多い。

本土坑の堆積土には炭化物層がみられるが、壁面や底面からは焼土面が認められない。このこと

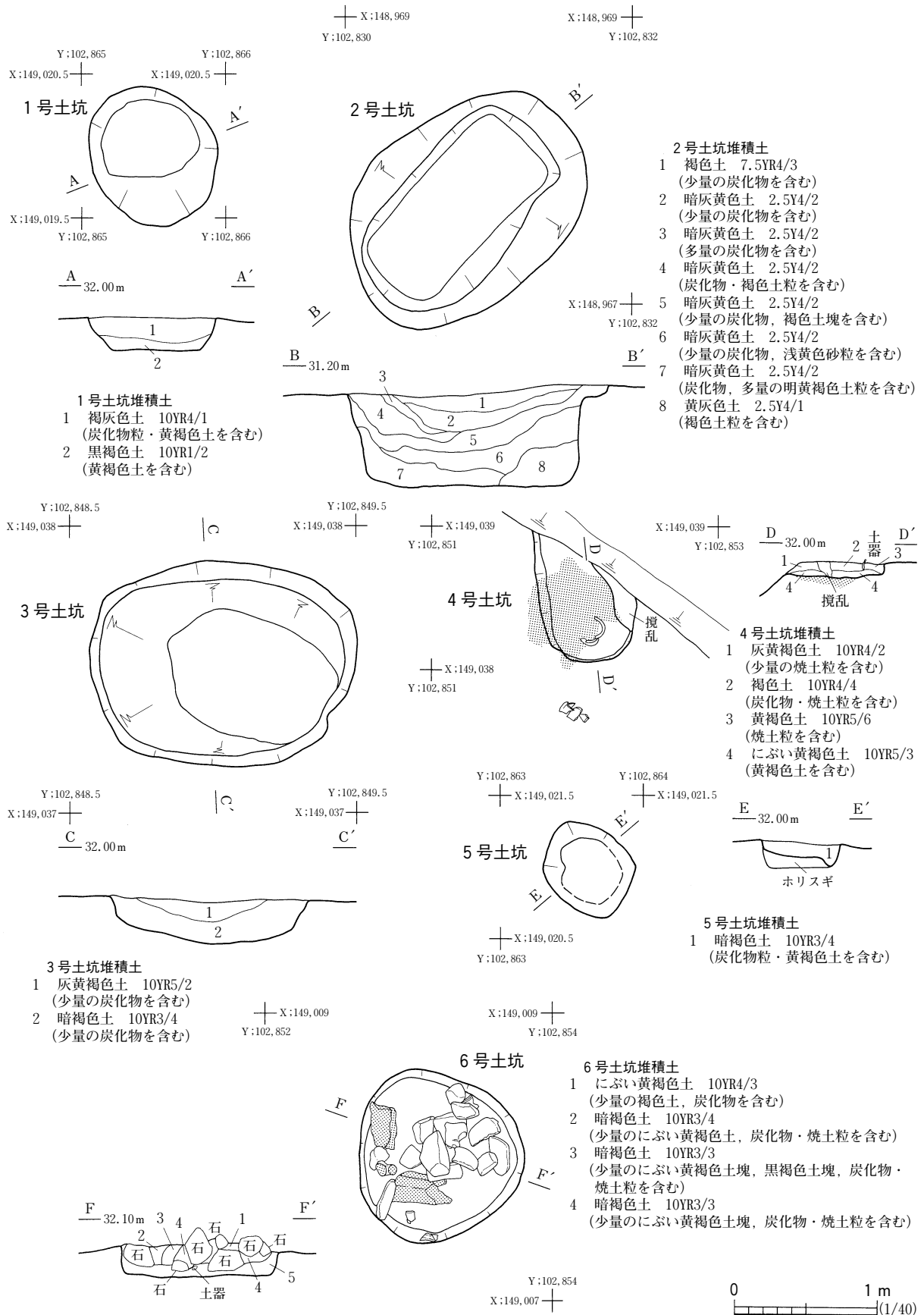


図24 1～6号土坑

から、土坑のなかで焼成が行われたとは考え難い。よって、炭化物・礫・土器を廃棄した場所と考えている。出土遺物から時期は住居跡の主な時期である9世紀後半と考えている。(吉野)

8号土坑 SK8

遺構 (図25, 写真30)

調査区北東部I6グリッドのLⅢから検出された土坑である。東南には3号住居跡・9号土坑がある。遺構内堆積土の第1・2層に褐色土がブロック状に含まれることから、人為的に堆積したものと考えられる。平面形は南西部が膨らんだ不整楕円形である。規模は長軸が210cm, 短軸で130cm, 深さは30cmを測る。壁面は緩やかで、底面は東側に向かって緩やかな傾斜がある。本土坑の北東部から、礫が2点出土した。第1層から出土したので、埋め戻した後に礫を置いたものと考えられる。このような礫の出土状況は9号土坑と共通している。

本土坑からの出土遺物は、土師器杯・甕と筒形土器の破片である。時期は出土遺物を考慮すると平安時代と考えている。(玉川)

9号土坑 SK9

遺構 (図25, 写真30)

調査区北東部I6グリッドから検出された土坑である。検出面はLⅢである。重複するのは3号住居跡である。検出面や堆積土の観察により、3号住居跡が廃絶された後に掘り込まれている。堆積土は6層に区分した。堆積土がブロック状に堆積していることから、埋め戻されたものと考えられる。平面形は隅丸長方形である。規模は上端の長辺が215cm, 短辺100cm, 深さは35cmである。壁面はほぼ直角に近い形で立ち上がり、底面は平坦である。礫が2点、第6層から出土した。

本遺構の形状や堆積土の状況と礫の出土状況から、墓坑である可能性を考えている。礫についても、遺体の上に置かれた呪術的な要素が強いものであったと考えられる。(玉川)

10号土坑 SK10

遺構 (図25, 写真30)

調査区北東部J6・7グリッドに位置する遺構である。検出面はLⅢである。平面形は不整楕円形であり、南西にかけて幅が広がっている。規模は長軸260cm, 短軸80cmである。検出面からの深さは15cmである。底面の中央やや北東部が焼土化していた。堆積土は5層に区分したが、いずれも締まりがなく、また焼土ブロックを多く含むことから人為堆積であると考えられる。

遺物 (図27, 写真34)

本土坑から出土した土師器杯を図27-3に示した。器面はロクロナデにより良く整えられている。ロクロからの切り離しは回転糸切りで、調整などはなされていない。

本土坑の底面からは焼面を確認しているが、その機能は明確ではない。(玉川)

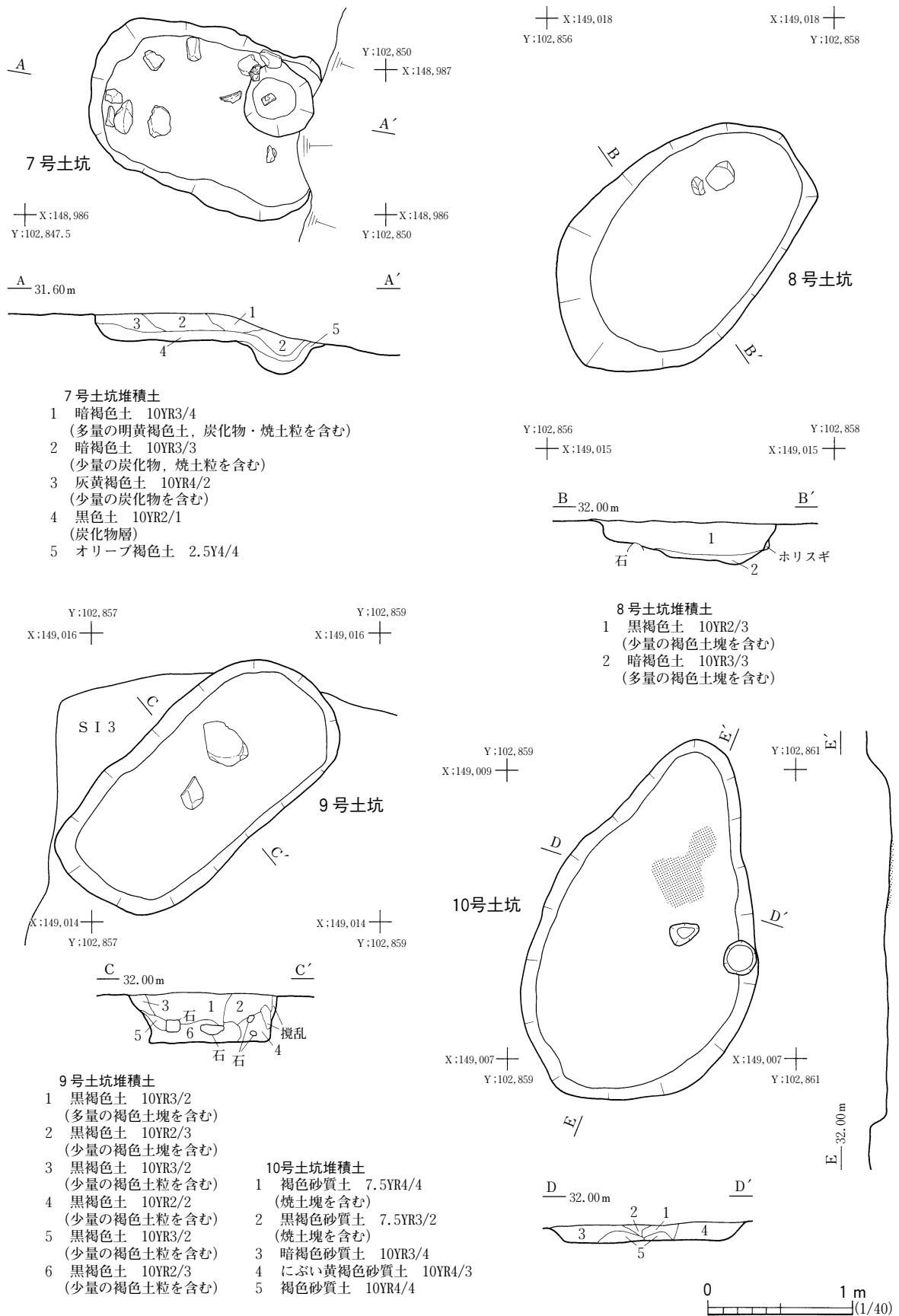


図25 7～10号土坑

11号土坑 SK11

遺 構 (図26, 写真30)

調査区北東部J 6グリッドに位置し、6・19号土坑に挟まれている。確認面はLⅢである。平面形は円形であり、上端で径120cm、下端で径90cmを測る。深さは40cmで、壁面は45°である。底辺は平面であり、段差はない。堆積土は1層であり、褐色土の中に褐灰色土粒・暗褐色土粒を多く含んでいる。

(玉川)

12号土坑 SK12

遺 構 (図26, 写真30)

調査区北東部J 7グリッドに位置し、3号建物跡の北東端の一部が重複している。堆積土の観察から、本遺構の埋没後に新たに3号建物跡が建てられたと考えられる。確認面はLⅢである。平面形は円形である。規模は上端で径280cmを測る。深さは20cmである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はおおよそ平坦であるが、やや南側に傾斜している。堆積土は2層であり、暗褐色土のなかに黄褐色土がブロック状に含まれる。

本土坑は調査区で検出した土坑のなかで、最も規模が大きなものである。時期、機能ともに不詳である。

(玉川)

13号土坑 SK13

遺 構 (図26, 写真30)

調査区北東部L 8グリッドに検出された土坑である。確認面はLⅢであり、平面形は南東部に広がる不整楕円形である。上端は長径で95cm、短径で80cmである。深さは7cmで、検出する際に削りされたものと考えられる。底面は平坦である。堆積土は1層で、炭化物粒を多く含んでおり、大きさ25cmの花崗岩が2個入っていた。

土師器甕の破片が出土していることから、時期は平安時代を考えている。

(玉川)

14号土坑 SK14

遺 構 (図26, 写真30)

調査区中央部I 5・J 5グリッドで検出された土坑で、確認面はLⅢである。周辺には遺構がない。平面形は楕円形で、規模は長軸130cm、短軸65cm、深さは20cmである。南半部は掘り過ぎにより欠損している。壁面は緩やかに立ち上がり、北側が深い。堆積土は1層のみである。

出土遺物に土師器の破片が含まれていたことから、時期は平安時代を考えている。

(玉川)

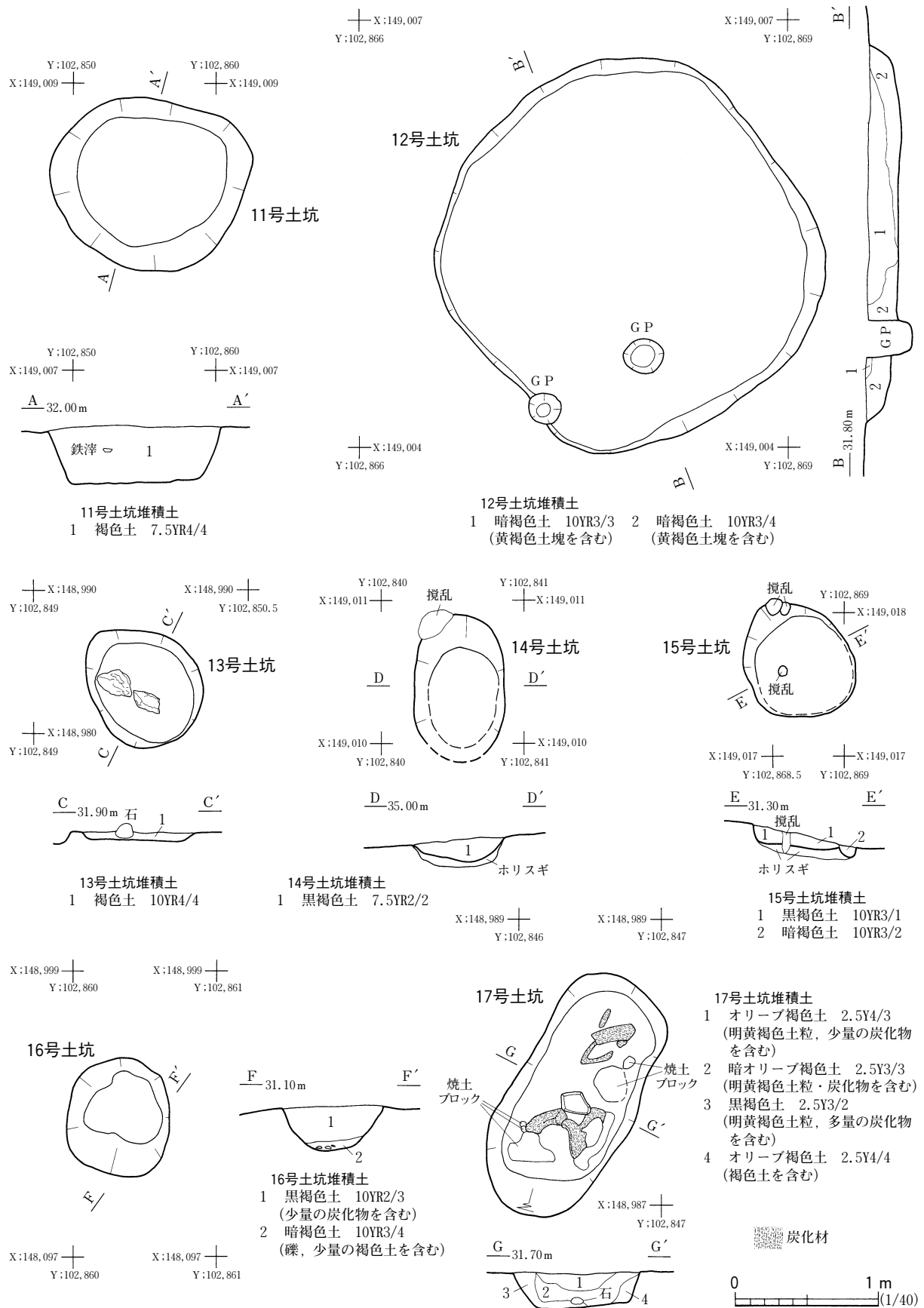


図26 11~17号土坑

15号土坑 SK15

遺構 (図26, 写真31)

調査区北東部 I 7 グリッド L III で検出された土坑である。重複する遺構は 5 号住居跡である。堆積土から、5 号住居跡の廃絶後に掘り込まれたと考えられる。平面形は円形である。規模は上端で径70cm、深さは15cmである。掘り過ぎにより、底面の形は確認できなかった。立ち上がりは比較的急である。堆積土は2層である。

出土遺物がなく時期・機能ともに明確ではない。(玉川)

16号土坑 SK16

遺構 (図26, 写真31)

K 7 グリッドに検出された土坑で、確認面は礫露出範囲である。平面形はほぼ円形に近く、上端で径80cmである。壁面は緩やかに立ち上がっており、底面は礫層を掘り込んでいるためか、不整形であった。堆積土は2層に区分し、いずれも炭化物粒を含んでいた。

出土遺物がなく時期や機能については不詳である。(玉川)

17号土坑 SK17

遺構 (図26, 写真31)

調査区南東部 L 5 グリッドの L IV から検出した土坑である。南東側に 8 号住居跡・7 号土坑が位置する。平面形は隅丸長方形であるが、東側がやや崩れた形状となっている。長軸は180cm、短軸が86cm、深さ24cmである。周壁は南側の立ち上がりが緩やかである他は、急傾斜で立ち上がる。堆積土は4層に区分した。堆積土の下部に炭化物を多く含む層があるので人為堆積と考えている。第3層の上面からは礫・炭化材・焼土ブロックなどが出土している。炭化材は取り上げると崩れてしまうほどで、炭化材の下に焼土ブロックが出土した。出土遺物は第2層からロクロ整形された土師器甕の破片1点のみであった。

本土坑には焼土面が確認できなかったことから、礫・炭化材・焼土ブロックなどを投棄されたものと考えている。本土坑の時期は平安時代と考えている。(吉野)

18号土坑 SK18

遺構 (図27, 写真31)

調査区南東部の O 4 グリッド L III から検出した土坑である。本遺構は調査区のなかで、最も南端で検出した遺構である。周辺にある遺構は、2号土坑が北側約10mの地点にある。平面形は不整形である。規模は長軸が200cm、短軸が150cm、検出面からの深さは90cmである。

堆積土は11層に区分した。そのうち黒褐色土は旧表土の流入土であろう。その上層に L III に類似

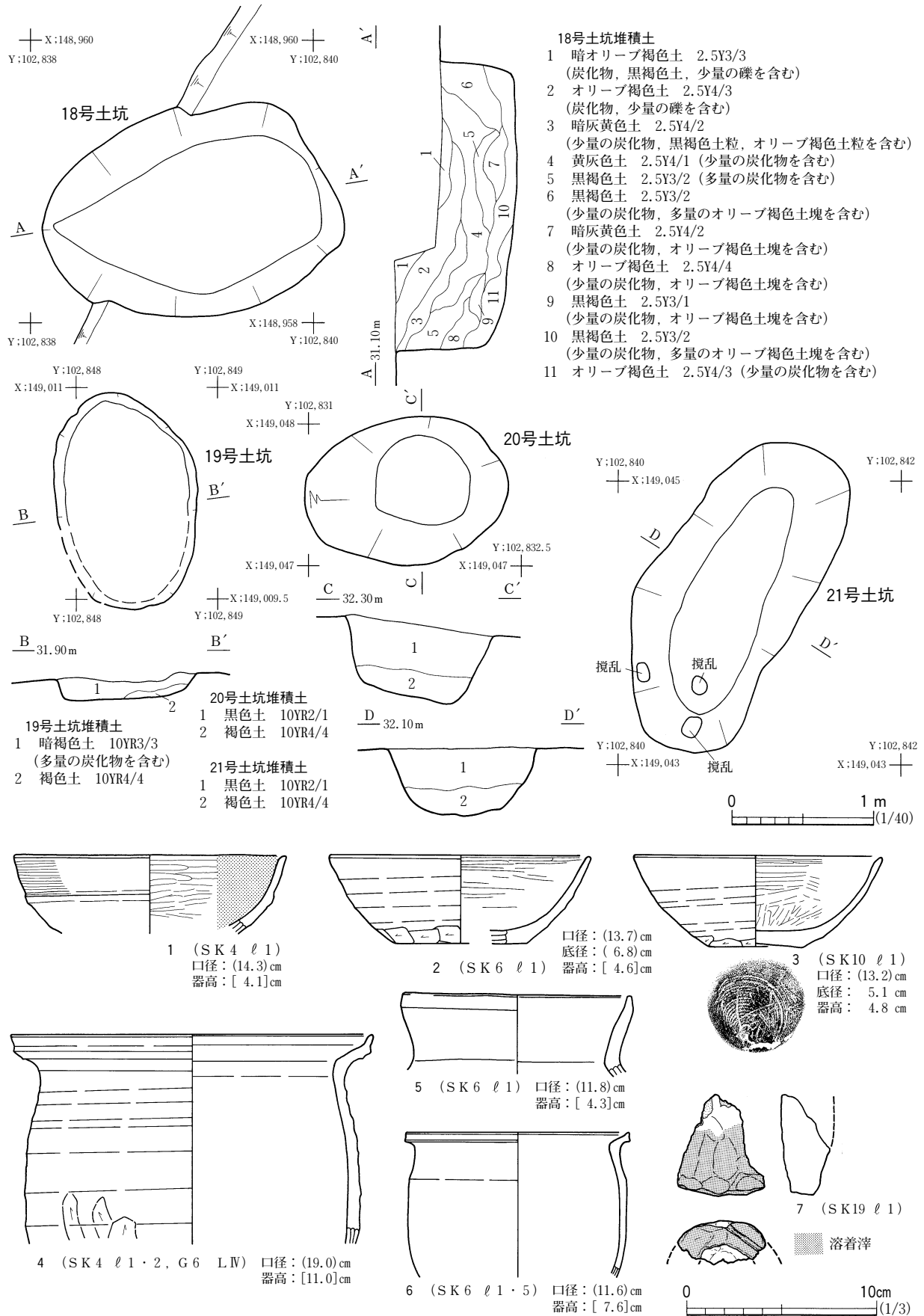


図27 18~21号土坑・出土遺物

する土が堆積している。堆積土や底面までの深さなど2号土坑との共通点が多い。(吉野)

19号土坑 SK19

遺構 (図27, 写真31)

調査区北東部のJ5グリッドLⅢで検出された土坑である。近接している遺構として、6・11号土坑がある。平面形は楕円形である。規模は長径150cm, 短径100cm, 深さは15cmである。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状となっている。堆積土は2層に区分した。暗褐色土を主体とする自然流入土である。

遺物 (図27)

出土遺物は第2層から鉄滓・羽口が出土している。そのうち、羽口の破片を図27-7に図示した。羽口は吸気部先端である。外面には鉄滓が薄く付着していた。鉄滓はいずれも鍛冶炉で形成される椀型滓と呼ばれているものに類する。

本土坑から焼土面は確認されないことから、この場所で鍛冶が行われたとは考えられない。現状では他の場所で鍛冶作業がなされ、そこから持ち込まれたと推測している。(玉川)

20号土坑 SK20

遺構 (図27, 写真31)

調査区北部のF4グリッドから検出された土坑で、最も北側に位置する。確認面はLⅢ面である。平面形は東西に長い楕円形である。上端は長軸145cm, 短軸105cm, 深さは50cmである。底面は礫層に達し、南側に傾いている。壁面はほぼ45°で立ち上がる。堆積土は2層に区分した。第1層は黒色土で、旧表土が流入したものであろう。第2層はLⅢに類する堆積土である。(玉川)

21号土坑 SK21

遺構 (図27, 写真31)

調査区北部のF5グリッドから検出された土坑で、検出面はLⅢである。平面形は、南北に長い楕円形で、上端で長径230cm, 短径100cmを測る。壁面は急傾斜で立ち上がり、断面は皿状である。検出面からの深さは50cmで、壁面の南半分は、礫を掘り込んでいる。堆積土は2層で、20号土坑の状態と類似している。(玉川)

第5節 その他の遺構と遺物

ここでは埋甕・焼土遺構・遺物包含層・柱穴群・遺構外出土遺物を収録した。埋甕・焼土遺構は調査区北東端から検出したもので、縄文時代晩期と考えている。遺物包含層は調査区南東部から縄文時代晩期後葉の土器がまとまって出土している。

1号埋甕 SM1

遺 構 (図28, 写真32)

1号埋甕は調査区北東端のG 6グリッドL IVから検出した。周辺からは縄文時代晩期の遺物が散布していた。検出状況は遺存状態の良好な土器が出土したことによる。検出面からは掘形の有無は確認できなかったため、断面形で確認することとした。その結果、掘形を確認したので埋甕と判断した。

埋甕内部の堆積土は1層で、L IVに似た土色である。堆積土には骨片などは含まれていなかった。土器は直立した状態で埋設されたと思われるが、土圧によるものか東西に逆ハの字状に開く状態で検出した。

掘形はトレンチによって南側を欠損しているが、平面形は楕円形とみられる。規模は幅が46cm、検出面からの深さが26cmである。断面形は漏斗状になっている。

遺 物 (図28, 写真34)

埋甕として埋設された土器は、底部と胴部上半が欠損しているが、おそらく深鉢になるのであろう。胴部外面には細かい網目状撚糸文が施され、胎土には砂粒が多く含まれる。このような文様の特徵から縄文時代晩期後葉の粗製土器と考えている。(吉野)

2号埋甕 SM2

遺 構 (図28, 写真32)

2号埋甕は調査区北東部のH 5グリッドL IVから検出した。周辺には1・2号焼土遺構が位置する。検出面は暗褐色土であるためか、遺構内堆積土との区別が付きにくかった。そのために、検出面はかなり下がった状態となっている。土器は横倒しの状態で、すでに埋甕内部の堆積土は精査の段階で気が付かず掘り上げてしまった。よって、掘形の壁の立ち上がりもわずかである。掘形の平面形は現状で長軸78cmの楕円形であった。

遺 物 (図28, 写真34)

2号埋甕として埋設された土器は胴部下端から底部を欠損する。口縁部が複合口縁で、胴部上半が膨らむ器形である。外面には口縁部から胴部にかけて、細かい網目状撚糸文が施されている。施文をみると、1号埋甕とされた土器のものと様相が似ている。よって1号埋甕と同時期に埋設されたのだろう。(吉野)

焼土遺構 SG

遺 構 (図29)

焼土遺構は2箇所を検出した。検出当初はいずれも住居跡に伴う地床炉と予想した。しかし、住居跡と認定できるような平面形を確認できなかったため、焼土遺構とした。焼成の度合いに強弱は

第1編 本町西B遺跡

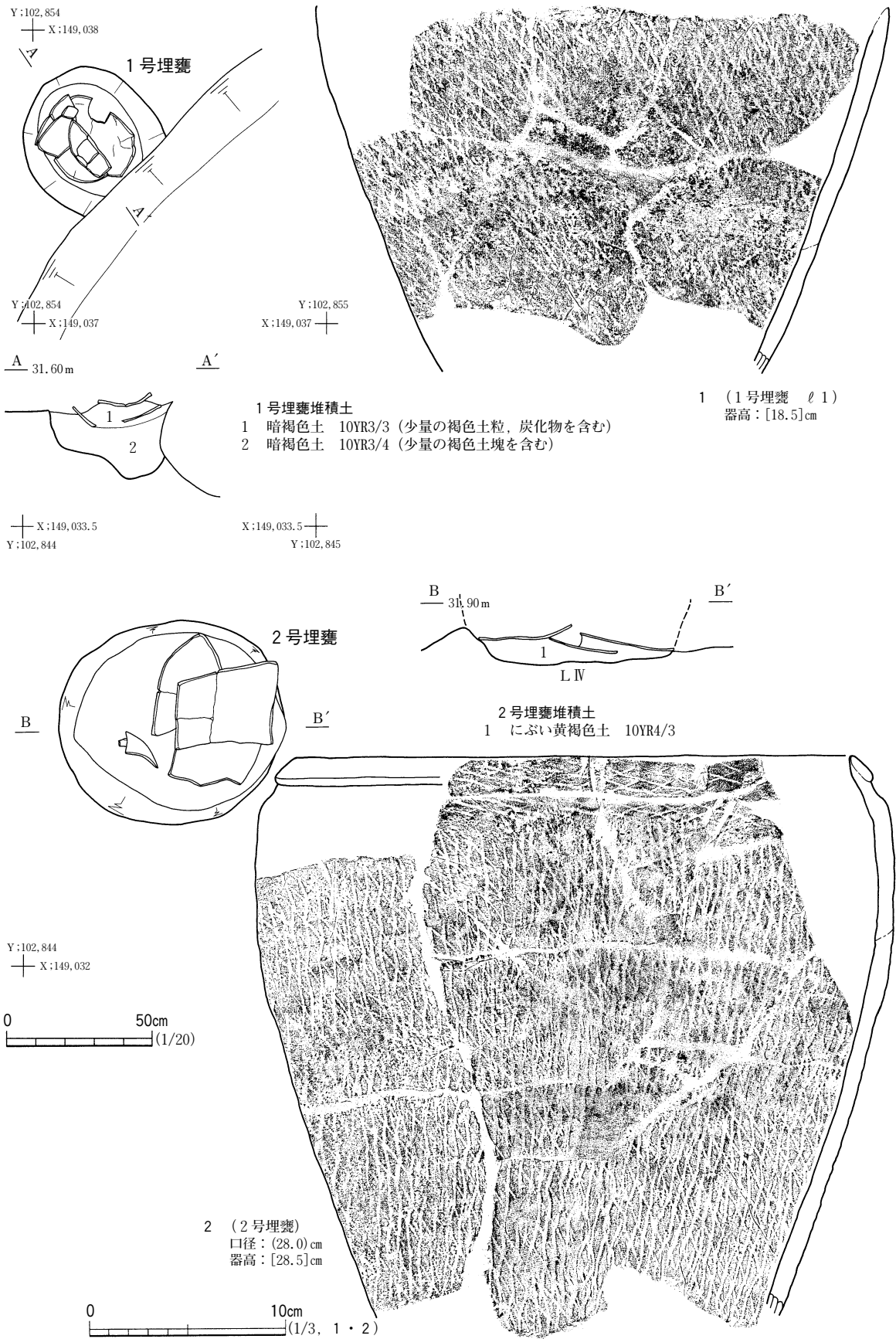


図28 埋甕・出土遺物

みられなかった。いずれも、検出面がLⅣであることから、縄文時代晩期と考えている。

1号焼土遺構は調査区北東部G 5グリッドLⅣから検出した。焼土面は三日月状をなし、最大幅は45cmで、厚さ6cmまで焼土化していた。

2号焼土遺構は調査区北東部H 4グリッドLⅣで検出した。焼土面は円形状に広がっていた。最大幅は64cmほどで、厚さ5cmまで焼土化していた。

(吉野)

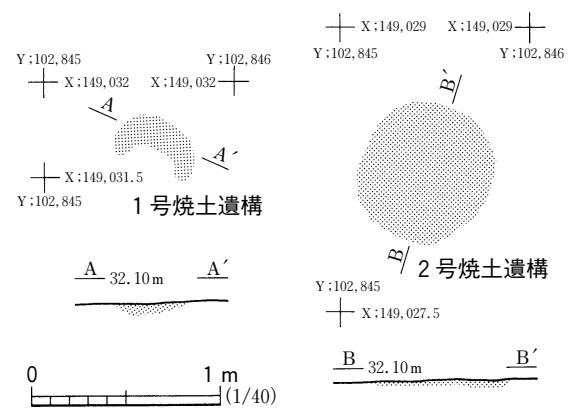


図29 焼土遺構

遺物包含層 (図30, 写真32)

調査区中央部のI 5グリッドを主体とする範囲のLⅣから検出した。図30で示すように土器が、まとまって出土していた。その状況は個体の異なった土器が破片となって分布していた。特に、自然流路による流れ込みを示すような状況はうかがわれなかった。このことから、限定された場所に集中的に投棄されたことが考えられる。近くに存在しているであろう住居域とともに集落を構成していた要素の1つといえよう。

遺物 (図31~34, 写真35~37・41)

出土土器は縄文時代晩期のものが主体を占めていた。それらのものは大洞C₂・A各型式と分類されていた福島県内の資料に比定されうるものであった。以下の記述は時期ごとに、精製土器・半精製土器・粗製土器の順でおこなってゆく。

図31-1・2は縄文時代後期~晩期前葉の粗製土器である。

以下は縄文時代晩期である。図31-3は平行沈線のなかに直線的な羊歯状文が施されるものである。胎土は選良され、他の時期のものとは異なる。大洞B-C式に併行するものであろう。

大洞C₂式に併行するものには、器種は浅鉢・短頸壺などがみられた。図31-4は短頸壺の破片で、口縁部はわずかに立ち上がる。胴部にLR縄文が施されていた。図31-5は浅鉢である。胴部の文様構成は、LR縄文を地文とする楕円の配置文が2段に施されている。口縁部の内面には突起部に三角状の窪みと、それを連結するように1条の沈線が巡る。

大洞A式に併行するものには、器種は深鉢・短頸壺・壺などがある。図31-7は短頸壺で、頸部が直立する口縁部に「王冠」的な突起による装飾が施されている。口縁部外面の突起の先端には貼瘤がなされる。内面には図31-5と同じく突起部に三角状の窪みと、それを連結するように1条の沈線が巡る。頸部外面の中段には1条の連続する刺痕が巡り、胴部外面には縦位の撚糸文が施される。図31-6, 図32-1は壺の口縁部であろう。口縁部外面に3条、内面にも1条の幅が広く浅い沈線が巡る。図32-1の口縁部は平縁であるが、いわゆるB突起が貼り付く。図31-6には突起が欠損している。図31-8・9は深鉢の口縁部であろうか。平口縁で、横位の平行沈線と貼瘤がなさ



図30 遺物包含層

れている。

図31-10~14, 図32-2~5・8・9までが縄文晩期の半精製土器である。図31-10~14・図31-2は口縁部が波状口縁をなしている。無文のもの(図31-10~12・図32-2・3)と沈線が巡るもの(図31-13・14・図32-4・5)とに分かれる。図31-14には内面にも口縁部に対応するように1条の沈線が巡っている。図32-8は短頸壺で口縁部の立ち上がりが短い。胴部には縦位の撚糸文が施される。図32-9は壺の肩部であろう。図32-6・7は縄文時代晩期と思われるが、細別はできなかった。

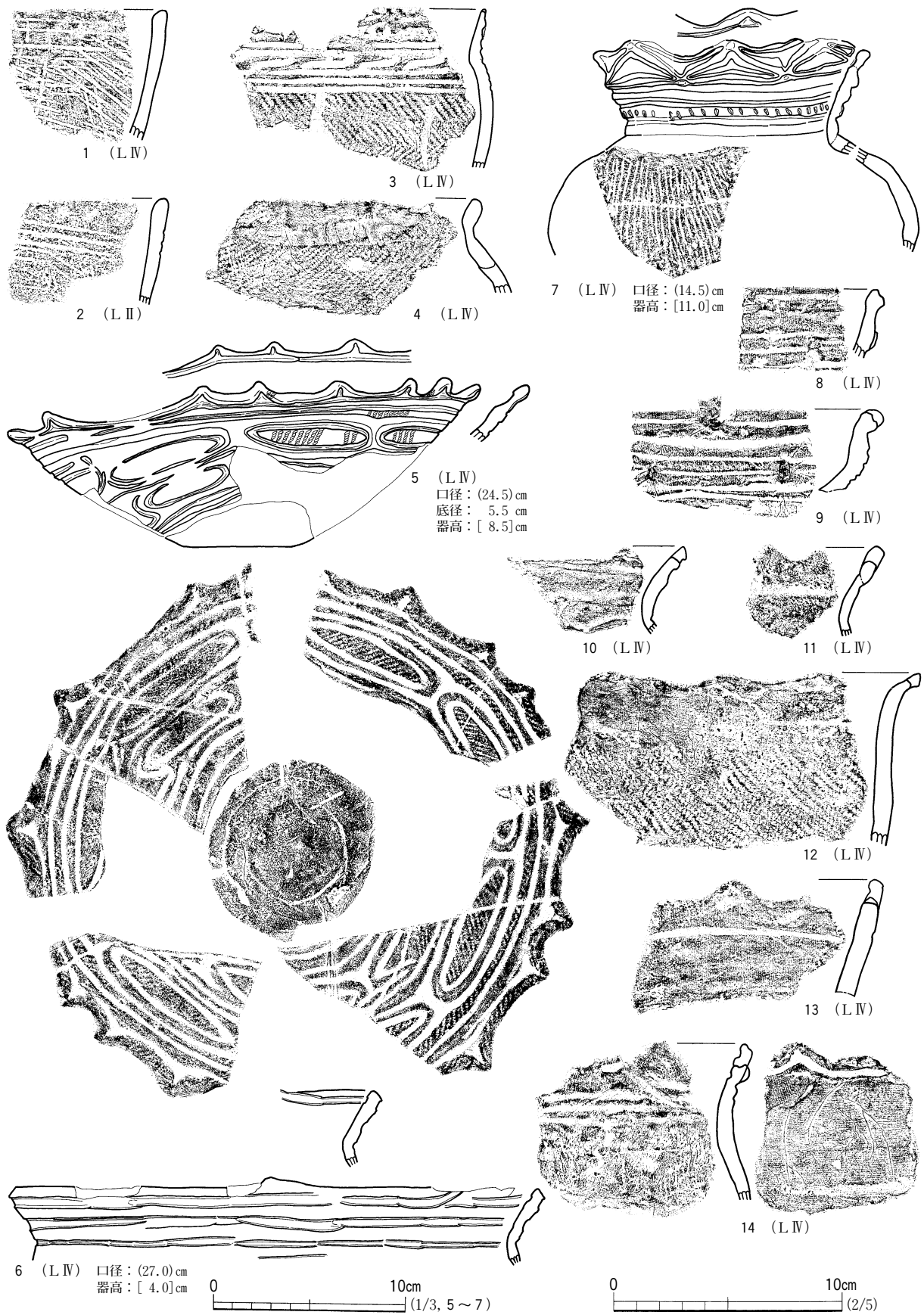


图31 遺物包含層出土遺物 (1)

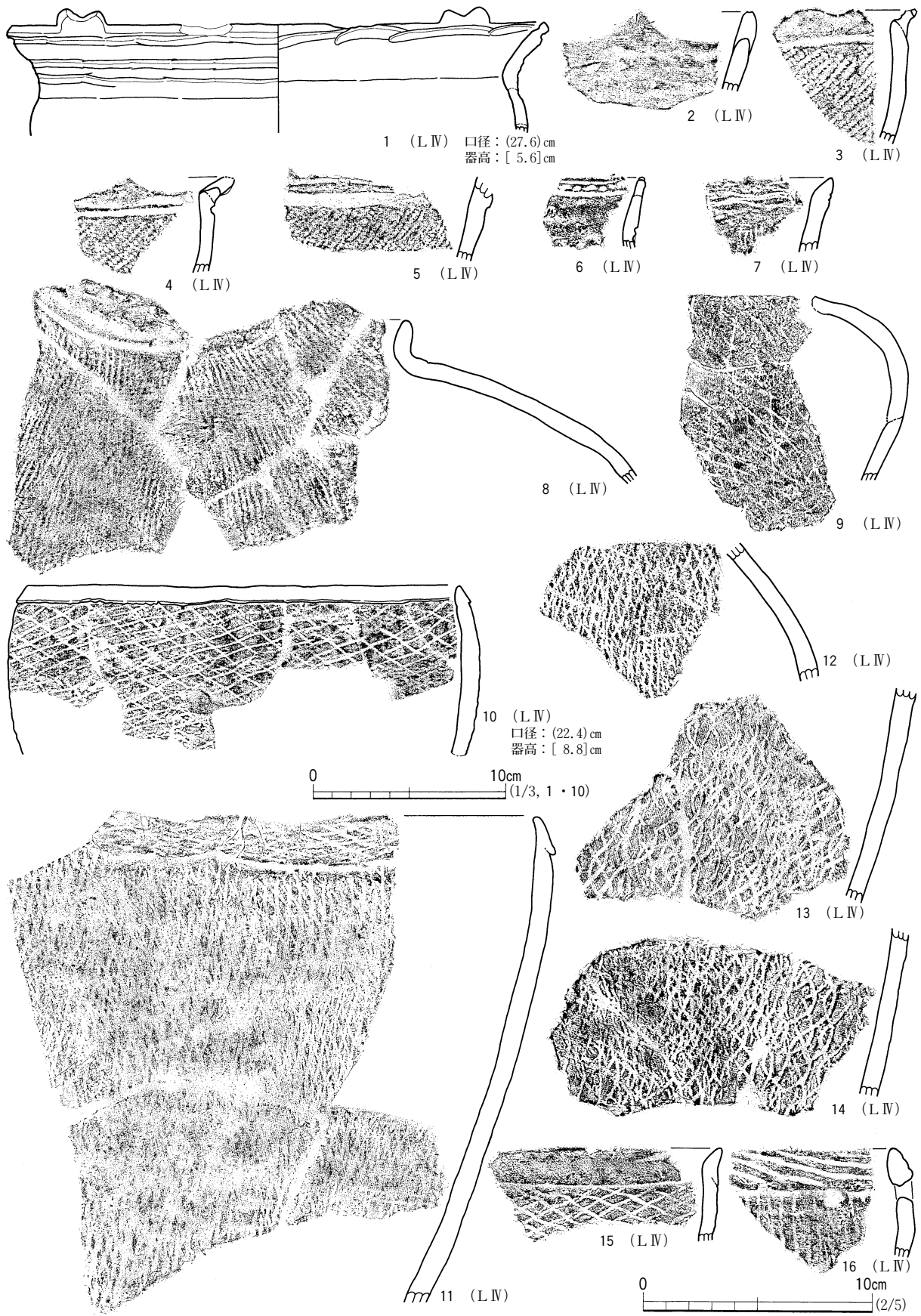


图32 遺物包含層出土遺物 (2)

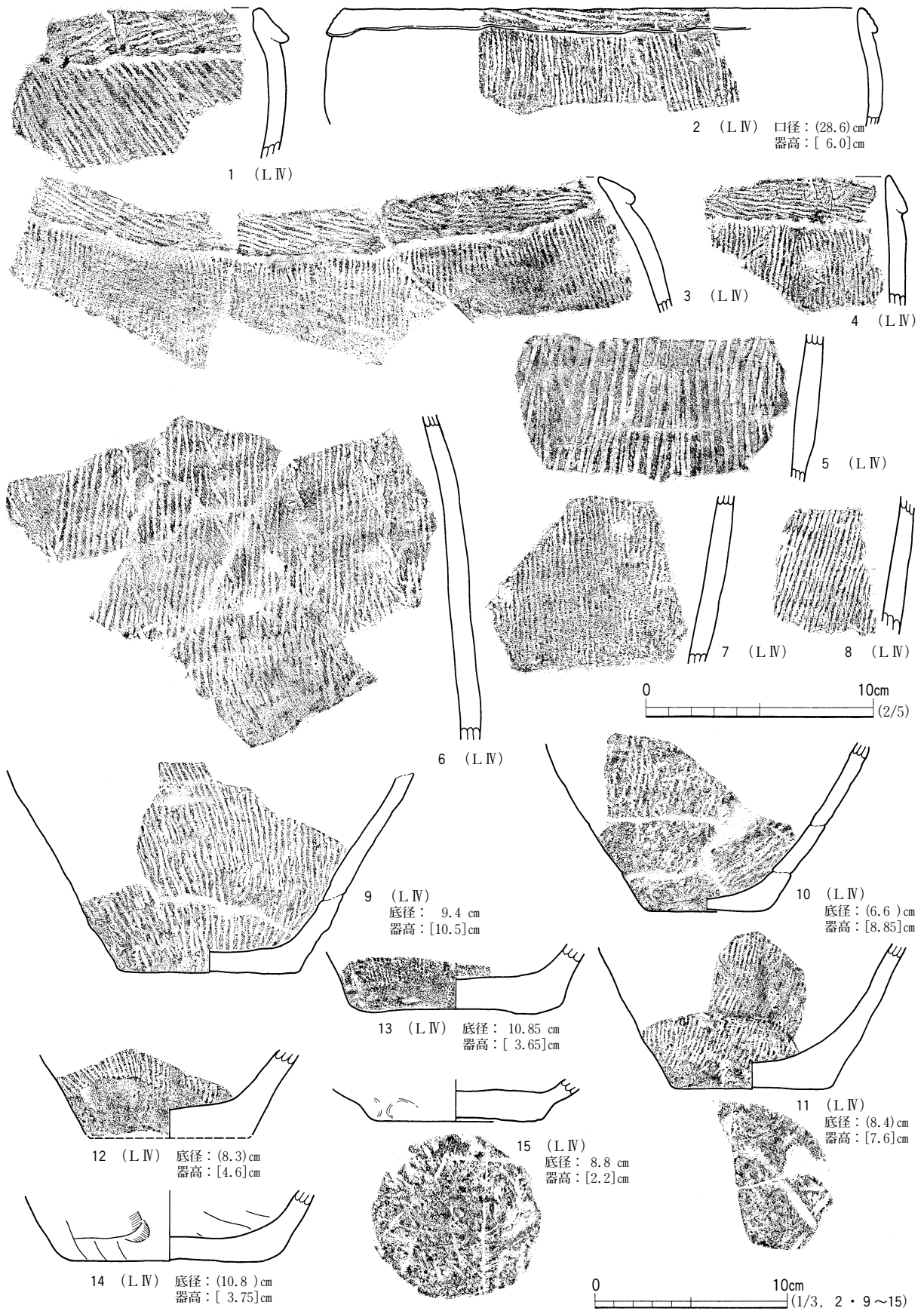


图33 遺物包含層出土遺物 (3)

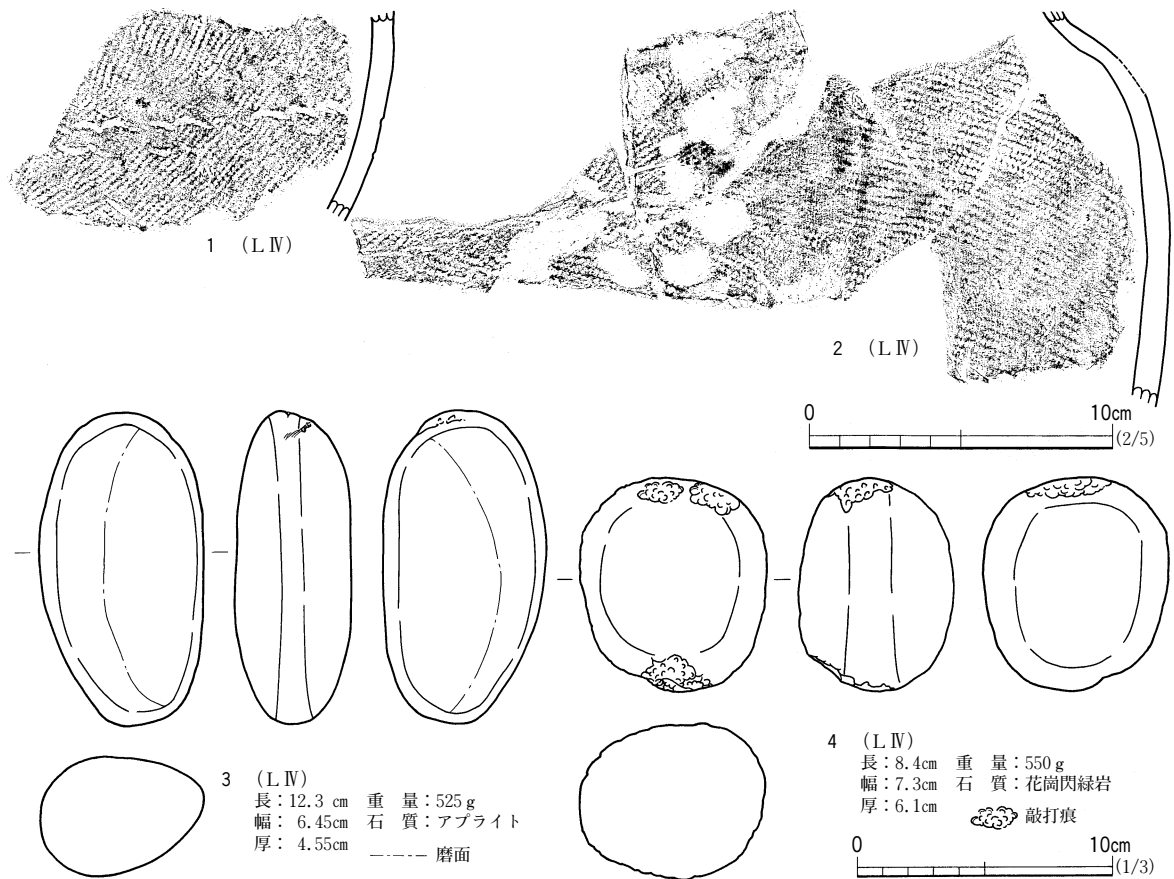


図34 遺物包含層出土遺物（4）

図32-10~16, 図33, 図34-1・2には縄文時代晩期の粗製土器を図示した。口縁部は複合口縁となっている。図32-15は口縁部が複合口縁ではないが、複合部が剥がれて欠損してしまったのだろう。図32-10~15は網目状撚糸文が施されている。そのうち11~14は細かい網目状撚糸文で、10・15は粗い網目状撚糸文となっている。

図32-16, 図33-1~8は撚糸文が施されているものである。口縁部には横位の撚糸文が、胴部には縦位の撚糸文が施されている。図32-16には補修孔と思われる穿孔が1箇所なされていた。図33-6には撚糸文に加えて縦位の絡条体圧痕が一定間隔でなされている。

図33-9~14は胴部下端から底部にかけてのものである。胴部に網目状撚糸文が施されているものが10, 撚糸文のものが9・11~13である。図34-1には結節縄文が, 図34-2はRL縄文が施されている。

石器は出土点数がわずかで, 図示したものは2点である。図34-3・4ともに礫石器である。3は磨石で側面を使用している。4は敲石で両面を使用している。(吉野)

柱穴群 (図35)

調査区北東部からは, 建物跡として構成できなかった柱穴を112基検出している。それらは表1に位置・規模・堆積土などをまとめて表示した。平面図のなかで, 4号建物跡周辺にある柱穴は建物

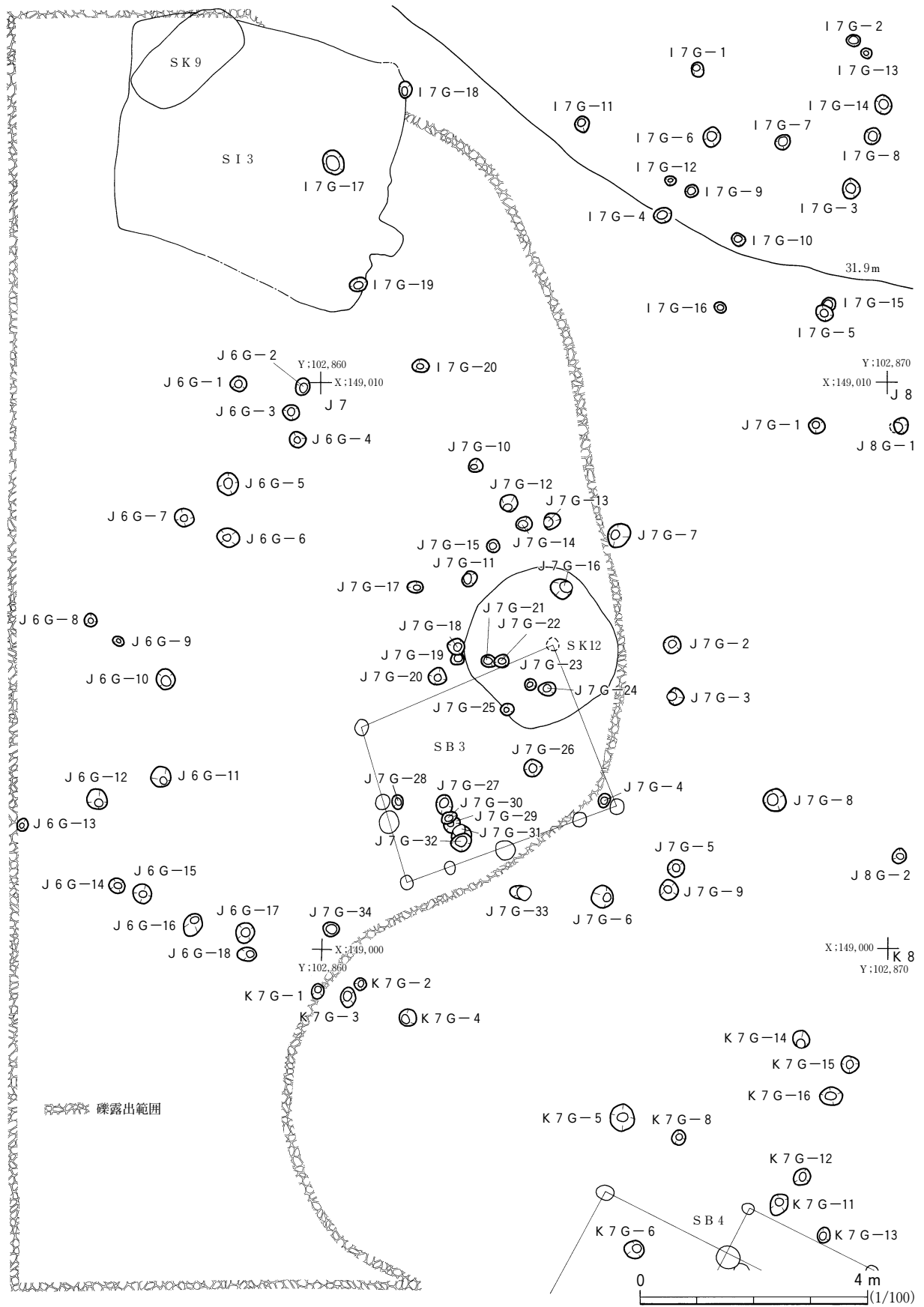


図35 柱穴群

表1 柱穴群一覧表

(長軸・短軸・深さ:cm)

グリッド	番号	土略号	長軸	短軸	深さ	平面形	備考
I-7	1	C	25		25	円	
	2	D	20		33	円	
	3	D	33		38	円	
	4	E	28		32	円	
	5	C	30		44	円	P 5→P 15
	6	C	35	30	26	楕円	
	7	F	25		40	円	
	8	D	30		33	円	
	9	F	20		16	円	
	10	D	23		35	円	
	11	E	27		15	円	
	12	E	18		10	円	
	13	F	20		32	円	
	14	F	32		32	円	
	15	C	22		30	円	P 5→P 15
	16	E	20		12	円	
	17	D	38		12	円	S I 3内
	18	D	28	20	18	楕円	S I 3内
	19	C	30	25	35	楕円	S I 3内
J-6	20	C	30		41	円	
	1	E	29		36	円	
	2	C	28		32	円	
	3	D	30		36	円	
	4	D	30		40	円	
	5	D	40		42	円	
	6	E	43	32	45	楕円	
	7	E	35		47	円	
	8	C	20		27	円	
	9	D	17		25	円	
	10	E	35		62	円	
	11	D	39		40	円	
	12	D	37		45	円	
	13	G	20		24	円	
J-7	14	G	27		30	円	
	15	E	33		33	円	
	16	F	40	27	45	楕円	
	17	D	40	27	35	楕円	
	18	D	30	25	35	楕円	
	1	G	28		35	円	
	2	C	29		35	円	
	3	E	30		40	円	
	4	E	22		16	円	
	5	D	30		18	円	
	6	D	40		30	円	
	7	D	45	35	36	楕円	
	8	D	40		28	円	
	9	E	35		30	円	
10	E	25		30	円		
11	F	26		23	円		
12	D	32		30	円		
13	D	30		43	円		
14	D	25		24	円		
15	D	23		34	円		
16	C	40	35	40	楕円	S K 12内	
17	E	25	20	24	楕円		
18	D	30	28	40	楕円	P 18→P 19	
19	D	22		49	円	P 18→P 19	
20	D	30		32	円		
21	D	28	19	18	楕円	S K 12内	
22	D	22		18	円	S K 12内	
J-7	23	E	20		15	円	S K 12内
	24	E	28	23	15	楕円	S K 12内
	25	E	25		56	円	S K 12内
	26	F	30		28	円	
	27	D	34	30	76	楕円	P 30→P 27
	28	D	22	19	34	楕円	
	29	C	26		74	円	P 31→P 30→P 29
	30	D	28	22	40	楕円	P 30→P 29→P 27
	31	D	38		76	円	P 31→P 30→P 29
	32	D	40	28	40	楕円	P 32→P 31
	33	E	37	26	23	楕円	
	34	D	27		54	円	
	J-8	1	D	29	25	42	楕円
2		C	28	23	15	楕円	
K-7	1	D	24		42	円	
	2	E	20		30	円	
	3	E	34	29	56	楕円	
	4	E	32		30	円	
	5	E	50	42	20	楕円	
	6	D	30		20	円	
	7	D	24	20	15	楕円	
	8	B	25		24	円	
	9	G	34	28	48	楕円	P 10→P 9
	10	E	40	29	15	楕円	P 10→P 9
	11	D	40	30	42	楕円	
	12	D	31		40	円	
	13	E	27	24	20	楕円	
L-7	14	C	30		20	円	
	15	G	31		20	円	
	16	B	40	31	30	楕円	
	17	E	20		18	円	
	18	A	40	28	62	楕円	
	19	E	25		20	円	
	20	C	22		32	円	
	21	D	36	32	50	楕円	
	22	D	18		30	円	
	23	A	30		55	円	
	24	D	20		22	円	
	25	A	21		22	円	
	26	D	22		36	円	
27	D	27	22	14	楕円		
28	B	30	25	27	楕円		
29	B	25		16	円		
30	B	30	25	28	楕円		
31	F	25		42	円	P 32→P 31	
32	D	25		20	円	P 32→P 31	
L-7	1	B	20		14	円	
	2	B	20		18	円	
	3	B	13		18	円	
	4	E	20		34	円	
	5	C	20		34	円	
	6	D	30	20	30	楕円	

凡例
土略号
A: 黒褐色土 10YR3/1 E: 暗褐色土 10YR3/3
B: 黒褐色土 10YR3/2 F: 暗褐色土 10YR3/4
C: 黒褐色土 10YR2/2 G: 黒色土 10YR2/1
D: 黒褐色土 10YR2/3

跡と共に掲載している。(図23)

グリッドごとの柱穴は、I 7グリッドに20基、J 6グリッドに18基、J 7グリッドに34基、J 8に2基、K 7に32基、L 7に6基である。平面形は円形もしくは楕円形となっている。J 7グリッドP 29~32のように複数の柱穴が重複しているものもあった。特に3号建物跡の周辺に柱穴が多く分布するようである。ある期間にわたって、建物跡が機能していたことがうかがわれる。

(玉川)

遺構外出土遺物

遺物 (図36~41, 写真34・35・38~41)

遺構外からは縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・手捏土器・石器などが出土している。そのなかでも主体を占めるのが、縄文時代晩期の土器である。この在り方は遺物包含層の出土傾向と同じである。

縄文土器 図36-1～4は、田戸下層式期のものである。1～4は胴部片である。施文は沈線と貝殻腹縁文がなされている。図36-5は大木2b式期のものである。胴部にS字状連鎖沈文が施されている。

図36-6～11は縄文時代後期後葉から晩期前葉の粗製土器である。7～11は同一個体のもので、櫛歯状工具により口縁部は横方向の平行沈線、胴部は縦方向の波状沈線文がなされている。

大洞C₂式期に併行するものは、図36-12～15であろう。図36-12・13は浅鉢もしくは短頸壺の胴部であろう。メガネ状付帯文が付けられ、LR縄文を地文とし平行沈線が巡る。図36-14は平行沈線によって工字文が描かれる。図36-15は短頸壺で、口縁部から頸部にかけては無文、胴部には結節縄文が施される。

大洞A式期に併行するものは、図36-16～20・図37-1～17であろう。図36-16は深鉢の口縁部と推定している。幅が広く浅い沈線が横位に巡り、貼瘤が付く。図36-17は器種不明なもので、断面形がV字状となる平行沈線が巡る。図36-18・20、図37-1～10・14～16が短頸壺、図37-11～14・17が深鉢であろう。

短頸壺のうち頸部が無文なものは図36-18、図37-3～5、沈線が巡るものは図36-20、図37-1・2・6～13、横位の撚糸文が施されるのは図37-14～16である。図36-19は小型壺で波状口縁である。縦位の撚糸文を地文とし、綾杉状沈線文が施される。

図36-18は時期不明なものである。

縄文時代晩期の粗製土器を図37-19～22、図38・39に図示した。図37-19は縦位の撚糸文で、図37-20は条痕文がなされている。図37-21・22、図38-1・5・9は網目状撚糸文がなされている。このなかで図37-22、図38-5・9には粗い網目状撚糸文が、図37-21、図38-1には細かい網目状撚糸文がなされている。図38-1の口縁部は無文となっている。図38-2・3・4の底部外面には、2が網代、3が木葉痕・4が対峙する綾杉状沈線文がなされる。

図38-7～12、図39-1・4には撚糸文がなされる。口縁部には横位、胴部には縦位の撚糸文がなされる。8・10～12の内面には朱が付着していた。図39-2・3は条痕文、図39-5～8には縄文が施される。6は沈線の区画内にLR縄文が充填されている。図39-8には補修孔が空けられていた。図39-10・11には口縁部から胴部上半にかけて結節縄文がなされ、胴部下半には縦位の撚糸文がなされている。図39-9は手捏土器で、深鉢を模倣したものであろう。

土師器・須恵器・陶器 土師器は図40-1～12が該当する。概ね竪穴住居跡から出土したものと時期差はない。図40-1～6は杯で、8は高台付杯である。2は器厚が薄く、器面もよく整っていた。5・6の外面には墨書がなされているが、遺存部分がわずかなために文字の判読はできなかった。7は赤焼き土器と呼ばれるものに類する。8の底部外面には高台部と杯部との貼付を強化するためのロクロナデと工具痕がみられた。9～12は甕で、9・10はロクロ整形されたもので、胎土に砂粒があまり含まれず、器面もよく整えられていた。11・12は胎土に砂粒を多く含み、器面はあまり整えられていない。

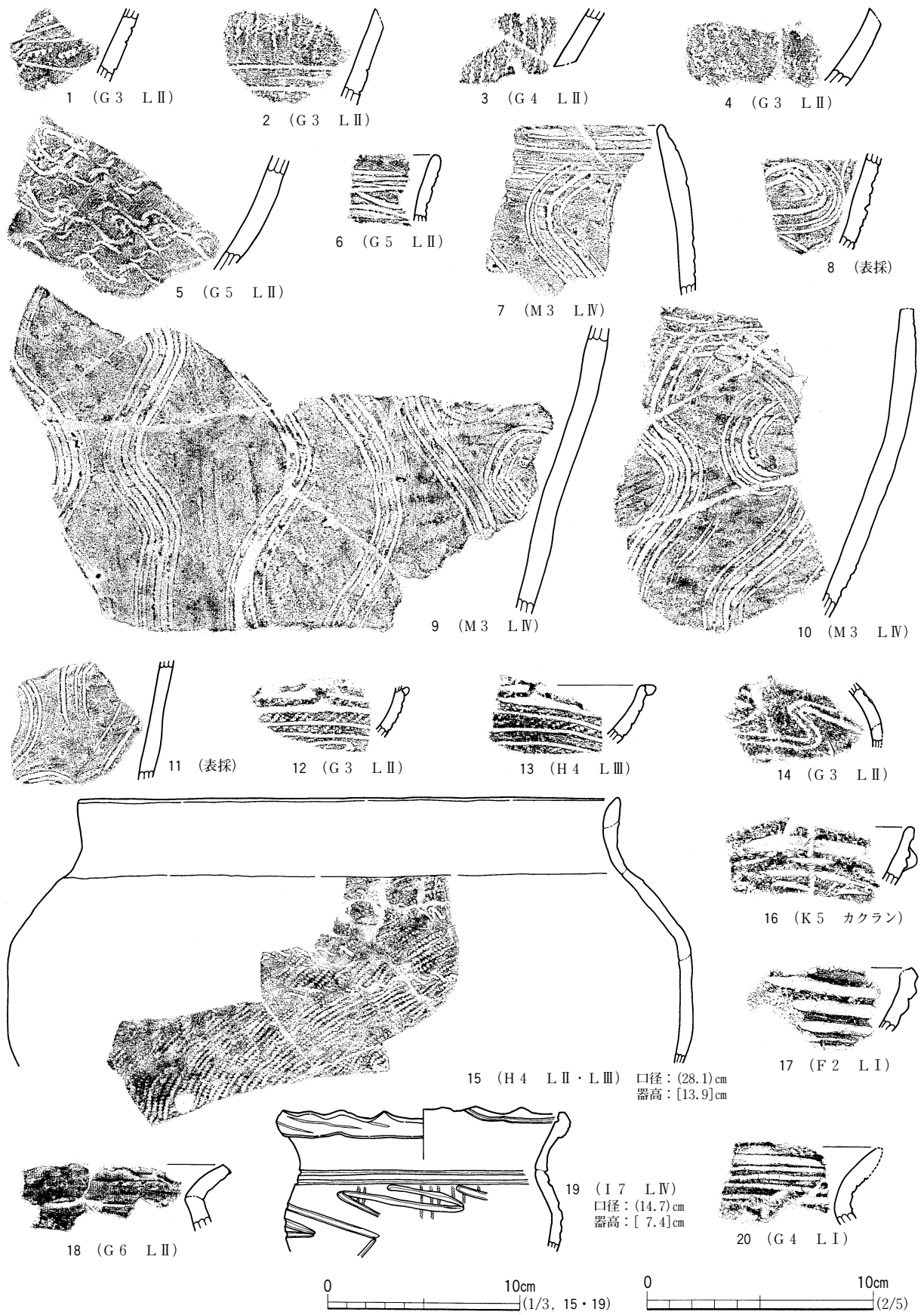


図36 遺構外出土遺物 (1)

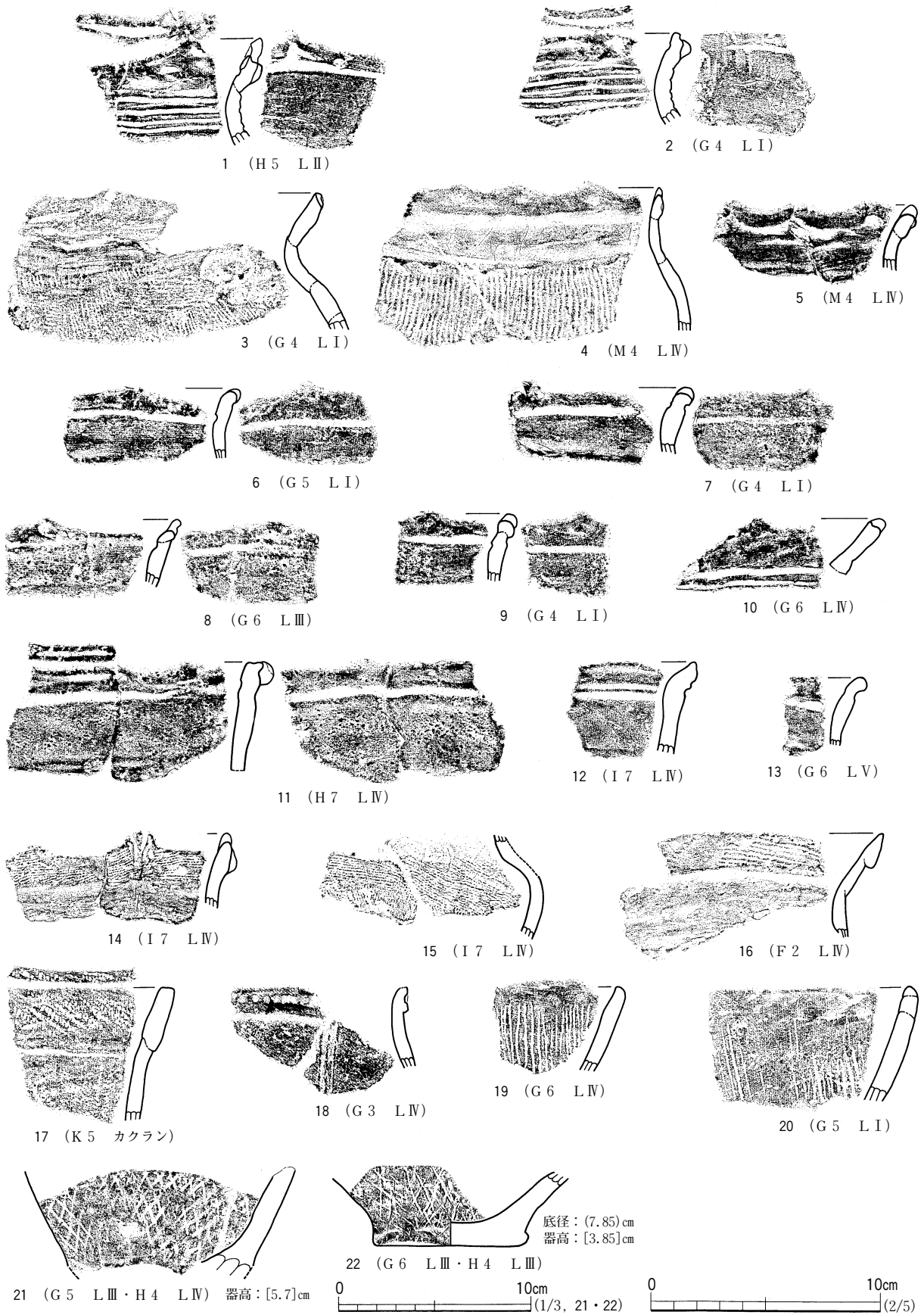


図37 遺構外出土遺物 (2)

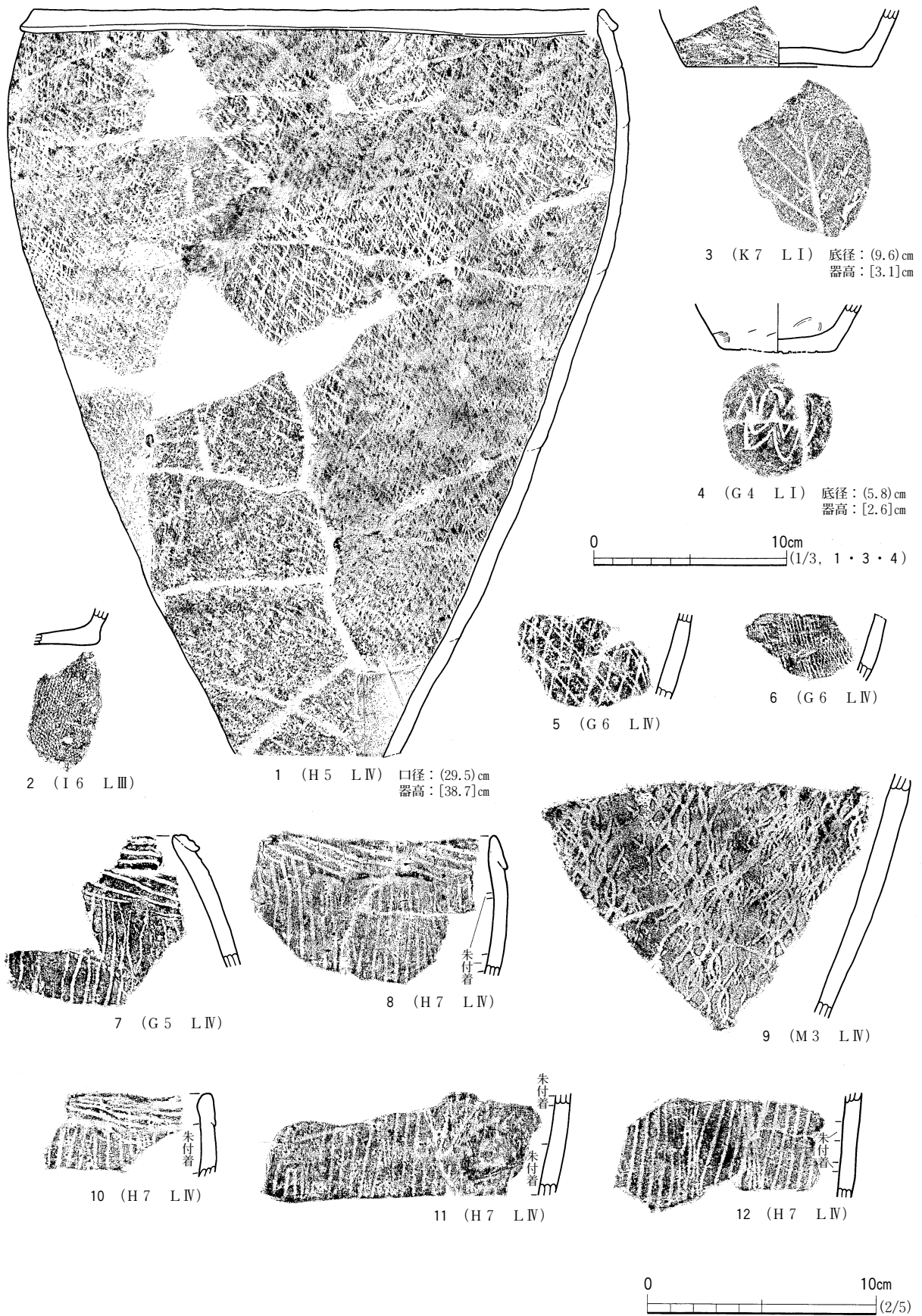


図38 遺構外出土遺物 (3)

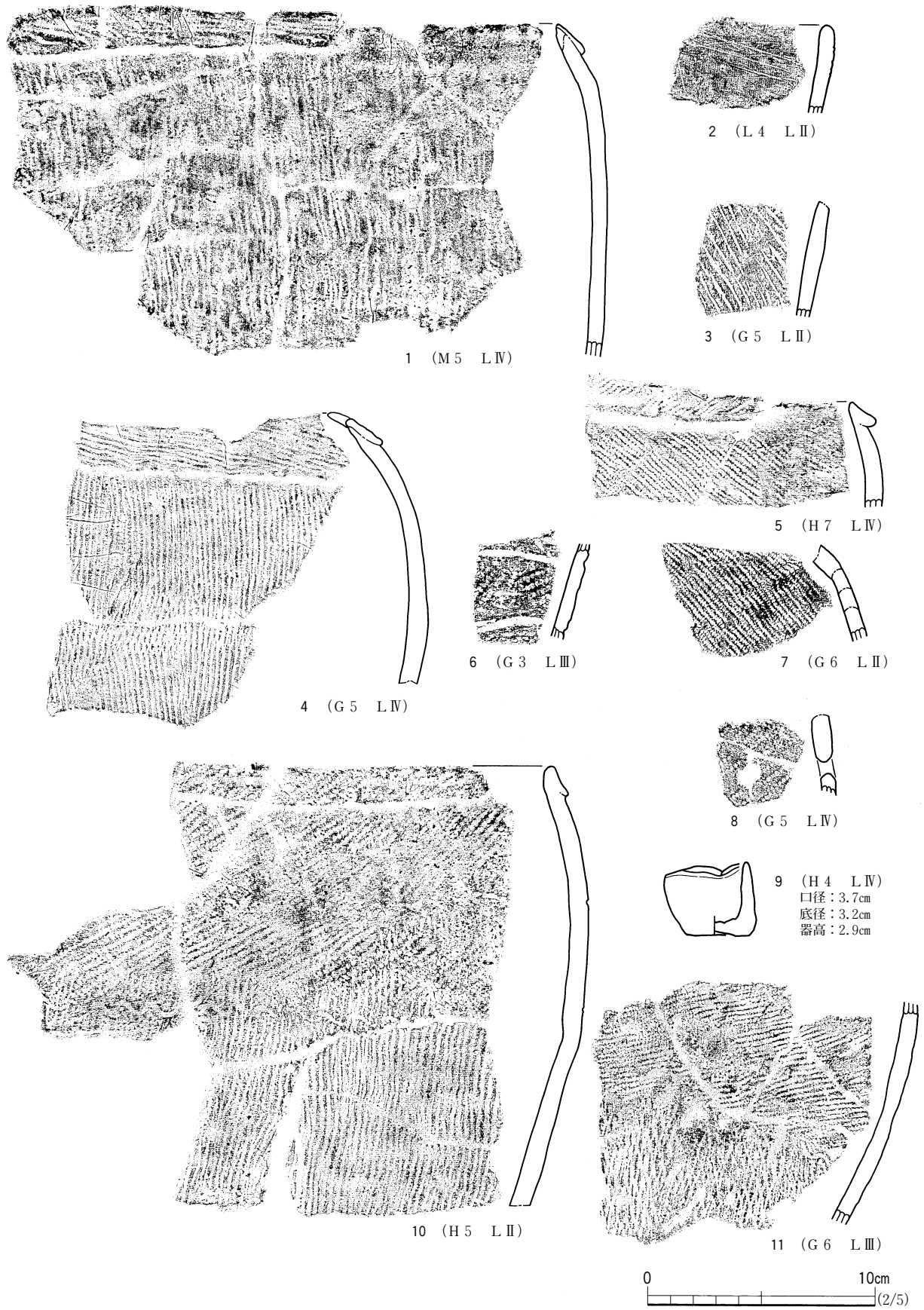


图39 遺構外出土遺物 (4)

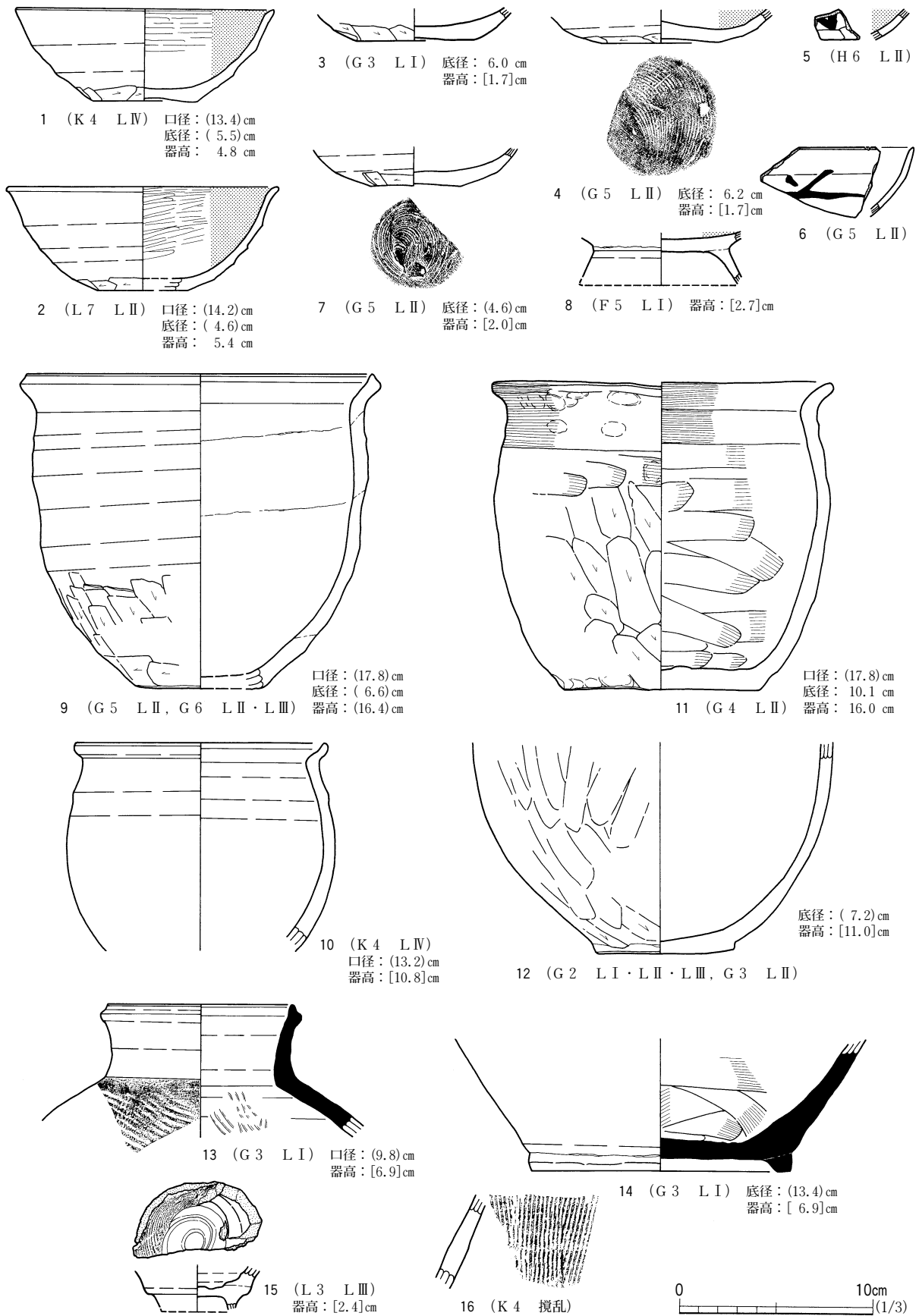


图40 遺構外出土遺物 (5)

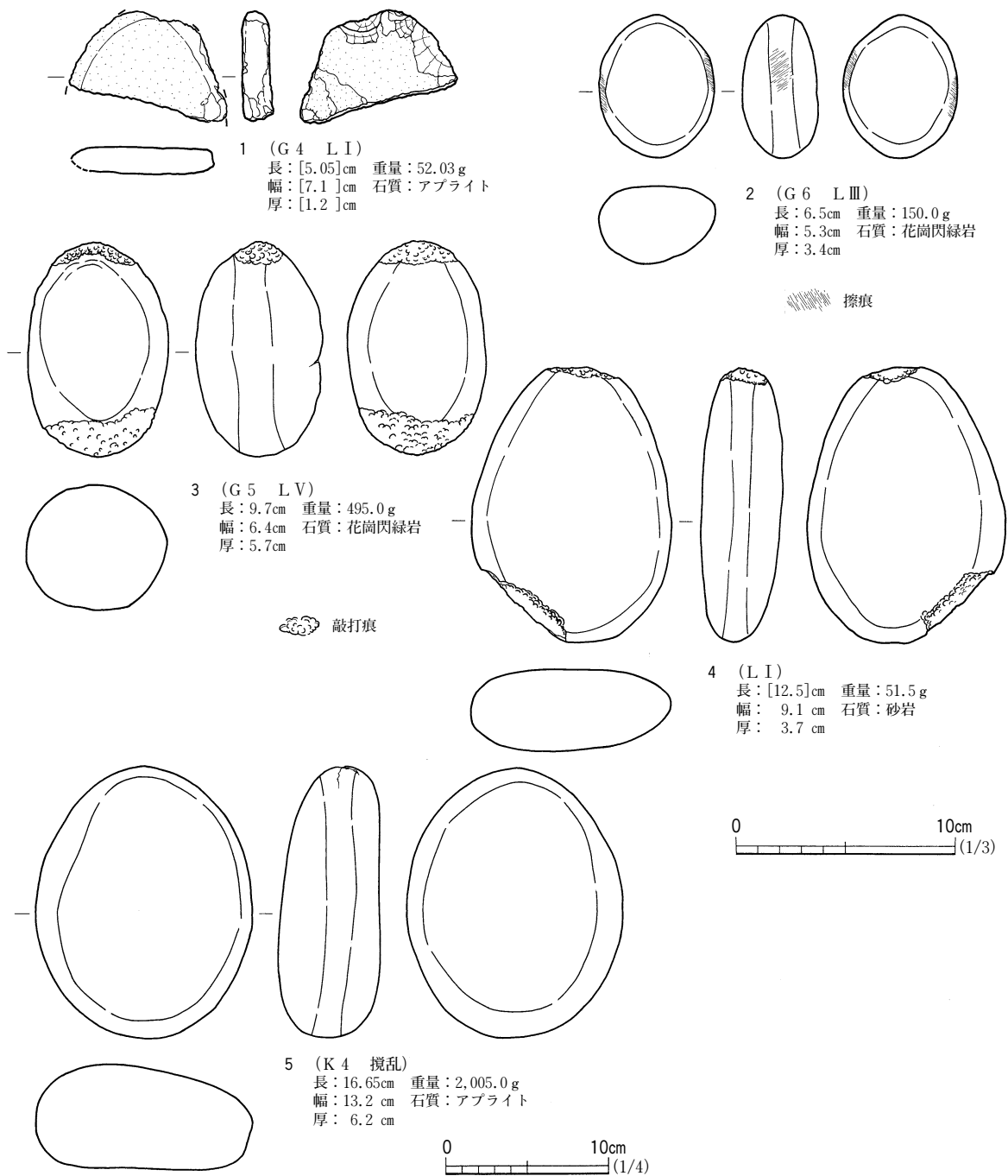


図41 遺構外出土遺物 (6)

図40-13・14は須恵器甕である。胎土に砂粒を多く含み、粗雑な印象を受ける。在地産であろう。図40-15・16は陶器である。15は内外面に釉がなされる。猪口であろうか。高台を成形したのち、ロクロから切り離れた面を内面として体部とを接合している。16は搗鉢である。

石器 石器は図41に図示した。1は石鋏で、片面のみに剥離調整がおこなわれている。2は側面に圧痕が認められることから、網代などを編む際に利用した網石と考えている。3・4は敲石で両端を利用している。5は全体にわたりくまなく焼けているので、石を焼いたものであろう。その用途として土器に入れて煮炊き・蒸し焼き・懐炉などを考えている。 (吉野)

第3章 ま と め

遺物について

平成13年度の調査で出土した遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品・石器・剥片・鉄製品・鉄滓・炭化物などである。ここでは遺物の主体を占める縄文時代晩期の土器と土師器についてまとめておく。

縄文土器 包含層からの出土状況は同じ層からで、層位から時期差を認定できなかった。土器はほとんどが破片で、接合して半完形や完形となるものはわずかであった。精製・半精製土器はわずかに出土しているのみで、大半を占めるのは粗製土器の破片である。

器種は浅鉢・小型壺・短頸壺・深鉢・手捏土器などがある。精製・半精製土器を器種ごとに分けてみると次のとおりである。浅鉢は口縁部にA・B突起が付き、LR縄文を地文とする入組工字文があるもの(図31-5)。

小型壺は口縁部に「王冠的」なA突起が付き、平行沈線と一条の連続刺痕があるもの(図31-7)。波状口縁で、縦位の撚糸文を地文とする綾杉状沈線文があるもの(図36-19)に分かれる。

短頸壺は口縁部が平口縁で、胴部に結節縄文があるもの(図36-15)。波状口縁で、胴部に縦位の撚糸文があるもの(図37-4)。口縁部が波状口縁、頸部に沈線があり胴部にLR縄文がなされるもの(図32-4)に分かれる。

浅鉢は口縁部にB突起が付き、幅が浅く広い沈線が巡るものである(図31-8・9)。

粗製土器は撚糸文が大半を占め、他に条痕文と縄文がわずかにみられるほどである。そのなかで施文によってⅠ～Ⅷに分けられる。Ⅰは破片のために器形は分からないが、櫛目状工具によって平行沈線文と波状沈線文が描かれるもの。出土点数はわずかである。Ⅱは深鉢で、口縁部が複合口縁となっている。器形は胴部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。粗い撚糸文が口縁部に横位、胴部に縦位に施される。ⅢはⅡと同じ器形で、粗い網目状撚糸文が施される。ⅣはⅡと同じ器形で、撚糸文の間隔が狭いものである。ⅤはⅡと同じ器形で、細かい網目状撚糸文が施される。Ⅵは破片のために器形は分からないが、条痕文が施されている。ⅦはⅡと同じ器形で、口縁部から胴部上半にかけて縄文、下半に縦位の撚糸文が施されている。Ⅷは胴部に縄文が施される。

本町西B遺跡から出土した土器は、縄文時代晩期の編年区分のなかでどの位置に含まれるのであろうか。ここでは、須賀川市一斗内遺跡から出土した縄文時代晩期の土器分類を参考にすると(図31-6, 36-19)、深鉢(図31-5)などはⅡ-7段階に含まれる。その他に器種は不明であるが、図36-12・13にはメガネ状付帯文が認められるものがあつた。これはⅡ-6段階に含まれる。大洞式の対応関係は6段階が大洞C₂式、7段階が大洞A式に併行する時期に位置付けられている。さらに、檜葉町山所布B遺跡からは、本遺跡の浅鉢と類似するものが出土している。山所布B遺跡のも

のは貼瘤があることや胴部下半に文様がないことなど違いがあるものの、大洞C₂式に併行するとされている。このことから、本町西B遺跡の浅鉢は大洞C₂式に併行することが想定できる。

土師器 土師器の器種は杯・高台付杯・小型甕・甕・筒形土器などである。杯は図27-1以外、すべてのものがロクロ整形されている。ロクロからの切り離しは回転糸切りで、体部下端から底部にかけて調整されるもの（杯A）とされないもの（杯B）とがある。調整されるものは、体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリされるもの（杯AⅠ）・体部下端から底部全面にかけてヘラケズリされるもの（杯AⅡ）・体部下端にのみヘラケズリされるもの（杯AⅢ）などがある。このなかで、多数を占めているのは杯AⅢである。底径口径比は0.38～0.44で平均が0.41、器高口径比は0.31～0.4で平均が0.36となっている。

小型甕・甕はロクロ整形のものとロクロ整形されていないものとに分かれる。概して、ロクロ整形されていないものは器面調整が粗雑である。

筒形土器は外面に成形の指頭痕や積み上げ痕がみられ、内面は丁寧なナデが施されている。細片となっているものが多く、半完形や完形のものはない。そのため口径や底径などは図上から復元した値である。法量をみると口径が9.6～11.4cmで差が少なく、底径はほぼ10cmである。本町西B遺跡の南側にある本町西C遺跡の7号住居跡からは、完形の筒形土器が出土していた。その法量は口径10.7cm、底径12.3cm、器高12cmであり、本遺跡の筒形土器と近似した値である。

次に、榑葉町赤粉遺跡では筒形土器が多数出土していることから、ここでも比較の対象としてみる。法量は遺物一覧で掲載されていたものから、推定値と残存値を除外した半完形・完形品を対象とした。口径は8.4～13.1cm、底径は9.6～12.8cmの範囲である。このなかで、さらに口径が10.8～11.8cm、底径が11～12.1cmに入るものが多い。このように法量に差がないことから、筒形土器の大きさにある一定の基準が設けられていたと考えられよう。

ここではあえて土器群の設定はしなかった。住居跡から出土した遺物に器形に違いが見出せなかったからである。以上のような特徴を有する土師器の年代を従来の研究によると、ほぼ9世紀後半の年代が想定できよう。

遺構について

今回の調査結果から、調査区は遅沢川の旧河川及び氾濫原であることが判明した。検出した遺構は、竪穴住居跡9軒・掘立柱建物跡4棟・土坑21基・埋甕2基・焼土遺構2箇所・遺物包含層・柱穴群などである。ここでは平安期に含まれる竪穴住居跡と土坑についてまとめておく。

竪穴住居跡 竪穴住居跡は調査区北東部に6軒、中央部に3軒が分布している。ほとんどの住居跡からは柱穴は検出されず、床面積は3.9～16.8㎡の範囲である。カマドは粘土ブロックや礫を利用して構築されていたようである。このためにカマドの袖はいずれも残っていない。さらに、カマドの形態からみると、燃烧部が住居跡の外まで掘り込んで作られているもの（1・3・5・6号住居跡）と、住居跡内に燃烧部があり煙道が住居跡外へと延びるもの（2・4・8号住居跡）とに分かれる。さらに、同時期とみられる掘立柱建物跡はない。このように小規模な居住施設であるとの印

象である。

9軒の住居跡は5・6・9号住居跡が重複していることから、すべて同時期ではない。5・6・9号住居跡の新旧関係は6号住居跡から5・9号住居跡への変遷となる。5・9号住居跡との新旧関係は、重複がなく出土遺物からもあまり時期差は認められない。近接していることから同時期に建っていたとは考えられない。

1・3号住居跡については、共通点が多いことが挙げられる。それは、カマドが東壁に付設されていること、カマド燃焼部が住居跡の外まで掘り込んで作られていること、住居跡の主軸方向がほぼ一致することなどである。このことから、ほぼ同時期に建っていた可能性が高い。他の住居跡については、カマドの設置場所や主軸方向など共通点は見出せない。

土坑 土坑については特徴的なものがみられた。それは、4・10号土坑のように底面に焼面があるもの（Ⅰ類）。7～9号土坑のように平面形が長方形を基調とし、堆積土に礫が入っているもの（Ⅱ類）などである。Ⅰ類土坑は何らかのものを焼成したと考えられるが、明確ではない。Ⅱ類土坑は人為的に埋め戻された可能性が高いものである。礫は堆積土下部から出土し、堆積土から土師器片も出土している。Ⅱ類土坑の礫は、他の土坑のなかに礫が入っていないことから、持ち込まれて埋められたと考えている。これらのことから考えられるのは、土葬墓であることが想定できる。

まとめ

縄文時代晩期の土器はごく限られた期間に投棄されたもので、周辺にはこれらを捨てた人々の居住域が存在する可能性が高い。周辺に関連する遺跡は関根遺跡で、本遺跡から北東1.5km離れた富岡川沿いに立地する。ここからは、大洞B-C～A式に併行する土器が出土している。部分的な調査しか行われていないが、注口付環状土器・注口土器・石剣など多種多様な遺物がみられることから、拠点的な集落としてとらえられる。それに対して、本町西B遺跡は付近に流れる遅沢川が富岡川に合流することからも関根遺跡から派生した集落と推定している。

本遺跡の平安期の集落は前代からまた次代に継続することなく、ごく限られた期間に営まれ廃絶した集落である。周辺にある平安期の集落は、本遺跡から東方へ1.5km隔てた丘陵部に立地する本町遺跡である。ここでは竪穴住居跡が9軒発見されているが、住居跡の数は調査区を拡張するとさらに増えるものと予想ができる。このことから拠点的な集落として位置付けられる。

なお、4号住居跡から出土した墨書土器は三上喜孝の教示によると「丈生」と判読でき、いわき市荒田目条里遺跡からも類例が出土しているとのことであった。このように小規模な集落においても墨書土器がみられることは、墨書土器の在り方を考えるうえでも示唆に富む事象であろう。

(吉野)

引用・参考文献

- 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター編 『母畑地区遺跡発掘調査報告16』 1984年
富岡町史編纂委員会編 『富岡町史』第3巻 1987年
楯葉町史編纂委員会編 『楯葉町史』第2巻 1988年
宇佐見雅夫 『赤粉遺跡』 1997年

第2編 ^{もとまちにし}本町西 C 遺跡

遺跡記号 TO-MMN・C

所在地 富岡町大字本岡字本町西

時代・種類 縄文・平安時代 集落跡

調査期間 平成13年5月7日～9月7日

調査員 吉野 滋夫・玉川 邦男・佐々木 透

福田 秀生・新海 和広

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 遺跡の位置と地形

本町西C遺跡は、双葉郡富岡町大字本岡字本町西地内に所在する。富岡町は浜通り地方の中央部に位置し、北は大熊町、西は川内村、南は楢葉町、東は太平洋に囲まれている。遺跡は、JR常磐線の夜ノ森駅から南へ3km、富岡川河口付近の海岸線から直線距離で西へ3.3km、遺跡の北側谷底を流れる遅沢川と富岡川の合流地点から上流へ約1.1km、阿武隈高地の山地帯東縁から東へ約3kmの場所にある。遺跡の南側には沢を挟んで本町西D遺跡が、北側段丘下の谷底部には本町西B遺跡が、遅沢川を挟んで北側の段丘には、昨年度調査された本町西A遺跡と上本町G遺跡がある。

本遺跡の所在する地域は、阿武隈高地から東流する河川により形成された段丘地形が発達しており、南北に縦断すると段丘と沖積地が交互に連続する。本町西地区は遅沢川により段丘が形成され、さらに小河川や沢により複雑に開析されている。本町西C遺跡の立地する丘陵も段丘上面であり、区分の上では中位段丘のⅢ面に相当する。調査区内の標高は45～46mである。遺跡の立地する段丘の北側・南側は急な傾斜の段丘崖で、調査区とそれぞれの沖積面・谷底部との比高は、北側で約15m、南側で約10mを測る。

本遺跡の立地する段丘は、東方約300mの地点で北側を流れる遅沢川と、本町西D遺跡南側段丘下を東流する小河川が合流するため、そこより東へは連続しない。本町西C遺跡は、その段丘面東端までと、西は調査区より西方約200mの平坦面までが遺跡推定範囲として登録されている。

(新海)

第2節 調査経過

本町西C遺跡は、平成6年度に福島県教育委員会から委託され、(財)福島県文化センターが実施した常磐自動車道建設に関わる遺跡の表面調査で発見され、縄文・奈良・平安時代の遺跡として登録された。その後、福島県教育委員会からの委託により、平成7年度、平成11年度、平成12年度の3回試掘調査が行われ、遺構は住居跡、土坑が確認され、遺物は縄文土器片、石器、土師器、須恵器が出土した。また表面調査の結果から遺跡の範囲は、遺跡の立地する段丘上の平坦面ほぼ全域の82,000㎡と推定されている。このうち5,200㎡が要保存面積と確定し、調査対象となった。

平成13年度に入り、常磐自動車道の工事進展に伴い、日本道路公団東北支社いわき工事事務所と福島県教育委員会文化課、(財)福島県文化振興事業団の3者による事前協議が行われ、要保存範囲の5,200㎡の発掘調査が決定した。

調査は本町西B・D遺跡と同時に行われることになった。遺跡の立地条件から重機の運搬路が限

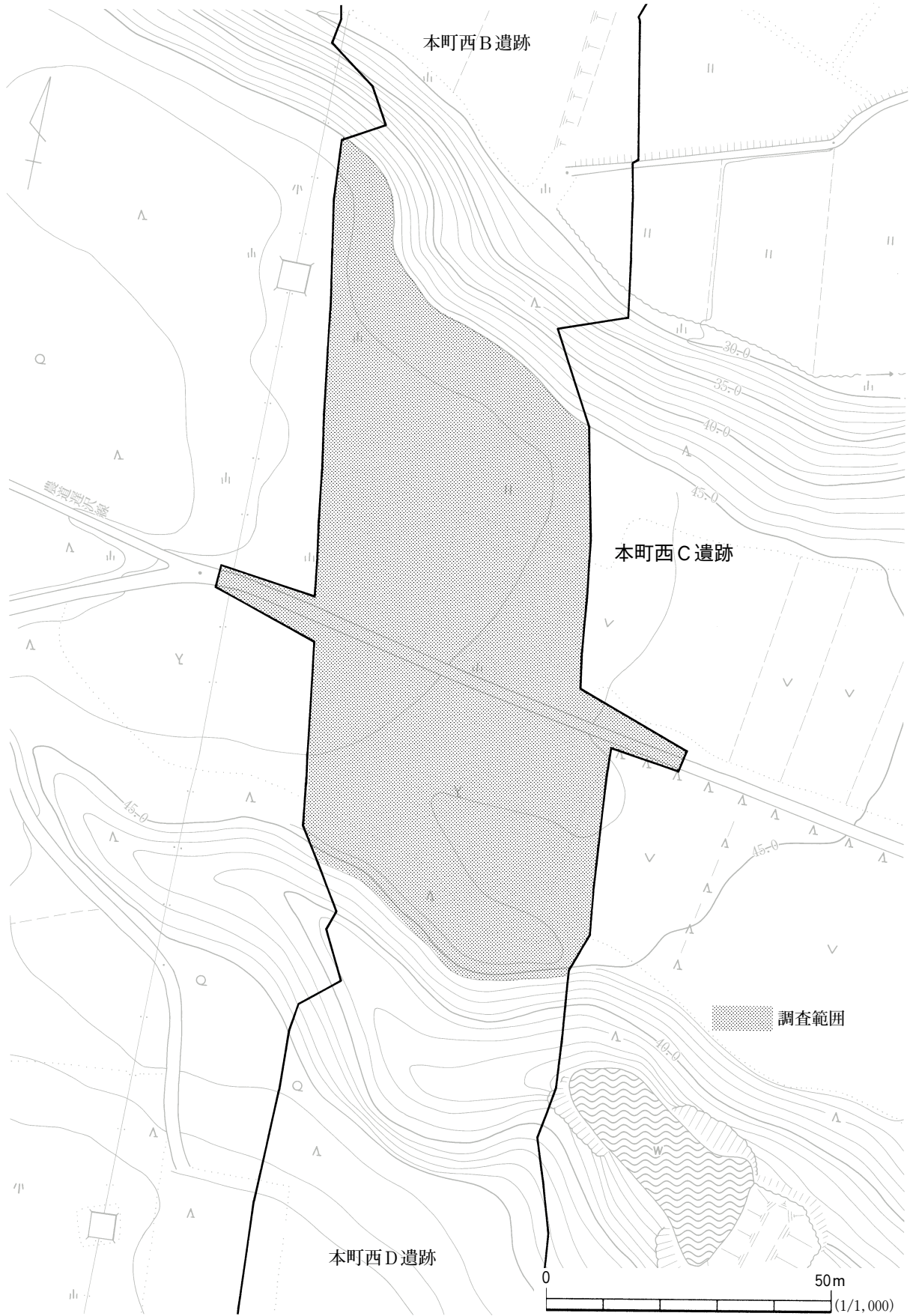


図1 調査区位置図

られていたため、本町西D遺跡から調査開始となり、本町西C遺跡の調査は5月上旬から開始することになった。調査員の基本的配置は2人で、場合に応じて3人体制で運営した。まず重機による遺跡の表土剥ぎと基準杭の打設から開始した。遺跡中央には農道が通っており、調査中も農作業のため使用したいという地元住民の要望があったため、調査区を農道を挟んで仮に北側を北区、南側を南区として区割りした。また、排土を本町西D遺跡との間にある沢へ集める方針だったので、南区から調査を始め、北区、道路下と段階的に調査を行う計画を立てた。5月中旬から作業員数名により、検出作業に邪魔な切り株や笹の根を除去し、5月末から遺構の検出、一部掘り込みを開始した。5月中は作業員の人数が少なく遺跡全体の遺構検出はできなかった。6月には作業員も増えて、一斉に遺構検出作業を実施した。この段階でようやく遺跡の全体像が判明してきたが、6月中は梅雨時の雨天にみまわれ、作業が度々中止になり遺構検出作業も難航した。7月に入ると作業も本格化して、遺構の精査、記録作業を行った。一部6月から

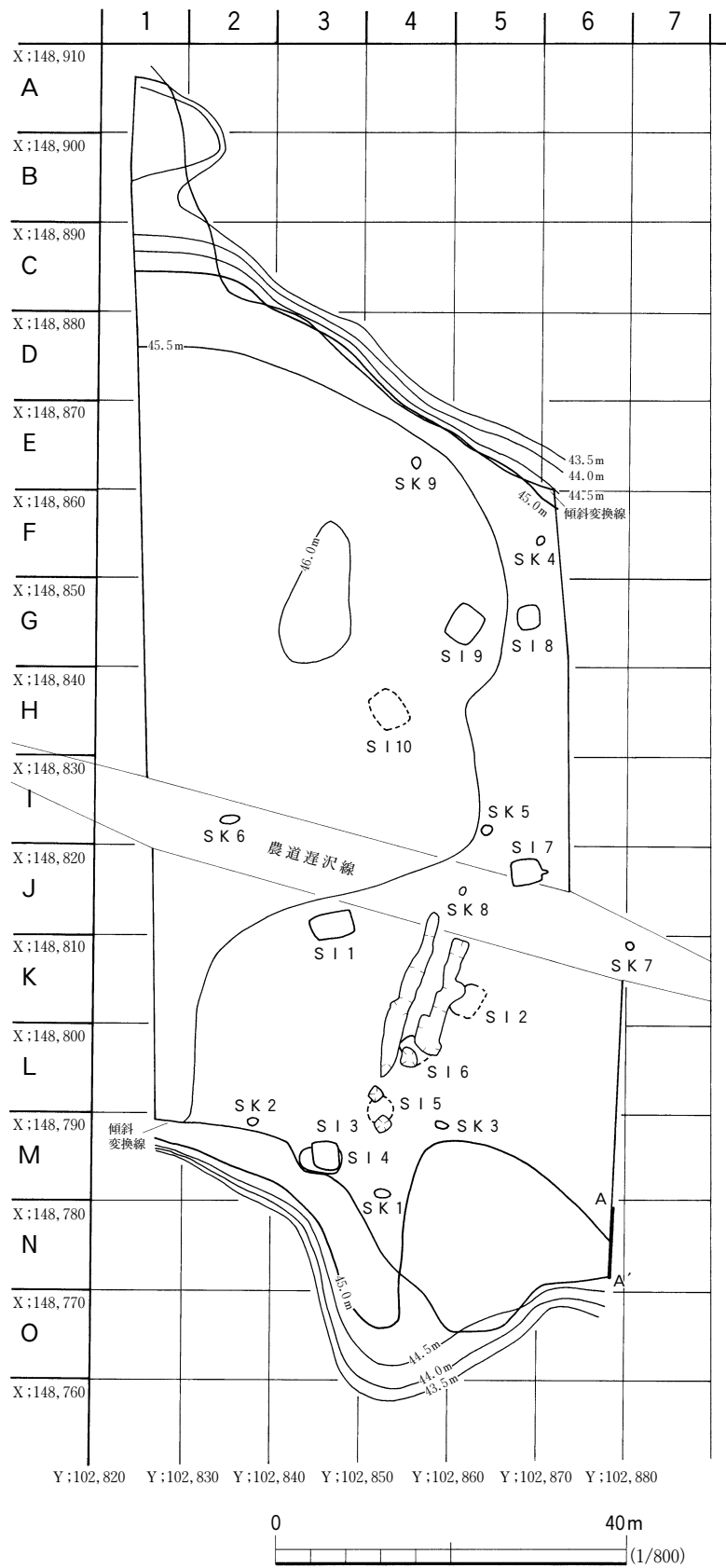


図2 グリッド区分・遺構配置・土層観察地点関連図

開始していた北区へ作業員を配備し、検出・遺構の掘り込みや精査記録作業を始めた。7月中に南区の調査が終了する見通しがたち、排土を南区に投棄することになったので、中旬に遺跡の全体写真を撮影した。

8月は中旬に盆休みがあり、現場作業を長期中断してしまった。下旬には北区の遺構も記録作業が主体になったので、本町西B遺跡への作業員配置転換や機材の運搬を行った。また農道部分を調査するため道を付け替え、重機を使い農道部分の表土撤去を行い、土坑を3基検出した。並行して、遺跡の地形測量も開始した。9月初旬には農道部分から検出した土坑の記録作業と地形測量、機材の撤去を終了させ、9月7日に本町西C遺跡の調査を終了した。調査の延べ日数は66日であった。

(新海)

第3節 調査方法

沢を挟んで南側に位置する本町西D遺跡で、日本道路公団が打設した基準杭を基に設定したグリッドを、本遺跡にも援用して10m四方のグリッドを設定した。グリッド呼称は、本遺跡の調査区北西隅から調査区外北西へ6mの地点に原点を設け、原点から南へ10mごとに、A・B・C…O、原点から東へ10mごとに1・2・3…7と命名して、これらの組み合わせで各グリッドを表示している。そのため本町西D遺跡のグリッド呼称と連続性は無い。グリッド基軸線を国土座標Ⅹ系に従って設定しているため、地点の表記は国土座標Ⅹ系の数値を利用して示している。標高基準点は、B1グリッドの西側調査区外に設置されている三角点から、調査区内に移設し、45.970mとして調査時に利用した。

調査では、表土剥ぎは重機を利用して、遺構検出作業以降は全て人力で作業を進めた。基本的に住居跡は十字ベルトで、土坑は半截して土層の観察を行った。断面図および平面図は、基本的に1/20縮尺で作成し、一部炉跡については1/10で図面を作成した。写真は必要に応じて6×4.5判モノクローム・カラーリバーサルフィルムを使用して、35mm判モノクローム・カラーリバーサルを常時用いた。

発掘調査で得られた記録、遺物は、(財)福島県文化振興事業団で整理・報告書作成後、(財)福島県文化財センター白河館で保管する予定になっている。

(新海)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

遺構の分布（図2，写真2・3・4）

本町西C遺跡の調査で確認された遺構は，縄文時代の竪穴住居跡9軒，平安時代の竪穴住居跡1軒，土坑9基である。出土遺物は，土器片1,577点，石器・剥片類389点，焼成粘土塊2点・鉄滓2点である。遺物の年代は，縄文時代前期初頭が主体で，ついで平安時代の土師器が比較的多い。

本遺跡は，遅沢川により形成された段丘面上に立地しており，遺構は全てこの段丘面上の平坦面に構築されている。平坦面の南側は，南北に走る筋状の攪乱が数条あり，遺構の遺存状態が悪い。平坦面北側も，本来の遺構検出面が削平されており，遺物の出土量も少ない。そのため，実際はより多くの遺構があった可能性も否定できない。

時期別に住居跡の配置を見ると，縄文時代前期初頭に属する住居跡は，南北はG4・5グリッドからM3・4グリッドまでの，東西約20m幅の範囲に分布している。各住居跡の同時代性を示す共伴遺物は少ないものの，SI3とSI4に時期差があるので，集落にも2時期ある可能性がある。整然とした配置に規則性を認めるなら，SI4・1・10・9・8の順で南西から北東へ弧状に並ぶ列と，SI3・5・6・2の順で南西から北東へ直線的に並ぶ列に分離することが可能である。また，どちらの住居跡列も平坦面北側末端に達していないので，調査区より東側へ集落が連続する可能性がある。事実試掘調査で，調査区北区の南東端から東へ約25mの地点に設定した，1トレンチ・2トレンチ両方から住居跡らしいプランが確認されているので，集落跡はより東側へ広がっていたと考えられる。平安時代の住居跡は，J5グリッドに1軒あるのみで分布の傾向は不明である。

（新海）

基本土層（図3，写真5・6）

調査区は平坦な段丘面上に限られており，堆積状況は概ね同一である。しかし，後世の開墾や耕作により表土層下30～40cmまでが耕作土である。この耕作土は調査区南東端において盛り土状に1mほど堆積している。基本土層の観察もこの調査区南東端部分で観察を行った（2図A-A'）。この地点は平坦面から南側の沢へ傾斜し始める地点であるが，盛り土のため現況での傾斜変換線より1.5mほど北側に台地の肩がある。ここでLⅠからLⅥまでの7層に分層した。

土層を上から順に見ると，LⅠが耕作土や盛り土などの現表土層，LⅡが本来の台地の肩に残存していた旧表土層で暗褐色を呈する。LⅢは遺構検出面となった土で褐色を呈するが，平坦面に見られるLⅢaと，沢への斜面部に崩落しているLⅢbに分けられる。遺物はLⅠからLⅢまでに含まれている。LⅣ以下は無遺物層で，LⅣはにぶい黄褐色土，LⅤは明黄褐色土で少量の礫を含み，

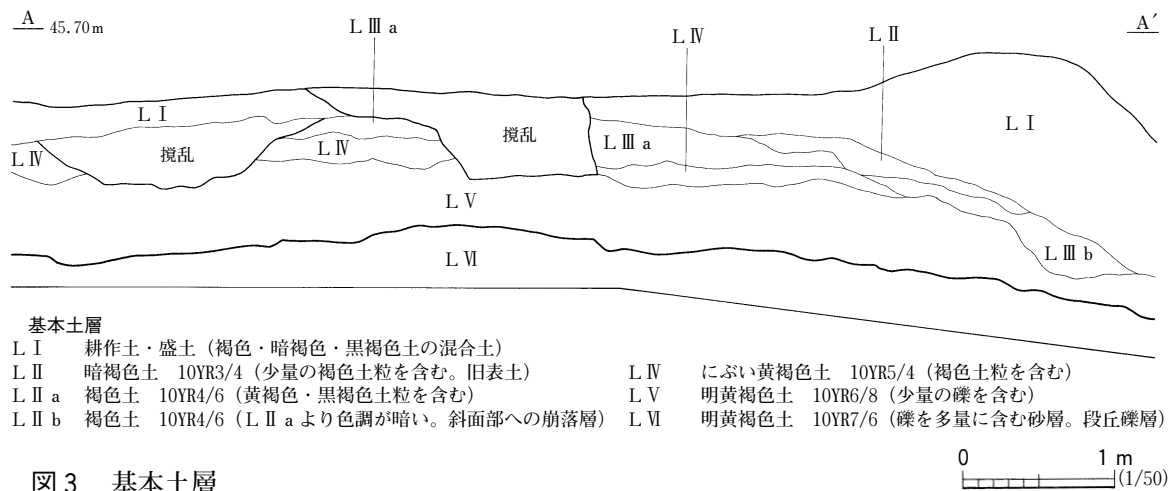


図3 基本土層

L VIは段丘礫層になる。

調査区内平坦面は、南区の一部を除いてL Iの耕作土がL IVまで達しており、L III aは薄くまだら状にしか残存していないため、遺構の検出も多くはL IV上面で行っている。これはL III aのプライマリな遺物包含層も大半が失われていることを示している。

平坦面の南北両末端は、先述のように盛り土により斜面部へ平坦面の裾を広げる造成が行われており、現況を示す地形図と表土剥ぎ終了後に作成した地形図とで若干の食い違いがあった。特に調査区北西隅のB 1・C 1グリッドでは浅い沢状の地形が埋没しているのが確認された。ここではL Iが約1 m堆積しており、その下には平坦面に見られなかった黒褐色土が約50cm堆積していた。全体的に盛り土に覆われていたので残存状況は良かったが、遺物が1点も出土しなかったため記録はとらなかった。

（新海）

遺跡の年代と土器分類

本遺跡出土土器は時期構成が単純で、縄文時代前期初頭の土器が大半を占め、微量の縄文時代後・晩期の土器と、少量の平安時代の土師器・須恵器が出土している。以下に本遺跡内における便宜的な時期分類を示す。

I 群土器 縄文時代前期初頭の土器で花積下層式に比定できる土器群。文様要素・破片の状態で1～4類に細分した。

- 1類 文様帯内に、1段撚りの縄圧痕文・集合短沈線文・刺突文・隆帯文を施すもの。
- 2類 基本的に口縁直下から地文のみが施されるもの。口縁直下にのみ刺突文を施すもの、隆帯文のみを施すものも含めている。
- 3類 胴部地文のみの破片で、1・2類どちらに属すか不明なもの。
- 4類 I群土器に属する底部資料。

II 群土器 縄文時代後・晩期の土器。量が少ないことから時期ごとに各個の群設定を行わなかった。

- 1類 後期後半の土器。小片のため型式は不明である。

2類 晩期の大洞B式。1点のみ確認されている。

3類 晩期に属する地文のみの粗製土器。

4類 後・晩期の底部資料。

Ⅲ群土器 平安時代の土器。

以上の分類により本遺跡の年代観を設定した。以下、各遺構の出土遺物と遺構外出土遺物の土器の表示はこの分類に準拠している。 (新 海)

第2節 竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は10軒で、全て台地上の平坦面に立地している。そのうち9軒が縄文時代前期初頭、1軒がカマドを有する平安時代の住居跡である。縄文時代前期初頭の住居跡は、もともと竪穴の掘り込みが浅いため、削平により遺存状態が悪い。

1号住居跡 S I 1

遺 構 (図4・5, 写真7～9)

本住居跡は平坦面中央部のJ・K3グリッドに位置する。本住居跡所在地点は、LⅢaの褐色土が削平されて残っていないため、LⅣ上面での検出となった。検出面において、長方形の暗褐色土の広がりを確認した。重複する遺構は無いが、K3グリッドから北へ伸びる攪乱により、住居跡の一部が失われて床面が露出していた。

住居内堆積土は1層のみであった。LⅡに由来する暗褐色土で、炭化物粒と黄褐色土粒が混ざっている。層厚が薄く10cm程度のため堆積過程は不明である。

平面形は隅丸長方形で、規模は長軸4.1m、短軸3.0mを測る。主軸方向はN65°Eである。周壁は検出面がLⅣ上面のため、残りの良い部分でも10cm未満である。立ち上がりにはにぶい黄褐色土で確認され全周緩やかであるが、壁高が4cmしかない南壁での立ち上がりがよく分からない。床はLⅣ層中のにぶい黄褐色土に構築されており、全体的に踏み締まって硬化している。最大8cmの凹凸があるが傾斜は無い。

ピットは、床面・竪穴外から合計8基検出された。そのうち柱穴と考えられるのは、規格的な4本の配置であることや比較的床面からの深さがあるP4～7で、上端の径は14～48cm、床面からの深さは15～50cmの範囲に収まる。柱穴断面形は、上端から下端まで直線的な形態である。P6のみ径14cm、深さ15cmで規模が小さいが、攪乱で半分以上壊されており本来の形態で測れないことによる。各柱間を柱穴の中央で測ると、P4-P5間1.6m、P6-P7間推定1.3m、P5-P6間推定1.7m、P4-P7間1.6mという数値になる。P6-P7間を除いて1.6m前後を基調としているようである。

柱穴内堆積土はいずれも住居内堆積土ℓ1と同質の土で、P4・5の上端には崩落箇所も確認で

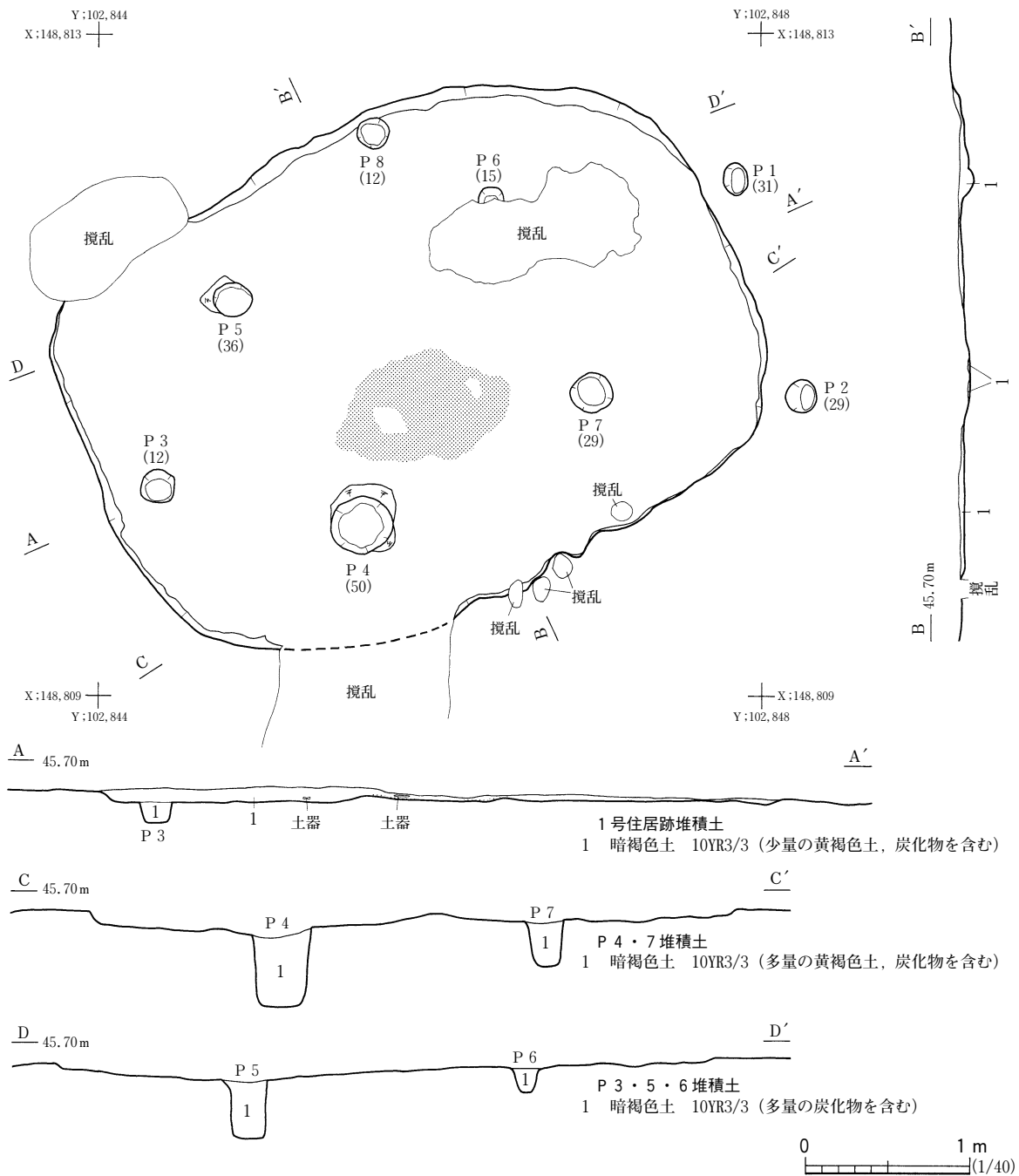


図4 1号住居跡

きることから、柱は抜き取られたと考えられる。P 1～3・8は壁際及び壁の上端よりやや外側に位置するが、検出面から浅く配置も偏りがあることからP 4～7と同質には扱えない。壁柱や支柱の可能性はある。

炉跡は、床面中央のやや南壁よりの位置に不整な楕円形の焼土化範囲をもって確認した。床面を燃焼面とする地床炉で、攪乱により一部焼土が失われている。色調は全体的に同一だが、炉跡中央部に比べ炉跡縁辺部は焼け方が弱く、その差は焼土の厚さに表れる。炉跡中央部は、厚さ10cmを測るのに対し、炉跡縁辺での焼土の厚さは2cm程度である。

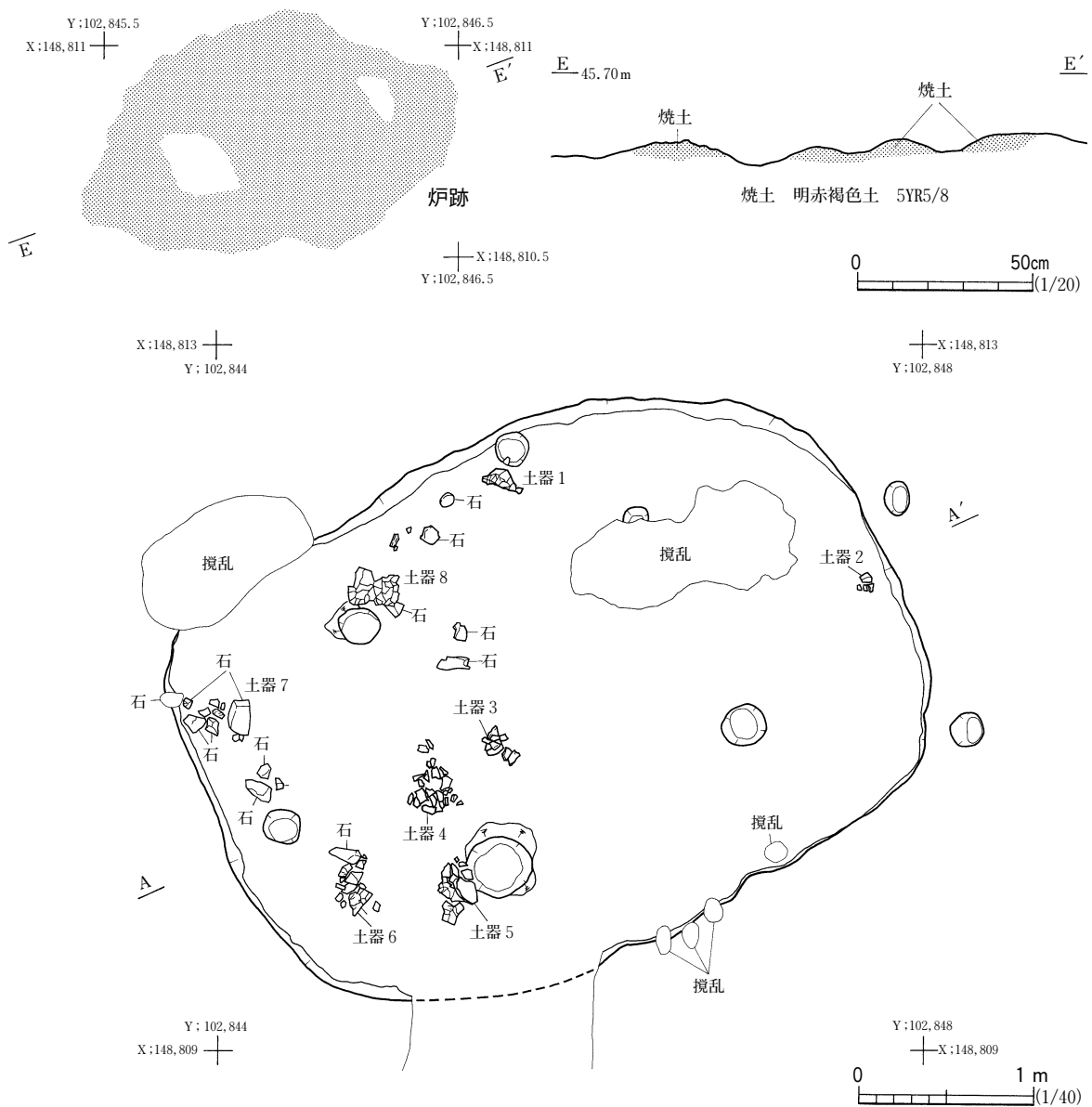


図5 1号住居跡炉跡と土器出土状況

床面から土器や石が多く出土したので、まとまりごとに番号をつけて取りあげた。住居跡西半分に集中している。完形個体が無いことや別個体の土器が小片状態で混合していること、接合関係などから考えると、土器出土状況は住居廃絶時の廃棄によるものと考えられる。

遺物 (図6・7, 写真29・30)

本住居跡からは、縄文土器600点、石器・剥片類が7点出土した。そのうち縄文土器11点と石器3点を図示した。

6図2～8はI群1類で、いずれも1段撚り原体による縄圧痕文で主要な文様が描かれている。2は波状口縁の深鉢で、おそらく波頂部と波底部の口端部には縦位の隆帯が配される。口縁直下に縄圧痕文(L)を2条施して、その下の文様帯は上下を縦位の刺突列で区画され、内部の波底部下は2段、波頂部下は推定で3段の渦巻き状の縄圧痕文(L)を施すと考えられる。それらを基点に縄圧

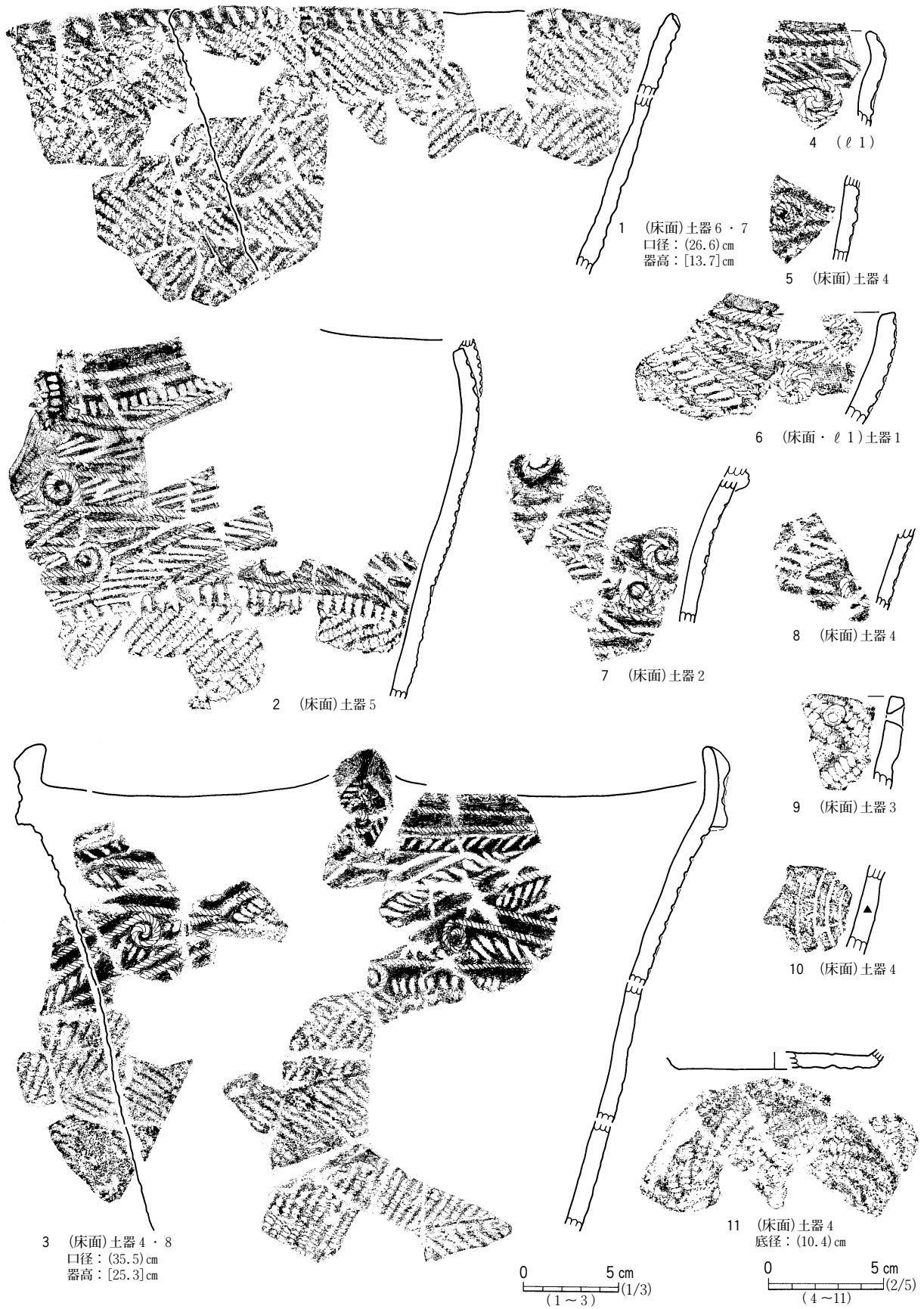


图6 1号住居跡出土遺物(1)

痕文(L)を2条一単位で斜走させて、菱形や三角形のモチーフを描く。このモチーフ同士の間集合短沈線文が充填される。胴部には非結束の羽状縄文が施される。内面はナデ調整後、部分的にミガキで仕上げられる。3は緩い4波状口縁の土器と考えられ、波頂部には突起が配される。口縁直下に、2条一組の縄圧痕文(L)を口縁部に平行させて施す。その下に上面に刻みを持つ隆帯が施されて、口縁部文様帯が上部と下部に区分されている。隆帯下部は、縄圧痕文に

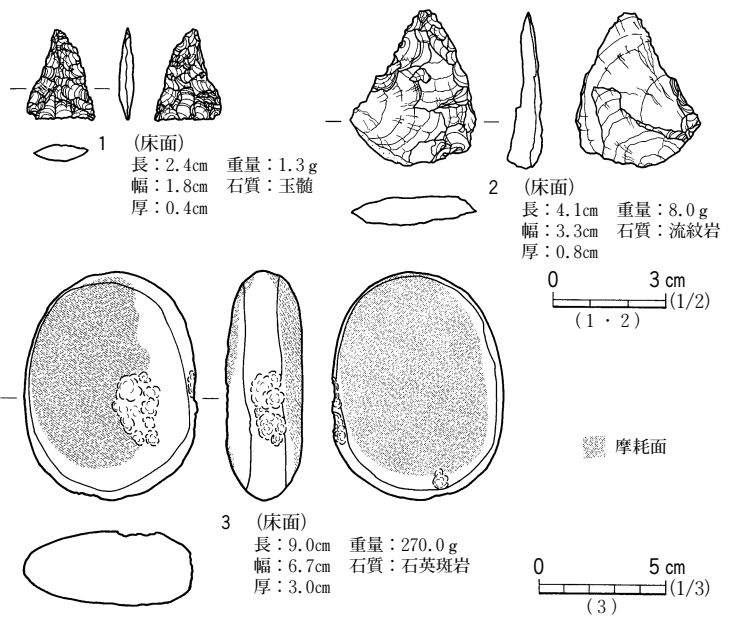


図7 1号住居跡出土遺物(2)

よる渦巻きを基点に、2条一組で縄圧痕文(L)を斜走・横走させて三角形のモチーフを描き、2条一組の縄圧痕文外に集合短沈線文を充填する。胴部には原体回転方向がやや右上に上がる非結束羽状縄文が施される。内面は剥落で判然としないが、ナデと一部ミガキが見られる。4～8も縄圧痕文(4・5・7・8はL, 6はR)の渦巻きを基点に、2条一組の縄圧痕文(4・5・7・8はL, 6はR)を斜走・横走させて菱形や三角形のモチーフを描き、2条一組の縄圧痕文外に集合短沈線文を充填している。7は上部の渦巻き部分が隆帯状になっている。いずれも内面は磨いている。

6図1・9はI群2類である。1は口端部に刺突列を施す土器で、胴部下半部は不明だが、胴部上半部から口縁部にかけて外傾する土器である。口端部以下は非結束の羽状縄文が施される。9は口端部から非結束の羽状縄文を施す土器で、補修孔が見られる。どちらも内面はナデ調整のみである。6図11はI群4類で、平底に同心円状の非結束羽状縄文が施される。6図10はII群3類で、縦位の蛇行する多条沈線が施される。

7図1は玉髄製の平基石鏃で、歪んだ二等辺三角形形状を呈する。7図2は2次加工のある剥片で、石質は流紋岩である。腹面側から調整剥離が加えられているため、石鏃未製品の可能性がある。7図3は磨石で、摩擦作業の後に正面と側縁を敲打作業に用いている。石質は石英斑岩である。

まとめ

本住居跡は、4本柱と床面中央部に地床炉を持つ住居跡で、柱穴間の距離や地床炉の配置などに規格的な構造が見られる。床面から多数の土器や石が出土しているが、出土状況から住居廃絶時に廃棄された遺物群であることがうかがえる。

本住居跡の所属時期は、床面から多数のI群土器が出土していることから、花積下層式期の住居跡と判断している。

(新海)

2号住居跡 S I 2

遺 構 (図8, 写真10・11)

本住居跡は調査区のほぼ中央、K5グリッドに位置する。周辺の地形は中位Ⅲ面に相当する河岸段丘の平坦面で、標高は45mを測る。遺構検出面はLⅣ上面である。重複する遺構は無いが、周辺には1・6号住居跡が存在する。

遺構内堆積土は3層に分けた。ℓ1・2は褐色土を基調として、焼土粒をわずかに含む。この堆積土の性状から自然堆積と判断した。ℓ3は床面の中央部に見られる不整形のくぼみに堆積した土である。また炉跡の焼土痕がℓ3を覆うことから、炉跡の掘形に充填された土と考えている。

住居跡の形状については耕作による攪乱のため全容は不明である。平面形はわずかに遺存する周壁と炉跡の位置から長方形をなすと推定される。これは本住居跡とほぼ同時期である1号住居跡の平面形が長方形であることから、それほど矛盾がないと考えられる。本住居跡の主軸方向はN30°Eである。規模は全容が把握できないため不明な点が残るが、遺存する周壁から長軸の長さが3.8mを測る。周壁は部分的に遺存する程度で、その立ち上がりはわずかである。

床面で確認できた施設は炉跡と柱穴がある。炉跡は地床炉で、床面のほぼ中央に位置する。炉跡自体も削平された状態で、わずかに焼土痕跡を確認した程度である。そのため炉跡の詳細については不明な点が多い。焼土の厚さは最大で5cmである。柱穴はP1～3を確認した。P1・2は炉跡の東側に位置する。本来は炉跡の西側にも柱穴があり、1号住居跡と同様に4本柱の住居構造をなすと推定される。P3は柱の配置からすれば住居跡推定範囲の外となり、本住居跡に伴わない可能性も考えられる。各柱穴の平面形は円形をなし、その直径は16～18cmである。深さはP1・2が26～29cmと深く、P3が10cmと浅い。P1・2では柱痕跡が確認できた。

遺 物 (図8, 写真30・31)

本住居跡からは、縄文土器8点、土師器1点、石器類3点が出土している。そのうち特徴が把握できた縄文土器3点と石器2点を図示した。

1はI群1類の破片である。文様は、縄圧痕文(R)で渦巻きと、それを基点に縄圧痕文(L)で山形のモチーフを描き、縄圧痕文間に篋状工具による集合短沈線文を充填している。上部にも集合短沈線文が充填される縄圧痕文が施されるが、それとの間には山形モチーフに平行する1条の縄圧痕文(R)が施され、山形頂部では途切れる。口縁部文様帯の下端部には区画要素が見られず、そのまま胴部の地文部に移行する。2はI群2類で、口縁部が開く深鉢形をなす。口縁直下から地文の非結束羽状縄文が施される。3はI群3類で、非結束羽状縄文が施される。1～3の内面調整はいずれもナデである。

4は2次加工のある剥片で、背面左上側縁に腹面側からの加工が施される。剥離角度が急なことから、搔器の製作途中段階の可能性はある。石質はチャートである。5は小型の敲石で、3ヶ所敲打の痕跡が見られる。表面は光沢があり形も丸いことからすれば、敲打作業以外に、摩擦作業にも

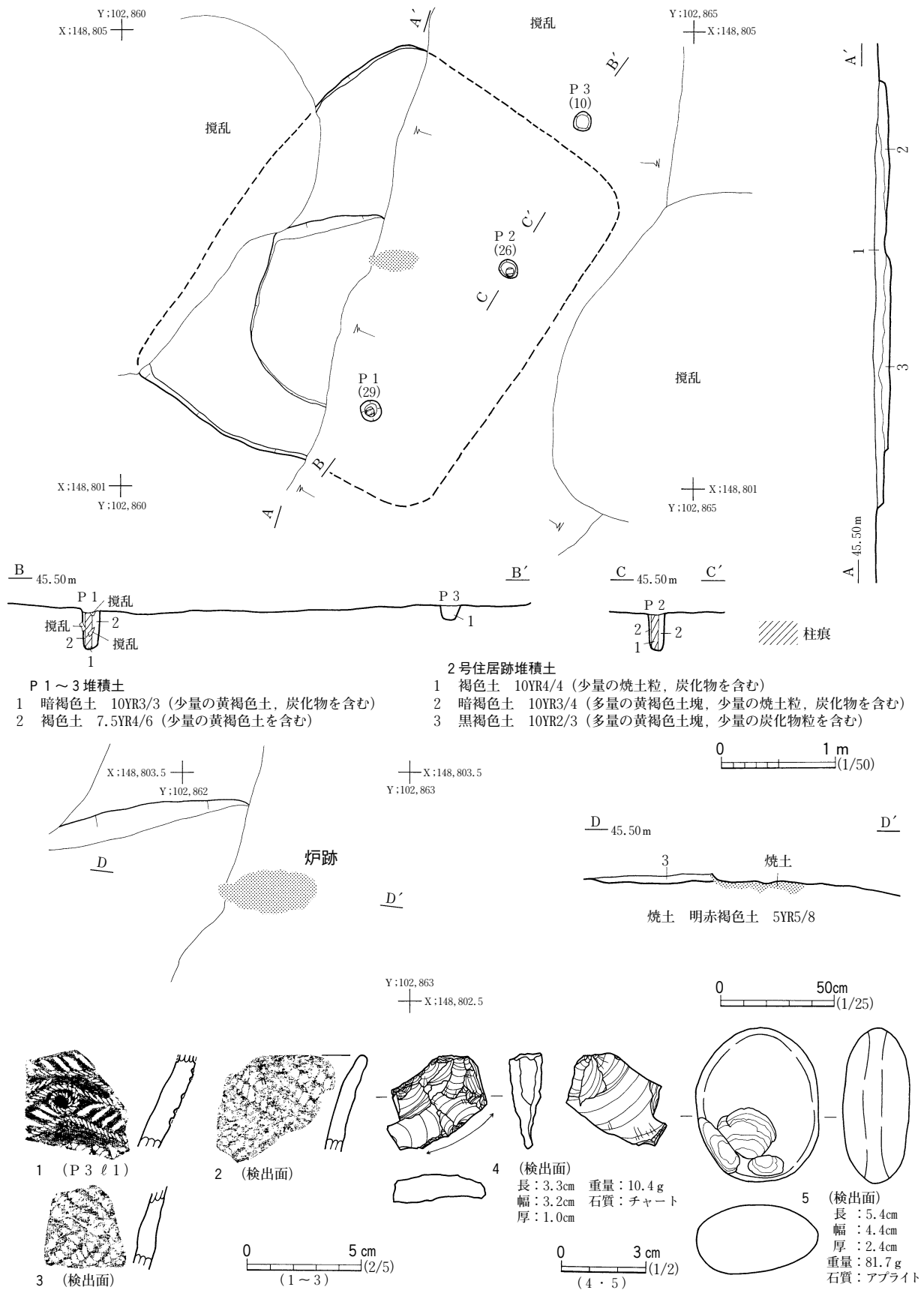


図8 2号住居跡と出土遺物

用いられたとも考えられる。石質はアプライトである。

ま と め

2号住居跡は耕作による攪乱を受け、わずかに炉跡の痕跡と柱穴を検出したに止まる。本住居跡は1号住居跡と比較すると、長軸の長さが3.8mとやや小型となるが、主柱穴の構造などから上屋構造には共通点があったと考えられる。本住居跡の所属年代は、出土した縄文土器の特徴から縄文時代前期初頭の花積下層式期と考えられる。(福田)

3号住居跡 S I 3

遺 構 (図9, 写真12・13)

本住居跡は平坦面南端部の段丘崖際、M3グリッド中央部に位置する。検出面はLⅢ a上面で、当初は周囲の褐色土に比べ若干濃い褐色土の範囲で確認したが、数回検出作業を行った結果、黒褐色土や暗褐色土の範囲をとらえ掘り込んだ。本住居跡の下部には4号住居跡があり、本住居跡がこれを切っている。

住居内堆積土は4層に分層された。ℓ1の黒褐色土とℓ2 a・bの暗褐色土は検出段階で確認していた土である。どちらも土塊状に硬化した状態のため人為的要素の強い土と判断した。ℓ3は壁際に堆積する褐色土で検出段階では確認していなかったが、壁の精査中暗褐色土塊や炭化物を含む土であることが確認できたため、堆積土と判断して掘り込んだ。ℓ3は内容から自然堆積と考えられ、ℓ1～ℓ2 bは埋め土、もしくは構築土の崩落土と考えられる。

平面形は長方形で、規模は長軸3.7m、短軸3.2mを測る。主軸方向はほぼ東西方向である。周壁は検出面がLⅢ a上面ではあるが、段丘崖際に立地するため南壁は崩落している。それ以外の壁の立ち上がりは純粋な褐色土で確認され、傾斜が緩やかである。壁高は、残りの良い北壁で検出面から20cm、東西壁では10cm前後を測る。

床はLⅣ上面のにぶい黄褐色土と4号住居跡上部の黒褐色土で確認した。LⅣ上面は主に色調の変化により堆積土と床面を分離したが、4号住居跡上部においては締まり具合で区別した。4号住居跡上部の黒褐色土は堅固に締まっており、堆積土ℓ1とは明確に分離できたため、一部サブトレッチを活用して追認した結果、黒褐色土上面を床面と判断した。

ピットは、床面・竪穴外から2基検出した。どちらも床面精査段階では把握できなかったが、床面の断ち割りを行った結果確定できた。上端規模はどちらも20cm前後で、深さは、P1が12cm、P2が20cmである。断面形はU字形・逆台形状である。規模は小さいが形態から柱穴と考えた。配置の規則性は不明だが、床面断ち割りの結果ピットの存在を確定できたことを考えれば、他にピットを発見できなかったかもしれない。炉跡は検出されなかった。

遺 物 (図9, 写真30・31)

本住居跡からは、縄文土器15点、石器・剥片類4点が出土した。そのうち縄文土器3点と石器1点を図示した。

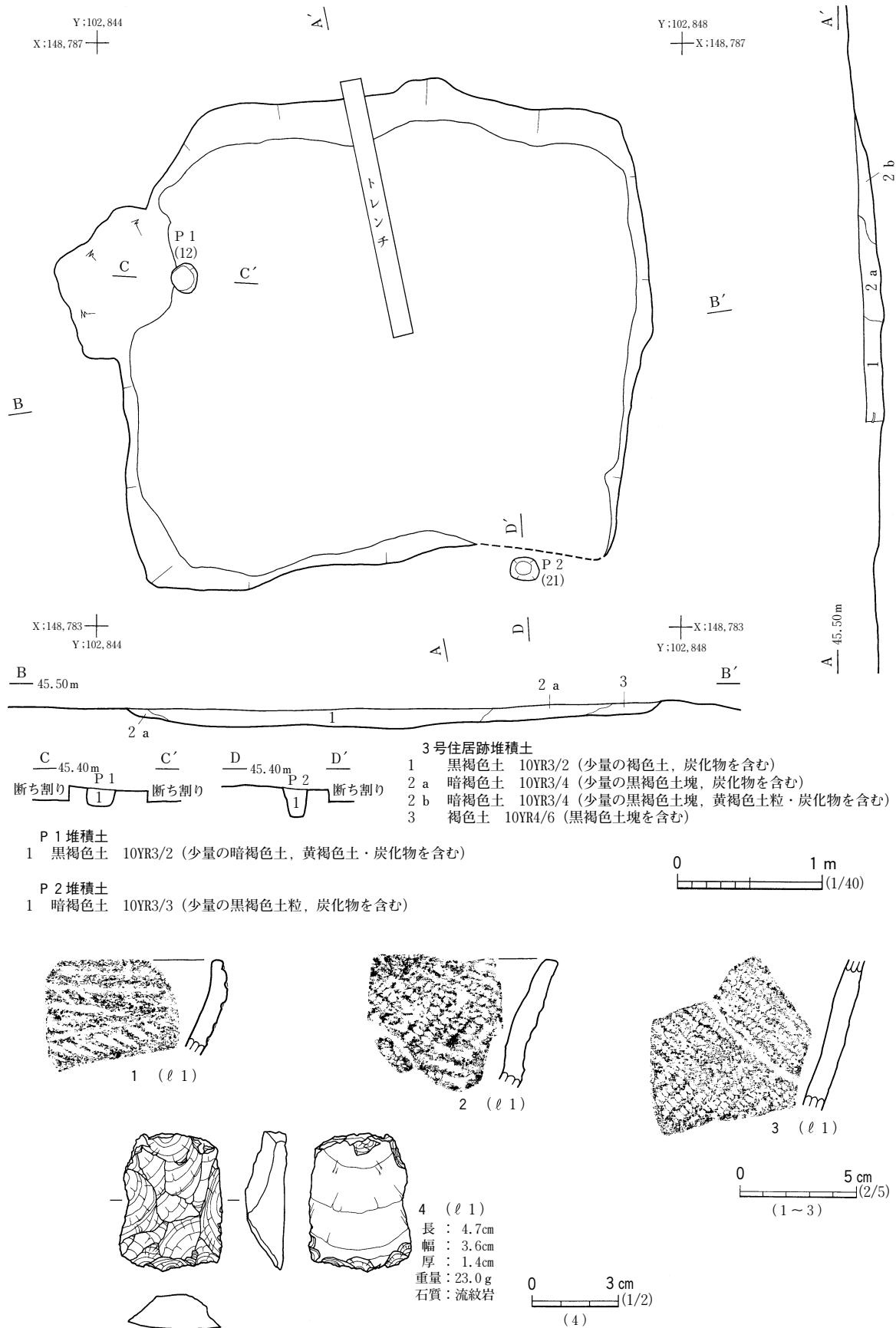


図9 3号住居跡と出土遺物

9図1はI群1類で、表面の剥落が著しく判然としないが、口縁直下に2条一組の沈線もしくは縄圧痕文を施し、その下に上部に刻みを持つ隆帯が配されて口縁部文様帯を上下に区分している。その下部は斜走・横走する縄圧痕文(R)と、その間に充填される集合短沈線文が見られる。内面はわずかにミガキの痕跡が確認できる。9図2はI群2類で、胴上半部で屈曲し、口縁部へ外傾する器形である。口端部から非結束羽状縄文が施される。内面調整はナデである。9図3はI群3類で、上下に接する原体の間が疎らな非結束羽状縄文が施される。内面調整はナデである。

9図4は腹面側からの加工で長形状に整形され、背面下部・腹面下部に比較的細かな剥離が見られること、中央部が高くなる形態から搔器と考えられる。石質は流紋岩である。

ま と め

本住居跡は、4号住居跡廃絶後に構築された住居跡で、4号住居跡床面上10cmのレベルを固めて床面にしている。炉跡は無く、柱も2本しか検出できなかったため構造には不明な点が多い。

所属時期は、堆積土中からI群土器のみが出土していることから、縄文時代前期初頭の花積下層式期の住居跡と判断している。

(新 海)

4号住居跡 S I 4

遺 構 (図10, 写真14・15)

本住居跡は、平坦面南端部の段丘崖際のM3グリッド中央部に位置する。検出面はLⅢa上面及び、3号住居跡下部である。本住居跡より3号住居跡の方が新しい。3号住居跡とは平面形に違いがあることから、3号住居跡調査時から本住居跡の存在が予想されていた。

住居内堆積土は1層のみである。暗褐色土を基調として、黒褐色や黄褐色の土塊を多量に含むことから人為堆積層と判断した。この土は本来3号住居構築時に伴い、生活により踏み固められたため締まりが強い。

平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、規模は長軸4.6m、短軸3.1mを測る。主軸方向はほぼ東西方向である。周壁は、検出面が3号住居跡下部だったこともあり全体的に残りが悪い。比較的残りが良いのは東壁・西壁で、立ち上がりかたにぶい黄褐色土で確認された。壁高は、東壁・西壁で10~20cm、北壁・南壁で6~8cmを測る。北西コーナー付近はなだらかなスロープ状になっており、入り口施設の可能性はある。

床はLⅣ層中のにぶい黄褐色土に構築されており、堅固な踏み締まりが確認された。踏み締まりは、地山のにぶい黄褐色土が平滑に硬化した状態である。ピットは、床面の断ち割りを複数回行って最終的に10cm程床面より下げたものの、一つも検出できなかった。

炉跡は、床面中央部のやや東よりに位置する円形の焼土化範囲をもって確認した。床面を燃焼面とする地床炉である。焼土面は薄く、最も厚い部分でも3cm程である。

遺 物 (図10, 写真31・33)

本住居跡からは土器は出土せず、石器・剥片類のみが266点出土した。そのうち石器5点を図示

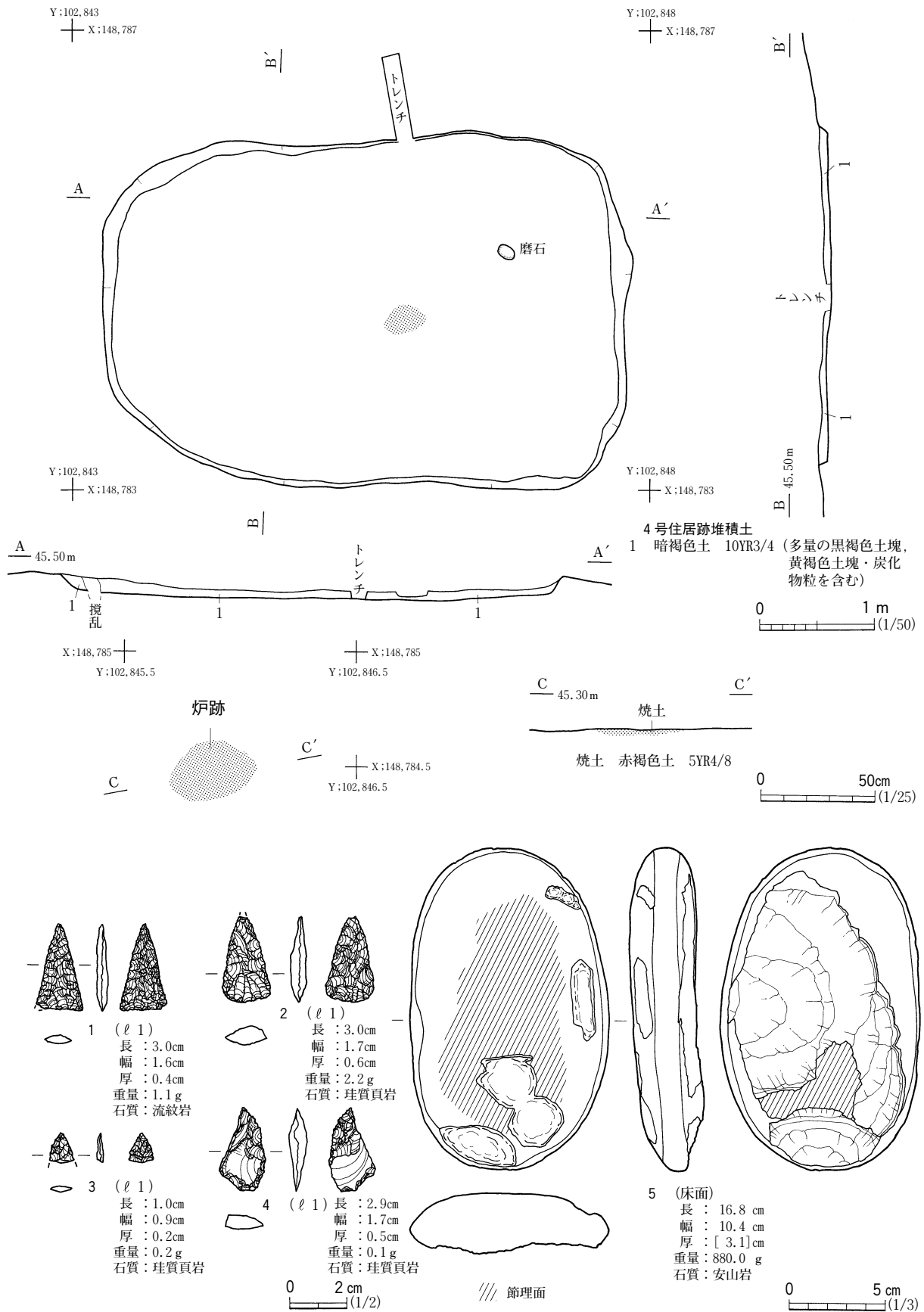


図10 4号住居跡と出土遺物

し、碎片は点数を数えて石質と重量を示した。

1～4は石鏃である。1・2は完形品で2は先端部が少々欠損している。どちらも平基で整った二等辺三角形形状を呈しており、長さもほぼ同じで3cm前後である。断面形で比べると1が扁平であるのに対し、2は比較的丸みを帯びている。2の片面は左側縁からのみ加工が加えられており、素材剥片の状態が1とは違うことをうかがわせる。3は石鏃の先端のみの資料で、4は背面・腹面ともに縁辺にだけ加工が見られることから製作途上と考えられる。石質は1が流紋岩、2～4が珪質頁岩である。5は磨石を敲石に転用したもので、側縁部で作業した際に表面が大きく剥離してしまい、機能を失ったと考えられる。石質は安山岩である。南東コーナーの床面直上ℓ1から、碎片が多量にまとまって出土したため、これらを分別して使用されている石質の傾向を出した。

(流紋岩 点数 59点, 重量約3.9g) (珪質頁岩 点数70点, 重量約4.2g)

(頁岩 点数130点, 重量約9.0g)

大きさは0.5～2.5cmで、打点部が欠損しているものが多く、残っているものの打面は狭い。バルブが平坦で、背面と腹面の剥離方向が同一であることから、連続した作業により生じたと考えられる。点数重量ともに頁岩が最も多く、珪質頁岩、流紋岩の順になっている。

ま と め

本住居跡は地床炉があるものの、柱構造が全く不明な住居跡であり上屋構造を想定するのに困難を伴う。床面ではないが、石器・剥片類が多量に出土しているのは、活発な石器製作活動を想起させる材料である。ただ、ℓ1は3号住居跡構築段階に伴う土である可能性が高いため、これに含まれる遺物が果たしてどちらの住居跡に伴うかは微妙である。今回は床面直上出土ということで、4号住居跡に伴う遺物と判断した。

所属時期は、時期決定材料である土器が全く出土していないため断定できないが、本住居跡より新しい3号住居跡が花積下層式期であることから、この時期よりは降らない。(新 海)

5号住居跡 S I 5

遺 構 (図11, 写真16)

本住居跡は南区中央部の、L・M4グリッドにまたがった場所の3・4号住居跡と6号住居跡の丁度中間点に位置する。検出面はLⅣ上面から中位である。検出段階ですでに床面が失われており、周壁や堆積土は全く残存していなかったが、焼土面を検出したので周囲の精査を行ったところ、柱穴を確認できたので住居跡と認定した。

平面形及び規模は不明であるが、ピットの配置から推定すると長軸約4.0m、短軸約3.0m程になる。主軸方向もピットの配置から、N66°Eと考えられる。床は多少削られているが焼土面のレベルから、ほぼ検出面が床面と判断した。

ピットはおそらく床面だったと考えられる範囲から4基検出した。上端規模は13～16cmで、深さはP3・4の削平が著しいため推定になるが10～24cmの範囲である。4基整然とした長方形に配

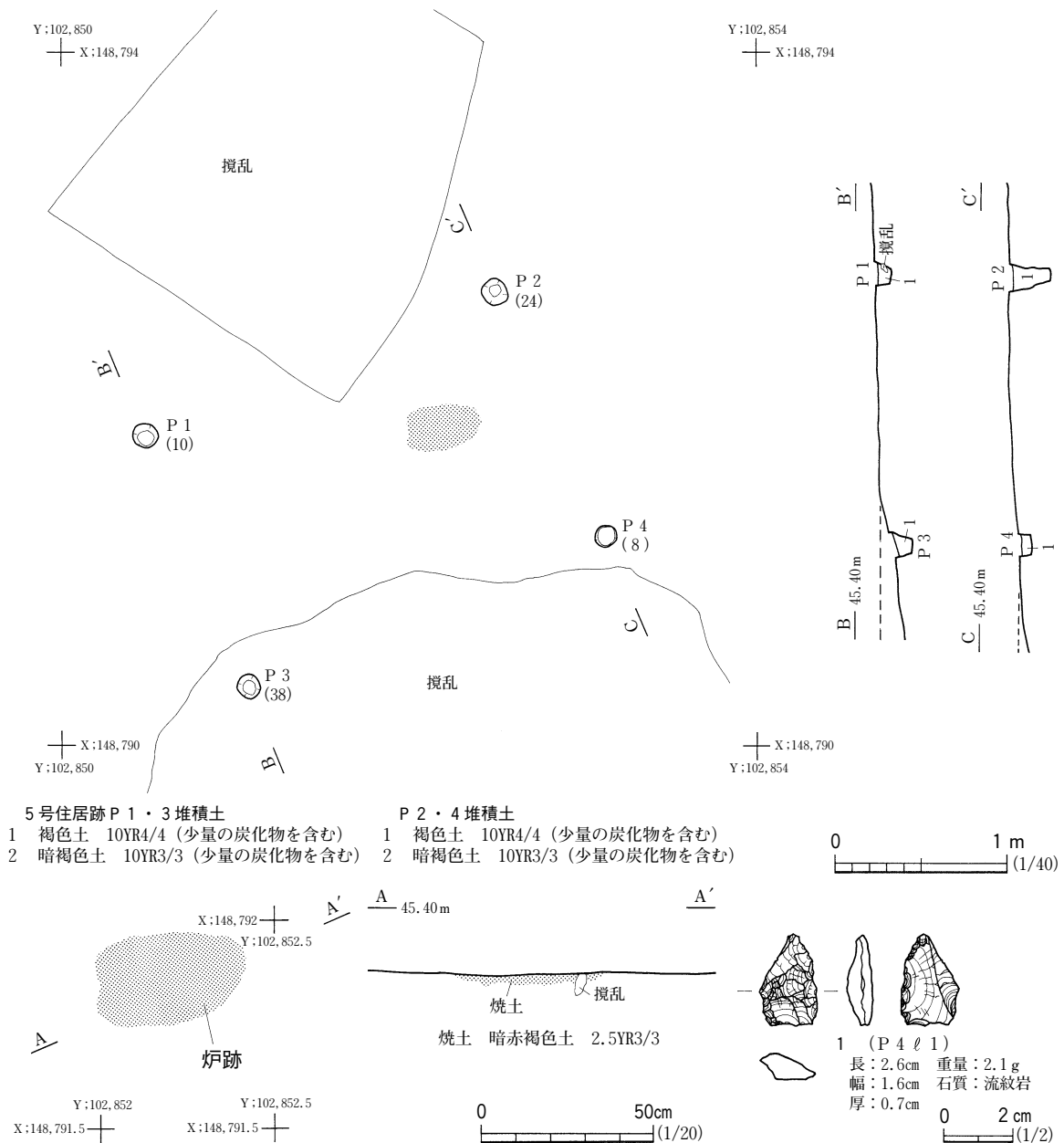


図11 5号住居跡と出土遺物

置されることから柱穴と判断した。各柱間を柱穴中央で測ると、P 1－P 2間2.2m、P 3－P 4間2.3m、P 1－P 3間1.5m、P 2－P 4間1.5mとなり、長軸方向は2.2m前後、短軸方向は1.5m前後を基調としている。

柱穴断面形は、いずれも逆台形状を呈する。柱穴内堆積土は、炭化物をごく少量含む褐色や暗褐色の土である。柱穴断面形が下端から上端へ広がる形状であることと、柱痕跡が確認されなかったことから柱が抜き取られたと判断すると、柱穴内堆積土は本来竪穴内部に堆積していた土と同じであると考えられる。

炉跡は、4基の柱穴に囲まれた範囲の中央より50cm程東北東にずれた位置に、不整な楕円形の焼土化範囲で確認した。床面が多少削られていることから焼土面の残存状況も悪く、厚い部分でも2cm

程度である。

遺物 (図11, 写真31)

本住居跡は、検出段階ですでに床面もしくは床面以下だったので、出土遺物は極端に少ない。遺構に伴う遺物は、P4内から出土した石器1点のみである。11図1は石鏃未製品と考えられる。背面・復面の側縁に加工が見られる。ただ腹面右側縁の縦割れ面が段状になっていることから、途中で製作を放棄した可能性もある。石質は流紋岩である。

まとめ

本住居跡は整然とした4本柱と1基の地床炉を有しており、1号住居跡と近似した構造を持つ。床面まで削平を受け正確な規模は不明だが、遺跡内では中型の住居跡になる。柱は住居跡廃絶時に抜かれて、上屋が解体されたと考えられる。

所属時期は、時期決定材料となる土器が出土していないため断定できないが、住居構造が1号住居跡に近似することから、縄文時代前期初頭に属すると考えている。(新海)

6号住居跡 S I 6

遺構 (図12・13, 写真17)

本住居跡は平坦面南区中央部K5グリッドの、2号住居跡と5号住居跡の中間に位置する。検出面はLIV上面から中位で、住居跡の南半分は削平されて失われていたため、検出段階ですでに焼土面が露出していた。そのため周囲の精査を行ったところ、焼土面の北から北西にかけての約1.5mの範囲に暗褐色土の広がり確認されたので、住居跡と認定して調査した。重複する遺構は無いが、住居跡北東部分と南西部分は大きく攪乱により破壊されている。

堆積土は2層確認され、 $\ell 1$ が暗褐色、 $\ell 2$ が床面中央部の窪みにのみ見られる黒褐色土である。平面形は、削平のため不明な点が多いが、北半分の形から類推すると隅丸長方形を呈すると考えられる。規模も北西壁や焼土面の位置、ピットの配置から推定で、長軸約4.0m、短軸約3.3mを測る。この主軸方向は、N55°Wである。

周壁は、北西壁と南西壁の一部が残存するのみで、それ以外は削平され失われている。壁高は、残りの良い北西壁でも5cmのみであるため立ち上がりは不明である。床は南半分が失われ、北半分だけ残存している。LIV層中のにぶい黄褐色土に構築されていて、床残存部には踏み締まりが確認された。住居跡中央部から北東壁に寄った場所に、床面より8cm低い掘り窪みがある。

ピットは、床面と思われる範囲から3基検出した。いずれも北東壁際に寄った位置にある。上端規模は全て18cm前後で、深さは、床南半分が削平で下がっているが、15~26cmの範囲である。ピット断面形は3基とも逆台形状である。攪乱で破壊されている部分が多いため配置は不明だが、規模から考えてP1~3は壁柱穴と考えられる。

炉跡は、床面中央部の2ヶ所の焼土面をもって確認した。焼土の厚さはいずれも2cmと薄く、どちらも掘り窪み内部にあって、うち一つは掘り窪みの立ち上がり部分にある。また焼土面の平面形

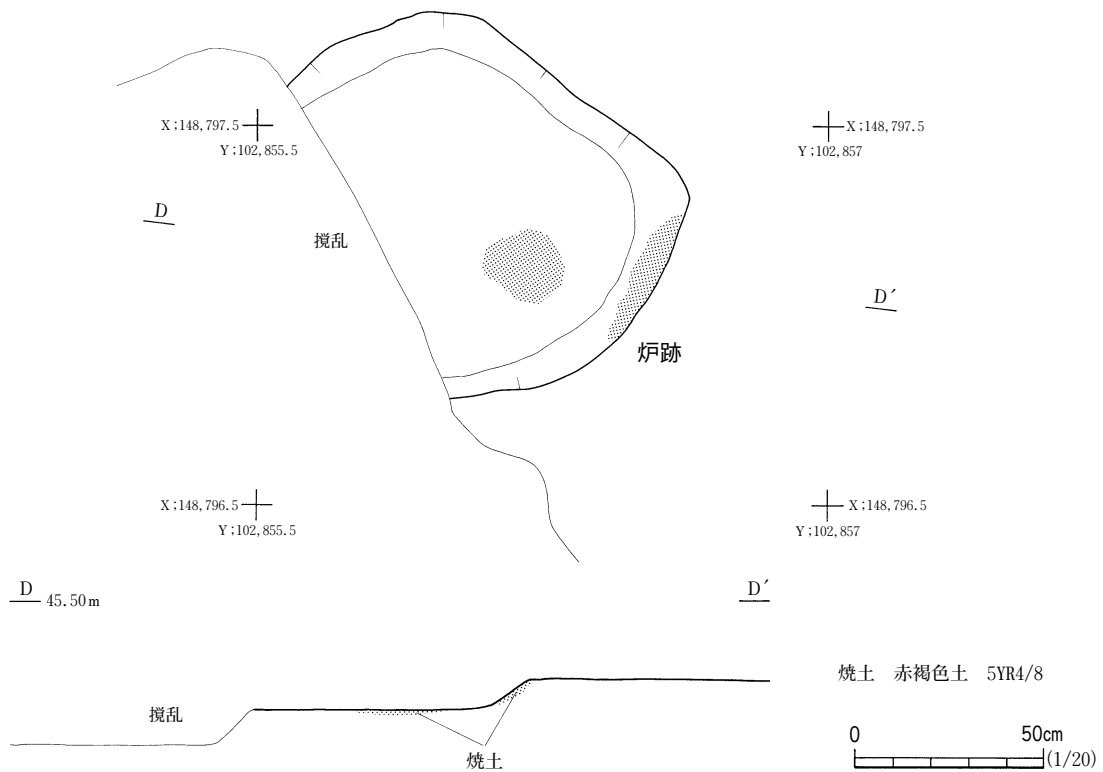


図13 6号住居跡炉跡

ま と め

本住居跡は南半分が削平されているため不明な点が多いが、柱は壁際に配置される傾向がうかがえる。炉跡は、窪みの中やその壁面に寸断された状況で確認されたことから、地床炉として使用した後に掘り込まれて現在の状況になったと考えた。本住居跡の所属時期は、床面からⅠ群2類土器が出土していることから、花積下層式期の住居跡と判断している。(新海)

7号住居跡 S I 7

遺 構 (図14, 写真18~20)

本住居跡は、平坦面中央部調査区東よりのJ5・6グリッドに位置する。北西に5号土坑、西南西に8号土坑が近接する。検出面はLⅣ上面で、長方形の黄褐色土の広がりとして確認した。重複は無く、調査区内の他遺構に見られる耕作等による攪乱も少なかった。南東壁付近には風倒木痕がかかっているが、本住居跡の方が新しい。

堆積土は3層に分層された。l1はLⅠの耕作土である。l2は黄褐色土で住居跡内のほとんどを埋め尽くす。混入物が少ないことから自然堆積土と考えられる。l3は貼床の土である。平面形は北壁が攪乱や崩落により歪んだ形になっているが、本来は隅丸長方形である。主軸方向はN78°Eである。規模は長軸2.8m、短軸2.2mを測る。周壁は、45°~80°の傾斜で比較的急に立ち上がっており、壁高は18~22cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、北側にやや傾斜している。床面全体には貼床が施されており、弱く踏み締まっていた。

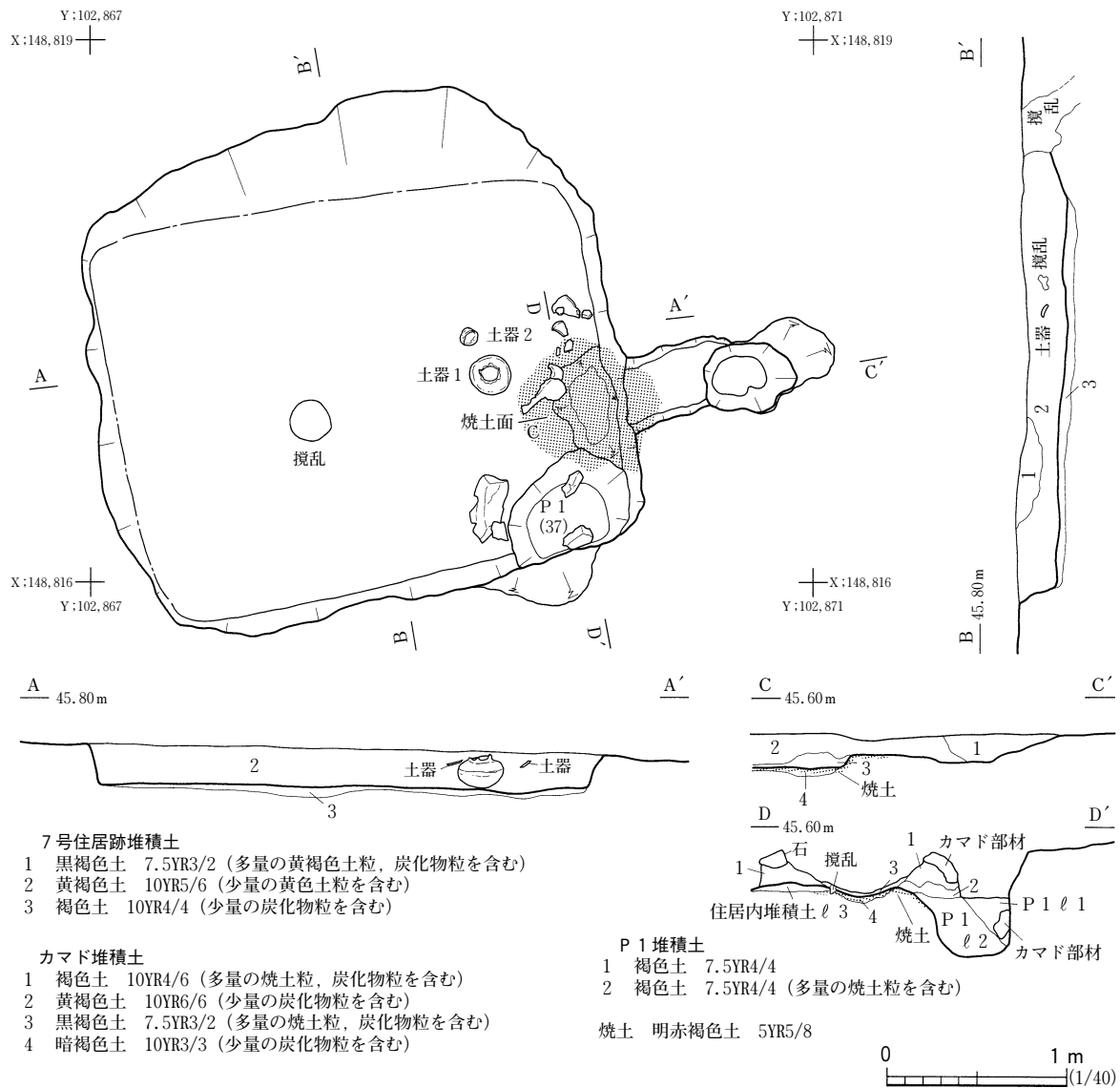


図14 7号住居跡

カマドは、東壁中央からやや南よりの位置に構築されていた。掘形は床面から約10cm掘り下げて作られており、さらに粘土を貼って燃焼部にしている。カマドの中央やや北寄りには、一部袖に使ったと思われる褐色粘土が検出された。カマドの袖材と思われる褐色粘土、および凝灰岩製の芯材が、南東隅のP1上層部から出土している。このことから住居廃絶時にカマドは破壊され、その後部材をP1に埋めたと推測される。

カマド内堆積土は4層に分層される。ℓ3は、焼土・炭化物粒が多量に認められたのでカマド天井の一部と考えられる。ℓ2は、住居跡内ℓ2に近似することから、住居跡と同時に埋没したと考えられる。ℓ1は、さらに上位の自然堆積層である。煙道は燃焼部から住居跡東側へ真っ直ぐに約1m伸びている。煙道底面は平坦に構築され、先端部に南北40cm、東西50cmの煙出しピットが認められた。煙出しピットの深さは検出面から15cmを測り、煙道底面よりもさらに深く掘り込まれていた。焼土は焚き口から煙道の付け根にかけて確認できた。

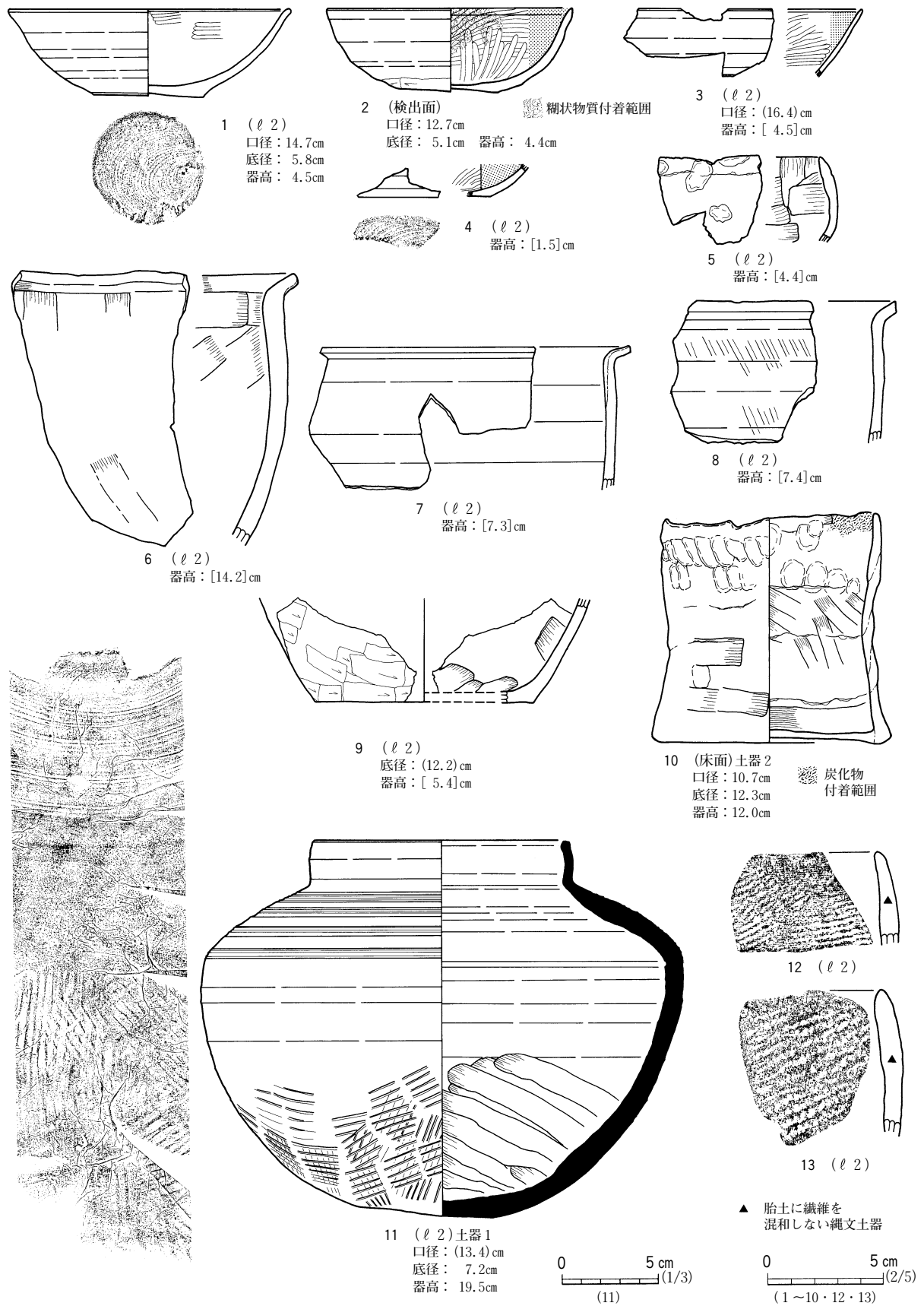


図15 7号住居跡出土遺物

ピットは、カマド右袖部に接する形で1基検出した。P1の平面形は東西に長い楕円形で、長径75cm、短径50cm、深さは床面から約37cmを測る。カマドに接するような位置にあることや、規模が大きいため、貯蔵穴と考えられる。なお住居跡内の床面からは、数度の断ち割りを行ったにも関わらず、柱穴になるようなピットは1基も確認されなかった。壁柱穴や周溝なども確認されなかった。

遺物 (図15, 写真34)

本住居跡からは、縄文土器3点、土師器105点、須恵器1点が出土した。そのうち、縄文土器2点、土師器10点、須恵器1点を図示した。

15図1～11はⅢ群で、1～4はロクロ整形された土師器杯である。1は口縁部が緩く外反する器形で、内面は摩滅のため黒色処理がはがれており、横方向のミガキもわずかに痕跡が認められる程度である。底部は回転糸切り無調整である。2は内湾して立ち上がり、口縁部が緩く外反する器形で、外面底部付近は切り離し後ヘラケズリが施される。内面は横方向に磨いた後、底面中央から放射状に磨きあげられる。また黒色処理が施されている。底部はヘラケズリで調整される。この杯の内面には赤色の粉状物質が散見され、顕微鏡観察の結果漆の残留物であることが判明した。赤色物質の他、黒色の糊上物質も確認されるため、漆の汲み取り作業に使用した可能性がある。3は内面にミガキと黒色処理が観察される。4は底部のみで、回転糸切り無調整である。

5は碗形の土器と考えられ、外面には指押さえが見られる。ナデの痕跡が不明瞭だが、輪積み痕が部分的にしか確認できないことより、輪積み痕は基本的にナデ消していると考えられる。内面は指ナデの痕跡が顕著である。6～9は甕で、7・8はロクロ整形されており、6・9は非ロクロ整形である。6～8は口縁部資料で、いずれも緩く内湾気味に立ち上がり、口縁直下が直角に外傾する。8にはタタキの痕跡がわずかに認められる。6は表面が摩滅しており、ナデの痕跡がわずかに認められる程度である。9は底部付近の資料で、外面はケズリ、内面はナデで調整してある。10は筒形土器で、丸い底部を作り、そこへらせん状の輪積みで土器を立ち上げ、口縁部のみ水平に粘土紐を回して整形する。口縁直下に指押さえの痕跡が多いのは、輪積みの手順が違うことに起因すると思われる。外面は輪積みを消す程度の横ナデ、内面は底部との接合部を丁寧な横ナデで接合し、上部には縦・斜め方向のナデ調整が施される。口縁部付近になるほど指押さえの痕跡と輪積み痕が見られるのは、上部になるほどナデ調整が粗雑になることを示している。11は須恵器の短頸壺で、口縁部・肩・体部と別々にパーツを作ってから、接合して成形されている。外面は口縁部からロクロナデ、搔き目、ロクロナデ、タタキで整形され、内面は口縁部から体部前半までロクロナデ、それ以下は、斜め方向の指ナデが施される。なおこの須恵器の口縁部は意図的に割られてから、床面に正位に設置されていた。

15図12・13はⅡ群3類である。どちらも口縁部が内湾する器形で、口縁直下から縄文が施されている。内面はナデ調整である。

ま と め

本住居跡は、カマドと貯蔵穴を持つが、床面に柱穴を持たない住居跡である。竪穴外部も検出作業を行ったが柱穴は発見できず、家屋としての構造は把握し切れなかった。所属時期は、出土した土師器から9世紀後半段階と推定される。(玉川)

8号住居跡 S I 8

遺 構 (図16, 写真21・22)

本住居跡は北区平坦面の調査区東よりのG5・6グリッドに位置する。検出面はLIV上面から中位で、住居跡の南東部分は掘削を受けており床面も失われている。にぶい黄褐色の地山面に、不整形の黒褐色土の広がりを確認した。重複遺構は無いが、住居跡中央から北側1/3ほどが風倒木痕の上面に床を構築している。本住居跡はこの風倒木痕より新しい。

住居内堆積土は2層に分層された。ℓ1は黒褐色土で、炭化物・黄褐色土粒を含む。ℓ2は暗褐色土で、少量の炭化物・黄褐色土粒を含む。堆積状態からいずれも自然堆積と考えられる。平面形は、南東コーナーが若干膨らむ不整な方形で、主軸方向はほぼ南北方向を向く。規模は長軸2.6m、短軸2.5mで、わずかに南北に長い小型の住居跡である。周壁は南東コーナーが欠失する。検出面が深かったため残りが悪く、残りの良い西壁でも10cmのみで立ち上がりは判然としない。床も南東部分が失われている。LIV層中に構築されているが、この付近のLIVは少量の礫を含み自然の状態でも硬度がある。西から東へ傾斜しておりその高低差は最大10cmを測る。住居跡中央部には、床面よりも5cm低い掘り窪みがある。

ピットは、床面・竪穴外から2基検出された。上端規模は16~24cmで、深さは16~19cmの範囲である。断面形はいずれもU字形である。P1の上端は崩れている。配置は不明であるが形態・規模から柱穴と考えられる。柱穴内堆積土はどちらも暗褐色土で、黒褐色土粒を含む。住居内ℓ2とは微妙に異なる土である。

炉跡は、床面中央部より若干南に位置する焼土面をもって確認した。焼土は3cmと薄い。床面中央部の掘り窪みにかかっており、一部斜面になっている。掘り窪みと焼土面のどちらが先かは分からないが、掘込炉とするならば窪みの最下底部を使用しないのは不自然であるので、本炉跡も元は地床炉で、燃焼後に炉跡の一部が削られて現状になったと考えている。

遺 物 (図17, 写真30・31)

本住居跡からは、縄文土器37点、石器・剥片類5点、焼成粘土塊2点が出土しており、そのうち縄文土器7点、石器1点を図示した。

17図1・2はI群2類、3~5がI群3類であるが、1・3・5は同一個体の可能性が高い。1・3・5は緩やかに外傾する器形で、0段多条原体で非結束羽状縄文を施しており、口端部は施文幅が極端に狭くなっている。口端部に加飾するタイプの土器と同様に口端部を特殊化していると考えられる。内面はナデ調整である。2は外傾して口縁部で少し屈曲し、口縁付近でわずかに内湾する

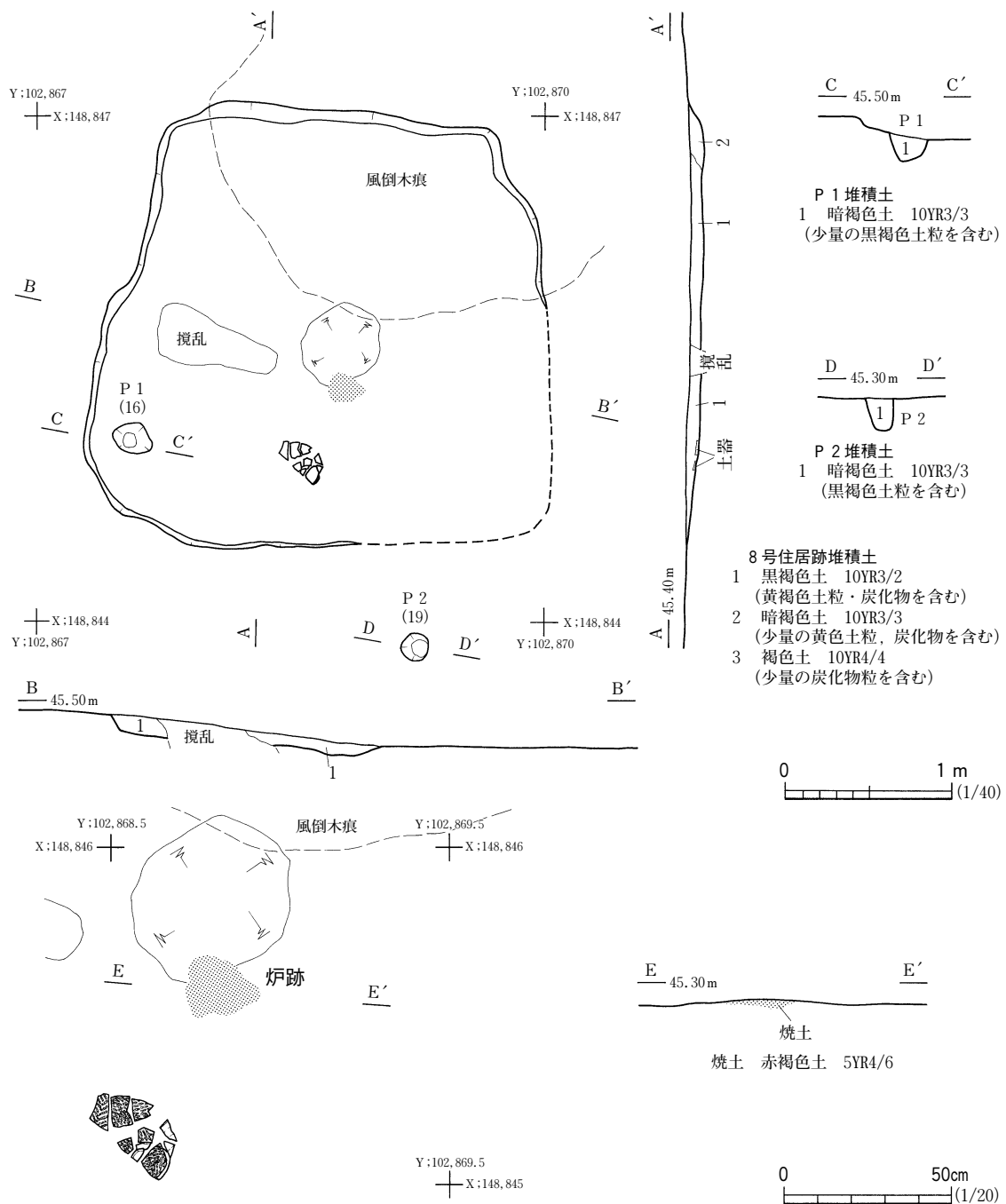


図16 8号住居跡

器形を呈する。口縁直下のみ原体を重ね気味に回転する非結束羽状縄文が施される。原体は0段多条とRLが用いられる。内面はナデ調整後、ごく一部ミガキが施される。4は底部付近の資料で、非結束羽状縄文が施される。内面はナデ調整である。

6は平基の石鏃で先端部が欠損している。石質は流紋岩である。

まとめ

本住居跡は今回の調査区内で最も小型の住居跡である。床面中央に地床炉を持ち、完全には明らかでないが壁際と竪穴外部に柱を持つ住居構造を有する。竪穴の規模が小さいことから、柱を壁際

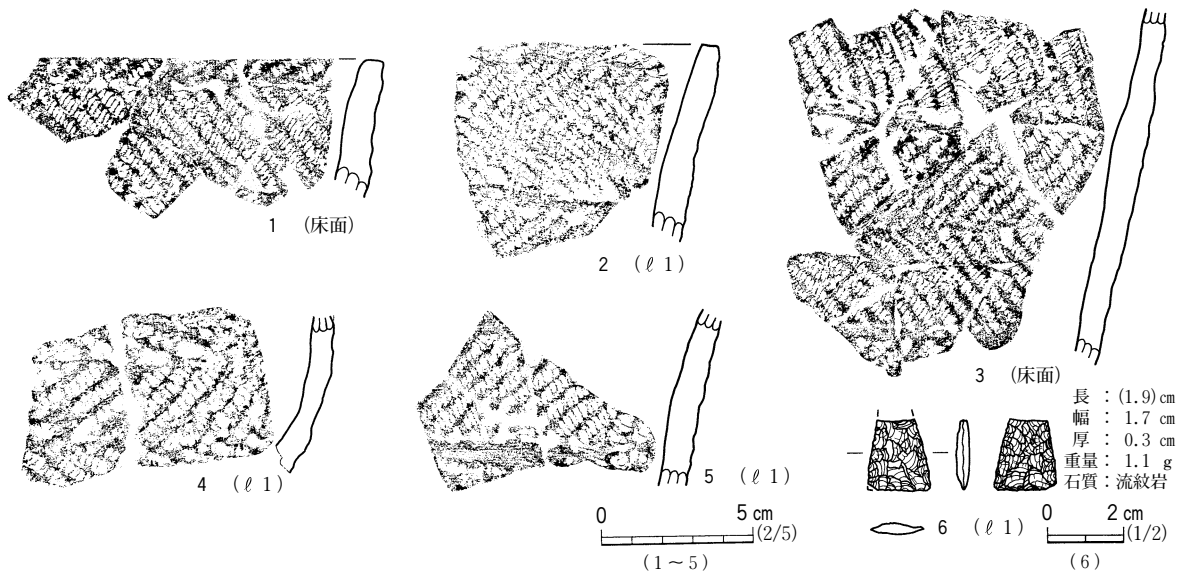


図17 8号住居跡出土遺物

に配して住居内スペースを有効利用する考えがあったと思われる。本住居跡の所属時期は、床面からI群2類土器が出土していることから、花積下層式期と考えられる。(新海)

9号住居跡 S I 9

遺 構 (図18, 写真23・24)

本住居跡は平坦面北区中央部のG 4・5グリッドに位置する。この地点は削平によりL III aの褐色土が全く残存していないため、L IV上面～中位での検出となった。当初は長方形の暗褐色土の範囲で確認していたが、精査の結果一回り大きい褐色土の部分までが住居内堆積土であることが分かった。重複する遺構はないが西コーナー部分には倒木痕がかかっている。本住居跡はこの倒木痕よりも新しく、倒木痕上面を床面にしている。

住居内堆積土は3層に分層された。ℓ 1は炭化物を少量含む暗褐色土、ℓ 2は炭化物を微量含む褐色土で、どちらも検出段階で確認されていた土である。ℓ 3は多量の炭化物粒と褐色土粒を含む黒褐色土で、ℓ 1・2に覆われて床面直上のみ堆積する土である。ℓ 1～3の堆積状態はほぼレンズ状を示すことから、自然堆積と考えられる。平面形は不整形で、規模は長軸3.7m、短軸3.3mを測る。主軸方向はN30° Eである。周壁は全周緩やかに立ち上がる。南西壁は特に緩やかで、全体的にスロープ状を呈する。壁高は、残りの良い部分で15cm、低い部分でも10cm前後を測る。

床面はL IV層中のにぶい黄褐色土に構築されている。この地点のL IVは礫を含んでおり、また一部風倒木痕上面であることから、自然の状態でも堅固で人為的な踏み締まりは確認できなかった。床面は平坦であるが、北西から南東へ傾斜しており、その高低差は10cmを測る。床面中央部からやや北東寄りの位置に、最大幅1.4m、最深部で床面から6cm低い掘り窪みがある。ピットは、複数回床面の断ち割りを行ったが、1基しか検出できなかった。P 1は壁の立ち上がり部分にあり、上端幅35cm、深さ20cmを測る。1本のみなので配置は不明だが、壁柱になると考えられる。炉跡は確認

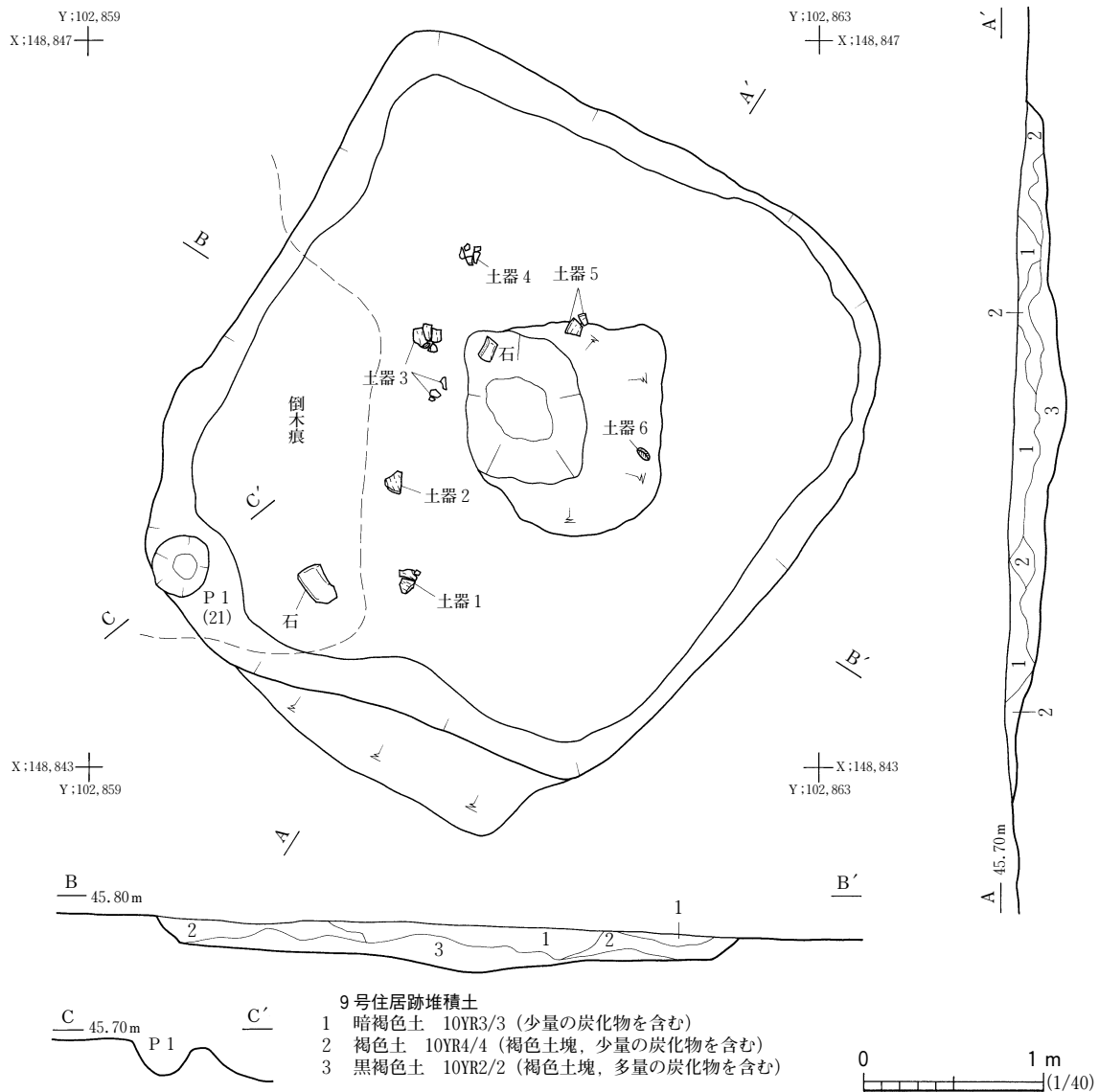


図18 9号住居跡

されなかったが、6号住居跡や8号住居跡のように燃焼面形成後に床面掘削が行われたとすると、床面中央からやや北東よりの位置の掘り窪み部分に炉跡があったことも考えられる。

遺物 (図19・20, 写真31~33)

本住居跡からは、縄文土器227点、石器・剥片類26点が出土した。そのうち縄文土器15点、石器4点を図示した。

19図2~5, 7~10, 13, 20図1はI群1類である。2・4・5・7・8は同一個体で、胴部上半から外傾してきて、口縁部が微妙に内湾する器形で波状口縁を呈する。口縁部文様帯に刻みを持つ隆帯を施して、口縁部文様帯を上下に区分している。上部は斜走・横走する縄圧痕文(L)を間隔をおいて2条施して、その間に原体末端による刺突を列点状に施文している。下部は口縁波頂部下に縄圧痕文(L)による渦巻きをおそらく3段重畳させて、そこを基点に2条一組の縄圧痕文(L)を斜走させて菱形や三角形のモチーフを描き、2条一組の縄圧痕文外に集合短沈線文を充填している。

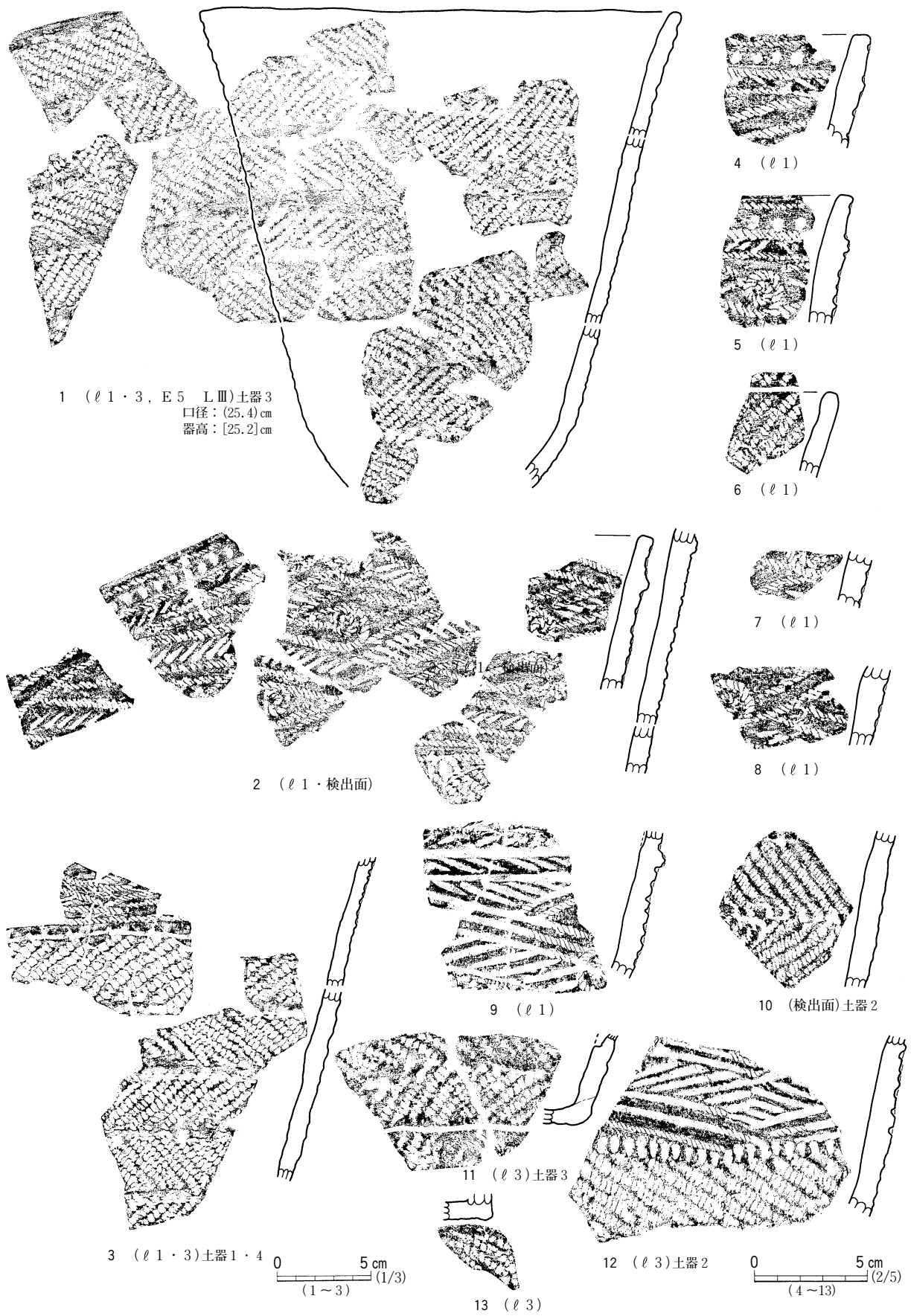


图19 9号住居跡出土遺物(1)

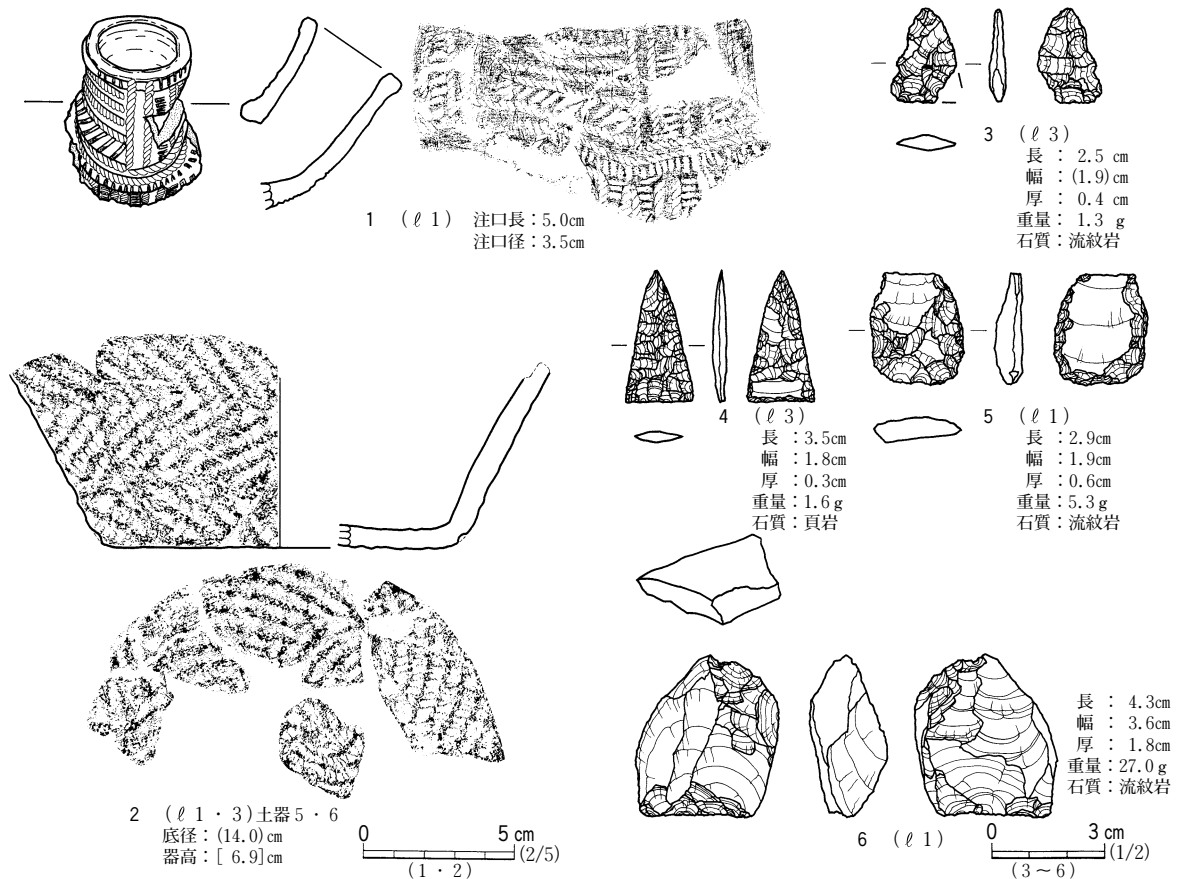


図20 9号住居跡出土遺物(2)

下部文様帯下端は縄圧痕文(L)を1条横走させて胴部の地文と区画している。内面はナデのみが施される。3は口縁部文様帯下半以下の資料で、縄圧痕文(L)で斜走・横走する文様が描かれる。口縁部文様帯下端区画は1条の撚糸圧痕文(L)が使用されている。撚糸は原体末端を縛り、左から右へ連続押捺している。胴部は非結束の羽状縄文が多段に施される。内面は、胴部上半にはミガキ、胴部下半はナデが見られる。

9は口縁部近くの破片で、口縁部文様帯が刻みを持つ隆帯で上下に区分されている。隆帯両脇には沈線が併走して隆沈線になっている。上部は沈線と斜位の集合短沈線文らしき文様が、若干認められるのみである。下部は縄圧痕文(L)による渦巻きを基点に、2～3条一組の縄圧痕文(L)が斜走して菱形や三角形モチーフを描き、2～3条一組の側面圧痕文外に集合短沈線文が充填される。縄圧痕文は施文後に沈線でなぞられて節が磨り消されている部分がある。内面は全面磨かれている。12も3条一組の縄圧痕文施文後に修整した沈線を主文様要素にしていることから、9と同一個体と考えられる。口縁部文様帯の下端区画には刺突列を用いている。体部にはおそらく羽状縄文が施される。9・12からは縄圧痕文施文後に、沈線で修整する技法の存在がうかがわれる。

20図1は注口土器の注口部分で、付け根部分に横走する2条の縄圧痕文と縦位のスリットを施して、口縁部文様帯と区画している。口端部には縦位のスリットが巡らされるが、途中は摩滅しているので全周するかは不明である。口端部から付け根部分へ縦位の縄圧痕文(L)を、正面中央部から

反時計回り方向に4列施して背面中央に至り、各縦位の2条一組縄圧痕文間には、横位のスリットが充填される。正面中央から時計回り方向には、口端部から4条の縄圧痕文(L)と集合短沈線文が横位に展開して、背面中央に至る。これらは注ぎ口に平行する。口縁部文様帯方向へは刻みを持つ3条の隆帯と、それに沿う縄圧痕文(L)が施される。

19図1と6はI群2類である。1は底部が残存していないが、19図13が同じ場所から出土しているので平底の可能性がある。胴部から外傾して立ち上がり口縁部は外反する。口端部に狭い無文部を残して、それ以下にRL・LR原体を交互に回転施文して非結束羽状縄文を施している。6は口唇部にも縄文が見られる。1・6どちらも内面はナデのみである。19図10はI群3類で0段多条原体とLR原体により非結束羽状縄文が構成される。19図11・13と20図2はI群4類で、19図13は不明だが、19図11と20図2はおそらく底部中心から同心円状に非結束羽状縄文が施される。いずれも内面はナデ調整である。

20図3・4は石鏃で、どちらも平基で二等辺三角形状を呈する。石質は3が流紋岩、4が頁岩である。6は流紋岩製の楔形石器で、背面・腹面ともに両極打法による剥離が顕著である。5は二次加工のある剥片で、背面・腹面両側から加工されている。石質は流紋岩である。

ま と め

本住居跡は、柱穴の配置や炉跡の構造が不明であるが、炉跡については床面中央部より北東よりの位置の窪み部分に、地床炉があった可能性だけ指摘した。

所属時期は、 ℓ 3から多量のI群土器が出土していることから、花積下層式期の住居跡と判断している。

(新 海)

10号住居跡 S I 10

遺 構 (図21, 写真25・26)

本住居跡は平坦面北区南よりのH4グリッドに位置する。検出面はLIV上面から中位で、焼土面が発見されたことから周囲の精査を行い、柱穴を確認したことから住居跡と認定した。検出段階ですでに床面は失われていると考えられ、周壁や堆積土は全く無い。

平面形及び規模は不明であるが、ピットの配置から推測すると長軸約4.0m、短軸約3.0mになる。主軸方向はN29°Eである。床は残存していないと考えられるが、焼土面のレベルからLIV上面もしくは中位のなび黄褐色土に構築されていたと考えられる。

ピットは、おそらく床面だったと考えられる範囲から3基検出された。P2・3の延長線上にもピットの存在を想定したが、風倒木痕上にあたり確認できなかった。上端規模は20~35cmで、深さはP3が深く検出面から55cmあり、P1・2は24~27cmの範囲である。3基が整然とL字形に配置されることから柱穴と判断した。各柱間を柱穴中央で測ると、P1-P2間2.4m、P1-P3間2.9mである。

柱穴断面形はU字形や逆台形状であるが、P3は上端が下端の2倍ほどになり大分広がっている。

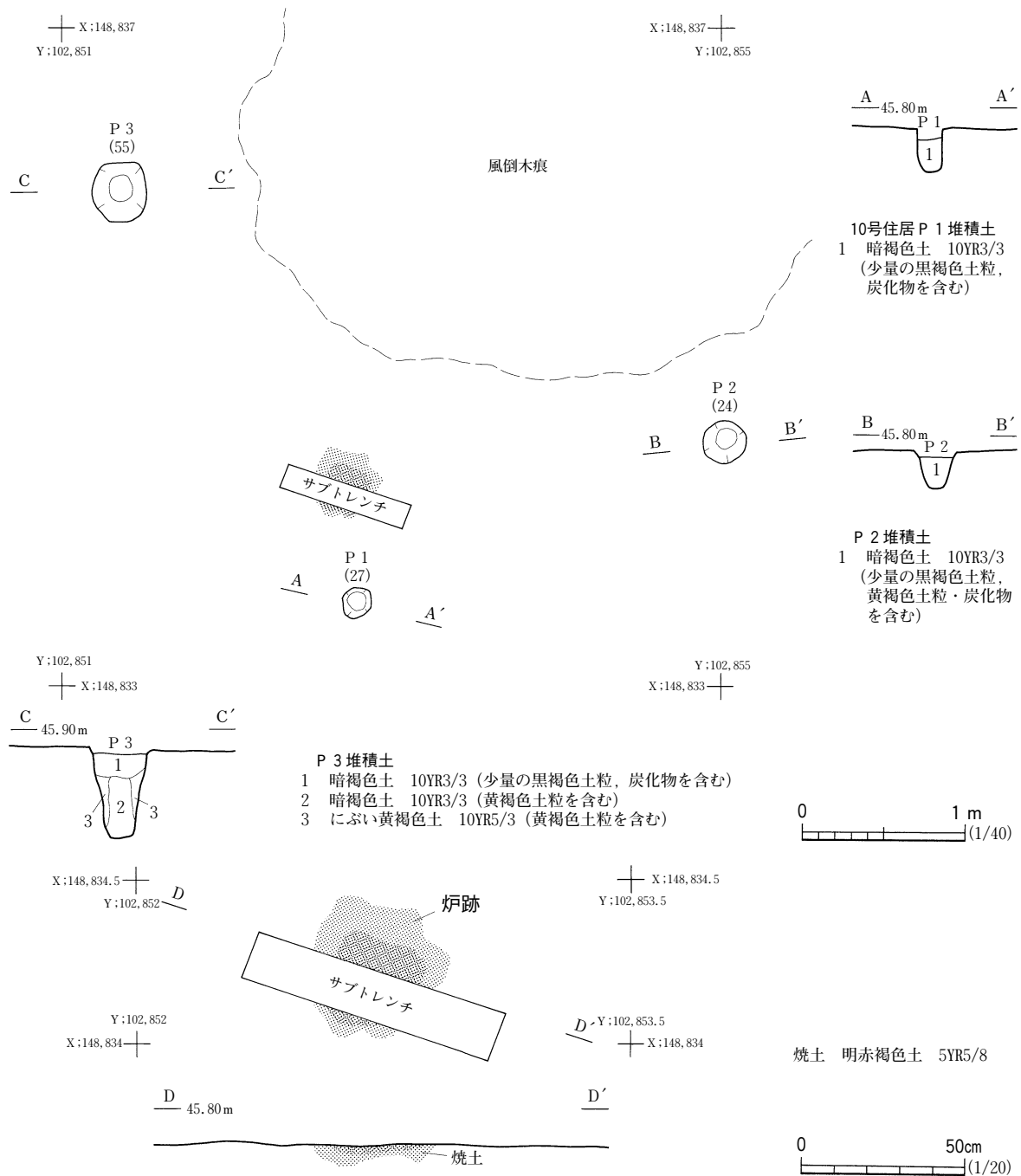


図21 10号住居跡

柱穴内堆積土は、炭化物・黒褐色土粒をごく少量含む褐色や暗褐色主体の土である。P 3のように下端から上端に広がる断面形を呈するものや、堆積土の状態から柱は抜き取られていると考える。そうすると、柱穴内堆積土は本来竪穴内部に堆積していた土と同じである可能性が高い。炉跡はP 1から50cm北の位置に、不整形の焼土化範囲で確認した。炉跡は地床炉で中央部が強く焼けており、部分的に硬化している。

遺物

本住居跡は検出段階で床面が失われているため堆積土が無く、またピットからの出土も無かった

ので、住居跡に伴う遺物は無い。

ま と め

本住居跡は、3本もしくは4本の柱と地床炉を有する住居跡である。所属時期は出土遺物が全く無いため断定できないが、住居構造が他の住居跡と類似すること、遺跡全体の土器出土量に占める縄文時代前期初頭の割合が極めて高いことから、本住居跡も前期初頭と考えている。(新海)

第3節 土 坑

今回の調査で検出された土坑は全部で9基である。全て平坦面上にあり、調査区全体にまばらに分布している。出土遺物が少なく時期を決定するのが難しいが、LⅢ a由来の褐色系の土が堆積する土坑と、LⅡもしくはLⅠ由来ではないかと思われる黒褐色系の土が堆積する土坑に大きく分かれるので、時期差があるのは確実である。

1号土坑 SK1 (図22, 写真27)

本土坑は調査区南端のM4グリッドに所在する。周囲はLⅢ aが失われているので、LⅣ上面で検出した。重複する遺構は無い。

土坑内堆積土は3層に分層された。ℓ1・2はいずれも褐色土で、微妙な色調で区分できるLⅢ a由来の土である。ℓ3は明黄褐色土で褐色土塊を含むLⅢ a・LⅣの混合土である。本来の検出面がLⅢ a上面と考えられることから、ℓ1～3は崩落土や掘り起こした土の再流入土と判断される。レンズ状堆積を示すことから自然堆積と考えられる。主軸方向はほぼ東西方向である。

平面形は不整長方形で、長軸160cm、短軸68cmを測る。検出面から底面までの深さは42cmで、底面中央部の窪みの底までは58cmを測る。周壁はにぶい黄褐色土で立ち上がりを確認した。全周垂直気味に立ち上がるが、南壁上端付近は崩落しており緩やかになっている。底面はLⅥ上面で止まり、緩やかに中央へ傾斜している。中央部には上端幅最大48cmの窪みがある。

遺構内から遺物が出土していないため所属時期は不明である。本土坑は、平面形・断面形・底面の窪みから陥し穴と判断している。検出面がLⅣ上面のため浅く見えるが、本来はもっと深いと考えられる。(新海)

2号土坑 SK2 (図22, 写真27)

本土坑は調査区南端のM2グリッドに所在する。検出面はLⅢ a上面で、重複する遺構は無い。土坑内堆積土は3層に分層され、いずれも炭化物粒を含む暗褐色土であり、ℓ3のみ褐色土粒が混じる。レンズ状堆積であることから、自然堆積と考えられる。

平面形はやや北東-南西に長い円形で、径75~80cm、検出面から底面までの深さは最深部で22cmを測る。周壁の立ち上がりはにぶい黄褐色土で確認され、南東半分は掘り過ぎてしまったため不明だ

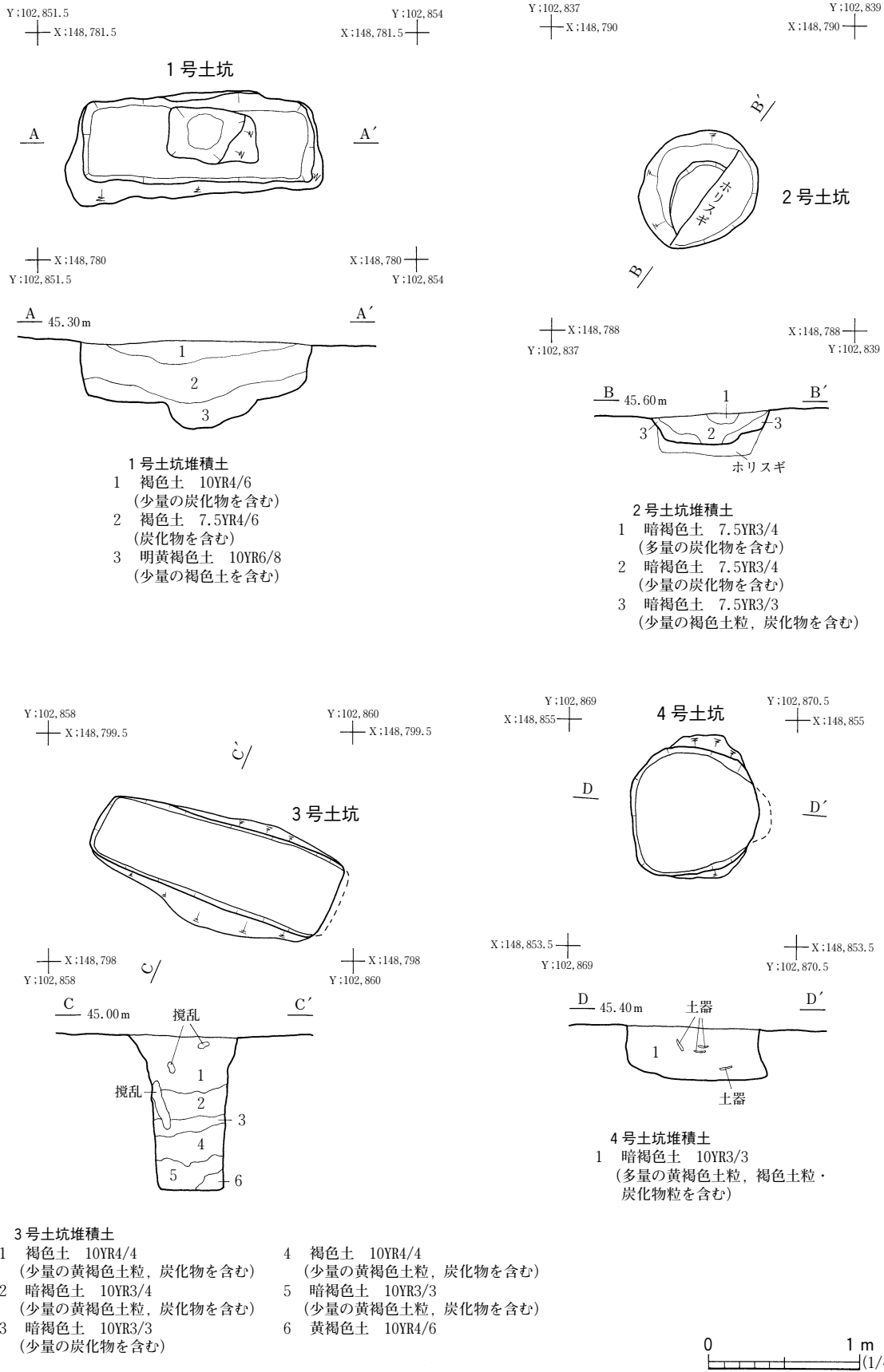


図22 1～4号土坑

が、北西壁では緩やかである。底面はLⅣ層中で止まり、段があるがおおむね水平に構築されている。

遺構内から遺物が出土せず、時期・性格ともに不明である。 (新海)

3号土坑 SK3 (図22, 写真27)

本土坑は調査区南東部、M4グリッドに所在する。周辺の地形は中位のⅢ面に相当する河岸段丘の平坦面であり、標高は45m前後である。遺構検出面はLⅣ上面である。重複する遺構はないが、周辺には縄文時代前期初頭頃の3・5・6号住居跡、1号土坑が近接している。

平面形は長方形を基調とし、主軸方向はN71°Wである。本土坑は幾分崩落しているためか、検出面での平面形が不整になっているが、周壁の中位以下は整った長方形となる。平面形が整った中位での規模は、長辺が165cm、短辺が60cmを測る。検出面からの深さは105cmと深い。本土坑は長辺側の崩落が著しく、その周壁も上端部の傾きが緩くなる。中位以下の周壁は垂直に立ち上がる。また東側短辺では下端がやや抉れて、周壁がオーバーハングして立ち上がる。

土坑内堆積土は6層に分けた。いずれの堆積土もしまりがなく、LⅣに起因する黄褐色土粒を含んでいる。堆積土の状態から人為的に埋められたと考えられる。

本土坑は形状などの特徴では陥し穴の可能性もある。一方、本土坑の底面には杭状の施設を設けるための小穴が無く、堆積土は本町西C遺跡で確認できた縄文時代の遺構内堆積土と異なる点を指摘しておく。年代については、遺物が出土していないため不明である。 (福田)

4号土坑 SK4 (図22・25, 写真27・28)

本土坑は調査区北東端の、F5・6グリッドに所在する。検出面はLⅣ上面で重複する遺構は無い。遺構内堆積土は、炭化物粒、褐色・にぶい黄褐色土粒を多量に含む暗褐色土1層のみで、人為堆積層と考えられる。

平面形は不整形円で、径80~90cm、検出面から底面までの深さは最深部で35cmを測る。周壁の立ち上がりはにぶい黄褐色土で確認され、北・西・南壁は垂直に立ち上がるが、東壁だけオーバーハングしている。底面はLⅤ上面で止まり、西壁下端付近が中央へ向かってやや傾斜しているが、おおむね水平に構築されている。

遺物はℓ1から縄文土器が89点出土した。そのうち8点を図示した。1~3がⅠ群で、1は口縁部が極端に内傾して、口端から胴部にかけて羽状縄文が施される。浅鉢になる可能性がある。2・3は底部で、底部中央から同心円状に羽状縄文が施される。4~7はⅢ群である。4は内湾する口縁部資料で、口端から不規則な撚糸文が施される。5・6は折り返し口縁で、折り返した部分には横位の、胴部以下は縦位の撚糸文を施す。7は無文の胴部破片で、補修孔と内面には朱彩が見られる。8は斜位の撚糸文を施す胴部破片である。

本土坑は、人為堆積と考えられる堆積土中にⅢ群土器が含まれることから、縄文時代晩期に埋め

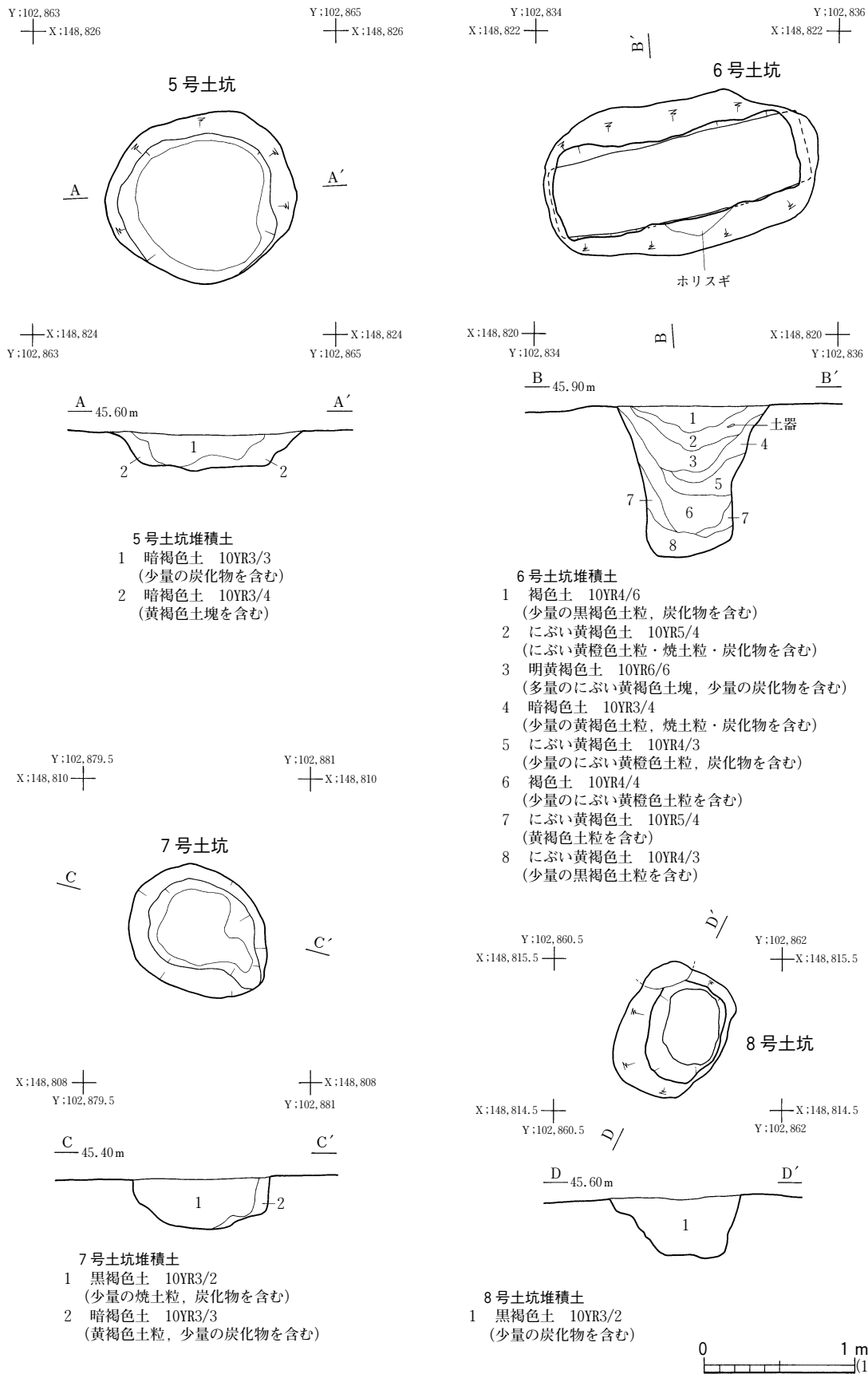


図23 5～8号土坑

られた穴である。断面形や規模から考えて、貯蔵穴と考えられる。

(新海)

5号土坑 SK5 (図23, 写真28)

本土坑は調査区中央部のI5グリッドに所在する。検出面はLⅣ上面で、重複する遺構は無い。遺構内堆積土は2層に分層され、*l*1は炭化物を含む暗褐色土、*l*2は黄褐色土塊を含む暗褐色土で、レンズ状を示すことから自然堆積と考えられる。主軸方向はほぼ東西方向である。

平面形は楕円形で、長径126cm、短径112cm、検出面から底面までの深さは最深部で23cmを測る。周壁の立ち上がりはにぶい黄褐色土で確認され、全周緩やかである。上端は崩落していることから、遺構本来の掘り込み面は検出面に近い可能性がある。底面はLⅣ層中で止まり、ほぼ水平である。

本土坑は遺構内から遺物が出土せず、時期・性格ともに不明である。

(新海)

6号土坑 SK6 (図23・25, 写真28)

本土坑は調査区中央西よりのI2グリッドに所在する。検出面はLⅣ上面で、重複する遺構は無い。遺構内堆積土は8層に分層された。*l*7・8はにぶい黄褐色土で、崩落土と考えられる。*l*6は少量のにぶい黄褐色土粒を含むLⅢaに由来する褐色土、*l*5はにぶい黄褐色土で、*l*4～2の土は炭化物・焼土・多量の土塊を含むことから、人為的に投棄された土と考えられる。*l*8～6は崩落による自然堆積土、*l*5～2は本土坑の機能を失わせるために人為的に埋めた土、*l*1は埋没後に中央部が窪み、そこに溜まった自然堆積層と判断している。

平面形は長方形で、主軸方向はN77°Eである。上端は度重なる崩落で不整な楕円形状になっている。規模は長軸164cm、短軸56cm、検出面から底面までの深さは最深部で100cmを測る。周壁の立ち上がりは明黄褐色土とにぶい黄褐色土で確認され、北・南壁で垂直気味に立ち上がり、東・西壁ではオーバーハングする。底面はLⅥ上面で止まり、北壁・南壁の下端から中央部へ向かって傾斜している。東西方向はおおむね水平に構築されている。

遺物は、*l*2・3から縄文土器5点が出土しており、そのうち1点を図示した。25図9はⅡ群3類で、網目状撚糸文が施されている。

本土坑は*l*2・3中から縄文時代晩期の土器が出土することから、使用時期はそれ以前に属すると考えられる。遺跡全体の出土土器の様相からすると前期初頭の可能性が高い。機能的には、平面形・断面形から陥し穴と判断している。

(新海)

7号土坑 SK7 (図23, 写真28)

本土坑は調査区東端のK7グリッドに所在する。検出面はLⅣ上面で、重複する遺構は無い。土坑内堆積土は2層に分層され、*l*1は炭化物粒と微量の焼土粒を含む黒褐色土、*l*2は黄褐色土粒と微量の炭化物粒を含む暗褐色土で、土質から人為堆積と考えられる。

平面形は、上端は楕円形で、下端は不整形の南東コーナーが張り出す形を呈する。主軸方向は

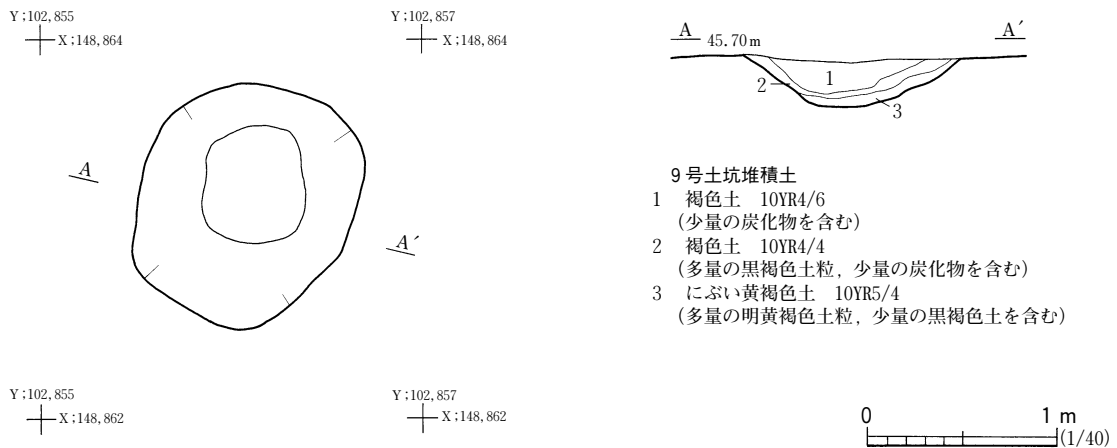


図24 9号土坑

N60° Wである。規模は長径100cm, 短径80cm, 検出面から底面までの深さは最深部で35cmを測る。周壁の立ち上がりはにぶい黄褐色土で確認され, 上端では直立気味だが, 下端付近になると緩やかになる。底面はLV上面で止まり, やや東へ傾斜している。

遺構内から遺物が出土せず, 時期・性格ともに不明である。ただ, 土質が他の遺構に比べて軟質かつ混合物が多いので, 新しい時期の遺構と推察される。(新海)

8号土坑 SK 8 (図23, 写真28)

本土坑は調査区中央東よりのJ5グリッドに所在する。検出面はLV上面で, 重複する遺構は無い。土坑内堆積土は炭化物を少量含む黒褐色土1層のみで, 堆積状況は不明である。

平面形は隅丸長方形を呈し, 主軸方向はN25° Eである。規模は長軸90cm, 短軸68cm, 検出面から底面までの深さは最深部で40cmを測る。周壁の立ち上がりはにぶい黄褐色土で確認され, 北・東壁では直立気味に立ち上がり, 南・西壁ではかなり緩やかに立ち上がる。底面はLV層中位で止まり, 壁際から中央へ傾斜している。

遺構内から遺物が出土せず, 時期・性格ともに不明である。7号土坑同様に, 土質が縄文時代の遺構に比べて軟質なことから, 新しい時期の遺構と推察される。(新海)

9号土坑 SK 9 (図24, 写真28)

本土坑は調査区北端のE4グリッドに所在する。検出面はLV上面で, 重複する遺構は無い。土坑内堆積土は3層に分層され, ℓ1・2は炭化物・黒褐色土粒を含むLV III aに由来する褐色土, ℓ3は非常にしまりの強いにぶい黄褐色土で, 明黄褐色土・黒褐色土粒を含む。ℓ3は人為的に硬化された感じがする。堆積状況から, 自然堆積による埋没と考えられる。

平面形は不整楕円形で, 主軸方向はN20° Eである。規模は長径130cm, 短径114cm, 検出面から底面までの深さは最深部で24cmを測る。周壁の立ち上がりはにぶい黄褐色土で確認され, すり鉢状の断面形を呈する。底面はLV中位で止まる。

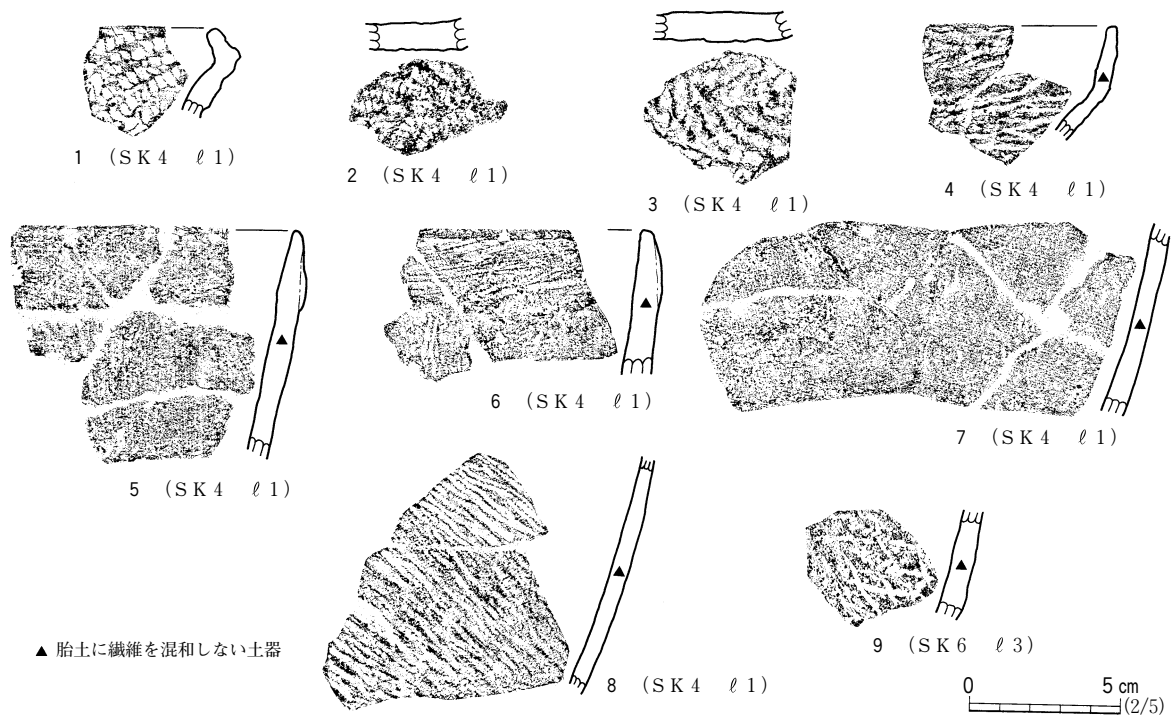


図25 土坑出土遺物

遺構内から遺物が出土せず、時期・性格ともに不明である。

(新海)

第4節 遺構外出土遺物

本遺跡における今回の調査区は攪乱が深く、本来の遺物包含層であるLⅢ a層まで削平されている部分が大半である。そのため耕作土であるLⅠ出土の遺物が多く、遺物の出土地点の傾向を語るには困難がある。さらに今回の調査では総遺物出土点数が少ないこともあったので、グリッドごとの遺物出土点数を図化しなかった。おおまかに、G・H4グリッドや、L・M4グリッドといった遺構の近くからの出土点数が多いことだけ指摘しておく。

土 器 (図26~29, 写真35~40)

遺構外で採取された土器は636点である。1号住居跡から出土した土器が600点であるから、遺構外採取量としては極端に少ない。これは開墾や耕作によりLⅢ a層まで攪拌され、遺物が小片化して発見しづらくなったことが関係している。この状況は石器についても同様である。

I群土器 (図26~28, 写真35~38) 本群土器は花積下層式に相当する資料で、本遺跡の主体を占める時期である。文様帯を持つものと持たないものに大別される。以下に各類を詳述する。

1類 本類土器は口縁部文様帯を持つタイプで、口縁部文様帯を隆帯や刺突列で区画し、その内部に縄圧痕文もしくは沈線を用いて、渦巻きを基点に斜走横走して横位連結するモチーフを描き、モチーフ外・一組の縄圧痕文外に集合短沈線文を充填する規格性が強い土器群である。

26図2～8・11は口縁部資料である。口縁部形態は、3・6が緩やかに内湾する器形、2・4・11が頸部から外傾して立ち上がり屈曲して口縁部が内傾する器形、8が直線的に外傾して口端部がわずかに内湾する器形、5・7が直線的に外傾して口端部付近で若干外反する器形に分かれる。口縁部が内傾する2・4・11は、屈曲部に刻みを持つ隆帯を巡らして口縁部文様帯を上下に区分している。この区画の用い方は6・7でも見られる。上部文様帯には、縦位の区画隆帯により横位楕円区画をつくり区画内に楕円状に縄圧痕文(L)を施文する2と、口縁部に平行させて2・3条の縄圧痕文を施文する4・6・7・11が見られる。そのうち6は、2条の縄圧痕文にLとRの異種原体を用いている。7は2条の縄圧痕文間に、原体末端刺突列を施している。2・3・6・8は下部文様帯に2条一組の縄圧痕文による渦巻き、それを基点に斜走・横走するモチーフを描き、2条一組の縄圧痕文外に集合短沈線文を施す。4・5・7の下部文様帯は小片のため全体像が不明だが、おそらく同様な文様構成を持つと思われる。縄圧痕文に使用される原体は、2・3・7・8がLのみ、4・5・11がRのみで、6は上述どおり両方用いている。内面は2・4・6・8・11が磨きあげられており、3・5・7がナデのみである。

26図9・10・12・14～19は隆帯文を用いる資料で、10を除いて横位に巡って口縁部文様帯を上部と下部に区画する要素として用いられる。隆帯上には必ず集合短沈線文と同じ工具による刻みが施される。9は口唇部のみが欠損する資料で、口縁部文様帯を上下に区画するほか、縦区画にも隆帯を用いている。上部文様帯は、おそらく口端部と思われる部分に施される刻みと、下部文様帯との区画隆帯に挟まれて鋸歯状構成の集合短沈線文が施される。下部文様帯との区画隆帯上の刻みは、隆帯が波頂部から右下の波底部に伸びる場合は右下から左上に刻み、波底部では垂直に2本刻み、また右上の波頂部へ隆帯が上がると、今度は左下から右上に刻む。口縁部文様帯内の横位区画隆帯と縦位区画隆帯の交差点では隆帯が円形になり、内部に渦巻状の縄圧痕文(L)が施される。下部文様帯は縦位区画に沿って、縄圧痕文(L)により蕨手状のモチーフが描かれる。縄圧痕文は途中から棒状工具でなぞられて沈線として表現されている。その沈線間の広めの無文部には、集合短沈線文が施される。蕨手状モチーフから横には、L字状に縄圧痕文(L)とそれをなぞった沈線が展開する。その間の広めの無文部にも集合短沈線文が充填される。縄圧痕文施文後に沈線でなぞる技法は、他に26図12・15・18と27図8・9・16でも確認される。内面は9・12・14・15・16・18・19がミガキを施し、10・17がナデのみである。

26図10は刻みを持つ隆帯文が円形に施され、その内部に縄圧痕文(L)で渦巻きを、外部には2条一組で横走する縄圧痕文(L)とその間に充填される集合短沈線文が見られる。26図12・15と27図8・9は同一個体で、口縁部付近の資料である。口縁部は内傾して、その屈曲部に隆帯を巡らせ、上部文様帯と下部文様帯に区画されている。26図11・15～18の隆帯の使用法も、口縁部文様帯を上下に区画する点では同様である。上部文様帯には、12・14・17・18のように横位の縄圧痕文を数条施すものや、15・16のように集合短沈線文を施すものが見られる。15の集合短沈線文は鋸歯状構成になる。26図19は微妙に高い隆帯を扶んで、上下に縄圧痕文(L)によるモチーフが描かれる。

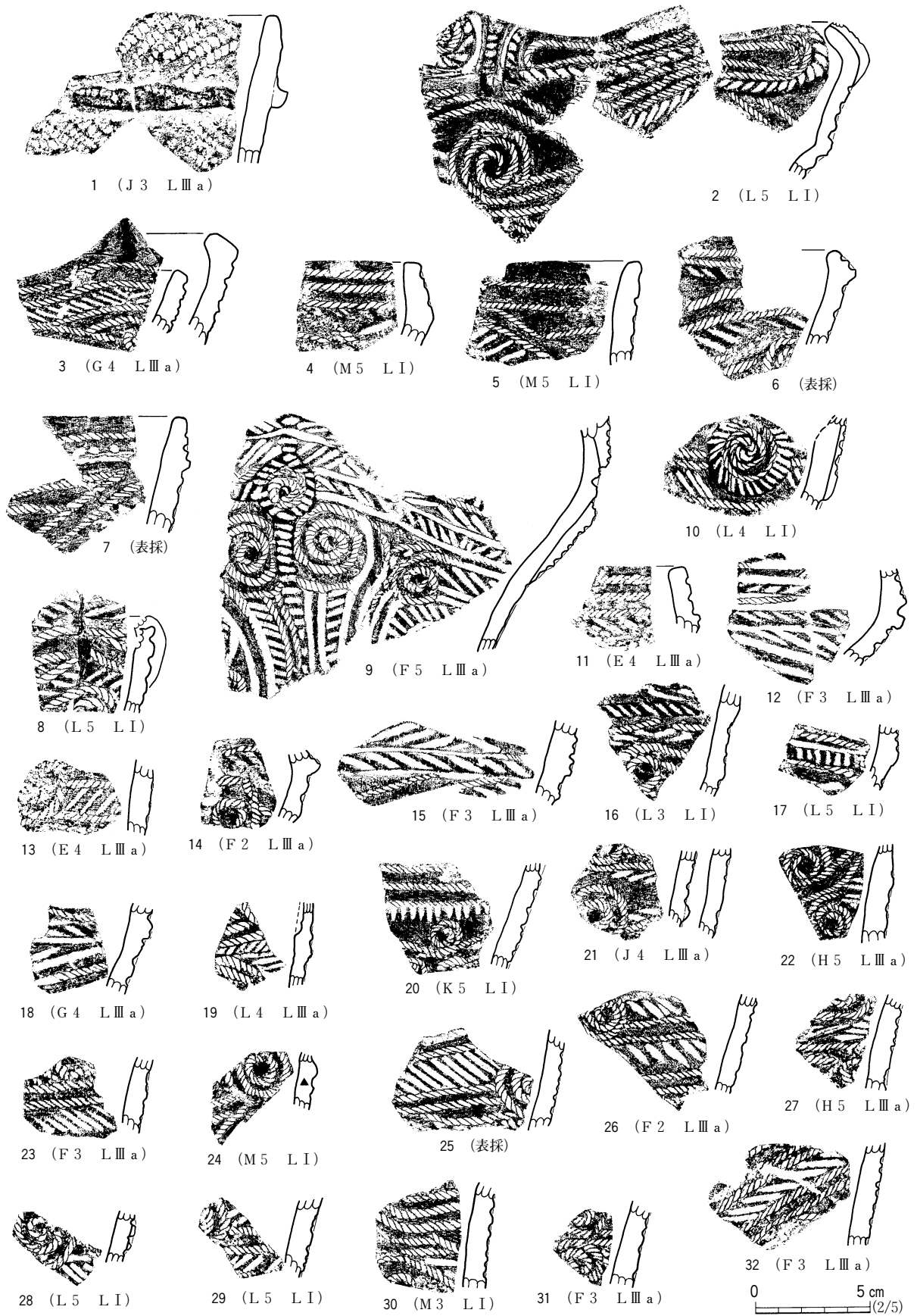


图26 遺構外出土遺物 (1)

26図13・20～31は縄圧痕文により、渦巻きと、それを基点に斜走・横走するモチーフの描かれる小片である。縄圧痕文は2・3条一組で施文され、概ね斜走・横走する縄圧痕文間に集合短沈線文が充填されるが、21・27は渦巻きの周りに集合短沈線文が充填される。20は口縁部間近の資料で口縁部文様帯を、横位に巡らす刺突列により上下に区分している。上部文様帯には横走する3条の縄圧痕文(L)を、下部文様帯には縄圧痕文(L)による渦巻きを重畳させて、そこを基点に左右に縄圧痕文(L)のモチーフが展開する。渦巻き部分の残っている資料の中には、2・21・24のように渦巻きの中心が突起状に盛り上がるものがある。2・24は、内面から外面に向けて器面を押し出すことで突起状の効果を出し、21は粘土粒を貼り付けて突起にしている。内面は13・21・22・24・25・27・28・29にはミガキが施されており、20・23・26・30・31はナデのみ、もしくは部分的にミガキが施される程度である。

26図32, 27図1～7は縄圧痕文と集合短沈線文が施される資料で、基本的に2条一組の縄圧痕文を施文して、その内部に集合短沈線文を充填している。27図8～10は縄圧痕文が沈線でなぞられた資料である。27図11～20は、口縁部文様帯の下端区画がうかがえる資料である。11・19は刺突列で区画する土器で、11は上部に2条一組の縄圧痕文でモチーフを描き、モチーフ内部に集合短沈線文を充填している。16は刺突列を施し、その上下を沈線で挟んで口縁部文様帯下端区画としている。20は2条もしくはそれ以上の縄圧痕文を巡らして区画としている。13～15・17・18は特別な区画要素を持たず、口縁部文様帯のモチーフと胴部の地文がそのまま接している資料である。口縁部文様帯のモチーフは斜走するものが多く、縄圧痕文や集合短沈線文がそのままの角度で胴部地文部へ接するので、縄圧痕文を1周させて区画する資料とは明確に分別できる。13の土器は比較的広く無文部が残っているが、この無文部は胴部地文部より器壁が薄くなっており、胴部地文の上端の節がつぶれていることなどから、一度部分的に口縁部文様帯にも地文を施してから、地文を磨り消して口縁部文様帯を設定したと考えられる。

2類 本類土器は、基本的に口端部から底部まで地文のみが施される土器であるため、本類と認定するには口縁部が残存しているのが必要条件となる。基本的に地文のみだが、中には部分的に加飾されるものがあり、26図1は口唇部から3.5cm下に断面四角形の隆帯を巡らしている。隆帯状には疎らに縄文が施される。この隆帯は口縁直下のLR原体横回転とその下のRL原体横回転の間にあり、非結束羽状縄文の区画になっている。口縁部形態には、27図26のように口縁直下で屈曲して内傾するもの、27図21・22・24・25のように外傾して立ち上がり口縁直下でわずかに内湾するもの、27図23のように外傾して立ち上がり口縁部直下で外反するものがある。いずれも口端部から単節原体もしくは0段多条原体を横回転させて非結束羽状縄文を施している。最上部にはLR原体を使用している資料が比較的多い。21・22は口唇部にも縄文が施されている。遺構外出土の2類とした全ての土器の内面調整は、ナデのみでミガキは一つも見られない。このことから内面が磨かれている土器は、1類の胴部破片になる可能性が高いと言える。

3類 本類は非結束羽状縄文が施される胴部破片である。27図28・29と28図1～21が該当する。

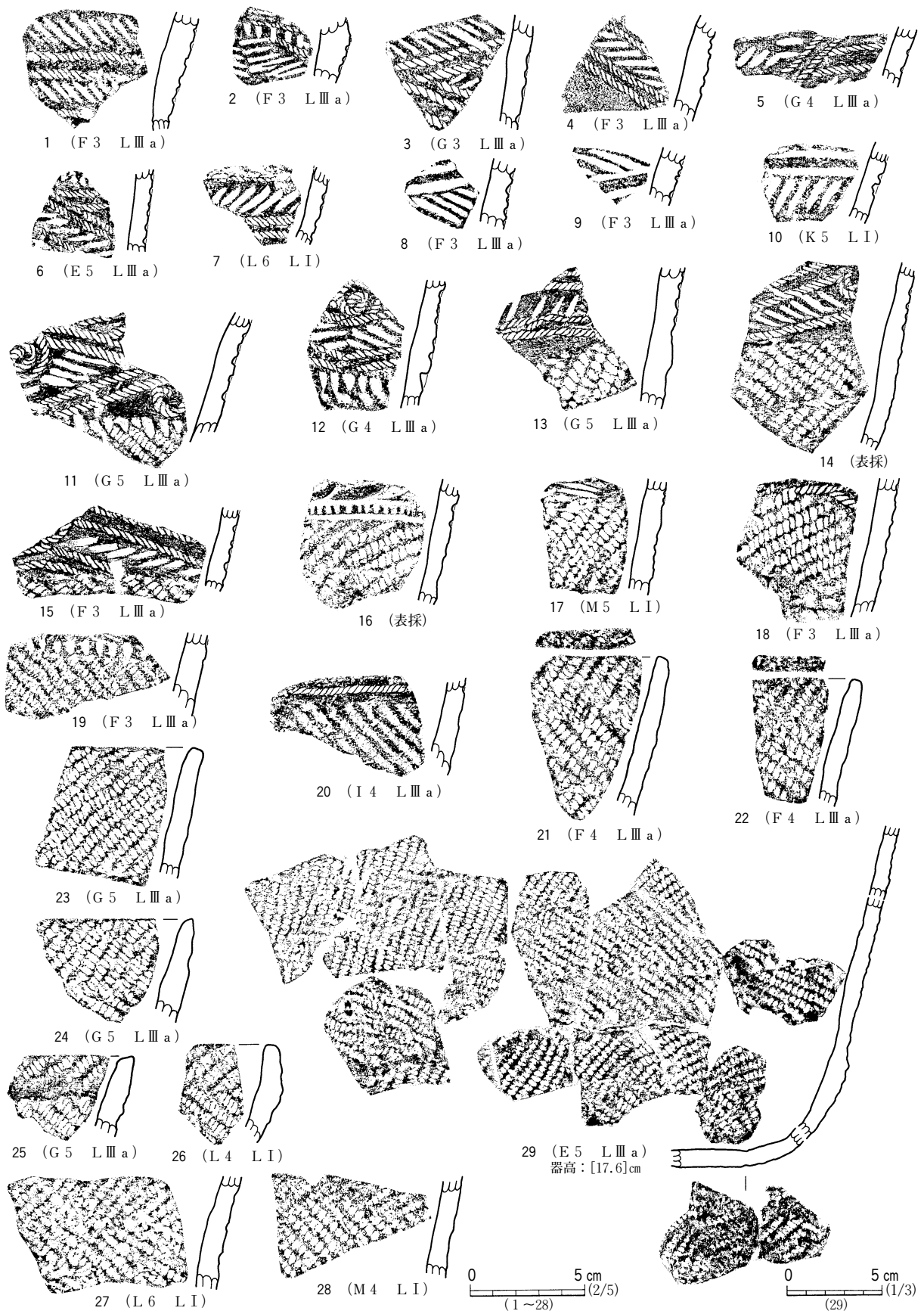


图27 遺構外出土遺物 (2)

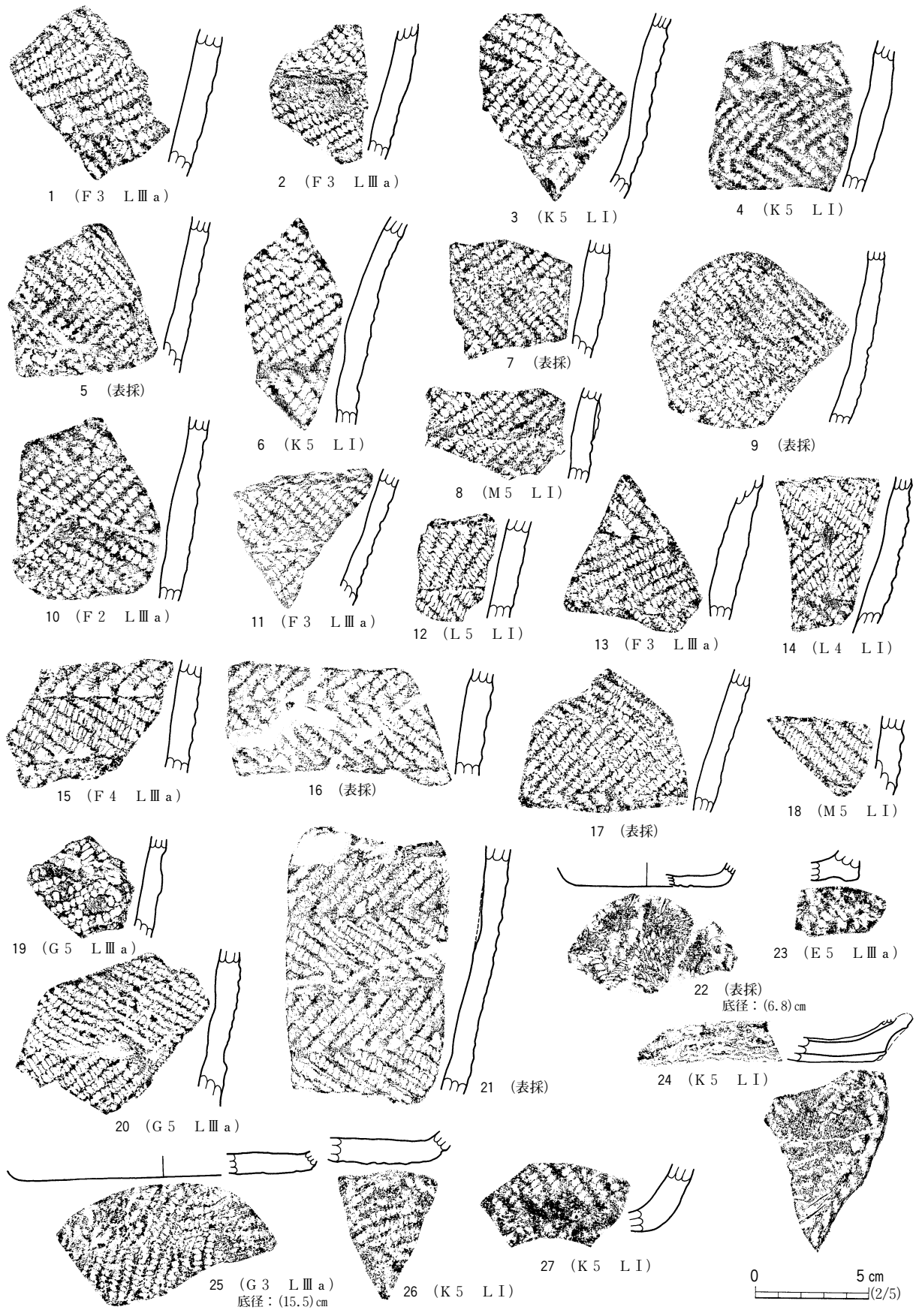


图28 遺構外出土遺物 (3)

27図28・29, 28図1～11が, LR・RL原体を交互に用いており, 28図12・14～18が0段多条原体を
用いている。13も0段多条原体に見えるが, 比較的節が厚いので撚りのきつい単節と判断した。
20・21はRL原体と0段多条原体が交互に施される。19は単節縄文がまばらに重ねて転がされてい
る。内面調整は28図1・12・18がミガキで, 他は全てナデのみである。このことから, 1・12・18
は1類の胴部地文部である可能性が高い。それ以外は2類土器と考えられるが, 1類にもナデ調整
のみの土器があることから, 完全に分別するのは困難である。

4類 本類は底部資料で平底と丸底気味のものがある。27図29は丸底気味の土器で, 胴部に非結
束羽状縄文が多段に施され, その延長で底部まで連続して縄文を施している。28図27も丸底気味の
底部と考えられる。28図22～26は平底の土器である。22は中央から同心円状に縄圧痕文(L)を3条
施して, その周囲はLR原体を縄圧痕文の外側に沿わせて施文している。23～26は縄文が施文され
るが, 23・26のように規則的に施すものと, 25のように乱雑に施すもの, 24のように縄文がつぶれ
てしまって文様効果を失っているものに分けられる。内面調整はいずれもナデのみで, 平底の土器
は底部接合部のナデが観察される。

Ⅱ群土器 (図29, 写真39) 本群土器は出土量が極めて少ないことから, 縄文時代後期・晩期の資料
を一括して扱った。以下に各類を説明する。

1類 後期後半の土器と思われるが, 小片であるため型式を断定できない資料である。29図1～
3は同一個体と考えられ, 単節斜縄文を施し, 沈線を引いてその間を磨り消している。4・5も同
一個体で地文の磨り消しと貼り付け文が見られる。

2類 晩期の大洞B式と考えられる土器で29図6が該当する。節の細かい原体で地文を施した後,
2本の沈線を引いて, 沈線外を磨り消している。縄文部を切るような沈線が見られるが, 破片の端
で二又になることから三又文の一部になると考えられる。

3類 晩期に属する地文のみの胴部破片で, 7～9が該当する。7は橢圓状工具による浅い多条
沈線が施される。8・9には網目状撚糸文が施されている。

4類 後期・晩期に属すると思われる底部資料である。10～13が該当し, いずれも底面・立ち上
がり部分ともに無文で, 時期を断定するのは困難である。10と12は同一個体である。

Ⅲ群土器 (図29, 写真39) 平安時代の土師器である。

29図14は内黒杯の底部資料で, 立ち上がり部分の横方向ケズリと, 底面にはヘラケズリが施され
る。ただ, 摩滅のため不明瞭である。 (新海)

石 器 (図30, 写真40)

石器・剥片類の遺構外採取量は81点である。4号住居跡からは, 微細な碎片が主であるが266点出
土しており, 土器と同様に遺構外採取量としては極端に少ない。

石鏃 30図1～4に示してある。いずれも平基で, 長い二等辺三角形状を呈する。2・3は先端
部が欠損しており, 4は被熱による不整な剥離が両面に観察される。断面をみると1は薄くて湾曲

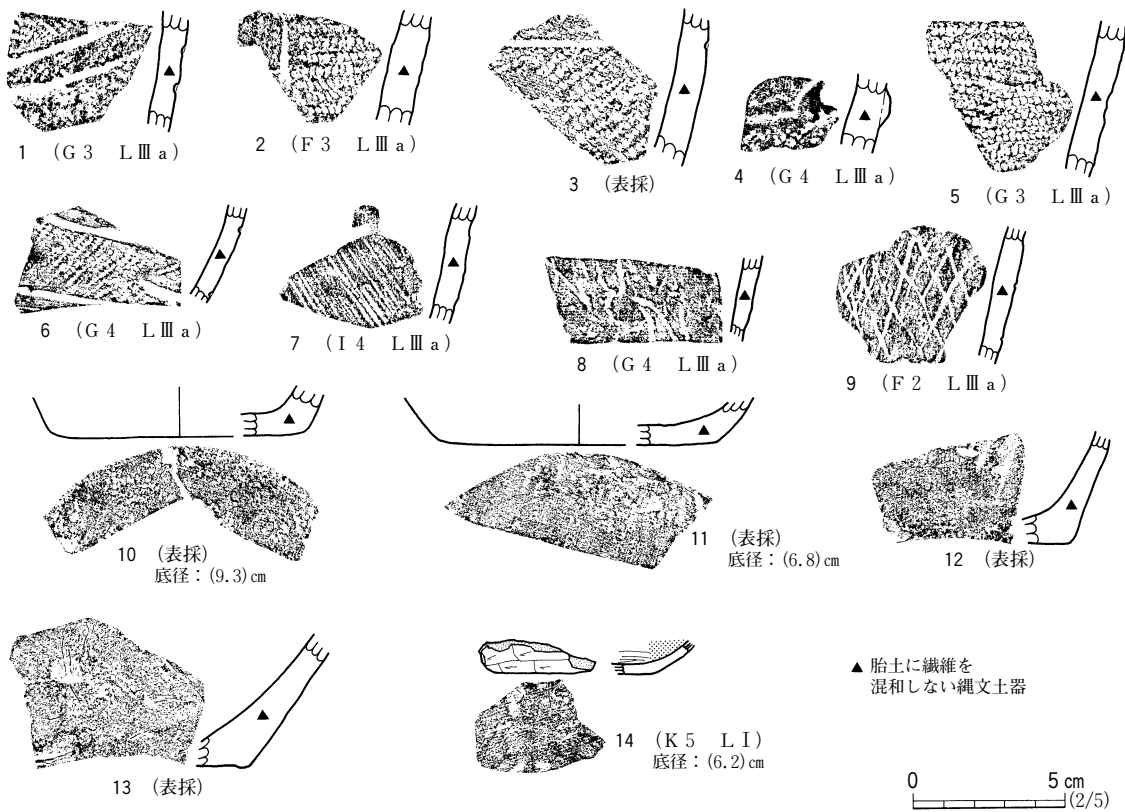


図29 遺構外出土遺物（4）

しており、2・3は薄くて比較的直線的である。1～3の厚さは2.5～3 mmであるのに対し、4は5 mmの厚さで他の3つとは異なっている。石材は1・2が珪質頁岩、3が玉髄、4が頁岩である。

楔形石器 30図5に示してある。背面側の両極打法による剥離が明瞭である。主要剥離面の打点とはとんでいるが、打点側上面は自然面が残っていることから、剥片剥離時は自然面を作業面にしていたようである。背面・腹面のどちらの左側縁にも階段状の剥離が認められる。特に背面右側縁には部分的に自然面が残っていることから、整形するための剥離を両面とも左側縁から加えて、全体的なバランスを保ったと考えられる。石材は流紋岩である。

磨製石斧 30図6に示してある。定角式の先端部のみ資料で、刃部には使用によるとみられる微細な刃こぼれが見られる。また刃部に平行して微妙な稜が形成されており、これも使用の結果形成された可能性が考えられる。石材は安山岩である。

磨石・敲石 30図7～10に示してある。4点全て磨石として利用した後に、敲打作業に用いている。7は両面使用しており、片面の中央と側面の一部で敲打作業を行っている。8は比較的厚みのある磨石で、あまり磨耗していない。側縁には敲打痕が認められる。9・10は磨石として利用した後、側縁で敲打作業を行い、その結果表面が剥離してしまっている。石材は、7・10がアプライト、8がデイサイト、9が細粒砂岩である。 (新海)

第2編 本町西C遺跡

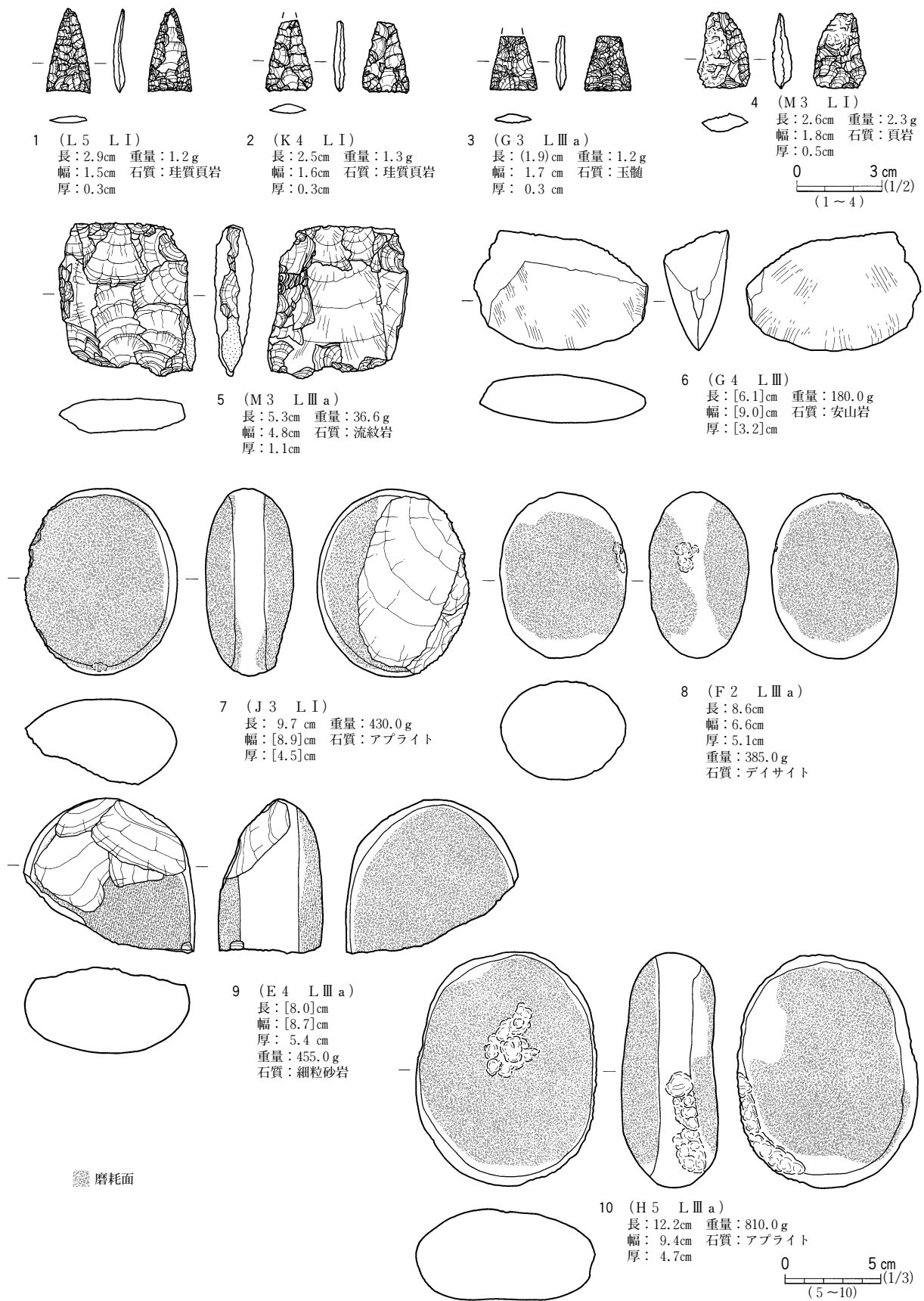


図30 遺構外出土遺物 (5)

第3章 考 察

本町西C遺跡は、本編第1・2章で述べたように中位の第Ⅲ段丘に相当する丘陵平坦面上に、縄文時代前期初頭の集落が展開しており、同時期の土器が出土土器総数において高い比率を占めている。他時期の遺構は、平安時代の住居跡1軒と時期不明の土坑数基であり、他時期の遺物も、縄文時代後・晩期の土器と平安時代の土師器・須恵器を合わせても1割程度である。

それで本章においては、本町西C遺跡の主体となる縄文時代前期初頭の花積下層式の土器について取りあげてまとめてみたい。

第1節 土器について

縄文時代前期初頭に位置付けられる花積下層式の福島県内における細分編年は、飯館村羽白D遺跡の調査で5細分（鈴鹿1987・1988）、小野町小滝遺跡の調査で3細分（松本1993）、相馬市山田B遺跡の調査で、羽白D遺跡での5細分に後続する段階（吉田1997）が設定されている。これらに従えば最大6細分されることになるため、本遺跡出土土器の特徴と傾向を確認して花積下層式のどの段階に比定されるかを検討する。そして県内の類例に当たり、比較検討を行いながら前後段階との連続性や分離要素についてまとめる。

1. 本町西C遺跡I群土器の様相（図31）

I群土器は1～4類に分類したが、基本的には口縁部文様帯を持つ1類と、地文を全面に施し部分的に加飾する2類に分かれ、それらの部分資料である3類胴部破片と、4類底部資料として報文中扱ってきた。ここでは1類と2類の特徴を抽出し、補足的に3・4類について言及する。

1類 器形の全体像をうかがえる資料はないが、胴部上半部が分かる資料をもとにすると、口縁部形態で、内湾型、内傾型、直線的な外傾型の3種に大まかに分けられる。そのうち内湾型が比較的多く、胴部はいずれも非結束羽状縄文が施される。内面調整はミガキが多く、ナデのものもある。

（内湾型）内湾型には、緩く内湾するものと強く内湾するもの両者を含めた。隆帯や刺突列で口縁部文様帯を上下に2分するタイプと、2分しないタイプがある。2分するタイプの上部文様帯には、口縁部に平行する2条一組の縄圧痕文を施す1～4・8や、鋸歯状構成の集合単沈線文を施す5が見られる。下部文様帯には2・3条一組の縄圧痕文による渦巻きと、それを基点に横位に連結する菱形や三角形のモチーフを描き、モチーフ外や組になる縄圧痕文外に集合単沈線文が充填される。この傾向は概ねどの土器にも当てはまる。ただ5は、上部文様帯から垂下する隆帯に沿って縦位のモチーフが描かれ、異彩を放っている。口縁部文様帯を2分しない6・7も、基本的に2分す

るタイプの下部文様帯と同様な文様構成を持つと考えられる。

(内傾型) いずれも屈曲部に隆帯や刺突列を持ち、口縁部文様帯を2分する。上部文様帯は、口縁部に平行する3条一組の縄圧痕文を施す10・11や、縦区画で折り返して楕円状を呈する縄圧痕文を施す9がある。下部文様帯は、上述の内湾型の下部文様帯と大差ない文様構成をとると考えられるが、3条一組の縄圧痕文が多いのは内傾型の特徴かもしれない。

(直線的傾型) 口縁がやや外反するものも含めた。隆帯や刺突列で口縁部文様帯を2分する12・13や、区画要素のない14がある。上部文様帯のあるものは、口縁に平行して横走する縄圧痕文が主に施される。14の口縁直下の縄圧痕文は口縁に平行するので、区画要素のない上部文様帯と判断した。下部文様帯は、内湾型・内傾型同様の文様構成と同様に2条一組の縄圧痕文で、渦巻きと、それを基点に横位に連結する菱形・三角形のモチーフを持つ。

以上口縁部形態で分類して、それぞれ特徴を模式的に列記した。次にこの分類に当てはめられなかった資料で特徴あるものについて見ていく。15～17は胎土・文様構成・内面調整から同一個体と判断した資料で、3条一組の縄圧痕文を施すが、それが棒状工具でなぞられて沈線になっている。これは5と23にも見られる。18には鋸歯状構成の集合短沈線文が見られる。これは5にも見られるがこの2つ以外には出土していない。どちらも上部文様帯に施されているので、上部文様帯特有の文様要素と考えられる。5・19には円形の隆帯が見られる。21～25には口縁部文様帯下端区画が分かる資料を集めた。区画要素のあるものは、22の刺突列、23の2条の沈線内に刺突文を充填するもの、24の1条から数条の縄圧痕文を巡らすもの、25の末端結束の撚糸を横位に連続押捺するものがある。区画要素の無いものは、21のように斜走する縄圧痕文がそのまま体部地文部に接する。

2類 器形は大多数が外傾して立ち上がって、口縁部が外反するものや微妙に内湾するものがある。1点のみ内傾するものが認められるので、1類の器形は概ね2類にも認められる。文様は基本的に地文のみで、たまに部分的に加飾するものがある。地文は全て非結束羽状縄文であるが、菱形構成になる資料は1点も無い。内面はごく稀にミガキが施されるが、ナデのみの調整が主流である。

部分的に加飾するものには、26の口端部に刺突列を施すもの、27の口縁部に疎らに縄文を転がした隆帯を1巡させるもの、28のように特別な文様要素を持たないが、口端部の縄文のみ施文幅を狭くして特殊化するものがある。加飾しないものは全面非結束羽状縄文であるが、31のように口唇部にも縄文を施すものがある。

3類 胴部地文のみの資料で、内面にミガキを施すものは1類に属す可能性が高い。それ以外は分類不能である。全て非結束羽状縄文のみが施される。

4類 底部資料で平底が多く、少数丸底をつぶして平底状にしているものがある。底部外面には、35・39のように中心から同心円状に羽状縄文を施すもの、36のように中心に円形の側面圧痕文を施文して、周囲に斜縄文を施すもの、37のように不規則に斜縄文を施すもの、38のように胴部地文部の延長で非結束羽状縄文が施されるものがある。

以上、各類の特徴を列記した。以下にそれらの要点を整理する。

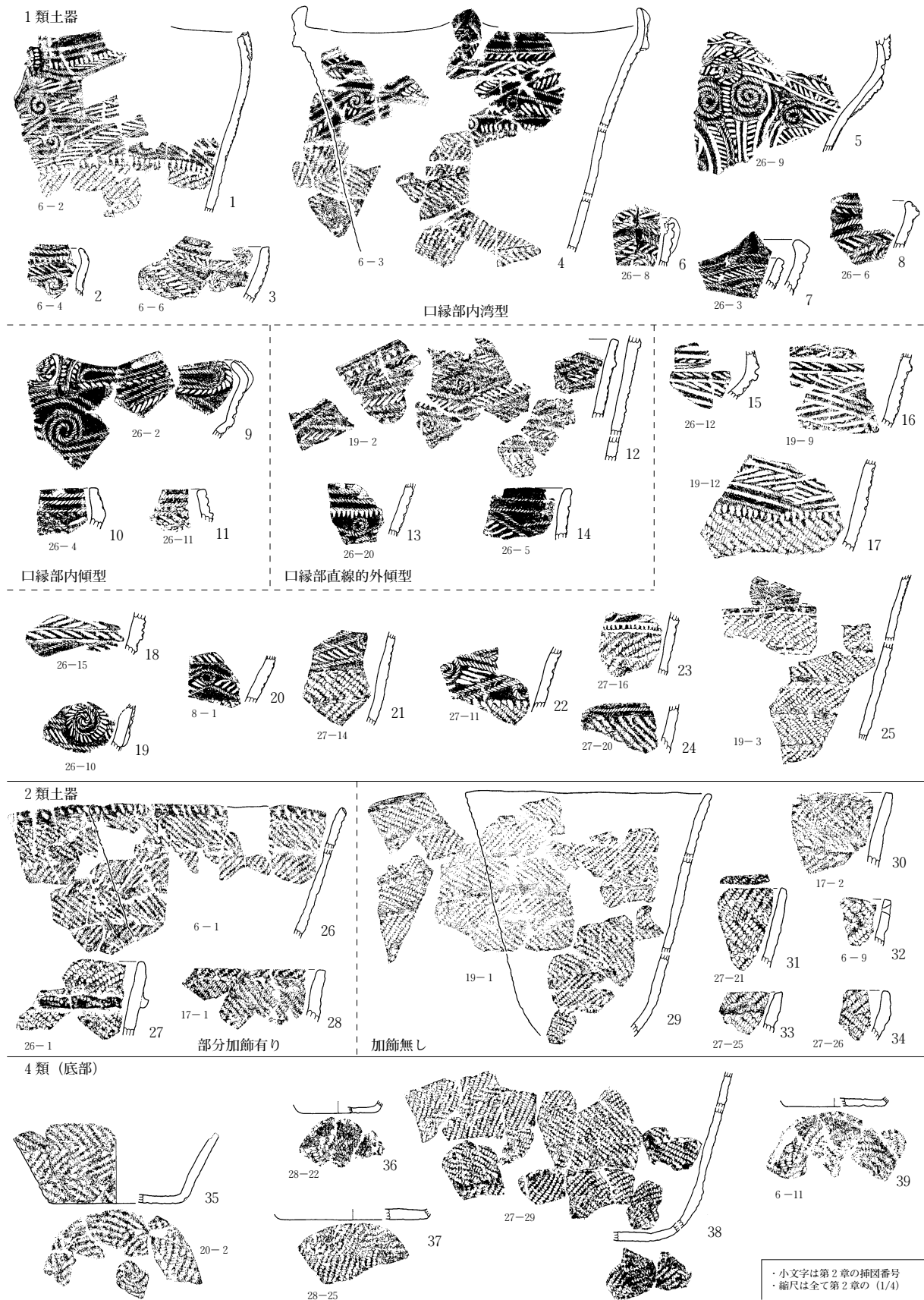


図31 本町西C遺跡I群土器集成

- ① 1類は口縁部形態で、内湾型、内傾型、直線的傾型に分かれ、内湾型が最も多い。
- ② 1類の口縁部文様帯は上下に2分されるものが多く、上部文様帯には横走する縄圧痕文か鋸歯状構成の集合短沈線文が施され、下部文様帯はいずれも同様な文様構成になる。
- ③ 主文様要素の縄圧痕文は、2条もしくは3条一組が基本で、基本的に1種類の原体を使用する。
- ④ 内傾型は、必ず口縁部文様帯が上下に2分される。
- ⑤ 縄圧痕文を施文後に沈線に引き直すものや、縄圧痕文にLとR両方用いるものが少数ある。
- ⑥ 口縁部文様帯の下端区画に、区画要素を持つものと持たないものがある。
- ⑦ 2類は、加飾するものより加飾しないものの量が多い。
- ⑧ 底部は基本的に平底で、丸底がつぶれて平底状になるものが少量ある。

文様要素や文様構成に画一性が高いこと、住居から共伴して出土していることなどより、1類土器はあまり時間差の無い土器群と考えられる。2類土器も1・2・3・9号住居跡で1類土器と共伴しているので同時期と考えられる。3・4類もこれらに付随するため同時期であり、3種の口縁部形態や口縁部文様帯の区画要素については、この土器群内のバリエーションと考えられる。

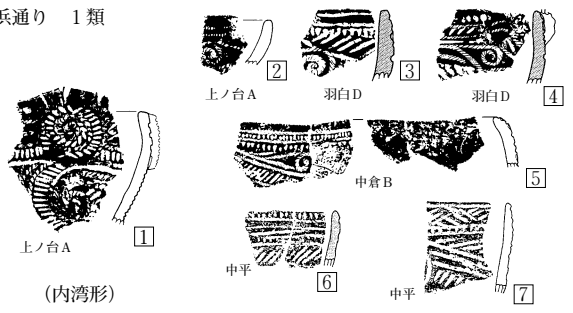
2. 福島県内出土の本町西C遺跡I群土器の類例 (図32)

福島県内の諸遺跡から出土している花積下層式期の資料で、本町西C遺跡出土資料と同様な文様構成や文様要素を持つ土器を抽出し、傾向や類似点・相違点のあり方を探してみたい。地域は便宜的に本町西C遺跡の所在する浜通りから、中通り、会津地方と分けて話を進める。また本町西C遺跡での分類基準を適用して、1類を内湾型、内傾型、直線的傾型、口縁部文様帯破片と2類・4類に分けて見ていく。

浜通り 同様な資料は、飯館村羽白D遺跡、浪江町中平遺跡、富岡町本町西A遺跡、いわき市上ノ台A遺跡・中倉B遺跡・差塩D遺跡から出土している。1類で多く見られるのは内傾型の資料で、次が内湾型、直線的傾型は非常に少ない。内傾型の資料は全て口縁部文様帯を上下に2分しており、内湾型も上下に2分するものが多い。直線的傾型は資料が少なく小片であるので不明である。上部文様帯は7～11が鋸歯状構成の集合短沈線文、1は隆帯文と縄圧痕文、2・3・6は口縁に平行する縄圧痕文、12は蕨手状の縄圧痕文、13は対向する斜位の集合短沈線文が見られる。6・8・9は口端にスリットを施す。下部文様帯は1のように隆帯を用いるものもあるが、15・16のように縄圧痕文による渦巻きと斜走・横走するモチーフと充填される集合短沈線文が施される。17は口縁部文様帯下端区画に刺突列を用いている。2類は加飾する資料が豊富で20・21は刻みを持つ隆帯、23が段差のある隆帯、19は口端に狭い縄文施文帯がある。24は口唇部に縄文を転がす。

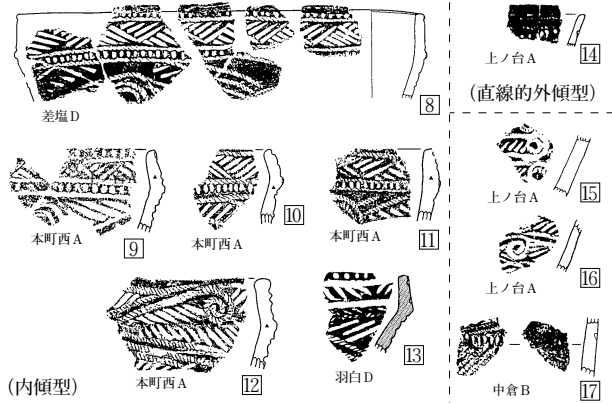
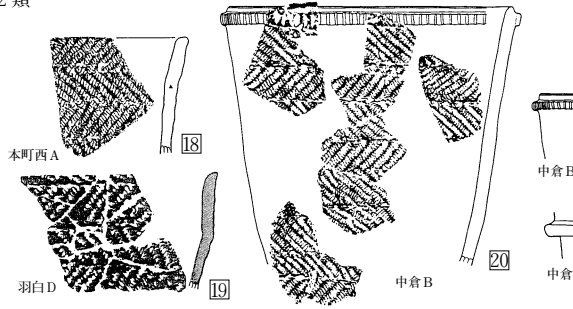
中通り 同様な資料は、福島市愛宕原遺跡・宮畑遺跡・獅子内遺跡、郡山市中ノ沢A遺跡、天栄村山崎遺跡、芹沢A遺跡、玉川村諏訪平B遺跡、小野町小滝遺跡、白河市鶴子山B・C遺跡から出土している。1類は内湾型が多く、内傾型・直線的傾型は資料が少ない。内湾型・内傾型で判明しているものは、ほぼ口縁部文様帯が上下に2分されている。直線的傾型は区分するものとしな

浜通り 1類



(内湾形)

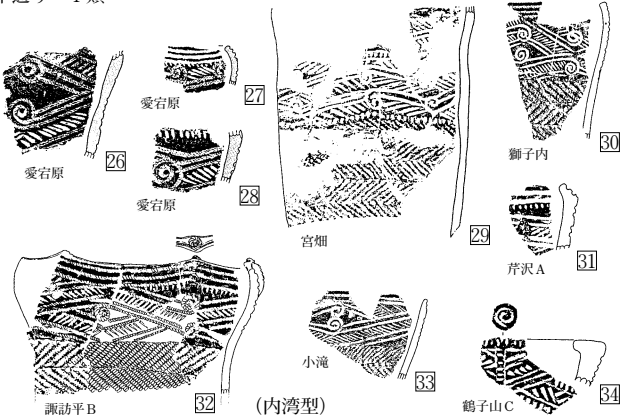
2類



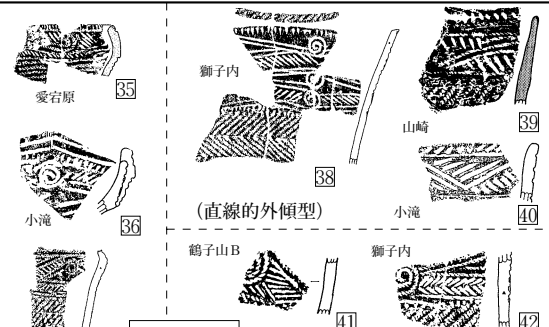
(直線的外傾型)

(内傾型)

中通り 1類



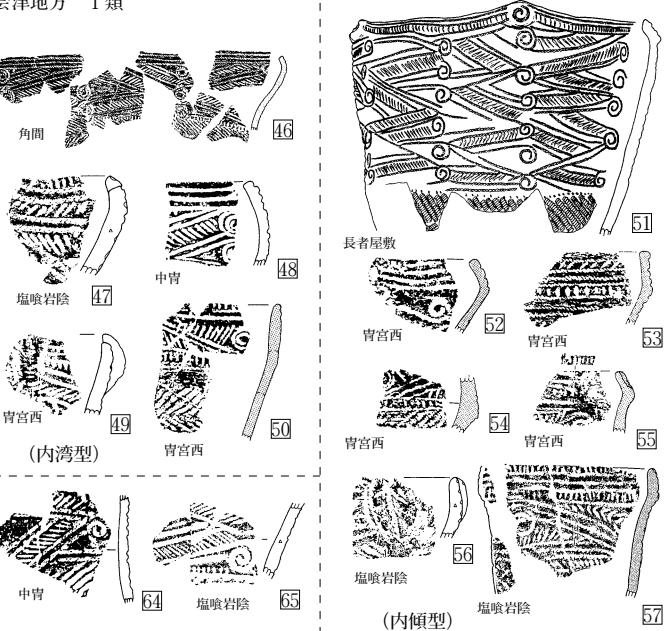
(内湾形)



(直線的外傾型)

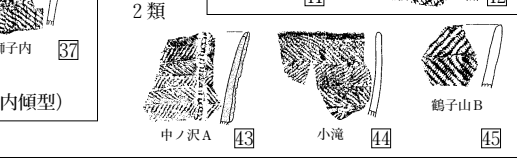
(内傾型)

会津地方 1類

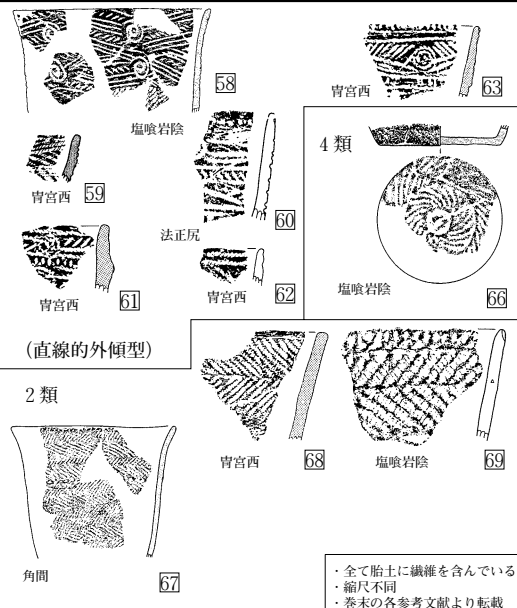


(内湾形)

(内傾型)



2類



(直線的外傾型)

2類

・全て胎土に繊維を含んでいる
 ・縮尺不同
 ・巻末の各参考文献より転載

図32 県内出土の本町西C遺跡I群土器の類例

いものがある。上部文様帯は、27・30・31・32・33・39が口縁に平行して2～3条一組の縄圧痕文、35が蕨手状の縄圧痕文と集合短沈線文、36が縄圧痕文による渦巻きとそれを基点に横走るモチーフ、その内部に集合短沈線文、40が鋸歯状構成の集合短沈線文が見られる。34・35・38・39・40は口端部にスリットを施す。下部文様帯は縄圧痕文による渦巻きと、それを基点に斜走・横走させて菱形・三角形のモチーフを描き、集合短沈線文を充填するが、35のように5条の縄圧痕文のみを施すものもある。集合短沈線文には、42のように「ハ」字状になるものがある。2類の加飾するものには43のように、波頂部から縦位の隆帯を垂下させるものがある。

会津地方 同様な資料は磐梯町法正尻遺跡・角間遺跡、山都町長者屋敷遺跡、会津高田町中冑遺跡・冑宮西遺跡、西会津町塩喰岩陰遺跡から出土している。1類は内傾型・内湾型・直線的な外傾型の3種が同率で見られる。内傾型は口縁部文様帯が全て上下に2分され、内湾型もだいたい上下に2分される。直線的な外傾型は2分するものとしめないものが半々である。上部文様帯は46～48・50・52・57・62・63が2～3条一組の口縁に平行した縄圧痕文、49・51・53は平行する縄圧痕文間に刺突を充填し、60は縄圧痕文による渦巻きとそれを基点に横走るモチーフが見られる。47・50・57・63は口端部にスリットを施す。下部文様帯は縄圧痕文による渦巻きとそれを基点に斜走・横走させて菱形・三角形のモチーフを描くものが大半を占めるが、53のように横走る縄圧痕文のみのものもある。53はやや新しい時期の可能性もある。2類の加飾するものには、65・66のように口端に刺突列を施すものがある。64は4類で同心円状に非結束羽状縄文が施される。

以上、県内3地方の類例を概観した。以下に判明したことを列記する。

- ① 口縁部上部文様帯には、口縁平行の縄圧痕文、鋸歯状構成の集合短沈線文、縄圧痕文と短沈線文の組み合わせが見られるが、鋸歯状構成の短沈線文は県南地方に多く、会津は不明である。
- ② 3地方とも口縁部下部文様帯の文様構成は、縄圧痕文による渦巻きとそれを基点にする菱形・三角形モチーフと、その空白部に充填する集合短沈線文が基本で、稀に横走る多条の縄圧痕文のみが施されるものがある。
- ③ 1類胴部地文の非結束羽状縄文で菱形構成になる資料は無く、おそらく2類も同様である。
- ④ 縄圧痕文に使用される原体は、1段撚りで、単種である。LとR両方を用いるものは無い。
- ⑤ 1類土器で、口端にスリットを施すものがある。これは本町西C遺跡では少ない。

3. 本町西C遺跡I群土器の編年的位置付け

福島県内における花積下層式は、先述のとおり羽白D遺跡1次調査で4細分（鈴鹿1987）、羽白D遺跡2次調査でII群0類を加えて5細分（鈴鹿1988）、小滝遺跡で3細分（松本1993）、山田B遺跡の調査で羽白D遺跡の5細分に後続する1段階が設定された（吉田1997）。小滝遺跡の3細分は、それぞれ花積下層式（古）→羽白D遺跡II群0類相当、花積下層式（中）→羽白D遺跡S I 10出土土器相当、花積下層式（新）→羽白D遺跡S K 26出土土器相当としている。そのため現在の花積下層式細分案は、羽白D遺跡の調査成果と山田B遺跡の調査成果を合わせた6細分が認知されていると

判断できる。それでここでは、この6細分を概観して本町西C遺跡I群土器の帰属を考える。

(羽白D遺跡と山田B遺跡の調査成果による花積下層式の6細分)

i) 羽白D遺跡II群0類段階・小滝遺跡(古)段階

器形は深鉢で器壁は厚く、口縁部の多くは外反して口唇部が平らなものや先細りするものが見られる。断面三角形や台形の隆帯が口唇部直下や頸部につくものが少なからずある。文様は1段もしくは2段原体の縄圧痕文で、直線的図形や渦巻きを描く。1段撚りではLとRを束ねて矢羽状の文様効果をだすものがある。他の文様要素として、ヘラ状工具・半截竹管・円形竹管による刺突、刺突・縄文・縄圧痕文などを施す隆帯がある。地文には単節縄文や撚糸文を用いて、整った羽状、不整な羽状、菱形状、縦走の施文がなされる。口唇部上面や内面にも縄文を施すものがある。内面はナデのみのもが多いが、条痕が施されるものもある。

ii) 羽白D遺跡S I 5・19段階

器形は深鉢で、口縁部は直線的に外傾するか緩やかに内湾するものが多い。底部は丸底や尖底のものが多い。口縁部文様帯は狭く、上下を列状の側面圧痕文で区画する。口縁部文様帯には1条の縄圧痕文で円形に近い渦巻きを施し、そこを基点に1～3条の横走・斜走する縄圧痕文で図形を描く。図形同士の隙間に、短い縄圧痕文を集合単沈線文状に充填する。文様要素はほとんど縄圧痕文のみである。地文は単節縄文で整った羽状縄文が施される。地文型の資料には、口端に刺突列や列状の縄圧痕文で加飾するものが見られる。

iii) 羽白D遺跡S I 10段階・小滝遺跡(中)段階

全体的な器形は分からないが、口縁部は緩やかに内湾する。口縁部文様帯は円形竹管を用いた斜角刺突列で上下に2分するものがあり、上部文様帯には口縁に沿った2条一組の縄圧痕文が施される。下部文様帯には横走・斜走する縄圧痕文で図形を描く。渦巻きの縄圧痕文も見られる。縄圧痕文間には集合単沈線文が充填される。地文型の資料には2条の横走する縄圧痕文や、幅の狭い縄文で加飾するものが認められる。

iv) 羽白D遺跡S I 1段階

器形は深鉢で、複合口縁で「く」の字状に内湾する口縁や山形口縁のものがある。底部は平底となる。口縁部文様帯を隆帯で上下に2分して、上部には鋸歯状の集合単沈線文が、下部には縄圧痕文による蕨状文を横位に連結させ、他に縄圧痕文を斜走させて菱形図形を描き、その内部に菱形各片に直行するような集合単沈線文を充填するものや、RとL撚り2種の原体を一組として矢羽状の縄圧痕文を施したものがある。「C」字型の刺突文を施すものもある。また、渦巻き以外の曲線図形を描く類もこの段階に含まれる可能性が高い。地文型に加飾するものは見られない。

v) 羽白D遺跡S K26段階・小滝遺跡(新)段階・山田B遺跡II-1 a類土器段階

器形は深鉢で、口縁部が直線的に外傾するものや外反するものも多く、内湾するものも少数見られる。縄圧痕文で大きな渦巻きや数条一組で横走・斜走または曲線図形を描く。縄圧痕文の余白部には不規則な刺突文を充填している。口縁部文様帯の上端と下端に刺突列で区画を施している。ま

た、縄圧痕文の余白部に円形刺突文を充填するのもこの段階に含まれる可能性が高い。

vi) 山田B遺跡Ⅱ-1b・1c・1d類土器段階

全体の器形は不明だが、口縁部は明確に内湾するものが無く基本的に外反する。器壁が薄く、口唇部を内削ぎにするものが多く見られる。文様帯は口縁部に限定されるものと、上胴部に及ぶものがあり、後者は文様帯中位に区画が施され2段になる。区画は隆帯状の高まりに刺突を加えるものが見られる。文様は円形竹管文を支点にし、2条から3条一組の縄圧痕文で蕨状文を描画して、その周囲に、「ハ」の字状の集合短沈線文や円形竹管刺突を充填するもの、半截竹管で菱形文やヘアピン状の沈線文に縄圧痕文を施すものがある。縄圧痕文は全てRとLを2条合わせて矢羽状の効果を出している。地文は非結束羽状縄文、結束第1種羽状縄文、斜縄文がある。地文型の資料には、口唇部直下に2条一組の縄圧痕文を施し、地文がループ文になるものがある。

以上の6段階の中で本町西C遺跡Ⅰ群土器に内容的に最も近いのは、羽白D遺跡SⅠ10段階・小滝遺跡(中)段階である。また内傾する口縁部を持ち、上部文様帯に鋸歯状構成の集合短沈線文を施す点で羽白D遺跡SⅠ1段階にも類似点が認められる。羽白D遺跡SⅠ10段階に見られる特徴は本町西CⅠ群Ⅰ類の内湾型に類似している。しかしSⅠ10で共伴した土器の中には、区画に列状の側面圧痕文を施すもの、平行して横走する数条の縄圧痕文間に刺突を沿わせるもの、地文型に菱形構成の縄文を施すものがあり、また底部が尖底・丸底が主体になるなど相違点が多い。一方小滝遺跡(中)段階は、縄圧痕文・集合短沈線文・刺突文で文様を描くもので、口縁部形態に内湾型・内傾型・直線的傾型の3種が見られる。この土器群と本町西C遺跡Ⅰ群Ⅰ類との共通性は極めて高く同時期と考えられる。羽白D遺跡SⅠ1段階の鋸歯状構成の集合短沈線文を施す資料は、上部文様帯は類似するが、下部文様帯が3条一組の縄圧痕文で幾何学的な菱形を描き、縄圧痕文の連結部がややカーブし、菱形内部の各辺に直行するように集合短沈線文を充填しており、本町西C遺跡Ⅰ群段階の資料とは文様の割付が違う。そのため、羽白D遺跡SⅠ1段階との共通性は弱いといえる。

ここで問題となるのは、羽白D遺跡SⅠ10段階と小滝遺跡・本町西C遺跡該期土器の関係である。羽白D遺跡考察中で鈴鹿はSⅠ5・19段階のグループを県内北部に分布する類として、同時期県南部には、日向前B式系統後半の柳橋Aや泉川の新しい時期のものが分布すると考えられると言及し、SⅠ10段階はこれら2系統の土器が融合して、同一土器内に同居した資料であると考えている。事実、SⅠ5・19グループは資料が増加した現段階においても、天栄村萱立遺跡を南限に、郡山市近辺までが主な分布域である。これに対し、同時期県南部に分布する柳橋A・泉川系統の資料はそれほど増加しておらず、この段階についての県内南北2系統土器の比較は困難である。ただ、柳橋A・泉川系統に見られる特徴は、日向前B式まで連続性の辿れる鋸歯文帯であり、この鋸歯文帯は先述のように本町西C遺跡や同時期の県内の類例にも見られる。確認できた範囲では、浜通りは差塩D遺跡・本町西A遺跡・中平遺跡、中通りは小野町小滝遺跡である。いずれも上部文様帯に集合短沈線文が施されるもので、鋸歯文帯の系統として認定しうる。これらの分布をみると県中部を北限として、南部の阿武隈高地を主体としている。このことから前段階からの鋸歯文帯系統の分布の地域

性は引き続いていると考えられる。羽白D遺跡における本町西C遺跡I群類例資料に見られる縄圧痕文間に充填される集合短沈線文は、前段階の短い縄圧痕文が集合短沈線の手法に置き換わるのではないかと考えられ、その点で異系統土器の融合と言えるのではなかろうか。

本町西C遺跡I群土器内で特殊な要素を持つ土器として、縄圧痕文を沈線で引き直すものや、同一土器内にLとRの2種原体を用いるものが認められた。LとRの2種原体を用いるのは次段階とされる羽白D遺跡S I 1段階から確認できる要素なので、31図8・20は比較的新しい要素を含んだ土器と判断できる。縄圧痕文を沈線に引き直す手法は、モチーフを描く主文様要素が徐々に沈線に変化していく過程を想起させる要素である。その観点で類例を探すと、最も類似する資料は小滝遺跡の花積下層式(新)段階に属する小滝遺跡(17図18)や(37図26)が該当する。これらと31図15～17の土器の下部文様帯を比較すると、斜走する区画沈線とそれと直行するように充填される集合短沈線文の長短の関係が薄れていく過程を示し、前後関係にあると考えられる。ただ小滝遺跡の土器は、羽白D遺跡S K 26段階相当という位置付けがなされており、直接つなげて考えるには羽白D遺跡S I 1段階と羽白D遺跡S K 26段階の前後関係を、比較検討しなくてはならなくなるが、本町西C遺跡出土資料にはこの段階の資料がないので、今回は各土器に前後のつながりを示す関係があるのを指摘するにとどめる。

4. ま と め

本町西C遺跡出土の花積下層式についてだいぶ長く書いたが、大半はどのように細分されているか、本町西C遺跡と同様な資料はどこからどんな土器が出土しているかという、福島県内における花積下層式の様相のおさらいに終始した感がある。その中でも指摘しえたこととして、本町西C遺跡の土器群は羽白D遺跡S I 10段階・小滝遺跡花積下層式(中)段階とほぼ同時期の資料であること、同時期の鋸歯文帯系統の土器が福島県南部地域に主体的な分布範囲を持つ土器群であること、そしてこの段階の土器には、口縁部形態に内湾型・内傾型・直線的外傾型があり、大部分の土器が口縁部文様帯を上下に2分することなどが挙げられる。

県内の北部と南部に別傾向の土器が分布しているという話をするのであれば、本来隣接県の資料にも目を通すのが好ましいが、時間と紙数の都合上割愛してしまった。また上述したように、羽白D遺跡S I 1段階以降のことについてはわずかに言及したにとどまり、本遺跡の土器群がどう変遷して後段階の土器に脈絡が辿れるかなどについても舌足らずで終わってしまった。これらについては、いずれ機会を改めて論を深めてみたい課題である。

(新 海)

参 考 文 献

- 「愛宕原遺跡」1989 丸山 泰徳『昭和63年度市道原宿愛宕原1号線建設工事関連遺跡調査報告 愛宕原遺跡』
福島市教育委員会・(財)福島市振興公社
- 「上ノ台A遺跡」1987 和深 俊夫他『常磐自動車道いわき市内埋蔵文化財調査報告Ⅱ 上ノ台A』
いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団・日本道路公団

第2編 本町西C遺跡

- 「角間遺跡」1990 山岸 英夫『東北横断自動車道遺跡調査報告8』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 「冑宮西遺跡」1984 目黒 吉明他『冑宮西遺跡』会津高田町教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「冑宮西遺跡」1990 芳賀 英一他『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「萱立遺跡」1986 阿部 俊夫『矢吹地区遺跡分布調査報告Ⅵ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「小滝遺跡」1993 松本 茂『東北横断自動車道遺跡調査報告21』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 「差塩D遺跡」1995 猪狩 忠雄他『東北横断自動車道遺跡調査報告30 東北横断自動車道関連Ⅱ』
いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団・日本道路公団
- 「塩喰岩陰遺跡」1994 芳賀 英一他『東北横断自動車道遺跡調査報告25』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 「獅子内遺跡(1～3次)」1996・1997・1998 鈴鹿 良一他『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・建設省東北地方建設局摺上川ダム工事事務所
- 「諏訪平B遺跡」1983 山内 幹夫『阿武隈地区遺跡分布調査報告(Ⅲ)』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「芹沢A遺跡」1982 石本 弘『矢吹地区遺跡分布調査報告Ⅱ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「長者屋敷遺跡」1983 芳賀 英一他『県道一ノ木・木曾線改良工事に伴う発掘調査 長者屋敷遺跡』
山都町教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「鶴子山B・C遺跡」2001 白河市『白河市史 第4巻 資料編1 自然・考古』白河市教育委員会
- 「中冑遺跡」1990 芳賀 英一他『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「中倉B遺跡」1995 猪狩 忠雄他『東北横断自動車道遺跡調査報告30 東北横断自動車道関連遺跡Ⅰ』
いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団・日本道路公団
- 「中平遺跡」1989 山内 幹夫他『国営請戸川農業水利事業関連遺跡調査報告』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「中ノ沢A遺跡」1989 本間 宏他『東北横断自動車道遺跡調査報告4』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 「羽白C遺跡(1・2次)」1988・1989 鈴鹿 良一他『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ・Ⅼ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「羽白D遺跡(1・2次)」1987・1988 鈴鹿 良一他『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ・Ⅺ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「法正尻遺跡」1991 松本 茂他『東北横断自動車道遺跡調査報告11』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 「松ヶ平A遺跡(1・2次)」1983・1984 鈴鹿 良一他『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅳ・Ⅵ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「宮畑遺跡」1995 梅宮 薫『福島工業団地造成に伴う埋蔵文化財試掘調査報告 宮畑遺跡』
福島市教育委員会・(財)福島市振興公社・福島地方土地開発局
- 「本町西A遺跡」2002 三浦 武司他『常磐自動車道遺跡調査報告32』
福島県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団・日本道路公団
- 「山崎遺跡」1992 石本 弘他『矢吹地区遺跡発掘調査報告10』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 「山田B遺跡」1997 吉田 秀享他『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・地域振興整備公団

第3編 ^{もとまちにし}本町西 D 遺跡

遺跡記号 TO-MMN・D

所在地 双葉郡富岡町大字本岡字本町西

時代・種類 縄文時代 集落跡

調査期間 平成13年4月16日～6月21日

調査員 福島 雅儀・吉野 滋夫

佐々木 透・福田 秀生

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 遺跡の位置と地形

本町西D遺跡は双葉郡富岡町本岡字本町西地内に所在し、北緯37° 20′ 07″，東経140° 59′ 38″に位置している。遺跡はJR常磐線夜ノ森駅から南西に約2.5km，富岡町の中心市街地から西に約2kmの地点に位置する。

富岡町は福島県の浜通り地方中部，双葉郡のほぼ中央に位置し，北は大熊町，南は楡葉町と接している。富岡町は古くから農業生産だけでなく，太平洋沿岸漁業や町内を流れる富岡川・紅葉川でのサケ漁などが中心産業となっていた。近年は東京電力福島第二原子力発電所が建設されたことにより東日本の電力供給地とその名が知られる。さらには常磐自動車道の延伸を契機に双葉郡内の中核をになう町として発展が期待される。富岡町の気候は太平洋に面し温暖で，夏期は涼しく，冬期の降雪量が少ない，一般的に過ごしやすい地域である。

富岡町地形は西側から阿武隈高地，丘陵地帯，河岸段丘，扇状地からなっている。本町西D遺跡が所在する本岡地区の地形は，阿武隈高地から続く丘陵地帯の東端部にあたり，富岡川をはじめとする小河川によって葉枝状に開析する複雑な地形になる。

本町西D遺跡は開析谷に囲まれた東西方向に細長い河岸段丘上に所在し，その段丘面は中位Ⅲ面に相当する。段丘面の標高は約45～50mである。標高45mを境に遺跡の南北は急な段丘崖となり，その比高差は約15mである。遺跡の範囲は段丘平坦面を中心に41,000㎡で，今回の調査区は遺跡範囲の東端部にあたる4,000㎡である。遺跡の現況は畑地・山林である。調査区内でも特に中央部の削平が著しく，その削平土を北側と東側に押しだし平坦地を拡張して畑地としていることが分かった。また，戦後まもなくに作られた炭窯も確認できた。近年は杉などを植林して山林となっている。

本町西D遺跡の周辺には，浅い谷を挟んで北側には本町西C遺跡，さらに段丘を下って低位Ⅰ段丘上に本町西B遺跡が所在し，さらに北側には平成12年度に発掘調査を行った本町西A遺跡，上本町F・G遺跡がある。また開析谷の南側に本町西E遺跡が所在している。

第2節 調査経過

本町西D遺跡は平成6年に実施した表面調査によって確認された遺跡（遺跡番号54300045）である。その遺跡範囲は41,000㎡と推定された。表面調査時の聞き取りでは，石囲炉らしきものがあつたとされ，集落跡と推定された。その後，平成8・11年の2年次にわたって試掘調査が行われ，常磐自動車道の建設工事にかかる要保存面積が4,000㎡と確定された。この試掘調査の結果では，段丘平坦面の全域が遺跡と推定され，出土した遺物から縄文時代早期と前期の2時期に渡る集落跡であ

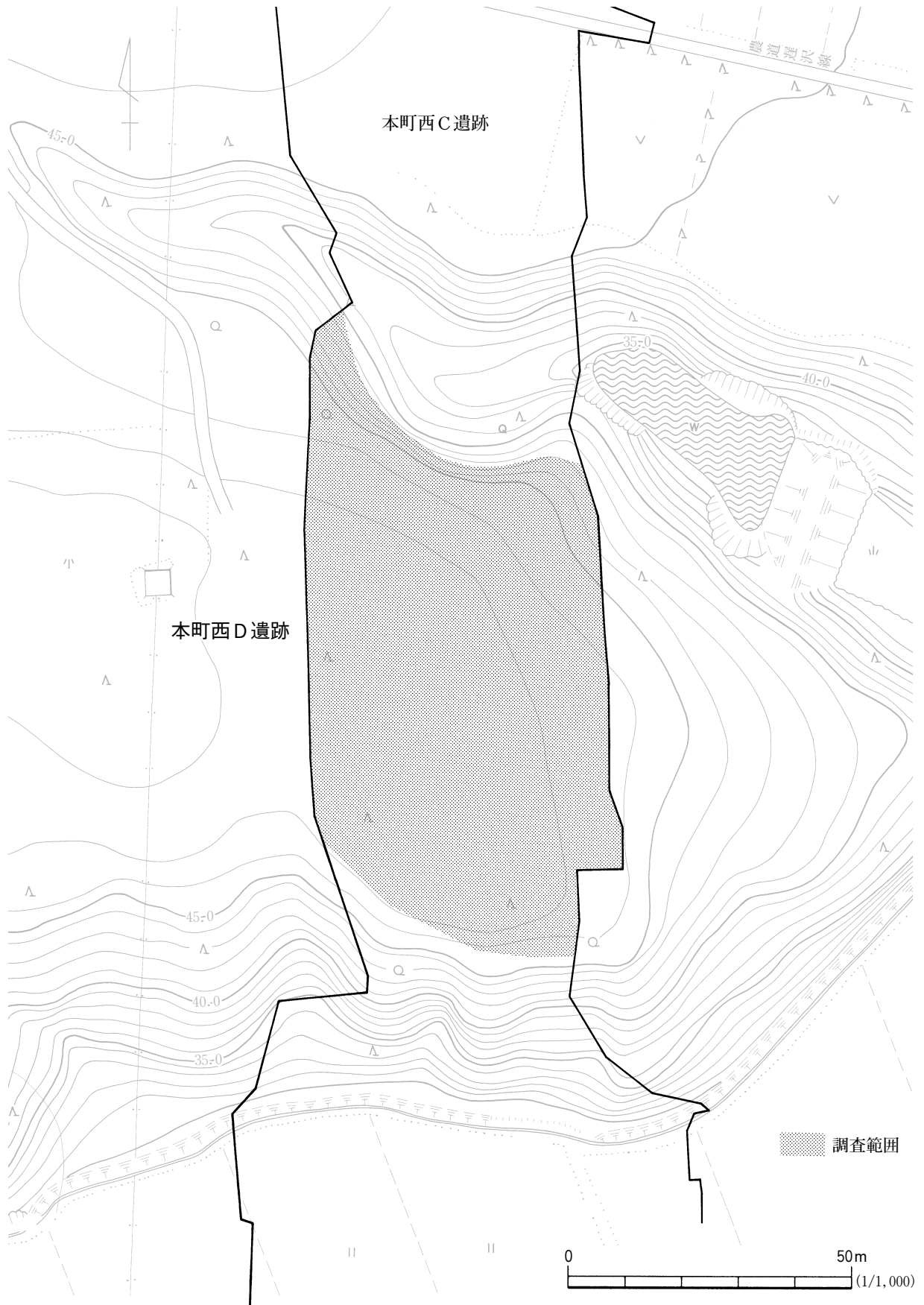


図1 調査区位置図

ると報告される。

平成13年度は発掘調査に先立って、日本道路公団東北支社いわき工事事務所（JH）と福島県教育委員会文化課、財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部の3者による事前協議を行い、工事区内4,000㎡を対象に発掘調査が行われることになった。

本町西D遺跡の調査は、当初調査員4名を配置して開始した。調査期間は平成13年4月16日～6月21日までの延べ27日間である。本町西D遺跡は段丘上の平坦面に位置し、調査区は谷底平野との標高差が15mほどの崖となっている。調査区に取り付くための重機の進入路が無い状態であった。そのため、最初に調査区南側の崖面に重機進入路の造成から着手することになった。また、調査区内にプレハブ用地も確保できないことから、調査区南側に位置する谷底平野に発掘器材保管用プレハブを設置し、発掘調査の準備を行った。4月中旬は作業員6名を投入して調査区内の下草刈り、作業員の進入路や農業用水路などの周辺整備、発掘調査の準備作業を中心に行う。

4月下旬からは本格的に表土除去を開始する。排土は調査区の北側で、本町西C遺跡を隔てる谷に移動した。この時、谷底に有孔管を埋設して排土の廃水処理を行う。また排土全体をシートで覆った他に、谷の末端に沈砂池を設けて調査区外への排土の流出・崩落防止に努めた。その他、連休中の事故防止策・周辺の環境整備などを入念に行う。

5月上旬には表土除去が終了する。作業員約25名を投入し、本格的に遺構検出を開始した。遺構検出作業の結果、調査区東側を中心に土坑6基を確認しただけで、遺構と遺物が希薄であることが分かる。当初試掘調査の結果から予想していた縄文時代早期・前期の集落を形成する竪穴住居跡などは確認できなかった。5月中旬からは土坑の精査を開始し、順次記録作業を行う。この頃本町西C遺跡の調査を開始したことから、調査員2名で調査を継続する。

6月上旬には土坑の精査を終了した。遺物が出土した調査区東側の精査を実施したが遺構は確認できなかった。また遺跡の立地が中位Ⅲ段丘面であることから旧石器が出土する可能性を考慮し、段丘の縁辺部を中心にトレンチを設定し確認調査などを行うが、旧石器時代の人間の活動を示す遺物などは出土しなかった。

6月中旬は本格的な梅雨時期となり雨天が続く。1日の降雨量が多い日もあったが、排土の湧水処理策が功を奏し、排土の流出や崩落などの被害はなかった。発掘作業では雨天のため作業が滞ることがあったが、梅雨の晴れ間に遅れを取り戻し、6月21日に全体写真の撮影、全体測量図の作成を行い本町西D遺跡の調査を終了する。なお、引き渡しについては、近接する本町西B遺跡の調査終了と合わせて、12月5日付で引き渡した。

第3節 調査方法

本町西D遺跡の調査にあたって、遺構の位置や遺物の出土地点を示すために国土座標区系の数値に基づいた10m四方の方眼を調査区全域に設定し、これをグリッドと呼称した。グリッドの設定に

当たっては、日本道路公団東北支社いわき工事事務所（JH）が打設した基準杭を基に、遺跡全体にグリッドおよび標高基準点を設定した。グリッドは調査区全域を網羅できる地点（ $X=148,750$ 、 $Y=102,820$ ）を原点とし、東西70m、南北110mの範囲に77のグリッドを設定した。グリッドの呼称は上記の原点を起点として、東西方向はアラビア数字を用いて、原点から東に向かって1・2・3…7、南北方向はアルファベットを用いて、原点から南に向かってA・B・C…Kとした。グリッドの表示はこれらを組み合わせてA1～K7グリッドとした。

遺跡の調査に際しては、重機を使用して表土を除去した。それ以降は原則的に人力で遺跡基底面まで掘り下げ、遺構・遺物の確認につとめた。遺構の精査に当たっては、遺構の特性や遺存状況にあわせて、土層観察用の畦を設け堆積土の状態や遺物の出土状態に留意しながら精査・記録につとめた。また、堆積土の表記については、基本土層など遺構外の堆積土はLとローマ数字の組み合わせ、土坑内の堆積土はℓとアラビア数字を組み合わせた。

遺構の記録に当たっては、1辺10mのグリッドを1mごとの方眼に細分し、この交点を測点とした。グリッド基準線は国土座標に一致させ、測点の表記は国土座標値（IX系）をそのまま使用した。各遺構の図化は、平面図・断面図とも1/20で記録したが、遺物出土状況などの細部については、1/10で記録した。遺跡の全体図は1/200の縮尺で記録した。

写真は各遺構の調査過程に応じて撮影している。主に35mm判のモノクロとカラーリバーサルを使用し、両者同一カットで撮影した。その他、遺跡の全景写真など必要に応じて6×4.5判のカメラも使用している。

発掘調査で得られた記録・遺物などは、財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において整理作業を行った。報告書刊行後は記録・遺物の台帳を作成し、閲覧可能な状態で財団法人福島県文化財センター白河館（愛称まほろん）で収蔵・保管する。

（福田）

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

遺構の分布 (図2, 写真3・4)

本町西D遺跡で確認できた遺構は土坑が6基だけである。土坑は段丘平坦面の中央部には少なく、その縁辺部に沿って位置している。これは段丘上の平坦面が現代の畑地や植林などで利用されたために、大きく削平を受けている。その削平された土は、調査区の北側と東側の谷に向かって捨てられている。そのため段丘平坦面の縁辺部は、中央部に比べて削平が少なく、土坑の底面付近がわずかに残ったのであろう。また、土坑の性格を特定できる知見をえられず、その性格は不明である。

出土遺物として縄文時代早期末葉から前期後葉、縄文時代晩期の土器、磨石や剥片などの石器が極少量ながら出土している。縄文土器の出土状態はLⅡbから出土したものがほとんどで、各時期の土器が混在した状態で出土している。出土遺物の分布は、遺構の分布と同様に段丘平坦面ではなく、削平が及ばなかった調査区東側の緩斜面に集中する。

本町西D遺跡は削平のため遺構・遺物ともに希薄であるが、縄文時代の各時期共に本来は人々の活動は活発であったのであろう。

基本土層 (図3, 写真6)

本町西D遺跡の基本土層は、LⅠ～LⅤと大きく5層に分けた。以下各土層の説明を行う。調査区内の各地点において欠落する土層もある。逆に必要に応じて細分した箇所もある。これらは基本土層のLと小文字アルファベットを組み合わせ、LⅡaなどと表記している。

LⅠー現在の表土層である。LⅠaは盛土で、段丘平坦面の削平土を起源とし、調査区の北側と東側の斜面部に確認できた。LⅠbは表土である。平坦面の中央部は、表土直下でLⅢとなる。LⅠcは調査区北西端で部分的に確認できた堆積土で、現表土の腐植土を起源とする。

LⅡー褐色土を基調とした土層である。LⅡaは現代の表土に浸食された堆積土である。LⅡbは調査区の北側と東側の斜面部で確認できた。遺物のほとんどは、この堆積土中から出土している。

LⅢー褐色土を基調としたやや粘質の土で、遺跡の基盤土となる。調査区中央部では表土直下でこの土層となり、土坑はLⅢ上面で検出した。

LⅣー明黄褐色土を基調とする粘質土で、砂礫を多く含む。無遺物層。調査区東側では削平でLⅢ土がなく、LⅡの下層はLⅣとなる。4・5号土坑はこの層の上面で確認した。

LⅤー明黄褐色を基調とする粘土である。土中に含まれる酸化鉄により色調の違うものをLⅤa, LⅤbに分けた。

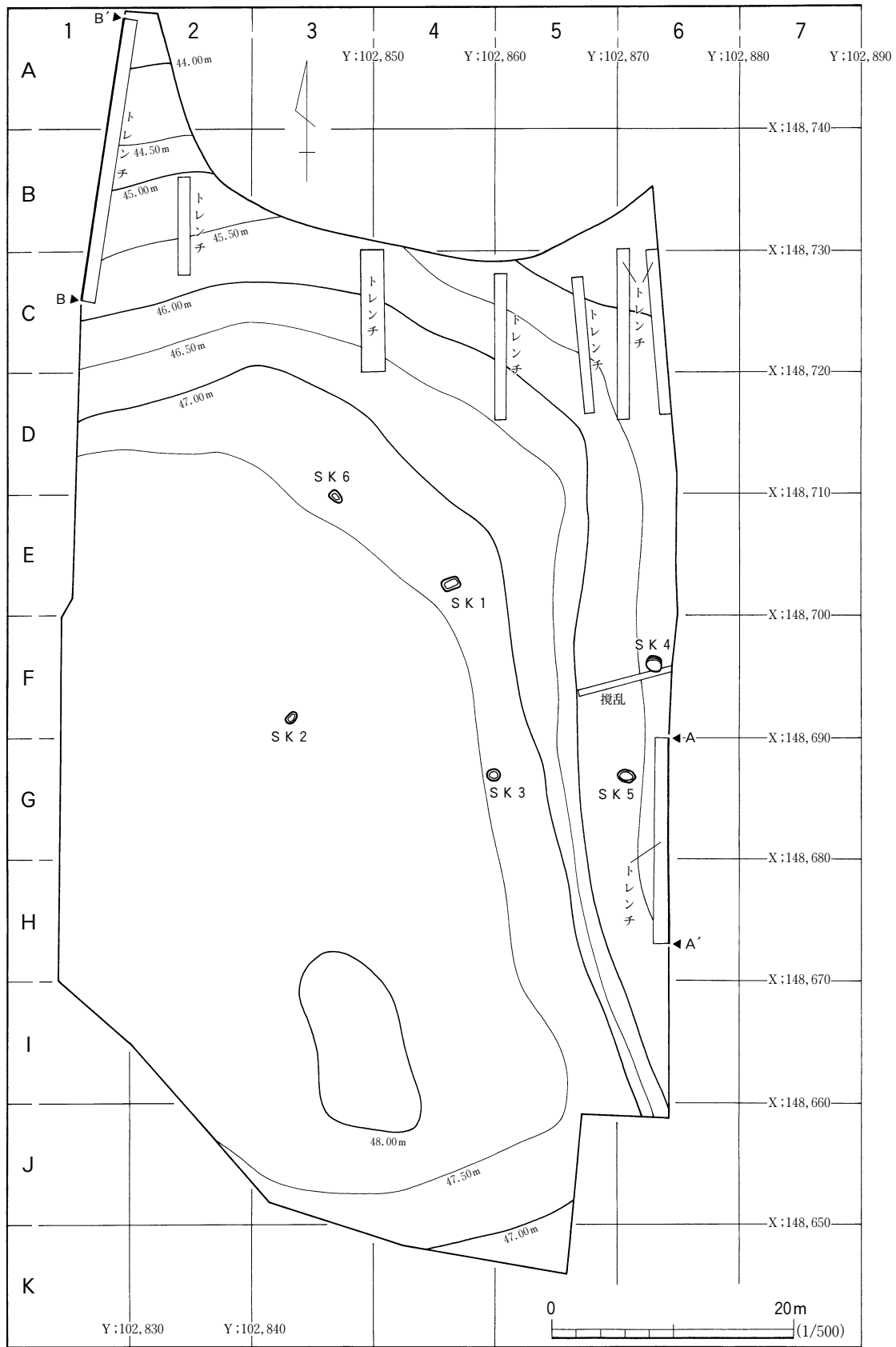


図2 遺構配置図

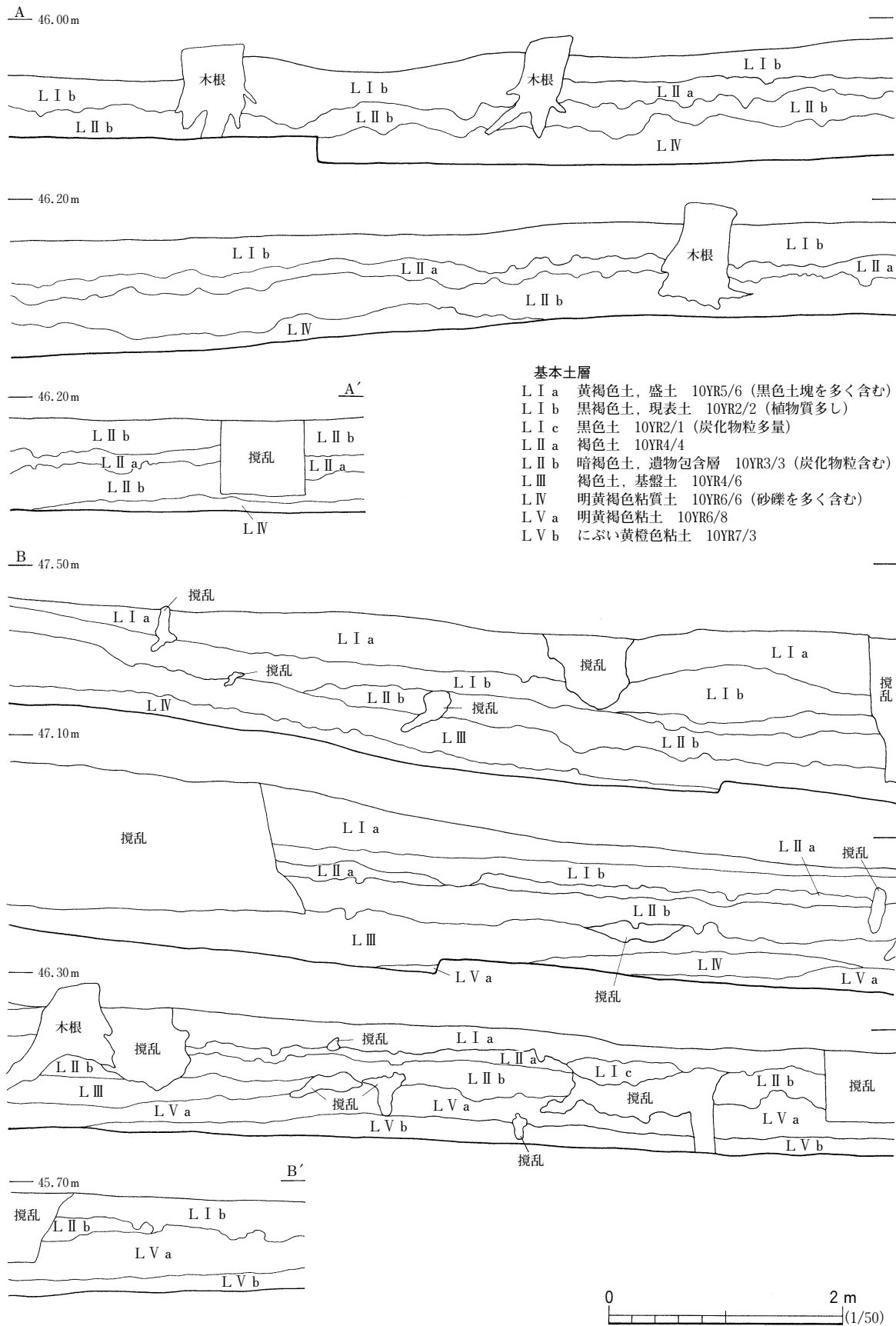


図3 基本土層

第2節 土 坑

本町西D遺跡では土坑6基を検出した。土坑の年代や性格については、その詳細を特定できる資料が得られず不明である。土坑の周辺で縄文時代早期末葉～前期前葉にかけての土器が少量ながら出土していることから、これらの土器の年代に近い時期と考えている。

1号土坑 (図4, 写真7)

本土坑は調査区の中央付近E4グリッドに位置する。周囲は段丘平坦面の縁辺部にあたり、東側に向いわずかに傾斜する。遺構はLⅢとした褐色土の上面で確認した。重複する遺構はない。

本土坑の平面形は隅丸長方形をなす。規模は長軸の長さが160cm, 短軸の長さが100cmを測り、検出面からの深さは28cmである。西側周壁はその上端部がわずかに崩れ、外側に広がる。その他の壁は急峻に立ち上がる。底面は平坦であるが、わずかに中央に向かって深くなる。

遺構内堆積土は4層に分けた。1層～3層は褐色土を基調とする土で、炭化物粒や焼土粒を極少量含む。4層は東側の壁際にのみ確認できた土で、黄褐色土粒を含んでいる。堆積土の特徴から、本土坑は自然に埋没したと判断している。

本土坑からは遺物が出土していないため、その詳細な時期を特定することができない。また、性格を推定するだけの特徴も得られず不明である。

2号土坑 (図4・5, 写真7・9)

本土坑は調査区の中央部、F3グリッドに位置する。周囲は標高47.5m付近の平坦面に立地している。遺構検出面は表土直下のLⅢの上面である。重複する遺構はない。

本土坑の平面形は隅丸長方形をなす。規模は長軸の長さが90cm, 短軸の長さが60cmを測り、検出面からの深さは18cmと浅い。南壁の上端部が崩れて、その立ち上がりが緩やかになる。その他の壁は急峻になる。底面は平坦であるが、わずかに北側に向かって低くなる。遺構内堆積土は炭化物粒と焼土粒をわずかに含む褐色土である。堆積状況については、遺構自体が浅く堆積土が単層であるため不明である。

本土坑からは縄文土器8点が出土し、その特徴が分かるものを図5に示した。これらの土器はすべて底面からやや浮いた状態で出土した。1は深鉢形土器の口縁部破片である。細かい縄文が施される。口唇部は無文であるが、その直下から地文の縄文が施される。2～4は深鉢形土器の胴部破片であろう。5は深鉢形土器の底部破片である。縄文は底部の端部付近まで施される。

本土坑は削平著しく、遺構それ自体が浅いなど、その性格は不明である。また、出土した土器の特徴は縄文時代の前期前葉頃と判断している。

3号土坑 (図4, 写真7)

本土坑は調査区の中央付近、G 4 グリッドに位置する。遺構は段丘平坦面の縁辺部に立地し、東に向かってわずかに傾斜する。遺構検出面はL III 上面である。重複する遺構はないが、東側10 mには5号土坑が所在している。

本土坑の平面形は円形である。規模は直径が100cmで、深さが20cmをはかる。周壁はわずかに遺存する程度であるが、その立ち上がりはやや緩やかになる。底面は平坦である。遺構内堆積土は炭化物粒や焼土粒をわずかに含む褐色土である。遺構自体が浅く堆積土もわずかであるが、堆積土が均質であることから、自然堆積と判断した。

本土坑からは縄文土器が3点出土している。いずれも摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑の性格や時期は明確には不明であるが、周辺から縄文時代前期前葉の土器が出土することから、そのころの可能性はある。

4号土坑 (図4, 写真8)

本土坑は調査区の東端、F 6 グリッドに位置し、段丘平坦面からやや下って、東に向かって低くなる緩斜面に立地する。遺構検出面はL IV 上面である。重複する遺構はないが、南側9 mには5号土坑が所在している。

平面形は、周壁の上端部が崩落して歪んだ円形であるが、周壁の中位から底面にかけては整った円形となる。規模は直径が140cmを測る。検出面からの深さは40cmと比較的深い。土坑の西側は遺存状態が良く、壁面がオーバーハングしている。その他の周壁は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦になる。遺構内堆積土は4層に分けた。1・2層は褐色土を基調とする土で、2層は黄褐色土粒と黒褐色土粒を含んでいる。3・4層は底面付近に薄く堆積する土で、いずれも炭化物粒を含んでいる。堆積土が水平に堆積し、2層に黄褐色土粒と黒褐色土粒が混っていることから、本土坑は人為的に埋め戻されたと判断した。

本土坑から遺物が出土していないため、その性格や年代を特定することはできない。

5号土坑 (図4, 写真8)

本遺構は調査区の東端、G 6 グリッドの位置する土坑である。段丘平坦面からやや下った、東向き緩斜面に立地している。遺構検出面はL IV 上面である。重複する遺構はないが、北側9 mに4号土坑が位置している。

本土坑の平面形は楕円形をなす。規模は長軸の長さが145cm、短軸の長さが100cmを測る。深さは20cmと浅い。周壁は遺構自体が浅いため、その立ち上がりもわずかである。底面は平坦であるが、東側に向かって低くなる。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。遺構内堆積土は炭化物粒と礫を少量含む褐色土である。堆積土が単層であるため、その堆積状況は不明である。

第3編 本町西D遺跡

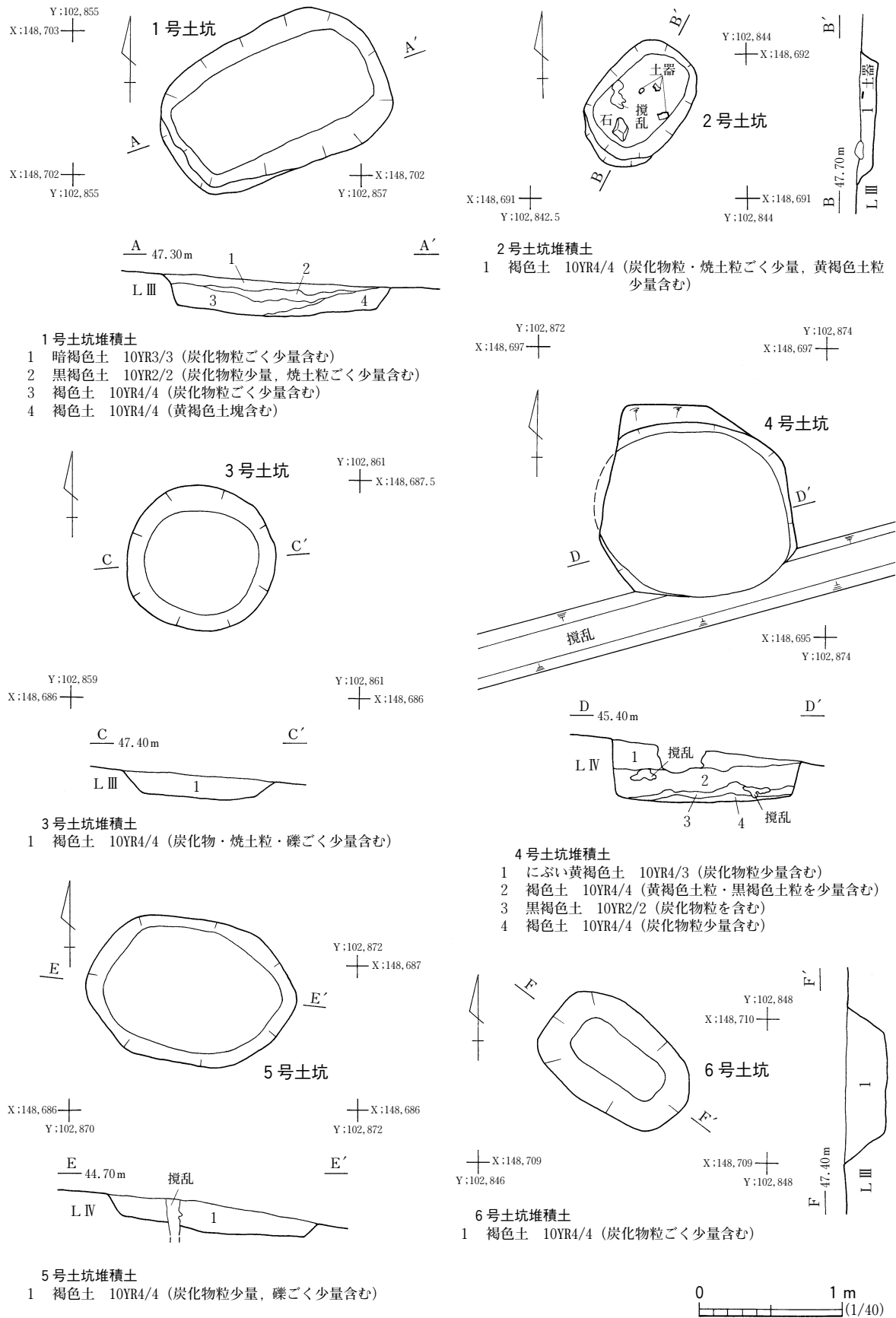


図4 1～6号土坑

本土坑は遺物が出土していないため、その性格や年代を特定することができない。

6号土坑 (図4, 写真8)

本土坑は調査区の中央付近, E3グリッドに位置する。段丘平坦面の縁辺部で, 北側に向かって低くなる緩斜面に立地している。遺構検出面はLⅢ上面である。重複する遺構はない。

平面形は隅丸長方形をなす。規模は長軸の長さが110cm, 短軸の長さが70cm, 深さが30cmである。周壁はいずれも急峻に立ち上がる。周壁から底面にかけての断面形は逆台形をなす。遺構内堆積土は炭化物粒を極少量含む褐色土である。遺構自体が浅く堆積土が単層であるため, その堆積状況は不明である。

本土坑は遺物が出土していないため, その性格や年代を特定することができない。

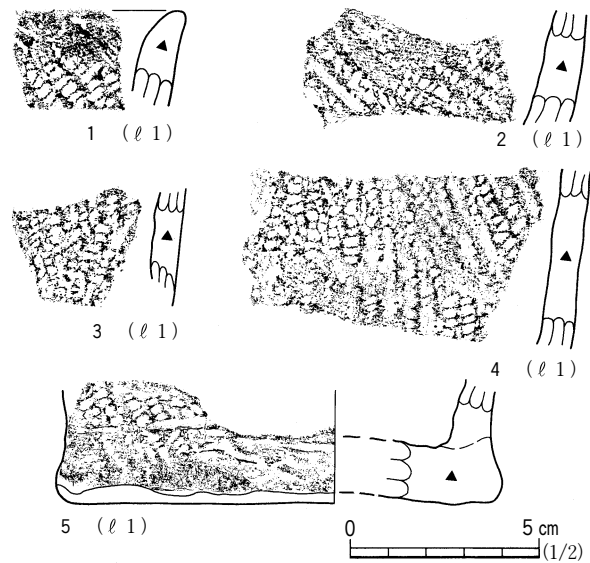


図5 2号土坑出土遺物

第3節 遺構外出土遺物

本町西D遺跡では遺構外出土遺物として, 縄文土器片157点, 土師器片2点, 磨石5点, 剥片9点が出土している。その内, 特徴が分かるものを図6～8に示した。本町西D遺跡の遺構外出土遺物の分布状態は, 遺構の分布と同様に段丘平坦面ではなく, 削平が及ばなかった調査区北側と東側の緩斜面に集中する。また, これらの縄文土器はLⅡbから出土したものがほとんどで, 各時期の土器が混在した状態で出土している。

出土した縄文土器の文様などの特徴や年代観から, 縄文時代早期中葉から晩期までを6つに分けて述べることにする。

縄文土器

①早期中葉の土器 (図6-1～6, 写真9・10)

この土器群は, 条痕文を地文とし, 2本同時施文具による平行沈線間に幅広の篋状工具を用いて連続する刺突を施す。2本の平行沈線は鋸歯状に描かれ, その沈線に沿って上下に篋状工具を用いて列点状の刺突文を施す。その刺突方法は先端部が細くなる工具を用いて, 工具先端の片側を右方向から刺突している。土器の特徴などから6-1～3は同一個体であろう。3は沈線を引いた際に生じる粘土を粒状に残す。3・5は2本1組の平行沈線に沿って, その上下に列点状の刺突を施す。6は口縁部破片で, 口縁部が外反して開く。内外面とも条痕文が施され, 口唇部にはキザミメが施される。

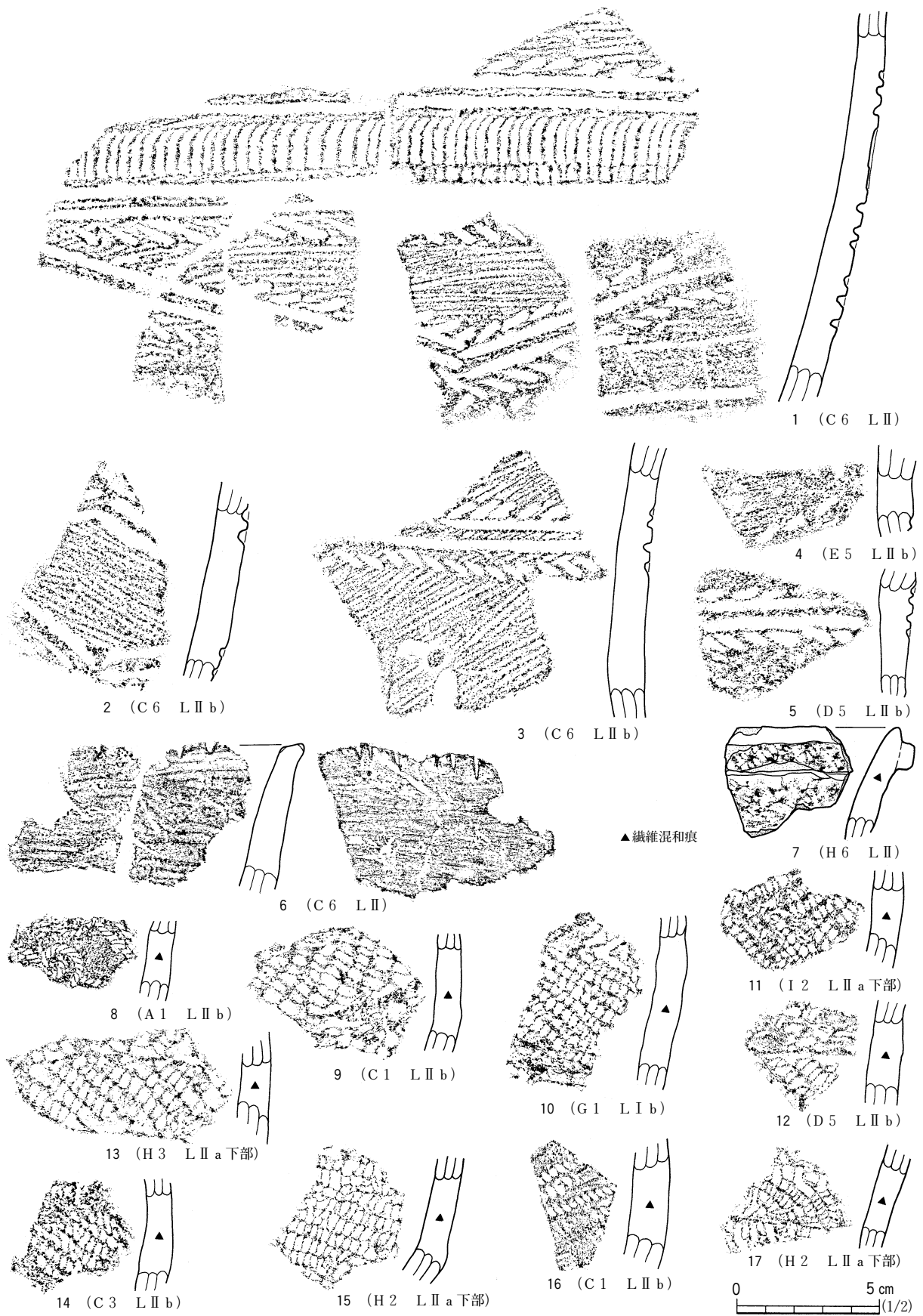


图6 遺構外出土遺物 (1)

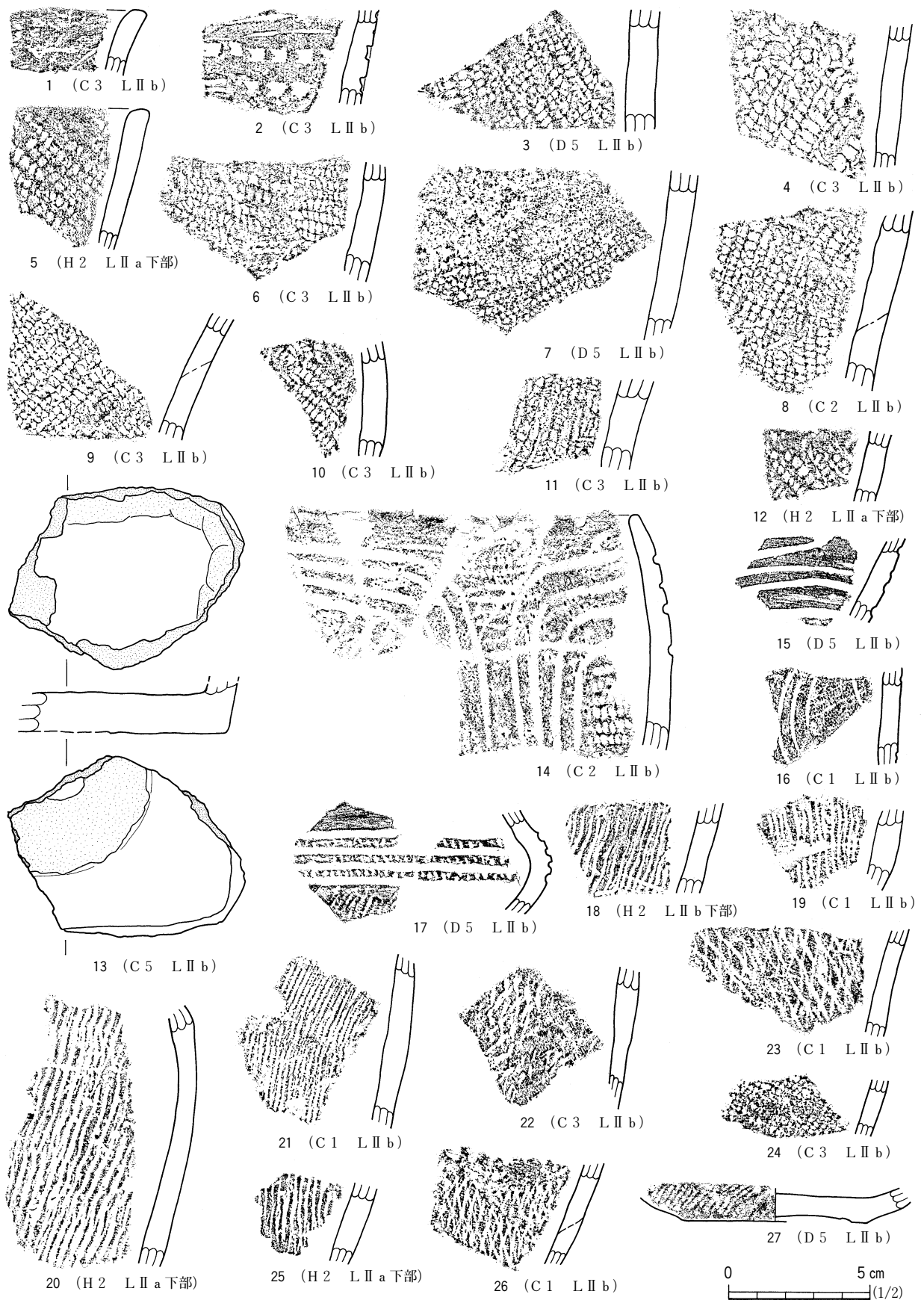


図7 遺構外出土遺物(2)

②縄文時代前期初頭の土器 (図6-7~16, 写真10)

6-7は口縁部破片で、口縁部が外反して開く深鉢形土器になるのであろう。口唇部直下に横位の隆帯がめぐる。隆帯の断面形は四角形をなし、その上部に縄文が施される。8は深鉢形土器の胴部小破片で、縄圧痕文が渦状に施文される。9~16はいずれも小破片であるが、深鉢形土器の胴部破片であろう。9~13は羽状縄文が施される。

なおこれらの土器の胎土には、繊維混和痕が明瞭に観察できた。

③縄文時代前期前葉の土器 (図6-17, 写真10)

この時期の土器は6-17の1点のみの出土である。体部の破片で、胎土に繊維混和痕が観察できる。外面の文様はループ文が施される。

④縄文時代前期中葉から後葉の土器 (図7-1~13, 写真11)

7-1は口縁部の小破片で、外反して開く深鉢形になるのであろう。口唇部直下が無文である。2は深鉢形土器の破片で、半截竹管状の工具を用いて列点状に刺突文を施す。これらは大木3式期の特徴であろうか。3~12は深鉢形の胴部破片である。縄文時代前期初頭の土器と比べ、地文となる縄文の粒が細かい特徴がある。13は台付鉢の破片であろうか。底部の形状が隅丸方形をなす。底部外面には円筒状の台が剥落した痕跡が認められる。全体の形状は不明であるが、この時期に属するものと考えている。

⑤縄文時代後期前葉の土器 (図7-14, 写真11)

この土器の出土量は数点程度と極めて少ない。7-14は口縁部破片で、その器形は口縁が軽く内湾する深鉢形になるであろう。文様は口縁部直下から4本の沈線で上下に長い楕円形を描き、その内部に地文となる縄文を残している。

⑥縄文時代晩期の土器 (図7-15~27, 写真11)

縄文時代晩期の土器は小破片が十数点とその出土量は少ない。7-15は精製土器の破片である。浅鉢の胴部破片であろうか。外面は沈線が描かれ、丁寧にミガキが施される。小破片で文様が不明であるが、近接する本町西B遺跡の調査成果からすれば、大洞C₂式~大洞A式期の所産であろう。17は小型の鉢形土器の胴部破片である。胴部最大径となる部分に4本の平行沈線を描き、各沈線間に細かい刺突を施す。胴部下半は細かい斜縄文が地文として施される。18~27は粗製の深鉢形土器の破片である。18~21・25は細かい縦位の撚糸文が施される。22・23・26は網目状の撚糸文が施される。27は底部破片で、細かい斜縄文が地文として施される。

石 器

石器は縄文土器と同様にその出土量は極めて少ない。その分布状況も調査区北側と東側の斜面部から出土したものがほとんどである。これら石器の年代については、周辺から各時期にわたる縄文土器が出土することから、明確な年代を特定することはできない。敢えて年代に言及するならば、石器の出土量が最も多い縄文時代前期中葉から前期初頭にかけての時期の可能性が高い。

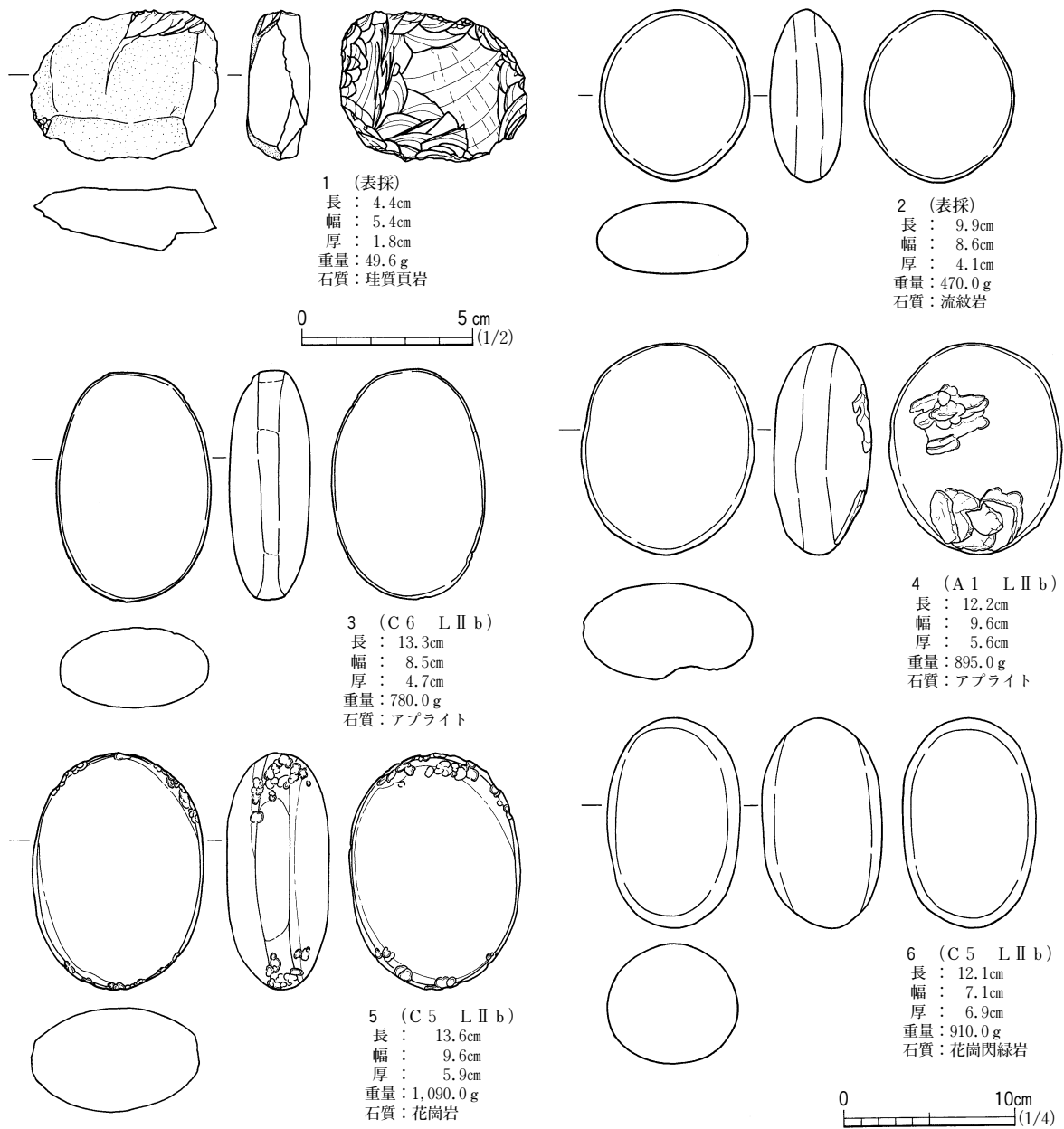


図8 遺構外出土遺物(3)

二次加工のある剥片(図8-1, 写真12)

8-1は表面に自然面を残す楕円形をなす石器である。裏面の片側にのみ加工が施される。下端部には細かい調整加工が施され、刃部を形成している。機能は搔器の可能性はある。

磨石(図8-2~6, 写真12)

2~5は磨石で、平面形は楕円形をなす。扁平な河原石を素材としている。表裏両面と側面に摩面があり平坦になっている。4・5は長軸方向の端部に敲打痕が観察できる。6は楕円形をなす磨石だが、その断面形は円形をなす。磨面は全面に観察でき、表面は滑らかになる。(福田)

第3章 ま と め

本町西D遺跡は南北を深い開析平野に囲まれた河岸段丘上に所在する。調査区は遺跡範囲の東端部にあたる。調査区が位置する段丘平坦面は、現代の畑地や植林などに利用されていたため削平が著しい。その削平は平坦面の中央部が最も顕著であり、段丘の縁辺部にあたる調査区北側と東側では削平が少なく、この部分でわずかに縄文土器などを包含する堆積土を確認した。

本町西D遺跡で確認できた遺構は土坑6基だけである。これらの土坑は、比較的削平の少ない段丘平坦面の縁辺部で確認できた。土坑の性格や年代を特定するだけの資料を得られず不明である。出土遺物は縄文土器・石器類がコンテナ箱で1箱弱と極端に少ない。遺物は、遺構の分布と同様に調査区北側と東側の緩斜面部から出土した。縄文土器の特徴から、縄文時代早期中葉、前期初頭から後葉、晩期と各時期に渡っているが、早期中葉と前期前葉の縄文土器が主となる傾向が見られた。出土状況については、LⅡbとした褐色土から出土したものがほとんどで、各時期の縄文土器が混在する状態で出土している。

本町西D遺跡では出土遺物が少なく、この地における人間の諸活動を復元することは困難であるため、近接する本町西C遺跡との比較から簡単にまとめることにする。

本町西D遺跡から出土したのは縄文時代前期初頭の土器が比較的多く、その他は数点程度である。この土器の特徴は、図6-7~13に示すように、口縁部文様帯に渦巻き状の縄圧痕文が施され、体部には非結節羽状縄文が施される。本町西C遺跡1号住居出土遺物と同じ特徴がある。本町西C遺跡では前期初頭の竪穴住居跡が9軒確認でき、その出土土器の特徴から、花積下層期でもある一時期に限定できるとされる。この竪穴住居跡は平面形が長方形で小型なものが多い。住居の構造は床面の中央に掘込み炉が作られる特徴があり、1号住居跡では4本の支柱穴が確認できた。竪穴住居跡の特徴からは、小型住居からなる小規模集落であるといえよう。本町西C遺跡では住居跡以外に食物などを貯蔵する施設や生活ゴミを廃棄する土坑などが無い特徴がある。これらは居住区域と別に設けられたとも指摘できる。

今回の調査区が遺跡の立地する段丘面の東端に位置することからすれば、本遺跡で出土した縄文土器に由来する集落跡などは、調査区の西側にその中心があると推定される。また、本町西C遺跡の集落跡で見つかった縄文時代前期前葉の土器が少量ながら出土していることから、本町西C遺跡とは浅い谷を挟み、居住区域と違った用途で利用されていた可能性がある。

昨年度までに調査を行った本町西A・C遺跡、上本町G遺跡の成果を見れば、縄文時代早期から前期の各時期ともに竪穴住居跡数軒からなる小規模集落が立地を変えて点々と移動していることが分かってきた。今後は小規模集落の詳細な変遷やそのあり方を総合的に分析することで、本遺跡の位置づけが可能になるものと期待している。

(福 田)

第4編 ^{うしろさく}後作 A 遺跡 (1次調査)

遺跡記号 TO-US. A

所在地 双葉郡富岡町大字上手岡字後作

時代・種類 縄文時代 集落跡

調査期間 平成13年8月27日～11月16日

調査員 福島 雅儀・佐々木 透

千葉 秀樹・福田 秀生

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 遺跡の位置と地形

後作A遺跡は双葉郡富岡町大字上手岡字後作に所在し、北緯 $37^{\circ} 22' 16''$ 、東経 $140^{\circ} 58' 8''$ に位置している。遺跡は大熊町との町境に近い富岡町北端部で、JR夜ノ森駅から北西に約2km、国道6号線から西に3.5kmで、県道いわき浪江線から東に500mの地点に位置する。遺跡の南側は家老溜池となっている。

富岡町の地形は西側から阿武隈高地、丘陵地帯、河岸段丘、扇状地からなっている。後作A遺跡の所在する上手岡地区は、阿武隈高地から続く丘陵地帯の東端部にあたり、大小の開析谷が葉枝状に入り組み、東西方向に細長く伸びる河岸段丘が残る複雑な地形となる。

後作A遺跡は南北を大きな開析谷が浸食し、東西に細長く伸びる河岸段丘上の平坦面に立地する。この段丘面は中位Ⅲ面に相当し、遺跡の標高は約84～89mである。遺跡の南北は標高87mを境に段丘崖となり、谷底平野との比高差は約5mである。遺跡の範囲は河岸段丘の平坦面を中心に55,000㎡で、今回の調査区はその中央部にあたる6,400㎡である。調査前の現況は、遺跡の中央を横断するように町道茂木1号線が東西方向に走り、その南北は宅地・水田・畑地であった。なお町道部分は遺跡の基底面よりも深く掘削を受けていることから、調査から除外した。このように後作A遺跡では現代の土地利用によって削平されている。段丘平坦面の中央部で遺構・遺物は希薄であり、削平が少なかった平坦面の縁辺部に辛うじて遺構が残っていた。

後作A遺跡の周辺に所在する遺跡として、開析谷を挟んだ南側には後作B遺跡があり、鉄滓が採取できることから製鉄関連遺跡の可能性が高い。その他に高津戸館跡、大日原遺跡、平道地遺跡、平成12年度に調査を行った日南郷遺跡がある。大熊町では縄文時代晩期の集落跡として有名な道平遺跡などがある。

第2節 調査経過

後作A遺跡は平成6年度に福島県教育委員会の委託を受けて財団法人福島県文化センターが実施した、常磐自動車道建設に伴う表面調査により確認された遺跡（遺跡番号54300055）である。その遺跡範囲は55,000㎡と推定された。その後日本道路公団東北支社いわき工事事務所（JH）により予定工区が提示され、その工区内を対象として試掘調査が行われることになった。

試掘調査は福島県教育委員会の委託を受けた財団法人福島県文化センター（平成13年4月より財団法人福島県文化振興事業団に名称変更）が行った。後作A遺跡は富岡ICの建設予定地であることから広範囲に渡る試掘調査が予定され、平成9・11・13年の3ヶ年に渡って行われた。この試掘

調査の結果、遺跡は戦後に重機などによる削平が進み、水田・畑地・宅地となったことから、遺構や遺物は少ないことが分かった。工区西側で竪穴住居跡や土坑を検出し、縄文土器などが出土したことから、この部分を中心に6,400㎡の範囲について保存措置を講じることになった。また、後作A遺跡の工区内では一部試掘調査が行われていない範囲がある。これについては平成14年度に試掘調査を行い改めて保存範囲の有無を確認する予定である。

平成13年度は発掘調査に先立って、日本道路公団東北支社いわき工事事務所と福島県教育委員会、財団法人福島県文化振興事業団の3者で協議を行い、工事区内の6,400㎡を対象に発掘調査が行われることになった。

後作A遺跡の発掘調査では当初調査員2名を配置して開始した。調査期間は8月27日から11月16

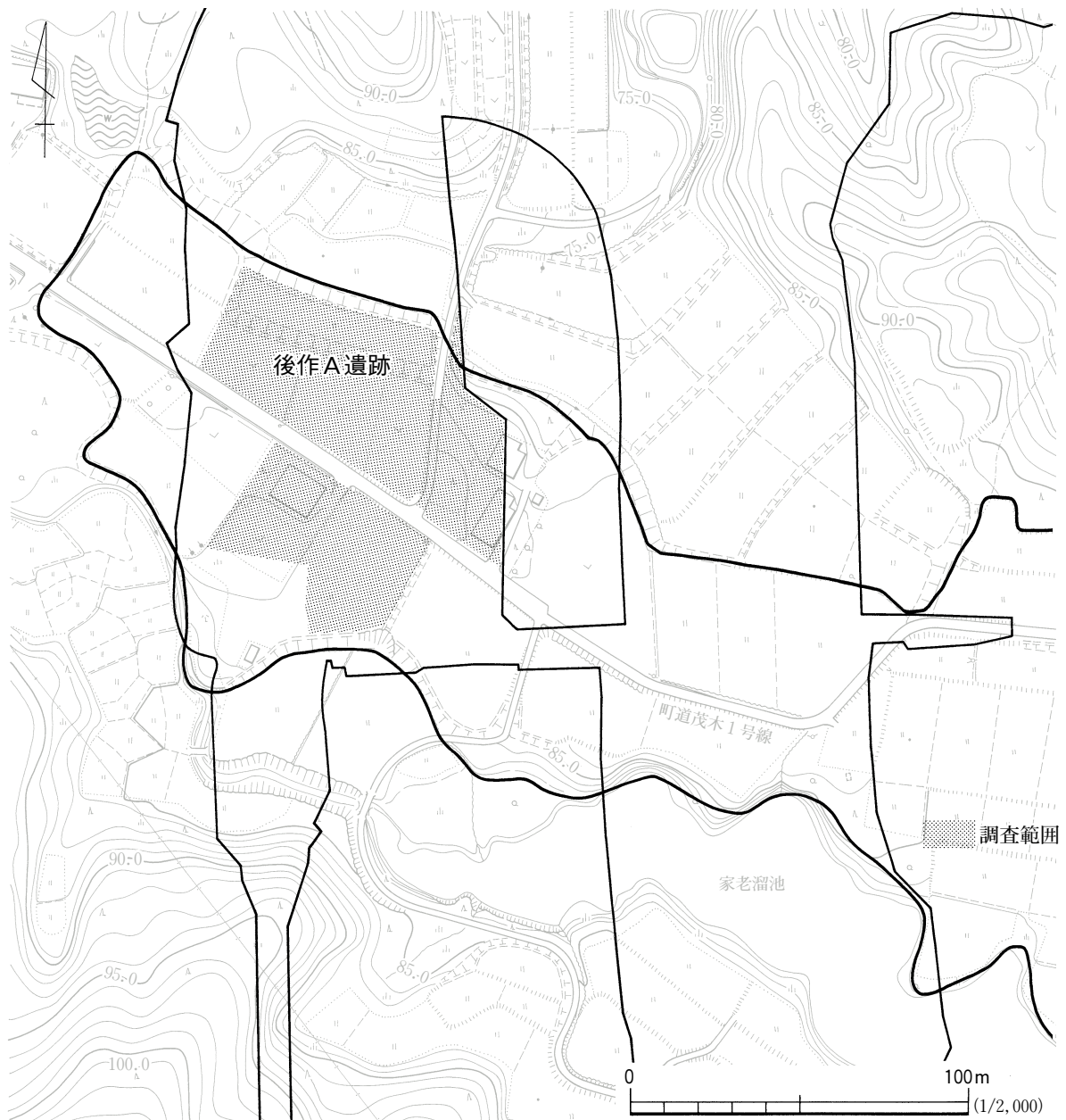


図1 調査区位置図

日までの延べ46日間である。8月末から9月上旬は、重機による表土の除去を開始すると共に、水路整備や下草刈りといった周辺整備を行い発掘調査の準備を中心に行った。

9月中旬には表土の除去が完了し、作業員を約30名投入して本格的に発掘調査を開始する。遺構検出作業の結果、調査区北東部に縄文時代早期の土坑群、南東部に縄文時代晩期の竪穴住居跡を確認した。また、作業員の休憩場所と器材庫を兼ねたプレハブ、仮設トイレなどを設置し、安全衛生面の配慮に努めた。

9月下旬からは調査区北東部の土坑群の調査に着手し、順次記録作業を行う。10月中旬からは調査員が3名となり、調査区南側の竪穴住居跡や埋設土器の調査を行う。また、調査区北端部では縄文時代早期中葉頃の遺物包含層の掘り込みも継続して行いが、予想したより遺物の出土量は少ないことがわかった。

10月上旬は雨天が続き作業中止になるが、雨天による大きな災害もなく順調に調査が進む。10月12日の作業終了直前に作業員が急病により亡くなる事故が発生した。そのため翌週10月15日～19日を調査中断する。

10月下旬には1号住居跡の炉跡から、後期旧石器時代のナイフ形石器が1点出土する。このため、調査区内においてローム土を掘り下げ、旧石器時代の遺構や遺物を確認する作業を行うことにする。縄文時代晩期の1号土器埋設遺構では、浅鉢2個と深鉢2個の4つの土器からなることが確認できた。

11月にはいと遺構および遺物包含層の調査もほぼ終了し、調査は旧石器の確認作業が中心となる。その他に遺跡の全体写真を撮影、全体測量図を作成した。旧石器確認作業では、調査区自体が削平され、ローム土が部分的にしか遺存しないことから、特に旧石器時代の遺物は確認できなかった。11月16日までは器材を完全に撤収し、後作A遺跡の調査を終了した。なお、引き渡しについては、富岡町で同時に発掘調査を行っていた本町西B・C・D遺跡とあわせて、12月5日付で4遺跡を一括して引き渡した。

第3節 調査方法

後作A遺跡の調査にあたって、遺構の位置や遺物の出土地点を示すために国土座標Ⅹ系の数値に基づいた10m四方の方眼を調査区全域に設定し、これをグリッドと呼称した。グリッドの設定に当たっては、日本道路公団東北支社いわき工事事務所（JH）が打設した基準杭を基に、遺跡全体にグリッドおよび標高基準点を設定した。グリッドは調査区全域を網羅できる地点（ $X=152,780$ 、 $Y=100,480$ ）を原点とし、東西100m、南北120mの範囲に120個のグリッドを設定した。グリッドの呼称は上記の原点を起点として、東西方向はアラビア数字を用いて、原点から東に向かって1・2・3…10、南北方向はアルファベットを用いて、原点から南に向かってA・B・C…Kとした。グリッドの表示はこれらを組み合わせてA1～K7グリッドとした。

遺跡の調査に際しては、バックホーやクローラードンプなどの重機を使用して表土を除去した。それ以降は原則的に人力で遺跡基底面まで掘り下げ、遺構・遺物の確認につとめた。遺構の精査に当たっては、遺構の特性や遺存状況にあわせて、土層観察用の畦を設け堆積土の状態や遺物の出土状態に留意しながら精査・記録につとめた。また、堆積土の表記については、基本土層など遺構外の堆積土はLとローマ数字を組み合わせてL I・L II、土坑内の堆積土はℓとアラビア数字を組み合わせてℓ 1・ℓ 2と表記した。

遺構の記録に当たっては、1辺10mのグリッドを1mごとの方眼に細分し、この交点を測点とした。この測点は国土座標に一致するため、測点の表記は国土座標をそのまま使用した。各遺構の図化は、平面図・断面図とも1/20で記録したが、小型の遺構や遺物出土状況などの細部については1/10で記録した。遺跡の全体図は1/200の縮尺で記録した。

写真は各遺構の調査過程に応じて撮影している。カメラは35mm判のモノクロとカラーリバーサルを使用し、両者同一カットで撮影した。

発掘調査で得られた記録・遺物などは、財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において整理作業を行った。報告書刊行後は記録・遺物の各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で財団法人福島県文化財センター白河館（愛称まほろん）で収蔵・保管する。

（福 田）

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

概要 後作A遺跡で確認できた遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑32基、土器埋設遺構1基、溝跡5条である。遺構の分布は調査区の北東側と南東側に集中する傾向が見られた。これは調査区の大部分を占める段丘平坦面が、近年の宅地や水田・畑地造成、町道茂木1号線の舗装化など遺構確認面よりも深く削平されたためである。その削平は段丘の中央部を主に掘削し、その掘削土は調査区の南北端にある段丘崖に押し出して平坦面を広げている。そのため遺構や遺物は削平の少なかった段丘の縁辺部に確認できた。調査区の北東部では縄文時代早期中葉ころの土坑群が確認できた。土坑は直径1 m前後の円形であるが、中には直径が2 mを超える大型土坑も数基存在する。調査区の南東側では、上記の土坑数基に加えて縄文時代晩期後半の1号住居跡と1号土器埋設遺構を確認した。1号住居跡は炉跡を検出しただけで、壁の立ち上がりなどは不明である。この炉跡の構造は掘形を持ち、それに粘土を厚く貼り付けて作っている。1号土器埋設遺構は深鉢2個体と浅鉢2個体の4つの土器からなる組み合わせ式の土器棺墓である。その構造は底部を打ち欠いた深鉢を上下に重ね、その内部に浅鉢を底と蓋になるように組み合わせている。

出土遺物では縄文時代早期中葉から後葉の土器を中心に、コンテナ箱で2箱分出土している。出土遺物の分布は、土坑群の分布と同様に調査区の東半部に集中する。調査区北端部の遺物包含層から出土した縄文土器は、段丘平坦面から出土した土器と同じ特徴であるが、その出土量は少ない。その他に縄文時代晩期後半ごろの土器は1号土器埋設遺構を中心として少量ながら出土している。調査区外の西側に縄文時代晩期の集落跡があるのであろうか。石器の出土量は極めて少なく、その年代は土器と同様に縄文時代早期中葉から後葉であろう。その他に1号住居跡の炉跡掘形から旧石器時代と考えられるナイフ形石器が1点出土している。

後作A遺跡では削平の少なかった調査区の東半部で、土坑が密集して確認できた。本来ならば段丘平坦面を中心に、縄文時代早期中葉から後葉にかけての集落跡が広がっていた景観を復元できるのであろう。

基本土層 後作A遺跡の基本土層はL I～L Vと大きく5つに分けた。調査区は前述のように削平が著しいため、調査区内でも欠層する部分が多い。また、調査区北側の遺物包含層は段丘崩落土の再堆積土層である。基本土層は堆積土の性質などに応じて細分している。この時の表記方法はローマ数字と小文字のアルファベットを組み合わせで表現し、L II a・L II bというように表している。以下基本土層の説明を行う。

L I ——現在の表土層、水田や畑の耕作土である。L Iの厚さは、最大でも30cm程度である。

調査区南西部ではL Iが部分的にしか残らず盛土が顕著に見られた。これは畑の造成時

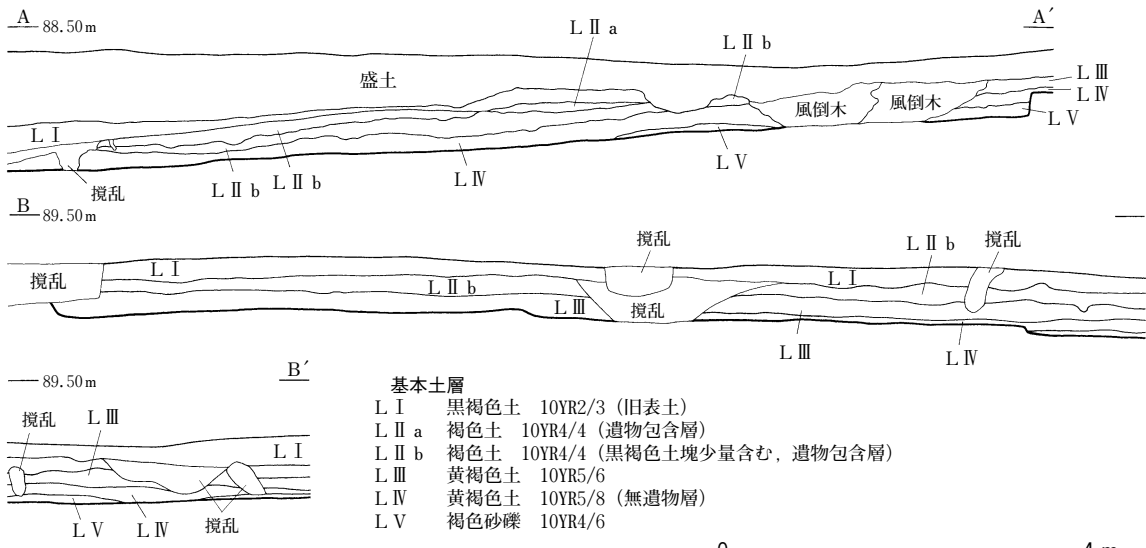
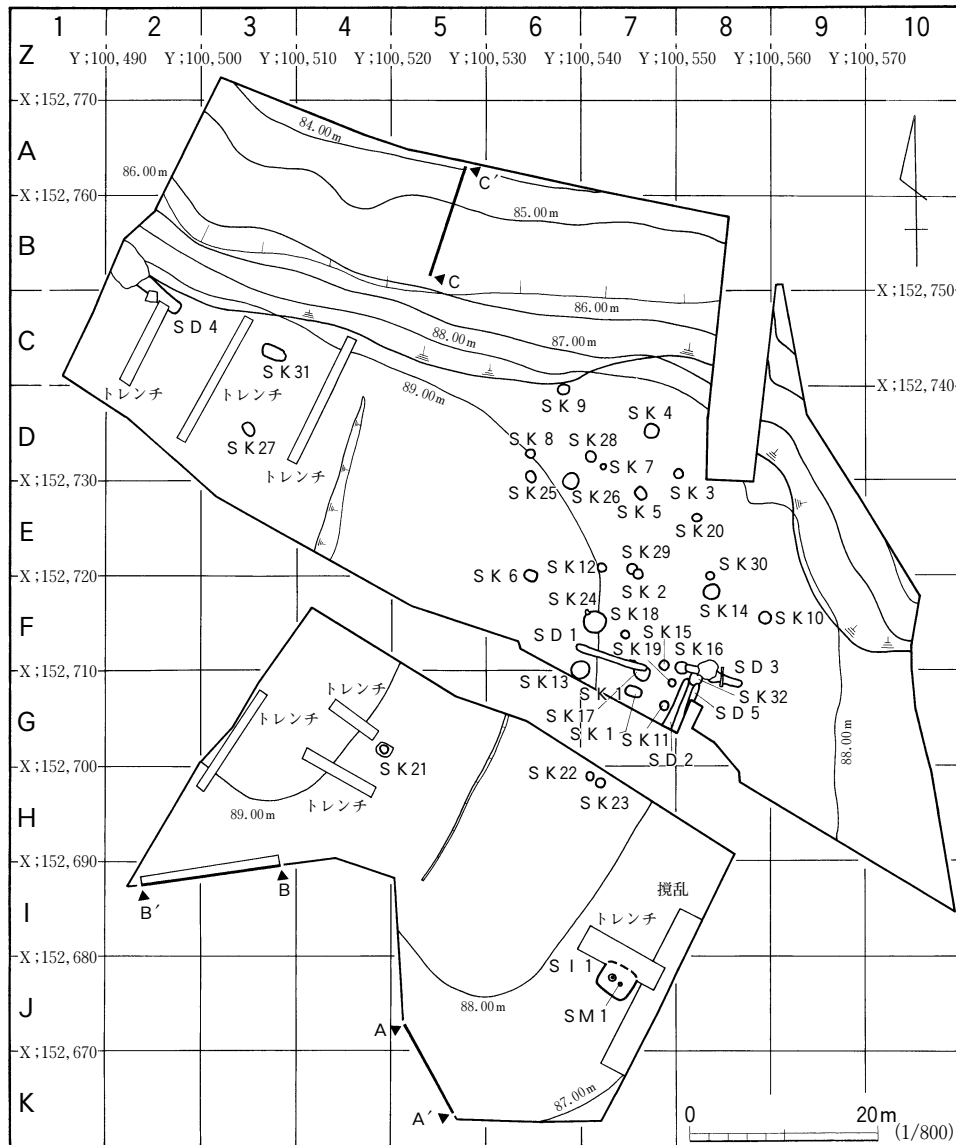


図2 遺構配置図・基本土層

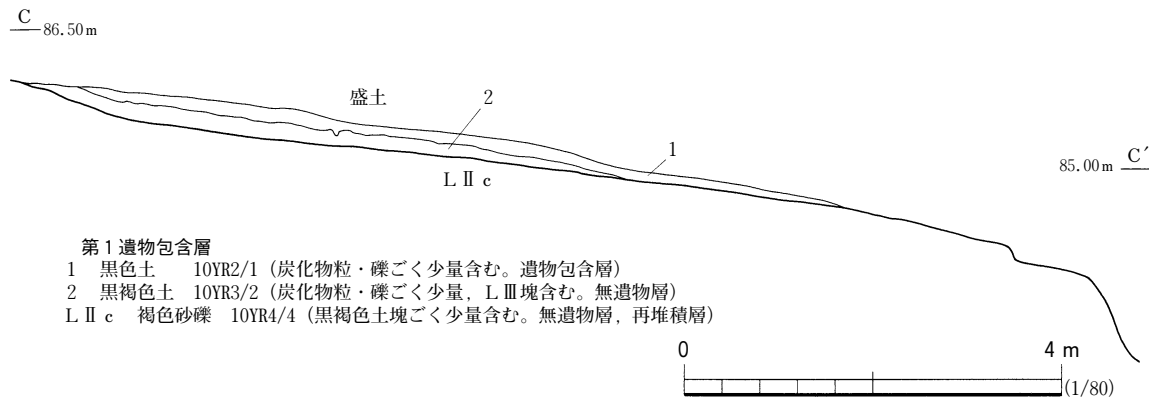


図3 第一遺物包含層

に周辺を掘削して新たに盛土されているからであろう。なお、明らかな現在の盛土は図中では「盛土」と表記している。

L II a—褐色土を基調とする堆積土で、調査区の南東側を中心に確認できた。L II aは下層のL II bに比べて表土の浸食や水田耕作のためか、やや暗い色調となり、その上面は乱れている。また、縄文時代早期頃の遺物をわずかに含んでいるが、L II bに比べれば極めて少ない。

L II b—褐色を基調とする堆積土で、わずかに黒褐色土粒を含んでいる。L II bはL IIIとした基盤土の上面を薄く堆積する土層で、町道茂木1号線より南側の調査区とその北側の土坑群が確認された部分で確認できた。L II bには縄文時代早期中葉から後葉にかけての土器を含んでいる。縄文土器は調査区の南東側で1号住居跡の周辺、J 6・I 6グリッドからの出土が多い。

L II c—褐色砂礫層である。この土層は調査区北側の段丘下位の斜面部に堆積している。段丘の崩落に起因する再堆積層で、L Vに見られる小礫を多量に含んでいる。L II cの上層には遺物包含層が堆積するが、L II cには遺物は含まれていない。

L III—黄褐色のローム土で、調査区の基盤となる堆積土である。削平の少ない調査区の東側を中心として分布している。ほとんどの遺構はこの上面で確認している。また、1号住居跡から旧石器時代のナイフ形石器が出土したことから、旧石器確認調査ではL IIIを掘り下げた。L IIIの厚さは最大でも30cm程度であったが、ローム土自体が残っていない部分も多く、旧石器は見つかっていない。

L IV—黄褐色を基調とするやや砂質土で、小礫を少量含むL Vの漸移層である。調査区の西北部や町道茂木1号線の南側では基盤土となるL IIIが掘削されて、L I直下でL IVとなる。22・23・27・31号土坑などはこの上面で検出している。

L V—褐色砂礫層である。調査区北側の段丘崖の中位以下で確認でき、部分的に露頭している。また、1・31号土坑の底面はL Vを一部掘り込んでいる。

第2節 竪穴住居跡

後作A遺跡で確認できた竪穴住居跡は1軒のみであった。1号住居跡の年代は、その出土遺物の特徴から縄文時代晩期後半ごろと推定される。1号住居跡の周辺で同時期の遺構は極めて少ない。また縄文時代早期の竪穴住居跡は確認できず、同時期の土坑が30基ほどだけである。縄文時代の集落研究によれば、土坑群と住居群は離れて営まれるとされ、調査区外に集落があるのであろうか。

1号住居跡 S I 1

遺 構 (図4, 写真8)

1号住居跡は調査区の南東側、J7グリッドに位置している。本住居は炉跡を辛うじて確認できた程度で、本来の地形を復元できないほど削平されている。現況の地形は、南に向かってわずかに低くなる緩斜面で、その標高は87.5m付近である。1号土器埋設遺構と重複するが、現状で明確な切り合い関係は捉えられないが、土器の特徴からは本住居跡の方が古いと判断した。1号住居跡と同じ時期の遺構は見つかっていない。遺構検出面はLⅢ上面である。

本遺構は削平が顕著で、炉跡を確認したにとどまる。そのため周壁の立ち上がりはなく、住居跡の明確な平面形は不明である。遺構検出作業の段階では、炉跡の周辺部分でややくすんだ褐色土の広がり確認できた。この厚さも1~2cmと薄く不明瞭であったが、炭化物粒などをわずかに含むことから、1号住居跡に起因する土と捉えた。さらに炉跡自体もかなり削平されることからすれば、床面の一部とは考えにくく、住居跡の掘形に充填した貼床土の痕跡と判断している。

この貼床土の遺存状況から判断すると、本住居跡の平面形は長方形であろう。長軸の方向は真北に対して西に約60°傾いている。規模は長辺の長さが3.8m、短辺の長さが2.8mを測る。

本住居跡では炉跡以外に柱穴などの施設は確認できなかった。炉跡は住居の中央部に作られたと推定される。その構造は掘形を持ち、その中央部に粘土を厚く貼り付けている。炉跡の平面形はやや歪んだ円形をなし、その中央部は鍋底状に窪んでいる。炉跡の内壁は非常に強く焼け、その表面から厚さ5cmほど内部まで赤褐色に変色している。掘形は炉跡より一回り大きい円形をなす。その規模は直径が1.4mで、深さが58cmと深い。掘形内の堆積土は12層に分けた。2層は炉の壁体を構築する粘土である。3・4層は黒褐色土で、炭化物粒・焼土粒を含む。5~13層は壁際から崩れた様な堆積状況が見られる。掘形内の土層が自然堆積を示すことから1号住居跡の炉は土坑を利用して作られた可能性がある。土坑の埋没過程で完全に埋まり切らずに窪んだ状態の時に粘土を用いて炉を作ったのであろう。ただ、炉跡内から出土する土器と、掘形底面付近から出土する土器にそれほど大きな時期差が見られないことからここでは1号住居跡の炉跡に伴う施設と理解している。

遺 物 (図5, 写真20・25)

1号住居跡から出土した縄文土器は98点、石器類が7点である。その内文様など土器の特徴が分

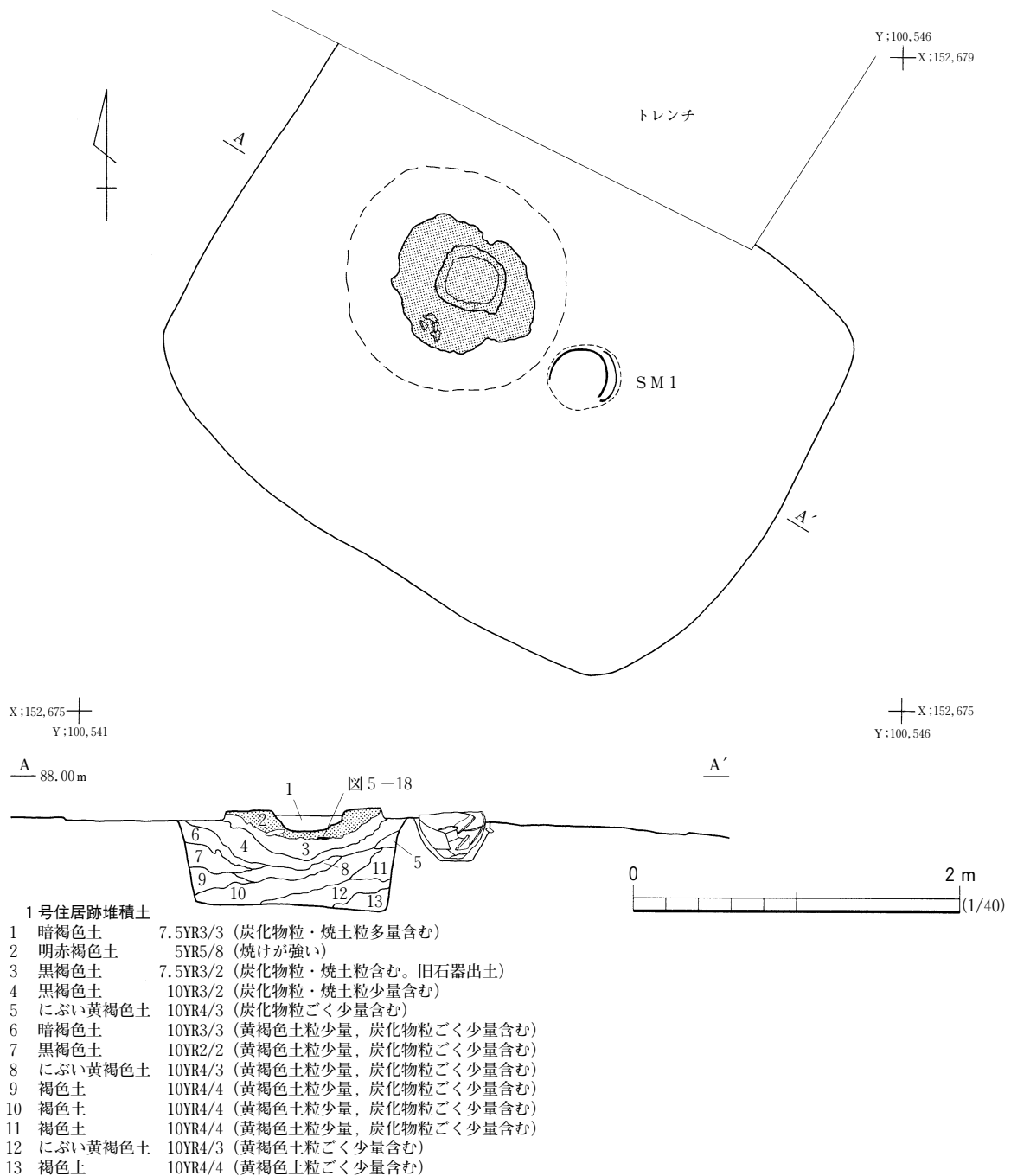


図4 1号住居跡

かるものを図5に示した。

1～5は炉跡と検出面から出土した縄文土器である。1～4は同一個体で、深鉢形土器の破片である。器形は口縁部が軽く内湾し、底部に向かってすぼまる。外面にはこまかい縄文が方向を違えて全面に施される。5は深鉢形土器の胴部破片で、細い縦位の撚り糸文が施される。6～11は炉跡の掘形内部から出土した縄文土器である。8・9は外面に網目状撚り糸文が施される粗製深鉢の破片で、同一個体であろう。6・7～11は外面に縄文が施される深鉢形土器の破片である。6は口縁部の破片で、小さく外反して開く器形となる。11は回転結節文が見られる。12～15は1号住居跡の

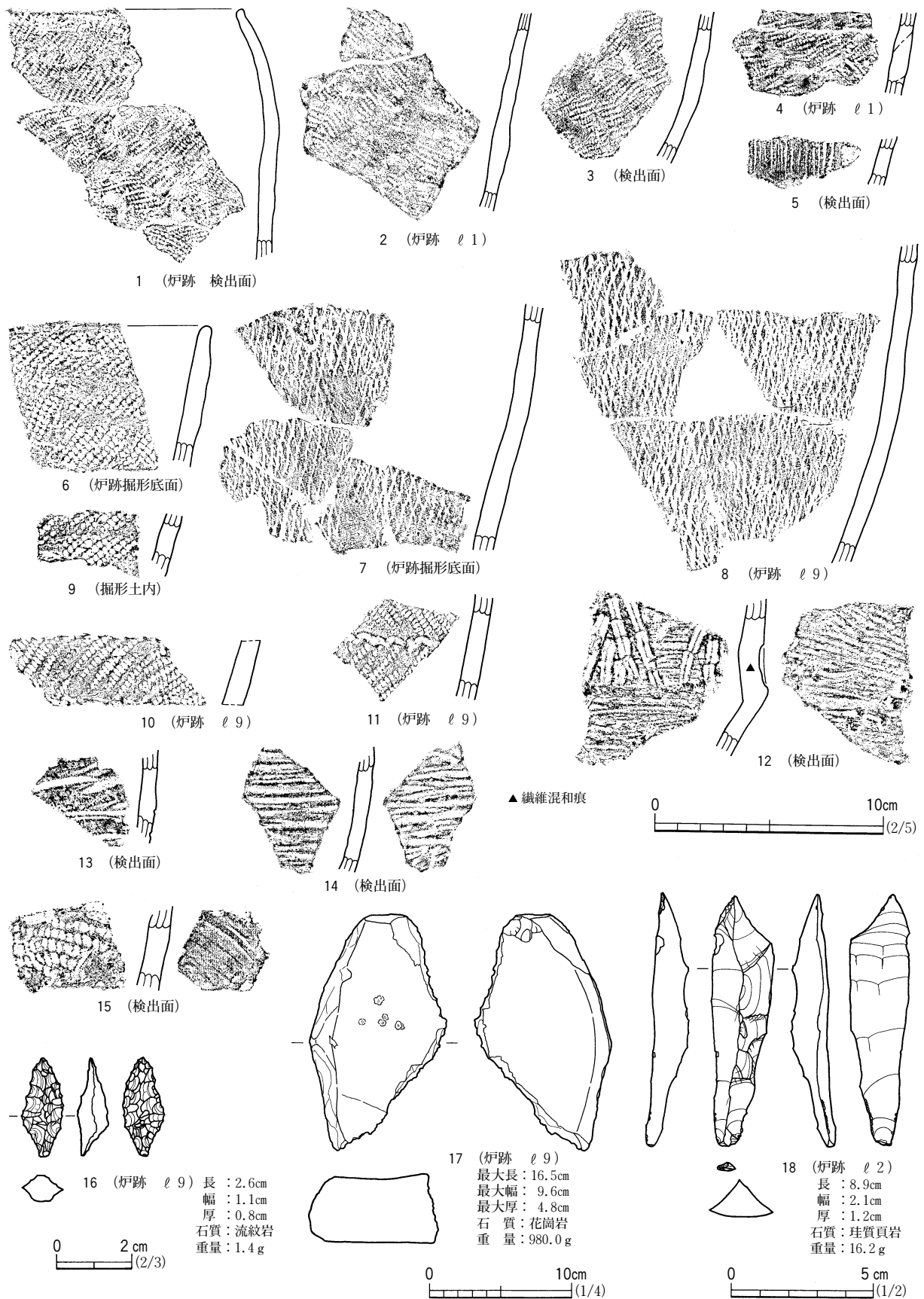


图5 1号住居跡出土遺物

検出面から出土した縄文時代早期の土器である。周辺グリッドから出土した土器と同じ特徴であり、遺構自体が浅いことからすれば、本住居跡に伴わない土器で、L II bに含まれる土器が混入したのであろう。

16は掘形内から出土した凸形の石鏃である。鏃身にやや厚みがあり、刃部は両面から細かい剥離を加えている。基部がやや外側に曲がっている。17は石皿の破片で、内外面とも研磨され平滑になる。表面には小さなくぼみが数カ所認められる。

18は炉跡2層の下部から出土した旧石器時代のナイフ形石器で、本遺跡で唯一の旧石器時代の遺物である。炉跡掘形内にあったことから、その表面は被熱により風化している。石材は赤褐色をなす頁岩である。18は縦長の石刃を素材としている。背面に見られる稜を作り出すための石核調整の加撃方向がそれぞれ異なることから、石刃の剥離工程の初期または中途において石核作業面を作り出した石核から剥離された石刃を用いてナイフ形石器を作っている。基部は小さな打面調整を残す。先端部の一側辺には腹面からの微細な調整剥離が観察できる。基部の両側辺にも腹面からの微細な調整剥離が認められる。

ま と め

1号住居跡は削平が著しく炉跡を確認しただけで、その平面形など住居の詳細について復元できない。炉跡は埋まりきらずに窪んだ状態の土坑を掘形と利用し、そこに粘土を貼って炉を作っている可能性がある。本住居の年代は出土した遺物の特徴から、縄文時代晩期後半と判断した。なお掘形内からは旧石器時代と考えられるナイフ形石器が出土し、本遺跡でも旧石器時代における人間の諸活動を裏付ける遺物として特筆に値する。

第3節 土 坑

後作A遺跡では32基の土坑を確認した。これら土坑の分布は、段丘平坦面の縁辺部にあたる比較的に削平の少なかった調査区の東側に集中する。

土坑の分類 (図6～14, 写真9～13・21・25, 表1)

土坑の分類については、土坑の性格や機能を示す明確な資料が少ないことから、平面形・規模・堆積土の状態・出土遺物などの特徴を基準としている。これらの分類をまとめると以下のようになる。なお各土坑の分類は、計測値などとともに表1に示した。

1類—平面形は円形もしくは楕円形を基調とし、周壁が垂直またはオーバーハングして立ち上がる円筒形の土坑。遺構内堆積土はやや赤みがかかった褐色土で、基本的には自然堆積により埋没している。出土遺物は縄文時代早期中葉頃とされる土器が主体を占める。機能としては貯蔵穴であろうか。また規模の違いから直径1 m前後の小型土坑を1 a類、直径1.5 mを越える大型土坑を1 b類としている。後作A遺跡では1 a類が大半を占める。

2類—いわゆる落とし穴状土坑とするものである。平面形は長方形を基調とする。底面には杭状の施設を設けるための小穴がある。1号土坑が該当する。

3類—1・2類のいずれにも該当せず、性格・年代ともに不明の土坑。20・27・31号土坑が3類にあたる。

1 a 類土坑

1 a 類に該当する土坑は22基で、後作A遺跡では最も多い。1 a 類土坑どうしの重複は、2・29号土坑に認められた。特段、重複による年代差以外に特徴の違いを示す状況は得られていない。

平面形 平面形が円形をなす土坑は18基である。楕円形とした土坑でも長径と短径の比が小さいものが多いことから、本来の形状は円形であったが、壁面の崩落のため平面形が楕円形となった土坑も少なくない。また、5・6・9号土坑のように平面形が楕円形をなす土坑の多くは浅く、削平や表土化による攪乱の影響もあるのであろう。このことから1 a 類土坑の平面形は、基本的には円形をなすと判断している。

周壁の状態 検出段階で深さが10cm程度の浅い土坑を除き、比較的深い土坑の周壁は垂直気味に立ち上がる。これは3・16・25号土坑などでも明らかである。また、16号土坑の北側の周壁は部分的であるがオーバーハングする。土坑の埋没過程において、壁面が崩落することを考えれば、周壁が内傾する「フラスコ状土坑」となる可能性がある。

堆積土 堆積土は若干の色調の違いがあるものの、やや赤みがかかった褐色土である。堆積土中には炭化物粒をわずかに含んでいる。堆積状況では周壁の基盤土となる黄褐色土粒(LⅢ)が崩落したように混入することから、自然堆積と判断している。これは16号土坑の周壁が内傾することと関連し、1 a 類土坑はフラスコ状をなすことを裏付けるのであろう。この堆積状況から、土坑は廃絶時まで特段人為的に埋め戻されることなく、開口していたことが分かる。

出土遺物 1 a 類土坑の内、2・5・8・10・11・12・15・16・18・21・25号土坑から出土し、その特徴が分かるものを図13・14に示した。これらの遺物は、そのほとんどが堆積土中から出土したもので、直接的に年代を示す遺物ではない。しかし、土坑内から出土した土器に明らかな年代差を示す特徴の土器が無いことから、土坑の廃絶と出土土器の年代観とそれほど差がないものと判断している。

13-1は5号土坑から出土した土器で、外面は幅の狭い沈線文が施される。2~10は8号土坑から出土したもので、平行沈線と格子目状沈線が組み合わされる。9・10は平行沈線の中にヘラ状工具による連続刺突文が充填される。11は10号土坑出土の土器で、口唇部直下から格子目状に沈線文が描かれる。13-19~24は16号土坑出土の土器で、外面の文様は沈線文を主体とする。19は横位沈線と斜位沈線の組み合わせで菱形を描き、その菱形の頂点に半円状の刺突を加える。20は口縁部の小破片で、口唇部直下は無文となる。24は鋸歯状に沈線文を描き、その沈線間にヘラ状工具による連続刺突文を施す。13-25は18号土坑出土の土器である。外面には斜行する微隆起線文が施され、

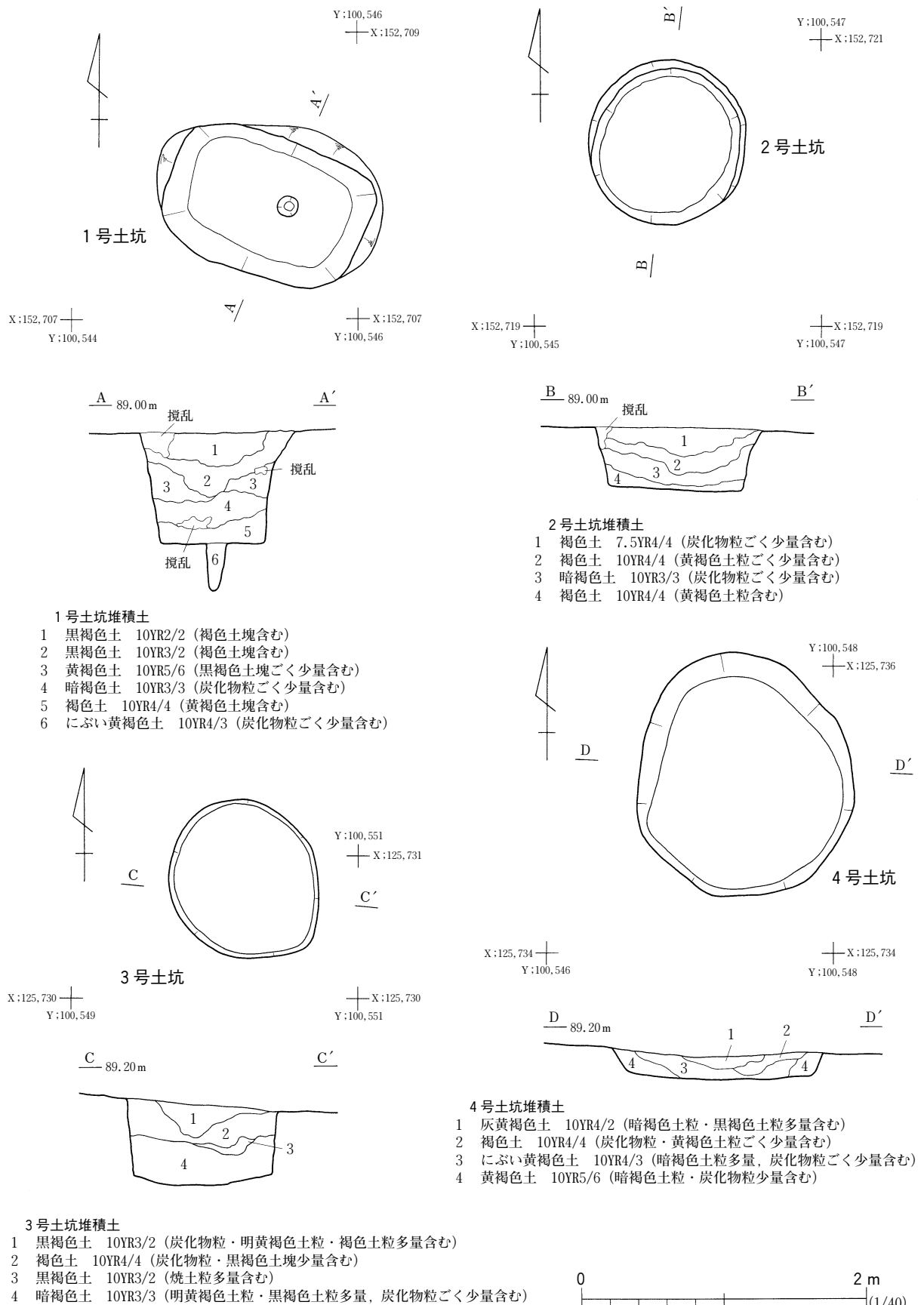


図6 1～4号土坑

第4編 後作A遺跡

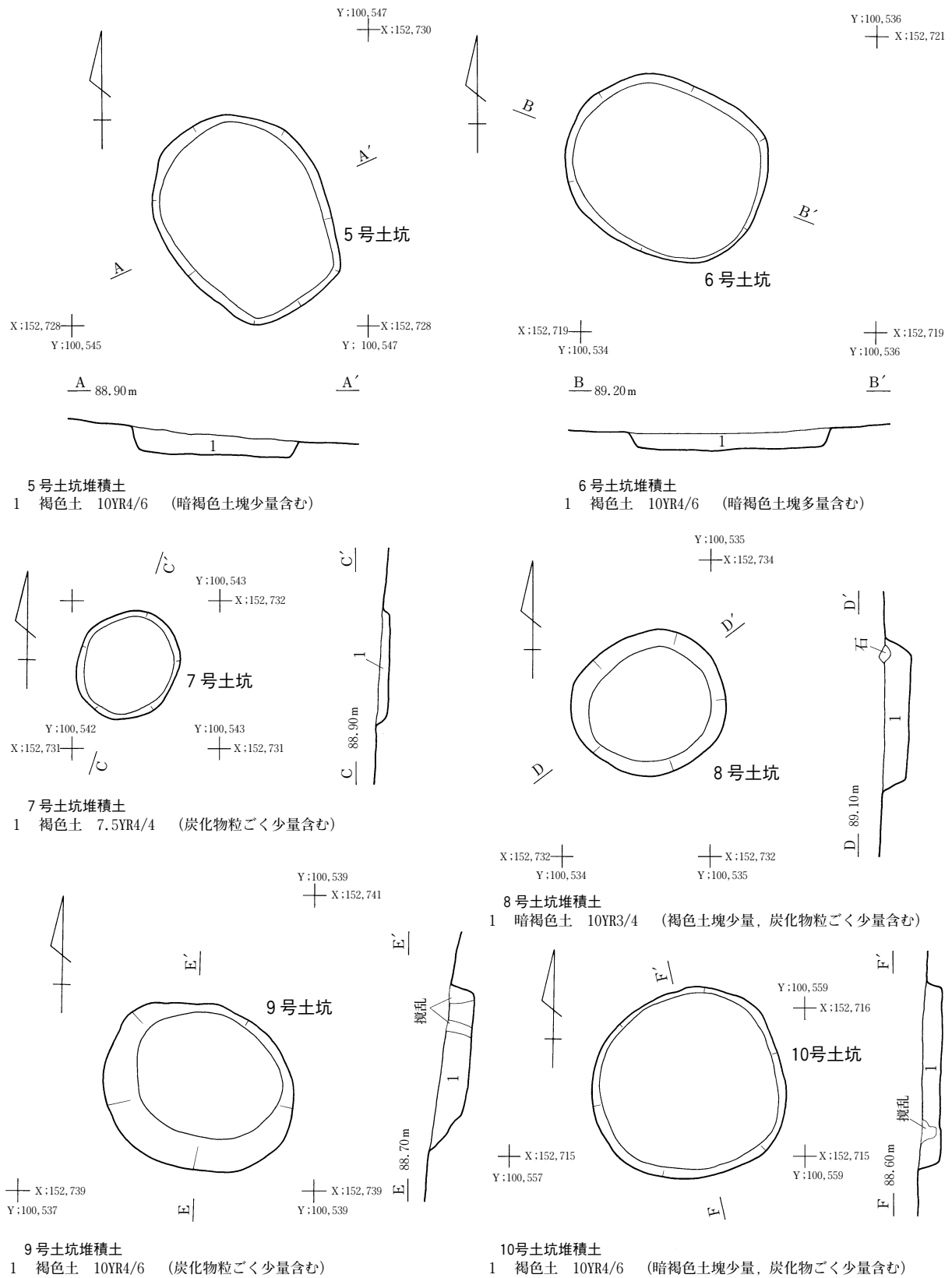


図7 5～10号土坑

第4編 後作A遺跡

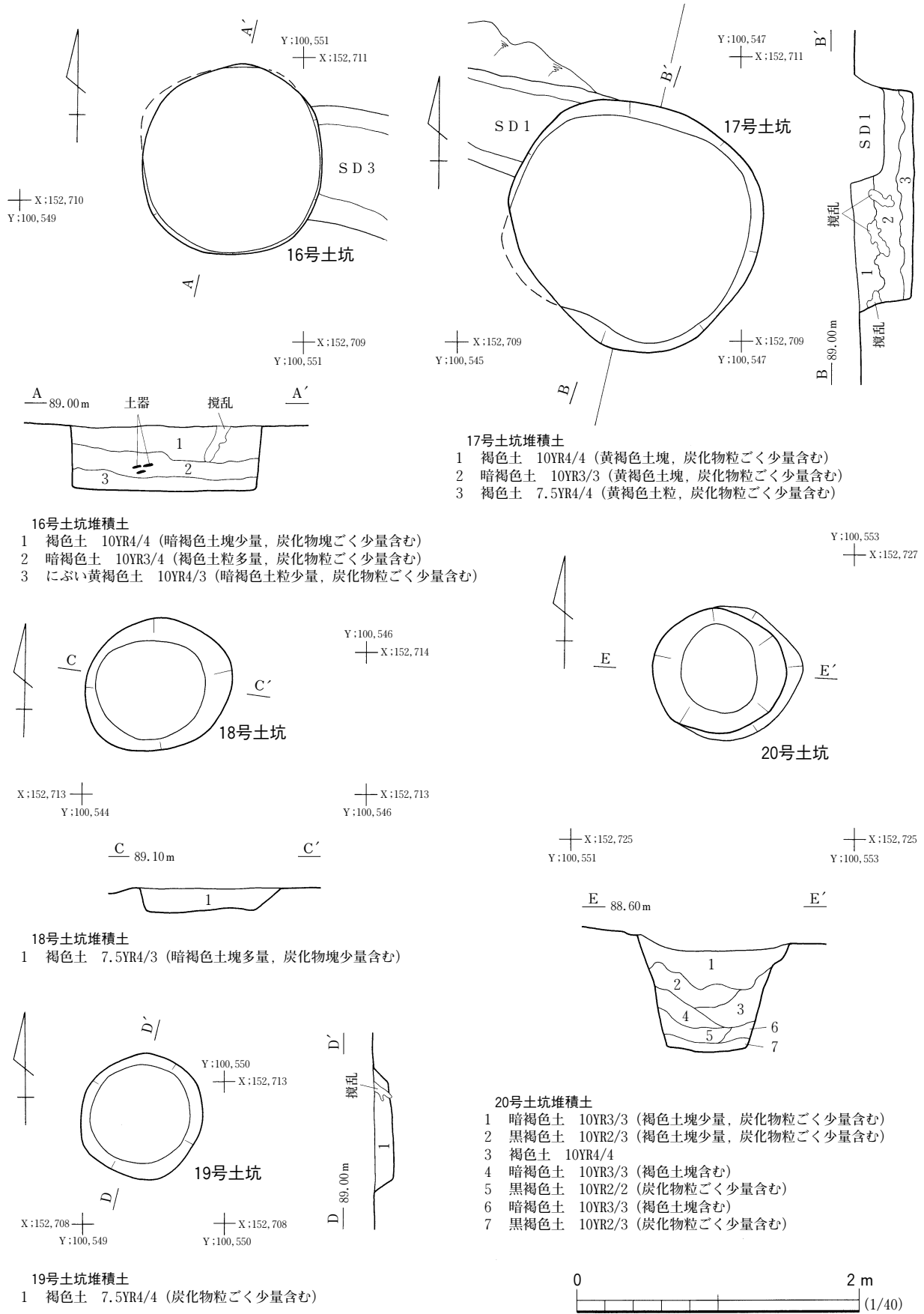


図9 16~20号土坑

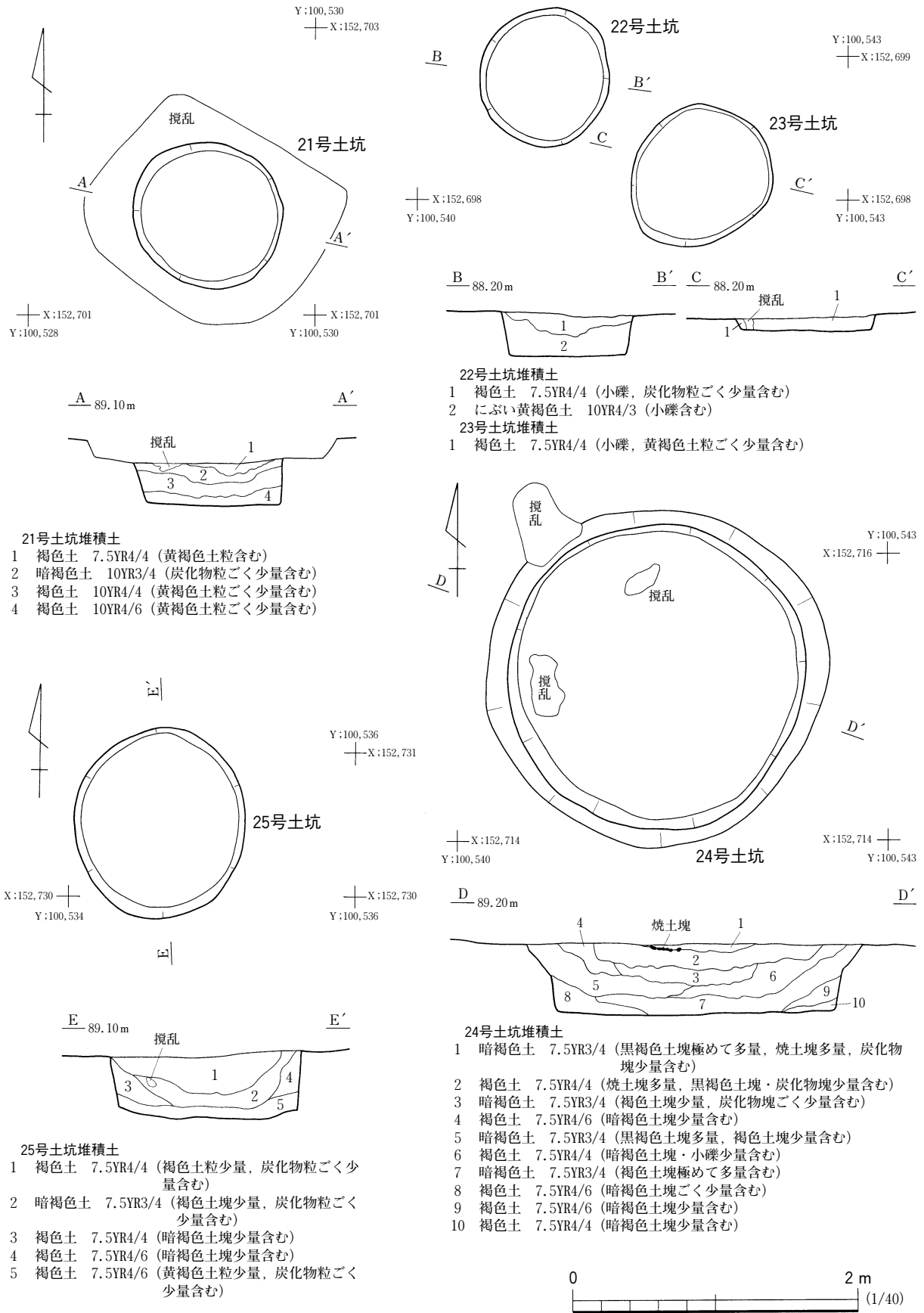


図10 21~25号土坑

第4編 後作A遺跡

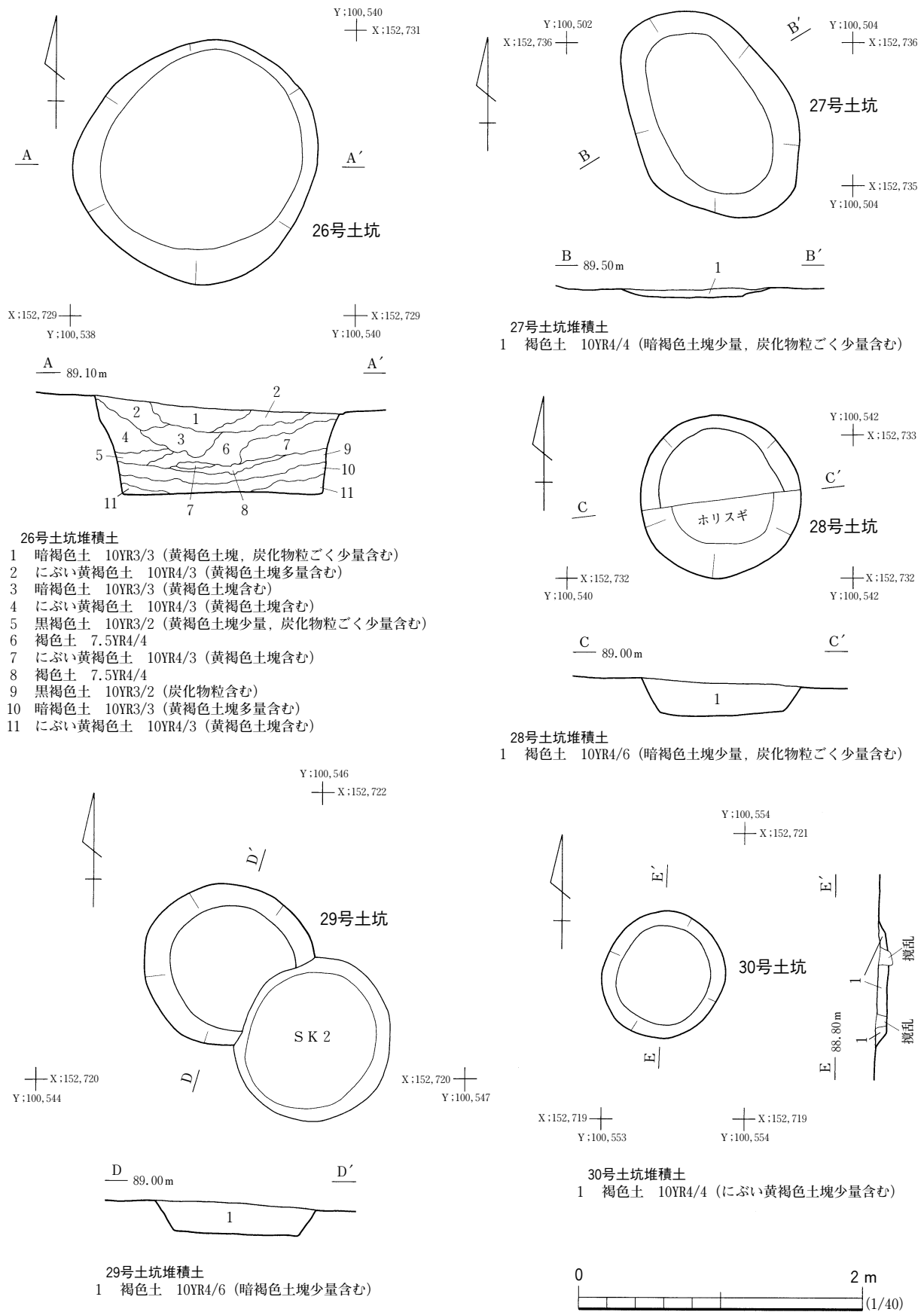


図11 26～30号土坑

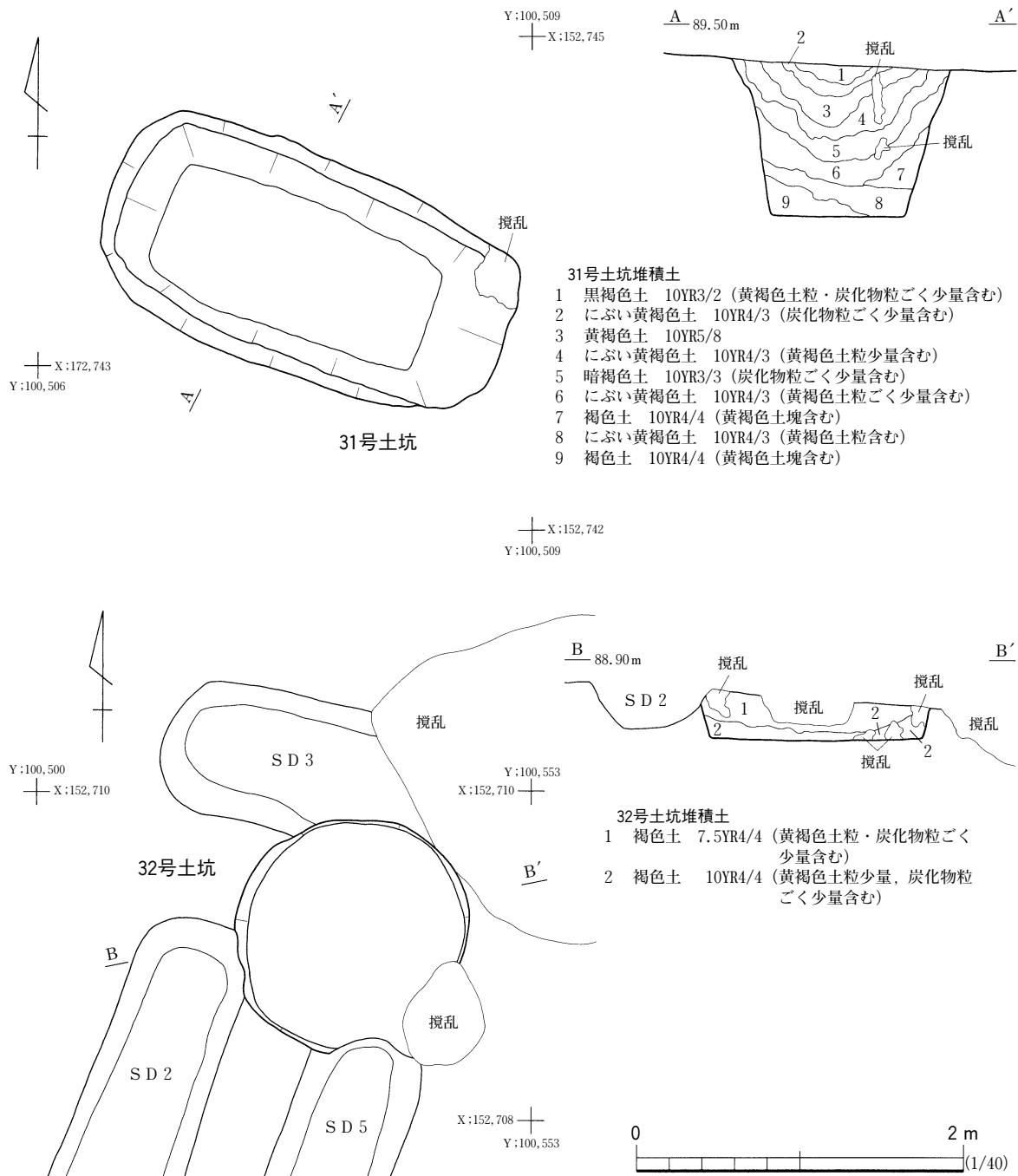


図12 31・32号土坑

野島式の特徴である。13-39~42は25号土坑から出土した土器である。39・40は同一個体で、口唇部直下に先端が半円状となる工具を用いた刺突文が3段施される。

14-1は25号土坑から出土した磨石で、両面とも使用により平滑になる。また、表裏の磨面には小さな窪みが見られる。

まとめ 1 a類土坑の特徴は、直径1 m前後の円筒形状の土坑で、16号土坑に見られるように周壁が内傾する「フラスコ状土坑」になる。その性格は貯蔵穴であろう。年代は出土した縄文土器が田戸下層式期の特徴を持つものがほとんどで、縄文時代早期中葉頃には土坑が廃絶したのであろう。

1 b 類土坑

1 b 類土坑は1 a 類土坑と同じ特徴を持つが、その直径が1.5mを越える比較的大型のものとして分類した。ここでは4・13・14・17・24・26号土坑の6基が該当する。

平面形 基本的には1 a 類土坑と同じく円形を基調とし、13・24号土坑の平面形は整った円形をなす。4・14号土坑は楕円形をなすが、いずれも壁面が崩落し、遺構の深さが浅く表土の攪乱を受けて、平面形が乱れたものと推察している。

周壁の状態 24号土坑の周壁は、検出面に近い上端部が壁面の崩落に起因して、その傾斜は緩くなるが、周壁の中位以下は垂直気味となる。17号土坑では南西側の周壁が部分的にオーバーハングするが、あまりに部分的であるため、土坑の本来的な周壁ではなく、植物による攪乱である可能性が高い。1 b 類土坑の特徴は1 a 類土坑と同様に、周壁が垂直気味に立ち上がる。

堆積土 基本的には1 a 類土坑と同じで、壁面の崩落土を含む自然流入により埋没している。24号土坑は1・2層に焼土粒が含まれ、特に1層下部に焼土塊が確認できた。この焼土は1層下部で面的に確認できないことから、自然に流入したものと判断している。しかし、他の土坑で焼土が混入するものはない。24号土坑の埋没途中において、その周辺で火をたき、それが周辺の土砂と共に流入したのであろうか。土坑の埋没後の利用を伺える資料となろう。

出土遺物 1 b 類土坑の内、14・24・26号土坑から遺物が出土している。13-17は14号土坑から出土した口縁部破片で、口唇部が外削ぎ状になる。外面の文様は、口唇部直下に横位沈線が巡り、その下部には鋸歯状に沈線を描き、それに沿って刺突文を施す。

13-26-38は24号土坑から出土したものである。文様等の特徴から、沈線文を主体とする土器と内外面とも条痕文を施す土器の2つに大別できる。沈線文を主体とする土器の中でも、その文様構成から細かく分類できた。28・31・36は沈線文に沿って連続刺突文が施される。33は横位沈線と斜位沈線の組み合わせ。32は格子目状の沈線文。34・35は半截竹管による押引文。条痕文の土器は29・30・37・38である。29・30は条痕文の上に沈線が施され、口唇部にキザミメが見られる。

13-43・44は26号土坑から出土した土器で、外面には間隔の狭い横位沈線が十数条めぐる。

まとめ 1 b 類土坑は直径1.5mを超える大型になる点を除き、基本的にはその特徴が1 a 類土坑と同じである。その性格や年代についても同様に、縄文時代早期中葉の「貯蔵穴」と判断している。

2 類土坑

2 類に該当する土坑は1号土坑のみである。調査区中央からやや東よりの部分で、1類土坑が密集して検出されたG7グリッドに位置する。周囲は標高89m前後の平坦な場所である。遺構検出面はLⅢ上面である。

検出面での平面形は隅丸長方形である。土坑の上端部が崩落していることに起因するため、土坑の中位以下から底面の形状は整った長方形となる。長軸の方向は真北に対して60°ほど西に傾き、

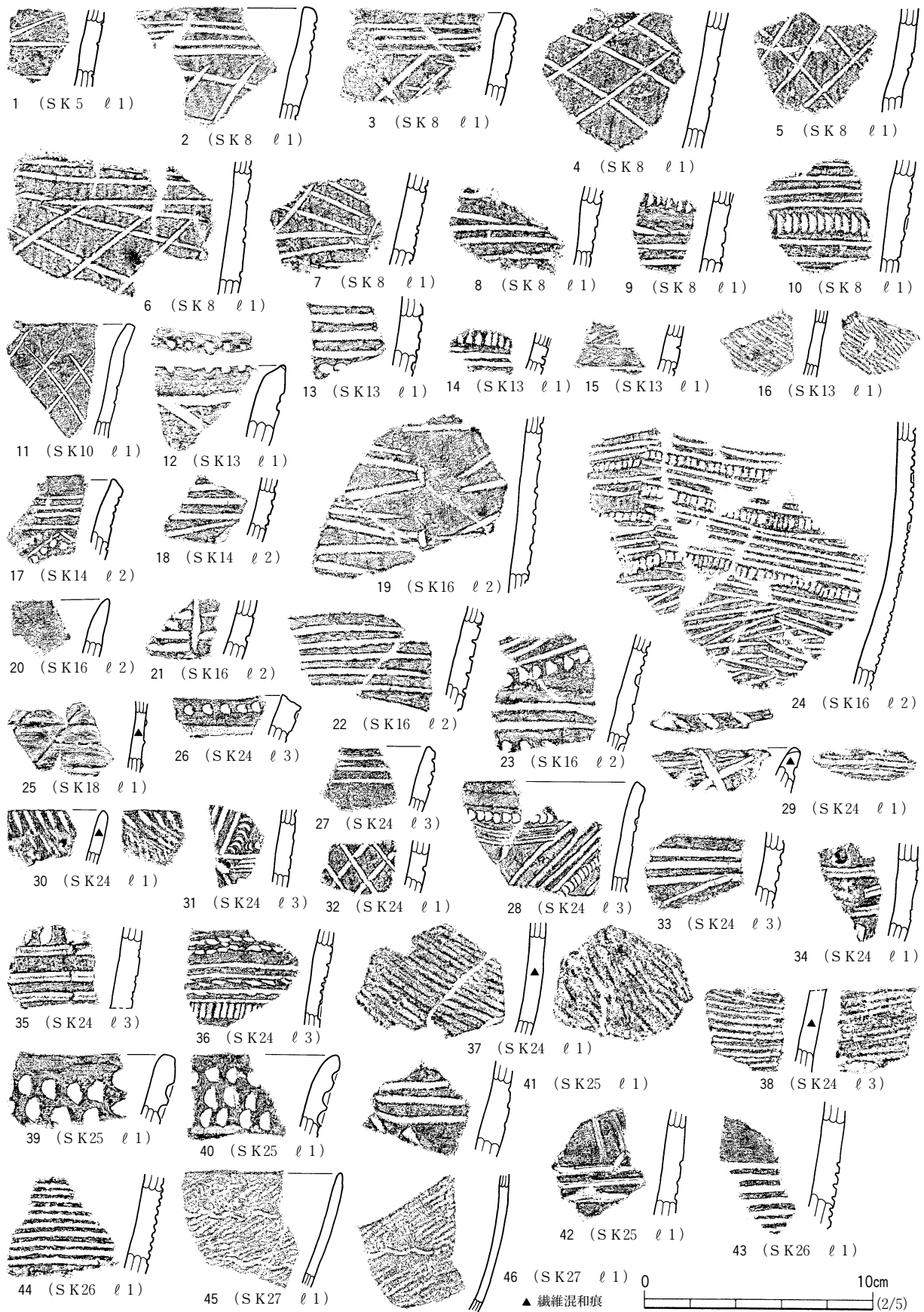


図13 土坑出土繩文土器

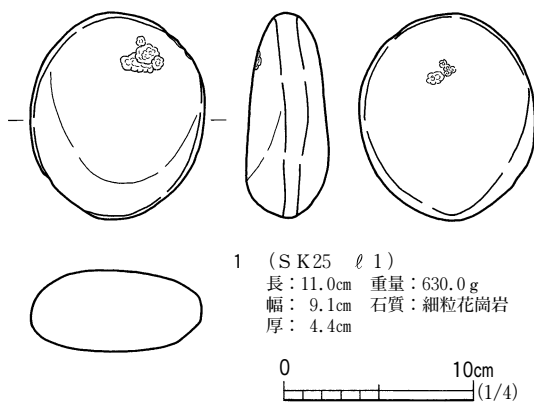


図14 土坑出土石器

周辺の等高線と直交している。周壁はその上端部は崩れて傾斜が緩くなるが、中位以下は急峻に立ち上がる。底面は平坦である。底面の中央からわずかに東よりの部分に小穴を確認した。小穴の平面形は円形である。その直径は15cmで、底面からの深さは33cmを測る。

遺構内堆積土は6層に分けた。1・2層は黒褐色土で褐色土塊を多く含んでいる。3～5層は褐色土を基調とし、壁面の崩落に起因する黄褐色土

を含む。1～5層は壁面の崩落土を含む自然堆積土である。6層は小穴に堆積する土である。

遺物は縄文土器片が1点出土した。内外面とも条痕文が施され、胎土に繊維混和痕が見られる。

土坑の形状や底面に設けられた小穴の存在から落し穴状の土坑とした。年代は出土した土器の特徴から縄文時代早期後葉頃であろう。

3類土坑

3類に該当する土坑は、20・27・31号土坑の3基である。これらの土坑は上記の1・2類に当てはまらないことから、個別にまとめる。

20号土坑 調査区の東側、E8グリッドに位置する。平面形は円形をなす。周壁は底面に向かってすぼまる。堆積土の特徴は自然堆積により埋没したと判断している。堆積土は黒褐色土を基調とし、全体的に締まりがない。これは1類土坑と明らかに違う特徴であるため、3類とする一つの根拠である。遺物は出土していない。

27号土坑 調査区の北西側、D3グリッドに位置する。周囲は削平著しく、31号土坑・4号溝跡の他に遺構は確認できなかった。遺構検出面はLⅣ上面である。27号土坑の平面形は楕円形である。遺構それ自体が極めて浅いため、周壁の立ち上がりは確認できなかった。遺構内の堆積土は1層だけで、その埋没過程を復元できない。

本土坑からは縄文土器が2点出土した。図13-45・46は同一個体で、浅鉢形土器の破片であろう。45は口唇部直下から縄文が施される。年代は縄文時代晩期後半頃と考えている。

31号土坑 調査区北西部のC3グリッドに位置し、段丘平坦面の縁辺部に立地している。周囲には4号溝跡が所在している。遺構検出面はLⅣである。

31号土坑の平面形は長方形をなす。周壁の立ち上がりは急峻で、周壁から底面にかけての断面形は逆台形をなす。底面はLⅤとした砂礫層まで達している。遺構内堆積土は壁面の崩落土を多量に含むことから、自然に埋没したものと判断している。

31号土坑からは遺物が出土していないため年代は不明である。形状が長方形をなすことから2類土坑と共通するが、底面にピットが見られない点で明らかな違いがあり3類に分類した。

表1 土坑一覧

土坑 番号	挿図 番号	位 置	平面形	分 類	規 模 (cm)			備 考
					長径	短径	深さ	
1	図6	G 7	長方形	2類	160	110	78	底面にピット。落とし穴 S K 29より新
2	図6	E 7・F 7	円	1 a類	115	110	45	
3	図6	D 8	円	1 a類	105	115	62	
4	図6	D 7	楕円	1 b類	170	155	20	
5	図7	E 7	楕円	1 a類	140	115	16	
6	図7	E 6・F 6	楕円	1 a類	135	115	12	
7	図7	D 7	円	1 a類	75	70	8	
8	図7	D 6	円	1 a類	105	95	18	
9	図7	C 6・D 6	楕円	1 a類	130	110	25	
10	図7	F 8	円	1 a類	130	125	15	
11	図8	G 7	円	1 a類	110	105	25	
12	図8	E 7	円	1 a類	95	95	12	
13	図8	F 6・G 6・F 7・G 7	円	1 b類	190	185	65	
14	図8	F 8	楕円	1 b類	170	155	27	
15	図8	F 7	円	1 a類	110	105	15	
16	図9	F 8・G 8	円	1 a類	135	130	45	S D 3より古 S D 1より古
17	図9	F 7・G 7	円	1 b類	175	170	44	
18	図9	F 7	楕円	1 a類	105	95	18	
19	図9	G 7	円	1 a類	85	85	15	
20	図9	E 8	円	3類	95	95	82	
21	図10	G 4	円	1 a類	105	100	30	
22	図10	H 7	円	1 a類	95	90	32	
23	図10	H 7	円	1 a類	100	95	12	
24	図10	F 7	円	1 b類	235	235	50	
25	図10	D 6	円	1 a類	130	120	45	
26	図11	D 6・E 6	円	1 b類	170	160	70	
27	図11	D 3	楕円	3類	160	115	8	縄文晩期
28	図11	D 7	円	1 a類	110	110	27	
29	図11	E 7	円	1 a類	115	110	22	S K 2より古
30	図11	E 8・F 8	円	1 a類	90	85	8	
31	図12	C 2	長方形	3類	225	130	98	
32	図12	G 8	円	1 a類	145	140	32	S D 2・3・5より古

第4節 土器埋設遺構

1号土器埋設遺構 SM1

遺 構 (図15, 写真18)

本遺構は調査区の南東側, J 7グリッドに位置している。段丘平坦面の南側縁辺部に立地するが, 削平が著しい場所であるため, 旧地形を復元することはできない。現状での標高は87.7mである。

1号住居跡と重複し, 本遺構の方が新しいと判断している。遺構検出面はLⅢ上面である。

検出時に深鉢形土器2個体分の口縁部が入子状になって露出していた。その土器の口縁部よりも一回り大きい掘形を確認した。検出段階では, 露出していた深鉢形土器の口縁部から2個体からなると想定したが, 図16-4の内部からバラバラになった土器片の中に浅鉢形土器2個体が混ざって

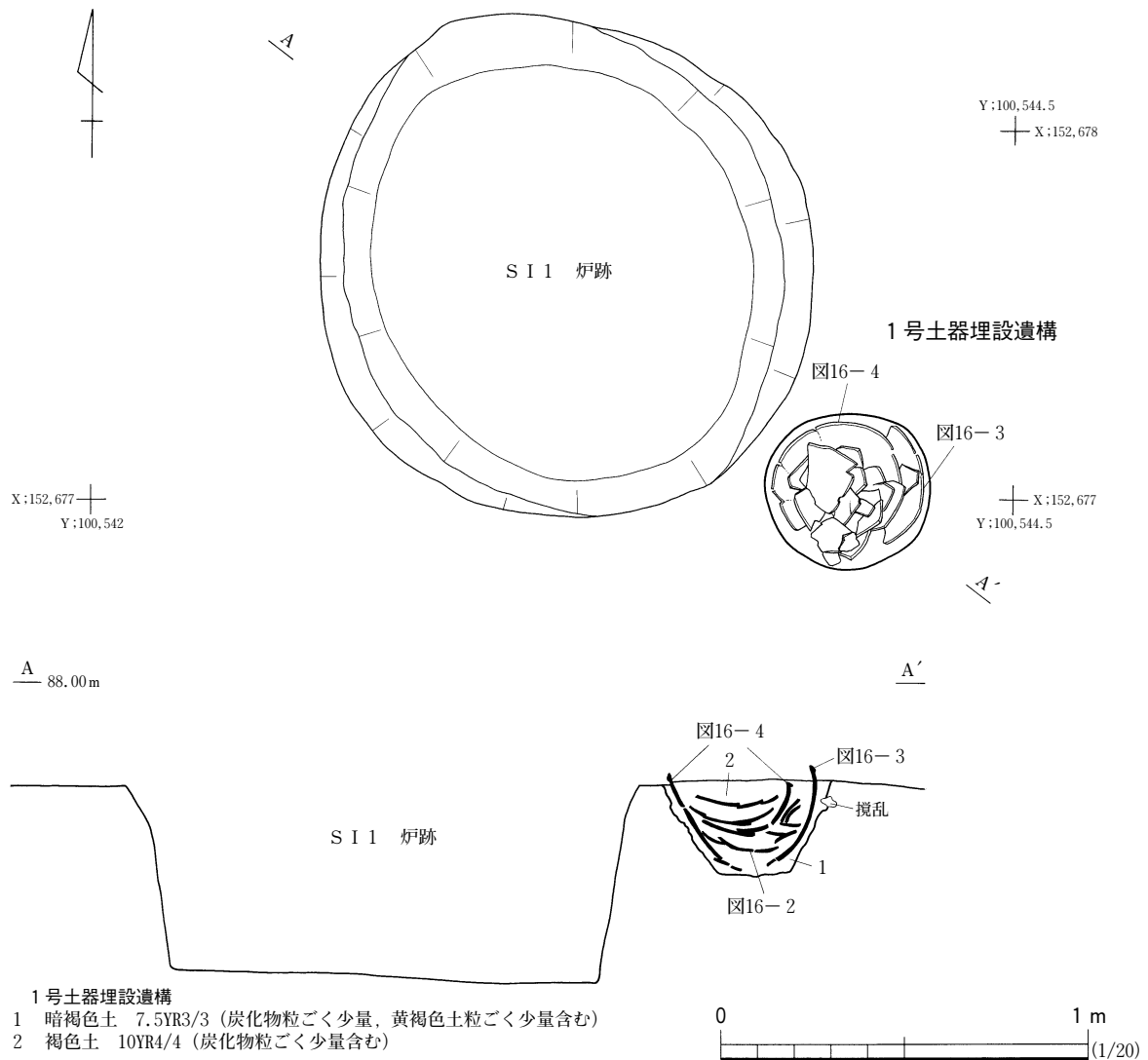


図15 1号土器埋設遺構

いることが分かり、土器4個体が入子状に重なって一つの埋設土器を構成していることが判明した。検出できた土器の配置から、図23に示す復元案が想定できる。この場合、組み合わせた埋設土器の内部には直径30cm、高さ50cmほどの空間ができる。土器埋設遺構の性格を墓（土器棺墓）とすれば、子供ないしは小柄な女性の屈位埋葬が可能であろう。

検出面では深鉢形をなす3・4の口縁部がそれぞれ半円状に確認でき、3の口縁部は4の外側に露出していた。3の口縁部が西側で確認できないことから、3を4の上部に正立させて重ねていたものが、垂直方向に潰れて、3の口縁部が4の外側に落ち込み、体部は4の内部に残ったと判断した。

深鉢形土器の埋設方法は、深鉢形土器の器形に合わせた掘形を掘り、それぞれ正位で上下に重ねる。下に位置する4は底部付近だけを欠く。一方、上に重ねた3は遺存する器高が低く、底部に向かって細くすぼまる体部下半を欠損する。3の下端部が土器4の口径内にちょうど収まり、土器を重ねたときの内部空間を確保するために体部下半を打ち欠いたと判断できる。

4の内部では、浅鉢形の1・2がバラバラの状態を確認できた。2は掘形の底面付近から出土した。2の底部が正立した状態であることから、4の内部で底となっていたと判断した。1は埋設当時の状態は不明であるが、2が底の部分であるならば、1は伏せた状態で、蓋のように重ねられたのであろう。

掘形の堆積土は褐色土で、わずかに炭化物粒を含んでいる。掘形内土器内の堆積土は炭化物粒や黄褐色土粒を含む暗褐色土で、土器内からは副葬品や骨片などの遺存物は確認できなかった。

掘形の平面形は円形である。規模は埋設された深鉢形土器より一回り大きく、検出面での直径が45cm、底面部分の直径が20cmを測る。検出面からの深さは25cmである。掘形は4の器形に合わせて掘り込まれている。埋設当時の掘形は、深鉢形土器が2個上下に重ねる復元案からすれば、本来はもっと深いのであろう。

遺物 (図16, 写真19)

1号土器埋設遺構は浅鉢形土器2個と深鉢形土器2個の合計4個体からなる。1は円盤状の底部からわずかに内湾して開く器形である。口縁部と体部の境

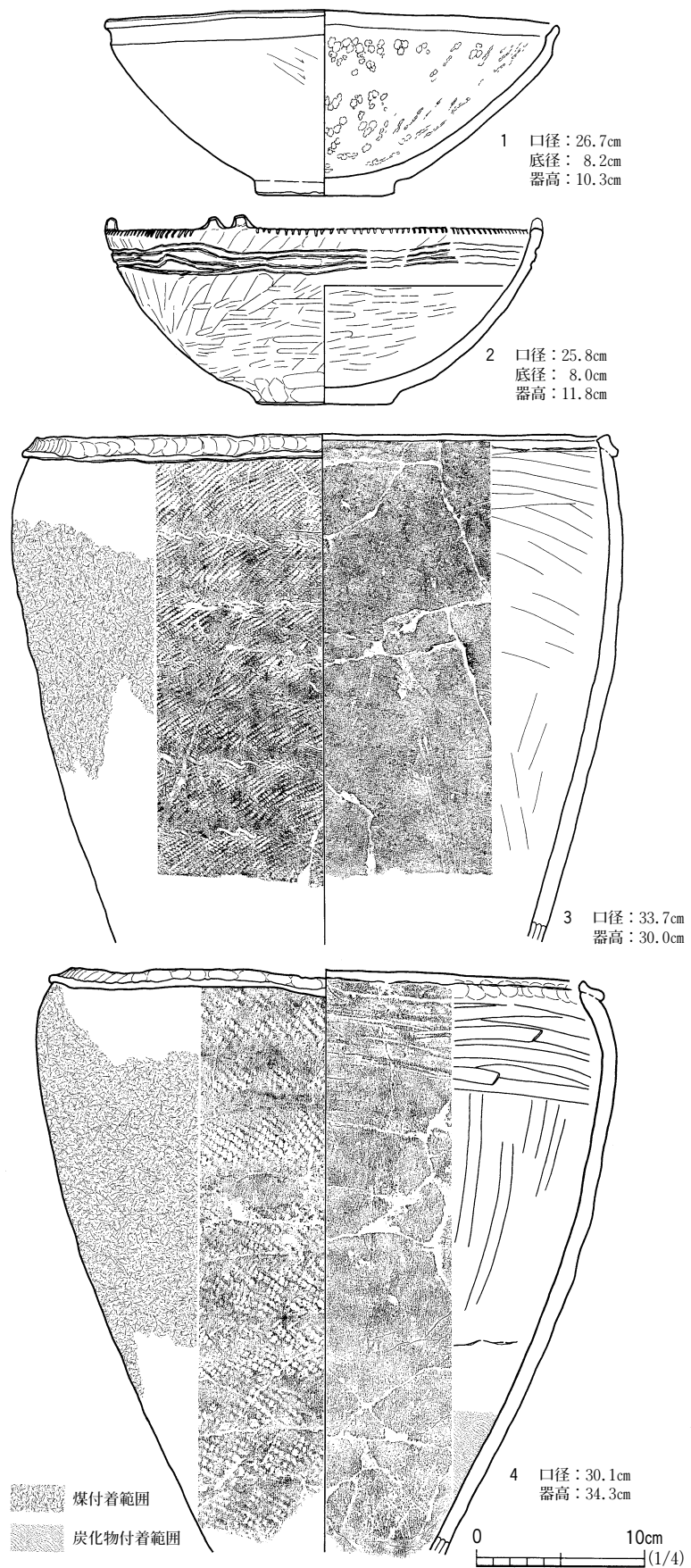


図16 1号土器埋設遺構出土遺物

に稜をもち、その幅は狭い。この幅の狭い口縁部は外反し、内面にも軽い稜が見られる。外面は無文で、器面全体が丁寧に磨かれているため、製作過程における調整痕は観察できない。内面も磨かれている。また火熱を受けたのであろうか、細かい剥落痕が観察できる。胎土に白色の海綿骨針が混入している。2は円盤状の底部からやや丸みを帯びて立ち上がる器形である。口縁部上端には二山突起が取り付く。突起間の口唇部には、約3～5mm間隔でキザミメが施される。口縁部が約半分しか遺存していないため、二山突起の正確な数は不明であるが、現状で確認できる2つの突起の間隔から、全体で5個取り付くのであろう。外面の文様は口縁部直下に二重の横位沈線がめぐる。沈線の終末付近はやや乱れ、新たに引き直し、部分的に三重になる。沈線文以下の体部は無文となる。また外面調整は不鮮明であるが、体部から底部にかけては、縦位から斜めのナデによる整形痕が残り、部分的に横位方向のミガキが観察できる。内面は平滑に磨かれるが、その単位は不鮮明である。

3・4は粗製の深鉢形土器で、いずれも底部を欠く。3・4の器形はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部付近で軽く内湾する。口縁部は折り返し口縁となる。口縁部は無文で、製作時の指圧痕が明瞭に観察できる。3の体部外面は細かい縄文が施され、回転結節文が観察できる。4はやや荒い縄文が施される。また3・4の外面には使用による煤が付着している。

ま と め

土器埋設遺構の性格は、先学の研究成果から墓（土器棺墓）と推定されている。1号土器埋設遺構の調査では、人骨などの出土を見ていないが、従来からの墓とする見解を否定できる所見も得られない。その性格について一応は土器棺墓と考えている。

埋設土器の構築方法は、深鉢形土器2個体を上下に重ね、その内部に浅鉢形土器2個体をそれぞれ蓋と底として埋設している。複数個からなる埋設土器の事例として良好な資料となる。埋設土器の特徴では、浅鉢形土器はいずれも無文である。特に16-1は幅の狭い口縁部が外反し、内外面とも体部との境に稜をもつ特徴がある。福島県浜通り地方ではあまり見られない特異な器形で、西日本の縄文晩期土器の特徴とする指摘も検討される。

年代については、大洞C₂式に相当する土器を出土した1号住居跡よりも新しく、縄文時代晩期後葉頃と考えている。

第5節 溝 跡

後作A遺跡では溝跡5条を確認した。その内1・2・3・5号溝跡は調査区の北東側で、縄文時代早期の土坑が密集する場所で確認できた。溝跡の大きさや方向がそろっているなど、その特徴に規格がみられ、同一の機能を持つものと推定される。年代は溝跡に伴う遺物が出土しないため不明であるが、重複関係から明らかに縄文時代早期より新しい。

1～3・5号溝跡 SD1～3・5

遺 構 (図17, 写真14～17)

1～3・5号溝跡は調査区の北東側に位置している。周囲には縄文時代早期の土坑が密集する。これら4条の溝跡は土坑との重複関係から、土坑群より新しいことが分かる。

溝跡の方向は、1・3号溝跡と2・5号溝跡が平行し、それぞれが直交して配置していることから、4条の溝跡が強い関連性をもって機能していたと判断している。

1・3号溝跡の方向は一致するが、その軸線は南北に約1mずれている。規模は1号溝跡で全長8m、幅80cmである。3号溝跡は全長6.2m、幅85cmと1号溝跡より若干短い。3号溝跡の断面観察から、3号溝跡は表土直下のLⅡbから掘り込んでいる。遺構内堆積土は1・3号溝跡とも自然堆積と判断している。

2・5号溝跡はその端部が調査区外となるため、全容は把握できない。規模は溝幅が80cm前後でほぼ同じである。5号溝跡の断面観察から、溝跡は表土直下のLⅡb上面から掘り込まれ、これは3号溝跡の所見と共通する。堆積土は黒褐色土を基調とし、自然堆積により埋没した状況が観察できた。5号溝跡の断面観察から、本来の溝跡は幅広になり、両溝跡は重なる。検出時には2・5号溝跡が併走するように確認できたが、構築当初では両者は同時に存在したとは考えにくく、溝跡造り替えが行われたと判断している。現状で切り合いが無く、2・5号溝跡の新旧は不明である。

遺 物

遺物は1・2・5号溝跡から出土している。いずれも堆積土中からの出土で、溝跡の年代を示す資料とはならない。摩滅の著しい小破片であるため図示していない。周辺の土坑群から出土した土器と同じで、縄文時代早期中葉頃に比定される田戸下層式に相当する縄文土器片である。

ま と め

1・2・3・5号溝跡はその配置から、それぞれ強い関連を持って作られている。2・5号溝跡の新旧は不明であるが、溝跡の造り替えが行われたことも確認できた。また4条の溝跡に囲まれた部分で柱穴などの痕跡も認められないことから、建物の区画溝の可能性も低い。現状ではその性格は不明である。年代も縄文時代早期よりは新しいとしか言えず、その詳細は不明である。

4号溝跡 SD4 (図18, 写真16・17)

4号溝跡は調査区西端に位置し、段丘平坦面の肩部に立地している。調査区際に位置し、風倒木痕で攪乱され、その全容は把握できない。4号溝跡の方向は段丘崖と平行して、真北に対して西に50°ほど傾く。溝跡の幅は1.5mを測り、検出面からの深さは35cmである。周壁は比較的急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は3層にわけた。堆積土の特徴から自然に埋没したと推察している。

4号溝跡から遺物が出土していないため、その性格や年代を特定することはできない。

第4編 後作A遺跡

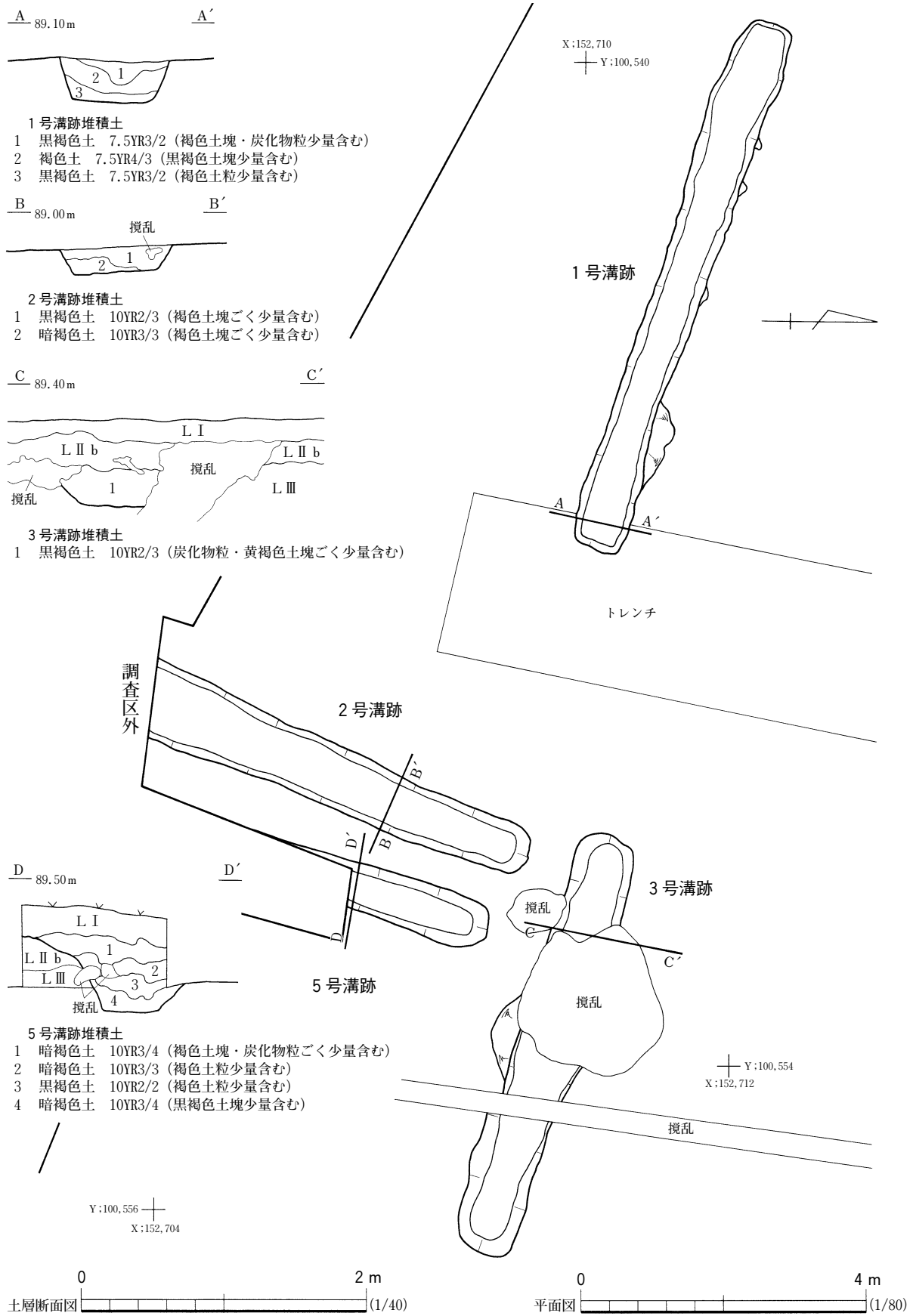


図17 1～3・5号溝跡

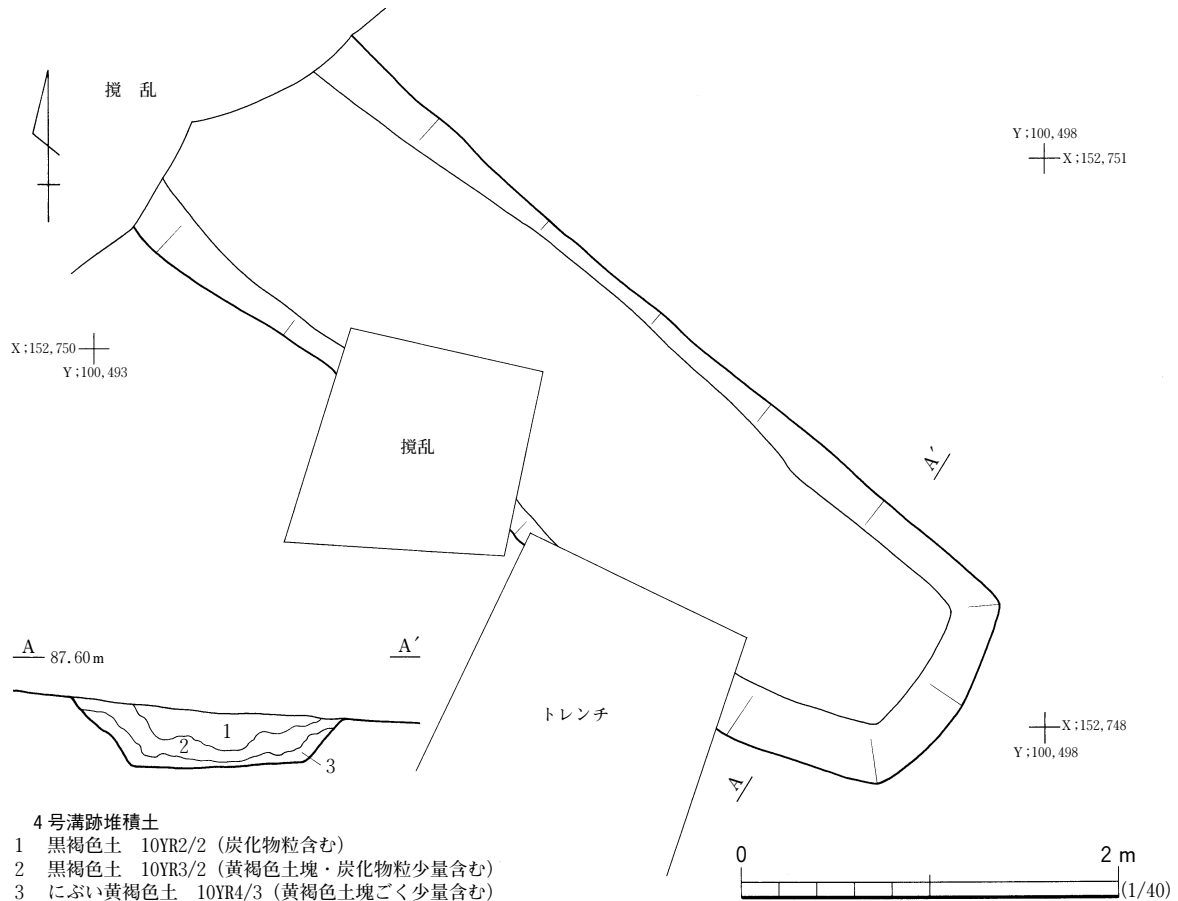


図18 4号溝跡

第6節 その他の遺構と遺物

第1遺物包含層 SH1

概要 (図2・3・19, 写真7)

第1遺物包含層は調査区の北端部にあたり、北向き段丘崖の裾部に相当する。調査時のグリッドでは、A2～A5, B2～B8の範囲で、その面積は約800㎡である。現況は段丘平坦面の掘削土と段丘崖を削った土で埋め立てられ、東西に細長い水田が造られていた。遺物包含層が形成されていた部分は湧水が著しく、段丘崖のLVとその下層にあたる岩盤の間から湧き出していた。

調査にあたっては、この盛土を重機で除去することから始められ、盛土は斜面下位の部分で3mほどの深さがある。盛土除去後は黒色土を基調とする遺物包含層を検出し、遺物を確認しながら掘り下げた。遺物包含層自体が既に削平を受けていたため、層厚は最大でも40cm程度である。包含層の上端部は不整面となって盛土と接し、段丘裾部では遺物包含層が遺存していないことから、近年の削平を伺うことができる。

遺物包含層は2層に分けた。第1層は厚さが20cmほどと薄く、包含層の西側に良く遺存していた。

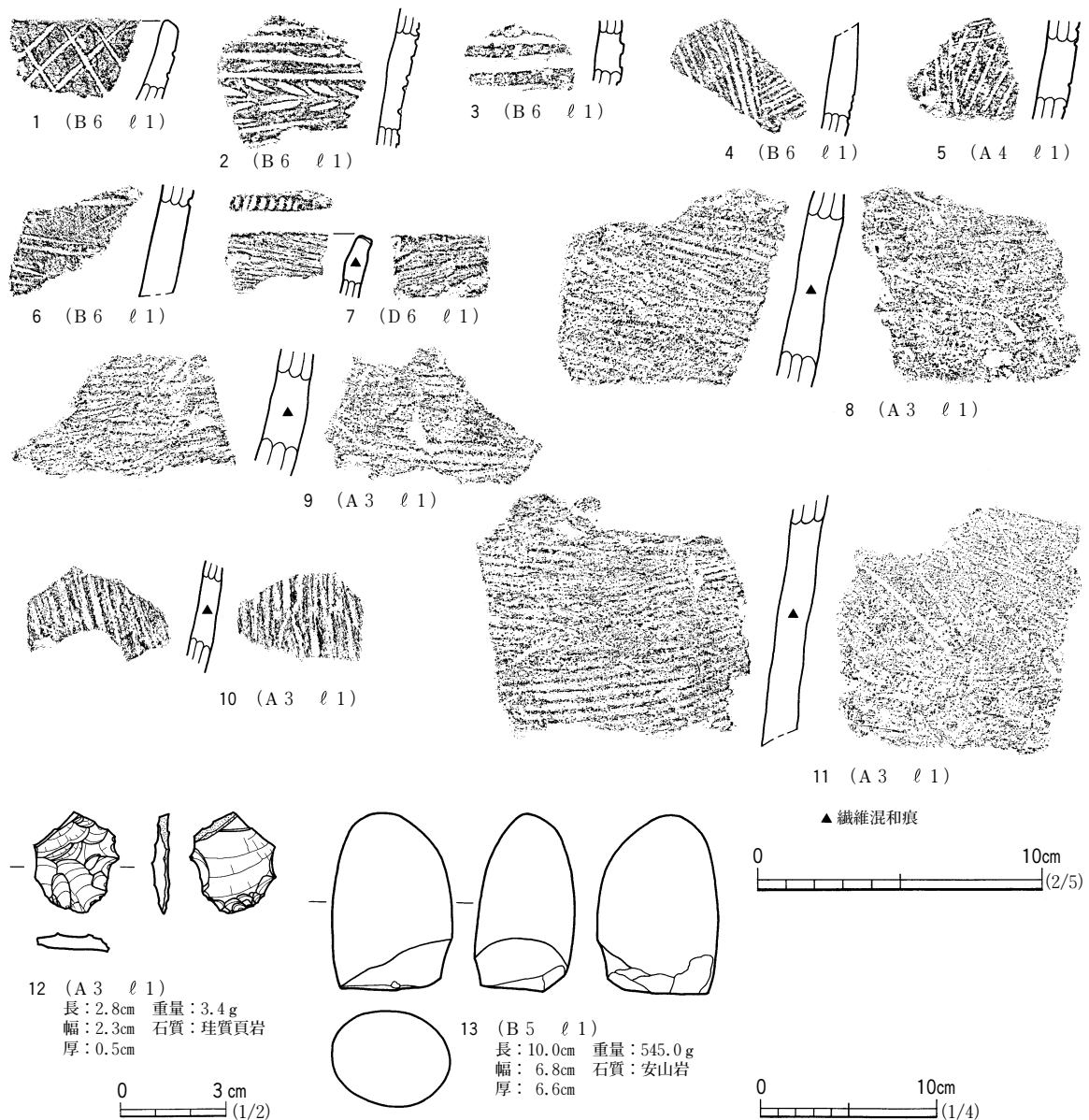


図19 第1遺物包含層出土遺物

第1層は黒色土で、炭化物粒やLVを起源とする礫を含んでいる。この層中に縄文時代早期の土器が含まれている。第2層はやや明るい黒褐色土で、炭化物粒や礫の他に段丘平坦面の崩落土を含んでいる。第2層からは遺物は出土していない。遺物包含層の東半部は盛土直下で2層となる。2層の下層はL II cとした褐色砂礫で、段丘崖に露出するLVを含む段丘の崩落土が堆積した土である。遺物は含まれていない。

遺物 (図19, 写真24・25)

第1遺物包含層からは縄文土器49点、石器4点が出土した。そのうち形状が分かるものを図19に示した。遺物の分布は、包含層の西側に偏りが見られた。出土した縄文土器は、縄文時代早期の土器にほぼ限定され、その文様等の特徴は段丘平坦面から出土した縄文土器と同じであることから、これらの遺物は段丘上から流れ込んだものと判断している。

1は口縁部直下から細い沈線で格子目が描かれる。2は平行沈線を主体とし、沈線間に方向を違える刺突文を「く」の字に巡らしている。3はやや幅広で彫りの浅い横位沈線が施される。4～6は細い沈線で鋸歯状文が描かれる。

7～11は内外面とも条痕文が施される土器である。7は口唇部にキザミメが施される。8・9・11は内外面とも摩滅して条痕文が不鮮明だが同一個体であろう。胎土に繊維混和痕が観察できる。

12は二次加工のある剥片で、周縁部に細かい調整剥離を施している。13は磨石で、その断面は円形をなす。磨石の下半部が斜めになるように、わずかに抉れている。下部を欠損するため全容は不明であるが、石棒の可能性も考えられよう。

ま と め

第1遺物包含層は調査区北端にあたる段丘崖の裾部で確認できた。近年の水田造成により、遺物包含層が既に削平されているため、遺物の出土量も極めて少ない。出土した縄文土器の特徴から、縄文時代早期中葉から後葉にかけての土器にほぼ限定できる。これは段丘平坦面から出土する縄文土器の特徴と違いはなく、段丘平坦面から流れ込んだものと考えられる。

遺構外出土遺物

土 器 (図20・21, 写真22・23)

後作A遺跡の遺構外から縄文土器片が264点出土した。縄文土器は早期と晩期の土器にほぼ限られ、縄文時代早期の土器が主体となる。

縄文時代早期中葉の土器は図20-1～25に示した。調査区の東側の土坑群と1号住居跡の周辺から出土している。20-1～3は三戸式期に相当する土器群である。1は平縁の口唇部となり、外面は細い沈線で横位と斜位沈線文を施している。2・3は数条の横位沈線をめぐらし、その下部は目の細かい格子文を描く。

20-4～20は田戸下層式に該当する土器群である。いずれも小破片のため器形は不明だが、20-20のように尖底形をなすのであろう。20-4～6は口唇部直下に刺突文が施され、その下位は横位沈線が数条めぐり、7は口縁部直下に平行する細い沈線を2本描き、その沈線間に先端が平らな工具を用いた連続刺突文がめぐり、8は口縁部に細かい縄文が施される。10・11は半截竹管状工具を用いた2本一組の沈線文を描き、その沈線文の下に小さい円形の粘土粒を貼り付けている。5・12～15はやや幅広の横位沈線文が数条めぐり、沈線の下位は無文となる。17～19は横位と斜位の沈線が組合わされた一群である。17は方向を違える斜行沈線で鋸歯状文を施す。19は櫛歯状工具による沈線を下地に施し、やや幅広で浅い斜位沈線を施している。20は尖底土器の底部破片である。表面は摩滅しているが、尖底部を削り込んだ痕跡がわずかに観察できた。

20-21～25は田戸上層式に相当する土器群で、21～24には貝殻腹縁文が施される。いずれも小破片のため、全体的な文様構成は不明である。24は先端が平坦になる工具を用いた連続刺突文が施される。25は横位と斜位の沈線を組み合わせて描いている。

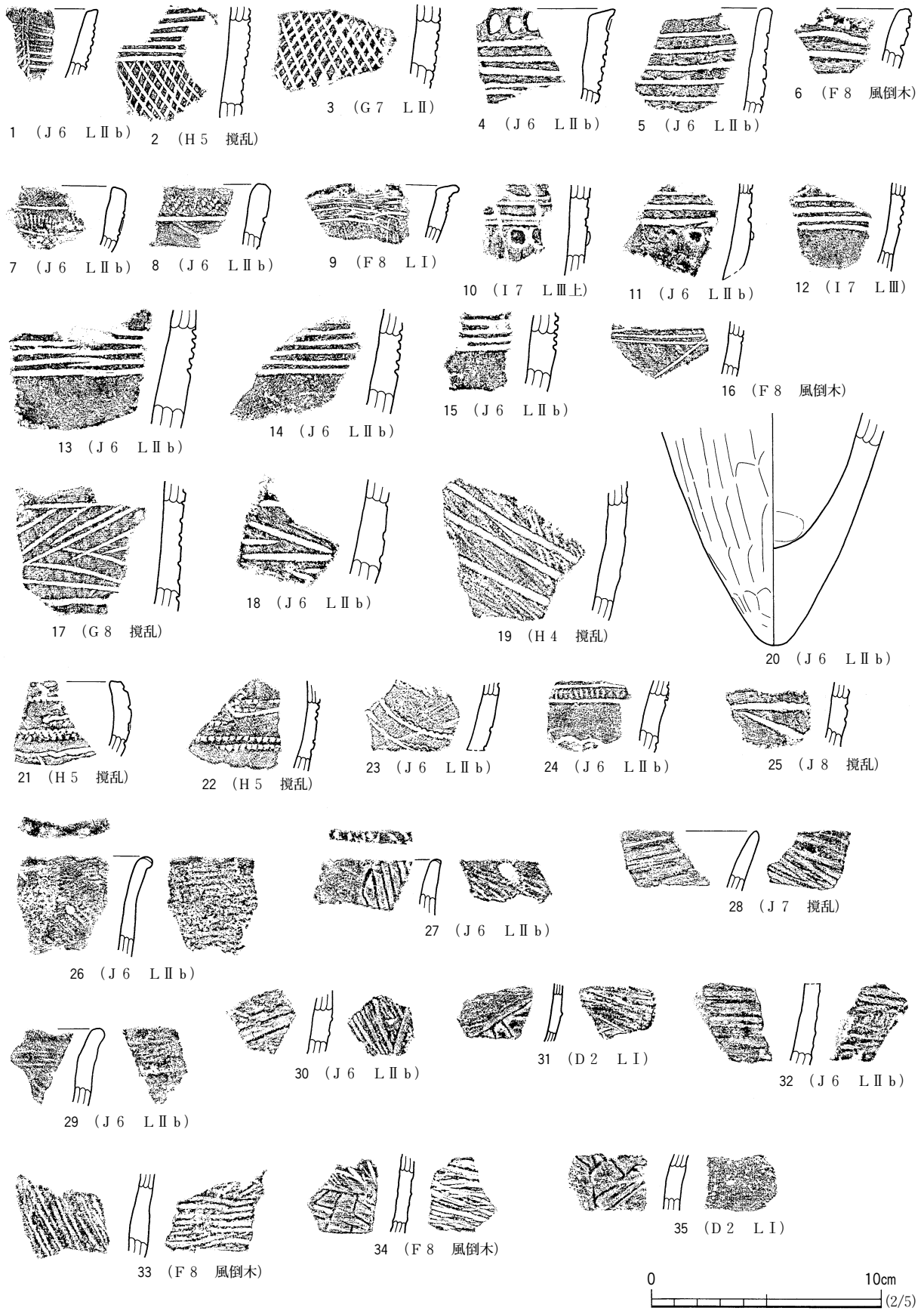


図20 遺構外出土遺物(1) 縄文土器

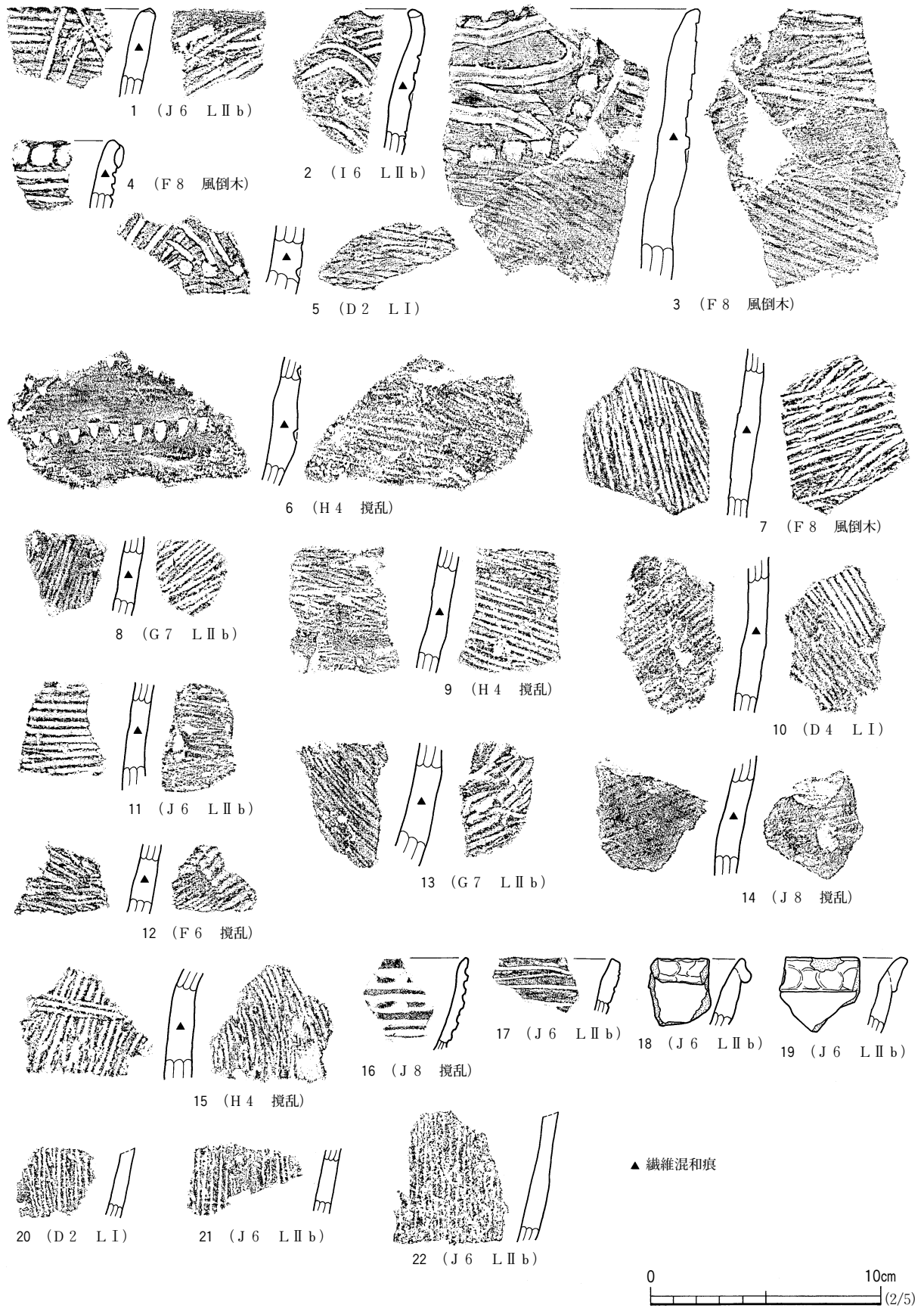


図21 遺構外出土遺物（2）縄文土器

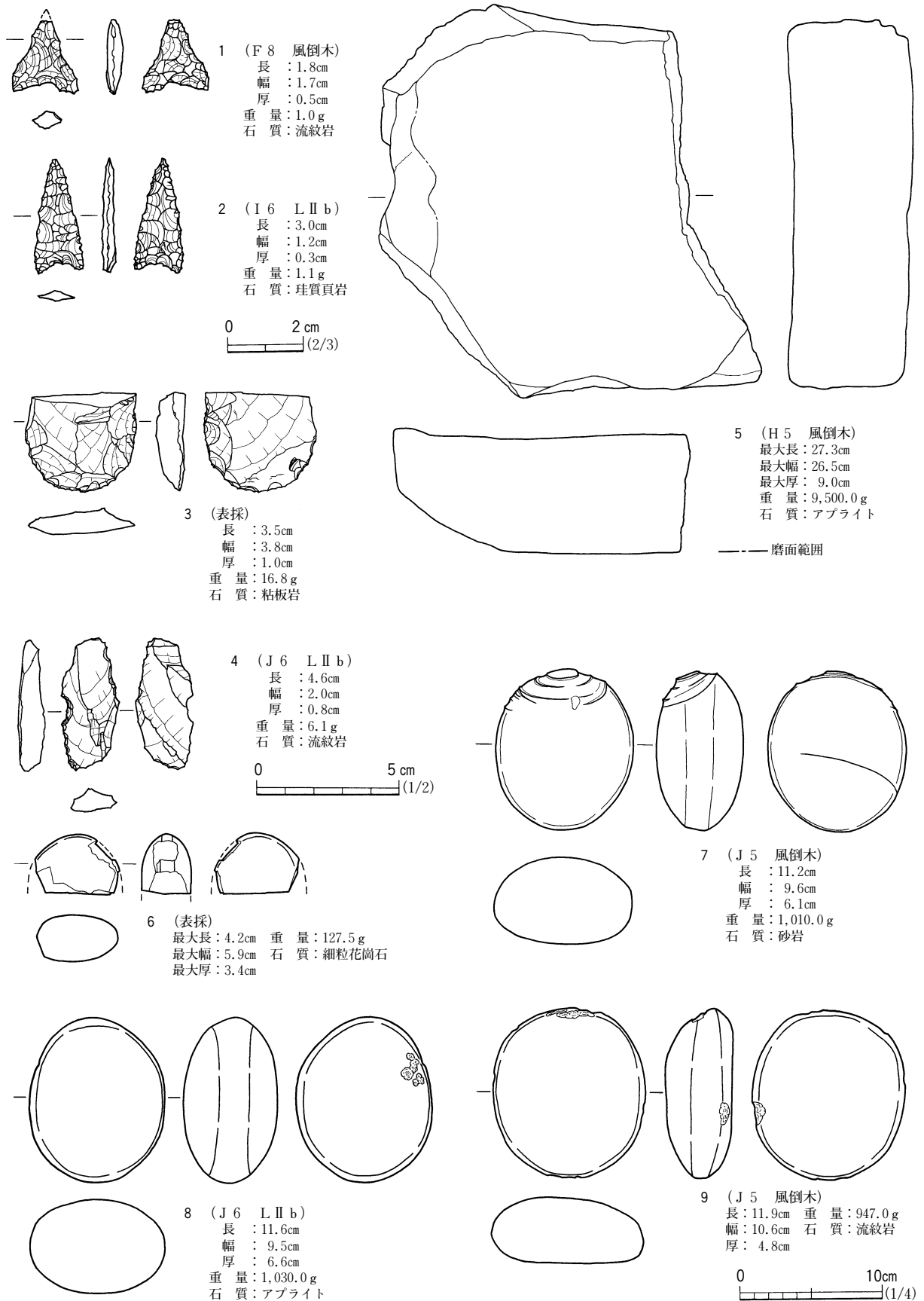


図22 遺構外出土遺物(3) 石器

縄文時代早期後葉とするものは図20-26~35, 21-1~15である。調査区の東側で出土したものが多く、他の土器群と比べて、特段偏った分布の傾向は示していない。土器の特徴は内外面とも条痕文を施す土器群である。20-26~35は外面に微隆起線が施される。いずれも小破片のため器形は不明だが、全体的に器壁が薄い特徴がある。野島式に相当する土器群である。21-1~15は外面の文様は半截竹管による沈線文・刺突文、細い沈線文が主体となる。口唇部にキザミメが施されるものもある。胎土には砂粒とともに繊維混和痕が明瞭に観察でき、やや粗い感がある。茅山下層式期に相当する土器群である。20-26は器面が荒れて不鮮明だが内外面とも条痕文が施される。口唇部に浅いキザミメがある。20-27は外面に斜位の微隆起線が施される。口唇部には幅の細いキザミメが見られる。28は内外面とも条痕文のみの口縁部破片である。20-29~35は体部破片で、外面には微隆起線、内面は条痕文が施される。

21-1は内外面とも条痕文を施し、外面には斜位に沈線文を施す。口縁部上端と口唇部にキザミメが見られ方向を違えて矢羽状に施している。21-2・3は半截竹管による沈線と刺突文が施された土器で、口縁部にキザミメが見られる。21-4は口縁部の小破片である。口唇部直下には指でつまみ上げたような窪みがめぐり、窪み間は粘土が高く盛り上がる。21-5・6は内外面とも条痕文を施した後に、外面には沈線文や刺突文が描かれる。刺突文の観察では、先端が円形となる刺突工具を押しつけるように施文している。21-7~15は深鉢形土器の体部破片で、内外面とも条痕文が施される。条痕文の特徴では21-1・3・11のような幅広で彫りの深い条痕が認められた。21-15は内外面共に条痕文を施す。外面は縦位の条痕文の後に、横位沈線がめぐる。

縄文時代晩期とした土器は図21-16~22である。これらの土器は1号住居跡と1号土器埋設遺構の周辺にのみ分布している。また、20~22は1号住居跡の出土遺物である図5-5と同一個体の可能性が高い。1号住居跡が非常に浅いことからすれば、混入したものかもしれない。

16は精製土器の破片で、浅鉢になるのであろう。外面の文様は横位沈線を主体とし、口縁部直下の沈線間に列点状にキザミを入れて、沈線間の無文部を区画している。内外面とも磨かれている。17は口縁部破片で、口唇部は平縁となる。細い沈線が横位に施される。18・19は粗製の深鉢形土器で、折り返し口縁の破片である。口縁部に撚り糸文などは施されず、指圧痕を明瞭に残す。体部文様は不明である。20~22は粗製深鉢の体部破片である。外面には細い縦位の撚り糸文が施され、使用による炭化物が付着している。

石 器 (図22, 写真25)

遺構外から出土した石器は22点であり、そのうち形状の分かるものを図22に示した。

22-1・2は石鏃である。2は長三角形をなし、基部の抉りが浅い。3は打製石斧で、基部を欠損する。刃部は周縁から調整を加えるが、使用により摩滅している。4は二次加工のある石器で、側辺部に細かい調整剥離を施す。5は石皿破片で、表面は使用により摩耗して平滑になる。

6・8・9は磨石で、楕円形で扁平な石を利用している。7は表面が全体的に摩滅した砂岩である。使用による明瞭なすり面は確認できない。(福 田)

第3章 ま と め

後作A遺跡で確認できた遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑32基、土器埋設遺構1基、溝跡5条である。出土した縄文土器の特徴から、縄文時代早期中葉から後葉にかけての貯蔵穴と考えられる土坑群、縄文時代晩期の竪穴住居跡と土器埋設遺構の2時期に限定できる。その他に旧石器時代のナイフ形石器が1点出土し、旧石器時代の諸活動を示す遺物として特筆に値する。ここでは土器埋設遺構について、その埋設方法などに若干の検討を行い、後作A遺跡の調査成果のまとめとする。

1. 縄文時代晩期の土器埋設遺構

土器埋設遺構の性格については、研究史的には古くから議論があり、貯蔵施設とか墓といった諸説がある。近年は人骨片の出土や埋設土器が底部穿孔されるなどの調査事例が増え、貯蔵施設とは考えにくいとして、土器埋設遺構を墓とする考えが主流となっている。一方、埋葬の性格については、遺体直葬・再葬墓・乳幼児の埋葬・後産の胎盤埋納とする諸見解が散見できるが、明確な決め手を欠いているようである。また、土器埋設遺構が複数基密集して確認される点から、土器埋設遺構を単独遺構としての評価の他に、その平面的な広がりに着目して「墓域」を形成するとし、縄文時代の集落論の中で位置づけを行う論考も見られる。

このような先学の研究成果から、後作A遺跡の土器埋設遺構についても、骨片や副葬品の出土はなかったが、一応は墓（土器棺墓）と考えている。

1号土器埋設遺構の埋設方法（図23-1）

後作A遺跡の1号土器埋設遺構は、粗製の深鉢形土器2個と半精製の浅鉢形土器2個、計4個の土器からなる。2個の深鉢形土器はそれぞれ底部を欠損し、その破断面の観察では土器焼成後の穿孔がある。これは深鉢形土器の外面に煤が付着することからも、通常の煮炊きに用いていたものを埋設土器として転用したことを示している。

深鉢形土器の埋設方法は、図15に示した埋設土器の出土状態などから、図23に示す復元案が想定される。深鉢形土器の器形に合わせた掘形を掘り、それぞれ正位で上下に重ねる。上に重ねた16-3は底部に向かって細くすぼまる体部下半を欠損する。この下端部が16-4の口径内にちょうど収まり、深鉢形土器を重ねた時の内部空間を確保できるように体部下半まで打ち搔いたと判断できる。

浅鉢形土器はいずれも16-4の内部から出土し、深鉢形土器の内部に入れて埋設されたことが分かる。その埋設方法は浅鉢形土器がバラバラの状態であるため詳細は不明であるが、16-2の底部破片が16-4の底部付近から正位の状態で出土したことから、底部穿孔された4の底部に代わって土器埋設遺構の底として用いられたと判断した。16-1は出土状態から埋設方法を復元できないが、伏せて埋設遺構の蓋としたのであろう。

埋設土器の掘形は、16-4の器形に沿って一回り大きく掘り込まれている。復元図を参考にすれば、構築当初は直径50cmで深さが約1mの穴であることが分かる。

後作A遺跡の1号土器埋設遺構の場合、複数の土器を組み合わせ埋設土器の内部空間を広くしている特徴が見られる。埋葬方法としては、再葬墓のような人骨埋納も可能であろうが、埋設土器の容量から小柄な女性または子供の屈位埋葬と復元している。

土器埋設遺構の類例（図23-2）

複数の土器を用いた埋設遺構の類例と比較することにする。飯舘村に所在する宮内B遺跡3号埋甕では、浅鉢形土器2点、深鉢形土器1点、小型深鉢形土器1点の計4点からなる。報告によれば、埋設方法は完形の深鉢形土器を本体とし、浅鉢形土器を2つ重ねて蓋とする。小型深鉢形土器はバラバラに碎き、深鉢形土器の内外に置いたとしている。

宮内B遺跡3号埋甕を復元すると図23に図示したようになる。小型深鉢形土器については、報告書ではバラバラに破碎したとしているが、写真等を見るかぎり口縁部以外の大部分が蓋となる浅鉢形土器の上に乗っている出土状況である。このことから埋甕の蓋とした浅鉢形土器の上に伏せて重ねたものが、土圧で潰れて口縁部が深鉢形土器内部に流れ込んだものとして復元した。また、掘形の余剰掘削土は塚状に土盛りしたのであろう。さらに小型深鉢形土器が盛土の上部から露出して、墓標のような目印になった可能性もある。

後作A遺跡1号土器埋設遺構とは、その埋設方法や埋設土器の器種に違いが見られるが、浅鉢形土器を蓋として用いているなど共通点も指摘できよう。また、埋設土器の内部容量にも違いがあり、これは被葬者の体格を反映するものであろうか。

土器埋設遺構の上部構造（図23-3・4）

土器埋設遺構の上部構造を伺える資料として、郡山市の荒小路遺跡6号埋甕を取り上げる。6号埋甕は深鉢形土器1個からなる。年代は縄文時代後期前葉である。6号埋甕の特徴は埋甕の周囲に配石があること、埋設土器内部に長さ45cmの石棒が混入していた点にある。埋設土器内の土層観察からも、埋設土器の上部に設置された石棒が落ちたことは明らかである。このことから埋設土器の口縁部には蓋があったことが想定される。蓋の痕跡が遺存しないため、木質の板蓋であろう。また、周囲の配石との関連から、埋甕が作られた当時は、配石の上端部が地表面から露出していたことは間違いなく、少なくとも配石の上端部が当時の地表面と考えても大きな矛盾はない。この時、報告にあるように、石棒を埋甕に半ば埋没させて設置することにやや違和感があるだろう。復元図に示すとおり埋設土器の口縁部に木蓋をする。その上部に掘形掘削土の処理を兼ねて塚状の盛土を作り石棒が立てられる。さらに盛土で石棒を倒れないように固定することも十分に可能であろう。6号埋甕の外観は、塚状盛土の立石とその周囲に平石を配した状況が伺え、さながら秋田県大湯環状列石に代表される日時計状配石遺構のような景観が復元できよう。

この事例から、土器埋設遺構は土器を埋めて周辺地形と同じように平らにするのではなく、外観的に墓として明示することが意図されていた。その第一の理由は、土器埋設に伴う掘形掘削土の処

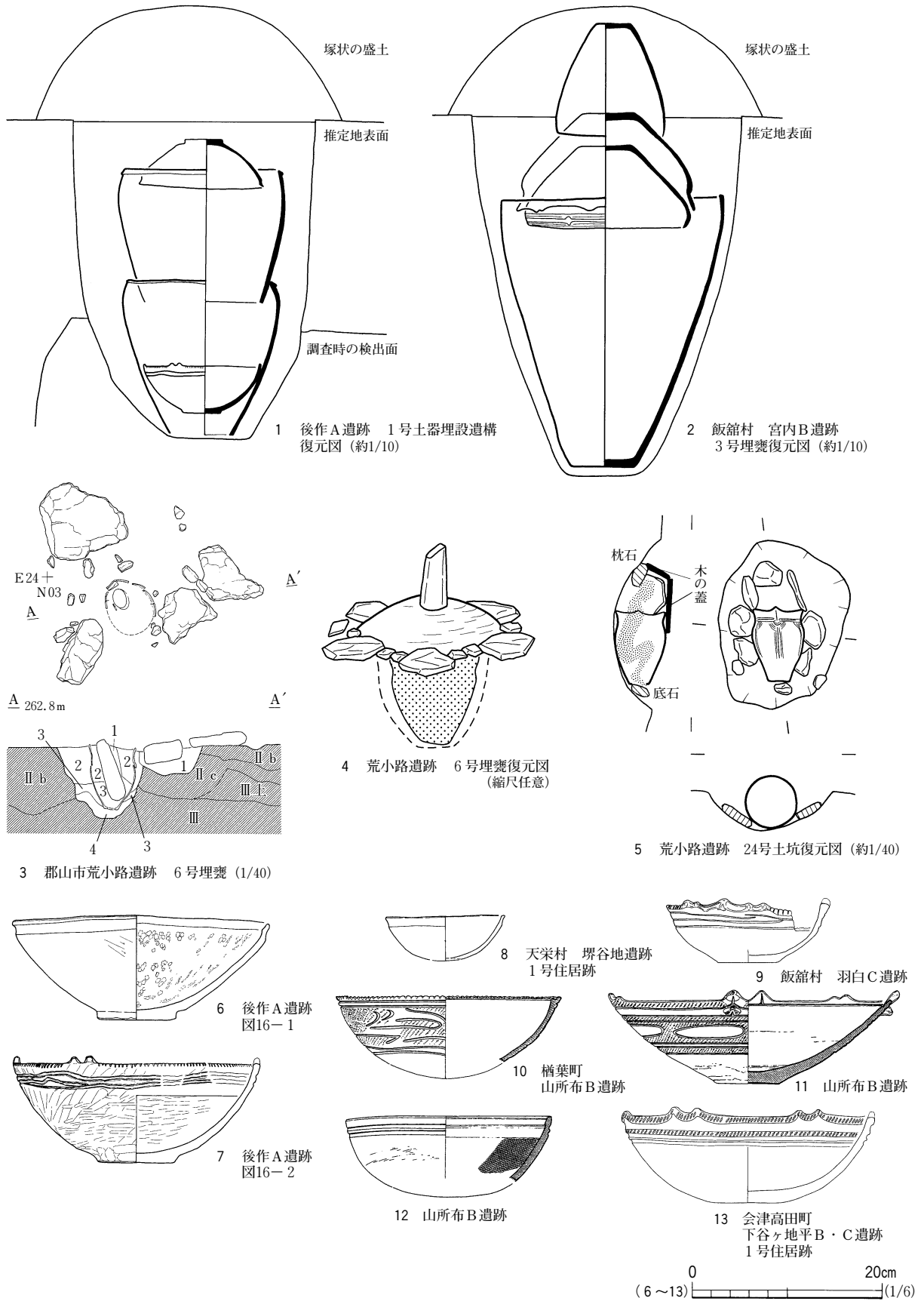


図23 土器埋設遺構の復元と浅鉢形土器の集成

理である。第2に埋設土器内部の遺体や木蓋が腐ることで、埋設土器の内部が露呈するだけでなく埋土が土器内部に流入して窪みとなる。塚状盛土を施すことで、その窪みが生じないようにするためと考えている。

後作A遺跡1号土器埋設遺構は復元図に示すとおり、その掘形は直径50cm、深さ1mの穴である。その掘形掘削土で埋設土器を埋め戻したとしても、その残土はかなりの土量になることは想像に難くない。荒小路遺跡6号埋甕の例を参考にすれば、墓標となる石棒は無いが、余剰掘削土は塚状に盛り上げ、外観的にも墓と分かるような視覚効果を演出していた可能性も考えられよう。

横置き土器埋設遺構 (図23-5)

土器を正立させて埋設するものの他に、土器を横倒しで埋設する事例が知られている。その一つとして、荒小路遺跡24号土坑を取り上げる。

報告によれば、24号土坑の年代は縄文時代後期前葉頃で、大きめの掘形の中に深鉢形土器を横倒しで設置している。そのとき深鉢形土器の底部は人為的に穿孔され、底を塞ぐように石をあてがっている。土器の固定のために、土器の側面に石を配している。また深鉢形土器の口縁部を閉塞する石はなく、口縁部の端部に平行して板石を立てている。口縁部の20cmほど前方に丸い平石が置かれる。24号土坑の復元図に示すように、24号土坑が墓とすれば、遺体を深鉢形土器の内部に直接埋葬できる。この時、胸元から上部は土器の外部に出て、土器の前方にある石が頭部の位置となり、ちょうど枕石となる。土器から露出した遺体上半身は、埋設土器の口縁端部に立てた平石を支えとして木質板状の蓋がかけられ、埋設時に遺体に直接土がかぶらないようにしたと推定している。

荒小路遺跡24号土坑は、人骨・副葬品などの出土はないが、人為的に埋設土器の底部穿孔や土器の周囲を石で固定するなどの特徴が見られる。

土器埋設遺構と墓域

この荒小路遺跡6号埋甕と24号土坑は、後作A遺跡の1号土器埋設遺構の特徴とは違うが、どちらも墓としての機能は共通している。6号埋甕の出土状況から、土器埋設遺構の上部に墓標状の目印があり、そのためには塚状の盛土が伴いそうである。このことから後作A遺跡1号土器埋設遺構にも塚状の土盛りの存在が伺え、土器埋設遺構の上部構造について新たな知見と言えよう。

土器埋設遺構で構成される墓域について、飯館村の羽白C遺跡・宮内B遺跡や須賀川市一斗内遺跡では複数基の埋設土器が掘形を重複させて密集し、同時期の集落とやや離れた場所に墓域が形成されると指摘する。この時の埋設土器は、深鉢形土器1個を正位で直立させるものが多い。なかには小型土器の埋設も見られ、弥生時代に急増する壺形土器による再葬墓との関連も指摘される。

埋設土器が密集する墓域のあり方と比較すれば、後作A遺跡の1号土器埋設遺構は単独で存在し、複数の土器を重ねた複雑な埋設方法をなす。墓域を形成しない単独の土器棺墓に何らかの葬送儀礼に対する特別な意味合いがあるのであろう。今回の調査では1号土器埋設遺構と同時期の集落跡が見つかっていないため、これを実証できるだけの資料が得られていない。墓域と集落については、今後の課題となるであろう。

2. 埋設土器の特徴と年代について (図23-6~13)

1号土器埋設遺構の土器

1号土器埋設遺構を構成する4個の土器について、周辺遺跡との比較から、その年代的な位置づけをまとめることにする。1号土器埋設遺構を構成する土器は明らかに同時期に存在している。16-3・4は、その外面に煤が付着することから、煮炊き用に使用した土器が転用されたことに間違いはない。胎土は福島県浜通り地方に特有とされる白色微細の海綿骨針が含まれ、後作A遺跡周辺の在地集落で製作・使用された土器と言える。

土器1 (図16-1) 器形は円盤状の底部からわずかに内湾して立ち上がり、口縁部と体部の境に稜をもち外反して開く。口縁部外面の稜は幅が狭い特徴がある。口縁部はやや内削ぎ状をなし、内面に軽い稜が見られる。外面は無文で、器面全体が丁寧に磨かれる。内面は使用による小さな剥落痕が目立つが丁寧に磨かれている。

口縁部の形状では、岩瀬郡天栄村の堺谷地遺跡1号住居跡から出土した浅鉢形土器に類似する。全体的な器形では丸底になり、体部がやや丸みを帯びている特徴がある。口縁部の外面には稜が見られ、その幅も狭い。口唇部がやや平縁となるため、内面には稜が見られない。これに伴う粗製深鉢形土器は折り返し口縁で、外面には平行する縦位の撚糸文や網目状撚糸文が施される。

土器1に見られる口縁部が短く外反し、口縁部と体部の境に明瞭な稜をもつ浅鉢形土器については、檀原遺跡や宮瀧遺跡の土器群に代表される西日本磨研土器の特徴とする指摘がある。これらの無文浅鉢形土器の特徴は、内外面とも口縁部と体部の境が大きく屈曲し、急角度な稜となる。その口縁部から稜までの幅が広い。体部外面は無文で、製作時の調整痕が分からないほど丁寧に磨かれる。土器1との比較では、口縁部が外反する点で器形が類似し、外面は緻密なミガキにより仕上げられる特徴があるが、口縁部から稜までの幅が狭いだけでなく、稜の張り出しが弱いなど、一足飛びに西日本的な要素をもつ土器とも言い難い。ただ、周辺遺跡から土器1の特徴を持つ土器は極めて少なく、後作A遺跡の特異な事例の一つである。

土器2 (図16-2) 器形は土器1に比べて、やや丸みを帯びて立ち上がる器形である。口縁部上端には二山突起が全体で5個取り付くであろう。突起間の口唇部には、約3~5mm間隔でキザミメが充填される。外面は口縁部直下にやや乱れた二重の横位沈線がめぐる。沈線文以下の体部は無文となる。調整は土器1に比べ粗雑な印象であるが、体部外面には縦位から斜位のナデ痕が残り、部分的に横位方向のミガキ痕が観察できる。内面は平滑に磨かれるが、その単位は不鮮明である。

榊葉町山所布B遺跡から出土した大洞C₂~A式期の浅鉢形土器と比較する。器形では丸底になる一群に平底が混在し、底部形態は器形のバリエーションの一つであろう。文様等の特徴では、次にあげる4つのタイプが見られる。①口唇部にキザミメを施す一群。②口縁部に二山突起のみを取り付ける一群。③口縁部直下に二重の沈線文を施す一群。④体部下半に文様を施さず、無文になる一群。土器2は、口縁部が①~②の要素を併せ持ち、体部が③~④の要素をもつ。

図23-9に示した羽白C遺跡出土の浅鉢形土器は①～④の要素を持つ。16-2とは大きさが違うが、その特徴は極めて類似している。

土器3・4(図16-3・4) 器形は底部からやや丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部付近で内湾する。口縁部は折り返し口縁となる。折り返し口縁部は無文で、製作時の指圧痕が観察できる。体部外面の文様は、土器3が細かい縄文が施され、回転結節文が観察できる。土器4はやや荒い縄文が施される。

深鉢形土器の口縁部がやや内湾する器形は、縄文時代後期から弥生時代まで存在し、普遍的に見られる一群である。口縁部の特徴では、折り返し口縁になる深鉢形土器は、大洞C₂式からA式に多くなる傾向が見られる。さらに一部は弥生時代まで残る。折り返し口縁となる深鉢形土器の地文の文様は、縄文時代晩期後葉では外面の地文に網目状または縦位の平行撚糸文を主体的に施す。折り返し口縁部にも体部と同じ撚糸文が施される。

後作A遺跡1号土器埋設遺構の特徴と比べると、これらの文様とは明瞭な違いがある。折り返し口縁となる深鉢形土器の地文に縄文を施す例では、大熊町道平遺跡の第5群土器第Ⅱ類Eと分類された土器群として、わずかに見られる程度である。

土器の年代について

これら埋設土器について、浅鉢形土器と深鉢形土器は同時期で、そのセット関係は間違いなく、縄文時代晩期の土器群における編年的な位置づけも可能な資料であろう。しかし、個々の土器の特徴は福島県の浜通り地方では類例が少なく、その年代的な位置づけが困難である。

粗製深鉢形土器は、器形の特徴における変化は乏しいことがわかっているが、大洞C₂式期には折り返し口縁が出現する。文様の特徴として、体部外面の地文は網目状ないしは平行縦位の撚糸文が主として施され、それは折り返し口縁にも施される。弥生土器の深鉢形土器は、折り返し口縁の深鉢形土器との器形の変化はほとんど見られないが、外面の地文ではハケメのような条痕文が主体で、口縁部は無文となる特徴がある。16-3・4は外面に縄文が施され、口縁部は無文で、主体をなす地文は弥生土器と明らかに違う。大熊町道平遺跡に類例が見られることから、縄文時代晩期後葉と位置づけたい。

1・2とする浅鉢形土器は無文であるため、大洞様式の浅鉢形土器との比較が難しい。1は前述したように、周辺遺跡に見られない特徴的な器形の土器である。2の特徴が檜葉町山所布B遺跡から出土した大洞C₂～A式に相当する浅鉢形土器の口縁部要素を併せ持つ点から、この時期に近い時期と判断している。

以上から後作A遺跡の1号土器埋設遺構の年代は、土器単体では類例が少ないため明瞭でないが、縄文時代晩期後葉と判断している。重複関係から判断すると、1号住居跡より新しいことは間違いない。1号住居跡出土遺物の特徴は、網目状または平行縦位の撚糸文を施す粗製深鉢形土器であり、おおよそ大洞C₂式期に相当する。また周辺から弥生時代の遺物が全く出土していない。このことから1号土器埋設遺構の年代は、大洞C₂式期よりは新しく、弥生時代まではくだらない時期として、

大洞A式期に相当する年代であろう。

後作A遺跡では縄文時代晩期の出土遺物が極めて少なく、その土器編年までは言及できない。今後は明確な集落跡の遺構から出土した土器と比較し、粗製・精製土器のセット関係を評価することで、その年代的な位置づけが課題として残る。

3. ま と め

後作A遺跡では土器埋設遺構は1基のみであったが、その性格は墓（土器棺墓）と考えている。この他に縄文時代晩期の遺構が少なく、今回の調査だけでは縄文時代晩期の墓制を復元できないが、土器埋設遺構1基からなり、複数の土器を重ねる特異な埋設方法に特色がみられた。さらに、埋設土器の器形や施文方法などの特徴が、福島県浜通り地方での類例に乏しい特異な組成をしている。これらのことが後作A遺跡における縄文時代晩期の墓制について、その在りかたを示す一つの事象であることには間違いない。

土器埋設遺構の研究成果をまとめる上では、墓自体の構造や葬送儀礼をはじめとする墓制、副葬品、出土人骨の分析など検討を加えた研究が課題となる。次年度以降に常磐道建設に伴い調査対象となるであろう後作A遺跡2次調査及び大熊町道平遺跡の調査成果を待ち、再度検討を試みることにする。

(福 田)

参 考 文 献

- 渡辺・大竹他 1983 『道平遺跡の研究』大熊町教育委員会
- 山内幹夫他 1984 「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告16』
福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
- 山内幹夫他 1985 「荒小路遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告19』
福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
- 芳賀英一他 1986 「下谷ヶ地平B・C遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡発掘調査報告IV』
福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
- 馬日順一他 1988 「山所布B遺跡」『楡葉町史』楡葉町教育委員会
- 山内幹夫他 1989 「宮内B遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告ⅩⅢ』
福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
- 藤谷 誠他 1989 「堺谷地遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告3』
福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
- 目黒吉明他 1998 『鳥内遺跡』石川町教育委員会
- 葛西 勲 2002 『再葬土器棺墓の研究—縄文時代の洗骨葬』

写 真 図 版

第1編 もとまちにし 本町西B遺跡

写真目次

第1編 本町西B遺跡

1	調査前全景	197	23	2号建物跡	208
2	調査前全景	197	24	2号建物跡細部	208
3	全景	198	25	3号建物跡	209
4	全景	198	26	3号建物跡細部	209
5	基本土層	199	27	4号建物跡	210
6	作業風景	199	28	4号建物跡細部	210
7	1号住居跡	200	29	土坑(1)	211
8	1号住居跡細部	200	30	土坑(2)	212
9	2号住居跡	201	31	土坑(3)	213
10	2号住居跡細部	201	32	埋甕・遺物包含層	214
11	3号住居跡	202	33	住居跡出土遺物	215
12	3号住居跡細部	202	34	住居跡・土坑・埋甕・ 遺構外出土遺物	216
13	4号住居跡	203	35	遺物包含層・遺構外出土遺物	217
14	4号住居跡細部	203	36	遺物包含層出土遺物(1)	218
15	5号住居跡	204	37	遺物包含層出土遺物(2)	218
16	6号住居跡	204	38	遺構外出土遺物(1)	219
17	7号住居跡	205	39	遺構外出土遺物(2)	219
18	9号住居跡	205	40	遺構外出土遺物(3)	220
19	8号住居跡	206	41	住居跡・遺物包含層・ 遺構外出土遺物	220
20	8号住居跡細部	206			
21	1号建物跡	207			
22	1号建物跡細部	207			



1 調査前全景（南から）



2 調査前全景（北から）



3 全景（南から）



4 全景（北から）



5 基本土層（北から）



6 作業風景



7 1号住居跡 (西から)



8 1号住居跡細部

a・b 南北土層断面 (東から) c カマドa全景 (東から)
d カマドb全景 (西から)

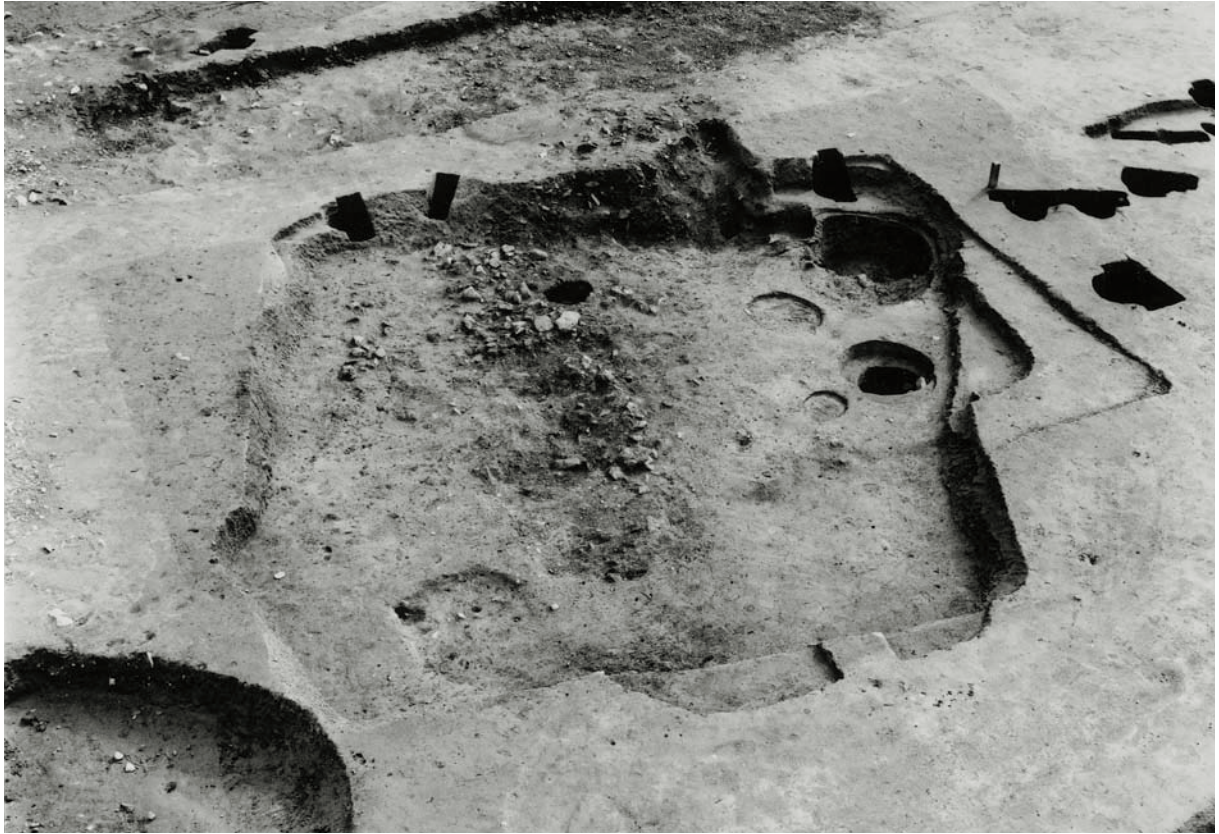


9 2号住居跡（東から）

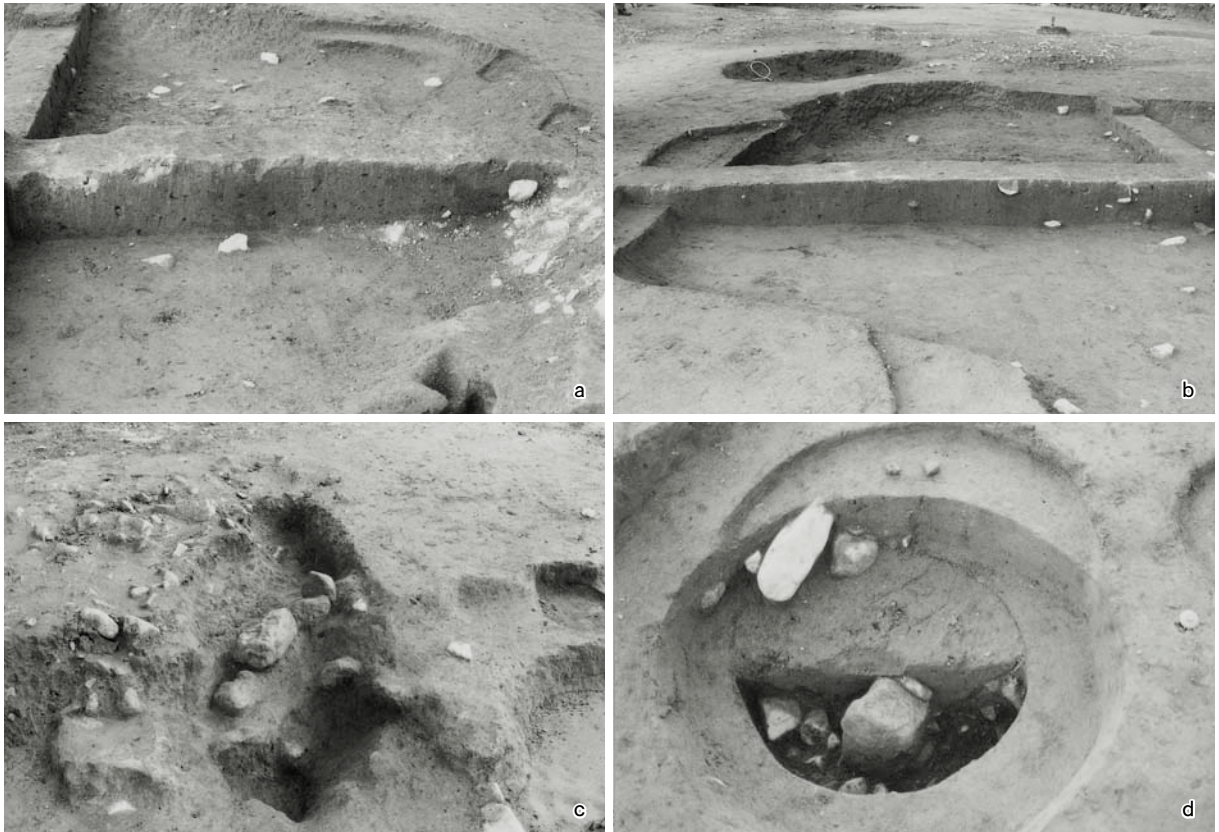


10 2号住居跡細部

a 南北土層断面（東から） b 煙出し断面（南から）
c カマド全景（西から） d カマド断面（南から）



11 3号住居跡（西から）



12 3号住居跡細部

a・b 東西土層断面（南から） c カマド全景（西から）
d P1断面（西から）



13 4号住居跡（北から）



14 4号住居跡細部



a カマド全景（北から） b 検出状況（北から）
c カマド断面（北から）



15 5号住居跡（西から）



16 6号住居跡（南東から）



17 7号住居跡（東から）



18 9号住居跡（西から）

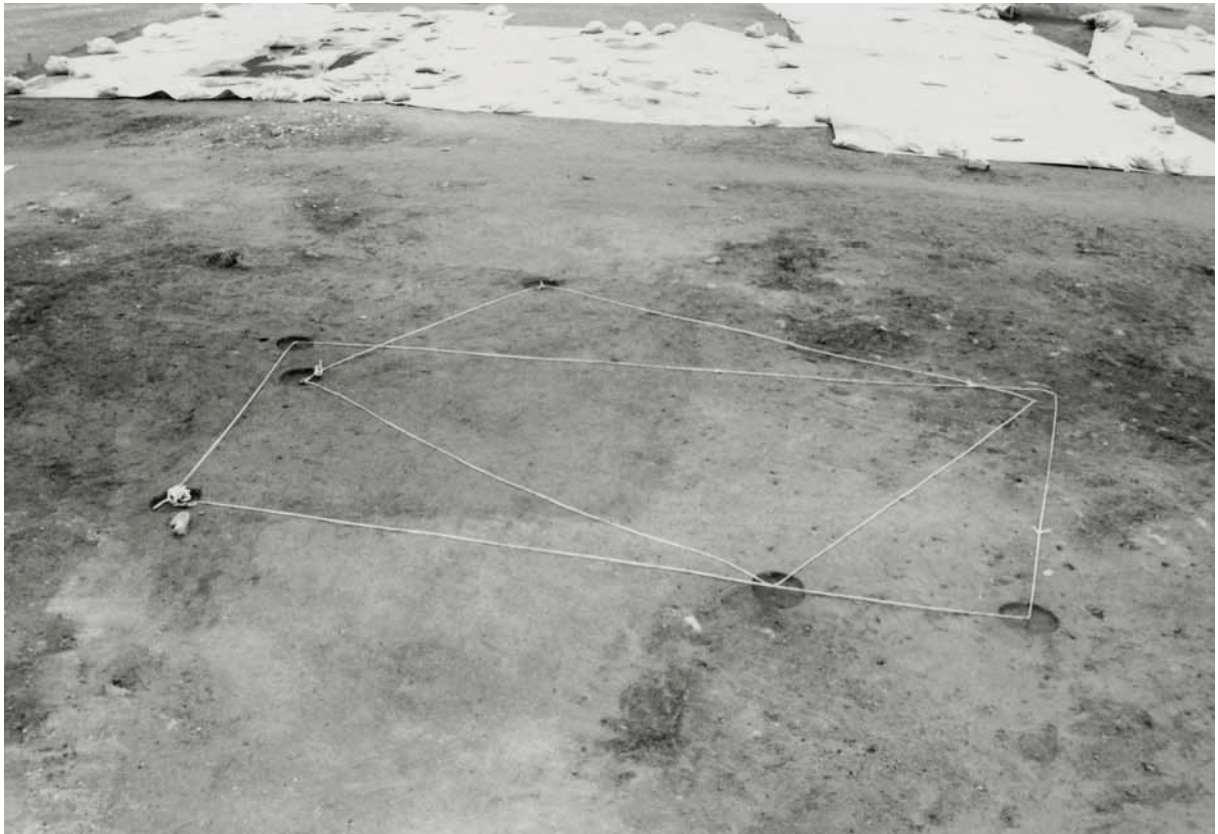


19 8号住居跡（西から）



20 8号住居跡細部

a カマド全景（西から） b 南北土層断面（東から）
c 検出状況（西から）



21 1号建物跡（南から）



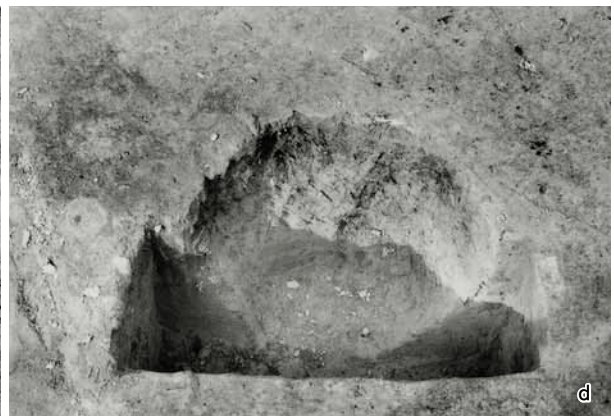
a



b



c



d

22 1号建物跡細部

a P 2土層断面（南から） b P 3土層断面（西から）
c P 1完掘（南から） d P 3完掘（西から）



23 2号建物跡（東から）



24 2号建物跡細部

a P 9土層断面（南から） b P 10土層断面（南から）
c P 2完掘（南から） d P 8完掘（東から）



25 3号建物跡（南から）

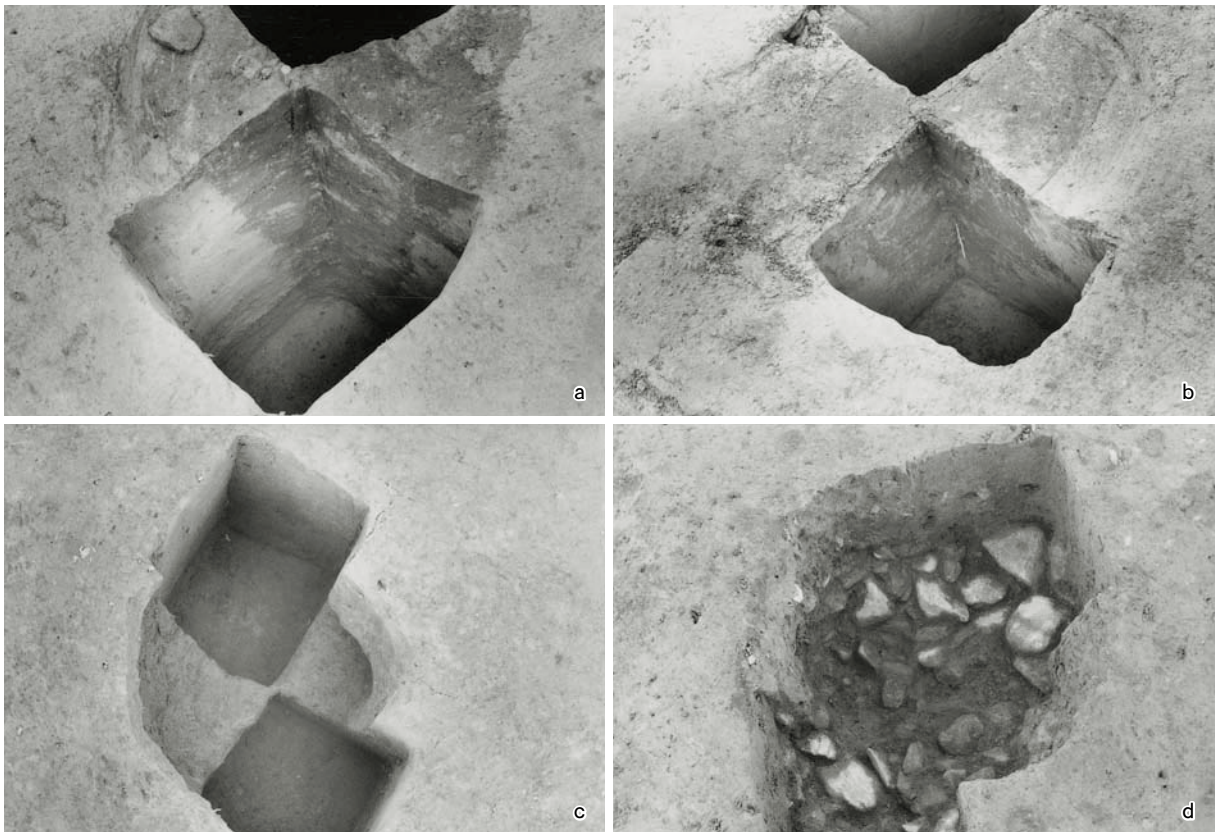


26 3号建物跡細部

a P 9土層断面（南から） b P 4土層断面（南から）
c P 6完掘（南から） d P 5完掘（南から）

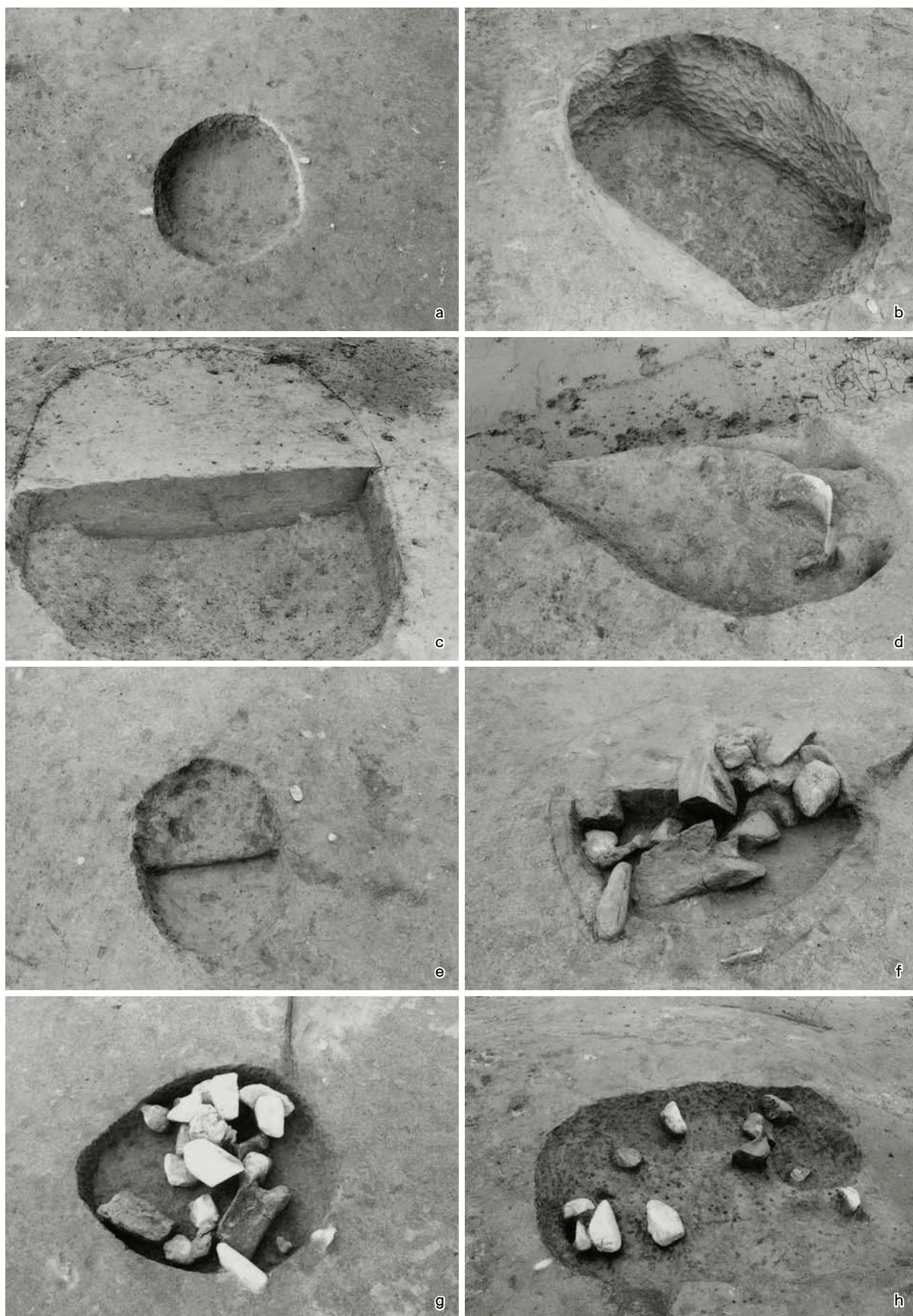


27 4号建物跡（南から）



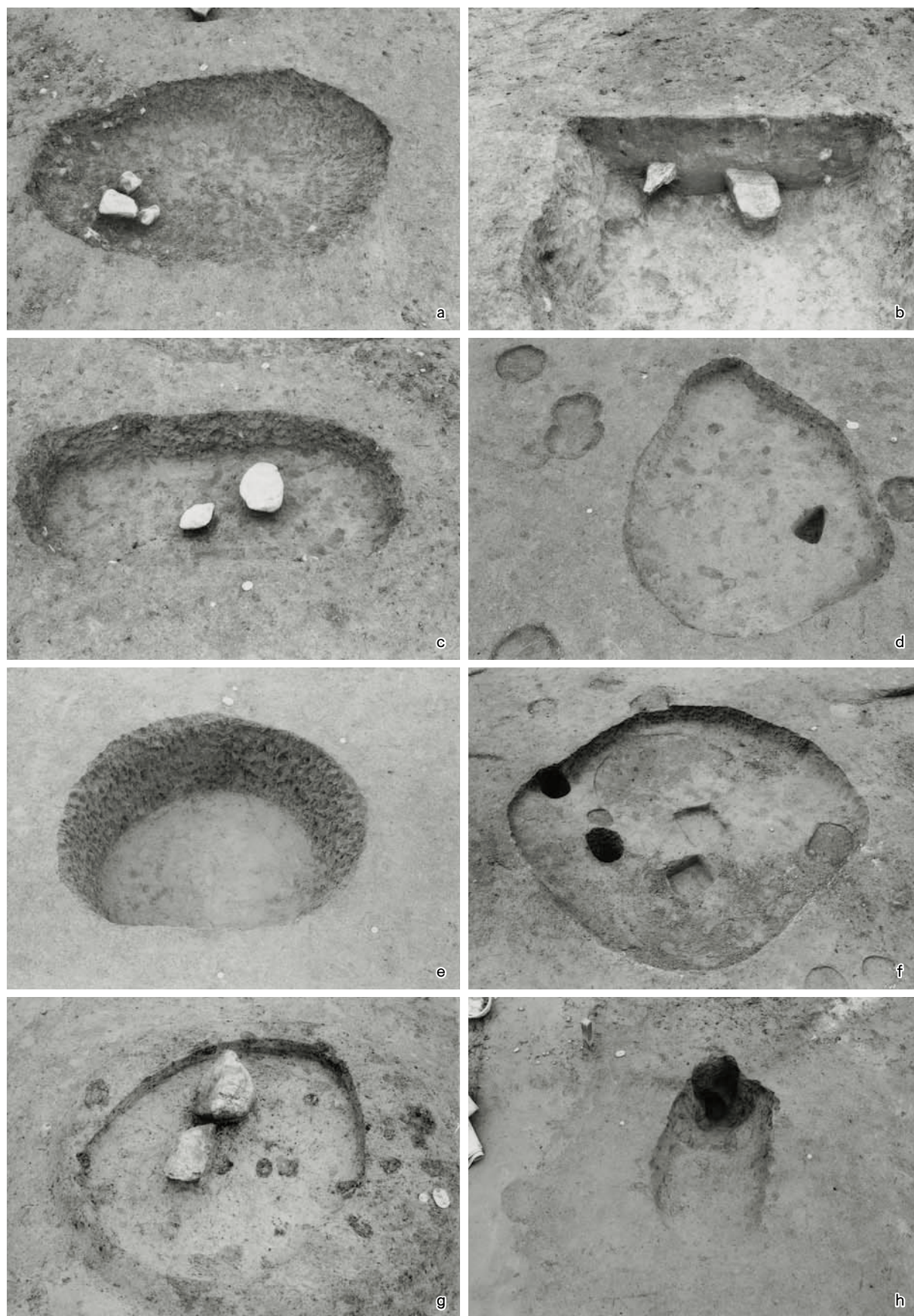
28 4号建物跡細部

a P 4 土層断面（西から） b P 9 土層断面（北から）
c P 8 完掘（南から） d P 6 完掘（南から）



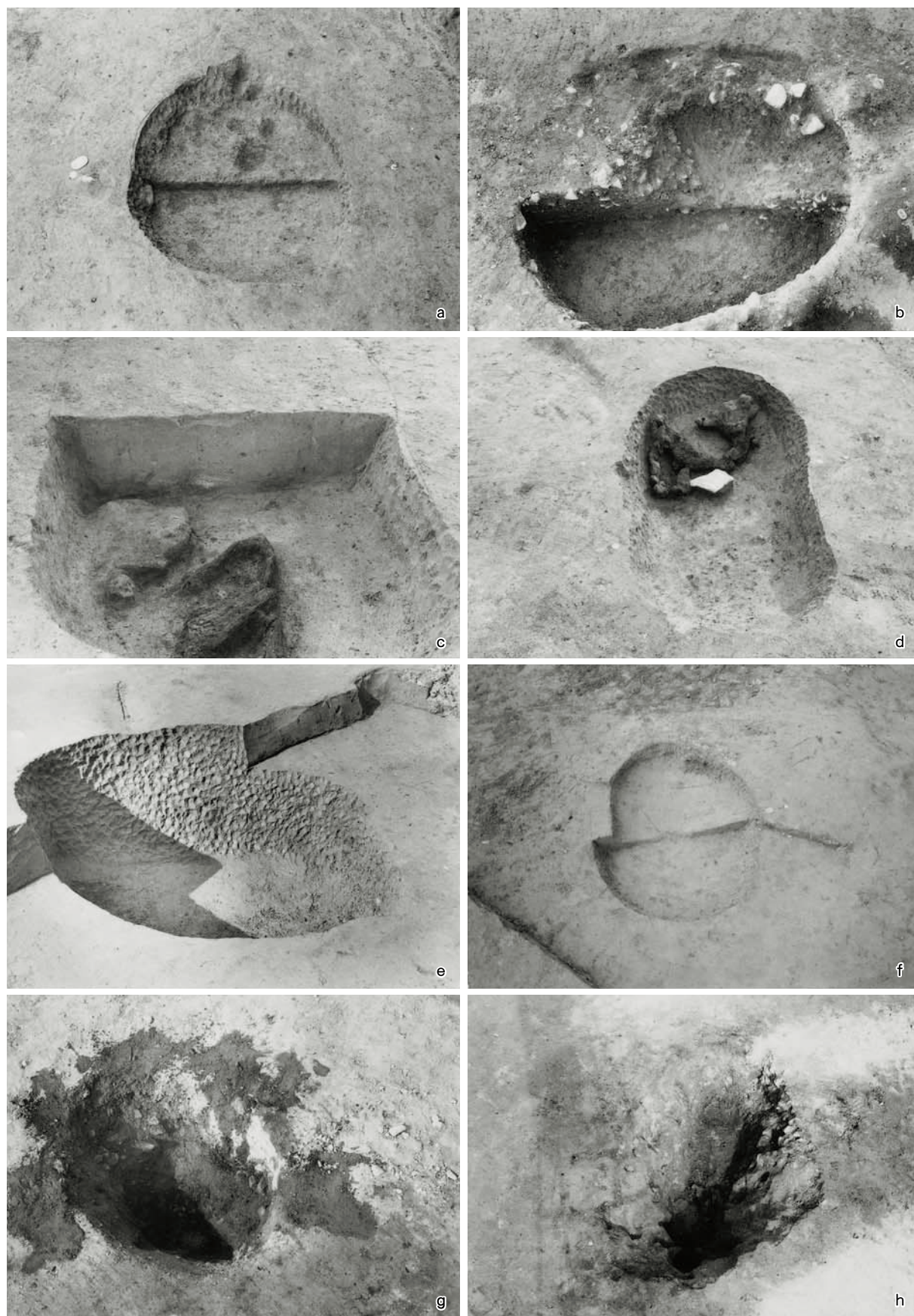
29 土坑 (1)

- | | | | | | |
|---|--------------|---|---------------|---|----------------|
| a | 1号土坑全景 (南から) | b | 2号土坑全景 (北西から) | c | 3号土坑土層断面 (東から) |
| d | 4号土坑全景 (南から) | e | 5号土坑全景 (南東から) | f | 6号土坑土層断面 (南から) |
| g | 6号土坑全景 (南から) | h | 7号土坑全景 (南から) | | |



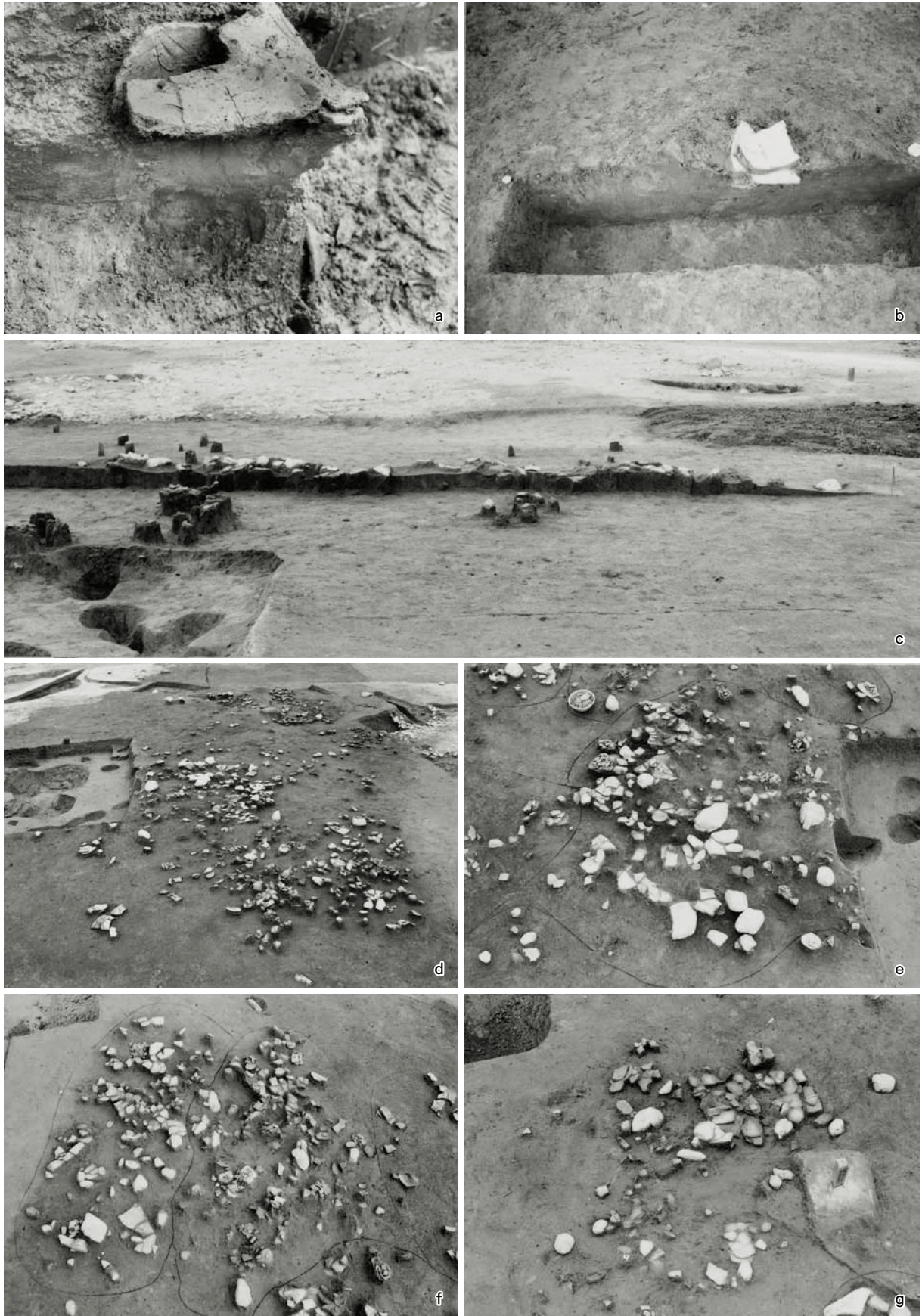
30 土坑 (2)

- | | | | | | |
|---|---------------|---|----------------|---|---------------|
| a | 8号土坑全景 (北から) | b | 9号土坑土層断面 (南から) | c | 9号土坑全景 (南東から) |
| d | 10号土坑全景 (南から) | e | 11号土坑全景 (南から) | f | 12号土坑全景 (東から) |
| g | 13号土坑全景 (東から) | h | 14号土坑全景 (南から) | | |



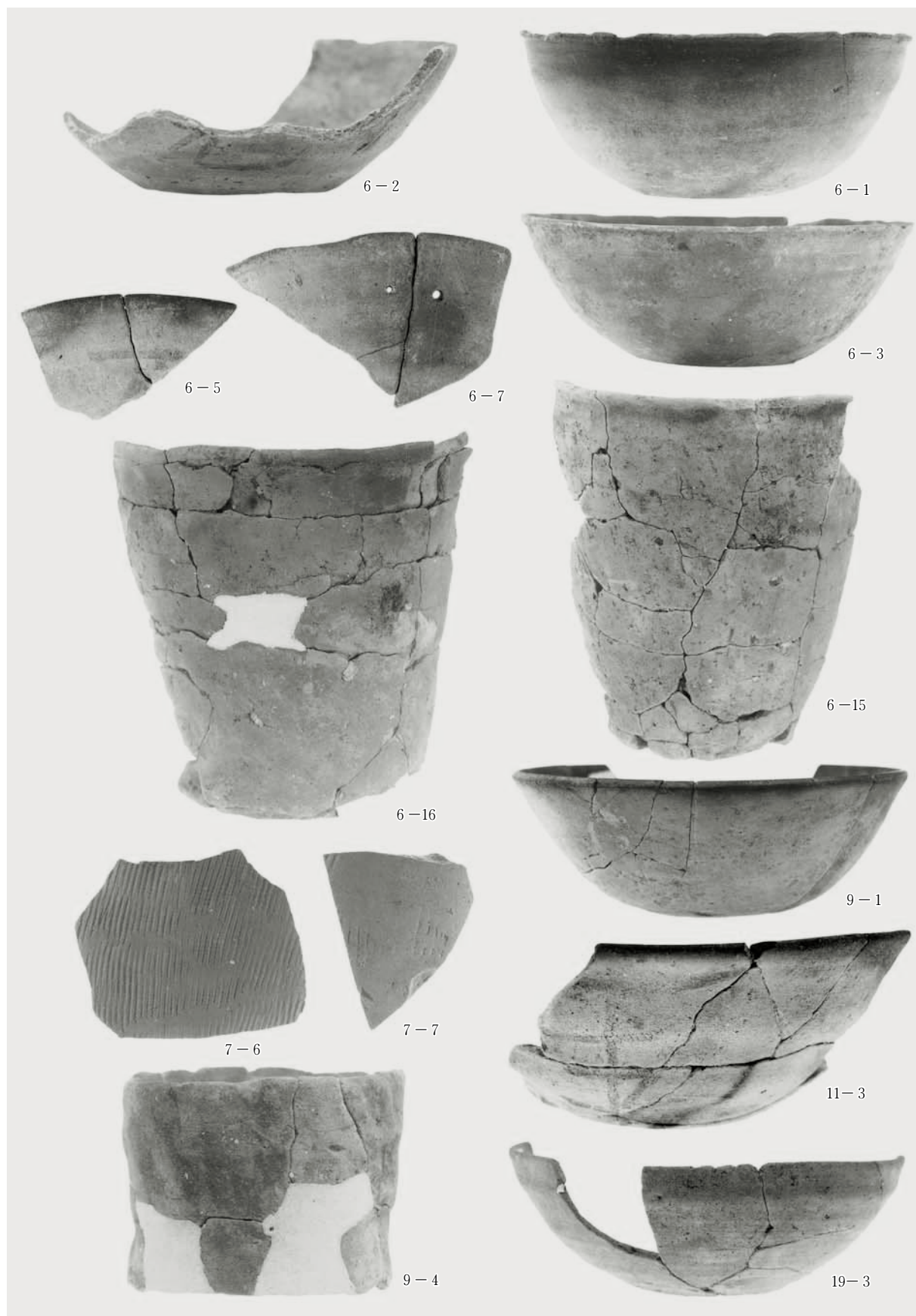
31 土坑 (3)

- a 15号土坑全景 (南東から) b 16号土坑全景 (南東から) c 17号土坑土層断面 (北から)
d 17号土坑全景 (北から) e 18号土坑全景 (南東から) f 19号土坑全景 (南から)
g 20号土坑全景 (東から) h 21号土坑全景 (北から)

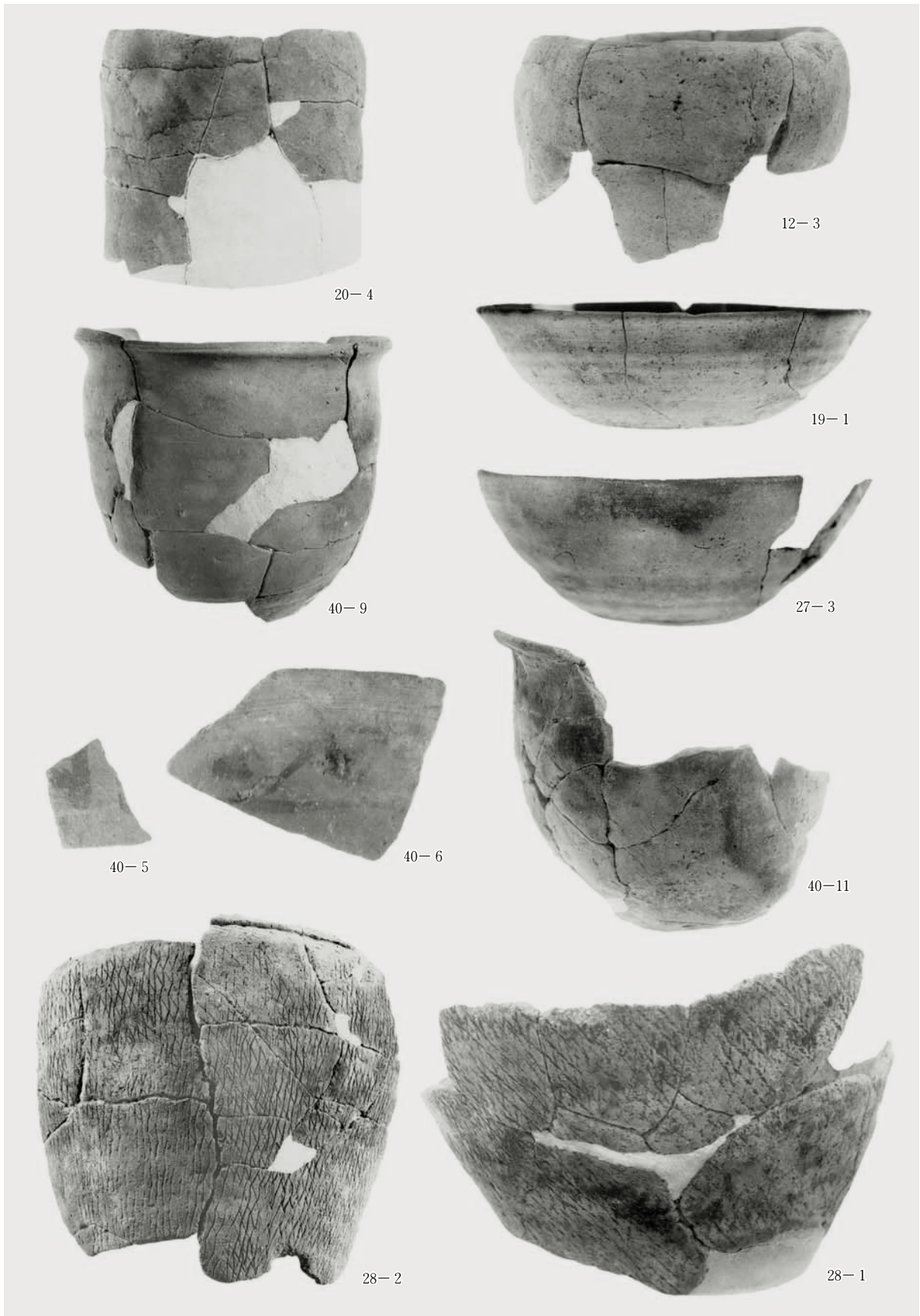


32 埋甕・遺物包含層

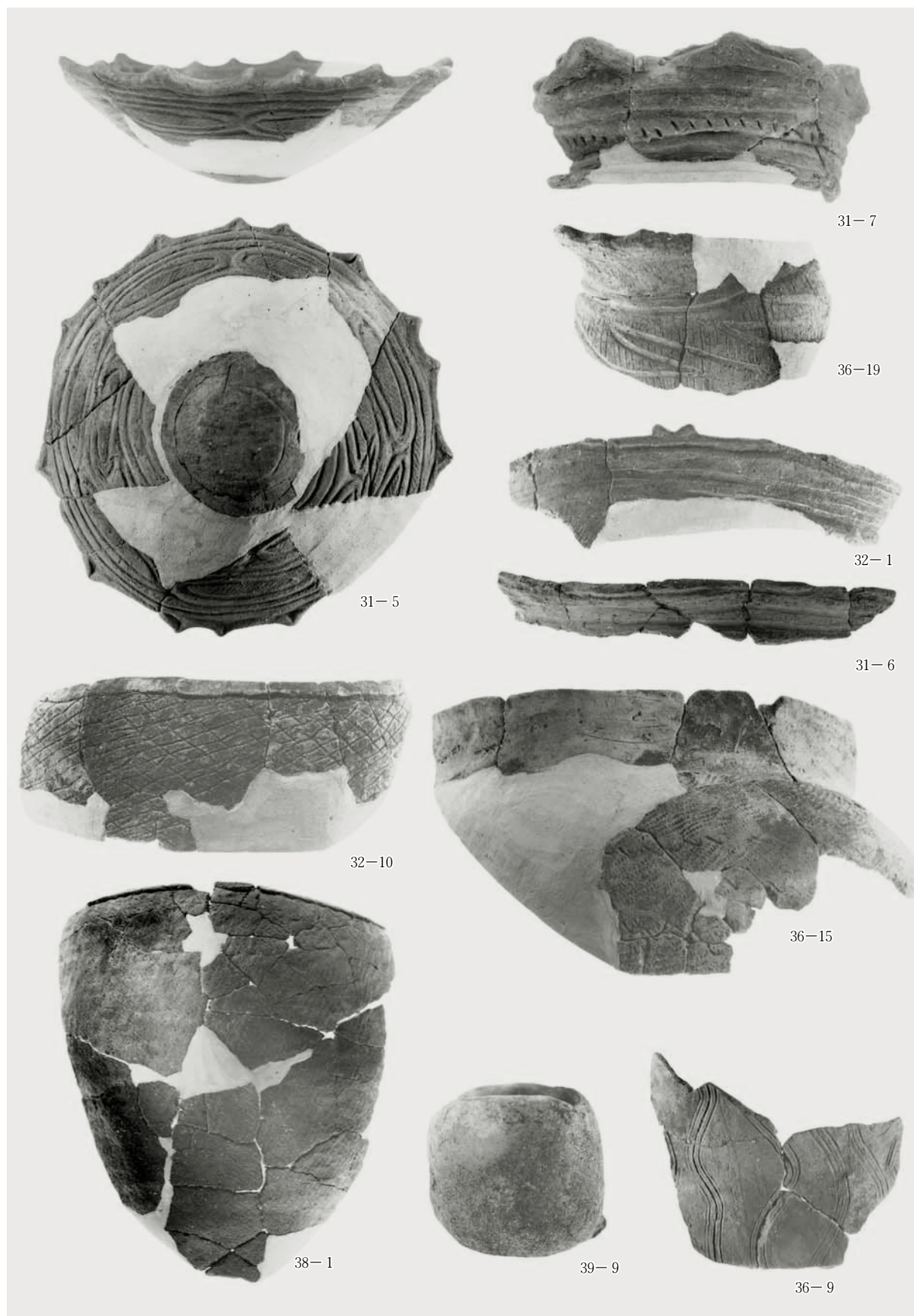
a 1号埋甕土層断面(東から) b 2号埋甕土層断面(南から) c 遺物包含層断面(東から)
d 遺物包含層遺物出土状況(北から) e 遺物包含層遺物出土状況(南から)
f 遺物包含層遺物出土状況(南から) g 遺物包含層遺物出土状況(南から)



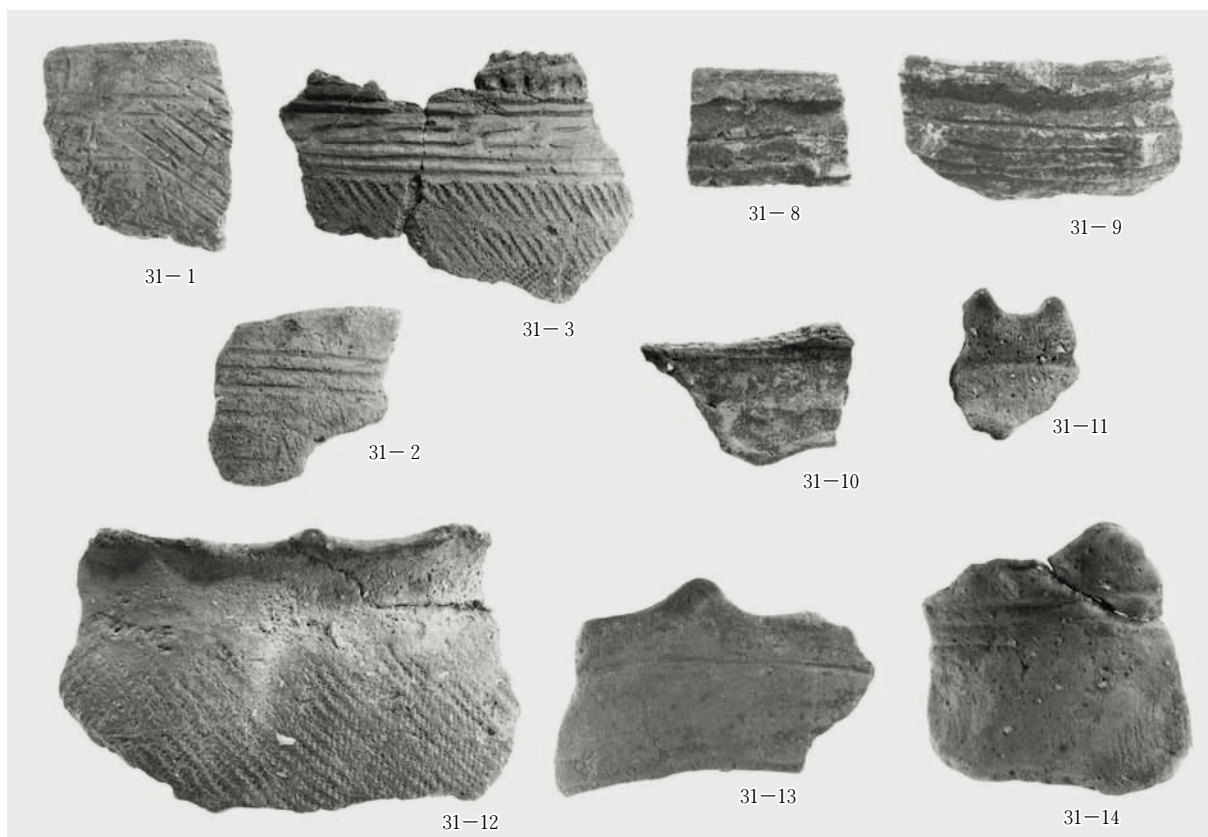
33 住居跡出土遺物



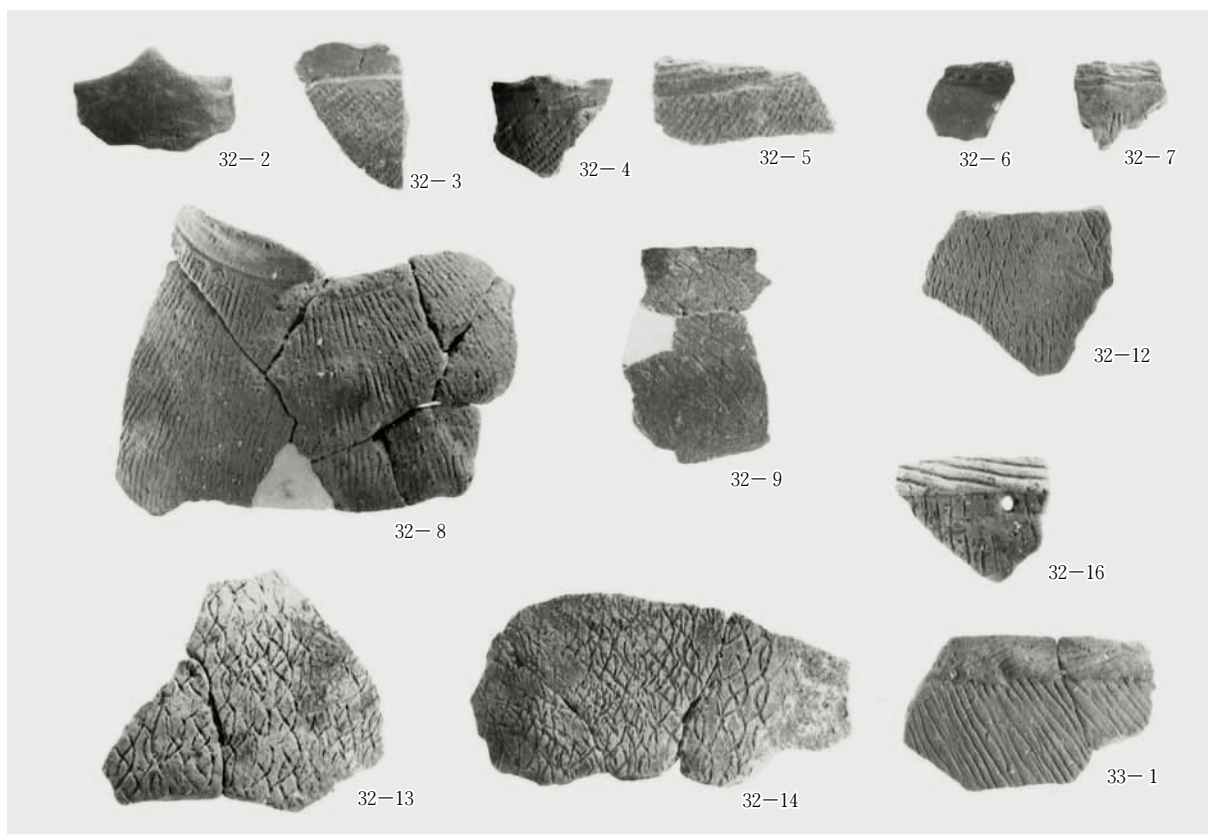
34 住居跡・土坑・埋甕・遺構外出土遺物



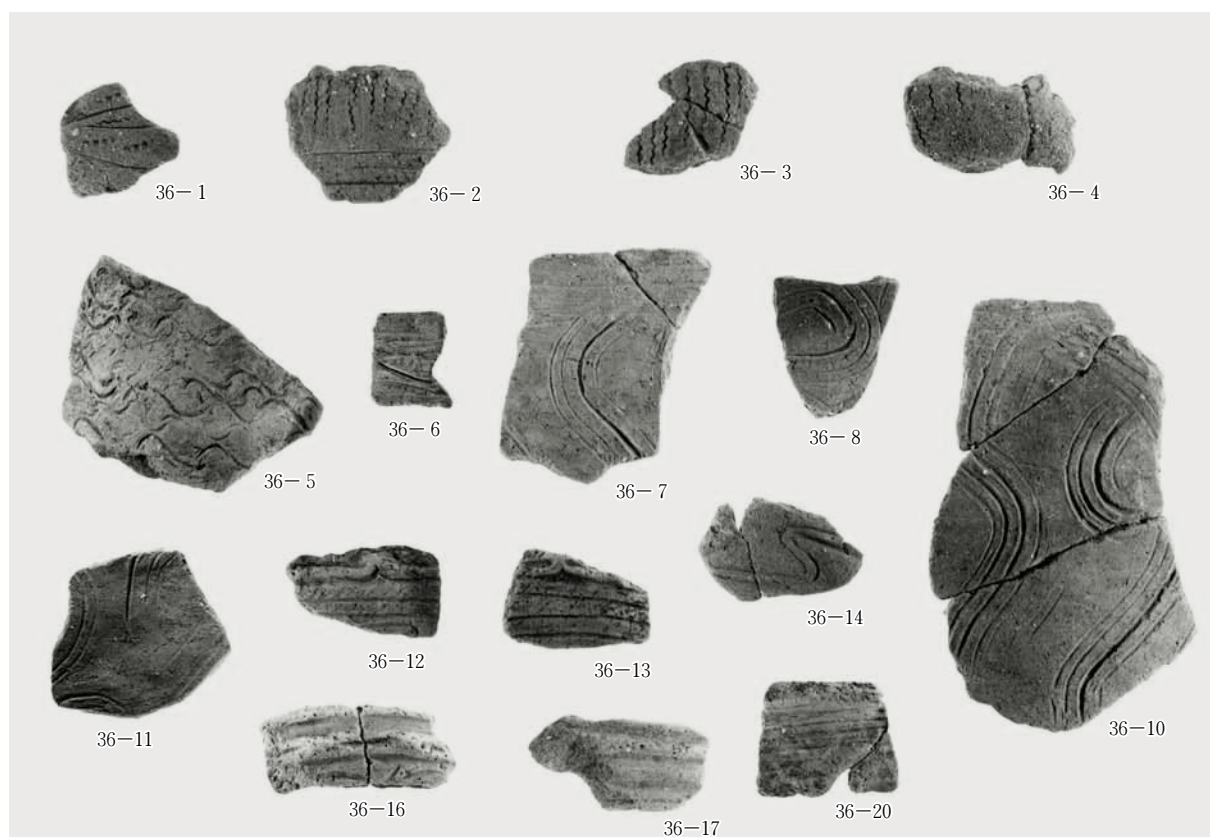
35 遺物包含層・遺構外出土遺物



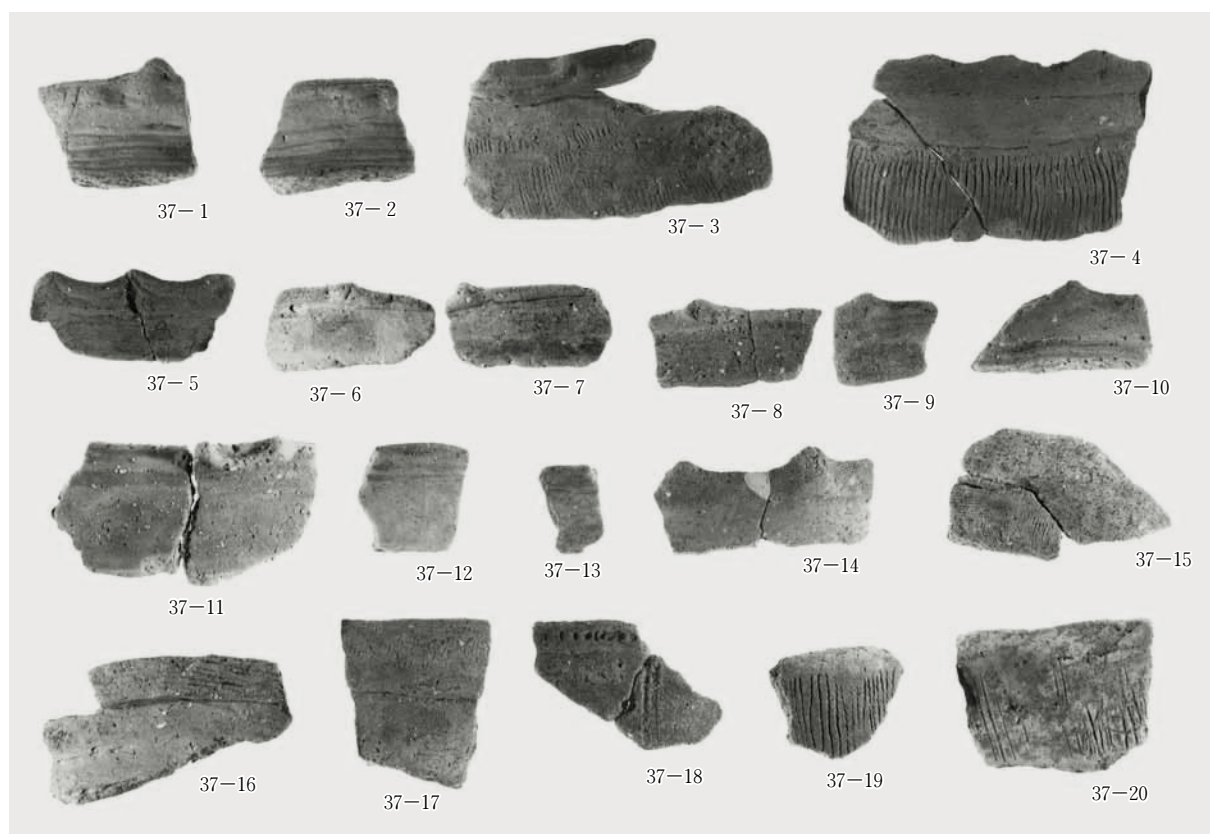
36 遺物包含層出土遺物 (1)



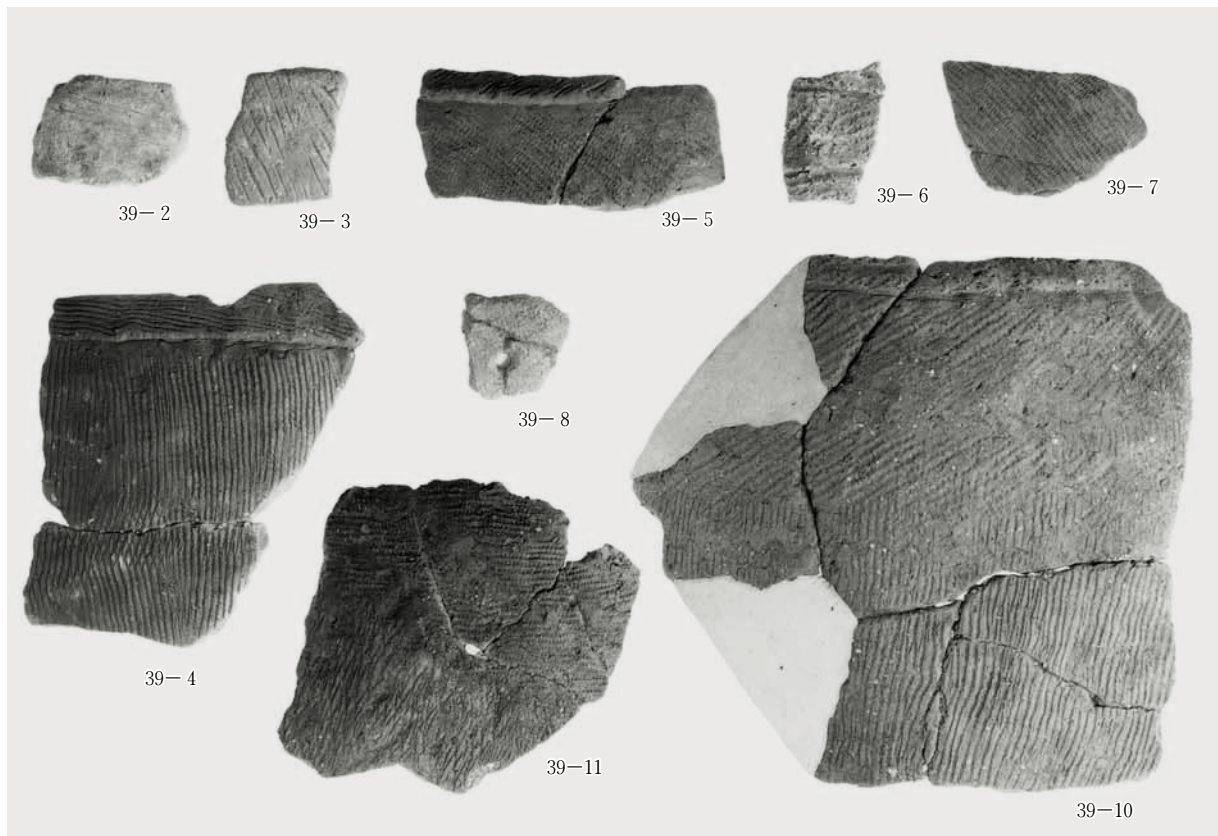
37 遺物包含層出土遺物 (2)



38 遺構外出土遺物 (1)



39 遺構外出土遺物 (2)



40 遺構外出土遺物 (3)



41 住居跡・遺物包含層・遺構外出土遺物

写 真 図 版

第2編 もとまちにし本町西C遺跡

写真目次

第2編 本町西C遺跡

1	調査前遠景	223	21	8号住居跡全景	234
2	調査区南側遺構分布状況	223	22	8号住居跡細部	234
3	調査区南側遺構分布状況	224	23	9号住居跡全景	235
4	調査区北側全景	224	24	9号住居跡細部	235
5	基本土層	225	25	10号住居跡全景	236
6	基本土層	225	26	10号住居跡細部	236
7	1号住居跡全景	226	27	土坑(1)	237
8	1号住居跡遺物出土状況	226	28	土坑(2)	238
9	1号住居跡細部	227	29	1号住居跡出土遺物	239
10	2号住居跡全景	228	30	住居跡出土遺物(1)	239
11	2号住居跡細部	228	31	住居跡出土遺物(2)	240
12	3号住居跡全景	229	32	9号住居跡出土遺物	240
13	3号住居跡細部	229	33	4・9号住居跡出土遺物	241
14	4号住居跡全景	230	34	7号住居跡出土遺物	241
15	4号住居跡細部	230	35	遺構外出土遺物(1)	242
16	5号住居跡全景	231	36	遺構外出土遺物(2)	242
17	6号住居跡全景	231	37	遺構外出土遺物(3)	243
18	7号住居跡全景	232	38	遺構外出土遺物(4)	243
19	7号住居跡遺物出土状況	232	39	遺構外出土遺物(5)	244
20	7号住居跡細部	233	40	遺構外出土遺物(6)	244



1 調査前遠景（北から）



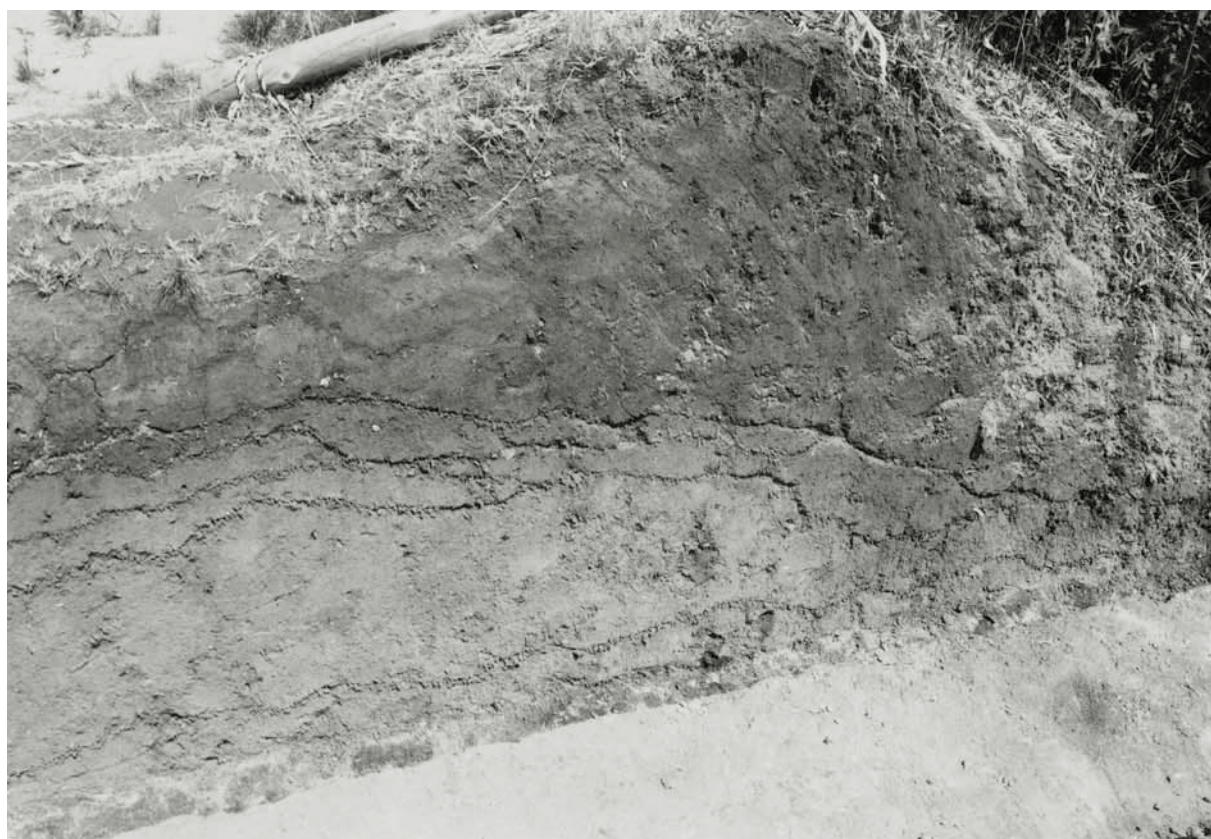
2 調査区南側遺構分布状況（北から）



3 調査区南側遺構分布状況（北西から）



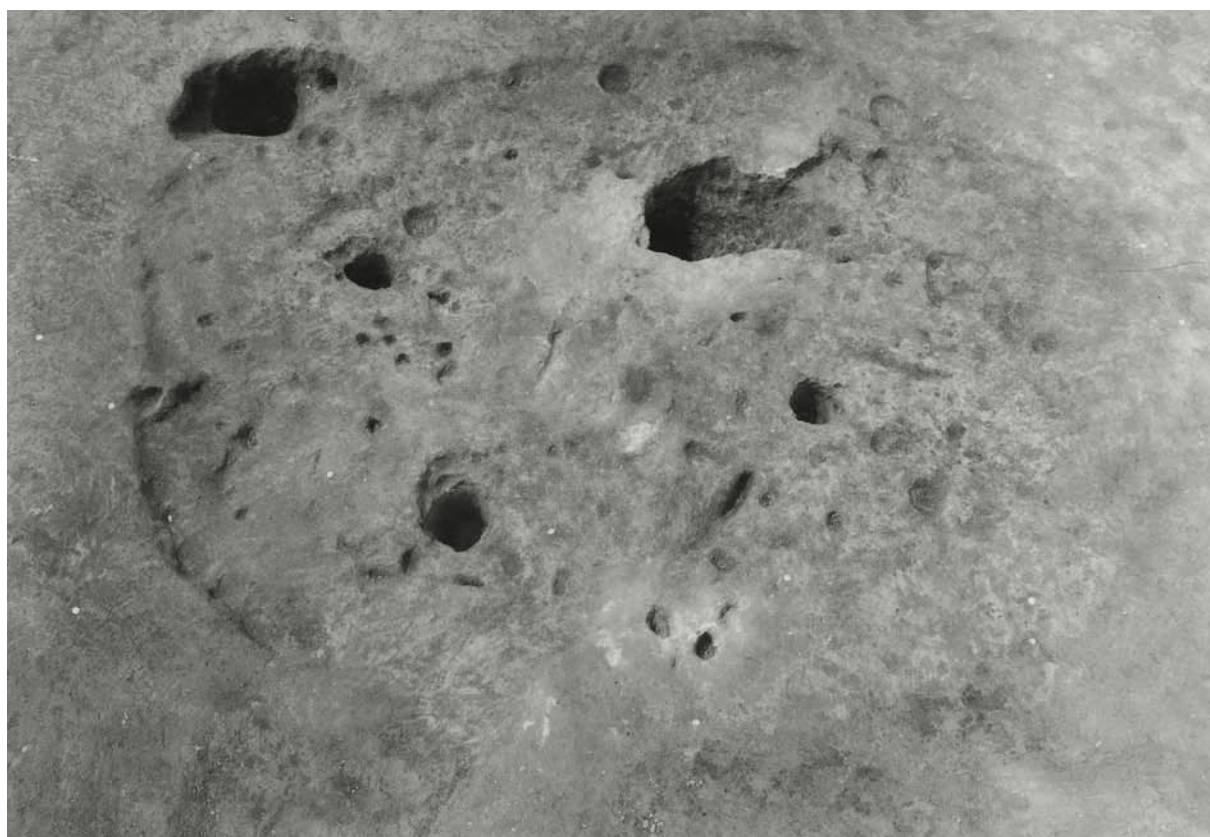
4 調査区北側全景（南から）



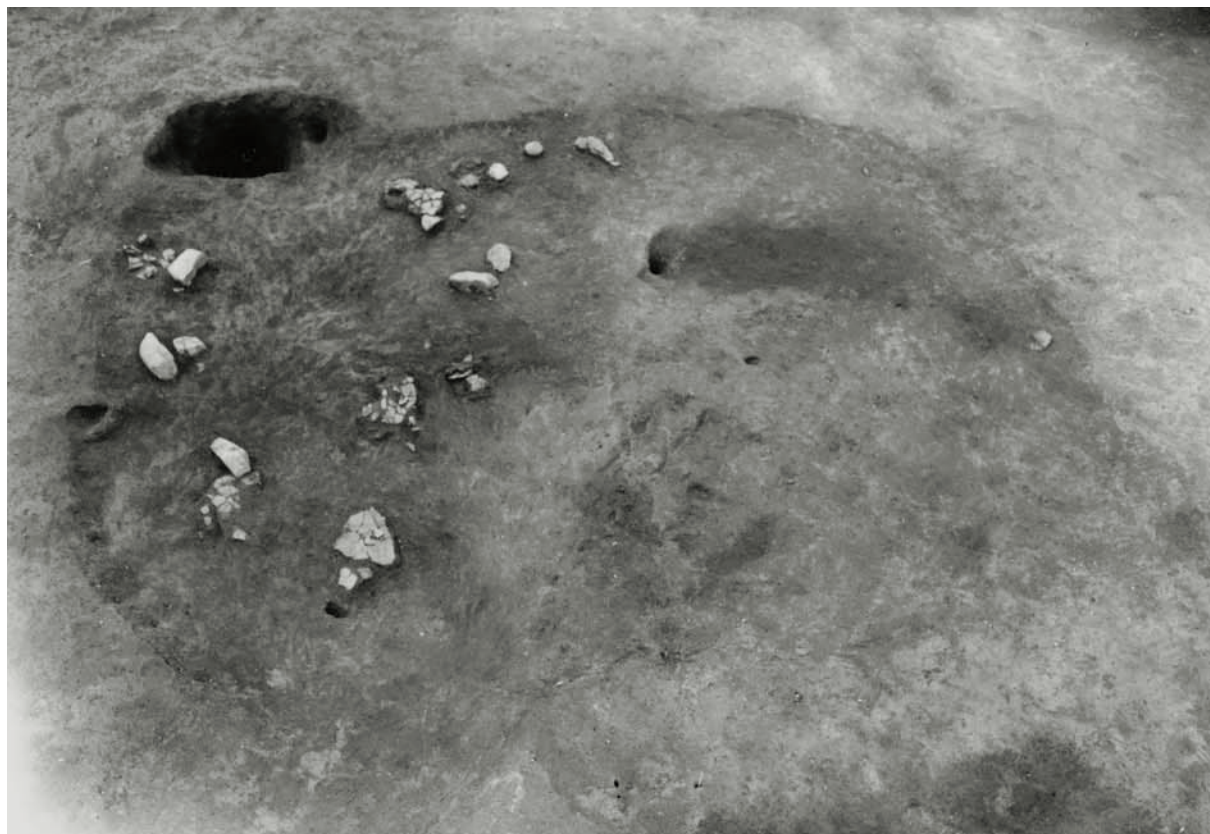
5 基本土層（北西から）



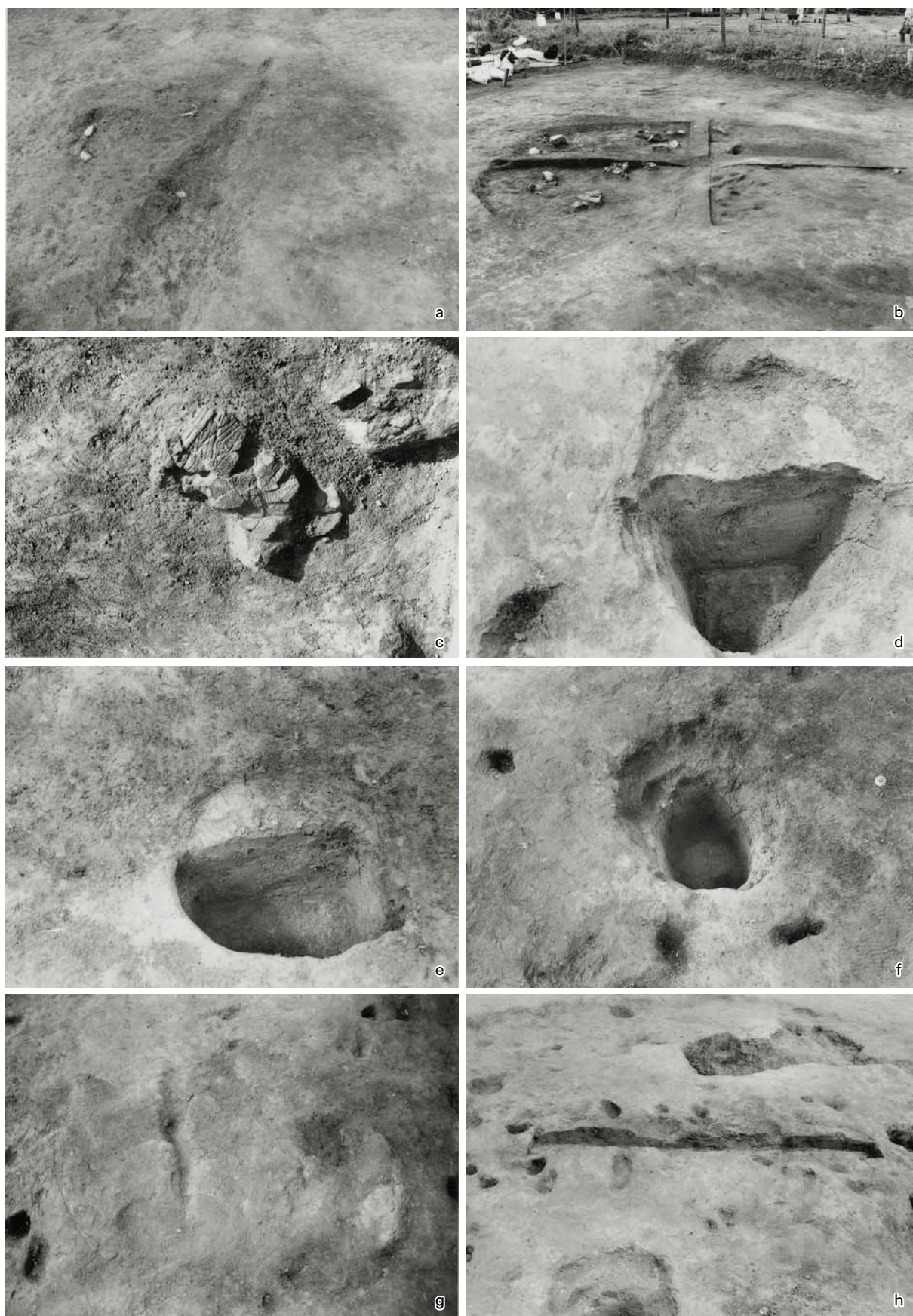
6 基本土層（西から）



7 1号住居跡全景（南から）



8 1号住居跡遺物出土状況（南から）



9 1号住居跡細部

- | | | |
|----------------|----------------|----------------|
| a 検出状況 (南から) | b 東西土層断面 (南から) | c 遺物出土状況 (北から) |
| d P 4 断面 (南から) | e P 7 断面 (南から) | f P 4 全景 (南から) |
| g 炉跡全景 (南から) | h 炉跡断面 (南から) | |



10 2号住居跡全景（南から）



11 2号住居跡細部

a 検出状況（南東から） b 南北土層断面（東から）
c P 2断面（東から） d 炉跡断面（南から）



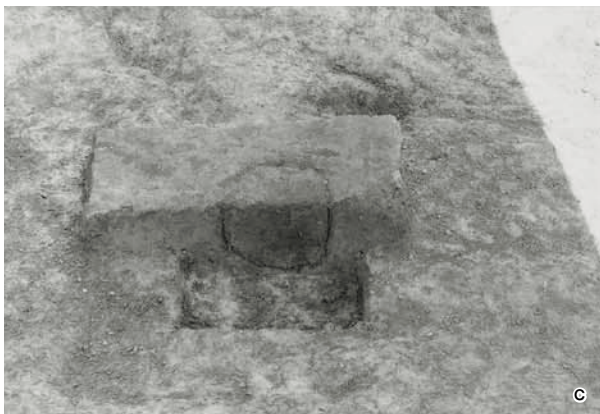
12 3号住居跡全景（北から）



a



b



c



d

13 3号住居跡細部

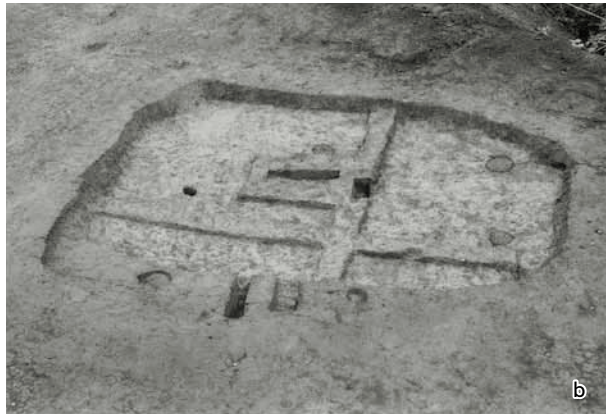
a 南北土層断面（東から） b 南北土層断面近景（東から）
c P1断面（南から） d P2断面（東から）



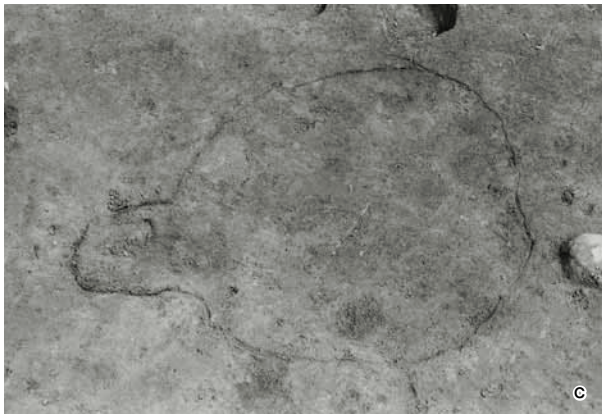
14 4号住居跡全景（北から）



a



b



c



d

15 4号住居跡細部

a 東西土層断面（南から） b 床面断面状況（北から）
c 炉跡全景（南から） d 炉跡断面（南から）



16 5号住居跡全景（南から）



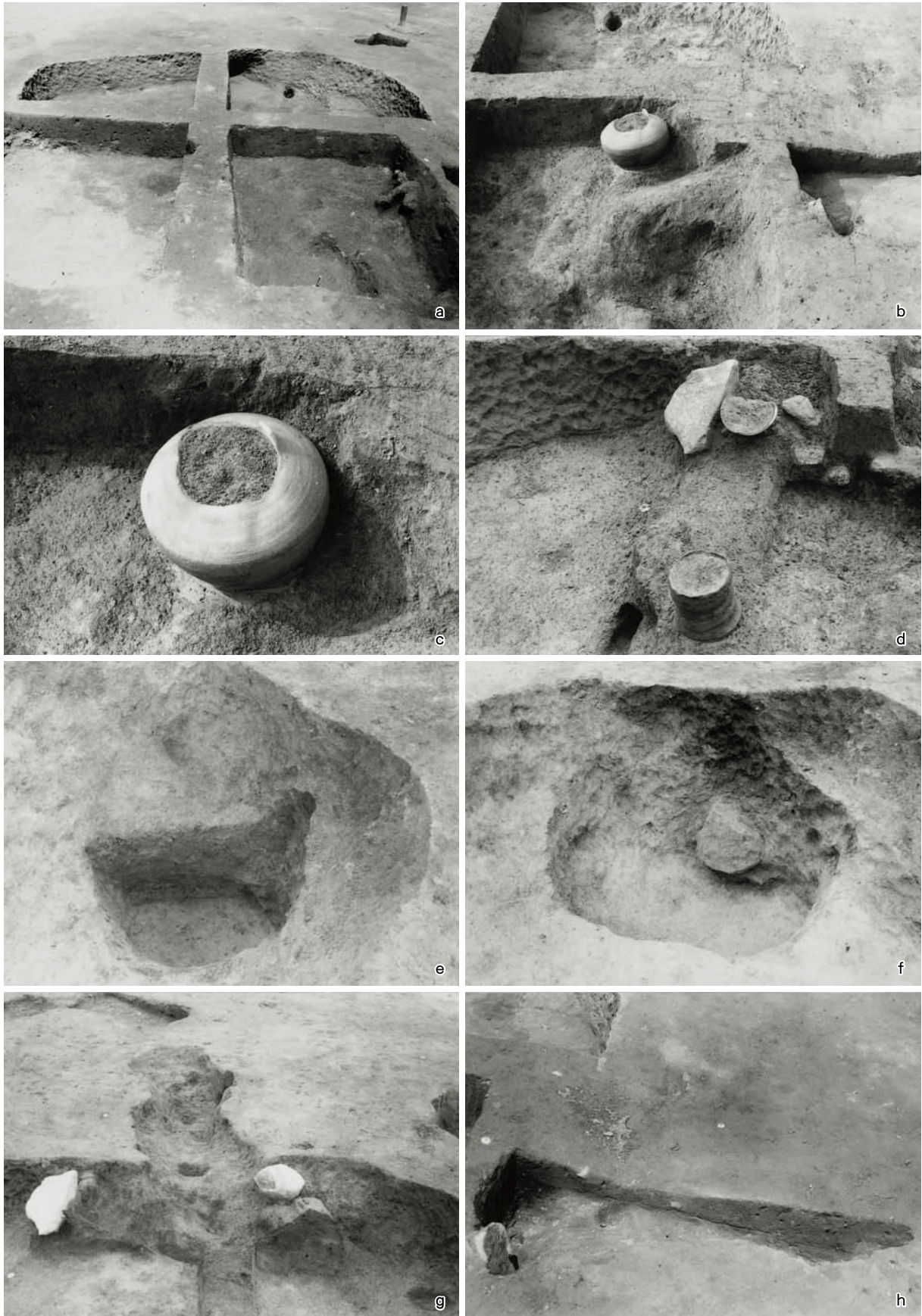
17 6号住居跡全景（東から）



18 7号住居跡全景（西から）



19 7号住居跡遺物出土状況



20 7号住居跡細部

- a 東西土層断面 (南から) b 遺物出土状況 (南から) c 遺物出土状況 (南から)
d 遺物出土状況 (西から) e P1断面 (西から) f P1全景 (北西から)
g カマド全景 (西から) h カマド断面 (南から)



21 8号住居跡全景（南から）



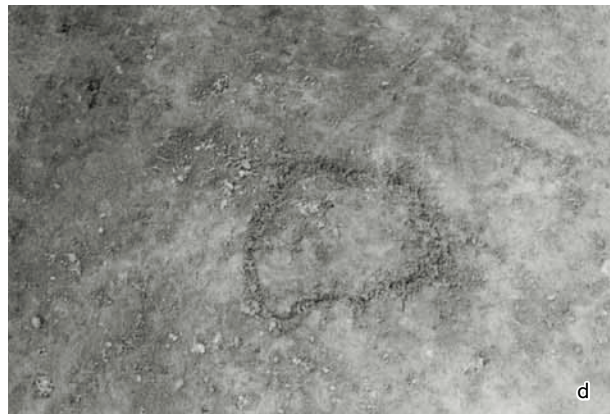
a



b



c



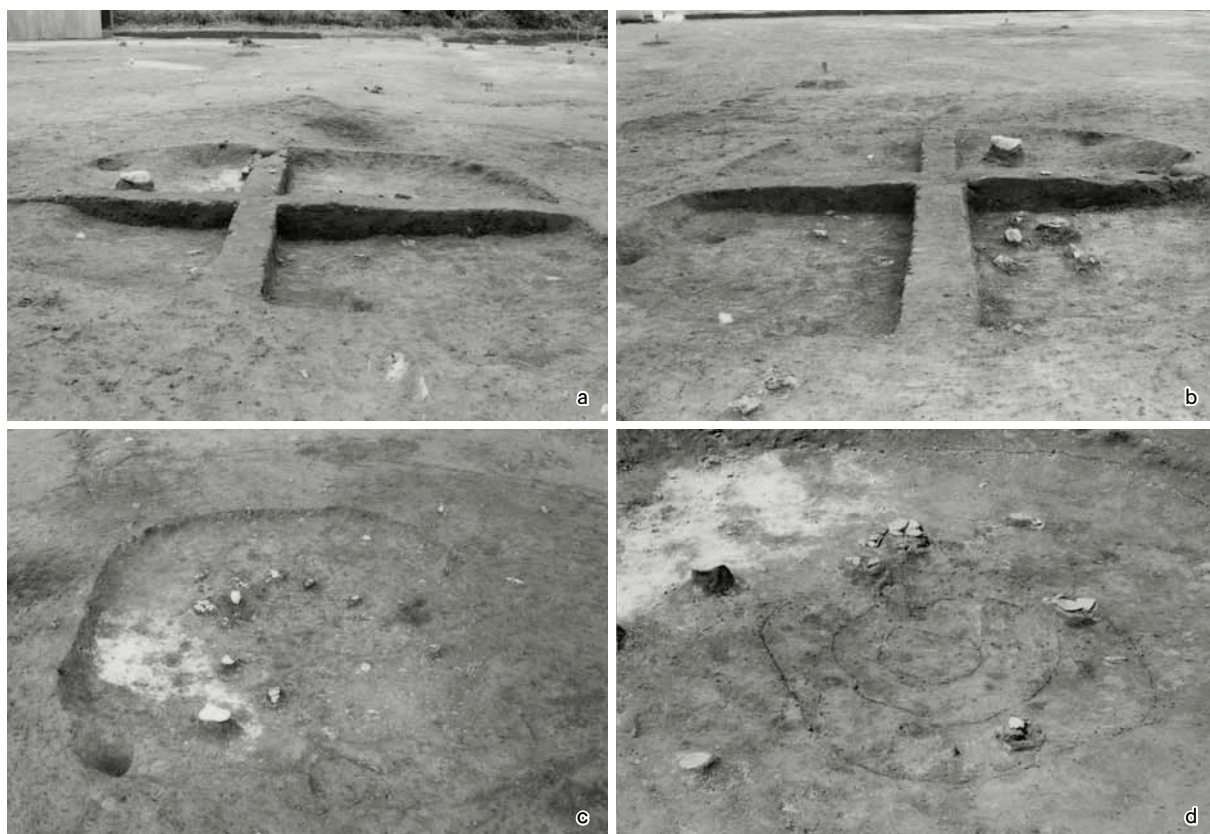
d

22 8号住居跡細部

a 東西土層断面（南から） b 遺物出土状況（東から）
c P2断面（南から） d 炉跡全景（南から）

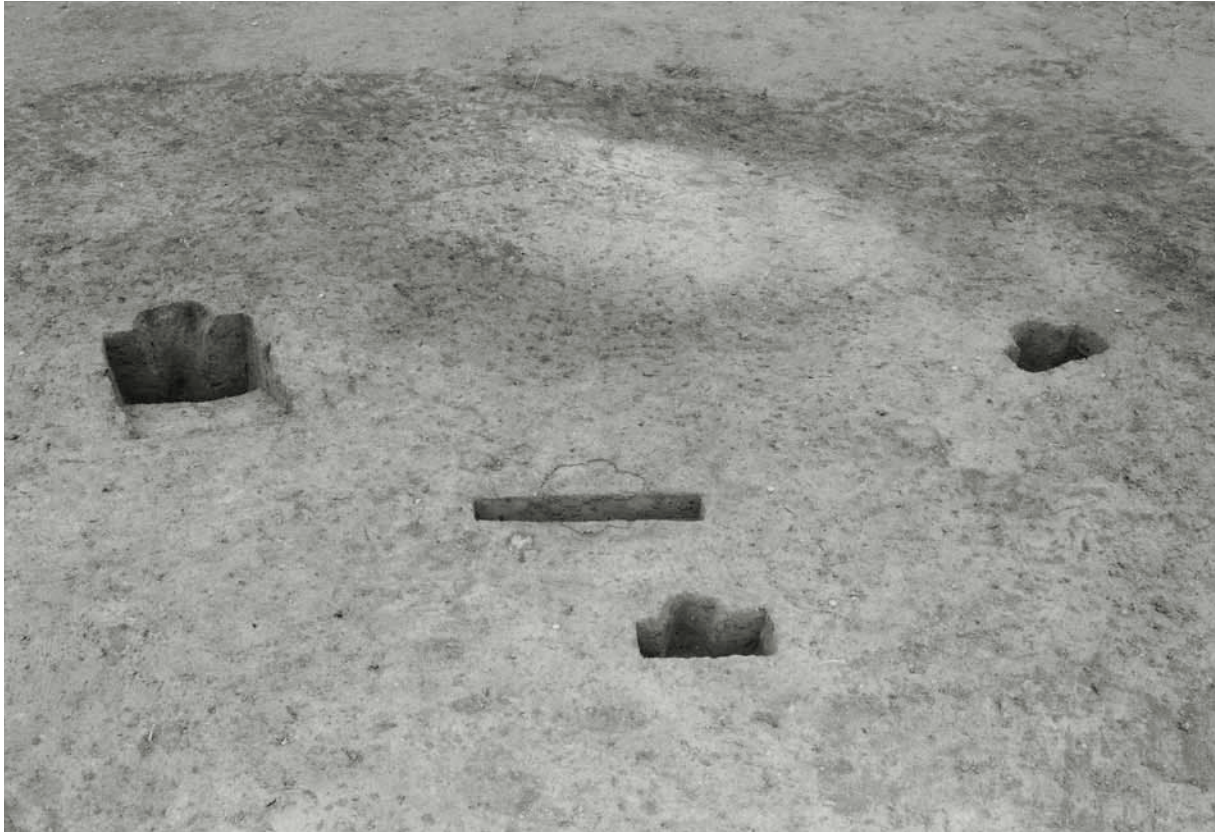


23 9号住居跡全景（南から）



24 9号住居跡細部

a 南北土層断面（南東から） b 東西土層断面（北西から）
c 遺物出土状況（南西から） d 中面中央部窪み全景（東から）



25 10号住居跡全景（南から）



a



b



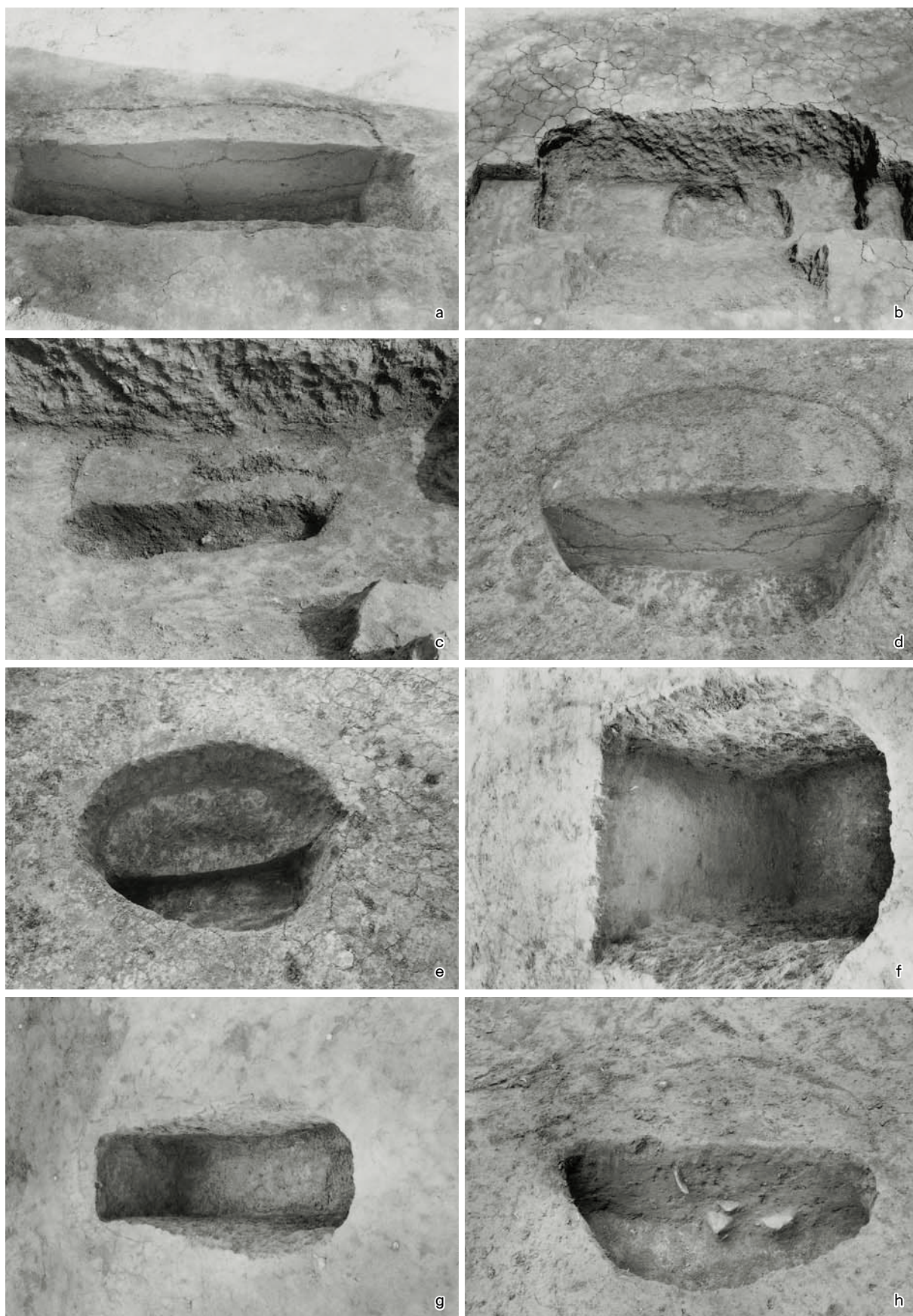
c



d

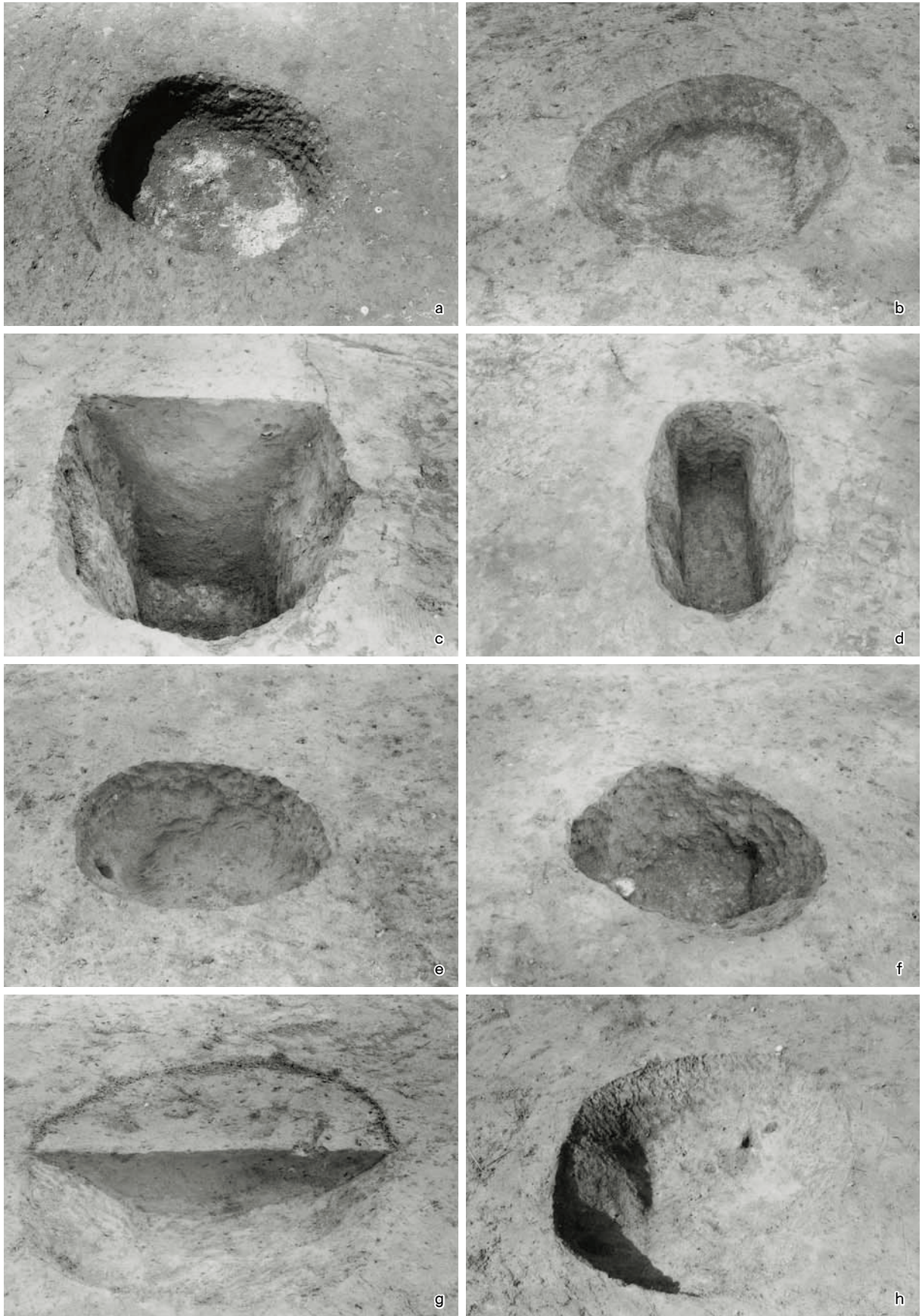
26 10号住居跡細部

a 炉跡断面（南から） b P1断面（南から）
c P2断面（南から） d P3断面（南から）



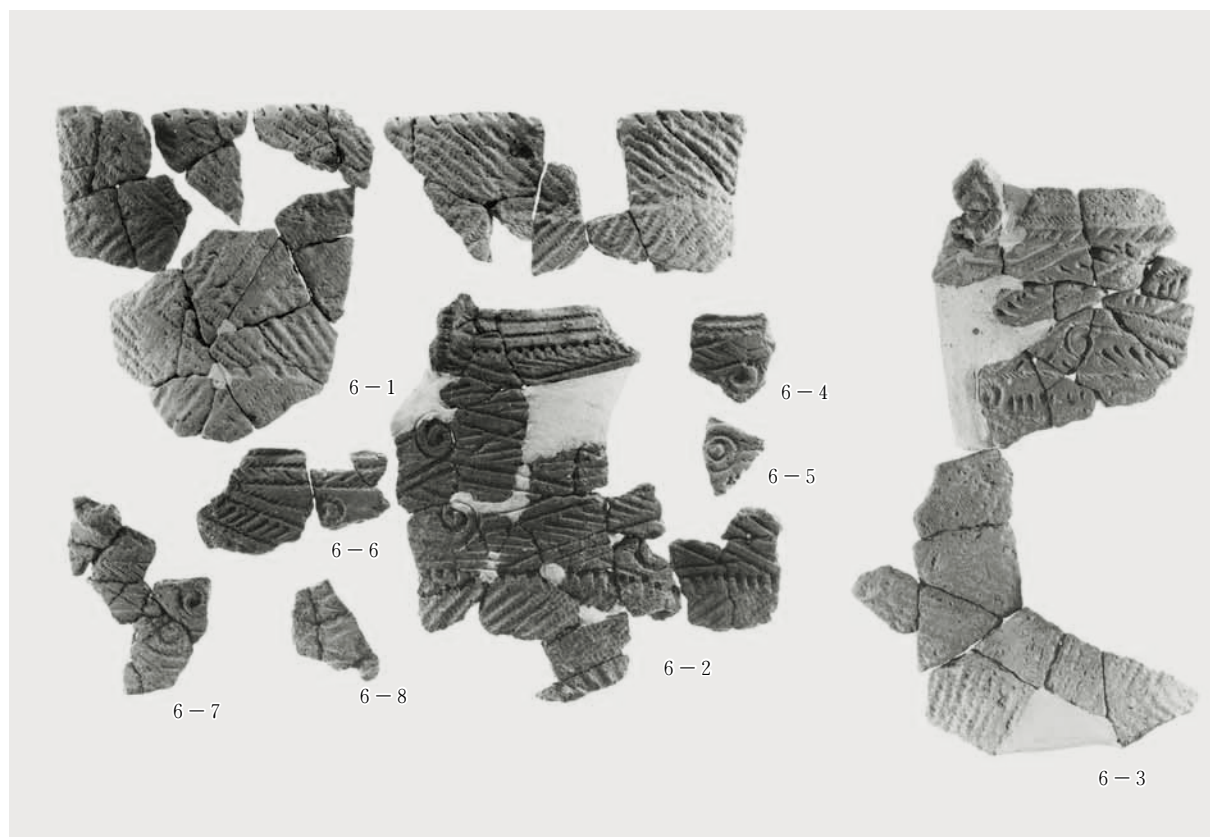
27 土坑 (1)

- | | | | | | |
|---|-----------------|---|----------------|---|-----------------|
| a | 1号土坑土層断面 (南から) | b | 1号土坑全景 (南から) | c | 1号土坑ビット断面 (南から) |
| d | 2号土坑土層断面 (南東から) | e | 2号土坑全景 (南東から) | f | 3号土坑土層断面 (東から) |
| g | 3号土坑全景 (東から) | h | 4号土坑土層断面 (南から) | | |

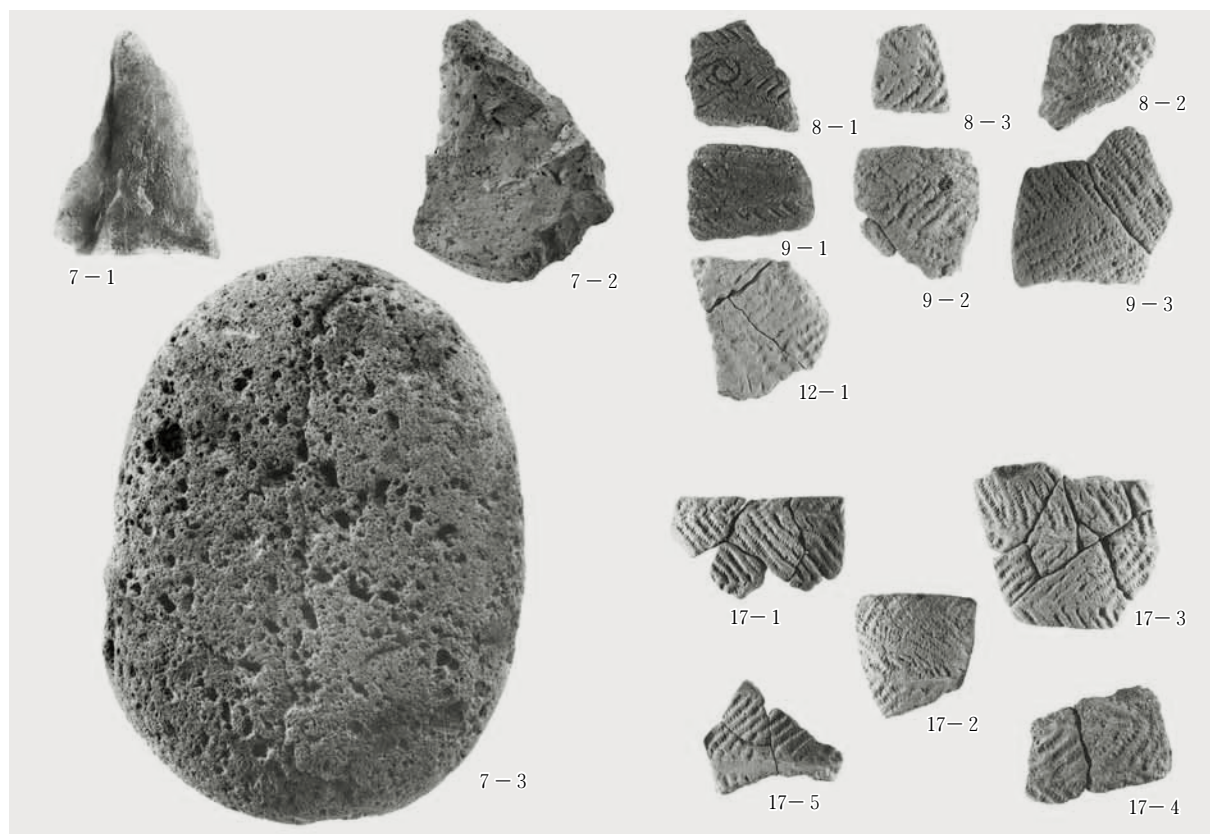


28 土坑 (2)

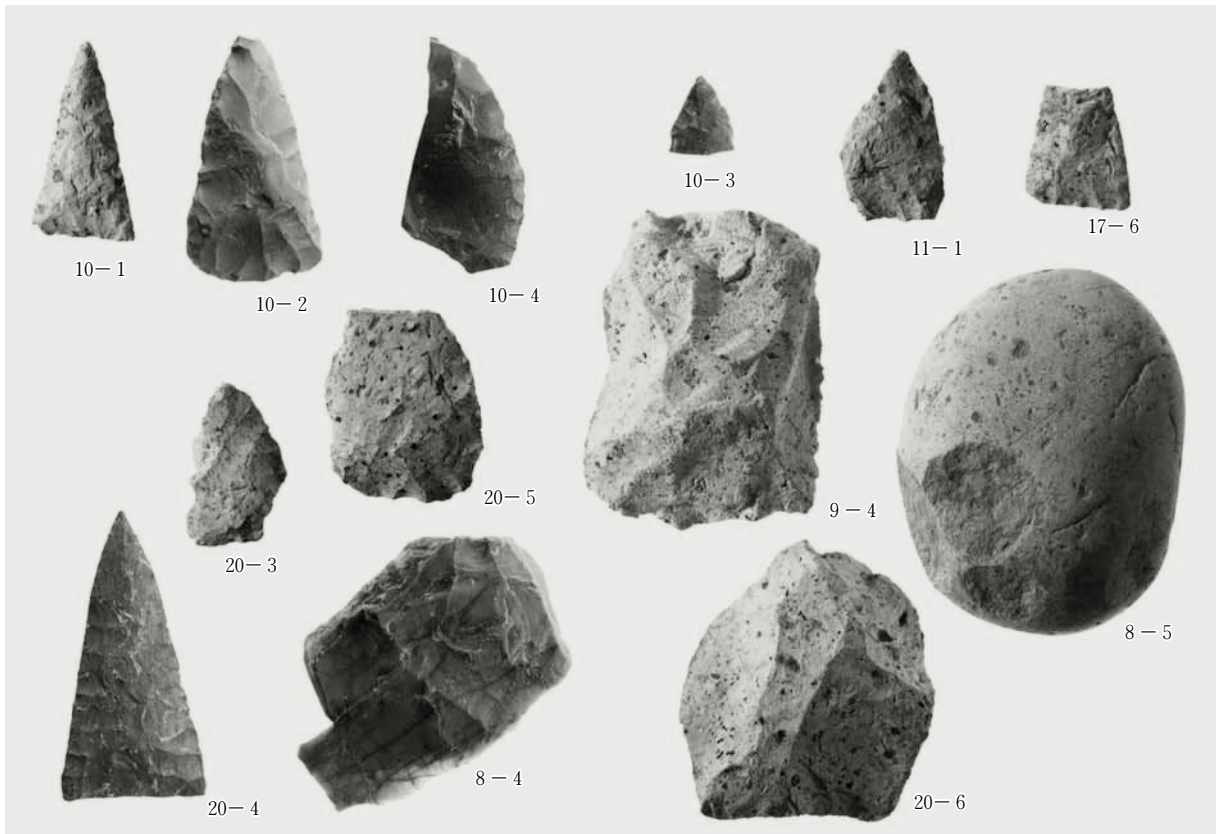
- | | | | | | |
|---|----------------|---|--------------|---|----------------|
| a | 4号土坑全景 (南から) | b | 5号土坑全景 (南から) | c | 6号土坑土層断面 (東から) |
| d | 6号土坑全景 (東から) | e | 7号土坑全景 (南から) | f | 8号土坑全景 (東から) |
| g | 9号土坑土層断面 (南から) | h | 9号土坑全景 (南から) | | |



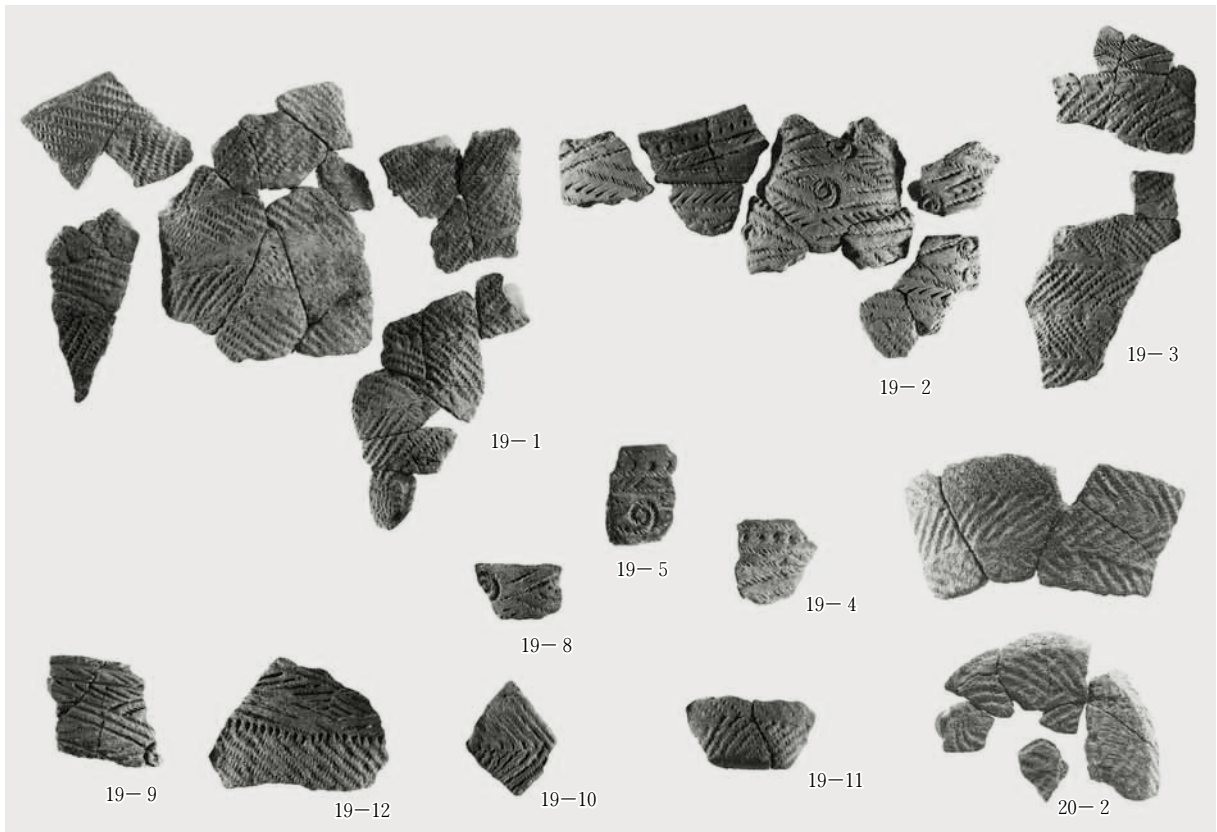
29 1号住居跡出土遺物



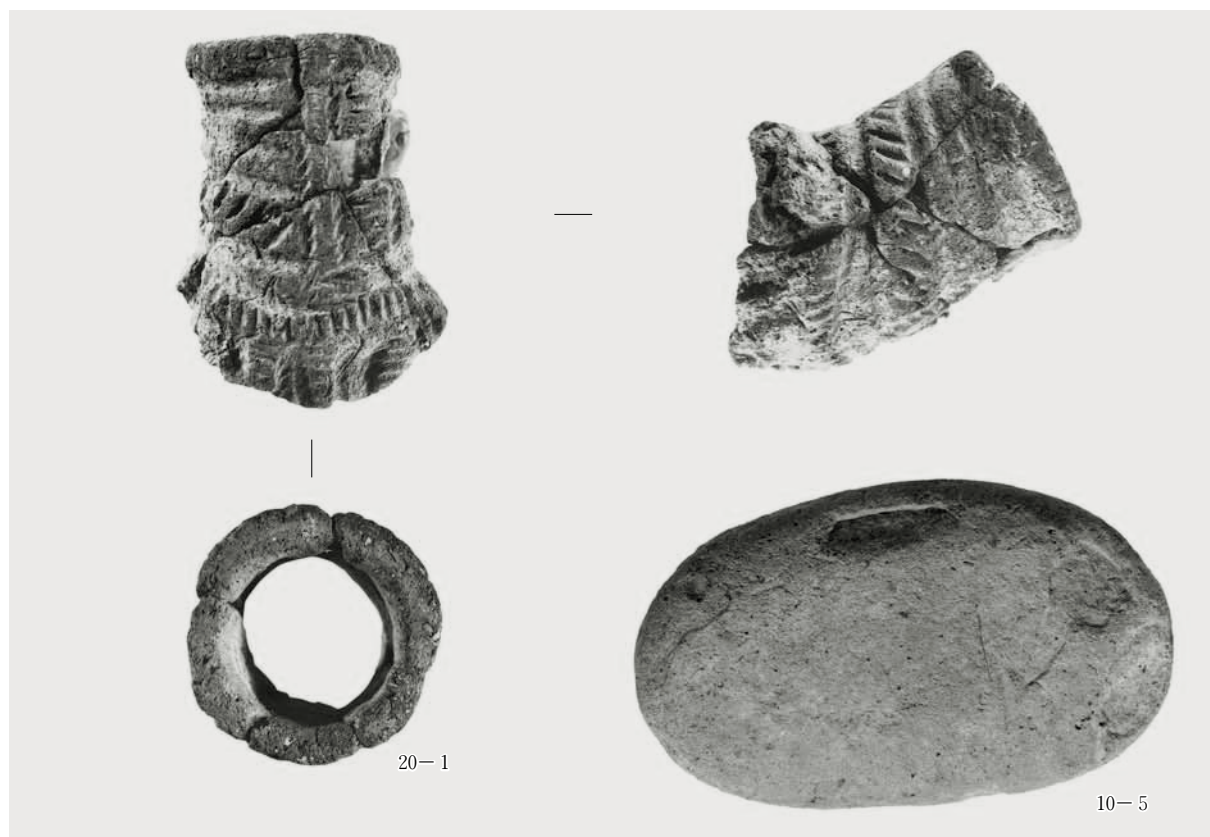
30 住居跡出土遺物 (1)



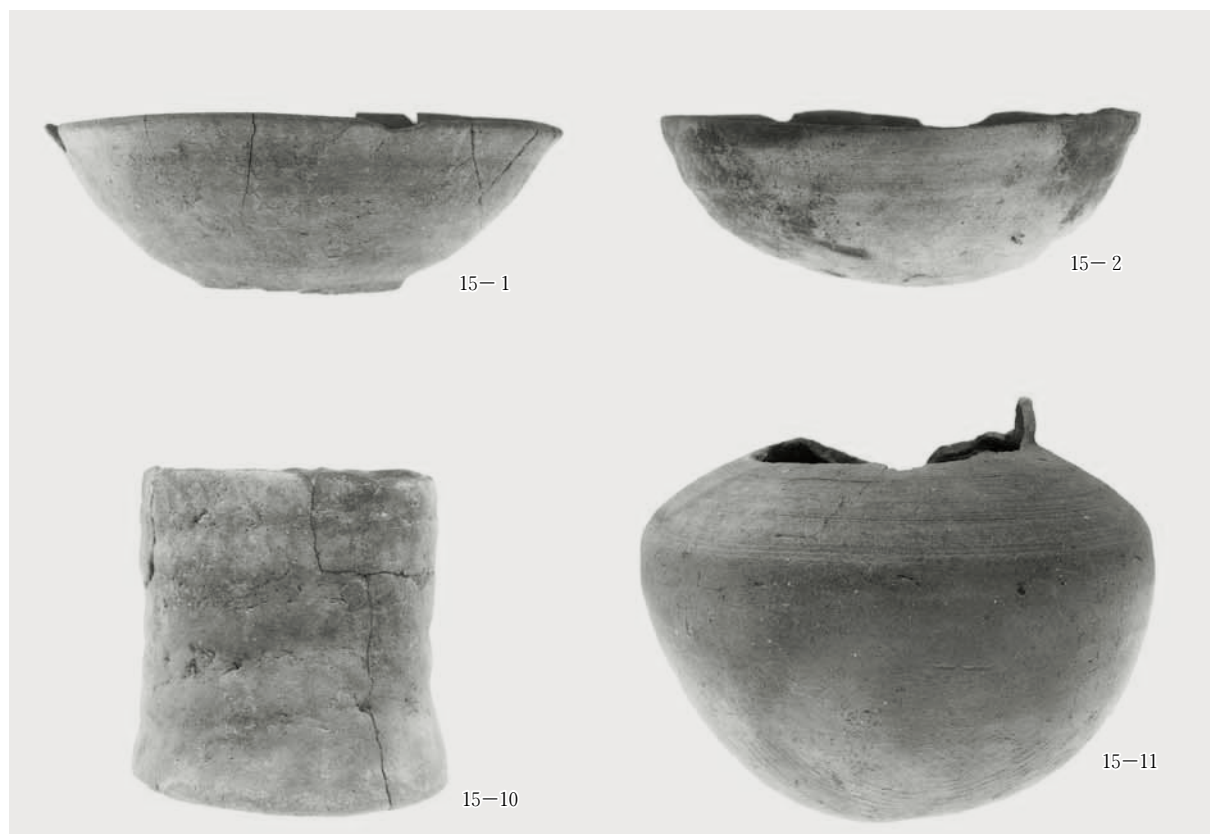
31 住居跡出土遺物 (2)



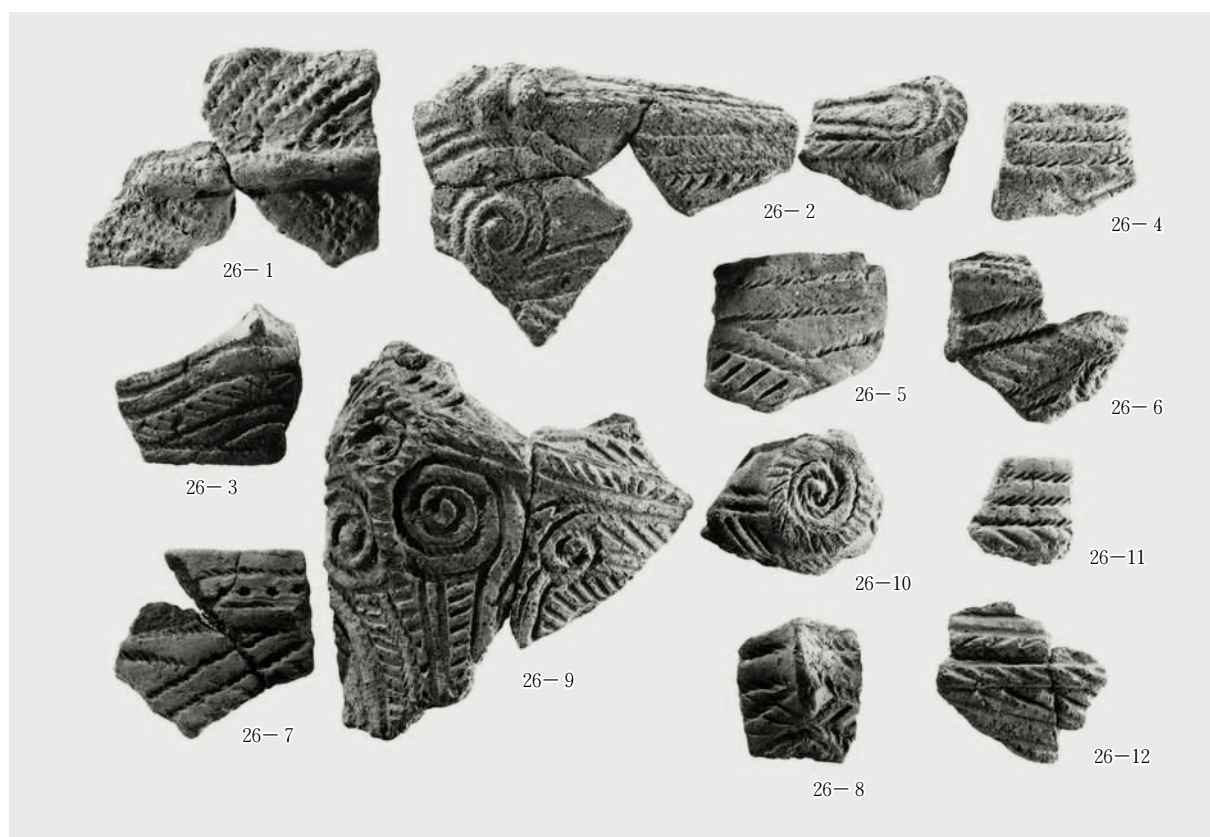
32 9号住居跡出土遺物



33 4·9号住居跡出土遺物



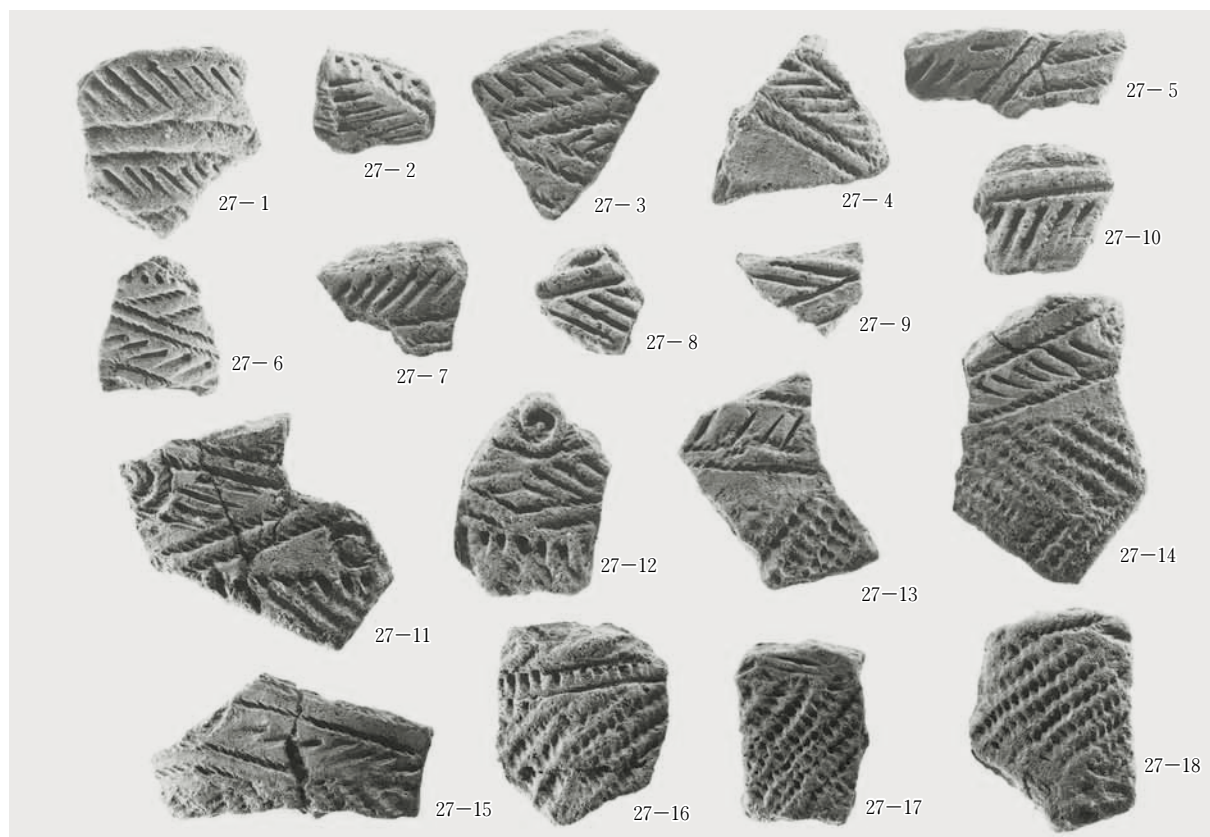
34 7号住居跡出土遺物



35 遺構外出土遺物 (1)



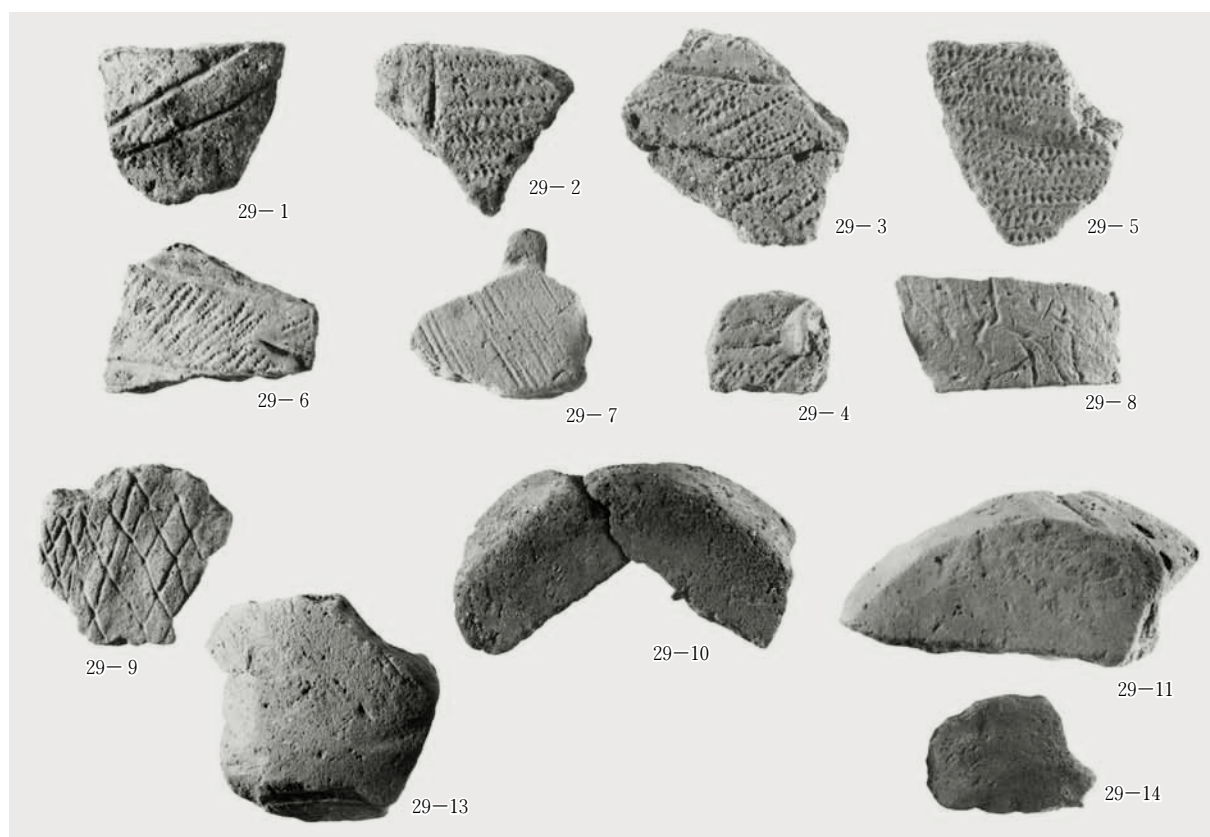
36 遺構外出土遺物 (2)



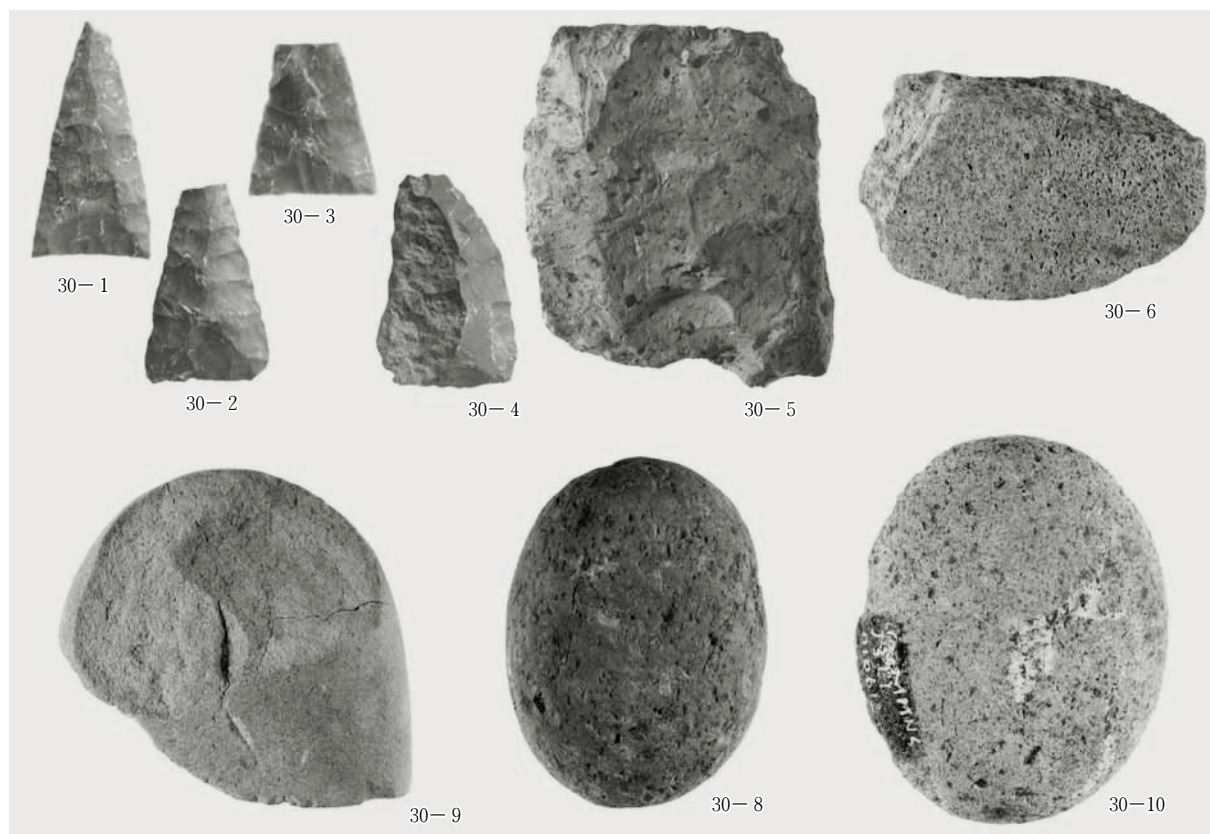
37 遺構外出土遺物 (3)



38 遺構外出土遺物 (4)



39 遺構外出土遺物 (5)



40 遺構外出土遺物 (6)

写 真 図 版

第3編 もとまちにし本町西D遺跡

写真目次

第3編 本町西D遺跡

1 調査前全景	247	7 土坑(1)	250
2 調査前全景	247	8 土坑(2)	251
3 全景	248	9 土坑・遺構外出土遺物(1)	252
4 全景	248	10 遺構外出土遺物(2)	252
5 作業風景	249	11 遺構外出土遺物(3)	253
6 基本土層	249	12 遺構外出土遺物(4)	254



1 調査前全景（南から）



2 調査前全景（北から）



3 全景（南から）



4 全景（北から）

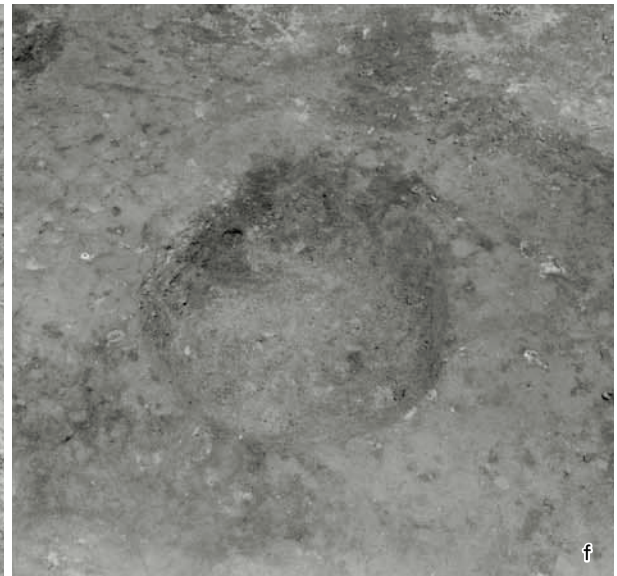


5 作業風景（北西から）



6 基本土層

a 南東部基本土層（西から）
b 北西部基本土層（東から）



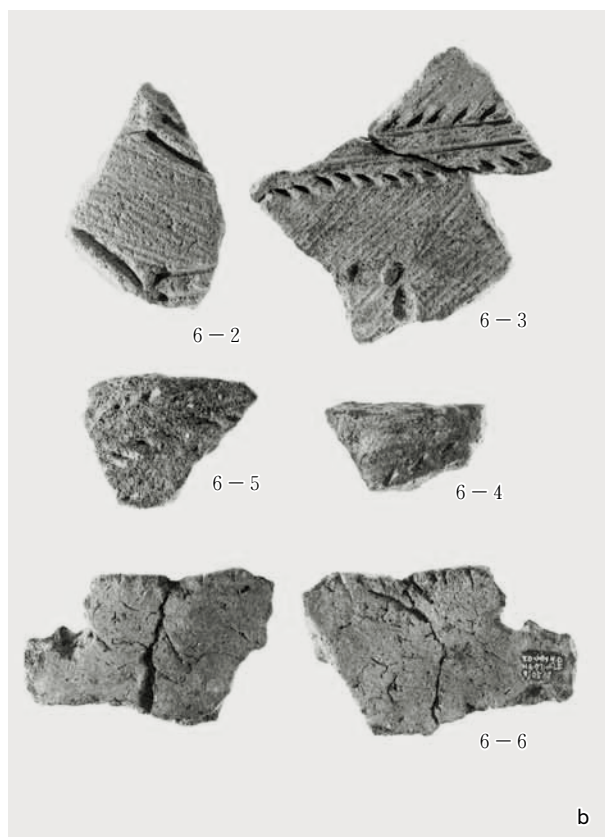
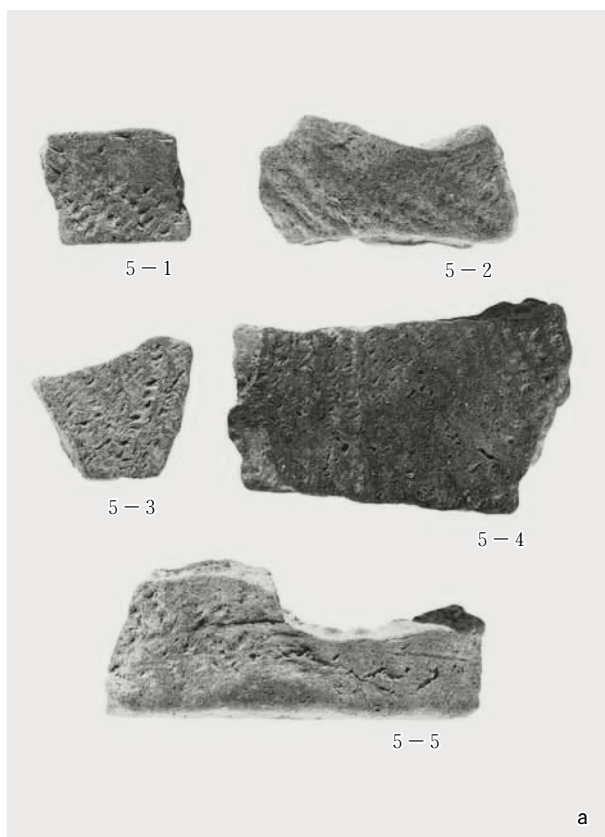
7 土坑(1)

- a 1号土坑土層断面(南から)
- b 1号土坑全景(南から)
- c 2号土坑土層断面(東から)
- d 2号土坑遺物出土状況(東から)
- e 3号土坑土層断面(南から)
- f 3号土坑全景(南東から)



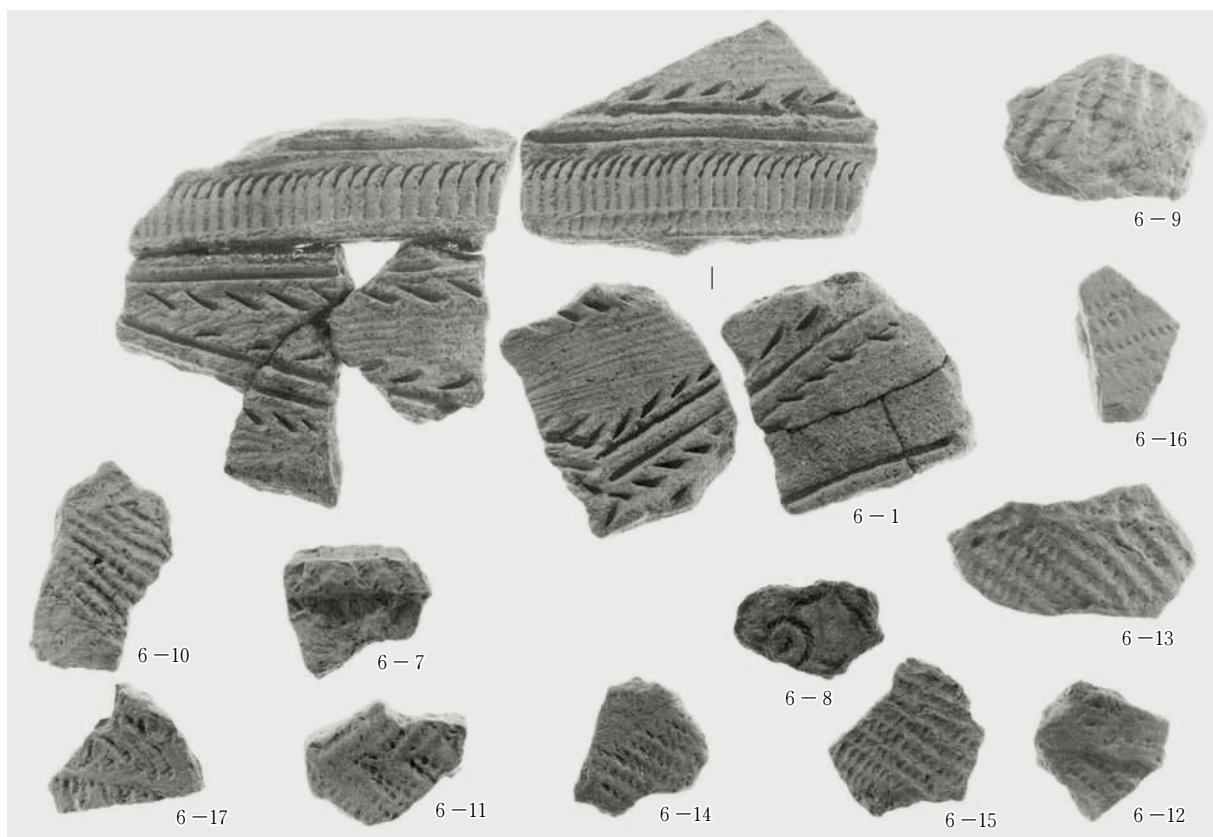
8 土坑 (2)

- a 4号土坑検出 (南東から) b 4号土坑全景 (南から)
c 5号土坑土層断面 (南から) d 5号土坑全景 (南から)
e 6号土坑土層断面 (南から) f 6号土坑全景 (南から)

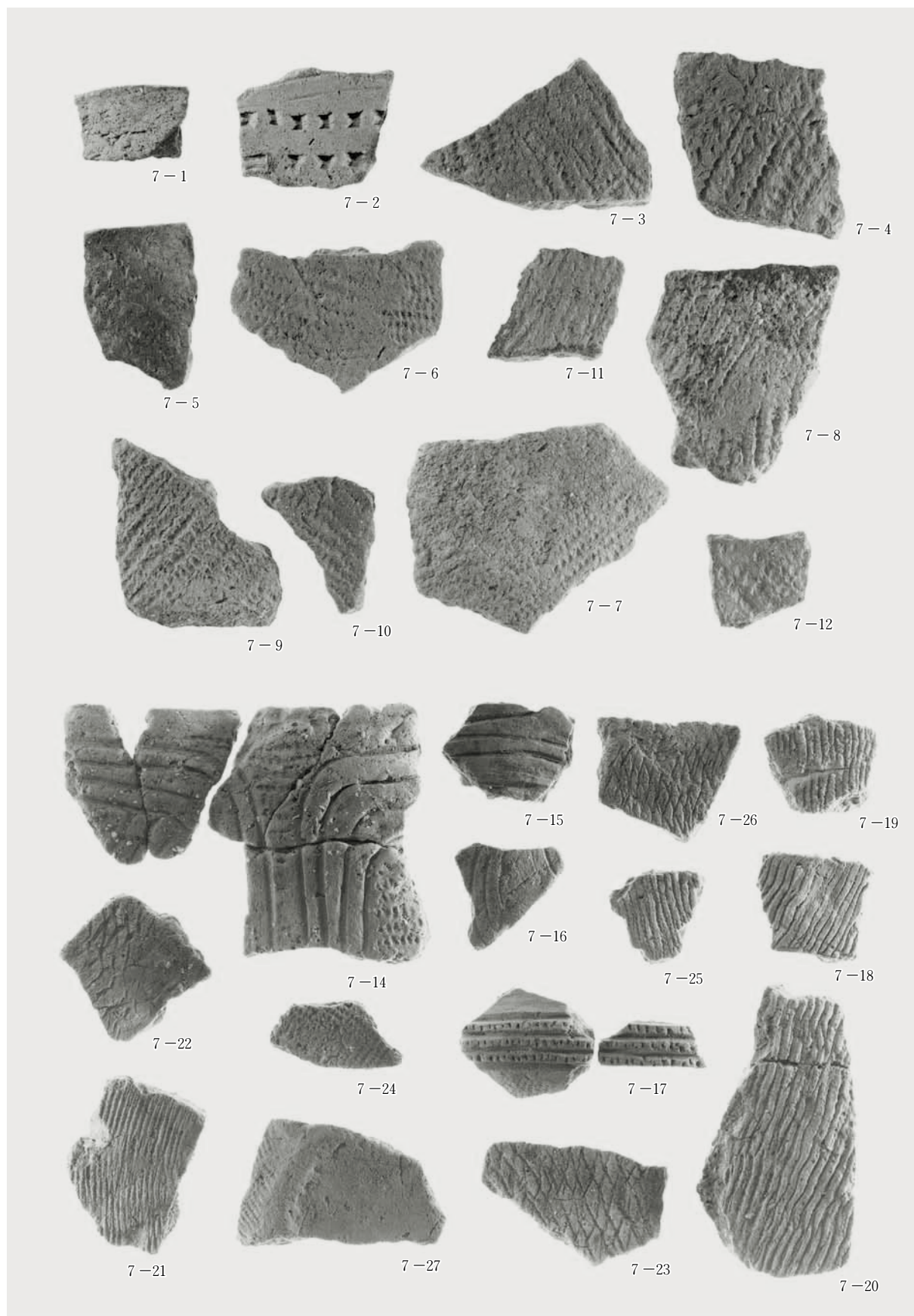


9 土坑・遺構外出土遺物（1）

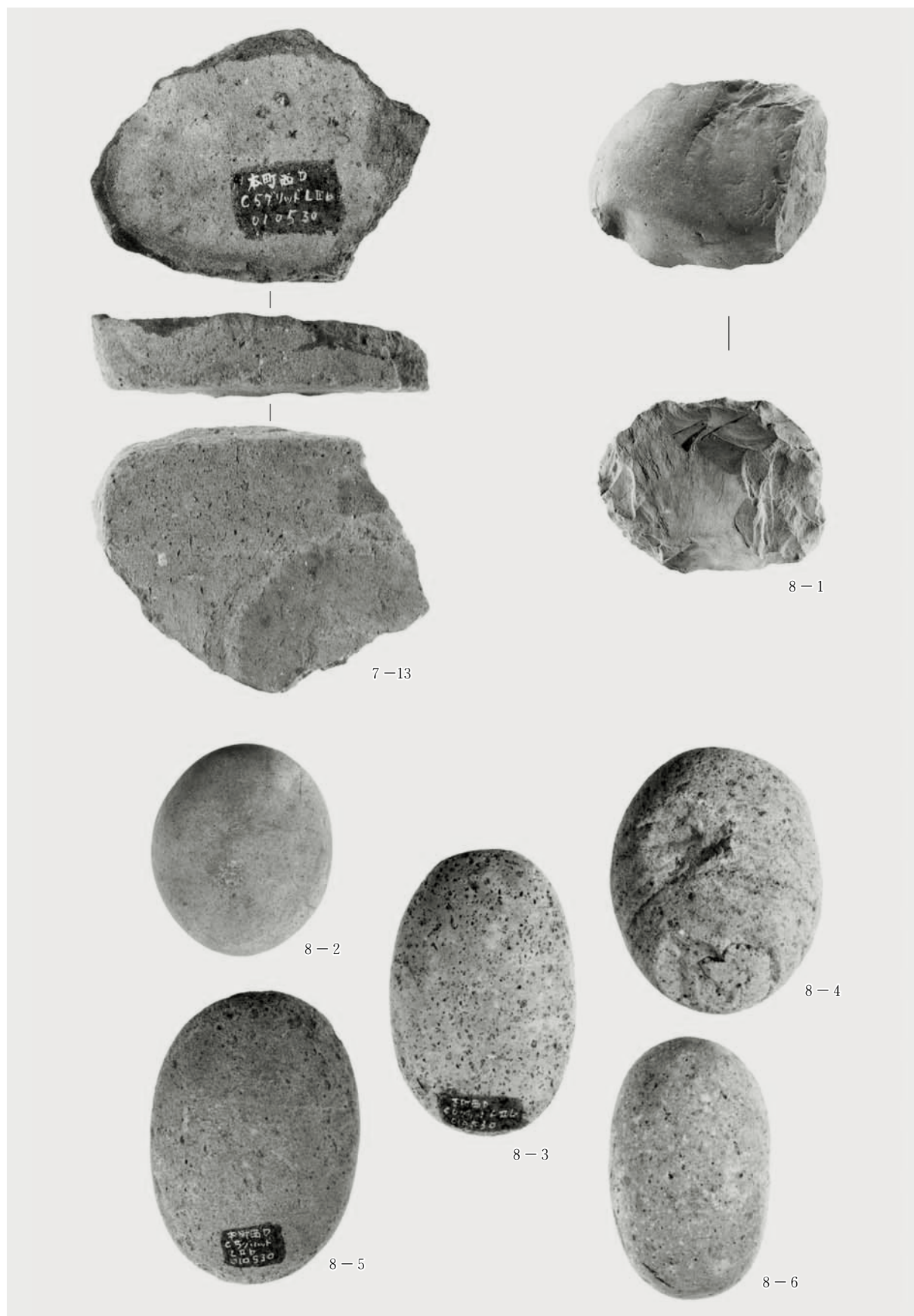
a 2号土坑出土遺物 b 遺構外出土遺物



10 遺構外出土遺物（2）



11 遺構外出土遺物 (3)



12 遺構外出土遺物(4)

写 真 図 版

第4編 うしろさく 後 作 A 遺 跡

写真目次

第4編 後作A遺跡

1	調査区遠景	257	14	1号溝跡全景	267
2	調査区南端部全景	257	15	2・5号溝跡全景	267
3	調査区中央部全景	258	16	3・4号溝跡	268
4	調査区西部全景	258	17	溝跡土層断面	268
5	調査区東端部全景	259	18	1号土器埋設遺構	269
6	調査区北端部全景	259	19	1号土器埋設遺構出土土器	270
7	基本土層	260	20	1号住居跡出土土器	270
8	1号住居跡	261	21	土坑出土土器	271
9	土坑(1)	262	22	遺構外出土土器(1)	272
10	土坑(2)	263	23	遺構外出土土器(2)	273
11	土坑(3)	264	24	第1遺物包含層出土土器	273
12	土坑(4)	265	25	出土石器	274
13	土坑(5)	266			



1 調査区遠景（北西から）



2 調査区南端部全景（東から）



3 調査区中央部全景（北西から）



4 調査区西部全景（東から）



5 調査区東端部全景（南から）



6 調査区北端部全景（南東から）



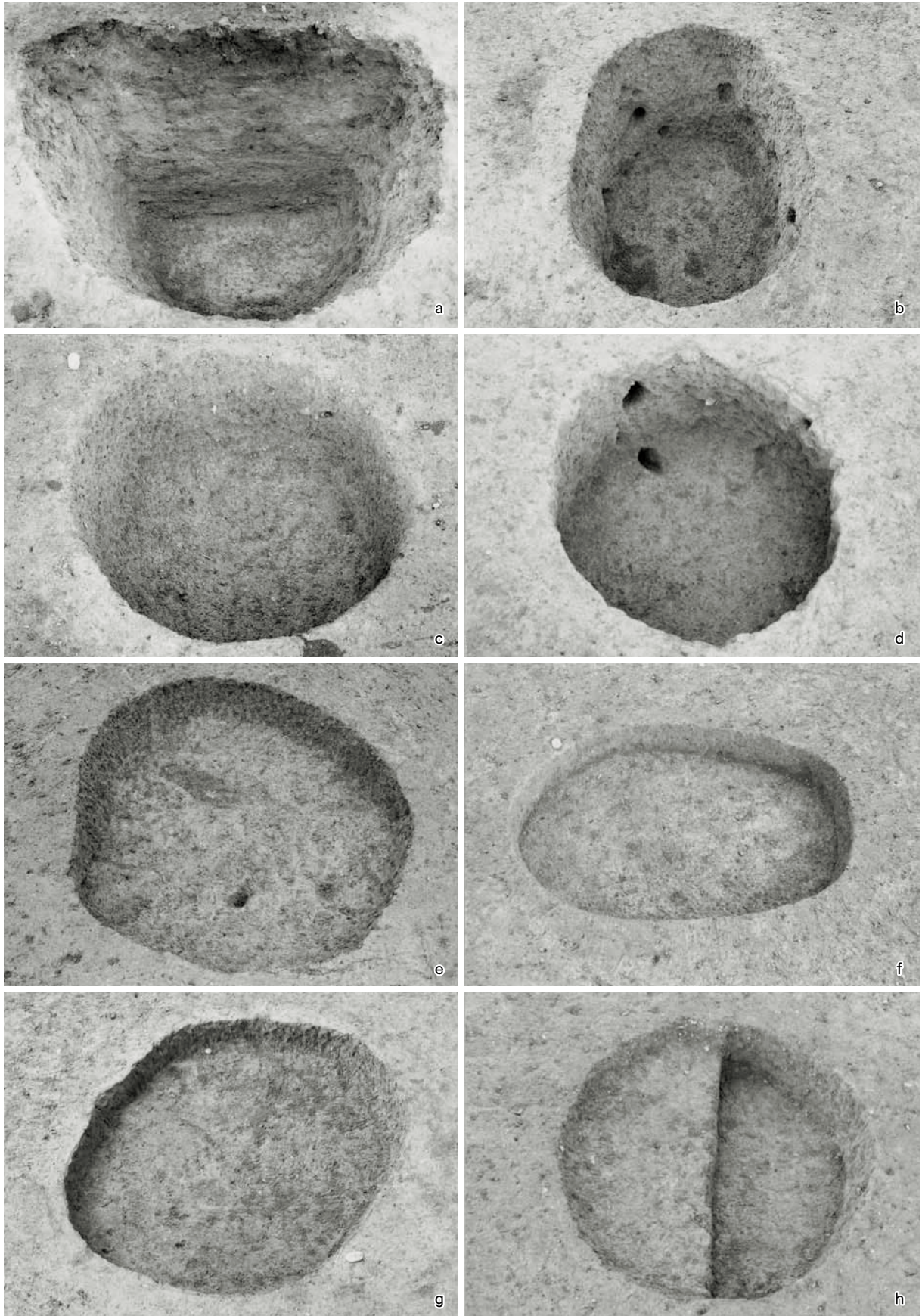
7 基本土層

- a 西端部 (南東から)
- b 北端部 第1遺物包含層 (南東から)
- c 南西部 (北から)
- d 南端部 (東から)



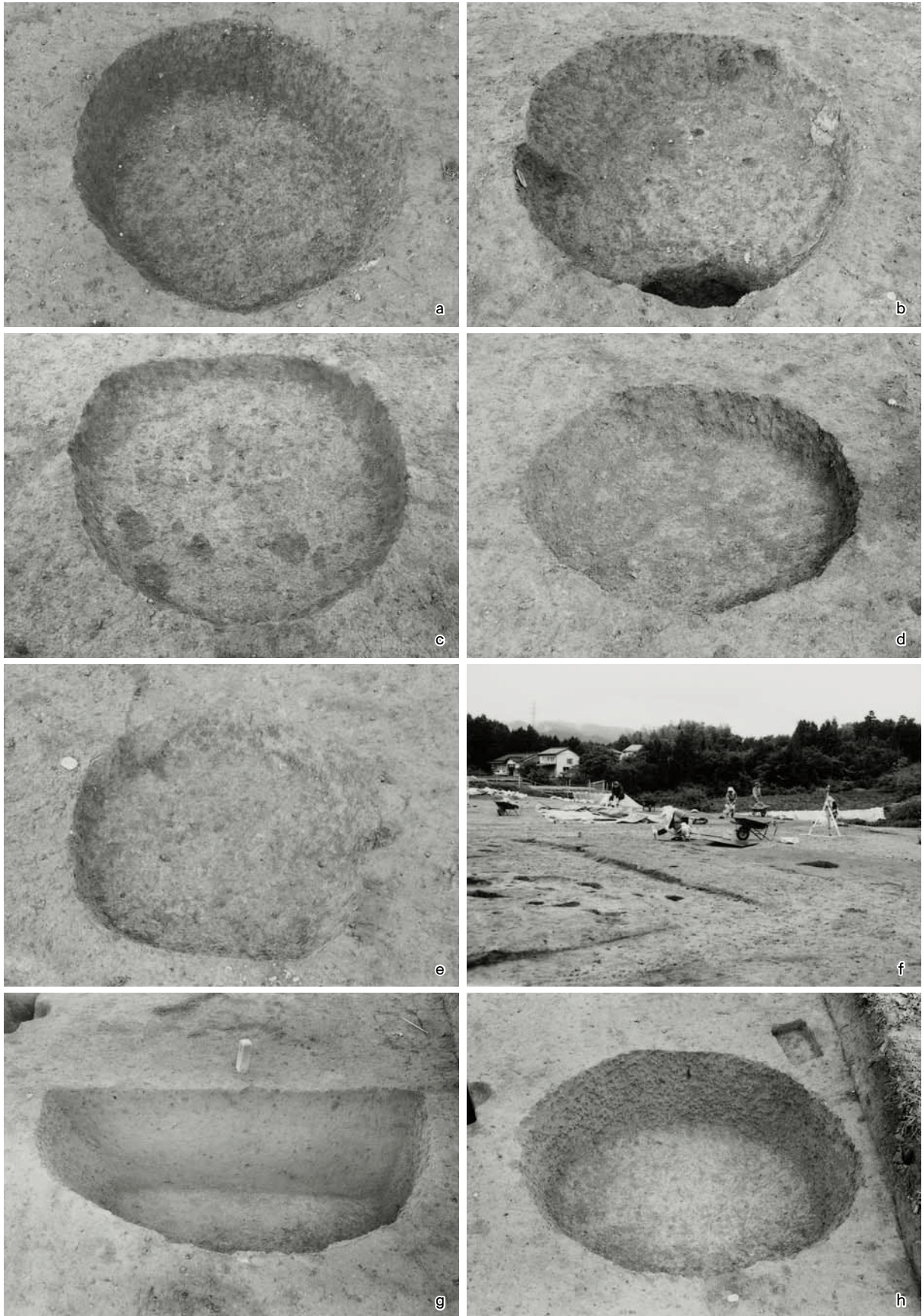
8 1号住居跡

a 全景 (南西から)
b 炉跡検出状況 (南西から) c 炉跡内土層断面 (南西から)
d 炉跡掘形土層断面 (南西から) e 炉跡掘形全景 (南東から)



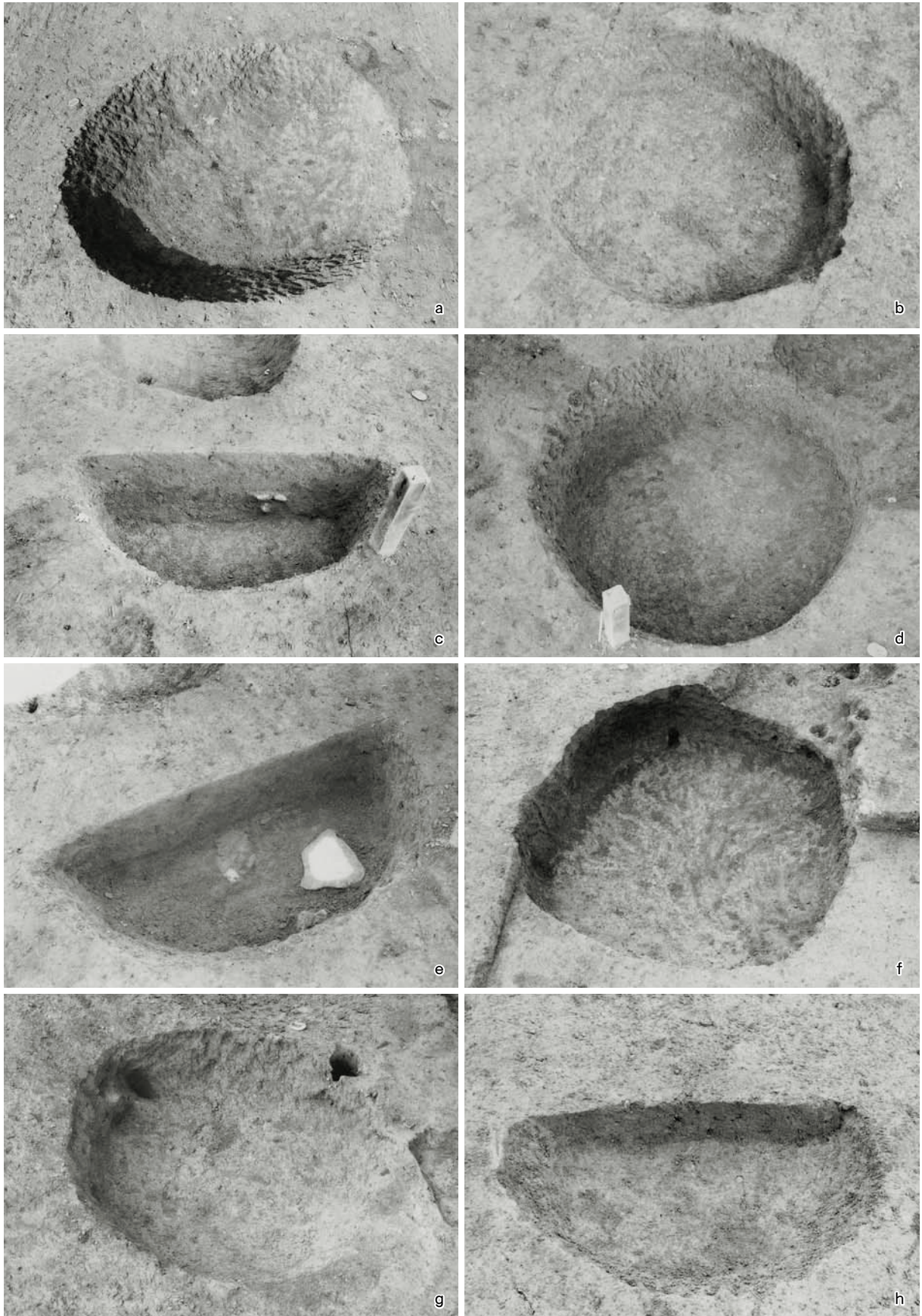
9 土坑 (1)

- | | |
|-------------------|-----------------|
| a 1号土坑土層断面 (南東から) | b 1号土坑全景 (南東から) |
| c 2号土坑全景 (南から) | d 3号土坑全景 (南から) |
| e 4号土坑全景 (南から) | f 5号土坑全景 (南西から) |
| g 6号土坑全景 (東から) | h 7号土坑全景 (南から) |



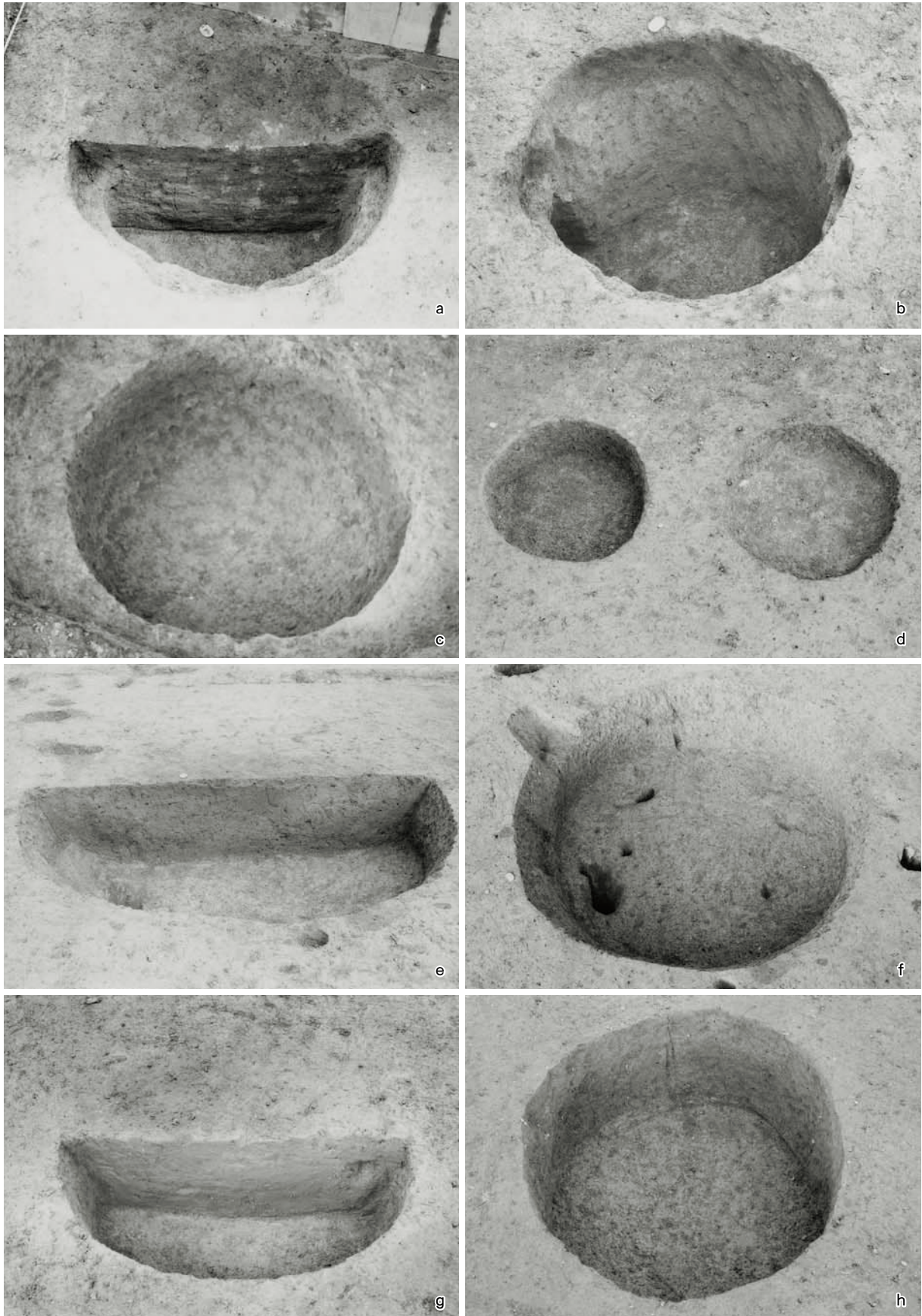
10 土坑 (2)

- | | |
|--------------------|------------------|
| a 8号土坑全景 (東から) | b 9号土坑全景 (東から) |
| c 10号土坑全景 (西から) | d 11号土坑全景 (南から) |
| e 12号土坑全景 (南から) | f 作業風景 (南西から) |
| g 13号土坑土層断面 (北西から) | h 13号土坑全景 (北西から) |



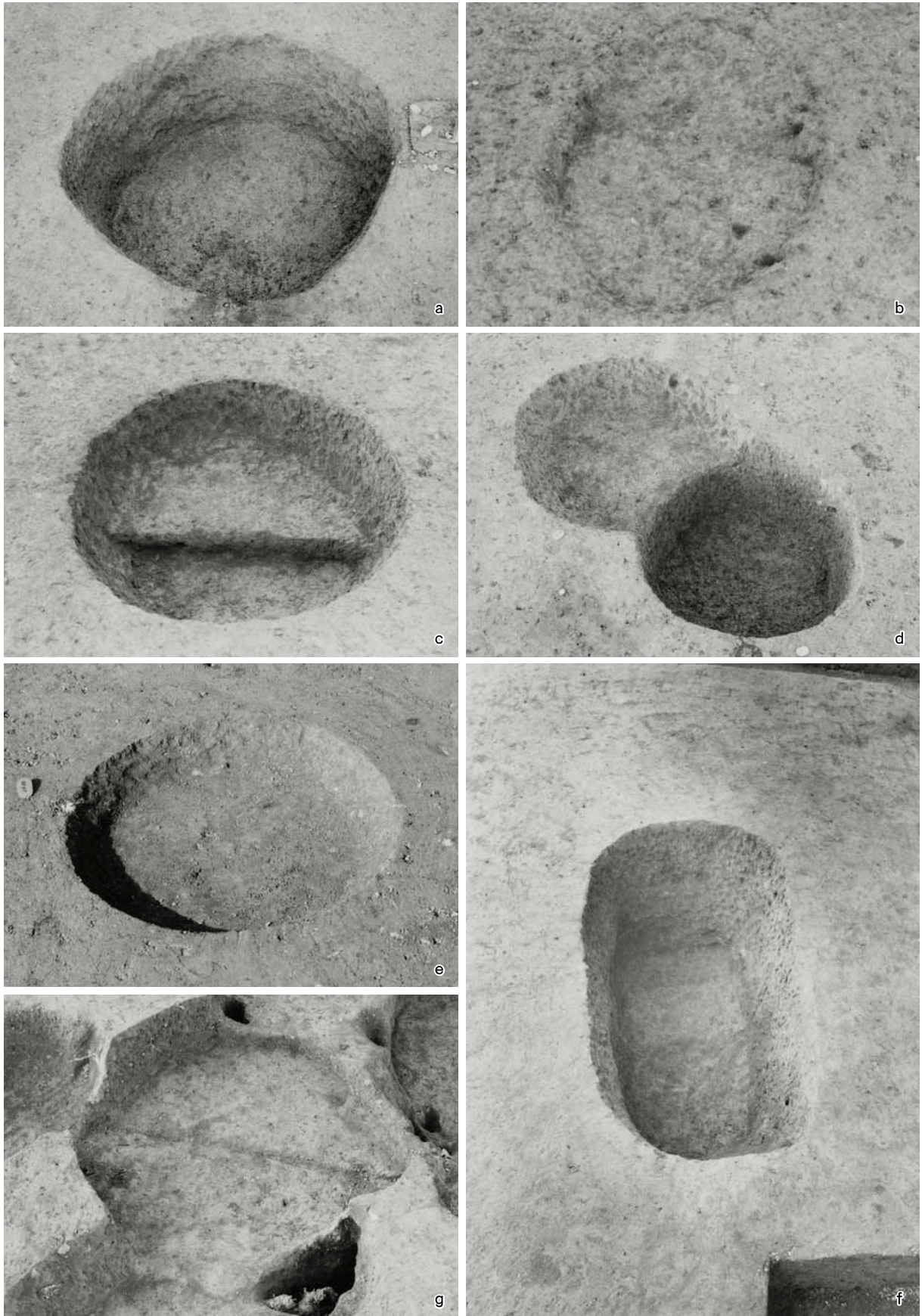
11 土坑 (3)

- | | | | |
|---|--------------------|---|-----------------|
| a | 14号土坑全景 (南から) | b | 15号土坑全景 (南から) |
| c | 16号土坑土層断面 (西から) | d | 16号土坑全景 (南から) |
| e | 16号土坑遺物出土状況 (北西から) | f | 17号土坑全景 (東から) |
| g | 18号土坑全景 (東から) | h | 19号土坑土層断面 (東から) |



12 土坑 (4)

- a 20号土坑土層断面 (北から)
- b 20号土坑全景 (北から)
- c 21号土坑全景 (南から)
- d 22・23号土坑全景 (南西から)
- e 24号土坑土層断面 (南西から)
- f 24号土坑全景 (南西から)
- g 25号土坑土層断面 (東から)
- h 25号土坑全景 (南から)



13 土坑 (5)

- | | | | |
|---|----------------|---|----------------|
| a | 26号土坑全景 (南から) | b | 27号土坑全景 (東から) |
| c | 28号土坑全景 (南から) | d | 29号土坑全景 (南から) |
| e | 30号土坑全景 (南から) | f | 31号土坑全景 (南東から) |
| g | 32号土坑全景 (南東から) | | |



14 1号溝跡全景（北東から）



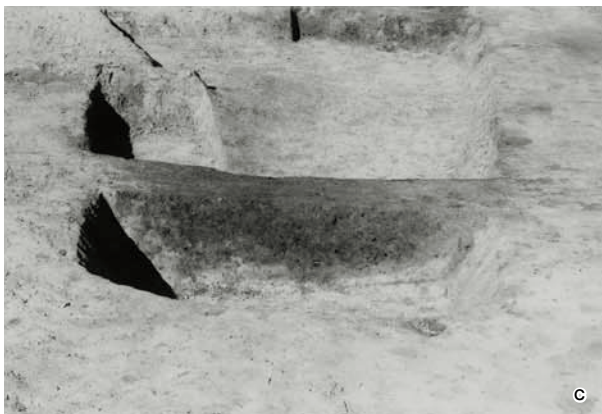
15 2・5号溝跡全景（北東から）



16 3・4号溝跡



a 3号溝跡全景(北西から) b 4号溝跡全景(南東から)



17 溝跡土層断面

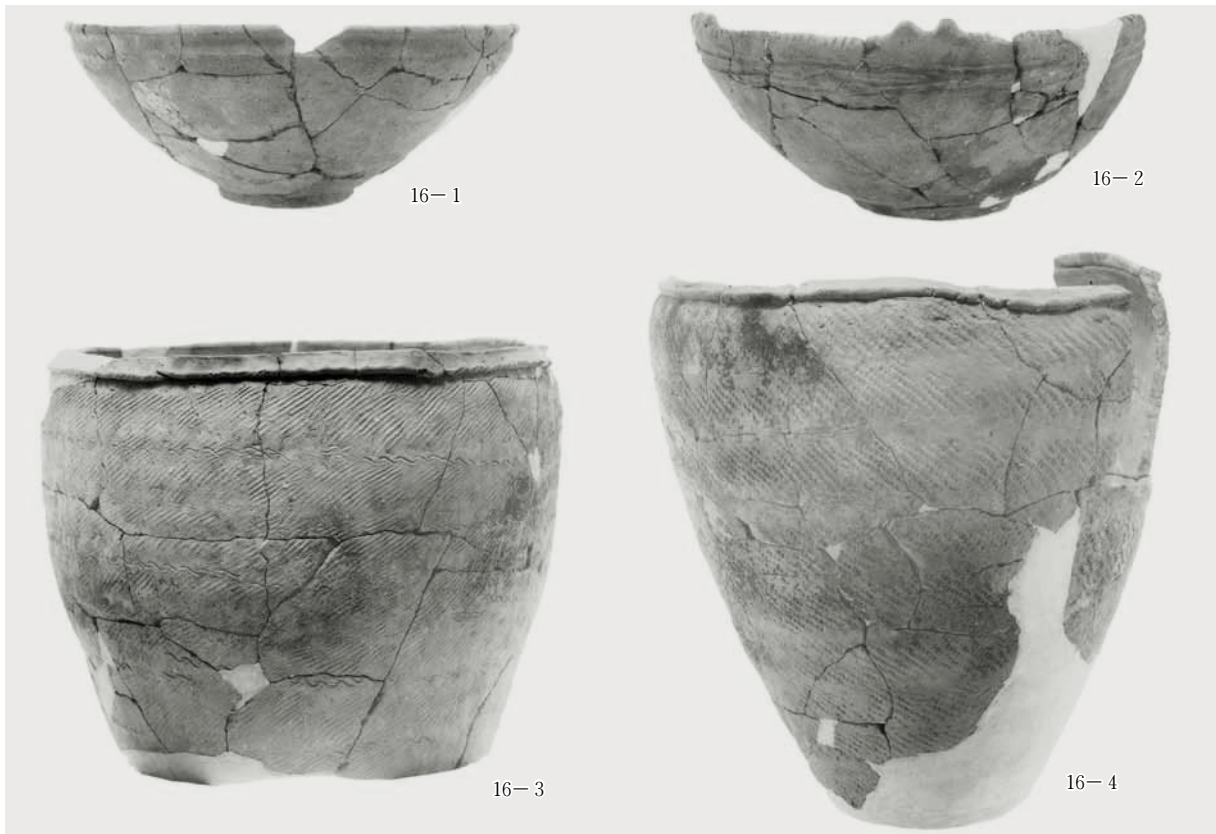


a 1号溝跡(南東から) b 2号溝跡(南西から)
c 4号溝跡(南東から) d 5号溝跡(北東から)

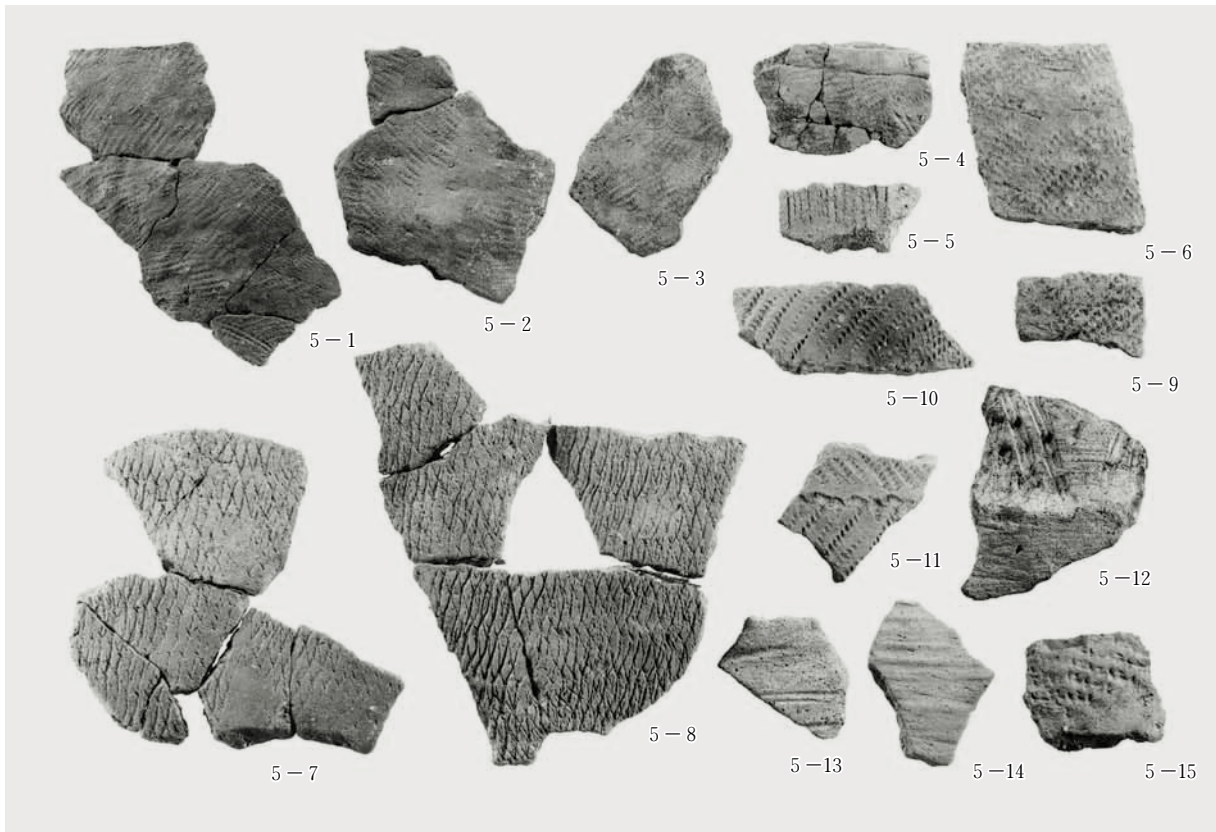


18 1号土器埋設遺構

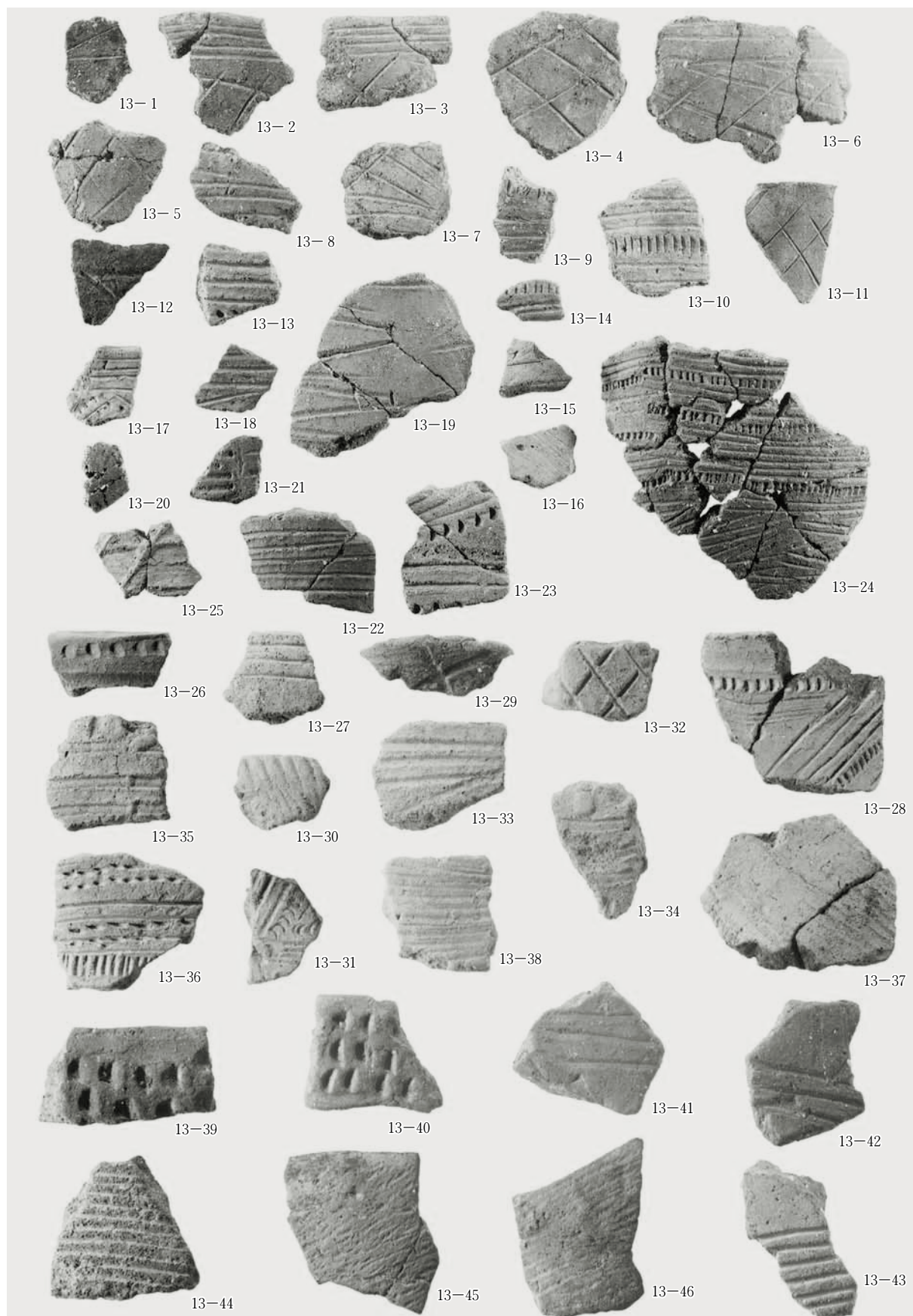
a 検出状況 (南から) b 土層断面 (南から)
c 土層断面 (南から) d 土層断面 (南から)
e 埋設土器内部 (南から) f 作業風景 (東から)



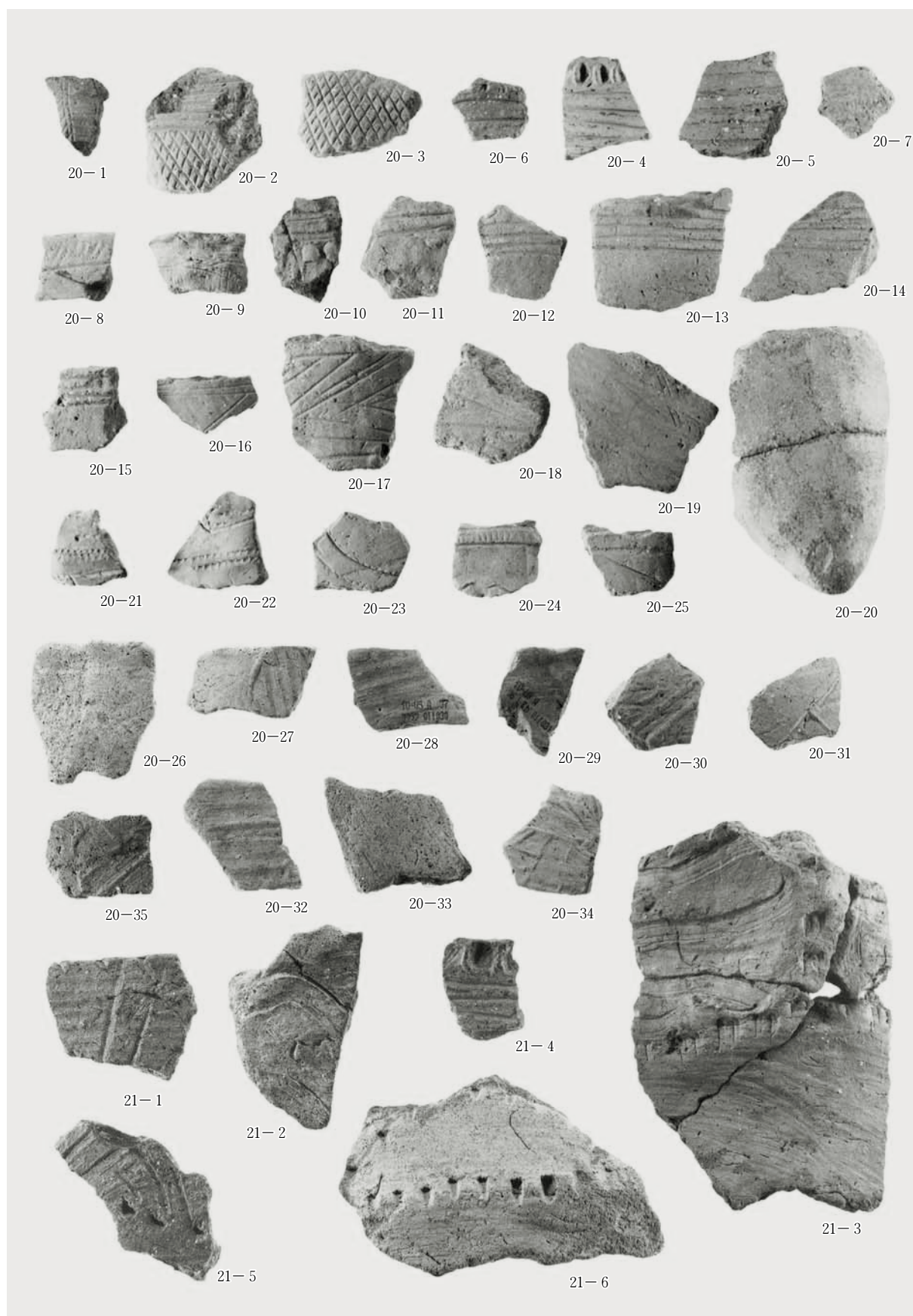
19 1号土器埋設遺構出土土器



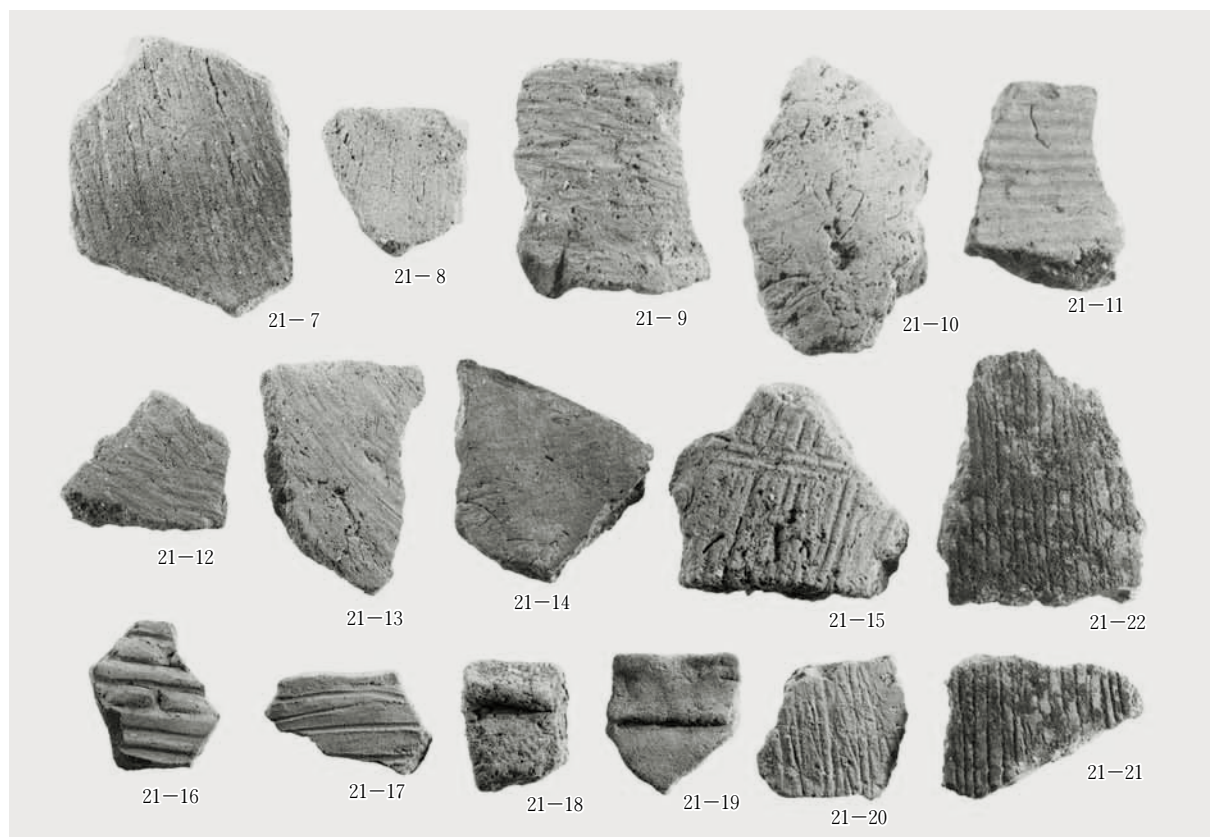
20 1号住居跡出土土器



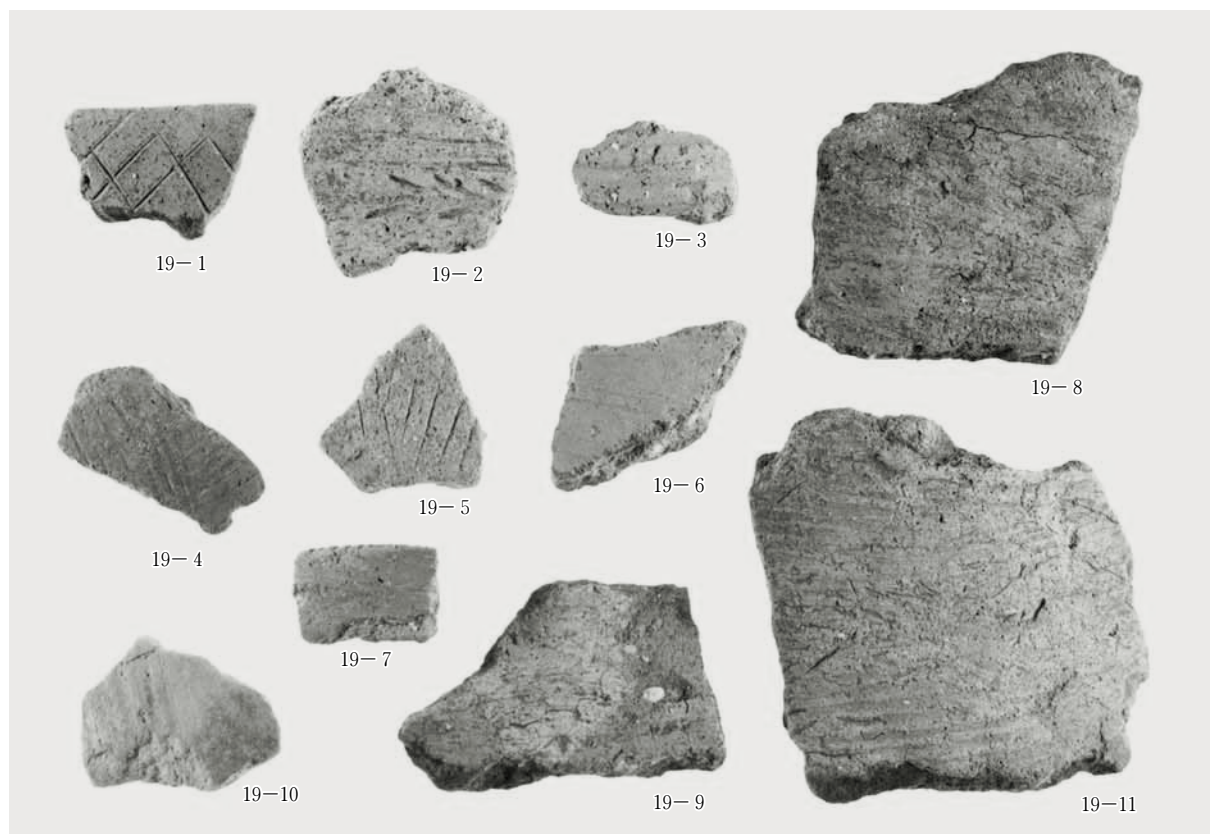
21 土坑出土土器



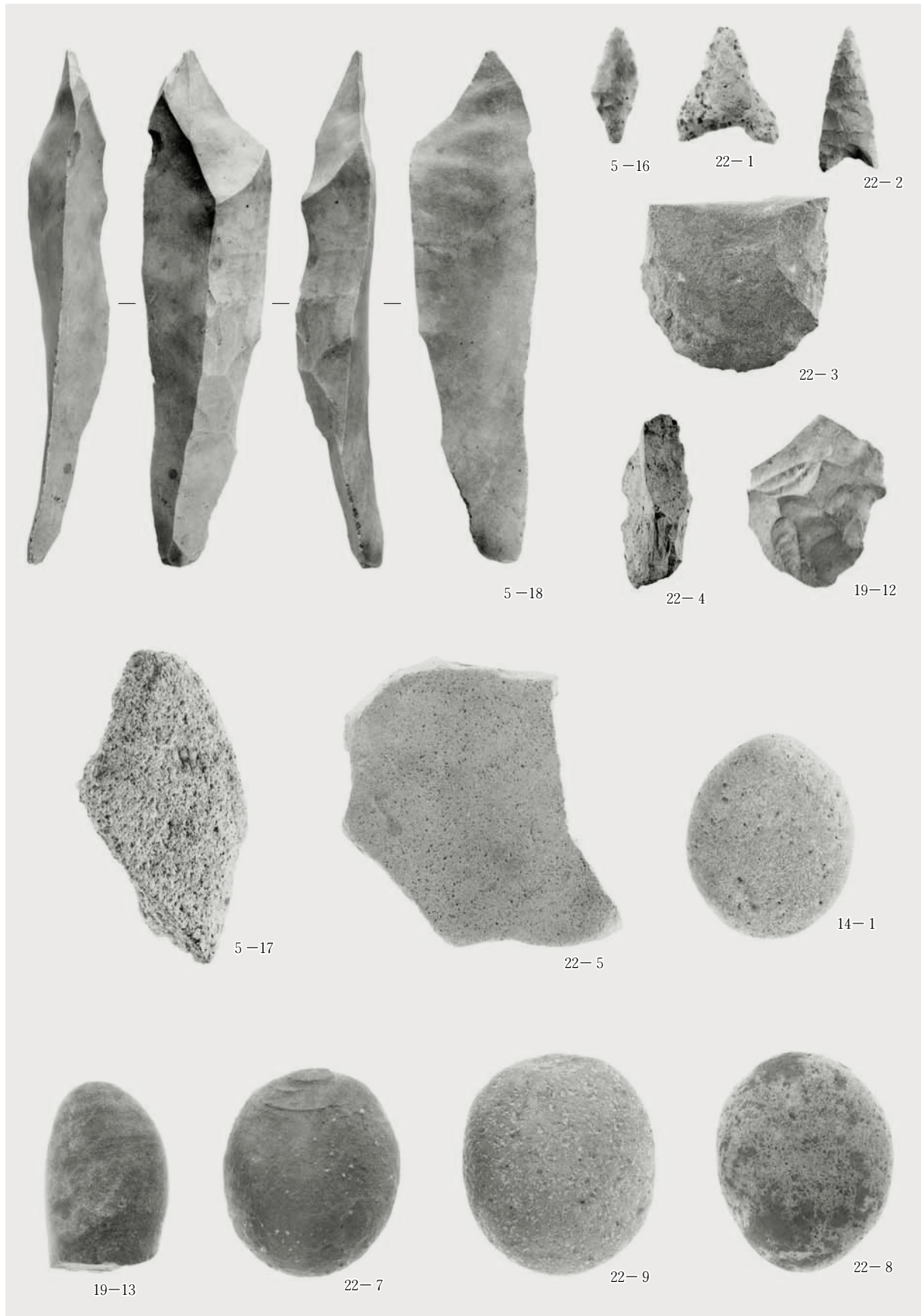
22 遺構外出土土器 (1)



23 遺構外出土土器 (2)



24 第1遺物包含層出土土器



25 出土石器

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちようさほうこく							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告36							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第400集							
編著者名	山内幹夫・福島雅儀・佐々木 透・玉川邦男・吉野滋夫・福田秀生・新海和広							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査課 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2002年12月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		東 経 ° ' "	北 緯 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとまちにし 本町西B	福島県双葉郡 富岡町本岡字 本町西	543	00047	140° 59' 03"	37° 20' 13"	2001年5月17日～ 2001年11月30日	8,740㎡	道路（常磐自動車 道）建設に伴う事 前調査
もとまちにし 本町西C	福島県双葉郡 富岡町本岡字 本町西	543	00046	140° 59' 38"	37° 20' 09"	2001年5月7日～ 2001年9月7日	5,200㎡	同 上
もとまちにし 本町西D	福島県双葉郡 富岡町本岡字 本町西	543	00045	140° 59' 38"	37° 20' 04"	2001年4月16日～ 2001年6月21日	4,000㎡	同 上
うしろ きく 後作 A (1次調査)	福島県双葉郡 富岡町上手岡 字後作	543	00055	140° 58' 08"	37° 22' 16"	2001年8月27日～ 2001年11月16日	6,400㎡	同 上
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
もとまちにし 本町西B	集落跡	縄 文 平 安	竪穴住居跡(9) 掘立柱建物跡(4) 土 坑(21) 埋 甕(2) 焼土遺構(2) 遺物包含層(1)	縄文土器・須恵 器・土師器・石器		遺物包含層は縄文時代晩期後葉。平安 時代の集落跡。		
もとまちにし 本町西C	集落跡	縄 文 平 安	竪穴住居跡(10) 土 坑(9)	縄文土器・須恵 器・土師器・石器		縄文時代前期前葉を中心とした集落 跡。該期の編年研究上、興味深い資料と なる。		
もとまちにし 本町西D	集落跡	縄 文	土 坑(6)	縄文土器・石器		縄文時代早期後葉から前期後葉の資料 が得られた。		
うしろ きく 後作 A (1次調査)	集落跡	縄 文	竪穴住居(1) 土 坑(32) 土器埋設遺構(1) 溝 跡(5) 遺物包含層(1)	縄文土器・石器		縄文時代早期中葉から後葉の土坑群と 晩期後葉の集落跡。土器埋設遺構は埋設 方法が分かる良好な資料。		

福島県文化財調査報告書第400集

常磐自動車道遺跡調査報告36

本町西 B 遺跡
本町西 C 遺跡
本町西 D 遺跡
後作 A 遺跡 (1次調査)

平成14年12月20日発行

編集 財団法人 福島県文化振興事業団遺跡調査部
発行 福島県教育委員会 (〒960-8688) 福島市杉妻町 2-16
財団法人 福島県文化振興事業団 (〒960-8116) 福島市春日町 5-54
日本道路公団東北支社いわき工事事務所
(〒970-0101) いわき市平下神谷字仲田100
印刷 陽光社印刷株式会社 (〒960-0112) 福島市南矢野目字萩ノ目裏 1-1

本報告書は中性紙を使用しています。